

Oracle9i Discoverer Administrator

管理ガイド

リリース 9.0.2

2002 年 11 月

部品番号 : J05998-01

ORACLE®

Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド, リリース 9.0.2

部品番号 : J05998-01

原本名 : Oracle9i Discoverer Administrator Administration Guide, Version 9.0.2

原本部品番号 : A90881-02

Copyright © 2001, 2002, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されております。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに	xxi
対象読者	xxii
このマニュアルの構成	xxii
関連文書	xxiii
表記規則	xxiv
Oracle9i Discoverer の操作	xxv
キーボード操作	xxv

第 I 部 概念および作業情報

1 Oracle9i Discoverer Administrator の概要

Oracle9i Discoverer Administrator の概要	1-2
Oracle9i Discoverer	1-2
Oracle9i Discoverer Administrator	1-3
Discoverer 管理者としての役割	1-4
Discoverer 管理者の基本概念	1-4
ビジネス・インテリジェンス	1-4
リレーショナル・データベース、OLTP システムおよびデータ・ウェアハウス	1-5
Discoverer システムの基本概念	1-5
End User Layer の概要	1-6
ビジネスエリアの概要	1-6
フォルダとアイテムの概要	1-6
ワークブックとワークシートの概要	1-7
階層とドリルの概要	1-7
サマリー・フォルダの概要	1-8

Discoverer の動作	1-8
Discoverer を正常に実装するための手順	1-9
Discoverer システムのメンテナンスに含まれる内容	1-12
Discoverer Administrator リリース 9.0.2 の新機能	1-13

2 Discoverer Administrator スタート・ガイド

Discoverer Administrator スタート・ガイド	2-2
Oracle9i Discoverer を使用する前提条件	2-2
システムの前提条件	2-2
データ・アクセスの前提条件	2-2
Discoverer Administrator の開始方法	2-4
ワークエリア	2-5
「ワークエリア」ウィンドウのタブについて	2-6
「ワークエリア」ウィンドウの状況依存メニューについて	2-9
Administration Edition タスクリストについて	2-10
Discoverer Administrator のドキュメントとオンライン・ヘルプについて	2-11

3 End User Layer の作成とメンテナンス

End User Layer の作成とメンテナンス	3-2
End User Layer	3-3
End User Layer が便利な理由	3-3
End User Layer 所有者	3-4
Oracle データベースにおける End User Layer の作成に必要な権限	3-5
End User Layer のメンテナンスに必要な権限	3-6
EUL ゲートウェイ	3-6
既存データベース・ユーザーに対する End User Layer の作成方法	3-6
新規データベース・ユーザーに対する End User Layer の作成方法	3-8
End User Layer の削除方法	3-10
デフォルト End User Layer を表示または変更する方法	3-11
エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピーについて	3-11
使用するエクスポート / インポート方法	3-12
Discoverer のエクスポート・ウィザードおよびインポート・ウィザードの使用について	3-12
Discoverer コマンドライン・インタフェースによる EUL オブジェクトの エクスポート / インポートについて	3-13

標準データベース・エクスポート / インポート・コマンドによる EUL 所有者の エクスポート / インポートについて	3-13
エクスポート・ウィザードによる EUL 全体のエクスポート方法	3-14
エクスポート・ウィザードによる選択されたビジネスエリアのエクスポート方法	3-17
エクスポート・ウィザードによる選択された EUL オブジェクトのエクスポート方法	3-19
Discoverer コマンドライン・インタフェースによる（他のデータベースにインポートするための） End User Layer オブジェクトのエクスポート方法	3-22
Discoverer コマンドライン・インタフェースによる（他のデータベースをエクスポートした後の） End User Layer オブジェクトのインポート方法	3-23
標準データベース・エクスポート・ユーティリティによる EUL のエクスポート方法	3-23
標準データベース・インポート・ユーティリティによる EUL のインポート方法	3-24
インポート・ウィザードによるファイルからの EUL オブジェクトのインポート方法	3-26
EUL の作成とメンテナンスに関する注意事項	3-29
識別子とは	3-29
一般的な EUL の領域要件および記憶領域パラメータ	3-29
分析関数での EUL データの移行シナリオ	3-31

4 ビジネスエリアの作成とメンテナンス

ビジネスエリアの作成とメンテナンス	4-2
ビジネスエリア	4-3
新規ビジネスエリア作成の準備方法	4-4
ロード・ウィザード	4-4
ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法	4-5
オンライン・ディクショナリからのロード	4-6
ゲートウェイからのロード	4-8
表およびビューの選択	4-9
Discoverer Administrator がビジネスエリアに対して作成する項目の指定	4-10
ビジネスエリアの命名、オブジェクト名およびソート・オプションの指定	4-11
Discoverer Administrator 接続時に既存ビジネスエリアを開く方法	4-13
Discoverer Administrator に接続済みの場合に既存ビジネスエリアを開く方法	4-13
EUL 間のビジネスエリアのコピー方法	4-14
ビジネスエリア・プロパティの編集方法	4-15
ビジネスエリアの削除方法	4-16
ビジネスエリアとデータベースの同期化方法	4-18
ビジネスエリアの作成とメンテナンスに関する注意事項	4-20
ユーザーがビジネスエリア（またはビジネスエリア内のフォルダ）を参照できない理由	4-20

5 フォルダの作成とメンテナンス

フォルダの作成とメンテナンス	5-2
フォルダ	5-3
単一フォルダ	5-4
複合フォルダ	5-5
データベース・ビューのかわりに複合フォルダを使用する利点	5-6
カスタム・フォルダ	5-6
カスタム・フォルダと単一フォルダの違い	5-6
カスタム・フォルダの例	5-7
フォルダ間の依存性について	5-9
ビジネスエリアにおけるフォルダの共有について	5-10
データベースからの単一フォルダの作成方法	5-10
複合フォルダの作成方法	5-11
カスタム・フォルダの作成方法	5-12
フォルダ・プロパティの編集方法	5-13
カスタム・フォルダの SQL 文の編集方法	5-15
ビジネスエリアからのフォルダの削除方法	5-16
ビジネスエリアへのフォルダの割当て方法	5-18
複数ビジネスエリアへのフォルダの割当て方法	5-18
ビジネスエリアにおけるフォルダのソート方法	5-19
フォルダにおけるアイテムのソート方法	5-19
ビジネスエリアにおけるフォルダの順序変更方法	5-20
ビジネスエリアにおけるフォルダの検証方法	5-20

6 Discoverer への接続管理

Discoverer への接続管理	6-2
Discoverer 接続	6-2
接続の種類	6-3
ユーザー定義接続	6-3
パブリック接続	6-3
「接続先 Discoverer Plus」 ページ	6-4
パブリック接続の作成方法	6-5
Discoverer ユーザーによるユーザー定義接続の作成方法	6-10

7 情報に対するアクセス制御

情報に対するアクセス制御	7-2
Discoverer およびセキュリティ	7-2
Discoverer アクセス権限	7-3
Discoverer 作業権限	7-3
ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール（職責）の指定方法	7-4
ユーザーまたはロール（職責）がアクセスできるビジネスエリアの指定方法	7-6
ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法	7-8
特定の作業を実行するユーザーまたはロール（職責）の指定方法	7-10
問合せ取り出し制限の設定方法	7-11
スケジュール済みワークブック制限の設定方法	7-13

8 ワークブックのスケジュール

ワークブックのスケジュール	8-2
ワークブックおよびスケジュール済みワークブック	8-2
ワークブックをスケジュールする理由	8-3
エンド・ユーザーがワークブックをスケジュールする際の処理	8-3
ワークブックのスケジュールをサポートする Oracle データベースの機能	8-5
スケジュール済みワークブックの結果の格納場所	8-6
ワークブックをスケジュールするための前提条件	8-7
DBMS_JOB パッケージがインストールされていることを確認する方法	8-7
スケジュール済みワークブックの結果を含む表の所有者を指定する方法	8-9
新しいスケジュール済みジョブをサーバーがチェックする間隔の制御方法	8-11
スケジュール済みワークブックの表示および管理方法	8-12
スケジュール済みワークブックと、Discoverer の現行リリースおよび以前のリリースとの間の 互換性	8-15

9 アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス

アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス	9-2
アイテム	9-3
アイテム・クラス	9-3
値リスト	9-4
値リストの設定	9-4
代替ソート	9-5
代替ソートを実装する様々な方法の例	9-6
例 1: カスタム・フォルダを使用した代替ソートの実装方法	9-6

例 2: データベース表を使用した代替ソートの実装方法	9-6
例 3: ユーザー定義アイテムと DECODE 文を使用した代替ソートの実装方法	9-7
ディテール・ドリル	9-8
ディテール・ドリルの設定	9-8
日付アイテム	9-9
日付書式マスク	9-9
日付アイテムの切捨てと EUL_DATE_TRUNC 関数	9-10
切り捨てられる日付アイテムへの条件の適用	9-11
別のアプリケーションへのドリル・アウト	9-12
アイテム・プロパティの編集方法	9-13
値リスト・アイテム・クラスの作成方法	9-14
代替ソート・アイテム・クラスの作成方法	9-18
ディテール・ドリル・アイテム・クラスの作成方法	9-22
カスタム・フォルダを使用した値リストの作成方法	9-24
アイテム・クラスの編集方法	9-25
アイテム・クラスに項目を追加する方法	9-29
ドラッグ・アンド・ドロップを使用してアイテムをアイテム・クラスに追加する方法	9-29
「アイテム クラスの編集」ダイアログを使用してアイテムをアイテム・クラスに追加する方法 ..	9-29
「アイテム プロパティ」ダイアログを使用してアイテムをアイテム・クラスに追加する方法	9-30
アイテム・クラスからアイテムを削除する方法	9-30
ポップアップ・メニューを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する方法	9-30
「アイテム クラスの編集」ダイアログを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する 方法	9-31
「アイテム プロパティ」ダイアログを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する方法 ..	9-31
アイテム・クラスを使用するアイテムの表示方法	9-31
アイテムの値リストの表示方法	9-32
アイテム・クラスの値リストの表示方法	9-32
アイテムとアイテム・クラスの削除方法	9-34
アイテムとアイテム・クラスのメンテナンスに関する注意	9-36
ユーザー定義データ型の列に基づくアイテムに関する注意	9-36

10 結合の作成とメンテナンス

結合の作成とメンテナンス	10-2
結合	10-2
単一アイテム結合とマルチアイテム結合	10-3
1 対 1 結合、1 対多結合および多対多結合	10-3
単一アイテム結合の作成方法	10-4

マルチアイテム結合の作成方法	10-5
結合プロパティの編集方法	10-6
結合の編集方法	10-7
結合の削除方法	10-8
ファントラップ	10-10
複合フォルダ内でファントラップを設定した場合の作業	10-15
結合にデータ型の不一致がある場合の作業	10-16
Day of Week アイテムを VARCHAR から DATE データ型に変換する新規アイテムの作成方法	10-17
同じデータ型の 2 つのアイテム間の結合を作成する方法	10-18

11 ユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス

ユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス	11-2
ユーザー定義アイテム	11-3
導出ユーザー定義アイテム	11-4
集計ユーザー定義アイテム	11-4
集計ユーザー定義アイテムに適用される制限	11-5
分析関数と集計ユーザー定義アイテムとの違い	11-5
集計導出ユーザー定義アイテム	11-6
集計導出ユーザー定義アイテムの例	11-6
ユーザー定義アイテムの作成方法	11-8
ユーザー定義アイテムのプロパティの編集方法	11-10
ユーザー定義アイテムの編集方法	11-10
ユーザー定義アイテムの削除方法	11-10
PL/SQL 関数が必要な理由	11-12
ユーザー定義 PL/SQL 関数	11-12
ユーザー定義 PL/SQL 関数の登録について	11-12
ユーザー定義 PL/SQL 関数を自動的に登録する方法	11-13
ユーザー定義 PL/SQL 関数を手動で登録する方法	11-14

12 条件の作成とメンテナンス

条件の作成とメンテナンス	12-2
条件	12-2
条件のカテゴリについて	12-3
Discoverer での条件の使用	12-3
異なるタイプの条件	12-4
単一条件の作成方法	12-5
拡張された条件の作成方法	12-8

条件の編集方法	12-10
条件プロパティの編集方法	12-11
条件の削除方法	12-11
条件の例	12-12
例 1: 2002 年のデータを検索する条件の使用	12-12
例 2: 過去 7 日間の売上を検索する条件の使用	12-12
例 3: 第 3 四半期の出荷を検索する条件の使用	12-12
外部結合と DisableAutoOuterJoinsOnFilters レジストリの設定について	12-13
例 1: 条件を適用しない場合	12-14
例 2: 問合せに条件を適用し、DisableAutoOuterJoinsOnFilters を 1 に設定（オフに切替え） する場合	12-15
例 3: 問合せに条件を適用し、DisableAutoOuterJoinsOnFilters を 0 に設定（オンに切替え） する場合	12-15
必須条件を使用した、行レベルのセキュリティの作成方法	12-16
ソース・フォルダが（行レベルのセキュリティを適用するなどの）必須条件を含む場合に サマリー・フォルダを有効にする方法	12-21

13 階層の作成とメンテナンス

階層の作成とメンテナンス	13-2
階層	13-2
アイテム階層	13-3
日付階層	13-5
日付階層テンプレート	13-6
日付階層とパフォーマンスについて	13-7
日付階層が Discoverer Desktop/Plus のパフォーマンスに与える影響の例	13-7
パフォーマンスを維持する方法の例	13-7
アイテム階層の作成方法	13-8
日付階層とテンプレートの作成方法	13-10
アイテム階層の編集方法	13-13
日付階層テンプレートの編集方法	13-14
日付階層テンプレートを日付アイテムに適用する方法	13-15
デフォルト日付階層テンプレートの設定方法	13-16
アイテム階層または日付階層テンプレートの削除方法	13-16
日付書式「RR」を使用するデフォルト日付階層を、Oracle9i Discoverer Administrator への アップグレード後に変更する方法	13-18

14 サマリー・フォルダの管理

サマリー・フォルダの管理	14-2
Discoverer のフォルダとサマリー・フォルダ	14-3
サマリー・フォルダ	14-3
Discoverer サマリー表	14-4
マテリアライズド・ビュー	14-5
自動サマリー管理 (ASM)	14-6
ASM の機能	14-6
ASM でサマリー・フォルダを作成するための前提条件	14-7
様々な ASM 実行方法とその使用状況	14-8
ASM ポリシー	14-9
サマリー・データをリフレッシュする理由	14-10
サマリー・フォルダのリフレッシュ時に行われる処理	14-10
サマリー・ウィザードを使用した ASM の実行方法	14-11
ロード・ウィザードを使用したバルク・ロード後の ASM の実行方法	14-16
コマンドライン・インタフェースを使用した ASM の実行方法	14-17
パッチ・ファイルとオペレーティング・システムのスケジューラを使用した ASM の実行方法	14-17
サマリー・フォルダのデータベースの構成方法	14-18
サマリー管理のために DBMS_JOB がインストールされていることを確認する方法	14-18
サマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する方法	14-19
表領域割当て制限を決定しリセットする方法	14-21
スキーマ・オブジェクト名を確認する方法	14-22
サマリー処理の開始時間を設定する方法	14-22
同時に実行できる処理要求数の制限	14-22

15 手動によるサマリー・フォルダの作成

手動によるサマリー・フォルダの作成	15-2
手動によるサマリー・フォルダの作成について	15-3
Discoverer でサマリー・フォルダを手動で作成する前提条件	15-4
サマリー組合せ	15-5
サマリー組合せを定義するときに考慮する事項	15-6
サマリー組合せをセットアップするためのガイドライン	15-8
式がサマリー・フォルダを使用する時期	15-9
EUL のアイテムに基づくサマリー・フォルダの作成方法	15-10
ユーザーの問合せに基づくサマリー・フォルダの作成方法	15-16
外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの作成方法	15-24
サマリー・フォルダの手動によるリフレッシュ方法	15-30

サマリー・フォルダのプロパティの編集方法	15-32
サマリー・フォルダの編集方法	15-33
サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶領域プロパティを編集する方法	15-35
サマリー・フォルダの削除方法	15-36
サマリー・フォルダのサマリー表またはマテリアライズド・ビューのステータスを表示する方法 ...	15-38

16 サマリー・フォルダに関する追加情報

サマリー・フォルダに関する追加情報	16-2
Discoverer でのサマリー表およびマテリアライズド・ビューの使用の現状と将来	16-3
クエリー・リライト	16-3
Discoverer によるクエリー・リライトの条件	16-4
Discoverer での SQL とクエリー・リライトの実行計画の表示について	16-5
Discoverer で「SQL インспекター」ダイアログに SQL を表示する方法の構成について	16-5
(Discoverer で) マテリアライズド・ビューを使用 / 使用しない実行計画の例	16-6
Discoverer がクエリー・リライトする場合の SQL の例	16-7
クエリー・リライトしてサマリー表を使用するメリットを示す例	16-9
Oracle 8.1.5 以下のデータベースと Oracle 8.1.7 以上のデータベースのサマリー・フォルダの 特性の違い	16-10
外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの違い	16-11
Oracle 8.1.7 以上のデータベースで外部サマリー表とビューを EUL アイテムにマッピングする場合 の違い	16-13
Oracle 8.1.7 以上のデータベースのリフレッシュ・オプションについて	16-13
Oracle データベース間のインポートに続くサマリー・フォルダのリフレッシュについて	16-14

17 Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方法

Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方法	17-2
Oracle Applications	17-2
Oracle Applications の職責	17-3
Oracle Applications ユーザーに対する Discoverer のサポート機能	17-3
Oracle Applications とともに Discoverer を使用するための前提条件	17-4
Discoverer を Oracle Applications モードで実行する場合の相違点	17-5
Oracle Applications モードでの Discoverer の「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」 ダイアログの相違点	17-5
Oracle Applications モードでの Discoverer セキュリティの相違点	17-6
Oracle Applications モードでの Discoverer サマリー・フォルダの相違点	17-7
Oracle Applications モードでの Discoverer および Secure Views/ 言語設定の相違点	17-8

Oracle Applications ユーザー用に「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログを設定する方法	17-8
Oracle Applications EUL の作成方法	17-10
パブリック・ユーザーを介してすべての Oracle Applications ユーザーに作業権限を付与する方法 ..	17-15
ビジネスエリアにアクセスできる Oracle Applications のユーザーまたは職責を指定する方法	17-16
Oracle Applications のユーザーまたは職責がアクセスできるビジネスエリアを指定する方法	17-16
Oracle Applications のユーザーまたは職責が実行できる作業を指定する方法	17-17
特定の作業を実行できる Oracle Applications のユーザーまたは職責を指定する方法	17-17

18 Oracle9i Application Server のコンポーネントとともに Discoverer を使用する方法

Oracle9i Application Server のコンポーネントとともに Discoverer を使用する方法	18-2
Oracle Enterprise Manager とともに Discoverer を使用する方法	18-2
Oracle9iAS Reports とともに Discoverer を使用する方法	18-3
Oracle9iAS Web Cache とともに Discoverer を使用する方法	18-3
Oracle9i Warehouse Builder とともに Discoverer を使用する方法	18-4
Oracle9iAS Single Sign-On Server とともに Discoverer を使用する方法	18-4
Oracle9iAS Portal とともに Discoverer を使用する方法	18-4
Oracle9iAS Portal	18-5
Oracle9iAS Portal の詳細	18-7
Oracle9iAS Portal で Discoverer コンテンツを公開するための要件	18-8
Discoverer で使用可能なポートレットの種類	18-8
データベースに保存されているワークブックのリスト・ポートレット	18-8
ワークシート・ポートレット	18-9
ポートレットの追加方法	18-9
データベースに保存されているワークブックのリスト・ポートレットの追加方法	18-10
ワークシート・ポートレットの追加方法	18-12
ポートレットの編集方法	18-15

19 EUL ステータス・ワークブック

EUL ステータス・ワークブック	19-2
EUL ステータス・ワークブック	19-2
Discoverer EUL V5 のビジネスエリアについて	19-3
標準的な EUL ステータス・ワークブックのインストール方法	19-4
Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックのインストール方法	19-6
Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックの実行方法	19-8

Discoverer EUL V5 のビジネスエリアのアンインストール方法	19-8
EUL データ定義ワークブックについて	19-9
問合せ統計ワークブックについて	19-10
EUL ステータス・ワークブックと表 DBA_JOBS_RUNNING に関する注意	19-11

20 問合せのパフォーマンスの予測

問合せのパフォーマンスの予測	20-2
問合せのパフォーマンスの予測	20-2
Discoverer Desktop/Plus での問合せ予測の機能	20-3
問合せ予測が使用できなくなる理由	20-3
問合せ予測の速度と精度を向上する方法	20-4
問合せ予測に必要なデータベース・ビューを使用できるようにする方法	20-4
問合せ予測のための <code>timed_statistics</code> パラメータの確認および変更方法	20-6
データ表の分析方法	20-7
問合せ予測のための <code>optimizer_mode</code> パラメータの確認および変更方法	20-8
問合せ予測にかかる時間を短縮する方法	20-9
Secure Views で問合せ予測を使用する方法	20-10
古い問合せ予測統計の削除方法	20-11

21 Discoverer コマンドライン・インタフェース

Discoverer コマンドライン・インタフェース	21-2
Discoverer コマンドライン・インタフェース	21-3
コマンド	21-3
コマンド修飾子	21-3
Discoverer コマンドライン・インタフェースの使用について	21-4
コマンドライン・インタフェースの実行に必要な権限	21-5
コマンドの使用に関する注意	21-5
このガイドで使用されるコマンド構文規則	21-6
コマンドの構文	21-7
コマンドの例	21-7
コマンド・ファイル	21-8
コマンド・ファイルの作成方法	21-8
コマンド・ファイルの実行方法	21-8
コマンド・ファイルの例	21-9
Discoverer Administrator コマンドのクイック・ガイド	21-10

Discoverer Administrator コマンド・リファレンス	21-12
/?	21-12
/apps_fndnam	21-13
/apps_user	21-13
/asm	21-13
/cmdfile	21-14
/connect	21-14
/create_eul	21-15
/create_eul /apps_mode	21-16
/delete	21-16
/delete_bus_area	21-17
/delete_eul	21-18
/export (EUL オブジェクト)	21-18
/import (ビジネスエリア)	21-20
/import (EUL オブジェクト)	21-21
/load	21-22
/refresh_bus_area	21-24
/refresh_folder	21-26
/refresh_summary	21-27
Discoverer Administrator コマンド修飾子リファレンス	21-28
/aggregate	21-28
/all	21-28
/apps_grant_details	21-28
/apps_responsibility	21-29
/apps_security_group	21-29
/asm_space, /asm_tablespace	21-29
/audit_info	21-30
/ba_link	21-30
/business_area	21-30
/capitalize	21-30
/condition	21-30
/date_hierarchy	21-31
/db_link	21-31
/description	21-31
/eul	21-31
/eul_language	21-32
/external_element	21-32
/folder	21-32

/function	21-33
/hier_node	21-33
/hierarchy	21-33
/identifier	21-33
/insert_blanks	21-33
/item	21-34
/item_class	21-34
/join	21-34
/keep_folder	21-34
/keep_format_properties	21-35
/log	21-35
/log_only	21-35
/lov	21-35
/object	21-36
/overwrite	21-36
/parameter	21-36
/password	21-36
/private	21-37
/refresh	21-37
/remove_prefix	21-37
/rename	21-37
/schema	21-38
/show_progress	21-38
/sort_folders	21-38
/sort_items	21-38
/source	21-39
/summary	21-39
/user	21-39
/workbook	21-39
/xmlworkbook	21-40
Discoverer Desktop コマンド・リファレンス	21-40
/?	21-40
/batch	21-40
/connect	21-41
/export	21-41
/open	21-42
/opendb	21-42
/parameter	21-43

/p	21-43
/pt	21-43
/sheet	21-44

22 Discoverer のレジストリ設定

Discoverer のレジストリ設定	22-2
Discoverer のレジストリ設定	22-2
Discoverer Plus および Discoverer Viewer のレジストリ設定	22-2
Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定	22-3
Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の詳細	22-3
Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の編集方法	22-10

23 Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレード

Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレード	23-2
Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレードについて	23-2
Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレードの前提条件	23-3
アップグレード・ステップ 1: リリース 4.1 EUL のバックアップ	23-4
アップグレード・ステップ 2: リリース 4.1 EUL のアップグレード	23-4
アップグレード・ステップ 3: サマリー・フォルダのリフレッシュ	23-6
アップグレード・ステップ 4: Discoverer リリース 9.0.2 へのユーザーの移行	23-8
アップグレード・ステップ 5: リリース 4.1 EUL の削除	23-9
アップグレード・ステップ 6: クライアント・マシンからの Discoverer リリース 4.1 製品の削除	23-11
Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレードに関する注意	23-12
Oracle Applications EUL のアップグレードに関する注意	23-12
分析関数を含む EUL のアップグレードに関する注意	23-12

第 II 部 リファレンス

24 ダイアログのリファレンス

ダイアログのリファレンス	24-2
ダイアログのリファレンス一覧	24-2
「アイテムの組合せの追加」ダイアログ	24-7
「サマリー・フォルダへのアイテムの追加」ダイアログ	24-9
「アルファベット順」ダイアログ	24-10
「ビジネスエリアプロパティ:」ダイアログ	24-11
「識別子の変更の警告」ダイアログ	24-12

「フォルダの選択」ダイアログ (アイテム、条件、結合)	24-13
「表またはビューの選択」ダイアログ	24-14
「条件プロパティ」ダイアログ	24-15
「ビジネス エリア削除の確認」ダイアログ	24-17
「削除の確認」ダイアログ	24-18
「フォルダ削除の確認」ダイアログ	24-19
「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログ	24-20
「EUL 作成ウィザード」ダイアログ	24-22
「EUL 作成ウィザード ステップ 2」ダイアログ	24-24
「EUL の作成ウィザード ステップ 2」ダイアログ (Oracle Applications ユーザー)	24-25
「カスタム フォルダ」ダイアログ	24-26
「カスタム・フォルダのプロパティ」ダイアログ	24-27
「ワークエリア」: 「データ」タブ	24-28
「データベース情報」ダイアログ	24-29
「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: タブのリスト	24-30
「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: 「8i プロパティ」タブ	24-31
「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: 「マッピング」タブ	24-33
「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: 「プロパティ」タブ	24-34
「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: 「表領域」タブ	24-36
「日付書式」ダイアログ	24-37
「EUL の削除」ダイアログ	24-39
「ユーザー定義アイテムの編集」ダイアログ	24-40
「EUL マネージャ」ダイアログ	24-43
「EUL アップグレードエラー」ダイアログ	24-44
「EUL のアップグレード」ダイアログ	24-45
「エクスポート・ウィザード ステップ 1」ダイアログ	24-46
「エクスポート・ウィザード ステップ 2」ダイアログ (選択したビジネスエリア)	24-48
「エクスポート・ウィザード ステップ 2」ダイアログ (オブジェクトの選択)	24-49
「エクスポート・ウィザード」ダイアログ - 最終ステップ - ファイルの保存	24-50
「名前を付けて保存」ダイアログ	24-51
「フォルダ プロパティ」ダイアログ	24-52
「一般」タブ	24-52
「依存性」タブ	24-54
「複合フォルダ」タブ	24-54
「ワークエリア」: 「階層」タブ	24-55
「階層ウィザード」ダイアログ	24-56
「影響」ダイアログ	24-57
「PL/SQL 関数のインポート」ダイアログ	24-59

「インポート・ウィザードステップ1」ダイアログ	24-60
「インポート・ウィザードステップ2」ダイアログ	24-61
「インポート・ウィザードステップ3」ダイアログ	24-63
「チュートリアルインストール ウィザードステップ3」ダイアログ	24-65
「チュートリアルインストール/削除ウィザードステップ1」ダイアログ	24-66
チュートリアルインストール・ウィザード:ステップ1	24-66
チュートリアル削除ウィザード:ステップ1	24-66
「チュートリアルインストール/削除ウィザードステップ2」ダイアログ	24-67
チュートリアルインストール・ウィザード:ステップ2	24-67
チュートリアル削除ウィザード:ステップ2	24-68
「アイテムクラス ウィザード」ダイアログ	24-69
アイテムクラス ウィザード:値リストの詳細オプションのダイアログ	24-70
アイテムクラス ウィザード:「属性の選択」ダイアログ	24-73
アイテムクラス ウィザード:「アイテムの選択」ダイアログ (代替ソートを行う場合)	24-74
アイテムクラス ウィザード:「アイテムの選択」ダイアログ (値リストを生成する)	24-75
「アイテムクラス ウィザード」ダイアログ (このアイテム・クラスを使用するアイテムの選択)	24-76
「ワークエリア」:「アイテムクラス」タブ	24-77
「アイテムプロパティ」ダイアログ	24-78
「アイテム」ダイアログ	24-83
「日付階層を使用するアイテム」ダイアログ	24-84
「結合オプション」ダイアログ	24-85
「結合プロパティ」ダイアログ	24-87
「一般」タブ	24-87
「依存性」タブ	24-88
「ロードウィザードステップ1」ダイアログ	24-90
「ロードウィザード ステップ2」ダイアログ	24-92
「ロードウィザード ステップ3」ダイアログ	24-93
「ロードウィザードステップ4」ダイアログ	24-94
「ロードウィザードステップ5」ダイアログ	24-97
「フォルダの管理」ダイアログ:「ビジネスエリア→フォルダ」タブ	24-99
「フォルダの管理」ダイアログ:「フォルダ→ビジネスエリア」タブ	24-100
「スケジュールの管理」ダイアログ	24-101
「階層の名前付け」ダイアログ	24-104
「サマリー フォルダの名前付け」ダイアログ	24-105
サマリー表またはマテリアライズド・ビューに基づくサマリー・フォルダの場合	24-105
外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの場合	24-106
「新規条件」ダイアログ (詳細設定)	24-107

「新規条件」ダイアログ（オブジェクトの選択）	24-110
「条件の新規作成 / 編集」ダイアログ	24-111
「新規日付書式」ダイアログ	24-114
「新規アイテム」ダイアログ（アイテム用フォルダの選択）	24-115
「新規アイテム」ダイアログ	24-116
「新規結合」ダイアログ（フォルダの選択）	24-119
「新規結合 / 結合の編集」ダイアログ	24-120
「新規結合」ダイアログ	24-123
「オンライン・ディクショナリ・オプション」ダイアログ	24-125
「ビジネスエリアを開く」ダイアログ	24-127
「オプション」ダイアログ：「接続」タブ	24-128
「接続」タブ	24-128
「オプション」ダイアログ：「デフォルト EUL」タブ	24-130
「PL/SQL 関数」ダイアログ：「引数」タブ	24-131
「PL/SQL 関数」ダイアログ：「関数」タブ	24-133
「権限」ダイアログ：「ユーザー→権限」タブ	24-136
「権限」ダイアログ：「問合せ管理」タブ	24-139
「権限」ダイアログ：「スケジュールされたワークブック」タブ	24-141
「権限」ダイアログ：「権限→ユーザー」タブ	24-143
「プロパティ」ダイアログ	24-145
「ビジネスエリアのリフレッシュ」ダイアログ	24-146
「サマリーのリフレッシュ」ダイアログ	24-147
「サマリー・フォルダのリフレッシュ」ダイアログ	24-149
Discoverer によりリフレッシュされるサマリー・フォルダ（Discoverer のサマリー表または マテリアライズド・ビューに基づく）の場合	24-149
別のアプリケーションによりリフレッシュされるサマリー・フォルダ（外部サマリー表に 基づく）の場合	24-150
「リフレッシュ ウィザード」ダイアログ	24-151
「リフレッシュ ウィザード ステップ 1」	24-151
「リフレッシュ ウィザード ステップ 2」	24-151
「リポジトリ ユーザー」ダイアログ	24-153
「職責の選択」ダイアログ	24-154
「スケジュールされたワークブック」ダイアログ：「一般」タブ	24-155
「スケジュールされたワークブック」ダイアログ：「スケジュール」タブ	24-156
「セキュリティ」ダイアログ：「ビジネスエリア→ユーザー」タブ	24-157
「セキュリティ」ダイアログ：「ユーザー→ビジネスエリア」タブ	24-159
「デフォルト EUL の選択」ダイアログ	24-161
「階層を構成するアイテムを選択」ダイアログ	24-162

「ワークエリア」:「サマリー」タブ	24-164
「サマリー プロパティ」ダイアログ	24-166
「サマリー ウィザード (ASM)」ダイアログのリスト	24-170
「サマリー ウィザード (ASM)」:「デフォルト設定の変更」ダイアログ:「ダイアログのリスト」 タブ	24-171
「サマリー ウィザード (ASM)」:「デフォルト設定の変更」ダイアログ:「フォルダ」タブ	24-172
「サマリー ウィザード (ASM)」:「デフォルト設定の変更」ダイアログ:「分析」タブ	24-173
「サマリー ウィザード (ASM)」:「デフォルト設定の変更」ダイアログ:「削除」タブ	24-175
「サマリー ウィザード (ASM)」:「デフォルト設定の変更」ダイアログ:「問合せの使用法」 タブ	24-177
「サマリー ウィザード (ASM)」:「デフォルト設定の変更」ダイアログ:「ユーザーの問合せ」 タブ	24-179
「サマリー ウィザード (ASM)」:「分析不能」ダイアログ	24-180
「サマリー ウィザード (ASM)」:「推奨サマリー」ダイアログ	24-182
「サマリー ウィザード (ASM)」:ステップ2「フォルダの分析」ダイアログ	24-184
「サマリー ウィザード (ASM)」:ステップ3「領域の割当て」ダイアログ	24-186
「サマリー ウィザード ステップ1」ダイアログ	24-188
「サマリー ウィザード ステップ2」ダイアログ	24-189
「問合せ統計の使用」ダイアログ	24-191
「外部サマリー表の使用」ダイアログ	24-193
「ヘルプの使用法」	24-195
「値」ダイアログ	24-196

用語集

索引

はじめに

Oracle9i Discoverer Administrator へようこそ。Discoverer Administrator は、Discoverer システムの設定およびメンテナンスに使用するツールです。

Discoverer Administrator によって Discoverer システムを制御および管理できるため、Discoverer Desktop/Plus および Discoverer Viewer ユーザーが必要な情報を検索できます。

対象読者

Discoverer システムの管理者は、次の操作の実行方法についてはこのマニュアルを参照してください。

- End User Layer の作成およびメンテナンス
- ビジネスエリア、フォルダおよびアイテムの設定
- ユーザーによる情報の検索を支援するための、結合、ユーザー定義アイテムおよび条件の定義
- サマリー・フォルダを使用した Discoverer のパフォーマンスの改善

このマニュアルの構成

このマニュアルの構成は、次のとおりです。

第 I 部「概念および作業情報」

- Oracle9i Discoverer Administrator の概要
- Discoverer Administrator スタート・ガイド
- End User Layer の作成とメンテナンス
- ビジネスエリアの作成とメンテナンス
- フォルダの作成とメンテナンス
- Discoverer への接続管理
- 情報に対するアクセス制御
- ワークブックのスケジュール
- アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス
- 結合の作成とメンテナンス
- ユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス
- 条件の作成とメンテナンス
- 階層の作成とメンテナンス
- サマリー・フォルダの管理
- 手動によるサマリー・フォルダの作成
- サマリー・フォルダに関する追加情報
- Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方法

- Oracle9i Application Server のコンポーネントとともに Discoverer を使用する方法
- EUL ステータス・ワークブック
- 問合せのパフォーマンスの予測
- Discoverer コマンドライン・インタフェース
- Discoverer のレジストリ設定
- Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレード

第 II 部「リファレンス」

- ダイアログのリファレンス

関連文書

詳細は、次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle9iAS Discoverer Plus チュートリアル』
- 『Oracle9i Discoverer Administrator チュートリアル』
- 『Oracle9iAS Discoverer 構成ガイド』

表記規則

このマニュアルで使用する表記規則は、次のとおりです。

表記規則	意味
「ファイル」→ 「新規」	メニュー・オプションは、メニューとオプション名を矢印で区切って表されています。たとえば、「ファイル」→「新規」は、「ファイル」メニューから「新規」オプションを選択することを示します。
太字	太字は、Discoverer のダイアログ内のフィールド名を識別するために使用されます。
<>	山カッコは、ユーザー指定の名前を囲みます。
[]	大カッコは、オプションの句を囲みます。そこから 1 つ選択しても、まったく選択しなくてもかまいません。
固定幅フォント	ユーザーが入力する文字は、固定幅フォントで表示されます。

Discoverer では、操作の実行方法が複数ある場合があります。たとえば、新規条件を作成する場合、次の 2 通りの方法があります。

- 「ツール」→「条件」を選択する。
- ツールバーの「条件」ボタンをクリックする。

Discoverer のマニュアルでは、マウスを使用しないユーザーのために、選択するメニューおよびメニュー・オプションが示されます。

Oracle9i Discoverer の操作

キーボード操作

Oracle9i Discoverer では、標準のキーボード操作がサポートされています。標準のキーボード操作とは、[Tab] キー、ニーモニック ([Alt] キーおよび下線付きの文字を使用) およびアクセラレータ ([Alt] キーを押しながら [F4] を押してウィンドウを終了させるなど) を使用することです。

第 I 部

概念および作業情報

このセクションでは、Oracle9i Discoverer Administrator の概念および作業情報について説明します。

Oracle9i Discoverer Administrator の概要

Oracle9i Discoverer Administrator の概要

この章では、Oracle9i Discoverer Administrator の概要について説明します。この章は、次のトピックで構成されています。

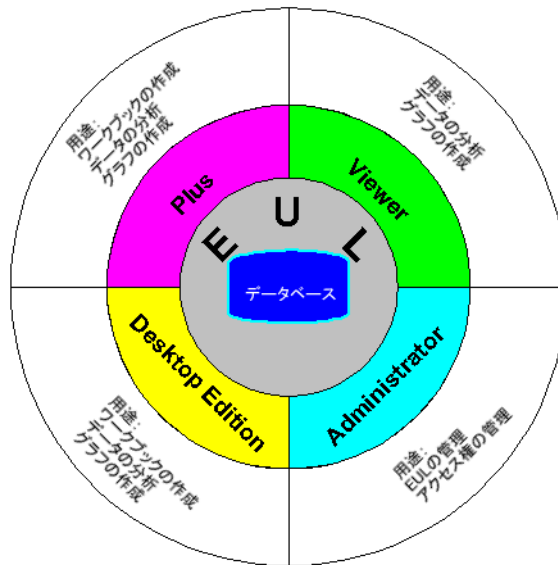
- [Oracle9i Discoverer](#)
- [Oracle9i Discoverer Administrator](#)
- [Discoverer 管理者としての役割](#)
- [Discoverer 管理者の基本概念](#)
- [Discoverer を正常に実装するための手順](#)
- [Discoverer システムのメンテナンスに含まれる内容](#)
- [Discoverer Administrator リリース 9.0.2 の新機能](#)

Oracle9i Discoverer

Oracle9i Discoverer とは、次の製品で構成されるビジネス・インテリジェンス・ツールセットです。

- [Oracle9i Discoverer Administrator](#)
- [Oracle9iAS Discoverer Plus](#)
- [Oracle9iAS Discoverer Viewer](#)
- [Oracle9i Discoverer Desktop](#)

図 1-1 Discoverer コンポーネント



すべての Discoverer ツールは、End User Layer（EUL）に依存しています。EUL とは、データベースの他の表およびビューに関する情報（つまりメタデータ）を含む一連のデータベース表です。

Oracle9i Discoverer Administrator

Oracle9i Discoverer Administrator は、Oracle9i Discoverer のコンポーネントの 1 つです。Discoverer Administrator により、ビジネス・ユーザーはデータベースの複雑な概念から解放されるため、Oracle9i Discoverer を使用してビジネス上の疑問に迅速かつ正確に対応できます。

Discoverer Administrator のウィザード形式インタフェースでは、次の操作を実行できます。

- End User Layer（EUL）の設定とメンテナンス
- 情報に対するアクセス制御
- Discoverer エンド・ユーザーがワークシートに含める条件およびユーザー定義アイテムの作成

Discoverer Administrator のユーザーは、Discoverer 管理者と呼ばれます。

Oracle9i Discoverer Administrator は、アプリケーション開発ツールと管理ツールのスイート・パッケージである Oracle9i Developer Suite の一部として出荷されます。

Discoverer 管理者としての役割

Discoverer 管理者には、次の操作に対する責任があります。

- Discoverer システムの初期実装
- Discoverer システムの継続管理とメンテナンス

Discoverer 管理者としての役割を果たすには、企業の意味決定担当者をサポートするビジネスエリアの設計方法を理解しておく必要があります。データベース面では、データベースのデータ、データの種類、データの場所、データの格納方法および他のデータとの関連について知っている必要があります。ビジネス面では、意思決定担当者が必要とするデータ、必要とされる分析の種類、および最終結果をわかりやすく表示する方法について知っている必要があります。

Discoverer 管理者の基本概念

Discoverer Administrator を使い始める前に、いくつかの基本的な概念に慣れておくくと便利です。

- [ビジネス・インテリジェンス](#)
- [リレーショナル・データベース、OLTP システムおよびデータ・ウェアハウス](#)
- [Discoverer システムの基本概念](#)
- [Discoverer の動作](#)

ビジネス・インテリジェンス

ビジネス・インテリジェンスとは、データを分析してビジネス上の疑問に対応し、将来の傾向を予測できる能力のことです。

Oracle9i Discoverer は優れたビジネス・インテリジェンス・ツールであり、ユーザーはデータを非定型方式で分析できます。問合せとレポートの事前定義を IT の専門家に依存することなく、Discoverer ユーザー自身が分析するデータを選択して、ビジネス上の意思決定を行うのに十分な情報が得られるまで結果を分析できます。また、Oracle9i Discoverer では、ユーザーはデータ分析の結果を様々な形式（グラフや Excel スプレッドシートなど）で同僚と共有できます。

リレーショナル・データベース、OLTP システムおよびデータ・ウェアハウス

リレーショナル・データベースには、データ値を含む行と列で構成される表にデータが格納されます。リレーショナル・データベース管理システム（RDBMS）の全体的な構造は、システムの使用方法に応じて何通りもの方法で設定できます。

典型的な RDBMS はオンライン・トランザクション処理（OLTP）用に設計されており、膨大な量のトランザクション・データをできるかぎり効率的な方法で格納することを主な目的としています。OLTP システム設計における主な考慮事項は、データを RDBMS に格納することです。OLTP システムには、ビジネスで日常的に使用される情報が含まれています。OLTP システム用に設計された RDBMS の情報は、一般的に処理に重点が置かれ、現存のデータであり、変更しやすいという性質を持ちます。

データ・ウェアハウスとは、単に情報を効率的に格納するだけでなく、データ分析を容易にする目的で設計された構造を持つ RDBMS のことです。データ・ウェアハウス設計における主な考慮事項は、データを RDBMS から取り出すことです。データ・ウェアハウスの情報は、一般的に目的に重点が置かれ、過去のデータであり、静的であるという性質を持ちます。

Oracle9i Discoverer では、RDBMS が OLTP システム用に設計されたのか、データ・ウェアハウスとして設計されたのかにかかわらず、ビジネス・ユーザーにデータ分析機能が提供されます。

Discoverer システムの基本概念

Discoverer システムを設計および実装する前に、Discoverer に関するいくつかの基本的な概念をよく理解しておく必要があります。

以降のセクションで、これらの基本概念について簡単に説明します。

- [End User Layer の概要](#)
- [ビジネスエリアの概要](#)
- [フォルダとアイテムの概要](#)
- [ワークブックとワークシートの概要](#)
- [階層とドリルの概要](#)
- [サマリー・フォルダの概要](#)

前述の各セクションの内容は簡単な説明のみですが、このマニュアルの他の章への相互参照が含まれているため詳細を参照できます。

End User Layer の概要

End User Layer (EUL) は、Discoverer エンド・ユーザーをデータベースの複雑性と物理構造から解放します。EUL では、各 Discoverer エンド・ユーザーまたはユーザー・グループに合わせて調整できる、直観的でビジネスに焦点が合ったデータベースのビューが提供されます。EUL を使用すると、Discoverer エンド・ユーザーはデータ・アクセスの問題ではなくビジネスの問題に集中できます。SQL の生成によって Discoverer エンド・ユーザーの問合せ作成が補助され、一連の豊富なデフォルト設定がレポート作成に役立ちます。

EUL のメタレイヤー構造によって、データベースのデータ整合性が保持されます。Discoverer 管理者または Discoverer エンド・ユーザーが Discoverer に対して行う操作は EUL のメタデータにのみ影響し、データベースには影響しません。

EUL は、データベースのおよそ 50 の表のコレクションです。Discoverer Administrator によって変更できる表は、これらの表のみです。ビジネスエリアは、EUL データベース表を使用して Discoverer Administrator で定義されます。Discoverer では、アプリケーション・データベースに読取り専用アクセスが提供されます。

EUL の詳細は、[第 3 章の「End User Layer の作成とメンテナンス」](#)を参照してください。

ビジネスエリアの概要

一般的に、データベースのすべての情報に関心を持つユーザー（またはユーザー・グループ）はいません。ユーザーは、各自の行うジョブに何らかの関係がある情報のサブセットに関心を持つ傾向にあります。Discoverer Administrator を使用して、関連情報のコンテナとして 1 つ以上のビジネスエリアを作成します。

ビジネスエリアを作成したら、関連情報を含むデータベース表をそのビジネスエリアにロードします。

ビジネスエリアの詳細は、[第 4 章の「ビジネスエリアの作成とメンテナンス」](#)を参照してください。

フォルダとアイテムの概要

ビジネスエリアにロードする表およびビューは、フォルダとして Discoverer エンド・ユーザーに表示されます。表またはビュー内の列は、アイテムとして表示されます。

データベース表と列には、ユーザーにとってわかりにくい名前が付いている場合があります。Discoverer Administrator を使用して、フォルダおよびアイテムの名前を、基礎となる表と列の名前よりもわかりやすいものに変更できます。

ビジネスエリアのフォルダは、データベース表またはビューに直接基づいている必要はありません。複数の表またはビューの列に基づくアイテムを含んだ複合フォルダを作成できます。また、自分で作成した SQL 文に基づくカスタム・フォルダも作成できます。

同様に、ビジネスエリアのアイテムは列に直接基づいている必要はありません。複数の列を計算して生成されるユーザー定義アイテムや、Oracle データベースで利用できる分析関数を利用するユーザー定義アイテムを作成できます。

フォルダとアイテムの詳細は、次の章を参照してください。

- [第 5 章「フォルダの作成とメンテナンス」](#)
- [第 9 章「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)
- [第 11 章「ユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス」](#)

ワークブックとワークシートの概要

Discoverer エンド・ユーザーはアイテムをワークシートに含めて Discoverer のデータ分析およびチャート作成ウィザードを使用することで情報を分析し、関心のある情報を検索します。Discoverer ワークシートは、ワークブックにグループ化されます。ワークブックは、ファイル・システムまたはデータベースに格納できます。

Discoverer エンド・ユーザーに対して、作成されたワークシートの情報分析のみを許可する場合があります。または、エンド・ユーザーによるワークシートの作成を許可した方が適切な場合もあります。Discoverer Administrator では、各自のワークブックを作成できるエンド・ユーザーと、作成されたワークブックの使用のみを許可されたエンド・ユーザーを決定できます。

ワークブックとワークシートの詳細は、『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

階層とドリルの概要

階層とは、エンド・ユーザーがドリルアップまたはドリルダウンして詳細度に応じた情報を表示できるアイテム間の論理関係です。情報を効率的に分析するため、Discoverer エンド・ユーザーは次の操作を行います。

- 特定の情報に関する詳細を表示するためのドリルダウン（たとえば、特定地域の総売上が期待に反した場合、通常、エンド・ユーザーはその地域の総売上数値にドリルダウンして、地域内のどの都市の売上が低いのかを参照します）
- ディテール・データが上位レベルの情報にどの程度貢献しているかを参照するためのドリルアップ（たとえば、ある都市の売上数値を参照している場合、通常、エンド・ユーザーはドリルアップして、その地域の総売上数値を参照します）

ビジネスエリアに表をロードすると、Discoverer によって日付アイテムのデフォルト日付階層が自動的に作成されます。他のアイテムに対して独自の階層を作成する場合があります。

階層の詳細は、[第 13 章の「階層の作成とメンテナンス」](#)を参照してください。

サマリー・フォルダの概要

サマリー・フォルダは、再利用のために保存された問合せデータを表したものです。

Discoverer Administrator でサマリー・フォルダを作成すると、エンド・ユーザーの問合せに対する応答時間が短縮されます。問合せの応答時間が短縮されるのは、問合せがデータベース表にアクセスするのではなく、事前に集計および結合されたデータにアクセスするためです。また、Discoverer では、他のアプリケーションで作成されたサマリー・データを含む表に基づくサマリー・フォルダを使用できます。これらの表は、外部サマリー表と呼ばれています。

サマリー・フォルダの詳細は、次の章を参照してください。

- [第 14 章「サマリー・フォルダの管理」](#)
- [第 15 章「手動によるサマリー・フォルダの作成」](#)
- [第 16 章「サマリー・フォルダに関する追加情報」](#)

Discoverer の動作

データベースの情報に対するユーザーの要求は、ワークシート形式で行われます。

ユーザーがワークシートを作成するかまたはワークシートを開くと、Discoverer では次の動作が行われます。

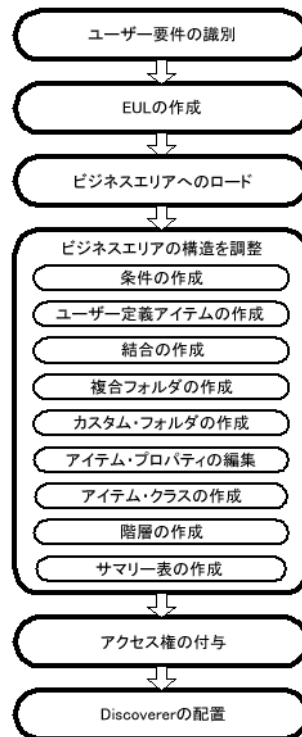
- ワークシートを対応する SQL 文に変換（たとえば、フォルダ名とアイテム名をそれぞれ表名と列名に変換）
- データベースに SQL 文を送信
- データベースから返された結果セットを表示

Discoverer Plus および Discoverer Viewer の場合、SQL 文は一度アプリケーション・サーバー・マシン上で実行される Discoverer プロセスを介してデータベースに送信されます。

Discoverer を正常に実装するための手順

次のフロー・チャートに示すように、Discoverer システムの実装には基本的に 6 つの手順があります。

図 1-2 Discoverer 実装フロー・チャート



これら 6 つの手順の詳細を説明します。

1. ユーザー要件の識別

Discoverer を正常に実装するには、ユーザーの要件を満たす必要があります。ユーザー要件を特定するには、主なユーザーに次の項目について質問します。

- 現在使用している情報
- 表示を希望する情報
- 希望する情報の表示方法

まず、ユーザーが現在使用しているレポートと情報ソースを検討します。Discoverer を使用することで、ユーザーが現在使用している情報へのアクセスと、新しい強力な方法で情報を分析する機能の両方がユーザーに提供されます。

一般的に、ユーザーの要件は時間とともに変化します。システムがロールアウトされているときに、ユーザーから大きな変更が要求されることがあります。Discoverer で実行可能な作業が明確になれば、Discoverer を他のどの領域で活用できるかを判断する材料になります。

要件が変更されることを予測して作業を行うようにしてください。正常なシステムは、最初は要件の一部を満たしていますが、その後ユーザーのフィードバックに基づいて時間とともに変更されていきます。

2. EUL の作成 (EUL が存在しない場合は必須)

ビジネスエリアを作成するには、EUL が必要です。EUL が存在しない場合は、EUL を作成する必要があります。

3. ビジネスエリアの作成とビジネスエリアへのデータのロード (必須)

ユーザーの要件が識別されると、ユーザーがアクセスする必要のある情報を把握できます。たとえば、あるユーザー・グループは販売情報にアクセスし、他のグループは製造情報にアクセスするなどです。

Discoverer で、共通のビジネス目的を持つ情報を 1 つのビジネスエリアにグループ化します。ビジネスエリアの作成後、その情報を保持するデータベース表およびビューを指定する必要があります。これを行うには、表およびビューをそのビジネスエリアにロードします。

4. 最も柔軟で理解しやすい方法でユーザーがデータを表示できるようにビジネスエリアの構造を調整

ユーザーがデータにアクセスして分析するには、ビジネスエリア設定および内容はデフォルトで十分です。ただし、Discoverer Administrator ではデフォルトの分析機能を拡張する多くの機能が提供されます。

次の操作を実行できます。

- オプション条件と必須条件の作成による、フォルダに返される行数の絞込み（詳細は第 12 章「条件の作成とメンテナンス」を参照）
- 簡単に利用できる既存の計算を提供し、ユーザーを複雑な計算作成作業から解放するユーザー定義アイテムの作成（詳細は、第 11 章「ユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス」を参照）
- データベースからの表のロード時に自動的に結合されなかったフォルダを組み合わせる結合の作成（詳細は、第 10 章「結合の作成とメンテナンス」を参照）
- 結合およびリレーショナル構造をユーザーに対して完全に非表示にする、複合フォルダへのフォルダの結合（詳細は、第 5 章の「複合フォルダの作成方法」を参照）

- アイテムを持つフォルダとして入力した SQL 文によって返される結果セットを表すカスタム・フォルダの作成（詳細は、[第 5 章の「カスタム・フォルダの作成方法」](#)を参照）
- データをわかりやすくするための、アイテム名、説明および他の書式設定情報の編集（詳細は、[第 9 章の「アイテム・プロパティの編集方法」](#)を参照）
- 値リスト、代替ソートおよび詳細へのドリルをサポートするアイテム・クラスを作成（詳細は、[第 9 章の「アイテム・クラス」](#)を参照）
- ドリルダウン操作を簡素化する階層の作成（詳細は、[第 13 章の「階層の作成とメンテナンス」](#)を参照）
- サマリー表の作成（または Discoverer によるサマリー管理の自動化、あるいは既存サマリー表の登録）による問合せパフォーマンスの最大化（詳細は、[第 14 章の「サマリー・フォルダの管理」](#)を参照）

5. ユーザーまたはロールに対するビジネスエリアへのアクセス権の付与（必須）

ユーザーの要件が識別されると、どのユーザー（およびユーザー・グループ）がどの情報にアクセスする必要があるかを把握できます。

様々なユーザーが同じ情報へのアクセス権を必要とする場合があります。たとえば、ある従業員に関する情報を、その従業員のマネージャ、給与スタッフおよび人事管理部門のユーザーが要求することがあります。

また、1つのユーザー・グループのみが情報へのアクセス権を持つことが適切な場合もあります。たとえば、エンジニアリング・プロジェクトの情報はプロジェクト・マネージャにとっては重要ですが、給与スタッフには関係ありません。

ユーザーの情報に対する要件を考慮すると、ユーザーにビジネスエリアへのアクセス権を付与できます。

Discoverer ユーザーは（エンド・ユーザーであるか管理者であるかにかかわらず）、基礎となるデータベースのセキュリティには影響しません。ユーザーは、Discoverer の情報のうち、アクセス用のデータベース権限を持っていない情報は参照できません。つまり、Discoverer のセキュリティと権限はすべて、データベース・セキュリティ機能に追加されたものです。

6. Discoverer の配置

ユーザーの要件により、企業で使用可能な Discoverer コンポーネントが決定されます。

ユーザー要件を識別すると、各自でワークシートを作成する必要があるユーザーや、作成されたワークシートの使用のみを必要とするユーザーがいることがわかります。さらに、Web ブラウザを使用して Discoverer を実行するユーザーと、Java アプレット・ユーザー・インタフェースまたは HTML ユーザー・インタフェースを使用して Discoverer を実行するユーザーがいます。

次の表を参考にして、組織に配置する Discoverer コンポーネントを決定してください。

ユーザー要件	Discoverer Plus	Discoverer Viewer	Discoverer Desktop
Windows を実行する PC における Discoverer のインストールおよび実行	配置しない	配置しない	配置する
Web ブラウザを使用した Discoverer の実行	配置する	配置する	配置しない
新規ワークシートの作成	配置する	配置しない	配置する
ファイル・システムへのワークブックの保存	配置しない	配置しない	配置する
Discoverer ユーザー・インタフェースのカスタマイズ	配置しない	配置する	配置しない

ネットワーク・パフォーマンスやセキュリティ問題など、決定内容に影響する要因は他にもあります。

配置する Discoverer コンポーネントを決定したら、固有のインストールまたは構成手順に関する適切なドキュメントを参照してください。

Discoverer システムのメンテナンスに含まれる内容

Discoverer システムの実装後は、ユーザー要件を満たすために引き続き行う必要のある Discoverer のメンテナンスの量は少なくなります。

通常は、次の操作によってビジネスエリアを引き続き調整します。

- 値リスト、代替ソートおよび詳細へのドリルをサポートするアイテム・クラスの追加（詳細は、[第 9 章の「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)を参照）
- データベースからの表のロード時に自動的に結合されなかったフォルダと、同じワークシートに現在アクセスする必要があるユーザーを組み合わせる新規結合の追加（詳細は、[第 10 章の「結合の作成とメンテナンス」](#)を参照）
- フォルダに返される行数を制限する新規オプション条件と必須条件の追加（詳細は、[第 12 章の「条件の作成とメンテナンス」](#)を参照）
- 最初には必要でなかった既存の計算をユーザーに提供する新規ユーザー定義アイテムの追加（詳細は、[第 11 章の「ユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス」](#)を参照）
- 問合せ作成を簡素化する新規複合フォルダの追加（詳細は、[第 5 章の「複合フォルダの作成方法」](#)を参照）
- 従来のフォルダでは満たされないユーザー要件を満たす新規カスタム・フォルダの追加（詳細は、[第 5 章の「カスタム・フォルダの作成方法」](#)を参照）

- ユーザーによる新しいデータ分析方法を可能にする新規階層の追加（詳細は、[第 13 章の「階層の作成とメンテナンス」](#)を参照）
- 特定の問合せにおけるパフォーマンス問題を解決する新規サマリーの追加（詳細は、[第 14 章の「サマリー・フォルダの管理」](#)を参照）

前述の操作に加えて、ユーザーおよびそのユーザーがアクセス権を持つビジネスエリアの変更や、個々のユーザーがこれらのビジネスエリアで実行できる操作の変更が必要となる場合があります。次に例を示します。

- 新規ユーザーを追加する場合、ジョブの実行に必要なビジネスエリアへのアクセス権を新規ユーザーに付与する必要があります。
- 既存ユーザーがジョブまたは部門を変更する場合、既存ユーザーに新規ビジネスエリアへのアクセス権を付与するか、あるいは以前のビジネスエリアのアクセス権を取り消す必要があります。

詳細は、[第 7 章の「情報に対するアクセス制御」](#)を参照してください。

Discoverer Administrator リリース 9.0.2 の新機能

Discoverer Administrator リリース 9.0.2 には、次のような新機能と改善された機能が含まれています。

- 拡張レポート — Discoverer Administrator ユーザー・インタフェースを使用して、End User Layer (EUL) オブジェクトをファイルにエクスポートします。ファイルにエクスポートできる EUL オブジェクトには、ビジネスエリア、フォルダ、アイテム階層、日付階層、アイテム・クラス、ワークブック定義 (Discoverer Desktop および Discoverer Plus で作成)、PL/SQL 関数の登録情報、サマリー・フォルダおよび自動サマリー管理 (ASM) ポリシーが含まれます。詳細は、[第 3 章の「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピーについて」](#)を参照してください。
- アルファベット順ソート — ビジネスエリアのロード時にフォルダおよびアイテムをソートします。「ワークエリア」内で、ビジネスエリアのフォルダのソートおよびフォルダのアイテムのソートもできます。（詳細は、[第 4 章の「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」](#)、[第 21 章の「/load」](#) および [第 5 章の「フォルダの作成とメンテナンス」](#)を参照してください）。
- EUL 相互参照 — EUL オブジェクトの削除による Discoverer ワークブックへの影響を表示します。たとえば、削除するフォルダが特定のワークブックによって参照されているか、またフォルダの削除によってワークブックが影響を受けるかについて、Discoverer Administrator によって通知されます（フォルダの削除の詳細は、[第 5 章の「ビジネスエリアからのフォルダの削除方法」](#)を参照してください）。

- 改善された値リスト – Discoverer Plus ユーザーによる値リスト・オプションの選択方法および表示方法を Discoverer Administrator で指定します。Discoverer Plus における値リストの拡張時に、(データベースからのデータの各配列フェッチに対して) エンド・ユーザーに表示される最大行数を決定できます。また、重複値の非表示、最初に表示された後の値リストのキャッシュを指定したり、エンド・ユーザーが長い値リストに対して検索基準を入力するように指定できます (詳細は、[「アイテム クラス ウィザード: 値リストの詳細オプションのダイアログ」](#)を参照してください)。

Discoverer Administrator スタート・ガイド

Discoverer Administrator スタート・ガイド

この章では、Discoverer Administrator の使用を開始する方法について説明します。この章は、次のトピックで構成されています。

- [Oracle9i Discoverer を使用する前提条件](#)
- [Discoverer Administrator の開始方法](#)
- [ワークエリア](#)
- [Discoverer Administrator のドキュメントとオンライン・ヘルプについて](#)

Oracle9i Discoverer を使用する前提条件

システムの前提条件

Discoverer Administrator を使用する前に、次の前提条件が満たされている必要があります。

- 適切なデータベースがインストールされ、使用可能である必要があります。Oracle8.1.7 以上のデータベースでは、サマリー・フォルダのパフォーマンスを改善するマテリアライズド・ビューの使用がサポートされます。
- Discoverer Administrator が、通常は Oracle9iDS のインストールの一部として PC にインストールされている必要があります。

エンド・ユーザーが Discoverer を使用するには、次のいずれかまたは両方がインストールされている必要があります。

- Discoverer Plus および Discoverer Viewer がアプリケーション・サーバー・マシンにインストールされ、Oracle9iAS インストールの一部として正しく構成されている必要があります（詳細は、『Oracle9iAS Discoverer 構成ガイド』を参照してください）。
- Discoverer Desktop がユーザーの PC にインストールされている必要があります。

データ・アクセスの前提条件

Discoverer Administrator を使用して Discoverer システムを作成およびメンテナンスするには、特定の Discoverer 権限およびデータベース権限が必要です。

- EUL を作成するには、次の項目で説明されている権限が必要です。
 - 第3章「Oracle データベースにおける End User Layer の作成に必要な権限」
 - 第3章「End User Layer のメンテナンスに必要な権限」
- EUL を管理するには、次の権限が必要です。
 - EUL に対する「Discoverer 管理」権限

- 変更するビジネスエリアに対する「管理許可」権限
- ビジネスエリアに追加する表に対する SELECT データベース権限
- チュートリアルをインストールするには、『Oracle9i Discoverer Administrator チュートリアル』を参照してください。
- 次の Discoverer 機能を活用するには、固有の権限が必要です。
 - 自動サマリー管理（詳細は、[第 14 章の「ASM でサマリー・フォルダを作成するための前提条件」](#)を参照）
 - 手動サマリー・フォルダ作成（詳細は、[第 15 章の「Discoverer でサマリー・フォルダを手動で作成する前提条件」](#)を参照）

Discoverer システムを使用するには、エンド・ユーザーに特定の Discoverer 権限およびデータベース権限が必要です。

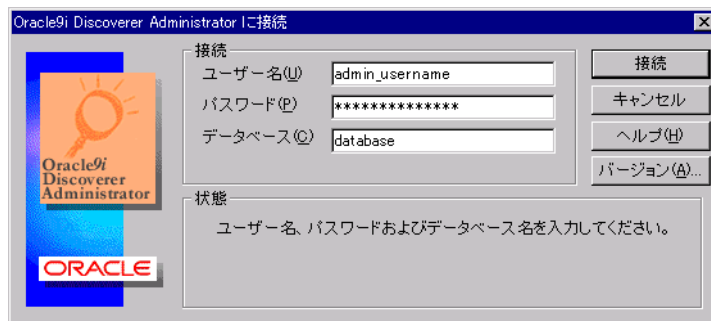
- 最低 1 つの EUL に対するアクセス権限
- EUL 内の最低 1 つのビジネスエリアに対するアクセス権限
- ビジネスエリアのフォルダの基礎となる表に対する SELECT データベース権限
- 次の Discoverer 機能を活用するには、固有の権限が必要です。
 - スケジュール済みワークブック（詳細は、[第 8 章の「ワークブックをスケジュールするための前提条件」](#)を参照）
 - ユーザー PL/SQL 関数（詳細は、[第 11 章の「ユーザー定義 PL/SQL 関数」](#)を参照）

Discoverer Administrator の開始方法

Discoverer Administrator を開始する手順は、次のとおりです。

1. Windows の「スタート」メニューで「プログラム」→「Oracle9i Developer Suite - <インスタンス名>」→「Discoverer Administrator」を選択すると、「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログが表示されます。

図 2-1 「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログ



2. 「ユーザー名」フィールドに、Discoverer Administrator を開始するデータベース・ユーザーの名前を入力します。
3. 「パスワード」フィールドに、Discoverer Administrator を開始するデータベース・ユーザーのパスワードを入力します。
4. 次のガイドラインに従って、接続するデータベースを「データベース」フィールドに指定します。
 - デフォルトの Oracle データベースにログインする場合、「データベース」フィールドには何も入力しないでください。
 - デフォルト以外の Oracle データベースにログインする場合は、データベース名を指定してください（名前がわからない場合は、データベース管理者に問い合わせてください）。
5. 「接続」ボタンをクリックして Discoverer Administrator を開始し、データベースに接続します。

次に表示されるプロンプトは、Discoverer システムによって異なります。

- 1 つ以上の EUL へのアクセス権を持っている場合は、新規ビジネスエリアを作成するか、デフォルト EUL で既存のビジネスエリアを開くように要求されます（詳細は、[第 4 章の「ビジネスエリアの作成とメンテナンス」](#)を参照してください）。
- EUL へのアクセス権がない場合（組織内で初めて Discoverer Administrator を使用する場合、あるいは既存 EUL に対する「管理」権限が付与されていない場合）は、

新規 EUL を作成するように要求されます（詳細は、[第 3 章の「既存データベース・ユーザーに対する End User Layer の作成方法」](#)を参照してください）。

注意

- 「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログには、「**Oracle Applications ユーザー**」チェックボックスが含まれている場合があります。Oracle Administrator を使用して EUL を管理し、Oracle Applications とともに使用する場合は、このチェックボックスを選択します。Oracle Applications とともに Discoverer を使用方法の詳細は、[第 17 章の「Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方法」](#)を参照してください。
- Discoverer Administrator は常にデフォルト EUL で開始します。デフォルト EUL は、「[オプション](#)」ダイアログ:「[デフォルト EUL](#)」タブで指定された EUL です。作業対象の EUL を変更する場合は、デフォルト EUL を変更してから Discoverer Administrator に再接続する必要があります。

ワークエリア

ワークエリアは、End User Layer へのビューです。ワークエリアで、次の項目を作成および編集して EUL をメンテナンスします。

- ビジネスエリアおよびフォルダ
- アイテム
- 階層
- アイテム・クラス
- サマリー・フォルダ

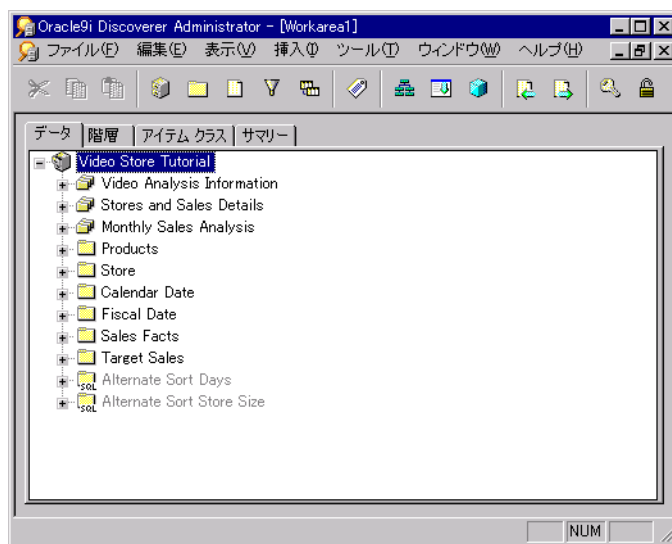
Discoverer Administrator のメイン・ウィンドウに「ワークエリア」ウィンドウが表示されます。一度に複数の「ワークエリア」ウィンドウを開くと、ビジネスエリア間でオブジェクトをコピーするときに便利です。ただし、すべての「ワークエリア」ウィンドウには同じビジネスエリアが含まれていることに注意してください。

「ワークエリア」ウィンドウのタブについて

「ワークエリア」ウィンドウには4つのタブがあります。

- 「データ」タブには、各ビジネスエリアの構造と内容が表示されます。「データ」タブでは、次の操作を実行できます。
 - ユーザー定義アイテムの作成
 - 複合フォルダの作成
 - 結合の作成
 - 条件の作成
 - ビジネスエリア、フォルダおよびアイテムの新規作成
 - オブジェクト・プロパティの変更

図 2-2 「ワークエリア」ウィンドウの「データ」タブ

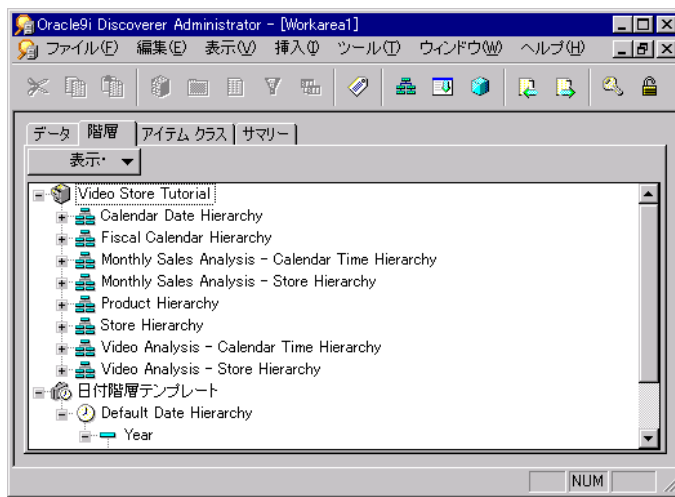


「データ」タブおよび表示されるアイコンの詳細は、「[「ワークエリア」：「データ」タブ](#)」を参照してください。

- 「階層」タブには、各ビジネスエリア内の階層が表示されます。「階層」タブでは、次の操作を実行できます。
 - 階層の新規作成
 - 既存階層の内容および編成の検討

- Discoverer Administrator で提供する階層テンプレートの表示
「階層」タブの「表示」ボタンを使用すると、表示する階層を指定できます。

図 2-3 「ワークエリア」ウィンドウの「階層」タブ

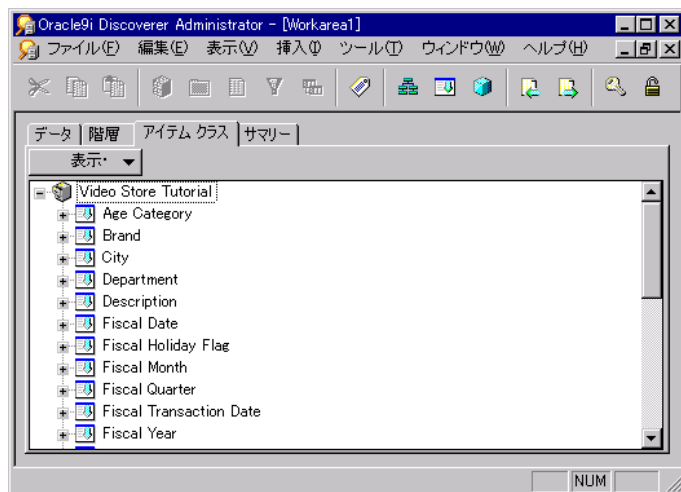


「階層」タブおよび表示されるアイコンの詳細は、「[「ワークエリア」：「階層」タブ](#)」を参照してください。

- 「アイテム クラス」タブには、各ビジネスエリア内のアイテム・クラスが表示されます。「アイテム クラス」タブでは、次の操作を実行できます。
 - アイテム・クラスの新規作成
 - アイテム・クラスに関連付けられた値リストの表示（存在する場合）
 - 各アイテム・クラスを使用するアイテムの表示
 - 詳細へのドリルおよび代替ソート属性を持つアイテム・クラスおよびそれらのオプションがアクティブかどうかの識別

「アイテム クラス」タブの「表示」ボタンを使用すると、表示するアイテム・クラスを指定できます。

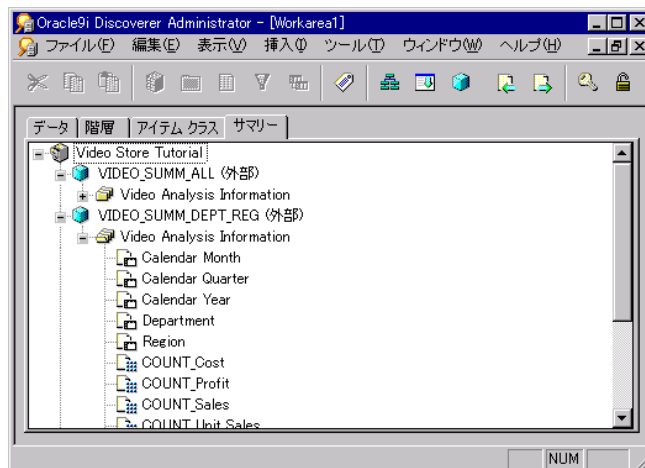
図 2-4 「ワークエリア」ウィンドウの「アイテム クラス」タブ



「アイテム クラス」タブおよび表示されるアイコンの詳細は、「[ワークエリア](#)」:「[アイテム クラス](#)」タブを参照してください。

- 「サマリー」タブには、各ビジネスエリア内のサマリー・フォルダが表示されます。「サマリー」タブでは、次の操作を実行できます。
 - サマリー・フォルダの新規作成
 - サマリー・フォルダの編成および定義の検討
 - サマリー・フォルダのリフレッシュ

図 2-5 「ワークエリア」ウィンドウの「サマリー」タブ



「サマリー」タブおよび表示されるアイコンの詳細は、「[「ワークエリア」：「サマリー」タブ](#)」を参照してください。

「ワークエリア」ウィンドウの状況依存メニューについて

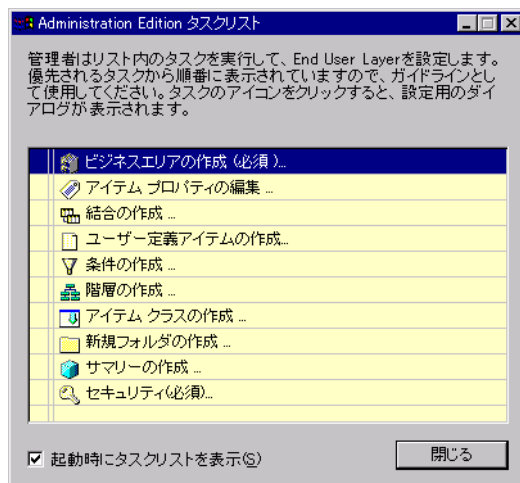
Discoverer Administrator での作業中にマウスの右ボタンをクリックすると、ポップアップ・メニューが表示されます。「ワークエリア」ウィンドウでは、このポップアップ・メニューの内容は現在選択されているオブジェクトで最も頻繁に使用されるコマンドとなります。

現在選択されているオブジェクトがない場合、ポップアップ・メニューにはビジネスエリア全般における作業用のコマンドと、現行のタブに適したコマンドが表示されます。

Administration Edition タスクリストについて

Discoverer Administrator を初めて開始すると、Discoverer Administrator のメイン・ウィンドウ上部に「Administration Edition タスクリスト」が表示されます。

図 2-6 Administration Edition タスクリスト



「Administration Edition タスクリスト」には、2通りの使用方法があります。

- ビジネスエリアの準備に関連する基本的な手順のリストとして使用
- リストされた作業に関連するダイアログを表示するショートカットとして使用

Discoverer Administrator のドキュメントとオンライン・ヘルプについて

Discoverer Administrator では、オンライン・ヘルプとドキュメントが提供されます。

Discoverer Administrator ヘルプ・システムにより、HTML 形式の管理ガイド情報を参照する状況依存アクセスが提供されます。

ヘルプ・システムを開始するには、「Discoverer」ダイアログの「ヘルプ」をクリックするか、「ヘルプ」→「トピックの検索」を選択します。

- 「Discoverer Administrator」ダイアログの「ヘルプ」ボタンにより、ダイアログのフィールドに詳細な状況依存ヘルプが表示されます。
- 「ヘルプ」→「トピックの検索」メニュー・オプションにより、状況依存ダイアログ・ヘルプを含む Oracle9i Discoverer Administrator ヘルプ・システムの内容が表示されます。
- 「ヘルプ」→「マニュアル」メニュー・オプションにより、使用可能な Discoverer マニュアルの一覧が表示されます。

ヘルプ・システムでトピックを検索する手順は、次のとおりです。

- 各ヘルプ・ページ上部にある「目次」アイコンをクリックするか、「ヘルプ」→「トピックの検索」を選択します（ヘルプ・システムのトピック・リストを表示）。
- 各ヘルプ・ページ上部にある「索引」アイコンをクリックすると、索引エントリのリストが表示されます。

管理ガイドを PDF 形式で表示（および印刷）するには、Oracle9iDS のドキュメント CD を使用してください。

ヒント: 語句を検索するには、PDF 形式の管理ガイドを使用します。

追加の Discoverer ドキュメントは、Oracle9iAS ドキュメント CD で入手できます。

End User Layer の作成とメンテナンス

End User Layer の作成とメンテナンス

この章では、Discoverer Administrator を使用して End User Layer を作成およびメンテナンスする方法について説明します。この章は、次のトピックで構成されています。

- End User Layer
- End User Layer 所有者
- Oracle データベースにおける End User Layer の作成に必要な権限
- End User Layer のメンテナンスに必要な権限
- EUL ゲートウェイ
- 既存データベース・ユーザーに対する End User Layer の作成方法
- 新規データベース・ユーザーに対する End User Layer の作成方法
- End User Layer の削除方法
- デフォルト End User Layer を表示または変更する方法
- エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピーについて
- 使用するエクスポート / インポート方法
- エクスポート・ウィザードによる EUL 全体のエクスポート方法
- エクスポート・ウィザードによる選択されたビジネスエリアのエクスポート方法
- エクスポート・ウィザードによる選択された EUL オブジェクトのエクスポート方法
- Discoverer コマンドライン・インタフェースによる（他のデータベースにインポートするための）End User Layer オブジェクトのエクスポート方法
- Discoverer コマンドライン・インタフェースによる（他のデータベースをエクスポートした後の）End User Layer オブジェクトのインポート方法
- 標準データベース・エクスポート・ユーティリティによる EUL のエクスポート方法
- 標準データベース・インポート・ユーティリティによる EUL のインポート方法
- インポート・ウィザードによるファイルからの EUL オブジェクトのインポート方法
- EUL の作成とメンテナンスに関する注意事項

End User Layer

End User Layer (EUL) とは、Discoverer エンド・ユーザーにとって理解しやすい単純なメタデータ（データベースの実際のデータに関するデータ）です。ユーザーが Discoverer のデータに簡単にアクセスできるように、Discoverer Administrator を使用してこのビューをユーザー用に作成、カスタマイズおよびメンテナンスします。Discoverer を使用するには、少なくとも 1 つの EUL に対するアクセス権が必要です。アクセス権は、[第 7 章の「情報に対するアクセス制御」](#)で説明する「権限」ダイアログによって付与されます。

End User Layer が便利な理由

EUL により、Discoverer エンド・ユーザーはデータベースに関連する複雑な概念から解放されます。Discoverer エンド・ユーザーが使い慣れた理解しやすい用語を使用して、直観的でビジネスに焦点が合ったデータベースのビューが提供されます。このため、Discoverer エンド・ユーザーはデータ・アクセスの問題ではなくビジネスの問題に集中できます。

- EUL に含まれるもの

EUL には、1 つ以上のビジネスエリアを定義するメタデータが含まれています。ビジネスエリアとは、ユーザー固有のデータ要件に当てはまる表またはビュー（あるいはその両方）の概念上のグループ化です。ビジネスエリアは、EUL にアクセスするユーザーまたはユーザー・グループのニーズを反映するように設定できます。

たとえば、会計部門が予算と財務に関するデータを表す会計ビジネスエリアを持ち、エンジニアリング部門のプロジェクト・リーダーが予算情報が必要とするプロジェクト専用のビジネスエリアを持つ場合について考えます。一部の列は同一でも、各部門の表とビューの正確な組合せは異なる可能性があります。

- Discoverer による EUL 表の作成

「EUL マネージャ」ダイアログでは、EUL を構成する表のセットを作成または削除できます。

Discoverer 管理者が Discoverer Administrator を使用してビジネスエリアにフォルダとアイテムを定義すると、Discoverer は適切な SQL 文（表、ビューまたは列からの選択を定義する）を生成して EUL 表に格納します。Discoverer エンド・ユーザーが（Discoverer Desktop/Plus または Discoverer Viewer で）問合せを実行すると、Discoverer は対応する SQL 文を生成してデータベースに送信し、データベースが結果を返して Discoverer に表示します。Discoverer エンド・ユーザーは、データに対するアクセス、分析および取出しを行うために SQL を理解する必要はありません。すべて Discoverer によって処理されます。

- Discoverer による EUL オブジェクトのエクスポート / インポート

1 つのデータベースから EUL オブジェクト（ビジネスエリア、ワークブック、フォルダ、アイテムなど）をエクスポートして、別のデータベースにインポートできます。たとえば、開発環境から本番環境に推移する際に EUL オブジェクトを移動する場合について考えます。

EUL および EUL オブジェクトは、次の方法でインポートおよびエクスポートできます。

- 「エクスポート」または「インポート」メニュー・オプションの使用（詳細は、[第4章の「ビジネスエリアの作成とメンテナンス」](#)を参照）
- Discoverer コマンドライン・インタフェースの使用

注意：EUL はデータベースのデータ整合性を保持します。Discoverer での Discoverer エンド・ユーザーの操作は、データベースのアプリケーション・データに影響しません。

Discoverer は EUL で保持されるメタデータにのみ影響します。ただし、データベースのデータに影響する特定の PL/SQL 関数も存在します（詳細は、データベース管理者に問い合せてください）。

End User Layer 所有者

End User Layer 所有者とは、EUL の作成対象となるデータベース・ユーザーです。

1 人のデータベース・ユーザーが所有できる EUL は、1 つのみです。自分の EUL に接続している場合に新規 EUL を作成しようとする、Discoverer Administrator によって既存の EUL を削除するようにプロンプトが表示されます。すでに EUL を所有しているデータベース・ユーザー用に EUL を作成する場合は、Discoverer Administrator によって既存の EUL を削除してから新規 EUL を作成するようにプロンプトが表示されます。

EUL 所有者は各自の EUL をメンテナンスおよび変更し、他のユーザーに対して EUL へのアクセス権を付与できます。付与される権限に応じて、他のユーザーは EUL を使用したり、その EUL を変更できます。

EUL の作成時には、アクセス権を持つユーザーを次のように指定します。

- データベースのすべてのユーザー（PUBLIC アクセス）
- EUL 所有者のみ（PRIVATE アクセス）

既存 EUL へのアクセス権を変更する場合は、その EUL の所有者あるいは次の Discoverer 作業権限を持つユーザーとしてログインする必要があります。

- 管理者
- 権限の設定

詳細は、[第7章の「情報に対するアクセス制御」](#)を参照してください。

Oracle データベースにおける End User Layer の作成に必要な権限

Oracle データベースで End User Layer を作成するには、EUL の作成対象となるデータベース・ユーザーに次のデータベース権限が必要となります。

- CREATE SESSION
- CREATE TABLE
- CREATE VIEW
- CREATE SEQUENCE
- CREATE PROCEDURE

また、データベース・ユーザーには次の項目も指定する必要があります。

- デフォルト表領域（一時表領域は指定しないでください）
- デフォルト表領域に設定された割当て制限（推奨最小値は 3MB）

デフォルト表領域の詳細は、「[EUL 作成ウィザード ステップ 2 ダイアログ](#)」を参照してください。

Oracle8.1.6 以上のデータベースで Discoverer を実行している場合、データベース・ユーザーは Discoverer の手動サマリー管理および自動サマリー管理（ASM）機能を使用するために追加の権限が必要です。詳細は、次の項目を参照してください。

- [第 14 章「ASM でサマリー・フォルダを作成するための前提条件」](#)
- [第 15 章「Discoverer でサマリー・フォルダを手動で作成する前提条件」](#)

「EUL マネージャ」ダイアログでは、次の操作を実行できます。

- データベース・ユーザーが前述の条件を満たしている場合の、既存 Oracle データベース・ユーザーに対する EUL の作成
- （新規ユーザーを作成するユーザーが）次のデータベース権限を持っている場合の、新規 Oracle データベース・ユーザーに対する EUL の作成
 - CREATE USER
 - GRANT ANY PRIVILEGE

新規 Oracle データベース・ユーザーに対して EUL を作成する場合、Discoverer によって必要な権限が付与され、デフォルト表領域と割当て制限が設定されます。

End User Layer のメンテナンスに必要な権限

データベース・ユーザーに管理権限がある場合は、Discoverer Administrator で EUL をメンテナンスできます。

データベース・ユーザーに管理権限を適用するには、[第 7 章の「特定の作業を実行するユーザーまたはロール（職責）の指定方法」](#)を参照してください。

EUL ゲートウェイ

EUL ゲートウェイでは、Discoverer で Oracle9i Designer などの他のソースのメタデータを EUL に移入する方法が提供されます。EUL ゲートウェイを使用すると、他のツールまたはアプリケーションで定義されたメタデータを EUL に直接ロードできます。

EUL ゲートウェイを設定するには、<ORACLE_HOME>\%discoverer902\kits ディレクトリにあるドキュメント `eulgatew.doc` を参照してください。

EUL ゲートウェイからビジネスエリアをロードする方法の詳細は、[第 4 章の「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」](#)を参照してください。

既存データベース・ユーザーに対する End User Layer の作成方法

既存データベース・ユーザーに対して EUL を作成する手順は、次のとおりです。

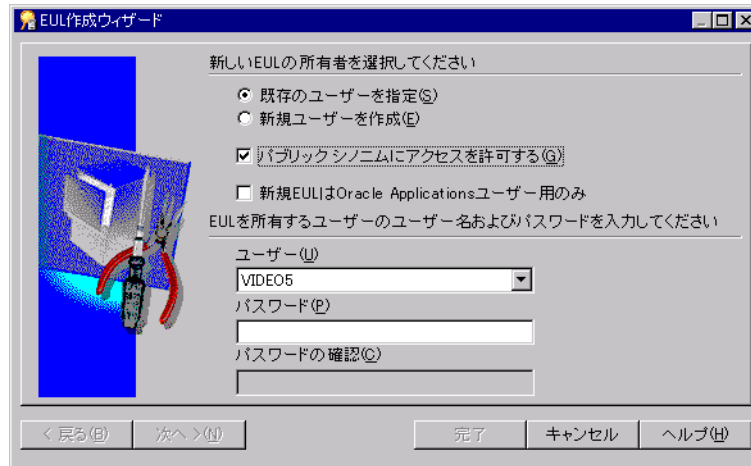
1. 「ツール」→「EUL マネージャ」を選択すると、[「EUL マネージャ」ダイアログ](#)が表示されます。

図 3-1 「EUL マネージャ」ダイアログ



2. 「新しい EUL を作成 ...」をクリックすると、「EUL 作成ウィザード」ダイアログが表示されます。

図 3-2 「EUL 作成ウィザード」



3. 「既存のユーザーを指定」ラジオ・ボタンを選択します。
4. 必要に応じて、「パブリック シノニムにアクセスを許可する」チェックボックスを選択または選択解除します。
 - 現行データベースのすべてのユーザーに新規 EUL へのアクセスを許可する場合は、このチェックボックスを選択します。
 - 新規 EUL によるデータの表示を EUL 所有者にのみ許可する場合は、このチェックボックスを選択解除します。
5. 必要に応じて、「新規 EUL は Oracle Applications ユーザー用のみ」チェックボックスを選択または選択解除します。
 - 新規 EUL の使用を Oracle Applications ユーザーのみに制限する場合は、このチェックボックスを選択します（アプリケーション・モード EUL の詳細は、[第 17 章の「Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方法」](#)を参照してください）。
 - 標準 EUL を作成する場合は、このチェックボックスを選択解除します。
6. 「ユーザー」ドロップダウン・リストから、新規 EUL を所有するデータベース・ユーザーを選択します。
7. 現行ユーザー以外のデータベース・ユーザーを EUL 所有者に指定した場合は、データベース・ユーザーのパスワードを指定する必要があります。

8. 「完了」をクリックします。

Discoverer Administrator によって「コミット状態」進行状況バーが表示され、指定されたデータベース・ユーザーに対して新規 EUL が作成されます。

新規 EUL が作成されると、新規 EUL に Discoverer のチュートリアルをインストールするオプションが Discoverer によって提供されます。詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator チュートリアル』を参照してください。

新規データベース・ユーザーに対する End User Layer の作成方法

注意：この機能は、Oracle 以外のデータベースでは使用できません。Oracle 以外のデータベースを使用している場合は、データベース管理者に連絡してデータベースに必要なユーザー ID を作成するよう依頼してください。

新規データベース・ユーザーに対する EUL の作成に必要な権限の詳細は、「[Oracle データベースにおける End User Layer の作成に必要な権限](#)」を参照してください。

新規データベース・ユーザーに EUL を作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「EUL マネージャ」を選択すると、「[EUL マネージャ](#)」ダイアログが表示されます。
2. 「新しい EUL を作成 ...」をクリックすると、「[EUL 作成ウィザード](#)」ダイアログが表示されます。
3. 「**新規ユーザーを作成**」ラジオ・ボタンを選択します。
「**新規ユーザーを作成**」ラジオ・ボタンが使用できない場合は、データベース管理者に連絡して CREATE USER 権限の付与を依頼してください。
4. 必要に応じて、「**パブリック シノニムにアクセスを許可する**」チェックボックスを選択または選択解除します。
 - 現行データベースのすべてのユーザーに新規 EUL へのアクセスを許可する場合は、このチェックボックスを選択します。
 - 新規 EUL によるデータの表示を EUL 所有者にのみ許可する場合は、このチェックボックスを選択解除します。
5. 必要に応じて、「**新規 EUL は Oracle Applications ユーザー用のみ**」チェックボックスを選択または選択解除します。
 - 新規 EUL の使用を Oracle Applications ユーザーのみに制限する場合は、このチェックボックスを選択します（アプリケーション・モード EUL の詳細は、[第 17 章の「Oracle Applications」](#)を参照してください）。
 - 標準 EUL を作成する場合は、このチェックボックスを選択解除します。

6. 「ユーザー」フィールドに新規データベース・ユーザーの名前を指定します。
7. 「パスワード」フィールドに新規データベース・ユーザーのパスワードを指定します。
8. 「パスワードの確認」フィールドに、新規データベース・ユーザーのパスワードを再度指定します。
9. 「次へ」をクリックすると、「EUL 作成ウィザード ステップ 2」ダイアログが表示されます。

図 3-3 「EUL 作成ウィザード ステップ 2」ダイアログ



10. 新規データベース・ユーザーのデフォルト表領域および一時表領域を指定します。
どれを選択するか不明な場合は、データベース管理者に問い合わせてください。詳細は、「EUL 作成ウィザード ステップ 2」ダイアログを参照してください。
11. 「完了」をクリックします。

Discoverer Administrator によって「コミット状態」進行状況バーが表示され、新規データベース・ユーザーとそのデータベース・ユーザーに対する新規 EUL が作成されます。

新規データベース・ユーザーと EUL が作成されると、新規 EUL に Discoverer のチュートリアルをインストールするオプションが Discoverer によって提供されます。詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator チュートリアル』を参照してください。

End User Layer の削除方法

様々な理由から、EUL の削除が必要になる場合があります。たとえば、古い EUL やテスト EUL の場合です。

注意：削除する EUL の所有者として接続する必要があります。

EUL を削除する手順は、次のとおりです。

1. 「ファイル」→「接続」を選択すると、「**Oracle9i Discoverer Administrator に接続**」ダイアログが表示されます。
2. 削除する EUL の所有者のユーザー名、パスワードおよび接続文字列を指定して「接続」をクリックすると、「**ロードウィザードステップ 1**」ダイアログが表示されます。
3. 「キャンセル」をクリックしてロード・ウィザードを終了します。
4. 「ツール」→「EUL マネージャ」を選択します。

5. 「既存の EUL を削除」をクリックすると、「**EUL の削除**」ダイアログが表示されます。

現在の EUL を削除するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

6. 「EUL」フィールドに指定された EUL が削除対象の EUL であることを確認して、「OK」をクリックします。

表示された EUL 名が正しくない場合はステップ 2 に戻って、正しい接続文字列を使用して EUL 所有者として接続します。

「OK」をクリックすると、データベースのすべての EUL 表、すべての EUL 情報およびワークブックと、すべてのサマリー・データとサマリー情報を削除するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

7. 「はい」をクリックして続行します。
8. 「OK」をクリックして EUL を削除します。

Discoverer によって、現行データベース・ユーザーの EUL オブジェクトが削除されません。

デフォルト End User Layer を表示または変更する方法

現行データベース・ユーザーのデフォルト EUL（つまり、現行データベース・ユーザーが Discoverer Administrator に接続するときに使用される EUL）を表示したり、どの EUL をデフォルト EUL にするかを変更できます。

注意：データベース・ユーザーが複数の EUL へのアクセス権を持っている場合は、代替 EUL のみを選択できます。

デフォルト EUL を表示または変更する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「オプション」→「デフォルト EUL」タブを選択すると、「オプション」ダイアログ：「デフォルト EUL」タブが表示されます。
2. （オプション）次に現行データベース・ユーザーとして接続するときに使用する EUL をクリックして、「OK」をクリックします。

エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピーについて

通常は、次の操作を行います。

- EUL のバックアップまたはアーカイブ
- 他の場所への EUL の配布
- EUL 間のビジネスエリアのコピー（詳細は、第 4 章の「EUL 間のビジネスエリアのコピー方法」を参照してください）
- 1 つの EUL から他の EUL への EUL オブジェクト（ビジネスエリア、フォルダ、階層、ユーザー定義アイテムなど）のコピー
- 本番環境へのパッチの適用

次の操作を行うかどうかに応じて、EUL および EUL オブジェクトをコピーする方法が異なります。

- 指定された EUL オブジェクトの他の EUL へのコピー
- EUL 全体のコピーと新規 EUL としての再作成
- EUL 所有者であるデータベース・ユーザーのコピー

3 つのケースいずれの場合も、インポート操作の後にエクスポート操作を実行します。詳細は、「使用するエクスポート / インポート方法」を参照してください。

Discoverer Administrator を使用して EUL または EUL オブジェクトをエクスポートする場合は、Discoverer EUL エクスポート・ファイルを（拡張子 .EEX で）作成します。.EEX ファイルを作成すると、次に Discoverer Administrator を使用して .EEX ファイルをインポートできます。

次のような .EEX ファイルをインポートできることに注意してください。

- リリース 3.1 以下の Discoverer からエクスポートされた .EEX ファイル
- リリース 4.1 以上の Discoverer からエクスポートされた .EEX ファイル（拡張子は .EEX ですが、これらの EUL エクスポート・ファイルは XML 形式です）

使用するエクスポート / インポート方法

EUL 間で EUL オブジェクトをコピーするには、まず EUL オブジェクトをファイルにエクスポートしてから、新規 EUL または新規データベースにインポートします。

次のものを使用して、EUL 間で EUL オブジェクトをコピーします。

- Discoverer エクスポート・ウィザードおよびインポート・ウィザード（詳細は、「[Discoverer のエクスポート・ウィザードおよびインポート・ウィザードの使用について](#)」を参照）
- Discoverer コマンドライン・インタフェース（詳細は、「[Discoverer コマンドライン・インタフェースによる EUL オブジェクトのエクスポート / インポートについて](#)」を参照）
- 標準データベース・エクスポート / インポート・コマンド（詳細は、「[標準データベース・エクスポート / インポート・コマンドによる EUL 所有者のエクスポート / インポートについて](#)」を参照）

Discoverer のエクスポート・ウィザードおよびインポート・ウィザードの使用について

Discoverer のエクスポート・ウィザードを使用して、EUL オブジェクトを EUL エクスポート・ファイル（拡張子 .EEX）にエクスポートします。オブジェクトをエクスポートすると、次に Discoverer のインポート・ウィザードを使用して .EEX ファイルをインポートできます。

（.EEX ファイルに）エクスポートする EUL オブジェクトには、ビジネスエリア、フォルダ、アイテム階層、日付階層、アイテム・クラス、ワークブック定義（Discoverer Desktop および Discoverer Plus で作成）、PL/SQL 関数登録情報、サマリー・フォルダおよび自動サマリー管理（ASM）ポリシーが含まれます。

Discoverer のユーザー・インタフェースによる EUL オブジェクトのエクスポートまたはインポート方法については、次のトピックを参照してください。

- [エクスポート・ウィザードによる EUL 全体のエクスポート方法](#)
- [エクスポート・ウィザードによる選択されたビジネスエリアのエクスポート方法](#)
- [エクスポート・ウィザードによる選択された EUL オブジェクトのエクスポート方法](#)
- [インポート・ウィザードによるファイルからの EUL オブジェクトのインポート方法](#)

注意

エクスポート・ウィザードでは、データベース、EUL 表または EUL によって参照されるデータベース・オブジェクトはエクスポートされません。これらのオブジェクトをエクスポートするには、「[標準データベース・エクスポート・ユーティリティによる EUL のエクスポート方法](#)」のステップに従う必要があります。

Discoverer コマンドライン・インタフェースによる EUL オブジェクトのエクスポート / インポートについて

Discoverer コマンドライン・インタフェースを使用して、Discoverer のユーザー・インタフェースを使用せずに EUL オブジェクトをエクスポート / インポートします。Discoverer コマンドライン・インタフェースの詳細は、[第 21 章の「Discoverer コマンドライン・インタフェース」](#)を参照してください。

Discoverer コマンドライン・インタフェースによる EUL オブジェクトのエクスポートおよびインポート方法については、次のトピックを参照してください。

- 「[Discoverer コマンドライン・インタフェースによる（他のデータベースにインポートするための）End User Layer オブジェクトのエクスポート方法](#)」
- 「[Discoverer コマンドライン・インタフェースによる（他のデータベースをエクスポートした後の）End User Layer オブジェクトのインポート方法](#)」

注意：Discoverer コマンドライン・インタフェースのエクスポート機能では、データベース、EUL 表または EUL 定義によって参照されるデータベース・オブジェクトはエクスポートされません。これらのオブジェクトをエクスポートするには、「[標準データベース・インポート・ユーティリティによる EUL のインポート方法](#)」のステップに従う必要があります。

標準データベース・エクスポート / インポート・コマンドによる EUL 所有者のエクスポート / インポートについて

標準データベース・エクスポート / インポート・コマンドを使用して、データベース、EUL 表および EUL 定義によって参照されるデータベース・オブジェクトをエクスポート / インポートします。

次の作業を実行して、EUL オブジェクトをデータベース間でエクスポート / インポートします。

- [標準データベース・エクスポート・ユーティリティによる EUL のエクスポート方法](#)
- [標準データベース・インポート・ユーティリティによる EUL のインポート方法](#)

EUL のエクスポート方法またはインポート方法は、次の項目に応じて異なります。

- ユーザーのマシンにインストールされている Oracle クライアント・ソフトウェアのバージョン
- EUL が常駐する Oracle データベースのバージョン

Oracle データベースのバージョンとユーザーのマシンにインストールされた Oracle データベース・クライアント・ソフトウェアのバージョンを同じにすることをお勧めします。バージョンが異なる場合（EUL が Oracle8i データベースにあり、Oracle9i クライアント・ソフトウェアがマシンにインストールされている場合など）、以降の指示に従うことができない可能性があります。EUL をエクスポートできない場合は、データベース管理者に連絡し、EUL をエクスポートするように依頼してください。

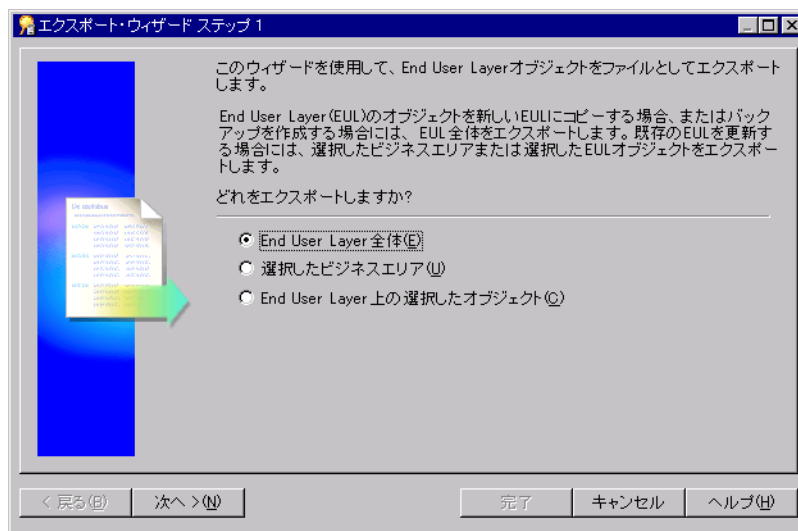
エクスポート・ウィザードによる EUL 全体のエクスポート方法

このオプションは、EUL のオブジェクトを新規 EUL にコピーするとき、あるいはバックアップを作成するときに EUL 全体をファイルにエクスポートする場合に使用します。

エクスポート・ウィザードを使用して EUL 全体をエクスポートする手順は、次のとおりです。

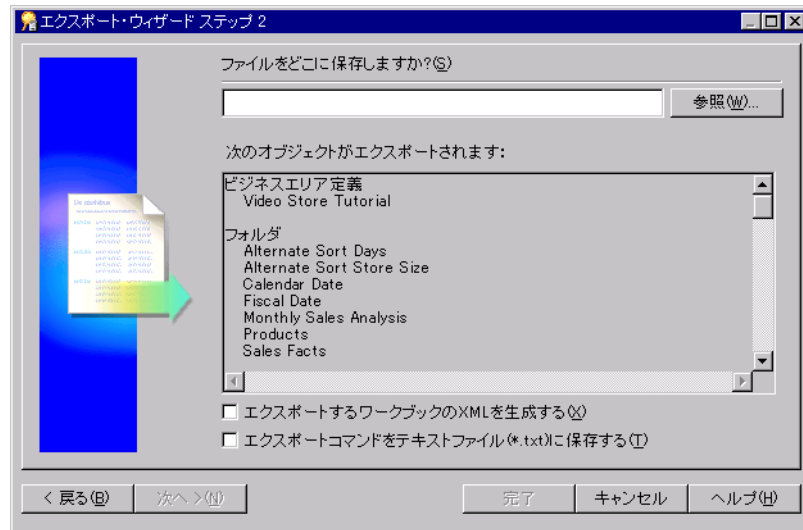
1. 「ファイル」→「エクスポート」を選択すると、「エクスポート・ウィザード ステップ 1」ダイアログが表示されます。

図 3-4 「エクスポート・ウィザードステップ 1」ダイアログ



2. 「End User Layer 全体」ラジオ・ボタンを選択して「次へ」をクリックすると、「エクスポート・ウィザード ステップ 2」ダイアログが表示されます。

図 3-5 「エクスポート・ウィザード ステップ 2」ダイアログ



前述のダイアログを使用して、エクスポート・ファイルの名前と場所を指定します。

3. 「参照」をクリックすると、「名前を付けて保存」ダイアログが表示されます。
このダイアログで、EUL エクスポート・ファイルを保存する場所を参照できます。
4. エクスポートする EUL の適切な名前を入力します。
5. (オプション)「エクスポートするワークブックの XML を生成する」チェックボックスを選択して、XML 形式のワークブック定義をすべて保存します。

これによって、ワークブック定義を XML ブラウザで表示できます。

注意: エクスポート・ファイル (*.eex) は常に XML 形式ですが、時間と場所を節約するため、ワークブックはデフォルトではエクスポート・ファイル内部にバイナリ形式で保存されます。ワークブック定義をエクスポート・ファイル内部に XML として追加保存するには、このチェックボックスを選択します。

6. (オプション)「エクスポートコマンドをテキストファイル (*.txt) に保存する」チェックボックスを選択して、このエクスポートを作成したエクスポート・コマンドをテキスト・ファイルに保存します。

これによって、このエクスポート作成に使用されたコマンドを含む追加ファイルが作成され、ファイル拡張子 .txt が適用されます。その後、このファイルはコマンドライン・

インタフェースと併用できるようになります（コマンドライン・インタフェースの詳細は、第 21 章の「[Discoverer コマンドライン・インタフェース](#)」を参照してください）。

7. 「完了」をクリックすると、指定された場所にエクスポート・ファイル（および選択された追加ファイル）が作成され、「エクスポートのログ」が表示されます。

図 3-6 「エクスポートのログ」 ダイアログ



「エクスポートのログ」には、エクスポート内容の情報が表示されます。

8. （オプション）「保存」をクリックして名前と場所を指定し、ログ・ファイルを保存します。
9. 「閉じる」をクリックして完了します。

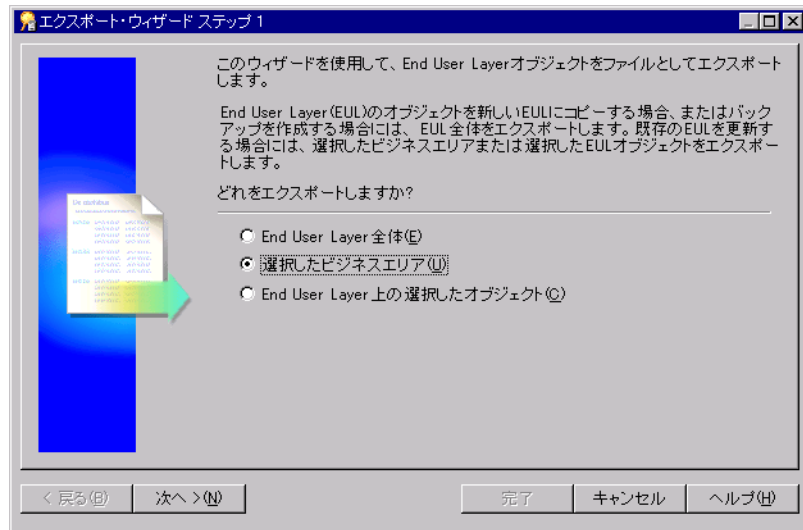
エクスポート・ウィザードによる選択されたビジネスエリアのエクスポート方法

このオプションは、エクスポート・ファイルを使用して、既存 EUL を選択したビジネスエリアで更新する場合に使用します。

エクスポート・ウィザードを使用して選択したビジネスエリアをエクスポートする手順は、次のとおりです。

1. 「ファイル」→「エクスポート」を選択すると、「エクスポート・ウィザード ステップ 1」ダイアログが表示されます。

図 3-7 「エクスポート・ウィザード ステップ 1」ダイアログ



2. 「選択したビジネスエリア」ラジオ・ボタンを選択して「次へ」をクリックすると、「エクスポート・ウィザード ステップ 2」ダイアログが表示されます。
3. エクスポートするビジネスエリアを「選択可能」リストから「選択済み」リストに移動します。
[Ctrl] キーを押しながら他のビジネスエリアをクリックすると、一度に複数のビジネスエリアを選択できます。
4. 「次へ」をクリックすると、「エクスポート・ウィザード ステップ 3」ダイアログが表示されます。

5. 「参照」をクリックすると、「名前を付けて保存」ダイアログが表示されます。

このダイアログで、ビジネスエリアのエクスポート・ファイルを保存する場所を参照できます。

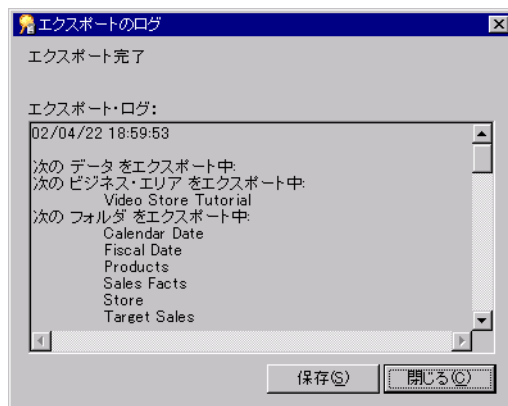
6. エクスポートするビジネスエリアの適切な名前を入力します。

7. (オプション)「エクスポートコマンドをテキストファイル (*.txt) に保存する」チェックボックスを選択して、このエクスポートを作成したエクスポート・コマンドをテキスト・ファイルに保存します。

これによって、このエクスポート作成に使用されたコマンドを含む追加テキスト・ファイルが作成され、ファイル拡張子 .txt が適用されます。その後、このファイルはコマンドライン・インタフェースと併用できるようになります (コマンドライン・インタフェースの詳細は、[第 21 章の「Discoverer コマンドライン・インタフェース」](#)を参照してください)。

8. 「完了」をクリックすると、指定された場所にエクスポート・ファイル (および選択された追加ファイル) が作成され、「エクスポートのログ」が表示されます。

図 3-8 「エクスポートのログ」ダイアログ



「エクスポートのログ」には、エクスポート内容の情報が表示されます。

9. (オプション)「保存」をクリックして名前と場所を指定し、ログ・ファイルを保存します。
10. 「閉じる」をクリックして完了します。

注意: EUL 間でビジネスエリアをコピーしている場合は、[第 4 章の「EUL 間のビジネスエリアのコピー方法」](#)で説明されている作業のステップ 2 に進んでください。

エクスポート・ウィザードによる選択された EUL オブジェクトのエクスポート方法

このオプションは、エクスポート・ファイルを使用して、既存 EUL を選択した EUL オブジェクトで更新する場合に使用します。たとえば、運用中のビジネスエリアに小規模な変更を適用するときなどです。

エクスポート・ウィザードを使用して選択したオブジェクトをエクスポートする手順は、次のとおりです。

1. 「ファイル」→「エクスポート」を選択すると、「エクスポート・ウィザード ステップ 1」ダイアログが表示されます。
2. 「End User Layer 上の選択したオブジェクト」オプションを選択して「次へ」をクリックすると、「エクスポート・ウィザード ステップ 2」ダイアログが表示されます。

図 3-9 「エクスポート・ウィザード ステップ 2」ダイアログ



3. 「どのオブジェクトをエクスポートしますか?」ドロップダウン・リストを使用して、ファイルにエクスポートするオブジェクト（EUL オブジェクト）を表示します。

たとえば、フォルダ、アイテム・クラスおよびアイテム階層です。

注意：前述のビジネスエリアを選択すると、Discoverer ではビジネスエリアの定義のみがエクスポートされ、フォルダとアイテムはエクスポートされません。ビジネスエリアのフォルダとアイテムをエクスポートするには、明示的に選択する必要があります。

4. エクスポートするオブジェクトを「**選択可能**」リストから「**選択済み**」リストに移動します。

[Ctrl] キーを押しながら他のオブジェクトをクリックすると、一度に複数のオブジェクトを選択できます。

5. 「次へ」をクリックすると、「**エクスポート・ウィザード ステップ 3**」ダイアログが表示されます。

6. 「参照」をクリックすると、「名前を付けて保存」ダイアログが表示されます。

このダイアログで、エクスポート・ファイルを保存する場所を参照できます。

7. エクスポートするオブジェクトの適切な名前を入力します。

8. (オプション)「**エクスポートするワークブックの XML を生成する**」チェックボックスを選択して、XML 形式のワークブックをすべて保存します。

注意：エクスポート・ファイル (*.eex) は常に XML 形式ですが、時間と場所を節約するため、ワークブックはデフォルトではエクスポート・ファイル内部にバイナリ形式で保存されます。ワークブック定義をエクスポート・ファイル内部に XML として追加保存するには、このチェックボックスを選択します。

9. (オプション)「**エクスポートコマンドをテキストファイル (*.txt) に保存する**」チェックボックスを選択して、このエクスポートを作成したエクスポート・コマンドをテキスト・ファイルに保存します。

これによって、このエクスポート作成に使用されたコマンドを含む追加テキスト・ファイルが作成され、拡張子 .txt が適用されます。その後、このファイルはコマンドライン・インタフェースと併用できるようになります (コマンドライン・インタフェースの詳細は、[第 21 章の「Discoverer コマンドライン・インタフェース」](#)を参照してください)。

10. 「完了」をクリックすると、指定された場所にエクスポート・ファイル (および選択された追加ファイル) が作成され、「エクスポートのログ」が表示されます。

図 3-10 「エクスポートのログ」 ダイアログ



「エクスポートのログ」には、エクスポート内容の情報が表示されます。

11. (オプション)「保存」をクリックして名前と場所を指定し、ログ・ファイルを保存します。
12. 「閉じる」をクリックして完了します。

Discoverer コマンドライン・インタフェースによる（他のデータベースにインポートするための）End User Layer オブジェクトのエクスポート方法

コマンドライン・インタフェースを使用して、EUL オブジェクトを Discoverer エクスポート・ファイル (.EEX) にエクスポートし、次に .EEX ファイルを他のデータベースにインポートすると、EUL オブジェクトを 1 つのデータベースから他のデータベースにコピーできます。これは、1 つのデータベースから他のデータベースへの EUL オブジェクトのコピーを可能にする 2 つの作業のうち、最初の作業です。EUL オブジェクトを他のデータベースにインポートするには、このエクスポート作業を完了する必要があります。

Discoverer コマンドライン・インタフェースを使用してデータベースから EUL オブジェクトをエクスポートする手順は、次のとおりです。

1. Discoverer コマンドライン・インタフェースの `/export` オプションを使用して、必要な EUL オブジェクトを Discoverer エクスポート・ファイル (.EEX) にエクスポートします。

たとえば、Video Store Tutorial ビジネスエリアと 2 つのワークブック（「Vistr4 - Video Tutorial Workbook」および「Vidaf4 - Analytic Function Examples」）を Vidstr.eex ファイルにエクスポートするには、次のように入力します。

```
<ORACLE_HOME>%discoverer902%bin%dis51adm.exe /connect  
eulowner/eulowner@orcl.world /export "D:%Vidstr.eex" "Video Store Tutorial"  
/workbook "Vistr4 - Video Tutorial Workbook" /workbook "Vidaf4 - Analytic  
Function Examples"
```

Discoverer コマンドライン・インタフェースによる EUL オブジェクトのエクスポートの詳細は、[第 21 章の「/export \(EUL オブジェクト\)」](#)を参照してください。

注意

EUL オブジェクトを他のデータベースにコピーする方法については、[「Discoverer コマンドライン・インタフェースによる（他のデータベースをエクスポートした後の）End User Layer オブジェクトのインポート方法」](#)を参照してください。

Discoverer コマンドライン・インタフェースによる（他のデータベースをエクスポートした後の）End User Layer オブジェクトのインポート方法

EUL オブジェクトを新規データベースにインポートできます。この作業を完了する前に、EUL オブジェクトを Discoverer エクスポート・ファイル（.EEX）にエクスポートする必要があります（詳細は、「Discoverer コマンドライン・インタフェースによる（他のデータベースにインポートするための）End User Layer オブジェクトのエクスポート方法」を参照してください）。これは、1 つのデータベースから他のデータベースへの EUL オブジェクトのコピーを可能にする 2 つの作業のうち、2 番目の作業です。

Discoverer コマンドライン・インタフェースを使用してデータベースに End User Layer オブジェクトをインポートする手順は、次のとおりです。

1. Discoverer コマンドライン・インタフェースの /import オプションを使用して、新規データベースの新規 EUL 所有者に EUL オブジェクトをインポートします。

たとえば、前述の方法で作成された Vidstr.eex ファイルをインポートするには、次のように入力します。

```
<ORACLE_HOME>%discoverer902%bin%dis51adm.exe /connect
eulowner/eulowner@orcl.world /import "D:%Vidstr.eex"
```

Discoverer コマンドライン・インタフェースによる EUL オブジェクトのインポートの詳細は、第 21 章の「/import (EUL オブジェクト)」を参照してください。

標準データベース・エクスポート・ユーティリティによる EUL のエクスポート方法

エクスポートにより、すべてのビジネスエリア、EUL 表および保存されたワークブックが .dmp ファイルに移動します。

標準データベース・エクスポート・ユーティリティを使用して EUL をエクスポートする手順は、次のとおりです（EUL が Oracle9i データベースに常駐しており、Oracle9iDS がインストール済みのマシンを使用していることを前提とします）。

1. コマンドライン・ウィンドウを表示します（例：Windows の「スタート」メニューから「コマンドプロンプト」を選択）。
2. <ORACLE_HOME>%discoverer902 ディレクトリに移動します。

たとえば、<ORACLE_HOME> ディレクトリが D:%ORACLE9i で、MS-DOS ウィンドウが現在 C: を表示している場合は、次のようになります。

- 「D:」と入力して [Enter] を押す
- 「cd %ORACLE9i%discoverer902」と入力して [Enter] を押す

3. 次のコマンドを入力します。

```
exp <eulowner>/<password>@<dbname> file=<filename.dmp> owner=<eulowner>
```

たとえば、データベース・ユーザー **hrmgr** が所有する EUL を **hreul.dmp** ファイルにエクスポートするには、次のように入力します。

```
exp hrmgr/hrpswr@HRDB file=hreul.dmp owner=hrmgr
```

EUL 表（および関連するシノニム、ビューおよび他の定義）が <ORACLE_HOME>%discoverer902 ディレクトリの指定された .dmp ファイルにエクスポートされます。

エクスポートが完了すると、次のメッセージが表示されます。

「エクスポートは警告なしで正常に終了しました。」

4. コマンドライン・ウィンドウを閉じます。

EUL がバックアップされ、EUL を新規データベース・ユーザーにインポートする準備が整いました。

標準データベース・インポート・ユーティリティによる EUL のインポート方法

データベースのダンプ・ファイル (.DMP) から、EUL ビジネスエリア、EUL 表および保存済みワークブックが新規データベースの新規 EUL 所有者にインポートされます。

注意：このデータベース・ユーザーには他の表を所有させないことをお勧めします。

標準データベース・インポート・ユーティリティを使用して EUL をインポートする手順は、次のとおりです（EUL が Oracle9i データベースに常駐しており、Oracle9iDS がインストール済みのマシンを使用していることを前提とします）。

1. コマンドライン・ウィンドウを表示します（例：Windows の「スタート」メニューから「コマンドプロンプト」を選択）。

2. <ORACLE_HOME>%discoverer902 ディレクトリに移動します。

たとえば、<ORACLE_HOME> ディレクトリが D:\ORACLE9i で、MS-DOS ウィンドウが現在 C: を表示している場合は、次のようにします。

- 「D:」と入力して [Enter] を押す
- 「cd %ORACLE9i%\discoverer902」と入力して [Enter] を押す

3. 次のコマンドを入力します。

```
imp <eulowner>/<password>@<dbname> file=<filename.dmp> fromuser=<old_eul_owner>  
touser=<new_eul_owner>
```


たとえば、データベース・ユーザー `hrmgr` が所有する `hreul.dmp` ファイルの EUL を新規ユーザー `hrmgr2` にインポートするには、次のように入力します。

```
imp hrmgr2/hrpswrd@HRDB file=hreul.dmp fromuser=hrmgr touser=hrmgr2
```

EUL 表（および関連するシノニム、ビューおよびその他の定義）が <ORACLE_HOME>%discoverer902 ディレクトリの指定された `.dmp` ファイルにインポートされます。

インポートが完了すると、次のメッセージが表示されます。

「インポートは警告なしで正常に終了しました。」

4. コマンドライン・ウィンドウを閉じます。

注意

- EUL の情報によってサマリー表の所有者が識別されます。サマリー表を含む EUL をデータベース・ユーザーからエクスポートして他のデータベース・ユーザーにインポートすると、2 番目のデータベース・ユーザーがそのサマリー表の所有者になります。したがって、EUL サマリー表の所有者情報を更新する必要があります。
- サマリー表の所有者情報を更新するには、<ORACLE_HOME>%discoverer902%sql ディレクトリにある `eulsown.sql` スクリプトを実行します。スクリプトを実行すると、以前のサマリー表所有者および新しいサマリー表所有者の名前を入力するように要求されます。

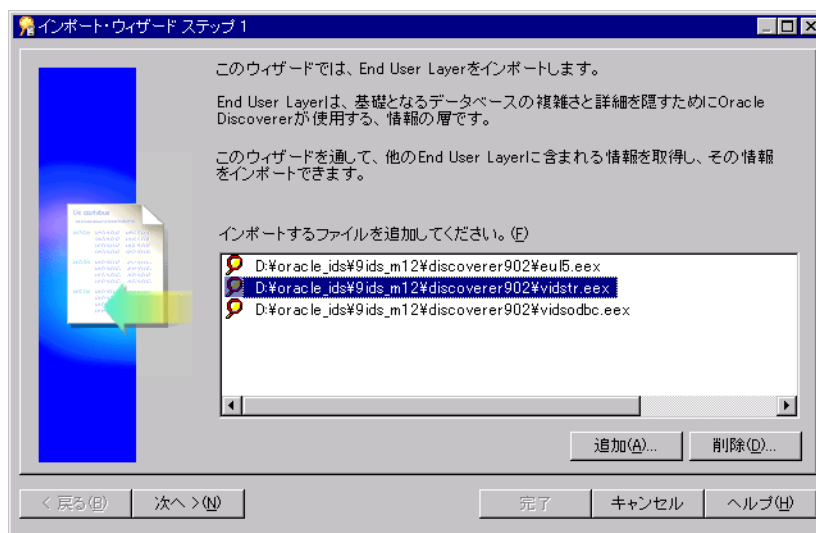
インポート・ウィザードによるファイルからの EUL オブジェクトのインポート方法

インポート・ウィザードを使用して、EUL オブジェクト（ビジネスエリア、フォルダ、階層、ユーザー定義アイテムなど）を 1 つの EUL からインポートして他の EUL で再利用できるようにします。選択した EUL オブジェクトで既存 EUL を更新するには、エクスポート・ファイル（.EEX）を使用します。たとえば、運用中のビジネスエリアに変更を適用するときなどです。EUL オブジェクトのエクスポートの詳細は、「[エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピーについて](#)」を参照してください。

インポート・ウィザードを使用してファイルから EUL オブジェクトをインポートする手順は、次のとおりです。

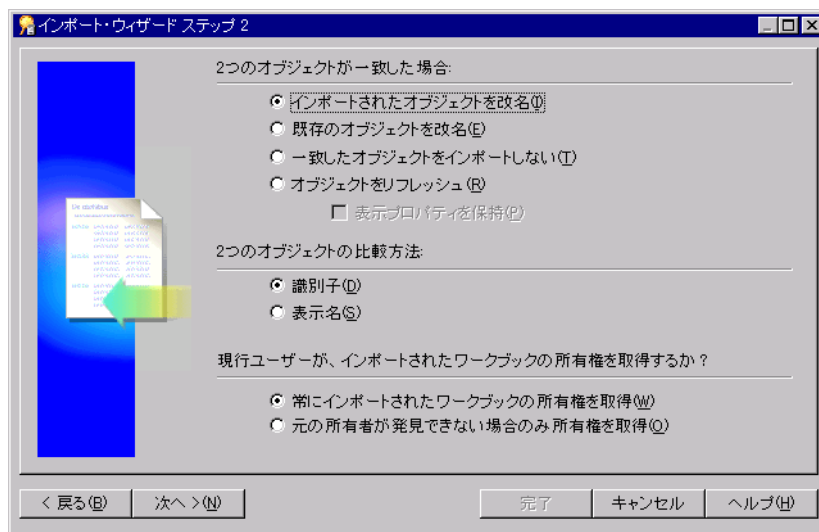
1. 「ファイル」→「インポート」を選択すると、「インポート・ウィザード ステップ 1」ダイアログが表示されます。

図 3-11 「インポート・ウィザードステップ 1」ダイアログ



2. 「追加」をクリックすると、「開く」ダイアログが表示されます。
3. 1 つ以上のファイルの位置を特定して選択し、「開く」をクリックして「インポート・ウィザード ステップ 1」ダイアログに戻ります。
「インポートするファイルを追加してください。」の下に表示されたファイルを選択します。
4. 「次へ」をクリックすると、「インポート・ウィザード ステップ 2」ダイアログが表示されます。

図 3-12 「インポート・ウィザード ステップ 2」 ダイアログ



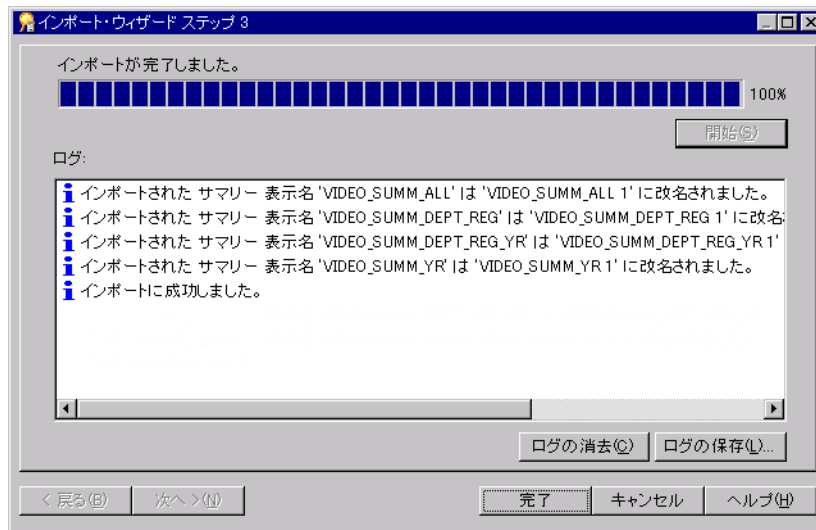
このダイアログでは、他の EUL の概念的に同一のオブジェクトに対する Discoverer Administrator の処理方法を指定できます。概念的に同一のオブジェクトの詳細は、「識別子とは」を参照してください。

5. 2つのオブジェクトが一致した場合に発生する処理を指定します。
オブジェクトとは、フォルダ、アイテム、ユーザー定義アイテムなどの任意の EUL オブジェクトです。
6. プロパティに関する表示を保持するかどうかを指定します（「オブジェクトをリフレッシュ」ラジオ・ボタンが選択されている場合のみ使用可能）。
7. オブジェクトの比較方法を指定します。
8. 現行ユーザーがインポートされたワークブックを所有するかどうかを指定します。
9. 「次へ」をクリックすると、「インポート・ウィザード ステップ 3」ダイアログが表示されます。

このダイアログでは、インポートを開始して、各 EUL オブジェクトが処理されるときの状態を監視できます。

10. 「開始」をクリックしてインポートを開始します。

図 3-13 「インポート・ウィザード ステップ 3」 ダイアログ



11. (オプション) インポートの完了後、「ログの保存 ...」をクリックすると、ログ情報を指定した場所にテキスト・ファイルとして保存します。
12. (オプション) 「キャンセル」をクリックしてインポートを終了します。
「ログ」領域に警告メッセージがある場合は、このオプションが必要になる場合があります。
13. 「完了」をクリックして、「インポート・ウィザード ステップ 3」ダイアログを閉じます。

注意

- 完全なインポートを実行すると、インポートされた EUL オブジェクトが反映されるように「ワークエリア」の「データ」タブが選択した一致オプションに応じて更新されます。
- EEX ファイルのインポート中に Discoverer Administrator がフォルダの結合を検出できない場合、「ログ」領域に警告メッセージが表示されます (EUL オブジェクトのエクスポートと結合の詳細は、[第 21 章の「/export \(EUL オブジェクト\)」](#)参照してください)。
- 分析関数を含む EUL オブジェクトをインポートする場合は、一定の制限が適用されることに注意してください。詳細は、「[分析関数での EUL データの移行シナリオ](#)」を参照してください。

EUL の作成とメンテナンスに関する注意事項

識別子とは

識別子とは、Discoverer Administrator が一意な EUL オブジェクト（および Discoverer Desktop/Plus と Discoverer Viewer のワークブック・オブジェクト）を識別するために使用する一意な名前です。

Discoverer Administrator は、（他の EUL からインポートされた）オブジェクトがインポート先の EUL の同じビジネス・オブジェクト（概念的に同一のオブジェクトと呼ばれる）を参照している場合に、識別子を使用して認識します。これによって、カスタマイズ（またはパッチ）された EUL オブジェクトが保持されます。たとえば、EUL A の「Sales」という名前のフォルダが、EUL B の「Sales Figures」という名前の同じフォルダを参照する場合があります。両方のフォルダは同じ識別子を持っているため、同じ EUL オブジェクトを参照しているものと認識されます。

識別子は Discoverer Administrator では表示されますが、Discoverer Desktop/Plus ユーザーには表示されません。

注意：Discoverer Desktop/Plus のワークブック / ワークシート識別子の位置を特定するには、『Oracle9i Discoverer Desktop ユーザーズ・ガイド』または『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

一般的な EUL の領域要件および記憶領域パラメータ

「EUL 作成ウィザード ステップ 2」ダイアログで推奨されるデフォルト表領域の最小値である 3MB は、EUL に対するデータベース・オブジェクトの作成時に EUL が指定した記憶領域パラメータに基づいています。チュートリアルをインストール済みの場合は、3MB を超えません。

新しく作成された EUL には、次の領域要件があります。

- チュートリアル・データがない場合は約 2.8MB
- チュートリアル・データがある場合は約 3.8MB

実際に使用される領域は、EUL が作成される表領域に指定されたブロック・サイズなどの他の要因によって異なります。

目安として、一般的なビジネスエリアを EUL に追加すると、EUL のサイズが 1MB 増加します。ビジネスエリアが複雑なほど（サマリー・フォルダが多く、複雑なアイテムが含まれる場合など）、ビジネスエリアで必要とされる領域も多くなります。

通常は 10 ～ 20MB のデフォルト表領域で十分ですが、必要なデフォルト表領域は EUL を定義するメタデータの量によって決定されます。したがって、必要なデフォルト表領域は、選択した表領域で使用できる量とは異なる場合があります。

EUL 表のデータベース表記憶領域パラメータは、次のとおりです。

- EUL5_DOCUMENTS および EUL5_QPP_STATS は、次の記憶領域パラメータで作成されます。

```
STORAGE (  
    INITIAL 1064960  
    NEXT 1024000  
    PCTINCREASE 0  
)
```

- 他のすべての EUL 表は、次の記憶領域パラメータで作成されます。

```
STORAGE (  
    INITIAL 40960  
    NEXT 81920  
    PCTINCREASE 0  
)
```

EUL 索引のデータベース索引記憶領域パラメータは、次のとおりです。

```
STORAGE (  
    INITIAL 4096  
    NEXT 8192  
    PCTINCREASE 0  
)
```

EUL が領域を多く使用する原因には 2 つの要素があります。

- ブロック・サイズ

Discoverer によって初期エクステント 4096 が索引に指定されますが、サーバーは常に最小 2 ブロックをセグメントに割り当てます。したがって、ブロック・サイズが 2K を超えると、索引は Discoverer の計算より多くの領域を使用します。

- 表領域の最小エクステント設定

表領域の作成時には、作成される任意のエクステントに最小エクステントを指定できます。この最小サイズが初期エクステント・サイズを超えた場合は初期エクステント・サイズが上書きされるため、EUL オブジェクトは Discoverer の計算より多くの領域を使用します。

分析関数での EUL データの移行シナリオ

Discoverer Administrator のインポートおよびエクスポート機能を使用して EUL データを移行する場合は、分析関数に関する次の制限事項に注意する必要があります（分析関数の詳細は、『Oracle9i Discoverer Desktop ユーザーズ・ガイド』または『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください）。

- 分析関数を含むカスタム・フォルダをリリース 8.1.6 より前の Oracle データベースの EUL にインポートする場合、カスタム・フォルダ SQL は EUL にインポートおよび格納されますが、アイテムは作成されません。
- 分析関数を含むアイテムまたはフォルダは、リリース 8.1.6 より前の Oracle データベースにはインポートされません。これらの例外は「ログ」領域に報告されます（詳細は、[「インポート・ウィザードによるファイルからの EUL オブジェクトのインポート方法」](#)を参照してください）。
- 複合フォルダに、使用中のバージョンのデータベースによってサポートされていない分析関数が含まれる場合、Discoverer は分析関数をフィルタ処理します。
- Oracle 8.1.6 データベースから、それより前のバージョンのデータベースにダウングレードすると、分析関数がグレー表示されますが編集はできません（削除はできます）。

分析関数を含む EUL を異なるリリースの Discoverer にアップグレードする場合（Discoverer リリース 4.1 からリリース 9.0.2 にアップグレードする場合など）にも注意の必要な問題があります。詳細は、[第 23 章の「分析関数を含む EUL のアップグレードに関する注意」](#)を参照してください。

4

ビジネスエリアの作成とメンテナンス

ビジネスエリアの作成とメンテナンス

この章では、Discoverer Administrator を使用してビジネスエリアを作成およびメンテナンスする方法について説明します。この章は、次のトピックで構成されています。

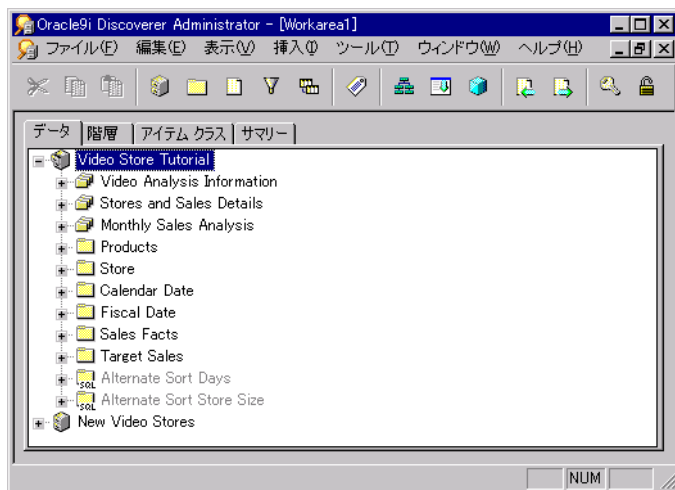
- [ビジネスエリア](#)
- [新規ビジネスエリア作成の準備方法](#)
- [ロード・ウィザード](#)
- [ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法](#)
- [Discoverer Administrator 接続時に既存ビジネスエリアを開く方法](#)
- [Discoverer Administrator に接続済みの場合に既存ビジネスエリアを開く方法](#)
- [EUL 間のビジネスエリアのコピー方法](#)
- [ビジネスエリア・プロパティの編集方法](#)
- [ビジネスエリアの削除方法](#)
- [ビジネスエリアとデータベースの同期化方法](#)
- [ビジネスエリアの作成とメンテナンスに関する注意事項](#)

ビジネスエリア

ビジネスエリアとは、Discoverer エンド・ユーザー固有のデータ要件に一致するように設計された表またはビュー（あるいはその両方）を概念上グループ化したものです。たとえば、会計部門は予算と財務に関するデータを表す会計ビジネスエリアを必要とします。一方、人事部門のマネージャは、部門と従業員情報専用のビジネスエリアを必要とします。

Discoverer Administrator では、ビジネスエリアは「ワークエリア」の「データ」タブにファイル・キャビネットとして表示されます。ビジネスエリアを開いて、ビジネスエリアのフォルダとアイテムを表示できます（詳細は、[第5章の「フォルダ」](#)および[第9章の「アイテム」](#)を参照してください）。

図 4-1 ビジネスエリア、フォルダおよびアイテムを表示する「ワークエリア」の「データ」タブ



新規ビジネスエリア作成の準備方法

ロード・ウィザードを使用して、Discoverer Administrator にビジネスエリアを作成します（詳細は、[第4章の「ロード・ウィザード」](#)を参照してください）。ロード・ウィザードを開始する前に、ビジネスエリア設計の概略を作成して準備します。Discoverer エンド・ユーザーの目的に合ったビジネスエリアを設計するために、Discoverer エンド・ユーザーの要件を意識するようにしてください。

次のガイドラインを使用してください。

- ユーザーの要件を明確に理解するために、ユーザーに質問をします。ユーザーへの質問のガイドラインとして、[第2章の「Oracle9i Discoverer を使用する前提条件」](#)の質問リストを使用します。
- データ・ソースを識別して、その設計を明確に理解します。
- 必要な表、ビューおよび列を識別します。複数のビジネスエリアに含まれる可能性のある表、ビューおよび列を識別します。たとえば、「Employee」フォルダは「Sales」および「Human Resources」ビジネスエリアの両方で必要な場合があります。
- 必要な結合を調べ、それらの結合がデータベースに存在するか、あるいは Discoverer Administrator を使用して作成する必要があるかを判断します。結合が主 / 外部キー制約でデータベースに事前定義されている場合もあれば、異なる表内の列名の一致の仕方によって目的に合った結合条件が決まる場合もあります。詳細は、[第10章の「結合」](#)を参照してください。
- セキュリティ問題とアクセス権限を識別します。ビジネスエリアの対象となるユーザー名を含めてください。

オブジェクトを追加すると、ビジネスエリアは便利で効率的な分析ツールになりますが、設計も変化します。概略を作成しておく、ビジネスエリアの変更および作成のためのフレームワークが提供されます。

ロード・ウィザード

ロード・ウィザードではビジネスエリア作成のためのわかりやすいインタフェースが提供され、次の操作を迅速に行うことができます。

- ビジネスエリアの命名と説明
- ビジネスエリアへのメタデータのロード
- 次の操作を自動的に実行
 - データのフォーマット
 - 表間の既存の関係から結合を作成

注意：Oracle9i データベースからバルク・ロードを行う場合は、ビュー間の既存の関係（ビューの制約など）から結合を作成することも可能です。

- サマリーの作成
- 日付アイテムに対する日付階層の作成
- データポイント・アイテムに対するデフォルト集計の作成
- アイテムの値リストの作成
- フォルダとアイテムのソート

ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法

Discoverer Administrator に接続済みの場合

1. 「挿入」→「ビジネスエリア」→「データベースから新規ビジネスエリアを作成」を選択して、次のステップ 2 に進みます。

Discoverer Administrator に接続したばかりの場合

1. 「新規ビジネスエリアを作成」をクリックします（Discoverer Administrator に接続した時にのみ表示される条件付きオプション）。

注意：ロード・ウィザードは、Discoverer Administrator に接続した時、ユーザー名に EUL へのアクセス権がある場合に自動的に開始されます。

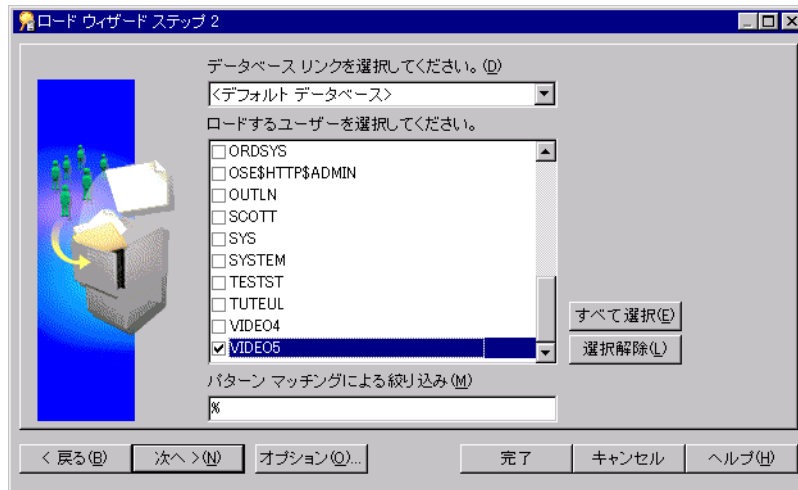
2. 次のオプションのいずれかを選択してメタデータのロード元を指定し、「次へ」をクリックして「[ロードウィザード ステップ 2](#) ダイアログ」を表示します。
 - オンライン・ディクショナリ（詳細は、「[オンライン・ディクショナリからのロード](#)」を参照してください）
 - ゲートウェイ（詳細は、「[ゲートウェイからのロード](#)」を参照してください）

オンライン・ディクショナリとゲートウェイの詳細は、「[ロードウィザード ステップ 1](#) ダイアログ」を参照してください。

オンライン・ディクショナリからのロード

「ロードウィザード ステップ2」ダイアログでは、新規ビジネスエリアにロードするユーザー・オブジェクトを定義できます。

図 4-2 「ロードウィザード ステップ2」ダイアログ



1. 「データベースリンクを選択してください。」ドロップダウン・リストから、データベース・リンクを選択します。

現行ユーザー ID のデフォルト・データベースが表示されます。ドロップダウン・リストには、ユーザーがアクセス権を持つプライベート・データベース・リンクまたはパブリック・データベース・リンクに基づいて、現行ユーザー ID が接続できるデータベースのみが表示されます。

2. (各データベース・ユーザーの) チェックボックスを選択して、選択された各データベース・ユーザーが所有するデータベース・オブジェクトのデータ・ディクショナリ定義をビジネスエリアにロードします。

表示されるデータベース・ユーザーは、選択したデータベースに存在するデータベース・ユーザーです。

3. (オプション)「パターン マッチングによる絞り込み」フィールドに、ビジネスエリアにロードされるユーザーのオブジェクトが一致する必要があるパターンを指定します。

% 記号がデフォルトで表示されますが、これは任意の文字または文字列に一致するワイルドカードです。データベースからロードできるスキーマ・オブジェクトの数を減らすには、次のようにワイルドカードを他の文字と組み合わせて使用します。

ロードするスキーマ・オブジェクト	入力する文字
すべてのスキーマ・オブジェクトを検索	%
Dで始まるすべてのスキーマ・オブジェクトを検索	D%
ANDで終わるすべてのスキーマ・オブジェクトを検索	%AND
Aで始まり、5文字の名前を持つすべてのオブジェクトを検索（各アンダースコアは文字を表す）	A _ _ _ _

- （オプション）「オプション」をクリックしてロードする表の種類を指定します（詳細は、「[「オンライン・ディクショナリ・オプション」ダイアログ](#)」を参照してください）。

たとえば、パブリックまたはプライベート、選択したユーザーが所有しているか、あるいは選択したユーザーによってアクセス可能かなどです。

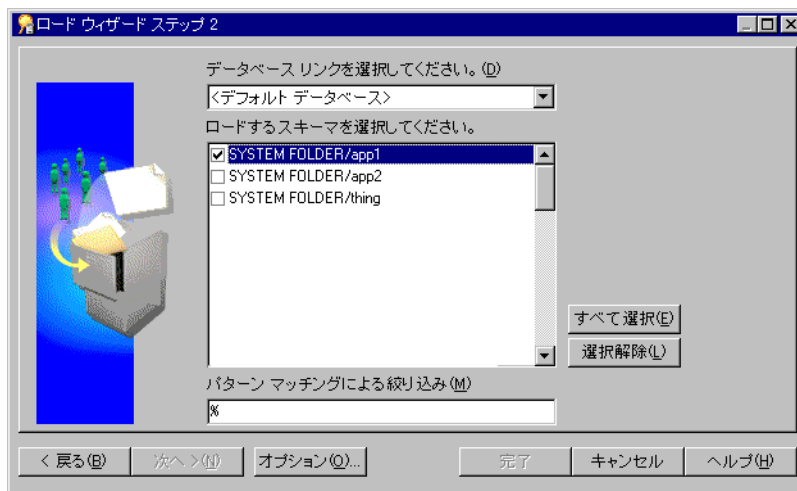
デフォルトでは、ロード・ウィザードは次の項目のみをロードします。

 - 指定されたユーザーが所有する表
 - プライベート表
- 「次へ」をクリックして、「[表およびビューの選択](#)」に進みます。

ゲートウェイからのロード

「ロードウィザード ステップ 2」ダイアログでは、新規ビジネスエリアにロードするスキーマ・オブジェクトを定義できます。

図 4-3 「ロードウィザード ステップ 2」ダイアログ



1. 「データベースリンクを選択してください。」ドロップダウン・リストから、データベース・リンクを選択します。

ドロップダウン・リストは、現行ユーザー ID のデフォルト・データベースが選択された状態で表示されます。ドロップダウン・リストには、現行ユーザー ID が接続できるデータベースのみが表示されます。

2. ビジネスエリアにロードする各スキーマのチェックボックスを選択します。

表示されるスキーマは、選択したデータベースに存在するスキーマです。

3. ビジネスエリアにロードされるスキーマ・オブジェクトが一致する必要があるパターンを（「パターン マッチングによる絞り込み」フィールドに）指定して、「次へ」をクリックします。

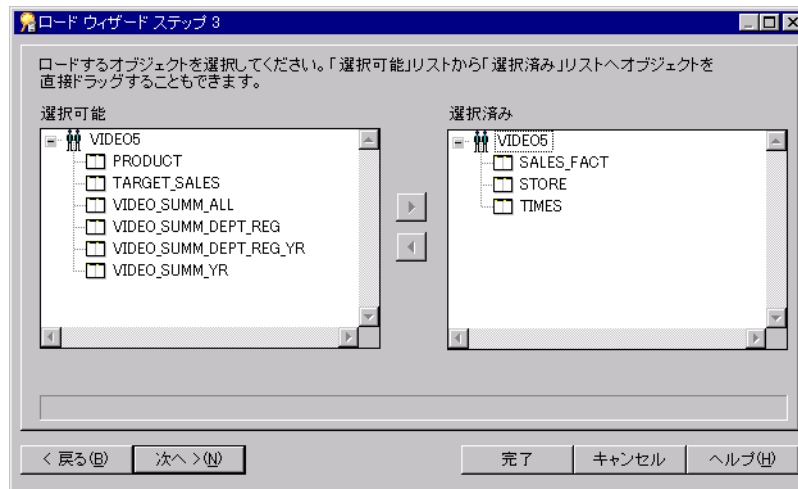
% 記号がデフォルトで表示されますが、これは任意の文字または文字列に一致するワイルドカードです。データベースからロードできるスキーマ・オブジェクトの数を減らすには、次のようにワイルドカードを他の文字と組み合わせて使用します。

ロードするスキーマ・オブジェクト	入力する文字
すべてのスキーマ・オブジェクトを検索	%
Dで始まるすべてのスキーマ・オブジェクトを検索	D%
ANDで終わるすべてのスキーマ・オブジェクトを検索	%AND
Aで始まり、5文字の名前を持つすべてのオブジェクトを検索（各アンダースコアは文字を表す）	A _ _ _ _

表およびビューの選択

「ロードウィザード ステップ3」ダイアログでは、ビジネスエリアにロードする表とビュー（スキーマ・オブジェクト）を選択できます。

図 4-4 「ロードウィザード ステップ3」ダイアログ



「選択可能」リストには、ユーザー（オンライン・ディクショナリを介して）またはスキーマ（ゲートウェイを介して）の階層リストと、ビジネスエリアへのロードに使用できる表とビューが表示されます。「+」および「-」記号をクリックすると、階層レベルを拡張または縮小できます。

表またはビューを選択してビジネスエリアにロードする手順は、次のとおりです。

1. ビジネスエリアにロードする表またはビューを「**選択可能**」リストから「**選択済み**」リストに移動します。

[Ctrl] キーを押しながら他の表またはビューをクリックすると、一度に複数の表またはビューを選択できます。

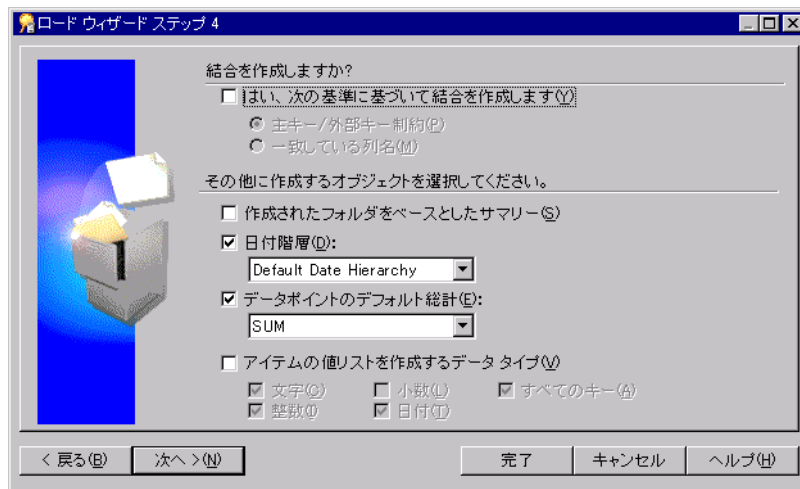
2. 「次へ」をクリックすると、「**ロードウィザードステップ4**」ダイアログが表示され、このダイアログで Discoverer Administrator による結合の作成方法および Discoverer Administrator が新規ビジネスエリアに対して生成する追加オブジェクトを指定できます。

「Discoverer Administrator がビジネスエリアに対して作成する項目の指定」に進んでください。

Discoverer Administrator がビジネスエリアに対して作成する項目の指定

「ロードウィザードステップ4」ダイアログでは、結合、サマリー・フォルダ、日付階層、データポイントのデフォルト総計および値リストに関して、Discoverer Administrator がビジネスエリアに対して作成する項目を決定できます。

図 4-5 「ロードウィザードステップ4」ダイアログ



Discoverer Administrator がビジネスエリアに対して作成する項目を指定する手順は、次のとおりです。

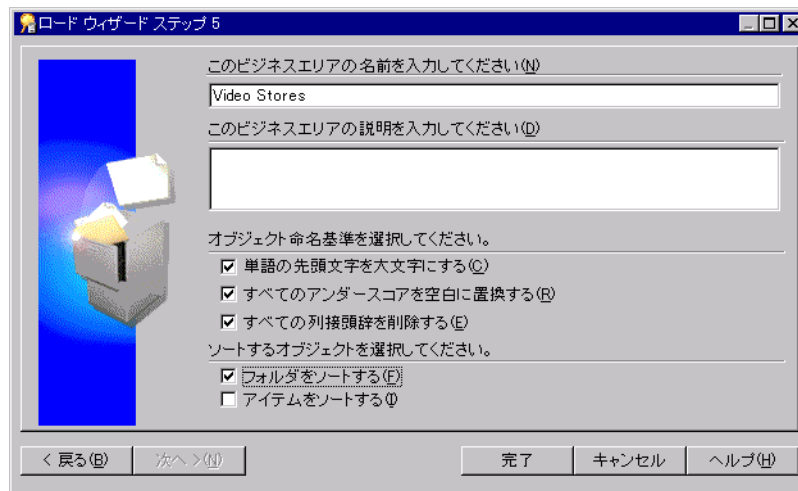
1. Discoverer Administrator が結合を作成するかどうか、作成する場合は適切な結合オプションを選択します。
2. 作成する追加オブジェクトを選択します（このダイアログの参照情報は、「[ロードウィザード ステップ 4](#) ダイアログ」を参照してください）。
3. 「次へ」をクリックすると、「[ロードウィザード ステップ 5](#) ダイアログ」が表示されます。

「[ビジネスエリアの命名、オブジェクト名およびソート・オプションの指定](#)」に進んでください。

ビジネスエリアの命名、オブジェクト名およびソート・オプションの指定

「[ロードウィザード ステップ 5](#) ダイアログ」では、名前と説明を入力して、Discoverer Administrator によるオブジェクト名の生成方法とビジネスエリアでソートするオブジェクトを指定できます。

図 4-6 「ロードウィザードステップ 5」ダイアログ



ビジネスエリアを命名して、フォルダとアイテム、命名およびソートのオプションを指定する手順は、次のとおりです。

1. 名前と説明を指定し、Discoverer Administrator によるフォルダ名とアイテム名の命名基準およびビジネスエリアのフォルダまたはアイテム（あるいはその両方）をソートするかどうかに関するチェックボックスを選択して「完了」をクリックします。

2. (条件付きステップ) このステップ (および次のステップ) は、「ロードウィザード ステップ 4」で「**作成されたフォルダをベースとしたサマリー**」チェックボックスを選択した場合にのみ適用されます。

注意： Discoverer Administrator では、自動サマリー管理 (ASM) によって作成されるサマリー・フォルダに関する情報を提供する「推奨サマリー」ダイアログが表示されます (サマリー・フォルダの詳細は、「[「サマリー ウィザード \(ASM\)」：「推奨サマリー」ダイアログ](#)」および第 14 章の「[サマリー・フォルダ](#)」を参照してください)。

3. 「作成」をクリックして選択内容を確認します。

Discoverer Administrator には、新規ビジネスエリア (またはサマリー) の作成中に進行状況バーが表示されます。完了すると進行状況バーが消えて、「[ワークエリア](#)」：「[データ](#)」タブに新規ビジネスエリアが表示されます。

注意： メタデータを Oracle9i Designer からロードした場合は、ビジネスエリアをリフレッシュしてから使用してください。詳細は、「[ビジネスエリアとデータベースの同期化方法](#)」を参照してください。

注意：ユーザー・アクセス

新規ビジネスエリア (および含まれるデータ) には、そのビジネスエリアの作成に使用されたユーザー ID のみがアクセスできます。他のユーザーにアクセス権限を付与する方法の詳細は、第 7 章の「[ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール \(職責\) の指定方法](#)」を参照してください。

Discoverer Administrator 接続時に既存ビジネスエリアを開く方法

注意：Discoverer Administrator に接続すると、ロード・ウィザードが自動的に開始されます。

Discoverer Administrator 接続時に既存ビジネスエリアを開く手順は、次のとおりです。

1. 「ロードウィザードステップ 1」ダイアログで「既存のビジネスエリアを開く」をクリックすると、接続先データベースの EUL にあるすべてのビジネスエリアが表示されます。
2. 開くビジネスエリアのチェックボックスを選択するか「すべてを選択」をクリックしてすべてのビジネスエリアを選択します。
3. 「完了」をクリックすると、選択されたビジネスエリアが開きます。

Discoverer Administrator に接続済みの場合に既存ビジネスエリアを開く方法

Discoverer Administrator に接続済みの場合に既存ビジネスエリアを開く手順は、次のとおりです。

1. 「ファイル」→「開く」を選択すると、「ビジネスエリアを開く」ダイアログが表示されます。
2. 開くビジネスエリアを「選択可能」リストから「選択済み」リストに移動します。
[Ctrl] キーを押しながら他のビジネスエリアをクリックすると、一度に複数のビジネスエリアを選択できます。
3. 「OK」をクリックすると、選択されたビジネスエリアが開きます。

EUL 間のビジネスエリアのコピー方法

1 つの EUL から他の EUL（開発システムから本番システムなど）にビジネスエリアをコピーするには、最初の EUL からビジネスエリアをエクスポートして 2 番目の EUL に再接続し、ビジネスエリアのエクスポート・ファイルを 2 番目の EUL にインポートする必要があります。

1. ビジネスエリアをファイルにエクスポートするには、次の参照先で説明されているステップを実行します。
 - [第 3 章「エクスポート・ウィザードによる選択されたビジネスエリアのエクスポート方法」](#)

この作業を完了した後、次のステップに進んでください。

2. 「ファイル」→「接続」を選択します。
3. ビジネスエリアの移動先となる EUL に接続します。
4. 「ファイル」→「インポート」を選択します。
5. （前述のステップ 1 でエクスポートされた）ビジネスエリアを現行 EUL にインポートするには、次の参照先で説明されているステップを実行します。
 - [第 3 章「インポート・ウィザードによるファイルからの EUL オブジェクトのインポート方法」](#)

注意

「エクスポート」オプションでは、ビジネスエリアの定義のみがエクスポートされます。データベース、EUL 表、ワークブックまたはビジネスエリア定義によって参照されるデータベース・オブジェクトはエクスポートされません。

ビジネスエリア・プロパティの編集方法

ビジネスエリアのプロパティを編集する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「データ」タブでビジネスエリアをクリックして「編集」→「プロパティ」を選択すると、「ビジネスエリア プロパティ:」ダイアログが表示されます。

図 4-7 「ビジネスエリア プロパティ:」ダイアログ



2. 必要に応じて、ビジネスエリアの名前と説明を設定します。

注意: 変更の影響を理解している場合を除き、識別子を変更しないでください。たとえば、本番環境にインポートする EUL パッチをテスト環境で開発している場合などです。

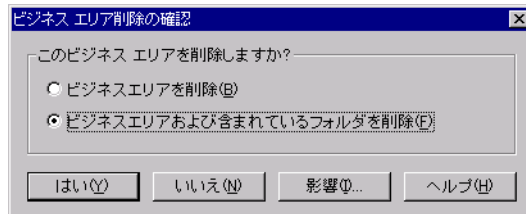
3. 「OK」をクリックして変更内容を確認します。

ビジネスエリアの削除方法

ビジネスエリアを削除する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「データ」タブでビジネスエリアをクリックして「編集」→「削除」を選択すると、「ビジネス エリア削除の確認」ダイアログが表示されます。

図 4-8 「ビジネス エリア削除の確認」ダイアログ



2. 必要とする削除の適用範囲を指定します。
 - 「ビジネスエリアを削除」ラジオ・ボタンを選択すると、ビジネスエリアが削除されます。フォルダは削除されず、EULに残ります。

注意：フォルダはEUL内に存在できますが、ビジネスエリアには属していません(孤立したフォルダ)。
 - 「ビジネスエリアおよび含まれているフォルダを削除」ラジオ・ボタンを選択すると、ビジネスエリアとそのビジネスエリアに含まれるフォルダがすべて削除されます。

注意：他のビジネスエリアの一部であるフォルダは削除されません。

注意：これはデフォルト・オプションで、通常はこのオプションをお勧めします。
3. (オプション) このビジネスエリアの削除によって影響を受ける可能性があるオブジェクトを検討できます。削除による影響の可能性を参照する手順は、次のとおりです。
 - a. 「影響 ...」をクリックすると、「影響」ダイアログが表示されます。

「影響」ダイアログには、削除によって影響を受ける可能性がある他のオブジェクトが表示されるため、正しい選択を行うのに役立ちます。
 - b. (オプション) 行を選択すると、現在の処理がEULオブジェクトに与える影響を示すテキストが表示されます。

図 4-9 「影響」ダイアログ



- c. ビジネスエリアの削除による影響について検討した後、「OK」をクリックして「影響」ダイアログを閉じます。
4. 「はい」をクリックすると、選択されたビジネスエリアが選択内容に基づいて削除されます。

ビジネスエリアとデータベースの同期化方法

リフレッシュ・コマンドを使用して、データベース・スキーマが変更されるたびにビジネスエリアとソース・ディクショナリを同期化します。

典型的なデータベース変更の例は、次のとおりです。

- 表の追加
- 列の追加
- 結合の追加
- 表の所有者の変更

ビジネスエリアとデータベースを同期化する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「データ」タブで、リフレッシュするビジネスエリアを選択します。
2. 「ファイル」→「リフレッシュ」を選択すると、「リフレッシュ ウィザード」ダイアログが開きます。
3. 次の「ビジネス エリアのリフレッシュを行ないます。比較の元となる基準を指定してください。」オプションから、いずれかを選択します。
 - 「オンラインディクショナリ」
 - 「ゲートウェイ」
4. 「完了」をクリックすると、ビジネスエリアのリフレッシュ処理が開始されます。

最後のリフレッシュ以降にオブジェクトが変更されている場合は、Discoverer Administrator によって「ビジネスエリアのリフレッシュ」ダイアログが表示されます。

図 4-10 「ビジネスエリアのリフレッシュ」 ダイアログ



「ビジネスエリアのリフレッシュ」 ダイアログには、次の項目が表示されます。

- 最後のリフレッシュ以降に変更されたオブジェクト名
 - 最後のリフレッシュ以降にオブジェクトで発生した変更の種類
 - リフレッシュがオブジェクトに与える影響
5. 各オブジェクトをリフレッシュするかどうかを決定する手順は、次のとおりです。
 - リフレッシュする各オブジェクトの横にあるチェックボックスを選択します。
 - リフレッシュしない各オブジェクトの横にあるチェックボックスを選択解除します。
 6. (オプション) このビジネスエリアのリフレッシュによって削除されるオブジェクトを検討できます。リフレッシュによる影響の可能性を参照する手順は、次のとおりです。
 - a. 「影響 ...」 をクリックすると、「影響」ダイアログが表示されます。
 - b. このビジネスエリアのリフレッシュによる影響について検討した後、「OK」 をクリックして「影響」ダイアログを閉じます。
 7. Discoverer Administrator の「OK」 をクリックすると、ビジネスエリアまたは選択されたオブジェクトがリフレッシュされます。

ビジネスエリアの作成とメンテナンスに関する注意事項

ユーザーがビジネスエリア（またはビジネスエリア内のフォルダ）を参照できない理由

ビジネスエリアを作成しても、Discoverer エンド・ユーザーがビジネスエリア（またはビジネスエリア内のフォルダ）を参照できない場合があります。ユーザーがビジネスエリアまたはビジネスエリア内のフォルダを参照するには、次の条件がすべて満たされている必要があります。

- ユーザーはEULへのアクセス権を持っている必要があります。ユーザーがEUL所有者でない場合は、EULがパブリックにアクセス可能であるか、あるいはユーザーがEULに対する明示的なアクセス権を付与されている必要があります。また、ユーザーがアクセスしているEULが、ビジネスエリアが作成されたEULであることを確認してください。
- ユーザーはビジネスエリアへのアクセス権を持っている必要があります。ビジネスエリアへのアクセス権付与の詳細は、次を参照してください。
 - [第7章「ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール（職責）の指定方法」](#)
 - [第7章「ユーザーまたはロール（職責）がアクセスできるビジネスエリアの指定方法」](#)
- ユーザーは、ビジネスエリアのフォルダの基となる表またはビューへのデータベースSELECTアクセス権を持っている必要があります。

ヒント: 特定のユーザーが特定のデータベース表またはビューに対するアクセス権を持っているかどうか不明な場合は、そのユーザーとしてSQL*Plusにログインし、次のように入力します。

```
select count(*) from <ownername>.<objectname>;
```

- <ownername> は、表またはビュー所有者のデータベース・ユーザー名です。
- <objectname> は表またはビューの名前です。

ユーザーがデータベース表またはビューに対するアクセス権を持っていない場合は、エラー・メッセージが表示されます。

- ビジネスエリアのフォルダは、現行データベース表またはビューの定義に基づいている必要があります。表またはビューの定義が変更されている場合は、ビジネスエリアをリフレッシュする必要があります（詳細は、[「ビジネスエリアとデータベースの同期化方法」](#)を参照してください）。たとえば、基礎となる列が表から削除されており、その列にフォルダが依存している場合、エンド・ユーザーはフォルダを参照できません。この場合、Discoverer エンド・ユーザーがフォルダを参照できるようにするには、そのフォルダを含むビジネスエリアをリフレッシュする必要があります。

5

フォルダの作成とメンテナンス

フォルダの作成とメンテナンス

この章では、Discoverer Administrator を使用してフォルダを作成およびメンテナンスする方法について説明します。この章は、次のトピックで構成されています。

- [フォルダ](#)
- [単一フォルダ](#)
- [複合フォルダ](#)
- [カスタム・フォルダ](#)
- [フォルダ間の依存性について](#)
- [ビジネスエリアにおけるフォルダの共有について](#)
- [データベースからの単一フォルダの作成方法](#)
- [複合フォルダの作成方法](#)
- [カスタム・フォルダの作成方法](#)
- [フォルダ・プロパティの編集方法](#)
- [カスタム・フォルダの SQL 文の編集方法](#)
- [ビジネスエリアからのフォルダの削除方法](#)
- [ビジネスエリアへのフォルダの割当て方法](#)
- [複数ビジネスエリアへのフォルダの割当て方法](#)
- [ビジネスエリアにおけるフォルダのソート方法](#)
- [フォルダにおけるアイテムのソート方法](#)
- [ビジネスエリアにおけるフォルダの順序変更方法](#)
- [ビジネスエリアにおけるフォルダの検証方法](#)

フォルダ

Discoverer フォルダは、結果セットのデータを表したものです。Discoverer フォルダの視覚的概念は Windows のディレクトリに類似しています。フォルダはコンテナであり、アイテムはフォルダに保持されるファイルです。Discoverer フォルダは、関連アイテムのグループを表します。Discoverer エンド・ユーザーは 1 つ以上のフォルダからアイテムを選択して、データベースの情報を取得します。Discoverer 管理者には、Discoverer エンド・ユーザーが必要な情報にアクセスできるように適切なフォルダを作成する責任があります。

次の 3 種類のフォルダがあります。

- 単一データベース表またはビューの列に基づくアイテムを含む単一フォルダ
- 複数のデータベース表またはビューの列に基づくアイテムを含む複合フォルダ
- SQL 文に基づくカスタム・フォルダ

Discoverer エンド・ユーザーにとっては、特定のフォルダの種類は重要ではありません。Discoverer 管理者にとっては、フォルダが単一か、カスタムか、あるいは複合かという点が重要です。Discoverer Administrator においても、これらのフォルダの動作には、種類による大きな違いはありません。フォルダには、アイテム、ユーザー定義アイテム、結合、条件、アイテム・クラスおよび階層が含まれます。フォルダのアイテムはサマリー・フォルダで使用でき、また階層の定義に使用できます。

Discoverer エンド・ユーザーは、ビジネスエリアのコンテキスト内でフォルダを使用します。

Discoverer 管理者は、1 つ以上のビジネスエリアにフォルダを割り当てることができます。フォルダを割り当てるビジネスエリアの数にかかわらず、フォルダの定義は単一であることに注意してください。

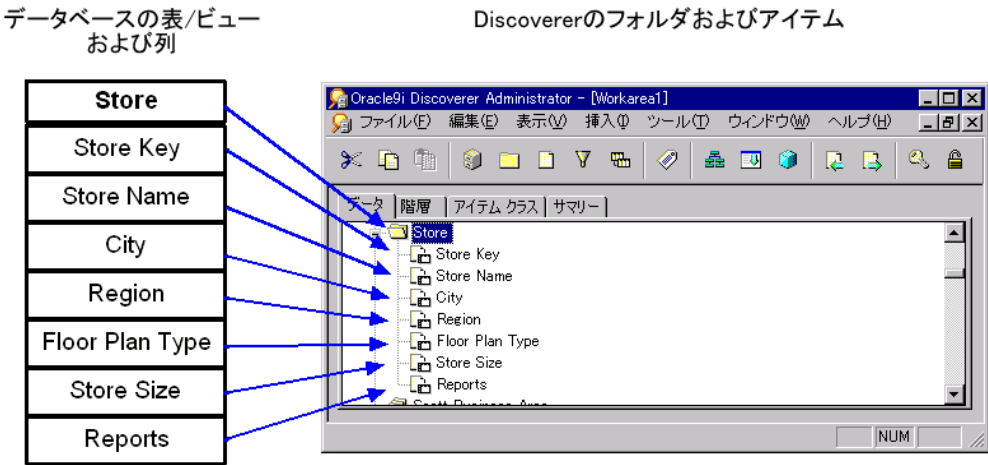
フォルダは、EUL から削除することなくすべてのビジネスエリアから削除できます。EUL には存在しているがビジネスエリアには現在割り当てられていないフォルダは、孤立したフォルダと呼ばれます。

単一フォルダ

単一フォルダには、単一のデータベース表またはビューの列に基づくアイテムが含まれます。単一フォルダのアイテムとしては、同じ単一フォルダ内の他のアイテムから導出されたユーザー定義アイテムも含まれます。

単一フォルダは、データベースまたはゲートウェイから表定義または表メタデータをロードして作成します。

図 5-1 Discoverer Administrator による表およびビューの表現方法



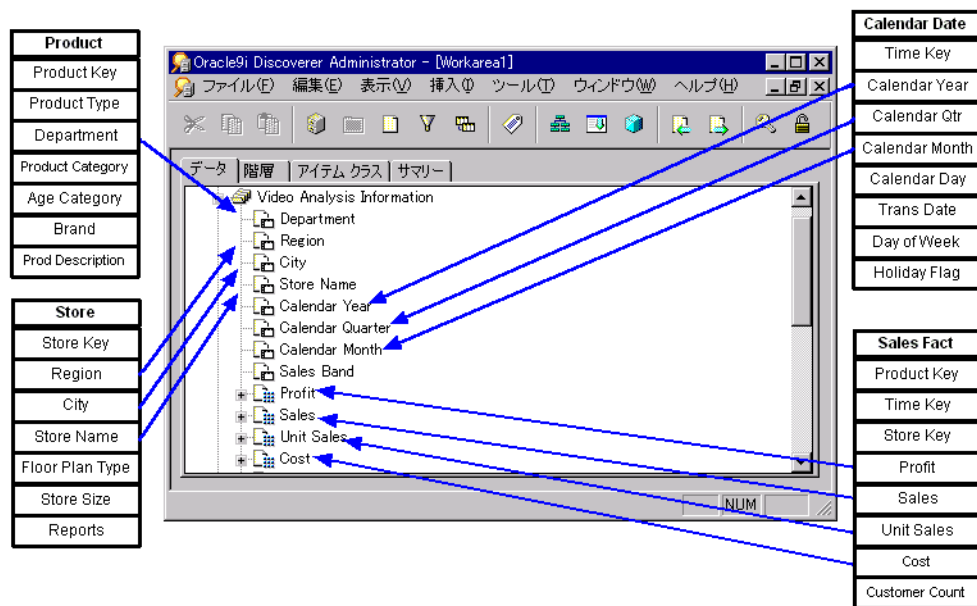
複合フォルダ

複合フォルダには、1つ以上の他のフォルダのアイテムが含まれます。複合フォルダでは、複数のフォルダのデータを組み合わせたビューを作成できます。これは、データベースのビューと類似しています。

複合フォルダを使用すると、新規データベース・ビューを作成せずにビジネスエリアを簡素化できます。たとえば、DEPT 表と EMP 表両方の列を持つ「Dept-Emp」という複合フォルダを作成できます。ユーザーは、2つのフォルダではなく1つのフォルダから選択できます。

異なるフォルダの2つのアイテムを同じ複合フォルダに含めるには、2つのフォルダ間に結合条件が存在している必要があります。結合の詳細は、[第10章の「結合」](#)を参照してください。

図 5-2 複合フォルダによる複数ソース表からのアイテムのグループ化方法



データベース・ビューのかわりに複合フォルダを使用する利点

- 複合フォルダのかわりにデータベース・ビューを使用しても、同じ結果セットを生成できます。ただし、データベース・ビューのかわりに複合フォルダを使用することで、いくつかの利点を提供されます。次のことができます。
- データベース・ビューの作成に必要なデータベース権限なしで複合フォルダを作成
 - フォルダのビジネスエリアを使用して複合フォルダへのアクセスを制御
 - Discoverer Administrator 内で複合フォルダ全体を管理（データベース・ビューではメンテナンスが複雑）

カスタム・フォルダ

カスタム・フォルダは、UNION、CONNECT BY、MINUS、INTERSECT などの集合演算子を含むことのできる SQL 文およびダイアログに直接入力するシノニムに基づいたフォルダです。

カスタム・フォルダを定義すると、複雑な結果セットを表すフォルダを迅速に作成できます。カスタム・フォルダを保存すると、Discoverer Administrator によって入力された SQL 文の SELECT を使用してアイテムが作成されます。

Discoverer Plus では、カスタム・フォルダと単一フォルダの区別はありません。Discoverer エンド・ユーザーは、カスタム・フォルダを使用して他の種類のフォルダと同じように問合せを作成できます。

カスタム・フォルダと単一フォルダの違い

カスタム・フォルダは単一フォルダと非常に似ていますが、次のような例外があります。

領域	単一フォルダ	カスタム・フォルダ
リフレッシュ	単一フォルダは、ビジネスエリアのリフレッシュ時にリフレッシュされます。	カスタム・フォルダは、既存 SQL の編集および検証によってリフレッシュされます。
アイテム・プロパティ	単一フォルダのアイテムには、「計算式」プロパティがあります。	カスタム・フォルダに生成されたアイテムには、「計算式」プロパティはありません。つまり、カスタム・フォルダでアイテムの計算式を編集する唯一の方法は、フォルダ全体の SQL を編集することです。

領域	単一フォルダ	カスタム・フォルダ
フォルダ・プロパティ	単一フォルダには、「データベース」、「所有者」および「オブジェクト」プロパティがあります。単一フォルダには「カスタム SQL」プロパティはありません。	カスタム・フォルダには、「データベース」、「所有者」および「オブジェクト」プロパティはありません。カスタム・フォルダには、カスタム・フォルダの生成に使用された SQL 文を含む「カスタム SQL」プロパティがあります。

カスタム・フォルダの例

この項は、次の例で構成されています。

- [例 1: カスタム・フォルダ定義のシノニム](#)
- [例 2: カスタム・フォルダ定義の集合演算子](#)
- [例 3: カスタム・フォルダ定義の副問合せ](#)
- [例 4: カスタム・フォルダ定義のオプティマイザ・ヒント](#)
- [例 5: カスタム・フォルダ定義の CONNECT BY 句](#)
- [例 6: カスタム・フォルダ定義の列の式](#)
- [例 7: カスタム・フォルダの使用による値リストのパフォーマンスの改善](#)

例 1: カスタム・フォルダ定義のシノニム

```
SELECT ENAME, JOB, SAL FROM EMP@ORCL
```

この例では、EMP は他のデータベースの EMP 表を示すシノニムです。

例 2: カスタム・フォルダ定義の集合演算子

```
SELECT 'COMPANY1' COMPANY, ENAME, SAL FROM EMP@HQ
UNION
SELECT 'COMPANY2' COMPANY, ENAME, SAL FROM EMP@REGIONA
```

この例では、HQ および REGIONA はリモート・データベースのデータベース・リンクです。結果セットは、COMPANY1 という列を持つすべての従業員の UNION であり、従業員が属す会社を表します。

例 3: カスタム・フォルダ定義の副問合せ

```
SELECT ENAME, SAL FROM EMP
WHERE SAL > (SELECT AVG (SAL) FROM EMP)
```

この例では、(SELECT AVG (SAL) FROM EMP) 副問合せはフォルダ定義に含まれています。

例 4: カスタム・フォルダ定義のオプティマイザ・ヒント

```
SELECT /*+ FULL(scott_emp) PARALLEL (scott_emp, 5) */
ename
FROM scott.emp scott_emp;
```

この例では、PARALLEL ヒントは emp 定義で指定された並列度を上書きします。

例 5: カスタム・フォルダ定義の CONNECT BY 句

```
SELECT EMPNO, ENAME, JOB FROM EMP
CONNECT BY PRIOR EMPNO=MGR
START WITH KING
```

この例では、CONNECT BY 句は親行の EMPNO 値が子行の MGR 値と等しくなる階層関係を定義します（つまり、PRIOR 条件が TRUE の各行がフィルタされます）。

例 6: カスタム・フォルダ定義の列の式

```
SELECT ENAME, SAL*12+NVL(COMM,0) ANNUAL_SALARY
FROM EMP
```

この例では、別名 ANNUAL_SALARY が SAL*12+NVL(COMM,0) 式に必要です。

カスタム・フォルダには任意の有効な SQL 文を含めることができますが、列の式には SQL ビュー定義と同じ方法で別名を付ける必要があります。この場合、別名はアイテム名として使用されます。

ENAME などの単純な列の式では別名は必要ありません。

例 7: カスタム・フォルダの使用による値リストのパフォーマンスの改善

カスタム・フォルダを使用して、データベース上で値が変更されないフォルダにアイテムの値リストを作成できます。これは、重複を除いた値の数より行の数が多いフォルダのアイテムに対して定義された値リストを使用して問合せを実行するよりもはるかに効率的です。

静的値の数が少ない場合は、カスタム・フォルダを使用して End User Layer 内にローカル値リストを作成できます。

たとえば、North、South、East および West の値リストが必要な場合は、「Region_lov」というカスタム・フォルダを作成して次の SQL を入力します。

```
SELECT 'NORTH' REGION FROM sys.dual
UNION
SELECT 'SOUTH' REGION FROM sys.dual
UNION
SELECT 'EAST' REGION FROM sys.dual
UNION
SELECT 'WEST' REGION FROM sys.dual
```

この SQL によって「Region」という 1 つのアイテムが作成され、このアイテムを値リストとして使用すればパフォーマンスを大幅に改善できます。

値リストの詳細は、[第 9 章の「値リスト」](#)を参照してください。

フォルダ間の依存性について

単一フォルダのアイテムをコピーして同じ単一フォルダに貼り付けると、新しいアイテムは元のアイテムと完全に別個になり、新しい名前（**region1** など）が生成されます。どちらかのアイテムを変更しても、他方のアイテムには反映されません。

単一フォルダのアイテムをコピーして複合フォルダに貼り付けると、複合フォルダの新規アイテムは元のアイテムに関連付けられたままになります。元のアイテムに変更の影響を与えることなく、新規アイテムの名前とそのプロパティを変更できます。ただし、新規アイテムの計算式は元のアイテムの名前を参照するため、新規アイテムは元のアイテムに依存します。元のアイテムの計算式を変更すると、新規アイテムによって返されるデータも変更されます。同じように、新規アイテムの計算式プロパティは元のアイテムを参照するため、元のアイテムを削除すると新規アイテムも削除されます。

たとえば、Store 表からアイテム「Region」をコピーして複合フォルダ「Video Analysis Information」に貼り付け、コピーされたアイテム「Region」のプロパティを複合フォルダ「Video Analysis Information」で編集します。「Region」アイテムの計算式プロパティ自体が、ユーザー定義アイテム「Store.Region」を使用するユーザー定義アイテムであることがわかります。ユーザー定義アイテム「Store.Region」は、アイテムがフォルダ「Store」のアイテム「Region」に依存していることを示しています。前述の段落で説明された条件は、複合フォルダ「Video Analysis Information」にコピーした「Region」アイテムに適用されます。

アイテムの依存性リストは、「アイテム プロパティ」ダイアログの「依存性」タブで表示できます。

フォルダは、データベースから返されるデータ・セットを表します。フォルダに必須条件（Year=2000 など）を適用すると、返されるデータ・セットが変更されます。このフォルダによって作成された複合フォルダは、ソース・フォルダの制限付きデータ・セットを反映します。後でソース・フォルダから必須条件を削除すると、複合フォルダに変更が反映されません。

ビジネスエリアにおけるフォルダの共有について

1つの部門にとって重要なデータは、他の部門でも役に立つ場合があります。したがって、Discoverer Administrator では、1つのビジネスエリアで作成したフォルダを他のビジネスエリアと共有できます。たとえば、販売部門と会計部門の両方に作成するビジネスエリアの「Income」および「Costs」に対する列を含む「Sales Facts」フォルダを共有するとします。

1つのビジネスエリアのフォルダに変更を行うと、そのフォルダを使用するすべてのビジネスエリアのフォルダに変更が行われます。

データベースからの単一フォルダの作成方法

既存のビジネスエリアにデータベースから単一フォルダを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「データ」タブで、単一フォルダを作成するビジネスエリアを選択します。
2. 「挿入」→「フォルダ」→「データベースから新規フォルダを作成」を選択すると、「ロードウィザードステップ1」ダイアログが表示されます。
3. 「オンラインディクショナリ」をクリックして、単一フォルダの基礎となる表およびビューの位置を指定します。
4. 「次へ」をクリックすると、「ロードウィザードステップ2」ダイアログが表示されます。
5. 単一フォルダの基礎となるデータベース表およびビューを所有するデータベースを指定します。
6. 単一フォルダの基礎となるデータベース・ユーザーのラジオ・ボタンを選択します。
7. 「次へ」をクリックすると、「ロードウィザードステップ3」ダイアログが表示されます。
8. 「選択可能」リストの「+」記号を拡張して、ユーザーが所有するオブジェクトを表示します。
9. 単一フォルダの基礎となるオブジェクトを「選択可能」リストから「選択済み」リストに移動します。
10. 次のいずれかの操作を行います。
 - 「次へ」をクリックして、「ロードウィザードステップ4」ダイアログの単一フォルダのデフォルト設定を変更
 - 「完了」をクリックして、指定した表に基づく単一フォルダをデフォルト設定で作成

11. ステップ 10 で「次へ」をクリックした場合は、次のいずれかの操作を行います。
 - 「次へ」をクリックして、「[ロードウィザードステップ 5](#)」ダイアログの単一フォルダのデフォルト設定を変更
 - 「完了」をクリックして、指定した表に基づく単一フォルダをデフォルト設定で作成
12. ステップ 11 で「次へ」をクリックした場合は、「完了」をクリックして指定した表に基づく単一フォルダを指定した設定で作成します。

複合フォルダの作成方法

複合フォルダを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「データ」タブで、複合フォルダを作成するビジネスエリアを選択します。
2. 「挿入」→「フォルダ」→「新規作成」を選択すると、新しい複合フォルダが作成されます。
3. 「データ」タブの新規フォルダのアイコンをクリックして「編集」→「プロパティ」を選択すると、「[フォルダプロパティ](#)」ダイアログが表示されます。
4. (オプション)「名前」フィールドに新規フォルダのわかりやすい名前を指定します。
5. (オプション)「説明」フィールドに新規フォルダの説明を指定します。
6. 「フォルダ プロパティ」ダイアログが開いている場合は閉じます。
7. 「ワークエリア」:「データ」タブで、開いている任意のビジネスエリア内の任意のフォルダから、アイテムを新規フォルダにドラッグします。

ヒント:2つのワークエリアが開いている場合は、フォルダ間のアイテムをドラッグした方が便利です。2番目のワークエリアを開くには、「ウィンドウ」→「新しいウィンドを開く」を選択します。

8. 必要に応じて、アイテムを新規フォルダにドラッグします。

複合フォルダに追加する各アイテムは、すでに複合フォルダに存在する少なくとも1つの他のアイテムのフォルダに結合されたフォルダに属している必要があります。属していない場合は、Discoverer Administrator によってエラー・ダイアログが表示されます。結合の詳細は、[第 10 章の「結合の作成とメンテナンス」](#)を参照してください。

注意

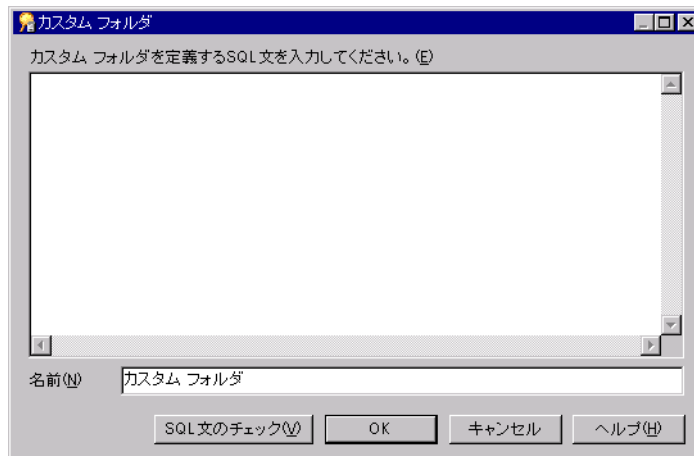
単一フォルダのアイテムを複合フォルダに含めると、複合フォルダの新規アイテムは元のアイテムから完全には独立しません。詳細は、「[フォルダ間の依存性について](#)」を参照してください。

カスタム・フォルダの作成方法

カスタム・フォルダを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「データ」タブで、ビジネスエリア（またはビジネスエリア内の任意のオブジェクト）を選択します。
2. 「挿入」→「フォルダ」→「カスタム」を選択すると、「カスタム フォルダ」ダイアログが表示されます。

図 5-3 「カスタム フォルダ」ダイアログ



3. カスタム・フォルダの基礎となる SQL 文を指定します。
2 文字のダッシュ (--) でコメント行を開始すると、SQL 文内に別個の行としてコメントを含めることができます。
4. 「名前」フィールドにカスタム・フォルダ名を指定します。
5. 「SQL 文のチェック」をクリックして、有効な SQL を入力したことを確認します。
6. 「OK」をクリックして SQL 文をチェックし、カスタム・フォルダを保存します。

注意

- 基礎となるデータベース・オブジェクトが作成されて使用可能になる前にカスタム・フォルダを作成できるようにするため、Discoverer Administrator では SQL が無効な場合でもカスタム・フォルダの保存が許可されます。Discoverer エンド・ユーザーは、SQL が有効になるまでデータベース・オブジェクトの問合せを実行できないことに注意してください。

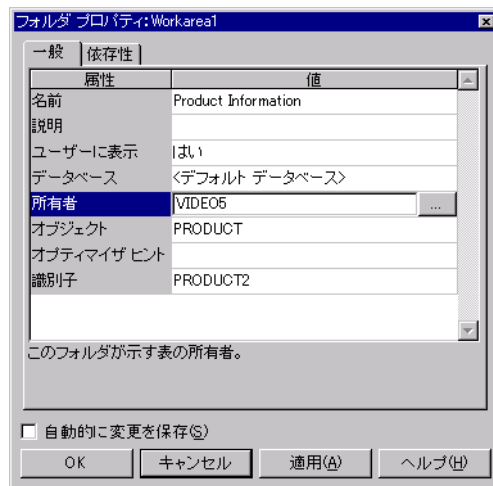
- 入力できる SQL 文の例は、「[カスタム・フォルダの例](#)」を参照してください。
- SQL が複数のデータベース・オブジェクトを参照する場合は、それらのオブジェクト間に結合を定義する必要があります。詳細は、[第 10 章の「結合の作成とメンテナンス」](#)を参照してください。

フォルダ・プロパティの編集方法

フォルダのプロパティを編集する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「[データ](#)」タブで、フォルダをクリックして選択します。
[Ctrl] キーを押しながら他のフォルダをクリックすると、複数のフォルダを選択できます。
2. 「編集」→「プロパティ」を選択すると、「[フォルダ プロパティ](#)」ダイアログが表示されます。

図 5-4 「フォルダ プロパティ」ダイアログ



複数のフォルダを選択した場合は、「フォルダ プロパティ」ダイアログに選択したすべてのフォルダと同じ値を持つ各プロパティの値が表示されます。特定のプロパティの値が、選択したすべてのフォルダと同じでない場合、そのプロパティには値が表示されません。

3. 必要に応じて変更を行います。

ヒント: 変更を行うのと同時に変更内容を保存するには、「**自動的に変更を保存**」チェックボックスを選択します。このオプションが選択されている場合、「OK」または「適用」をクリックする必要はありません。

4. 「OK」をクリックして変更内容を保存します。

注意

- フォルダは複数のビジネスエリアに割り当てることができます。ただし、EUL には1つのフォルダ定義があり、その定義はフォルダの割当て先となるすべてのビジネスエリアで共有されます。フォルダ定義を変更すると、フォルダの割当て先となるすべてのビジネスエリアに変更が反映されます。詳細は、「[ビジネスエリアにおけるフォルダの共有について](#)」を参照してください。
- Discoverer Administrator は識別子と呼ばれる内部参照システムを使用してフォルダを識別するため、フォルダの名前はいつでも変更できます（詳細は、[第3章の「識別子とは」](#)を参照してください）。フォルダの名前を変更しても、ビジネスエリアの構造は変更されません。ただし、フォルダ名は EUL 内で一意にする必要があります。また、アイテム名も特定のフォルダ内で一意にする必要があることに注意してください。
- オブジェクト自体の名前を変更せずに、単一フォルダの基礎となるデータベース・オブジェクトを所有するデータベース・ユーザーを変更できます。たとえば、開発環境から本番環境に推移する際にこの操作を行います。データベース・ユーザーを変更するには、「所有者」フィールドの横にあるボタンをクリックして「[ユーザーを選択](#)」ダイアログを表示し、新規データベース・ユーザーを指定します。
- 表およびビューを所有するデータベース・ユーザーを指定せずに、表およびビューを単一フォルダの基礎にできます。この操作の目的は、次のとおりです。
 - 異なる Discoverer Plus ユーザーを、各データベース・ユーザー（Oracle Applications ユーザーなど）内に存在する同名のデータベース表やビューにアクセス可能にするため
 - 表または表の所有者がまだ使用できない EUL を作成およびメンテナンスするため
 - Discoverer 管理者がアクセス権を持っていない EUL を作成およびメンテナンスするため
 - データの所有者が異なるデータベース間の EUL を移動するため

データベース・ユーザー名を指定せずに、表およびビューを単一フォルダの基礎にするには、「所有者」フィールドを空白にします。「所有者」フィールドを空白にすると、表名の前に所有者が含まれない SQL が Discoverer Administrator によって生成されます。

たとえば、「所有者」フィールドに表およびビューを所有するスキーマ名が含まれている場合、生成される SQL 文は次のようになります。

```
select <列> from <所有者>.<表>
```

「所有者」フィールドが空白の場合、生成される SQL 文は次のようになります。

```
select < 列 > from < 表 >
```

オブジェクトが現行スキーマにない場合は、警告が表示されます。

カスタム・フォルダの SQL 文の編集方法

カスタム・フォルダの SQL 文を編集する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」: 「データ」タブで、カスタム・フォルダを選択します。
2. 「編集」 → 「プロパティ」を選択すると、「フォルダプロパティ」ダイアログが表示されます。
3. 「カスタム SQL」フィールドをクリックすると、「カスタム フォルダ」ダイアログが表示されます。

ヒント: 「カスタム フォルダ」ダイアログのサイズを変更すると、より多くの SQL 文を表示させることができます。
4. 必要に応じて変更を行います。
5. 「SQL 文のチェック」をクリックして、有効な SQL を入力したことを確認します。
6. 「OK」をクリックして SQL 文をチェックし、カスタム・フォルダを保存します。

注意

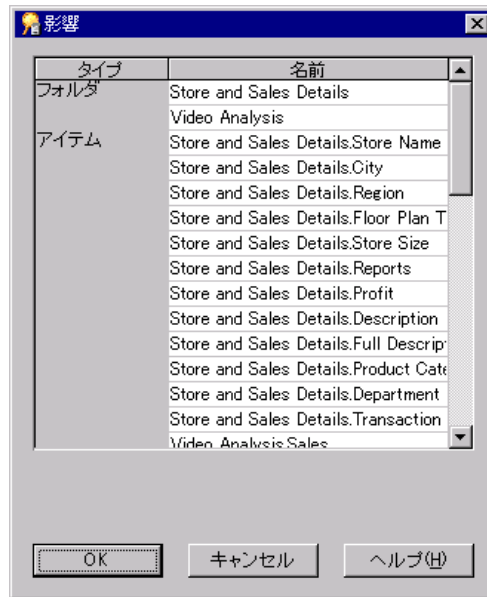
- 基礎となるデータベース・オブジェクトが作成されて使用可能になる前にカスタム・フォルダを作成できるようにするため、Discoverer Administrator では SQL が無効な場合でもカスタム・フォルダの保存が許可されます。エンド・ユーザーは、SQL が有効になるまでオブジェクトの間合せを実行できないことに注意してください。
- SQL が複数のデータベース・オブジェクトを参照する場合は、それらのオブジェクト間に結合を定義する必要があります。詳細は、第 10 章の「結合」を参照してください。
- Discoverer Administrator は変更された SQL 文を分析して、行った変更を評価します。Discoverer Administrator が、変更によって既存アイテムが影響を受けるのか、あるいは新しいアイテムが作成されるのかを判断すると、影響される各アイテムを表示する「影響」ダイアログが表示されます。「影響」ダイアログを使用して、行った変更を確認するか、さらに変更を行うか、あるいは編集を中止するかを決定してください。

ビジネスエリアからのフォルダの削除方法

ビジネスエリアからフォルダを削除する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「データ」タブで、削除するフォルダを選択します。
[Ctrl] キーを押しながら他のフォルダをクリックすると、複数のフォルダを選択できます。
2. 「編集」→「削除」を選択すると、「フォルダ削除の確認」ダイアログが表示されます。
「フォルダ削除の確認」ダイアログでは、フォルダの削除方法を選択し、フォルダの削除による影響を調べることができます。
3. 次のいずれかのラジオ・ボタンを選択して、フォルダの削除方法を指定します。
 - **ビジネスエリアから削除**
現在のビジネスエリアから、選択したフォルダを削除します。このオプションでは、フォルダが EUL から削除されないことに注意してください。フォルダが他のビジネスエリアと共有されていない場合は、そのフォルダは孤立したフォルダになります。
 - **End User Layer から削除**
選択したフォルダが、そのフォルダを含むすべてのビジネスエリアから削除されます。このオプションでも、フォルダ定義が EUL から完全に削除されることに注意してください。
4. (オプション) このフォルダの削除によって影響を受ける可能性があるオブジェクトを検討できます。削除による影響の可能性を参照する手順は、次のとおりです。
 - a. 「影響 ...」をクリックすると、「影響」ダイアログが表示されます。
「影響」ダイアログには削除によって影響を受ける可能性のある他のオブジェクトが表示されるため、正しい選択を行うのに役立ちます。
 - b. (オプション) 行を選択すると、現在の処理が EUL オブジェクトに与える影響を示すテキストが表示されます。

図 5-5 「影響」 ダイアログ



- c. フォルダの削除による影響について検討した後、「OK」をクリックして「影響」ダイアログを閉じます。
5. 選択したフォルダを削除する場合は、「はい」をクリックします。
選択したフォルダが指定された方法で削除されます。

注意

- フォルダを削除する前に、フォルダの割当て先となっているビジネスエリアを識別すると役に立ちます。ビジネスエリアを識別するには、「ワークエリア」の「データ」タブで削除するフォルダをクリックして、「ツール」→「フォルダの管理」を選択して「[フォルダの管理](#)」ダイアログ：「[ビジネスエリア→フォルダ](#)」タブを表示します。「フォルダの管理」ダイアログには、選択したフォルダを保持する他のビジネスエリアのドロップダウン・リストが含まれています。
- EUL から孤立したフォルダを削除するには、フォルダをビジネスエリアに割り当ててからそのフォルダを削除する必要があります。詳細は、「[ビジネスエリアへのフォルダの割当て方法](#)」を参照してください。

ビジネスエリアへのフォルダの割当て方法

特定のビジネスエリアにフォルダを割り当てる手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「フォルダの管理」を選択すると、「**フォルダの管理**」ダイアログ:「**ビジネスエリア→フォルダ**」タブが表示されます。

「ビジネスエリア→フォルダ」タブを使用して、任意の数のフォルダ（孤立したフォルダを含む）を特定のビジネスエリアに割り当てます。
2. 「**ビジネスエリア**」ドロップダウン・リストから、1つ以上のフォルダを割り当てるビジネスエリアを選択します。

デフォルトでは、現在「ワークエリア」で選択されているビジネスエリアが「**ビジネスエリア**」ドロップダウン・リストに表示されます。
3. 必要なフォルダを「**選択可能なフォルダ**」リストから「**選択されたフォルダ**」リストに移動します。

[Ctrl] キーを押しながら他のフォルダをクリックすると、複数のフォルダを選択できます。
4. 「OK」をクリックして変更内容を保存します。

ビジネスエリアには、「**選択されたフォルダ**」リストで指定したフォルダが含まれています。

複数ビジネスエリアへのフォルダの割当て方法

複数のビジネスエリアにフォルダを割り当てる手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「フォルダの管理」を選択すると、「**フォルダの管理**」ダイアログ:「**フォルダ→ビジネスエリア**」タブが表示されます。

「フォルダ→ビジネスエリア」タブを使用して、複数のビジネスエリアに特定のフォルダ（孤立したフォルダを含む）を割り当てます。
2. 「**フォルダ**」ドロップダウン・リストから、1つ以上のビジネスエリアに割り当てるフォルダを選択します。
3. 必要なビジネスエリアを「**選択可能なビジネスエリア**」リストから「**選択されたビジネスエリア**」リストに移動します。

[Ctrl] キーを押しながら別のビジネスエリアをクリックすると、複数のビジネスエリアを選択できます。
4. 「OK」をクリックして変更内容を保存します。

ビジネスエリアには、「**選択されたフォルダ**」リストで指定したフォルダが割り当てられています。

ビジネスエリアにおけるフォルダのソート方法

選択したビジネスエリアで、フォルダをアルファベット順にソートできます。

ビジネスエリアでフォルダをアルファベット順にソートする手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」: 「データ」タブでビジネスエリアを選択します。
2. 「編集」 → 「フォルダのソート」を選択します。

注意: Discoverer Administrator には「アルファベット順」ダイアログが表示され、アルファベット順にソートされるフォルダ数と、既存の順序が失われることが表示されます。

3. 「はい」をクリックして続行します。

注意

ビジネスエリアをロードするときに、バルク・ロード中にもフォルダをソートできます。フォルダをソートするには、次の2通りの方法があります。

- ロード・ウィザードの場合は、第4章の「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」を参照してください。
- コマンドライン・インタフェースの場合は、第21章の「/load」を参照してください。

フォルダにおけるアイテムのソート方法

選択したフォルダで、アイテムおよび条件をアルファベット順にソートできます。

フォルダでアイテムをアルファベット順にソートする手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」: 「データ」タブでビジネスエリアからフォルダを選択します。
2. 「編集」 → 「アイテムのソート」を選択します。

注意: Discoverer Administrator には「アルファベット順」ダイアログが表示され、アルファベット順にソートされるアイテム数と、既存の順序が失われることが表示されます。

3. 「はい」をクリックして続行します。

注意

ビジネスエリアをロードするときに、バルク・ロード中にもアイテムをソートできます。アイテムをソートするには、次の2通りの方法があります。

- ロード・ウィザードの場合は、第4章の「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」を参照してください。
- コマンドライン・インタフェースの場合は、第21章の「/load」を参照してください。

ビジネスエリアにおけるフォルダの順序変更方法

Discoverer Administrator に表示されるフォルダの順序は、Discoverer エンド・ユーザーに対して表示される順序と同じです。デフォルトでは、ビジネスエリア内のフォルダはアルファベット順に表示されます。ただし、デフォルト順序を次の目的で変更できます。

- 論理的に接続されたフォルダのグループ化
- 最も一般的に使用されているフォルダのリスト最上部への移動

ビジネスエリアのフォルダ順序を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「データ」タブを表示します。
2. フォルダ・リスト内の表示する場所へフォルダをドラッグ・アンド・ドロップします。

ビジネスエリアにおけるフォルダの検証方法

Discoverer Administrator フォルダで問題が発生することがあります。たとえば、Discoverer エンド・ユーザーがアクセスできないフォルダが Discoverer Administrator に表示されることがあります。「フォルダの妥当性チェック」機能を使用して、問題を診断してください。

ビジネスエリアにおけるフォルダ間のリンクおよびフォルダが参照するデータベース・オブジェクトを検証する手順は、次のとおりです。

1. 「表示」→「フォルダの妥当性チェック」を選択します。

「フォルダの妥当性チェック」機能では、データベースに関連する表が存在することおよび EUL 所有者が関連する表への SELECT アクセス権を持っていることがデータベース・パーサーを使用してチェックされます。

Discoverer への接続管理

Discoverer への接続管理

この章では、Discoverer エンド・ユーザーが Discoverer に接続する方法を説明します。この章は、次のトピックで構成されています。

- [Discoverer 接続](#)
- [接続の種類](#)
- [「接続先 Discoverer Plus」 ページ](#)
- [パブリック接続の作成方法](#)
- [Discoverer ユーザーによるユーザー定義接続の作成方法](#)

Discoverer 接続

Discoverer 接続は、Discoverer エンド・ユーザーが Discoverer への接続時に使用するログイン詳細で、次の項目で構成されています。

- ユーザー名 — ユーザーを識別
- パスワード — ユーザーを認証
- データベース名 — ユーザーの分析対象となる情報を含むデータベースを指定
- (オプション) Oracle Applications 職責 — Discoverer を Oracle Applications と併用するときにユーザーの職責を指定
- EUL — 使用する End User Layer を識別
- 言語 — Discoverer の言語を指定

接続の種類

次の 2 種類の接続があります。

- ユーザー定義接続 – [「ユーザー定義接続」](#) を参照してください。
- パブリック接続 – [「パブリック接続」](#) を参照してください。

ユーザー定義接続

ユーザー定義接続は、Discoverer 管理者によって提供された固有の接続（ユーザー名、パスワードおよびデータベース名）を使用して Discoverer に接続する際に Discoverer ユーザーによって作成されます。ユーザー定義接続には、次の特性があります。

- ユーザー定義接続は、作成した Discoverer ユーザーのプライベートなオブジェクトです。
- Discoverer ユーザーは各自のユーザー定義接続を作成およびメンテナンスします。

Discoverer エンド・ユーザーによる接続作成を可能にする方法の詳細は、[「Discoverer ユーザーによるユーザー定義接続の作成方法」](#) を参照してください。

パブリック接続

パブリック接続では、Discoverer ワークブックへのアクセスを可能にする事前定義接続を Discoverer Plus と Discoverer Viewer ユーザー・グループに提供できます。パブリック接続の詳細は、[「パブリック接続の作成方法」](#) を参照してください。

たとえば、ユーザーをデータベース Sales_DB にユーザー「Sales Analyzer」として接続するパブリック接続「Analyze Sales」を作成できます。「Sales Analyzer」として Sales_DB に接続するすべてのユーザーには、販売ワークブックへのアクセス権があります。

Discoverer ユーザーに Discoverer Plus チュートリアルを提供する場合は、チュートリアル・ユーザーとしてチュートリアル・データベースに接続するパブリック接続「Start tutorial」を作成できます。

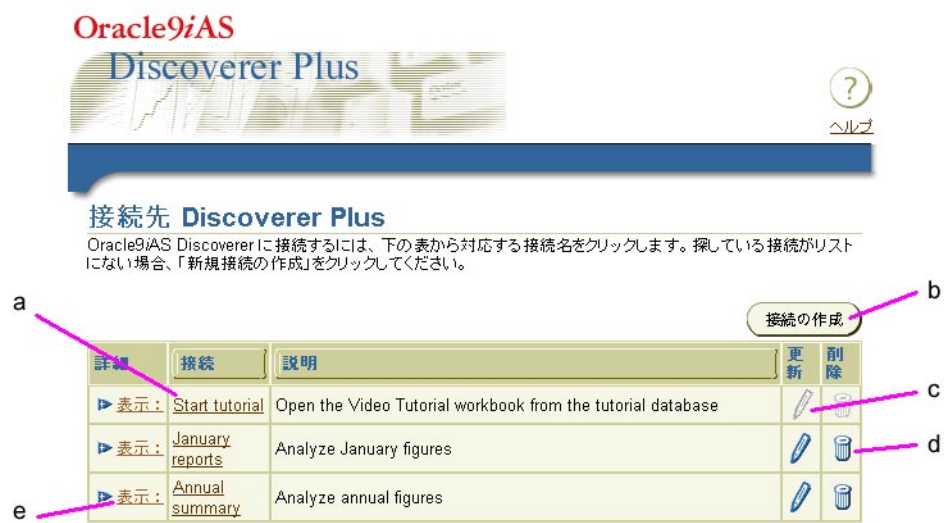
Discoverer 管理者のみがパブリック接続をメンテナンスできます。Discoverer Plus および Viewer ユーザーは、パブリック接続を追加、編集または削除できません。

「接続先 Discoverer Plus」 ページ

Single Sign-On (SSO) によって Discoverer Viewer および Discoverer Plus に接続するには、「接続先 Discoverer Plus」 ページを使用します。

次の図は、「接続先 Discoverer Plus」 ページを示しています。この例では、「接続」 リストに使用可能な 3 つの接続（「Start tutorial」、「January reports」および「Annual Summary」）があります。「Start tutorial」 接続を使用して Discoverer を開始するには、Discoverer ユーザーは「Start tutorial」をクリックします。

図 6-1 「接続先 Discoverer Plus」 ページ



この図で重要な点は次のとおりです。

- a. 既存の接続をクリックすると、接続に格納されたログイン詳細によって Discoverer が開始されます。
- b. ここをクリックすると、ログイン情報を格納する新規接続が作成されます。
- c. ここをクリックして接続を編集し、ログイン情報を変更します。
注意：この場合、接続は Discoverer 管理者によって作成されたパブリック接続であるため、「編集」オプションはグレー表示されています。
- d. ここをクリックすると接続が削除され、ログイン情報が削除されます。
- e. (オプション) ここをクリックすると、接続に関する詳細が表示されます (Netscape Navigator の場合のみ)。

注意

接続の使用の詳細は、『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

パブリック接続の作成方法

Discoverer Plus および Discoverer Viewer ユーザーに事前定義ログインを提供する場合は、パブリック接続を作成します。たとえば、チュートリアル・データベースにチュートリアル・パブリック接続「Start tutorial」を作成できます。パブリック接続を作成するには、Oracle Enterprise Manager を使用します。Oracle Enterprise Manager の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

パブリック接続を作成する手順は、次のとおりです。

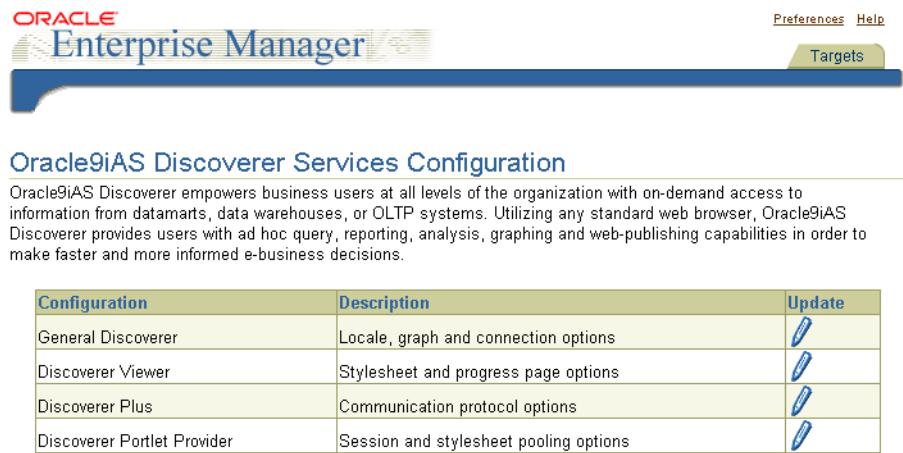
1. Oracle Enterprise Manager を起動します。

図 6-2 Oracle Enterprise Manager



2. 「名前」列の Discoverer コンポーネント名をクリックすると、「Oracle9iAS Discoverer サービス構成」ページが表示されます。
- たとえば、Discoverer コンポーネントが「My Discoverer」と呼ばれている場合、「My Discoverer」をクリックすると「Oracle9iAS Discoverer サービス構成」ページが表示されます。

図 6-3 「Oracle9iAS Discoverer サービス構成」ページ



3. 「Discoverer 一般」行の「更新」アイコンをクリックすると、「Discoverer 一般構成」ページが表示されます。

図 6-4 「Discoverer 一般構成」ページ

Discoverer Public Connections

Use a public connection to allow users to see data without logging into Discoverer. Use a database account that has appropriate (restricted) database privileges.

Create Connection

Connection	Description	Update	Delete
Connection	Description	Update	

Discoverer User Defined Connections

Users can define their own Discoverer connections based on database accounts accessible to them. These user connections will store the same type of information as the public connections and are only available to the user who defines them.

☒ Allow users to define their own connections in Discoverer Plus and Discoverer Viewer

Cancel Apply

[Targets](#) | [Preferences](#) | [Help](#)

Copyright 2001, Oracle Corp. [Privacy Statement](#)

4. 「新規接続の作成」をクリックすると、「Discoverer パブリック接続の作成」ページが表示されます。

図 6-5 「Discoverer パブリック接続の作成」ページ

The screenshot shows the Oracle Enterprise Manager web interface. At the top, the Oracle logo and 'Enterprise Manager' text are visible, along with 'Preferences' and 'Help' links. A 'Targets' tab is highlighted. The main heading is 'Create Discoverer Public Connection'. Below this is a section titled 'Connection Name and Description' with instructions: 'Enter a connection name that is easy to remember. Add a description for this connection, followed by the database account details.' The form includes a 'Connection Name' text field, a 'Connection Description' text area, and a 'Locale' dropdown menu set to 'English (United Kingdom)'. A note states: 'This locale is used when there is no locale explicitly specified on the URL (&nlst)'. The next section is 'Database Account Details', which contains a checkbox labeled 'Allow users in Discoverer Plus and Discoverer Viewer to see database account details'.

ORACLE
Enterprise Manager
Preferences Help
Targets

Create Discoverer Public Connection

Connection Name and Description

Enter a connection name that is easy to remember. Add a description for this connection, followed by the database account details.

Connection Name

Connection Description

Locale

This locale is used when there is no locale explicitly specified on the URL (&nlst).

Database Account Details

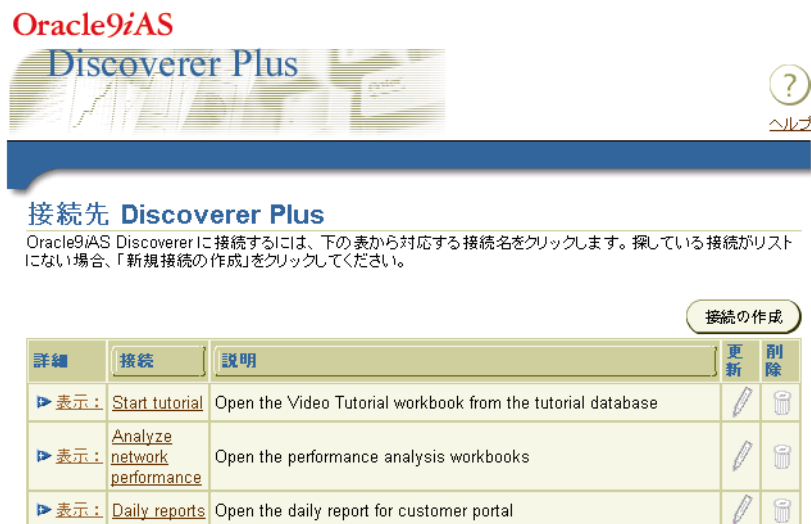
☐ Allow users in Discoverer Plus and Discoverer Viewer to see database account details

5. 接続の詳細を入力し、「適用」をクリックして詳細を保存します。

作成した新規接続が「Discoverer 一般構成」ページの「Discoverer パブリック接続」リストに表示されます。

Discoverer Plus または Discoverer Viewer に接続すると、Discoverer エンド・ユーザーは作成した接続を選択できるようになります（詳細は次の例を参照してください）。

図 6-6 Oracle9iAS Discoverer Plus の「接続先 Discoverer Plus」ダイアログ



この例では、3つの接続（「Start tutorial」、「Analyze network performance」および「Daily reports」）がすべての Discoverer ユーザーが使用できるパブリック接続です。「更新」および「削除」アイコンはグレー表示されており、Discoverer エンド・ユーザーがこれら3つの接続を変更または削除できないことを示しています。

Discoverer ユーザーによるユーザー定義接続の作成方法

ユーザーに各自の Discoverer 接続を管理させる場合は、Discoverer Plus および Discoverer Viewer ユーザーによるユーザー定義接続の作成を許可します。ユーザーによるユーザー定義接続の作成を許可するには、Oracle Enterprise Manager を使用します。Oracle Enterprise Manager の詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

Discoverer Plus および Discoverer Viewer ユーザーによるユーザー定義接続の作成を許可する方法

- 1. Oracle Enterprise Manager を起動します。

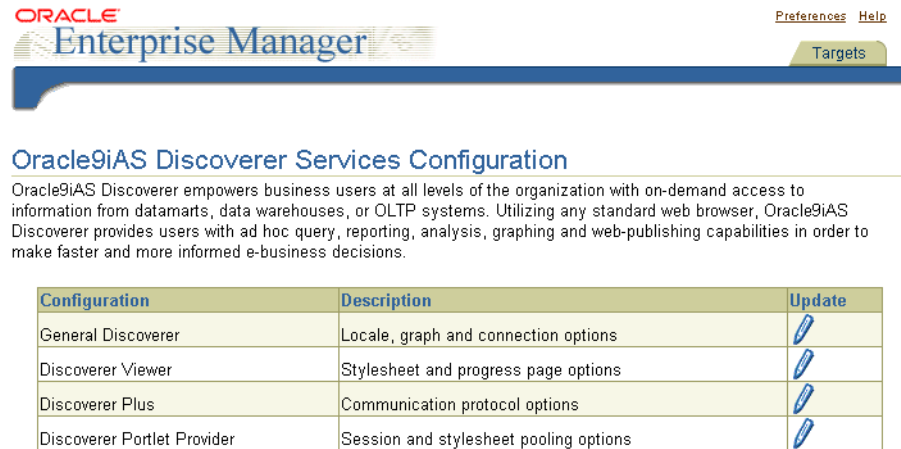
図 6-7 Oracle Enterprise Manager



2. 「名前」列の Discoverer コンポーネント名をクリックすると、「Oracle9iAS Discoverer サービス構成」ページが表示されます。

たとえば、Discoverer コンポーネントが「My Discoverer」と呼ばれている場合、「My Discoverer」をクリックすると「Oracle9iAS Discoverer サービス構成」ページが表示されます。

図 6-8 「Oracle9iAS Discoverer サービス構成」ページ



- 3. 「Discoverer 一般」 行の「更新」 アイコンをクリックすると、「Discoverer 一般構成」 ページが表示されます。

図 6-9 「Discoverer 一般構成」 ページ

Discoverer Public Connections

Use a public connection to allow users to see data without logging into Discoverer. Use a database account that has appropriate (restricted) database privileges.

Create Connection

Connection	Description	Update	Delete
Connection	Description	Update	

Discoverer User Defined Connections

Users can define their own Discoverer connections based on database accounts accessible to them. These user connections will store the same type of information as the public connections and are only available to the user who defines them.

☒ Allow users to define their own connections in Discoverer Plus and Discoverer Viewer

CancelApply

Targets | Preferences | Help

Copyright 2001, Oracle Corp. Privacy Statement

- 4. 「ユーザーが Discoverer Plus および Discoverer Viewer において、各自の接続を定義できるようにする」 チェックボックスを選択します。
- 5. 「適用」 をクリックして詳細を保存し、「Discoverer 一般構成」 ページを閉じます。

Discoverer Plus または Discoverer Viewer に接続すると、Discoverer エンド・ユーザーは「接続の作成」 ボタンを使用して新規接続を追加できるようになります。

情報に対するアクセス制御

情報に対するアクセス制御

この章では、Discoverer Administrator を使用して情報へのアクセスを制御する方法について説明します。この章は、次のトピックで構成されています。

- [Discoverer およびセキュリティ](#)
- [Discoverer アクセス権限](#)
- [Discoverer 作業権限](#)
- [ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール（職責）の指定方法](#)
- [ユーザーまたはロール（職責）がアクセスできるビジネスエリアの指定方法](#)
- [ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法](#)
- [特定の作業を実行するユーザーまたはロール（職責）の指定方法](#)
- [問合せ取出し制限の設定方法](#)
- [スケジュール済みワークブック制限の設定方法](#)

Discoverer およびセキュリティ

Discoverer 管理者には、ユーザーがアクセスできる情報と、その情報を使用して実行できる操作を制御する責任があります。Discoverer アクセス権限および作業権限は、次のように使します。

- Discoverer アクセス権限を使用した、ビジネスエリアのデータを参照および使用できるユーザーの制御
- Discoverer 作業権限を使用した、各ユーザーに実行が許可される作業の制御

Discoverer アクセス権限および作業権限は、データベース・ロールおよびデータベース・ユーザーに付与できます。アクセス権限または作業権限をロールに付与すると、そのロールのユーザーすべてがそのロールのアクセス権限と作業権限を持ちます。Oracle Applications モードで Discoverer Administrator を実行している場合は、ロールのかわりに Oracle Applications 職責にアクセス権限または作業権限を付与します。Oracle Applications モードの詳細は、[第 17 章の「Oracle Applications ユーザーに対する Discoverer のサポート機能」](#)を参照してください。

Discoverer Administrator で付与するアクセス権限および作業権限は Discoverer のビジネスエリアのみに適用され、基礎となるデータベース表には適用されません。データベース表へのデータ・アクセス権は、データベース管理者が制御します。

Discoverer Administrator で設定するアクセス権限および作業権限に関係なく、Discoverer エンド・ユーザーに次のデータベース権限が付与されている場合はフォルダのみが表示されます。

- フォルダで使用する基礎となる表のすべてに対する SELECT 権限

- フォルダで使用する任意の PL/SQL 関数に対する EXECUTE 権限

ユーザーにビジネスエリアの管理権限を付与すると、ユーザーはそのビジネスエリアで管理作業（フォルダ、ユーザー定義アイテム、条件、階層、サマリーの作成など）を実行できます。特定のビジネスエリアで管理権限を持つユーザーは、そのビジネスエリアの管理権限を他のユーザーに付与することもできます。複数のユーザーにビジネスエリア管理を委譲できますが、各ビジネスエリアの制御メンテナンスは単独の管理者が行う方が容易です。

Discoverer アクセス権限

Discoverer アクセス権限を使用して、ビジネスエリアのデータを参照および使用できるユーザーを制御できます。

ビジネスエリアへのアクセス制御方法には2通りあります。

- 特定のユーザーまたはロールがアクセスできるビジネスエリアの指定による制御（詳細は、「[ユーザーまたはロール（職責）がアクセスできるビジネスエリアの指定方法](#)」を参照してください）
- 特定のビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロールの指定による制御（詳細は、「[ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール（職責）の指定方法](#)」を参照してください）

ビジネスエリアで Discoverer エンド・ユーザーにフォルダが表示される前に、フォルダが参照する表に対するデータベース・アクセスをそのユーザーが持っていることが Discoverer によって確認されます。ユーザーが、フォルダが参照する表に対するアクセス権を持っていない場合、Discoverer ではフォルダが表示されません。ObjectsAlwaysAccessible レジストリ設定値を変更すると（アクセス権限がほとんど変更されないパフォーマンスを改善する場合など）、この動作を上書きできます（詳細は、[第22章の「Discoverer のレジストリ設定」](#)を参照してください）。

Discoverer 作業権限

Discoverer 作業権限を使用して、各ユーザーに実行が許可される作業を制御できます。

作業権限を使用して、Discoverer エンド・ユーザーが次の操作を実行できるかどうかを指定します。

- 新規ワークシートの作成または既存ワークシートの編集（このオプションがない場合、ユーザーが実行可能なワークシートは事前定義済みのワークシートのみです）
- アイテム・ドリル、関連アイテムへのドリル、サマリーから詳細アイテムへのドリルの使用
- ドリル・アウトによる他のアプリケーションの起動
- 他のユーザーに対するワークブックへのアクセス権の付与
- スケジュール済みワークブックの作成および編集

- データベースへのワークブックの保存
- 問合せパフォーマンス統計の収集

作業権限を使用して、Discoverer 管理者が次の操作を実行できるかどうかを指定します。

- 既存ビジネスエリアの書式設定情報のみの編集
- 新規ビジネスエリアの作成および既存ビジネスエリアの編集
- サマリー表の作成
- EUL 権限の付与および取消し
- エンド・ユーザーのスケジュール済みワークブックのメンテナンス

ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール（職責）の指定方法

注意：Oracle Applications データベース・ユーザーの接続時には、Discoverer ではロールではなく職責が表示されます。

特定のビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロールを指定する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「セキュリティ」を選択すると、「セキュリティ」ダイアログ：「ビジネスエリア → ユーザー」タブが表示されます。

図 7-1 「セキュリティ」ダイアログ：「ビジネスエリア → ユーザー」タブ



2. 「ビジネスエリア」ドロップダウン・リストから、アクセス権を付与するビジネスエリアを選択します。
3. 「ユーザー」チェックボックスまたは「ロール」チェックボックス（あるいはその両方）を必要に応じて選択し、「**選択可能なユーザー / ロール**」リストの内容を指定します。
4. 選択したビジネスエリアへのアクセス権を付与するユーザーまたはロールを「**選択可能なユーザー / ロール**」リストから「**選択されたユーザー / ロール**」リストに移動します。
[Ctrl] キーを押しながら別のユーザーまたはロールをクリックすると、複数のユーザーまたはロールを選択できます。
5. 「**選択されたユーザー / ロール**」リストに追加する各新規ユーザーまたは新規ロールについて、次の指示に従ってビジネスエリアへの管理アクセス権を持つかどうかを指定します。
 - a. 「**選択されたユーザー / ロール**」リストのユーザーまたはロールをクリックします。
 - b. 必要に応じて、「**管理を許可する**」チェックボックスを選択または選択解除します。ユーザーに対する「**管理を許可する**」の設定によって、ユーザーが実行できる管理作業が制御されます。詳細は、「[ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法](#)」を参照してください。
6. 「OK」をクリックして変更内容を保存し、「セキュリティ」ダイアログを閉じます。

注意

- ユーザーまたはロールからビジネスエリアへのアクセス権を削除するには、ユーザーまたはロールを「**選択されたユーザー / ロール**」リストから「**選択可能なユーザー / ロール**」リストに移動します。
- 「**選択可能なユーザー / ロール**」リストには、PUBLIC というロールが含まれています。権限を定義していないユーザーまたはロールのデフォルト・アクセス権限を表示または編集するには、このロールを選択します。
- Oracle Applications ユーザーとして Discoverer Administrator を実行している場合、「セキュリティ」ダイアログにはロールではなく Oracle Applications 職責が表示されます。Applications モードの詳細は、[第 17 章の「Oracle Applications ユーザーに対する Discoverer のサポート機能」](#)を参照してください。

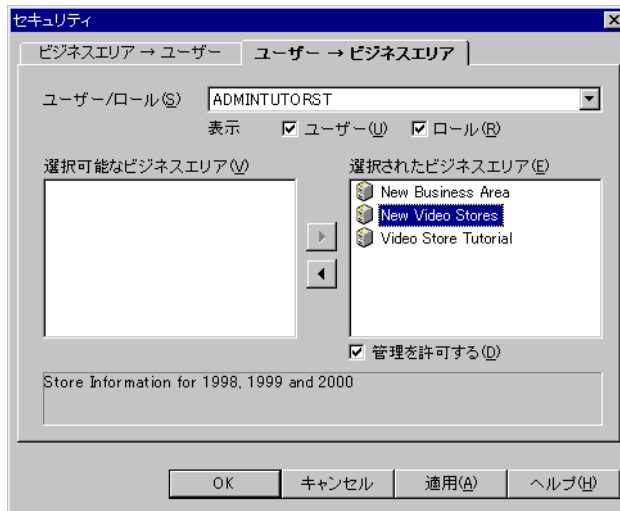
ユーザーまたはロール（職責）がアクセスできるビジネスエリアの指定方法

注意：Oracle Applications データベース・ユーザーの接続時には、Discoverer ではロールではなく職責が表示されます。

ユーザーまたはロールがアクセスできるビジネスエリアを指定する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「セキュリティ」を選択すると、「セキュリティ」ダイアログ：「ユーザー→ビジネスエリア」タブが表示されます。

図 7-2 「セキュリティ」ダイアログ：「ユーザー→ビジネスエリア」タブ



2. 「ユーザー」チェックボックスまたは「ロール」チェックボックス（あるいはその両方）を必要に応じて選択し、「ユーザー/ロール」ドロップダウン・リストの内容を指定します。
 3. 「ユーザー/ロール」ドロップダウン・リストから、アクセス権を付与するユーザーまたはロールを選択します。
 4. 選択したユーザーまたはロールがアクセス権を持つビジネスエリアを「選択可能なビジネスエリア」リストから「選択されたビジネスエリア」リストに移動します。
- [Ctrl] キーを押しながら別のビジネスエリアをクリックすると、複数のビジネスエリアを選択できます。

5. 「**選択されたビジネスエリア**」リストに追加する各新規ビジネスエリアについて、次の指示に従って選択したユーザーまたはロールがビジネスエリアへの管理アクセス権を持つかどうかを指定します。
 - a. 「**選択されたビジネスエリア**」リストのビジネスエリアをクリックします。
 - b. 必要に応じて、「**管理を許可する**」チェックボックスを選択または選択解除します。ユーザーに対する「**管理を許可する**」の設定によって、ユーザーが実行できる管理作業が制御されます。詳細は、「[ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法](#)」を参照してください。
6. 「OK」をクリックして変更内容を保存し、「セキュリティ」ダイアログを閉じます。

注意

- ユーザーまたはロールからビジネスエリアへのアクセス権を削除するには、ビジネスエリアを「**選択されたビジネスエリア**」リストから「**選択可能なビジネスエリア**」リストに移動します。
- 「**ユーザー / ロール**」リストには、PUBLIC というロールが含まれています。権限を定義していないユーザーまたはロールのデフォルト・アクセス権限を表示または編集するには、このロールを選択します。
- Oracle Applications ユーザーとして Discoverer Administrator を実行している場合、「セキュリティ」ダイアログにはロールではなく Oracle Applications 職責が表示されます。Applications モードの詳細は、[第 17 章の「Oracle Applications ユーザーに対する Discoverer のサポート機能](#)」を参照してください。

ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法

注意： Oracle Applications ユーザーの接続時には、Discoverer ではロールではなく職責が表示されます。

ユーザーまたはロールが実行できる作業を指定する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「権限」を選択すると、「権限」ダイアログ：「ユーザー→権限」タブが表示されます。

図 7-3 「権限」ダイアログ：「ユーザー→権限」タブ



2. 「ユーザー」チェックボックスまたは「ロール」チェックボックス（あるいはその両方）を必要に応じて選択し、「ユーザー/ロール」ドロップダウン・リストの内容を指定します。
3. 「ユーザー/ロール」ドロップダウン・リストから、作業権限を変更するユーザーまたはロールを選択します。
4. 「権限」リストの適切なチェックボックスを選択または選択解除して、ユーザーまたはロールに対する特定の作業権限を付与または取り消します。

注意： 子権限（リストのインデント表示）を付与するには、まず対応する親権限（子権限の上にあるインデントされていない最初の権限）を付与する必要があります。ユーザーが職責を介して Discoverer Desktop へのアクセス権を持っている場合は、そのユーザーに選択された子権限は親権限のチェックが外されている（グレー表示されている）

場合でもアクティブになります。ユーザーの子権限の合計は、職責とユーザー権限の組合せによって決定されます。

ヒント：「権限」リストの権限上にカーソルを移動すると、ダイアログの右側にその権限の簡単な説明が表示されます。

5. 「システム プロファイルを選択してください。」ドロップダウン・リストから、ユーザーまたはロールに適用するシステム・プロファイルを選択します（Oracle データベースを使用している場合のみ使用可能）。

システム・プロファイルは、データベース・リソースへのアクセスを制御するためにデータベース管理者によって作成されます。

注意： Discoverer Administrator 内でシステム・プロファイルを割り当てるには、次のデータベース・ビューに対するアクセス権を持っている必要があります。

- DBA_PROFILES
- DBA_USERS

6. 「OK」をクリックして変更内容を保存し、「権限」ダイアログを閉じます。

注意

- 変更内容は、ユーザーが Discoverer に再接続したときに有効になります。
- ユーザー / ロールのドロップダウン・リストには、PUBLIC というロールが含まれています。権限を定義していないユーザーまたはロールのデフォルト作業権限を表示または編集するには、このロールを選択します。
- ユーザーまたはロールに「管理」権限を付与するには、そのユーザーにビジネスエリアへの管理アクセス権も付与する必要があります。詳細は、「[特定の作業を実行するユーザーまたはロール（職責）の指定方法](#)」を参照してください。
- Oracle Applications ユーザーとして Discoverer Administrator を実行している場合、「権限」ダイアログにはロールではなく Oracle Applications 職責が表示されます。Oracle Applications モードの詳細は、[第 17 章の「Oracle Applications ユーザーに対する Discoverer のサポート機能」](#)を参照してください。

特定の作業を実行するユーザーまたはロール（職責）の指定方法

注意： Oracle Applications ユーザーの接続時には、Discoverer ではロールではなく職責が表示されます。

特定の作業を実行できるユーザーまたはロールを指定する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「権限」を選択すると、「権限」ダイアログ：「権限→ユーザー」タブが表示されます。

図 7-4 「権限」ダイアログ：「権限 → ユーザー」タブ



2. ドロップダウン・リストから、ユーザーまたはロールに対して付与する（あるいは取り消す）作業権限を選択します。

ドロップダウン・リストから権限を選択すると、その権限の簡単な説明がダイアログの右側に表示されます。

3. 「ユーザー」チェックボックスまたは「ロール」チェックボックス（あるいはその両方）を必要に応じて選択し、「ユーザー/ロール」リストの内容を指定します。

「ユーザー/ロール」リストの内容は、アルファベット順にソートされます。ユーザーとロールが両方含まれる場合は、ユーザーが最初に表示されます。

4. 「ユーザー/ロール」リストの適切なチェックボックスを選択または選択解除して、現在選択されている作業の権限を付与または取り消します。

5. 「OK」をクリックして変更内容を保存し、「権限」ダイアログを閉じます。

注意

- 変更内容は、ユーザーが Discoverer に再接続したときに有効になります。
- ユーザーまたはロールに「管理」権限を付与する（または取り消す）には、そのユーザーにビジネスエリアへの管理アクセス権も付与する（または取り消す）必要があります。詳細は、「[ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール（職責）の指定方法](#)」を参照してください。
- Oracle Applications ユーザーとして Discoverer Administrator を実行している場合、「権限」ダイアログにはロールではなく Oracle Applications 職責が表示されます。Oracle Applications モードの詳細は、[第 17 章の「Oracle Applications ユーザーに対する Discoverer のサポート機能」](#)を参照してください。

問合せ取出し制限の設定方法

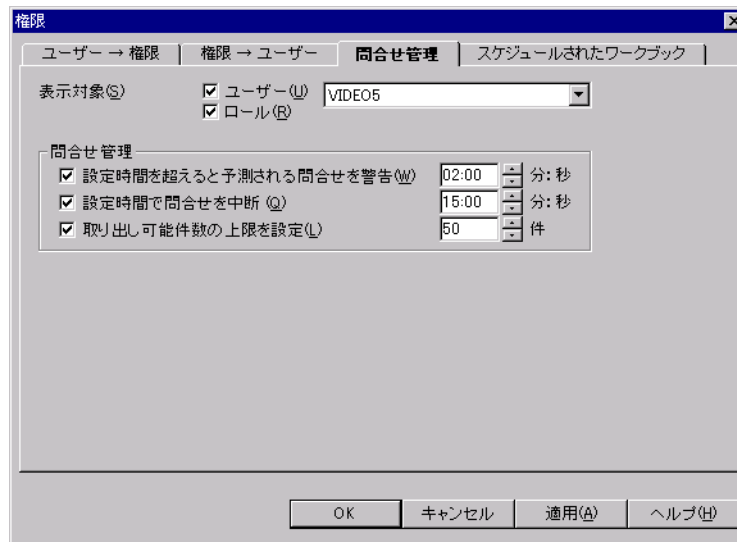
ユーザーおよびロールに問合せ制限を設定すると、全体的なシステム・パフォーマンスをメンテナンスできます。

注意：Oracle Applications データベース・ユーザーの接続時には、Discoverer ではロールではなく職責が表示されます。

ユーザーまたはロールに問合せ取出し制限を設定する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「権限」を選択すると、「[権限](#) ダイアログ：「[問合せ管理](#)」タブが表示されます。

図 7-5 「権限」ダイアログ：「問合せ管理」タブ



- 2. 「ユーザー」チェックボックスまたは「ルール」チェックボックス（あるいはその両方）を必要に応じて選択し、「ユーザー / ルール」ドロップダウン・リストの内容を指定します。

「ルール」チェックボックスは、Oracle データベースを使用している場合のみ使用可能です。
- 3. 「ユーザー / ルール」ドロップダウン・リストから、問合せ制限を指定するユーザーまたはルールを選択します。
- 4. 必要に応じて、次の「問合せ管理」オプションを指定します。

オプション	使用目的：
設定時間を超えると予測される問合せを警告	問合せの実行に予測される時間が指定した上限を超える場合に警告を発行します（ODBC の使用時にはこの機能は使用できません）。
設定時間で問合せを中断	指定した上限を超えた問合せを停止します。
取り出し可能件数の上限を設定	問合せで取り出せる行数を指定した上限に制限します。

- 5. 「OK」をクリックして変更内容を保存し、「権限」ダイアログを閉じます。

注意

- Discoverer によって、問合せの実行時間および取り出される行数を予測する方法の詳細は、[第 20 章の「問合せのパフォーマンスの予測」](#)を参照してください。
- Discoverer によって、設定された上限を超えて問合せが実行されると予測された場合、ユーザーが「[権限](#)」ダイアログ：「[スケジュールされたワークブック](#)」タブのオプションを使用して、スケジュール済みワークブックとして問合せを実行するように指定できます。
- Oracle Applications ユーザーとして Discoverer Administrator を実行している場合、「権限」ダイアログにはルールではなく Oracle Applications 職責が表示されます。Oracle Applications モードの詳細は、[第 17 章の「Oracle Applications ユーザーに対する Discoverer のサポート機能」](#)を参照してください。

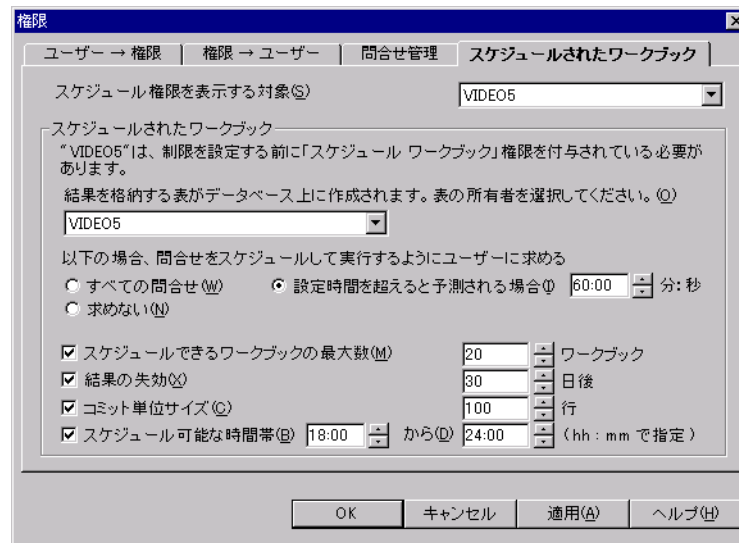
スケジュール済みワークブック制限の設定方法

スケジュール済みワークブックの制限を設定すると、Discoverer エンド・ユーザーによるスケジュール済みワークブックの使用方法を制御できます。

ユーザーまたはロールにスケジュール済みワークブックの制限を設定する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「権限」を選択すると、「権限」ダイアログ:「スケジュールされたワークブック」タブが表示されます。

図 7-6 「権限」ダイアログ:「スケジュールされたワークブック」タブ



2. 「スケジュール権限を表示する対象」ドロップダウン・リストから、スケジュール権限を指定するユーザーを選択します。
3. データベースに作成される結果表（スケジュール済みワークブックの結果を含む表）を所有するユーザーを選択します。

スケジュール済みワークブックの結果は、データベース表に格納されます。これらの表は、スケジュール済みワークブックを実行したユーザーとは異なるユーザーに所属させることができます。

4. ユーザーがワークブックのスケジュールを行う時期を次のように指定します。

オプション	指定内容：
すべての問合せ	ユーザーは常にワークブックをスケジュールする必要があります。
求めない	ユーザーは問合せのスケジュールを強制されません（ユーザーは問合せをオンラインで実行するか、あるいはスケジュールするかを選択できます）。
設定時間を超えると予測される場合	ユーザーは、指定した予測時間を超える問合せをスケジュールする必要があります。

5. 必要に応じて、次の「スケジュールされたワークブック」オプションを指定します。

オプション	使用目的：
スケジュールできるワークブックの最大数	ユーザーが一度にメンテナンスできるスケジュール済みワークブックを指定した数に制限します。 このオプションを使用すると、DBMS_JOB キューの他のジョブが実行できないほど多くのスケジュール済みワークブックをユーザーが発行しないようにできます。
結果の失効	ユーザーのスケジュール済みワークブックの結果の存続期間を指定した日数に制限します（結果はユーザーの Discoverer セッション終了時に削除されます）。
コミット単位サイズ	結果表に書き込まれる行数を制限します。 たとえば、書き込まれる行数が 1000 行で「コミット単位サイズ」が 100 の場合は、10 回の書込みが行われます。 大規模な結果セットでは、「コミット単位サイズ」をデフォルト以上に設定するとサーバー・パフォーマンスを改善できます（ただし、「コミット単位サイズ」を 1001 以上に設定するとほとんど改善されません）。
スケジュール可能な時間帯	ユーザーがワークブックのスケジュールを実行できる時間帯を指定します。

6. 「OK」をクリックして変更内容を保存し、「権限」ダイアログを閉じます。

注意

単一データベース・ユーザーが、すべてのユーザーのスケジュール済みワークブックの結果を含む表を所有するように指定できます（これには、スケジュール済みワークブックを実行する追加権限が個々のユーザーに必要な、という利点があります）。あるいは、スケジュール済みワークブック結果スキーマが、各ユーザーのスケジュール済みワークブックの結果を含む表を所有するように指定できます（スペース割当制限が共有されないため、単一データベース・ユーザーが表を所有する場合よりも領域が消費される可能性が低くなる、と

いう利点があります)。詳細は、[第 8 章の「スケジュール済みワークブックの結果の格納場所」](#)を参照してください。

ワークブックのスケジュール

ワークブックのスケジュール

この章では、ユーザーによるワークブックのスケジュールを可能にする方法について説明します。この章のトピックは次のとおりです。

- [ワークブックおよびスケジュール済みワークブック](#)
- [ワークブックをスケジュールする理由](#)
- [エンド・ユーザーがワークブックをスケジュールする際の処理](#)
- [ワークブックのスケジュールをサポートする Oracle データベースの機能](#)
- [スケジュール済みワークブックの結果の格納場所](#)
- [ワークブックをスケジュールするための前提条件](#)
- [DBMS_JOB パッケージがインストールされていることを確認する方法](#)
- [スケジュール済みワークブックの結果を含む表の所有者を指定する方法](#)
- [新しいスケジュール済みジョブをサーバーがチェックする間隔の制御方法](#)
- [スケジュール済みワークブックの表示および管理方法](#)
- [スケジュール済みワークブックと、Discoverer の現行リリースおよび以前のリリースとの間の互換性](#)

ワークブックおよびスケジュール済みワークブック

ワークブックとは、Discoverer ワークシートの集合です。ワークブックは本来、問合せ定義を含みます。Discoverer エンド・ユーザーは、主にデータベースにワークブックを格納できます。また、Discoverer Desktop では、ユーザーは各自の PC またはネットワーク・ファイル・サーバーにもワークブックを格納できます。

スケジュール済みワークブックとは、特定の日付、時刻および間隔で自動的に実行されるように、ユーザーにより設定されたワークブックです。スケジュール済みワークブックは、データベース・サーバー上の処理キューに配置されます。エンド・ユーザーは、Discoverer Plus および Discoverer Desktop を使用してワークブックをスケジュールできます。Discoverer 管理者は、Discoverer Administrator を使用してスケジュール済みワークブックの監視とメンテナンスを行うことができます。

次の点に注意してください。

- ユーザーは、Discoverer のコマンドライン・オプションを使用してバックグラウンドでワークブックを実行できます (Discoverer Desktop のみ)。このように実行するワークブックは、スケジュール済みワークブックではありません。
- スケジュール済みワークブック、スケジュール情報およびスケジュール済みワークブックの結果は、ビジネスエリアのエクスポート時にエクスポートされません。

- スケジュール済みワークブックで使用する EUL のオブジェクトが、ワークブックのスケジュール時および結果セットの表示時との間に変更された場合、スケジュール済みワークブックの状態が、その EUL が変更されたことを示すように設定されます。

ワークブックをスケジュールする理由

Discoverer エンド・ユーザーにとって、ワークブックをスケジュールできることは次のようなレポートの実行に役立ちます。

- 実行に時間がかかるレポート
- 定期的な間隔で実行する必要があるレポート

たとえば、Discoverer エンド・ユーザーが、完了するまでに時間がかかるレポートを実行する場合について考えます。ユーザーは、レポートを深夜に実行してその結果を翌朝表示するようにスケジュールできます。

Discoverer 管理者にとっては、ワークブックのスケジュールを行うと長時間の間合せ実行によるシステムのパフォーマンス低下を避けられるため、便利です。ユーザーにワークブック（すべてのワークブック、あるいは指定した予測時間を超えるワークブックのみ）をスケジュールさせたり、スケジュール済みワークブックの実行を許可する間隔を指定できます。

エンド・ユーザーがワークブックをスケジュールする際の処理

次の表は、エンド・ユーザーが Discoverer Desktop/Plus のワークブックをスケジュールするときに実行される処理を示しています。

	処理	注意
1.	ユーザーが、スケジュール済みワークブックに含めるワークシート（1 つまたは複数）を選択します。	
2.	ユーザーが、スケジュール済みワークブックを実行する日付、時間および間隔を指定します。	

	処理	注意
3.	Discoverer Desktop/Plus により、スケジュール済みワークブックの数が、ユーザーによって指定された制限を超えていないことが確認されます。	<p>スケジュール済みワークブックの数を制限すると、一度にメンテナンスできるスケジュール済みワークブックの数が限定されます。Discoverer 管理者は、「権限 ダイアログ:「スケジュールされたワークブック」タブでこの制限を指定します。ワークブックの数が制限を超えた場合、Discoverer Desktop/Plus によりメッセージが表示され、ワークブックはスケジュールされません。</p> <p>job_queue_processes 値により、サーバー上で一度に実行できるジョブの最大数が制御されます。詳細は、「ワークブックのスケジュールをサポートする Oracle データベースの機能」を参照してください。</p> <p>また、スケジュール済みワークブックの数を、Oracle 初期化ファイルの job_queue_processes 値と異なるように制限することもできます。</p>
4.	Discoverer により、スケジュール済みワークブックが Oracle データベース・カーネル内の DBMS_JOB に追加されます。	
5.	ジョブ・キュー処理が定期的にアクティブになり、キュー内の次のジョブが実行されます。	スケジュール済みワークブック全体がサーバー上で処理されます。Oracle データベース初期化ファイルの job_queue_interval 値を使用して、ジョブ・キュー処理がアクティブにならない時間を指定します。詳細は、「 新しいスケジュール済みジョブをサーバーがチェックする間隔の制御方法 」を参照してください。
6.	データベース表が作成され、スケジュール済みワークブックの出力または結果セットがデータベース表に含められます。	結果セットは、Discoverer 管理者が指定したスキーマの下に格納されます。詳細は、「 スケジュール済みワークブックの結果の格納場所 」を参照してください。
7.	ユーザーが、スケジュール済みワークブックを参照できます。	
8.	ユーザーが、不要になった結果セットを削除できます。この時点で、表が削除されます。	Discoverer 管理者は、ユーザーのスケジュール済みワークブックの結果が自動的に削除されるまで残しておく期間を指定できます（「 権限 ダイアログ:「スケジュールされたワークブック」タブを参照）。

ワークブックのスケジュールをサポートする Oracle データベースの機能

Discoverer では、ワークブックをスケジュールするために Oracle データベース固有のスケジュール機能が利用されます。特に、DBMS_JOB パッケージが利用されます。

Oracle データベース初期化ファイル (INIT<SID>.ORA ファイル) の次のパラメータを使用して、DBMS_JOB パッケージの処理を制御します。

INIT<SID>.ORA のパラメータ	用途
job_queue_processes	このパラメータを使用して、DBMS_JOB の処理に使用できる同時処理要求の数を指定します。デフォルト値は 0 で、処理要求が作成されないことを意味します。同時に 10 個の処理要求を行う場合は、このパラメータを 10 に設定します。 他のアプリケーションで DBMS_JOB を使用する場合は、このパラメータを 2 以上に設定します。 ヒント: なんらかの理由で 1 つのジョブが失敗すると、そのジョブが引き続き送られてキュー内のその他のジョブを実行できなくなることがあるため、複数のジョブ・キュー処理が必要です。
job_queue_interval	このパラメータを使用して、ジョブ処理を開始してから保留中ジョブの処理を開始するまでの間隔 (秒) を指定します。デフォルト値は 60 秒です。これは、60 秒ごとに処理要求に応じたジョブ処理が開始されることを意味しています。このパラメータの設定値は、要求の処理を開始する間隔に応じて決定します。このパラメータは 600 秒 (10 分) 以上に設定することをお勧めします。このパラメータにより Discoverer のサマリー管理機能が影響を受けることに注意してください (サマリー・フォルダの詳細は第 14 章の「サマリー・フォルダの管理」を参照)。

INIT<SID>.ORA ファイルのパラメータ設定の詳細は、「[新しいスケジュール済みジョブをサーバーがチェックする間隔の制御方法](#)」を参照してください。

DBMS_JOB および INIT<SID>.ORA ファイルは Oracle データベースでのみ使用可能であるため、ワークブックのスケジュールは Oracle データベースで実行されている場合のみ使用可能です。

スケジュール済みワークブックの結果の格納場所

Discoverer では、スケジュール済みワークブックの結果はデータベース表に格納されます。エンド・ユーザーによるワークブックのスケジュールを可能にするには、これらの表を所有するデータベース・ユーザー（スキーマ）を決定する必要があります。次の表に示すように、2つの選択肢があります。

所有者	注意
スケジュール済みワークブックを実行するスキーマ	<p>結果セットの格納場所をエンド・ユーザーのスキーマに指定するメリットは、データベースの制限をエンド・ユーザーがデータベースに格納できるデータの最大量に指定できることです。結果セットがエンド・ユーザーのスキーマの下に格納された場合、個々のエンド・ユーザーが結果セットを格納できる最大領域を制御してください。この領域に格納されるスケジュール済みワークブックをエンド・ユーザーが作成した場合、そのエンド・ユーザーのスキーマのみが影響を受けます。</p> <p>デメリットは、メンテナンスのオーバーヘッドが増すことです。</p> <p>注意：Oracle Applications ユーザーが同じ保護データベース・アカウントを共有することが多いため、スケジュール済みワークブックの結果を格納するスケジュール済みワークブック結果スキーマを作成するようにユーザーに薦めてください。</p>
スケジュール済みワークブックの結果スキーマ	<p>結果セットをスケジュール済みワークブック結果スキーマに格納するメリットは、複数のデータベース・ユーザー・スキーマを使用するよりも一般に管理が簡単であるということです。また、各エンド・ユーザーが、スケジュール済みワークブックを実行するための追加データベース権限を設定する必要がないこともメリットです。</p> <p>デメリットは、割当て領域が共有されるため、単一のエンド・ユーザーにより領域が使い果たされてしまう可能性があることです。</p>

スケジュール済みワークブックの結果を格納する場所を指定する方法の詳細は、「[スケジュール済みワークブックの結果を含む表の所有者を指定する方法](#)」を参照してください。

ワークブックをスケジュールするための前提条件

エンド・ユーザーがワークブックをスケジュールする前に、次の作業が必要です。

- スケジュール済みワークブックの機能を有効にするようにデータベースを構成します。構成手順は、次のとおりです。
 - DBMS_JOB パッケージがデータベースにインストールされていることを確認し、インストールされていない場合はインストールします（詳細は、「[DBMS_JOB パッケージがインストールされていることを確認する方法](#)」を参照）。
 - スケジュール済みワークブックの結果を含む表を所有するデータベース・ユーザーを指定します（詳細は、「[スケジュール済みワークブックの結果を含む表の所有者を指定する方法](#)」を参照）。
 - スケジュール済みワークブックの処理間隔を設定します（詳細は、「[新しいスケジュール済みジョブをサーバーがチェックする間隔の制御方法](#)」を参照）。
- データベース・ユーザーに「スケジュール ワークブック」権限を付与します（詳細は、第 7 章の「[ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法](#)」を参照）。

DBMS_JOB パッケージがインストールされていることを確認する方法

エンド・ユーザーがワークブックをスケジュールする前に、DBMS_JOB パッケージがデータベースにインストールされている必要があります。DBMS_JOB パッケージがインストールされていない場合は、インストールします。

DBMS_JOB パッケージがインストールされていることを確認する手順は、次のとおりです。

1. データベース管理者として SQL*Plus にログインします。
2. コマンド・プロンプトで次の SQL 文を実行します。

```
SQL> select * from all_objects where object_name='DBMS_JOB' and object_type =  
'PACKAGE';
```

この文で 1 つ以上の行が返された場合、DBMS_JOB パッケージはデータベースにインストールされています。

この文で行が返されなかった場合、DBMS_JOB パッケージはインストールされていません。ユーザーがワークブックをスケジュールする前に、DBMS_JOB パッケージをインストールする必要があります。

インストールされていない場合に DBMS_JOB パッケージをインストールする手順は、次のとおりです（Oracle9i データベースの場合）。

- 1. データベース管理者として SQL*Plus にログインします。
- 2. コマンド・プロンプトで次の SQL 文を実行します。

```
SQL> CONNECT username/password@database AS SYSDBA;
```

- 3. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> start <ORACLE_HOME>/rdbms/admin/dbmsjob.sql;
```

- 4. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> start <ORACLE_HOME>/rdbms/admin/prvtjob.plb;
```

インストールされていない場合に DBMS_JOB パッケージをインストールする手順は、次のとおりです（Oracle9i より前のデータベースの場合）。

- 1. Windows の「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択します（データベース・マシン上で）。
- 2. コマンド・プロンプトで次のいずれかを入力して、適切なバージョンの DBA ユーティリティを起動します。

Oracle のバージョン	入力内容
Oracle 8.0 以上	SVRMGRL
Oracle8i Personal Edition	SVRMGR

- 3. データベース管理者として DBA ユーティリティにログインします。
- 4. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SVRMGRL> connect internal
```

- 5. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SVRMGRL> start <ORACLE_HOME>/rdbms/admin/dbmsjob.sql;
```

- 6. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SVRMGRL> start <ORACLE_HOME>/rdbms/admin/prvtjob.plb;
```

注意

一部のオペレーティング・システムでは、RDBMS ディレクトリの最後にバージョン番号が付いています（たとえば、RDBMS73）。

スケジュール済みワークブックの結果を含む表の所有者を指定する方法

スケジュール済みワークブックの結果は、データベース表に格納されます。Discoverer のデフォルト動作では、スケジュール済みワークブックは EUL 所有者スキーマに格納されます。エンド・ユーザーがワークブックをスケジュールする前に、これらの表を所有するデータベース・ユーザーを決定する必要があります。次の 2 つの選択肢があります。

- スケジュール済みワークブックを実行するデータベース・ユーザー
- スケジュール済みワークブック結果スキーマ

これらの選択肢の詳細は、「[スケジュール済みワークブックの結果の格納場所](#)」を参照してください。

どちらを選択する場合でも、スケジュール済みワークブックの結果を含む表を所有するデータベース・ユーザーは、一定のデータベース権限を持つ必要があります。

ワークブックをスケジュールするデータベース・ユーザーが、そのワークブックの結果を含むデータベース表を所有するように指定する方法

ワークブックの結果を含むデータベース表を所有するデータベース・ユーザーを指定する手順は、次のとおりです。

1. データベース管理者として SQL*Plus にログインします。
2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> grant CREATE PROCEDURE to <user name>;  
SQL> grant CREATE TABLE to <user name>;  
SQL> grant CREATE VIEW to <user name>;
```

<user name> は、ワークブックをスケジュールするデータベース・ユーザーの名前です。

これらの権限は、データベース・ロールではなくデータベース・ユーザーに直接付与する必要があります。

スクリプトを使用して、スケジュール済みワークブック結果スキーマ（ワークブックをスケジュールするデータベース・ユーザーではなく）が、スケジュール済みワークブックの結果表を所有するように指定する方法

スケジュール済みワークブック結果スキーマが、スケジュール済みワークブックの結果表を所有するように指定する手順は、次のとおりです。

注意：スクリプト batchusr.sql を実行するには、EUL 所有者のユーザー名とパスワードを知っておく必要があります。

1. データベース管理者として SQL*Plus にログインします。
2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> start<ORACLE_HOME>%discoverer902%sql%batchusr.sql;
```
3. スクリプト batchusr.sql により作成されるスケジュール済みワークブック結果スキーマのユーザー名、パスワードおよびデータベース接続詳細を入力します。
4. (オプション) スケジュール済みワークブック結果スキーマ用の表領域設定を変更します。

注意：これらの設定に不明な点がある場合は、データベース管理者に問い合わせてください。

5. スケジュール済みワークブック結果スキーマがアクセス権を持つ EUL の所有ユーザー名を入力します。

注意：スクリプトにより、スケジュール済みワークブック結果スキーマが作成され、次のデータベース権限が付与されます。

- CREATE PROCEDURE
- CREATE TABLE
- CREATE VIEW
- SELECT ANY TABLE

batchusr.sql スクリプトにより作成されるスケジュール済みワークブック結果スキーマに SELECT ANY TABLE データベース権限が付与され、ワークブックのスケジュールに必要な基礎データにアクセスできるようになります。この権限がないと、このデータベース・ユーザーの基礎データへのアクセスが制限されることがあります。

スケジュール済みワークブック結果スキーマが基礎データに対する SELECT ANY TABLE データベース権限を持たないようにするには、この権限を手動で取り消す必要があります。

6. 前述の手順（スクリプト batchusr.sql の実行時）で使用した EUL 所有者として Discoverer Administrator に接続します。
7. Discoverer Administrator で、「ツール」→「権限」を選択します。「**権限** ダイアログ：「**スケジュールされたワークブック**」タブが表示されます。

Discoverer Administrator を使用して、データベースに作成されるスケジュール済みワークブックの結果表を所有するデータベース・ユーザーを選択する必要があります。
8. 「**スケジュール権限を表示する対象**」ドロップダウン・リストを使用して、EUL 所有者を選択します。
9. 「**結果を格納する表がデータベース上に作成されます。表の所有者を選択してください。**」ドロップダウン・リストを使用して、スクリプト batchusr.sql で作成した、スケジュール済みワークブック結果スキーマを選択します。

10. 「OK」をクリックします。

スケジュール済みワークブック結果スキーマの作成にはスクリプト `batchusr.sql` を使用し、EUL 所有者に対して使用されるスケジュール済みワークブック結果スキーマの選択には「権限」ダイアログを使用しました。

スケジュール済みワークブックの権限の詳細は、[第 7 章の「スケジュール済みワークブック制限の設定方法」](#)を参照してください。

注意

- スクリプト `batchusr.sql` により作成されたスケジュール済みワークブック結果スキーマは、1 つの EUL へのアクセス権のみ持つことができます。
- Discoverer エンド・ユーザーは、使用可能な結果セット領域に格納されるスケジュール済みワークブックを実行できます。その他のデータベース・ユーザーは、この領域が空くまで、スケジュール済みワークブックを実行できません。
- スクリプト `batchusr.sql` により作成されたスケジュール済みワークブック結果スキーマで、Discoverer Desktop/Plus を使用してワークブックを直接スケジュールすることはできません。

新しいスケジュール済みジョブをサーバーがチェックする間隔の制御方法

INIT<SID>.ORA ファイルの次の 2 つのパラメータを使用して、スケジュール済みワークブックの処理を制御します。

- `job_queue_processes`
- `job_queue_interval`

これらのパラメータの詳細は、「[ワークブックのスケジュールをサポートする Oracle データベースの機能](#)」を参照してください。

スケジュール済みワークブックの処理間隔を制御する手順は、次のとおりです。

1. INIT<SID>.ORA ファイルを検索します。

INIT<SID>.ORA ファイルは、<ORACLE_HOME>%dbs にあります。このファイルのデフォルト名は INITORCL.ORA です。ORCL は <SID> 名を表します。

2. 次の 2 行を INIT<SID>.ORA ファイルに追加します。

```
job_queue_processes = <a_value>
job_queue_interval = <a_value_in_seconds>
```

- <a_value> は、DBMS_JOB の処理に使用できる同時処理要求の数です（別のアプリケーションで DBMS_JOB が使用される場合は、このパラメータを 2 以上に設定することをお勧めします）。

- `<a_value_in_seconds>` は、ジョブ・プロセスが保留中のジョブの処理を開始するまでの時間間隔（秒）です（このパラメータを 600 秒以上に設定することをお勧めします）。

たとえば、次の 2 行を `INIT<SID>.ORA` ファイルに追加します。

```
job_queue_processes = 2
job_queue_interval = 600
```

注意

Discoverer のサマリー管理機能とワークブック・スケジュール機能の両方で、Oracle データベース固有のスケジュール機能が使用されます。`job_queue_processes` および `job_queue_interval` で指定する値により、両方の機能が影響を受けます。

これらの変更を有効にするには、データベースを停止してから再起動する必要があります。

スケジュール済みワークブックの表示および管理方法

Discoverer 管理者は、現在スケジュールされているワークブックの状態の監視以外に、次の作業も必要になります。

- 正常に実行されなかったスケジュール済みワークブックに関するエラー・メッセージの表示
- スケジュール済みワークブック結果のデータベースからの削除
- スケジュール済みワークブックの処理キューからの削除
- スケジュール済みワークブックの設定の編集

注意： Oracle Applications モード EUL を持っている場合は、EUL 所有者としてログインして、スケジュール済みワークブックの表示と管理を行う必要があります。

スケジュール済みワークブックの表示と管理を行う手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「スケジュールの管理」を選択して、「[スケジュールの管理](#)」ダイアログを表示します。

図 8-1 「スケジュールの管理」ダイアログ



2. リストに表示するスケジュール済みワークブックを持つユーザーまたはロールを「**ワークブックの表示**」ドロップダウン・リストから選択します。

ヒント: 次のことができます。

- このドロップダウン・リストから「**すべてのユーザー**」を選択すると、スケジュール済みワークブックをすべて表示できます。
- 列のヘディングをクリックすることにより、様々な列を使用してリストをソートできます。
- 現在選択されているスケジュール済みワークブックの説明（1 つ）が「**説明**」フィールドに表示されます。

3. (オプション) 正常に実行されなかったスケジュール済みワークブックに関するエラー・メッセージを表示するには、そのワークブックを選択し、「エラーを表示 ...」ボタンをクリックします。

「エラーを表示 ...」ボタンを使用できるのは、問合せの実行中にエラーが発生したことをスケジュール済みワークブックの「状態」に示すように設定されている場合のみです。

4. (オプション) スケジュール済みワークブックが実行されないようにするには、処理キューからそのワークブックを削除します。
 - a. スケジュール済みワークブックを選択します。
 - b. 「スケジュール取消 ...」をクリックします。

- c. 「はい」をクリックして、スケジュール済みワークブックを削除することを確認します。
5. (オプション) スケジュール済みワークブックの結果をデータベースから削除するには(そのワークブックの実行後に)、そのワークブックを選択し、「削除」をクリックします。
6. (オプション) スケジュール済みワークブックのスケジュール情報を編集するには、そのワークブックを選択し、「編集 ...」をクリックして、「スケジュールされたワークブック」ダイアログを表示します。その後、次の作業を行います。
 - 「スケジュールされたワークブック」ダイアログ: 「スケジュール」タブを使用して、スケジュール済みワークブックに含まれているシートを表示し、スケジュール時間と繰り返し間隔を設定します。
 - 「スケジュールされたワークブック」ダイアログ: 「一般」タブを使用して、スケジュール済みワークブックの名前の表示、説明の表示と編集、最新結果を保存するかどうかの選択、および結果を自動削除するまでの間隔の設定を行います。
7. (オプション) 「スケジュールの管理」ダイアログで行った変更を反映するには、「リフレッシュ」をクリックします。
8. 「閉じる」をクリックして、「スケジュールの管理」ダイアログを閉じます。

注意

- 実行されたスケジュール済みワークブックを選択した場合のみ、「削除」ボタンが表示されます。
- スケジュール済みワークブックの使用する EUL のオブジェクトが、ワークブックのスケジュール後、結果セットが表示されるまでに変更された場合、スケジュール済みワークブックの「状態」に、EUL が変更されていることが示されます。

スケジュール済みワークブックと、Discoverer の現行リリースおよび以前のリリースとの間の互換性

新しいバッチ PL/SQL パッケージがユーザーのスキーマにインストールされます。

このリリースの Discoverer への EUL アップグレードを実行すると、新しいバッチ PL/SQL パッケージが既存のパッケージに加えてユーザーのスキーマにインストールされます。既存の PL/SQL パッケージが保持されるため、既存のスケジュール済みワークブックのバッチ・ジョブが破壊されることはありません。ただし、新しいバッチ PL/SQL パッケージ内の関数名は、既存のバッチ PL/SQL パッケージと同じままです。

スクリプトを実行して、スケジュール済みワークブック結果スキーマが結果表を所有するように指定します。

EUL をこのリリースの Discoverer にアップグレードするとき、次の条件が該当するかどうかを考慮します。

- ワークブックをスケジュールするデータベース・ユーザーが、ワークブックの結果を含むデータベース表を所有しない。
- 別のデータベース・ユーザー（スケジュール済みワークブック結果スキーマ）が、ワークブックの結果を含むデータベース表を所有する。

この場合は、SQL スクリプト `batchusr.sql` を使用して、新しいバッチ PL/SQL パッケージ (EUL5_BATCH_USER) をインストールする必要があります。このスクリプトは、`<ORACLE_HOME>%discoverer902%sql` ディレクトリにあります。新しいバッチ PL/SQL パッケージは、スケジュール済みワークブック結果スキーマ（ワークブックの結果を含む表を所有するユーザーのスキーマ）にインストールできます。詳細は、「[スクリプトを使用して、スケジュール済みワークブック結果スキーマ（ワークブックをスケジュールするデータベース・ユーザーではなく）が、スケジュール済みワークブックの結果表を所有するように指定する方法](#)」を参照してください。

アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス

アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス

この章では、Discoverer Administrator を使用してアイテムとアイテム・クラスをメンテナンスする方法について説明します。この章のトピックは次のとおりです。

- アイテム
- アイテム・クラス
- 値リスト
- 値リストの設定
- 代替ソート
- 代替ソートを実装する様々な方法の例
- ディテール・ドリル
- ディテール・ドリルの設定
- 日付アイテム
- 日付書式マスク
- 日付アイテムの切捨てと EUL_DATE_TRUNC 関数
- 切り捨てられる日付アイテムへの条件の適用
- 別のアプリケーションへのドリル・アウト
- アイテム・プロパティの編集方法
- 値リスト・アイテム・クラスの作成方法
- 代替ソート・アイテム・クラスの作成方法
- ディテール・ドリル・アイテム・クラスの作成方法
- カスタム・フォルダを使用した値リストの作成方法
- アイテム・クラスの編集方法
- アイテム・クラスに項目を追加する方法
- アイテム・クラスからアイテムを削除する方法
- アイテム・クラスを使用するアイテムの表示方法
- アイテムの値リストの表示方法
- アイテム・クラスの値リストの表示方法
- アイテムとアイテム・クラスの削除方法
- アイテムとアイテム・クラスのメンテナンスに関する注意

アイテム

Discoverer のアイテムとは、次のいずれかを End User Layer で表したものです。

- データベース表またはデータベース・ビュー内の列
- カスタム・フォルダのコンポーネント（詳細は、[第 5 章の「カスタム・フォルダ」](#)を参照）
- ユーザー定義アイテム（詳細は、[第 11 章の「ユーザー定義アイテム」](#)を参照）

アイテムはフォルダに格納され、作成、削除およびフォルダ間での移動ができます。アイテムには、変更可能なプロパティがあります（表示名、書式マスクなど）。アイテムを使用すれば、Discoverer エンド・ユーザーは必要な情報が得られるまで情報にアクセスして操作できます。

アイテム・クラス

アイテム・クラスとは、類似した一部のプロパティを共有するアイテムのグループです。アイテム・クラスを使用すれば、アイテム・プロパティを一度定義して、類似したプロパティを共有する別のアイテムにアイテム・クラスを割り当てることができます。

たとえば、各製品を説明する **Product Name** というアイテムが **Product** フォルダに含まれていると仮定します。同じく **Product Name** と呼ばれる類似のアイテムが、**Sales Revenue** フォルダでも必要になる場合があります。両方のアイテムが共通のプロパティ（値リストなど）を共有できるようにするには、プロパティを定義するアイテム・クラスを 1 つ作成し、両方のアイテムに適用します。つまり、プロパティを一度定義するのみで済みます。アイテム・クラスがないと、各アイテムについて個別にプロパティの定義が必要になります。

Discoverer では、次の機能を実装するためにアイテム・クラスが使用されます。

- 値リスト
- 代替ソート
- ディテール・ドリルのリンク

Discoverer 管理者は、これらの機能をサポートする適切なアイテム・クラスを作成する責任があります。各機能について異なるアイテム・クラスを作成したり、複数の機能について同じアイテム・クラスを Discoverer で使用するよう指定できます。代替ソートをサポートするアイテム・クラスは値リストもサポートする必要があることに注意してください。

値リスト

値リスト（「LOV」とも呼ばれます）とは、アイテムの有効な値のセットです。これらの値は、アイテムの基礎となるデータベース列の値です。Discoverer エンド・ユーザーは、次の値の表示や入力に値リストを使用します。

- パラメータ
- 条件
- Discoverer アイテム・ナビゲータ
- 「エクスポート」ダイアログ

たとえばアイテムが、次の値を含むデータベース列に基づいていると仮定します。

West
East
South
North
East
North
South

このアイテムに基づく値リストには、次の 4 つの固有値が含まれることになります。

- West
- East
- South
- North

値リストの設定

Discoverer では、値リストを実装するためにアイテム・クラスが使用されます。最初にビジネスエリアを作成するとき、値リストを自動生成するように指定できます（詳細は、「[ロードウィザードステップ 4」ダイアログ](#)」を参照）。以降は、アイテム・クラス・ウィザードを使用して、新規値リストの作成と別のアイテムへの既存値リストの割当てを行うことができます（詳細は、「[値リスト・アイテム・クラスの作成方法](#)」を参照）。

代替ソート

代替ソートとは、アイテム内の値のソート方法に関する **Discoverer** への指示です。代替ソートにより、デフォルトとは異なるソート順序を指定できます。

デフォルトでは、ASCII 値を使用してアイテムが昇順または降順にソートされます。しかし、**Discoverer** エンド・ユーザーは、他の順序でのソートが必要な場合もあります。

たとえば、デフォルトでは一連の販売地域がアルファベット順に（**Central**、**East**、**North**、**South**、**West** の順に）ソートされます。しかし、販売地域を別の順序で（たとえば、**North**、**South**、**East**、**West**、**Central** の順で）ソートする必要がある場合があります。

代替ソート順序を作成するには、アイテム・クラスを使用して次の 2 つのアイテムをリンクする必要があります。

- ソート順序を定義するアイテム
- ソートする値リストを定義するアイテム

アイテム・クラスを定義した後、**Discoverer** エンド・ユーザーがワークシートに含めるアイテムに、このアイテム・クラスを関連付けます。

代替ソートを実装する方法は、次のとおりです。

- カスタム・フォルダを使用する方法（詳細は、[「例 1: カスタム・フォルダを使用した代替ソートの実装方法」](#)を参照）
- 個別のデータベース表を作成・使用する方法（詳細は、[「例 2: データベース表を使用した代替ソートの実装方法」](#)を参照）
- ユーザー定義アイテムと **DECODE** 文を使用する方法（詳細は、[「例 3: ユーザー定義アイテムと **DECODE** 文を使用した代替ソートの実装方法」](#)を参照）

いずれの実装方法を選択する場合でも、次の点に注意してください。

- 代替ソートの実装に使用するアイテム・クラスには、代替ソートと値リストの両方を含める必要があります。
- アイテム・クラスの代替ソートと値リストに対して選択する 2 つのアイテムは同じフォルダ内にある必要があります。

代替ソート・アイテム・クラスの作成方法の詳細は、[「代替ソート・アイテム・クラスの作成方法」](#)を参照してください。

代替ソートを実装する様々な方法の例

例 1: カスタム・フォルダを使用した代替ソートの実装方法

フォルダのカスタム SQL プロパティを使用して 2 つのアイテムを作成することで、カスタム・フォルダを使用して代替ソートを実装できます。一方のアイテムに値リストを含め、他方のアイテムでソート順序を指定します。次に、アイテム・クラスを作成し、アイテム・クラスの値リストおよび代替ソートとして 2 つのアイテムをカスタム・フォルダで指定できます。

たとえば、Discoverer エンド・ユーザーのワークシートに、**Ordered Regions** というアイテムを含めるとします。ユーザーがこのアイテム内の値をソートするとき、販売地域の順序を North、South、East、West（デフォルトのアルファベット順ではない）となるようにします。カスタム・フォルダを使用してこの代替ソートを実装する手順は、次のとおりです。

- **Sales Regions Sort Folder** というカスタム・フォルダを作成します。
- このカスタム・フォルダのカスタム SQL プロパティとして次のように入力します。

```
select 'North' region_name, 1 region_order from dual union
select 'South' region_name, 2 region_order from dual union
select 'East' region_name, 3 region_order from dual union
select 'West' region_name, 4 region_order from dual union
```
- **Sales Regions Customized Sort** というアイテム・クラスを作成します。
- 値リスト・アイテムとして **region_name** を、**Sales Regions Customized Sort** アイテム・クラスの代替ソート・アイテムとして **region_order** をそれぞれ指定します。
- ユーザーがワークシートに含める **Ordered Regions** アイテムに関連付けられるアイテム・クラスとして **Sales Regions Customized Sort** を指定します。
- ユーザーが **Ordered Regions** アイテムを使用してワークシートをソートすると、ワークシートは新しい順序でソートされます。

例 2: データベース表を使用した代替ソートの実装方法

値および値に関連付けられた数値順序を含む 2 つの列がある新しいデータベース表を作成することで、データベース表を使用して代替ソートを実装できます。値および値に関連付けられた数値順序を含む適切なデータベース表がすでに存在する場合は、その表の使用を検討してください。パフォーマンス問題が発生しないように、各値が複数含まれるデータベース表の使用は避けてください。

表をフォルダとして EUL にロードした後、アイテム・クラスを作成し、そのアイテム・クラスの値リストおよび代替ソートに対して 2 つのアイテムを指定できます。

たとえば、Discoverer エンド・ユーザーのワークシートに、**Ordered Regions** というアイテムを含めるとします。ユーザーがこのアイテム内の値をソートするとき、販売地域の順序を North、South、East、West（デフォルトのアルファベット順ではない）となるようにします。データベース表を使用してこの代替ソートを実装する手順は、次のとおりです。

- SQL*Plus を使用して、2 つの列 REGION_NAME および REGION_NUMBER を含む SALES_REGION_SORT というデータベース表を作成します。作成するには、次のように入力します。

```
> create table SALES_REGION_SORT (REGION_NAME VARCHAR2(10), REGION_NUMBER NUMBER(2));
```

- SQL*Plus を使用して、値を SALES_REGION_SORT 表に挿入します。挿入するには、次のように入力します。

```
> insert into SALES_REGION_SORT (REGION_NAME, REGION_NUMBER) values ('North', 1)
> insert into SALES_REGION_SORT (REGION_NAME, REGION_NUMBER) values ('South', 2)
> insert into SALES_REGION_SORT (REGION_NAME, REGION_NUMBER) values ('East', 3)
> insert into SALES_REGION_SORT (REGION_NAME, REGION_NUMBER) values ('West', 4)
```

- SALES_REGION_SORT データベース表を、アイテム Name および Number を含む新しいフォルダとして EUL にロードします（詳細は、[第4章の「ビジネスエリアの作成とメンテナンス」](#)を参照）。
- Sales Regions Customized Sort というアイテム・クラスを作成します。
- 値リストとして Name アイテムを、アイテム・クラスの代替ソート・アイテムとして Number アイテムをそれぞれ指定します。
- ユーザーがワークシートに含める Ordered Regions アイテムに関連付けられるアイテム・クラスとして Sales Regions Customized Sort を指定します。
- ユーザーが Ordered Regions アイテムを使用してワークシートをソートすると、ワークシートは新しい順序でソートされます。

例 3: ユーザー定義アイテムと DECODE 文を使用した代替ソートの実装方法

ユーザー定義アイテムと DECODE 文を使用して、代替ソートを実装できます。既存のフォルダに 2 つの新しいアイテムを作成し、値リストとソート順序を含むようにこれらのアイテムの SQL 文を指定します。次に、アイテム・クラスを作成し、アイテム・クラスの値リストおよび代替ソートに対して 2 つのアイテムを指定できます。

値リストを含むアイテムがすでに存在する場合は、そのアイテムを使用できます。

たとえば、Discoverer エンド・ユーザーのワークシートに、**Ordered Regions** というアイテムを含めるとします。ユーザーがこのアイテム内の値をソートするとき、販売地域の順序を North、South、East、West、Central（デフォルトのアルファベット順ではない）となるようにします。ユーザー定義アイテムと DECODE 文を使用して代替ソートを実装する手順は、次のとおりです。

- Ordered Regions アイテム（このアイテムにより地域の名前が提供されます）を含むフォルダに Sales Region Order という新しいユーザー定義アイテムを作成します。
- アイテムの計算式として次の SQL 文を指定します。

```
DECODE(Ordered Regions,'North',1,'South',2,'East',3,'West',4,5)
```
- Sales Regions Customized Sort というアイテム・クラスを作成します。
- ユーザーがワークシートに含める Ordered Regions アイテムに関連付けられるアイテム・クラスとして Sales Regions Customized Sort を指定します。
- ユーザーが Ordered Regions アイテムを使用してワークシートをソートすると、ワークシートは新しい順序でソートされます。

注意：パフォーマンスの点では、これが最も効率が悪い方法です。

ディテール・ドリル

ディテール・ドリルとは、複数のアイテム間の関係で、ディテール・ドリルを実行しなければ、これらのアイテムは関連付けられない場合もあります。ディテール・ドリルはアイテム・クラスを使用して実行され、別のフォルダから現在選択されている行に関する詳細情報への直接アクセスを Discoverer エンド・ユーザーに提供します。このため、エンド・ユーザーは階層レベル全体をドリルする必要はありません。

ディテール・ドリルの設定

ディテール・ドリル・アイテム・クラスを作成するときには、それを使用するアイテムを指定します。アイテム・クラスを共有するアイテムを含むフォルダを結合する必要はありません。

ユーザーが 1 つのアイテムのディテール・ドリル・オプションを選択するとき、同じディテール・ドリル・アイテム・クラスを共有する別のアイテムを含むフォルダをドリルで使用できます。ユーザーがこれらのフォルダの 1 つを選択した場合、そのフォルダ内のすべてのアイテムがワークシートに含まれ、元のシートと共通のアイテム・クラスすべてに条件が適用されます。

ハイパードリルが機能するには、同じディテール・ドリル・アイテム・クラスを共有するアイテムのデータ型が同じである必要があります。

日付アイテム

日付アイテムとは、日付情報を表示するためにユーザーがワークシートに含めるアイテムです。

次のアイテムを日付アイテムにすることができます。

- データベース列に基づく、日付データ型のアイテム
- 作成済みのユーザー定義アイテム
- 日付アイテムの日付階層を指定するときに Discoverer で自動作成されるアイテム

日付書式マスク

日付書式マスクとは、日付情報の表示方法に関する指示です。

次の表は、多数の日付をデータベースに格納する方法と、異なる日付書式マスクをこれらの日付に適用した場合の影響を示しています。

データベースに格納されている日付	DD-MM-YYYY	DD-MONTH	MM/DD	DD-Month-YY HH:MI AM
04-JUN-1999 13:03:45	04-06-1999	04-JUNE	06/04	04-June-99 1:03 PM
05-AUG-2000 23:14:12	05-08-2000	05-AUGUST	08/05	05-August-00 11:14 PM
15-JAN-2001 03:45:38	15-01-2001	15-JANUARY	01/15	15-January-01 3:45 PM
14-APR-2002 09:52:26	14-04-2002	14-APRIL	04/14	14-April-02 9:52 AM

ユーザーがワークシートに含める日付アイテムのデフォルト日付書式マスクを、Discoverer 管理者として指定できます。

日付書式マスクは、日付がデータベースに格納される方法には影響を与えません。

日付階層テンプレートに新しいレベルを作成するとき、そのレベルの日付書式を指定します。日付階層に新しいレベルを含めた場合、その日付階層を使用する日付アイテムを含むすべてのフォルダに新しい日付アイテムが自動的に生成されます。

新しい日付アイテムの計算式は、次のとおりです。

`EUL_DATE_TRUNC(item_name, format_mask)`

- `EUL_DATE_TRUNC` は、日付を `format_mask` により指定される書式に切り捨てる Discoverer 関数です。
- `item_name` は、日付階層を使用するフォルダ内のアイテムの名前です。
- `format_mask` は、日付階層テンプレートの新しいレベルについて指定した日付書式です。

日付階層テンプレートの新しいレベルについて指定した日付書式は、新しい日付アイテムの書式マスク・プロパティの設定にも使用されます。

日付アイテムの切捨てと EUL_DATE_TRUNC 関数

日付アイテムの切捨てでは、日付コンポーネントを 1 つのみ抽出し操作します（たとえば、月、四半期）。日付アイテムの切捨ては日付の比較に役立ちます。Discoverer では、切り捨てられた日付アイテムが日付階層の実装に使用されます。

EUL_DATE_TRUNC 関数により、日付値が指定された日付書式マスクに切り捨てられます。EUL_DATE_TRUNC を使用する利点は、次のとおりです。

- 別の方法（日付を文字列に変換し、日付の一部を削除し、文字列を日付に再変換する方法）よりも EUL_DATE_TRUNC を使用して日付を切り捨てるほうが簡単です。
- EUL_DATE_TRUNC を使用すれば、切り捨てられた日付を正しい時間順にソートできます（たとえば、日付書式マスクが Q である場合、四半期のデータが各年内で順序付けられ、次に年別に順序付けられます）。
- EUL_DATE_TRUNC を使用すれば、時間間隔を単一の日付で表すことができます。これは、条件を定義するときに役立ちます。

Discoverer では、日付階層の作成時に EUL_DATE_TRUNC が自動的に使用されます。また、日付アイテムの計算式を入力するときに EUL_DATE_TRUNC を使用することもできます。

EUL_DATE_TRUNC により返されるのは期間の開始時の日付であることに注意してください。たとえば、EUL_DATE_TRUNC (date,YYYY) を日付「25-aug-1934」、「11-nov-1934」および「03-feb-1933」に適用すると、結果はそれぞれ「01-jan-1934」、「01-jan-1934」および「01-jan-1933」になります。この例では、最初の 2 つの日付の結果が同じ値になっていますが、これは書式マスクの指定に従っているためです。

切り捨てられる日付アイテムへの条件の適用

切り捨てられる日付アイテムを条件に含めることができます。条件として指定する値の書式は、切り捨てられる日付アイテムの日付書式マスクと同じである必要があります。

EUL_DATE_TRUNC を使用して日付アイテムが切り捨てられる場合、EUL_DATE_TRUNC により返される値は期間の開始時の日付として表示されます。

次の点に注意してください。

- アイテムの日付書式マスクが、アイテムの切り捨てに使用される計算式で指定される日付書式マスクと互換性がないという危険を低減するために、編集可能な計算式を持つ日付アイテムの日付書式マスクを変更しようとすると警告が表示されます。
- 標準的な Oracle 日付書式には時間が含まれます (DD-MON-YY:HH24:MI:SS)。日付アイテムを EUL にロードするとき、デフォルトの日付書式マスク DD-MON-YYYY (時間なし) が日付アイテムに適用されます。時間情報がデータベース列に格納されている場合に、ユーザーがその列に基づく日付アイテムに条件を適用すると、次のことが起こります。
 - 時間コンポーネントが条件に含まれる (デフォルトの日付書式マスクで、時間コンポーネントを含まないように指示されている場合でも)。
 - 結果が返されない。

この状況を解決するには、日付を DD-MON-YYYY に切り捨てるように日付アイテムの計算式を変更します。

例 1

日付アイテムの計算式が EUL_DATE_TRUNC (order_date,'YYYY') であり、そのアイテムが order_date='2001' として条件に含まれている場合は、次のことが起こります。

- 2001 年のすべての注文の日付がアイテム別に返される。
- 各注文の日付が期間の開始時の日付 (01-JAN-2001) として示される。

例 2

EUL_DATE_TRUNC を使用して order_quarter_date という日付アイテムを切り捨て、order_quarter_date アイテムを条件に含めると仮定します。切り捨てられたアイテムの日付書式マスクが 'Q' である場合、このアイテムの計算式で同じ日付書式マスク (つまり、EUL_DATE_TRUNC (order_quarter_date,'Q')) を使用する必要があります。

別のアプリケーションへのドリル・アウト

Discoverer の視点から、データ自身（地域または注文番号など）、あるいはデータがデータベースの外部に配置されている場所へのポインタ（小売店のピクチャを含むファイルの名前や URL など）をデータベース列に含めることができます。Discoverer エンド・ユーザーがデータベース外部のデータにドリルするためのポインタを指定するように、アイテム・プロパティを設定できます。

アイテムの基礎となる列のデータの場所を指定するには、そのアイテムの内容タイプ・プロパティを次のように設定します（詳細は、「[「アイテム プロパティ」 ダイアログ](#)」を参照）。

- 列にデータを含むように指定する場合は、「なし」を選択します。
- データベース外部にある情報へのポインタ（Microsoft Word 文書または HTML ページなど）を列に含めるように指定する場合は、「ファイル」を選択します。

内容タイプ・プロパティが「ファイル」に設定されたアイテムをユーザーが含めるとき、列に含まれるポインタが表示されます。ユーザーがそのポインタをクリックすると、ポインタに関連付けられたアプリケーションが起動されます。次に例を示します。

- ポインタがファイル名である場合、ファイル名の拡張子に関連付けられているアプリケーションが起動され、指定のファイルが表示されます（たとえば、ファイル名の拡張子が .doc である場合、指定のファイルを含む Microsoft Word が起動されます）。
- ポインタが URL である場合、ユーザーの Web ブラウザが起動され、指定のページが表示されます。

注意

列のデータ型が LONG RAW である場合、次のような異なる種類のデータを列に含めることができます。

- BFILE データ — データベース外部に格納されている大きいバイナリ・ファイルへのロケータです。BFILE データにより、データベース・サーバーに常駐する外部 LOB へのバイト・ストリーム I/O アクセスが可能になります。BFILE データの最大サイズは 4GB です。
- BLOB データ — バイナリ・ラージ・オブジェクトです。BLOB データの最大サイズは 4GB です。
- CLOB データ — シングルバイト・キャラクタを含むキャラクタ・ラージ・オブジェクトです。固定幅と可変幅の両方のキャラクタ・セットがサポートされています。両方とも CHAR データベース・データ型を使用します。CLOB データの最大サイズは 4GB です。
- NCLOB データ — マルチバイト・キャラクタを含むキャラクタ・ラージ・オブジェクトです。固定幅と可変幅の両方のキャラクタ・セットがサポートされています。両方とも NCHAR データベース・データ型を使用します。各国語キャラクタ・セット・データが格納されます。NCLOB データの最大サイズは 4GB です。

アイテムの基礎となる列のデータ型が LONG RAW である場合、Discoverer によりアイテムの内容タイプ・プロパティの追加オプション（つまり、「ファイル」と「なし」に追加されるオプション）が提供されます。これらのオプションを使用すれば、列の内容を表示するために起動するアプリケーションを Discoverer が決定する方法を指定できます。たとえば、アイテムの内容タイプ・プロパティとして DOC を選択した場合、.doc 拡張子に関連付けられているアプリケーション（通常は Microsoft Word）が起動されます。

アイテム・プロパティの編集方法

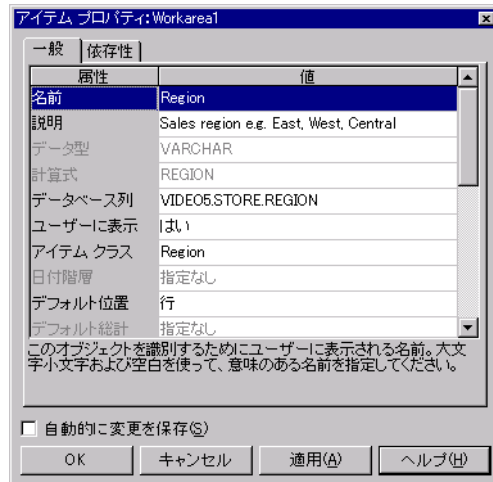
アイテム・プロパティを編集する手順は、次のとおりです。

1. 「データ」ページでアイテムをクリックし、「編集」→「プロパティ」を選択して、「**アイテム プロパティ**」ダイアログを表示します。

同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。

注意：複数のアイテムを選択した場合、それらの各項目に共通のプロパティがすべて表示されます。フィールドのデータが選択された各アイテムに共通でない場合、フィールドには何も表示されません。

図 9-1 「アイテム プロパティ」ダイアログ



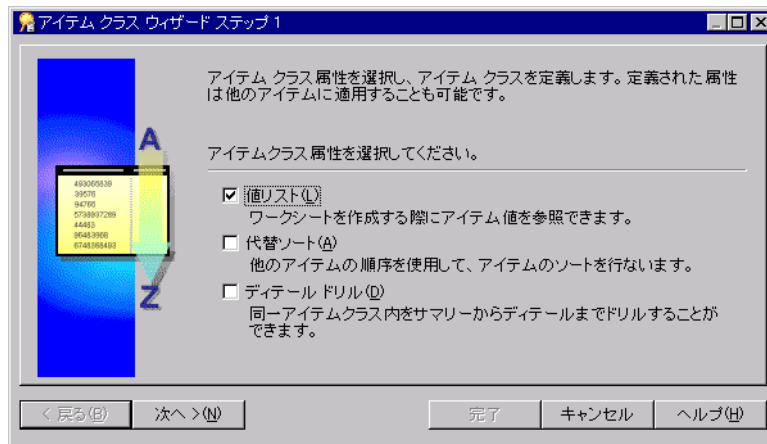
2. 必要な変更を行います。
3. 「OK」をクリックします。

値リスト・アイテム・クラスの作成方法

値リスト・アイテム・クラスを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「挿入」→「アイテム クラス」を選択して、「アイテム クラス ウィザード」ダイアログを表示します。
「アイテム クラス ウィザード ステップ 2」ダイアログが表示された場合は、「戻る」ボタンを押します。

図 9-2 「アイテム クラス ウィザード」ダイアログ



2. 「値リスト」チェックボックスを選択します。
3. 「次へ」をクリックして、「アイテム クラス ウィザード ステップ 2」ダイアログを表示します。

図 9-3 「アイテム クラス ウィザード ステップ 2」 ダイアログ



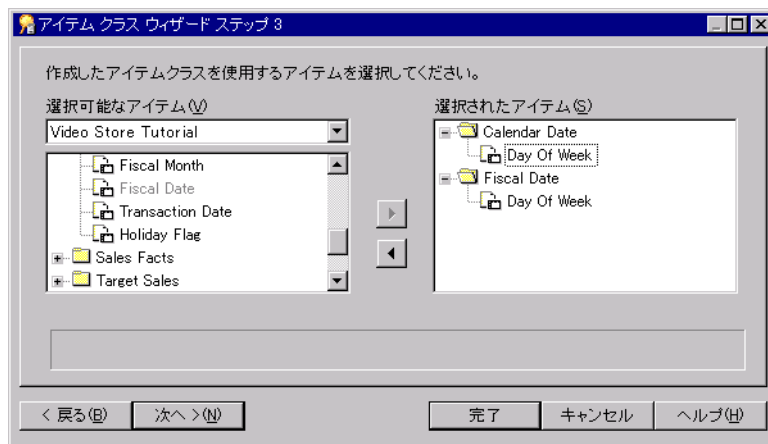
4. 値リストの生成に使用するアイテムを含むビジネスエリアを選択します。
5. 値リストの生成に使用するアイテムを選択します。

注意：Discoverer ではデフォルトで、値リストの取出しに `SELECT DISTINCT` 問合せが使用されます。固有値の数と比べて多数の行を含むフォルダ内のアイテムを選択した場合、この問合せの効率が悪くなることがあります。大きい表を使用するよりも、小さい表（多数の行を含むフォルダに添付されている）からアイテムを選択するほうが効率的です。小さい表がない場合、小さい表を作成すれば値リストの処理速度を向上させることができます。

また、値の数が少ない場合は、カスタム・フォルダを使用して End User Layer 内にローカルな値リストを作成します。詳細は、「[カスタム・フォルダを使用した値リストの作成方法](#)」を参照してください。

6. 「次へ」をクリックして、「[アイテム クラス ウィザード ステップ 3](#)」ダイアログを表示し、このアイテム・クラスを使用するアイテムを選択します。

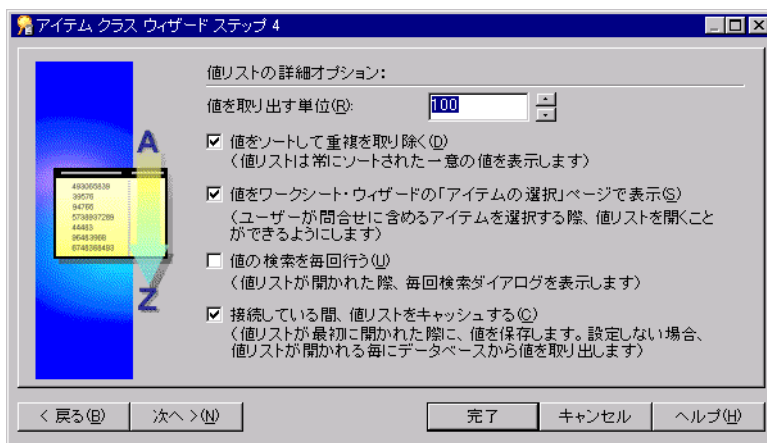
図 9-4 「アイテム クラス ウィザード ステップ 3」 ダイアログ



注意：アイテム・クラス・ウィザードの最初のページで「ディテール ドリル」チェックボックスも選択した場合、エンド・ユーザーはこのページで選択したアイテム間をドリルできるようになります。

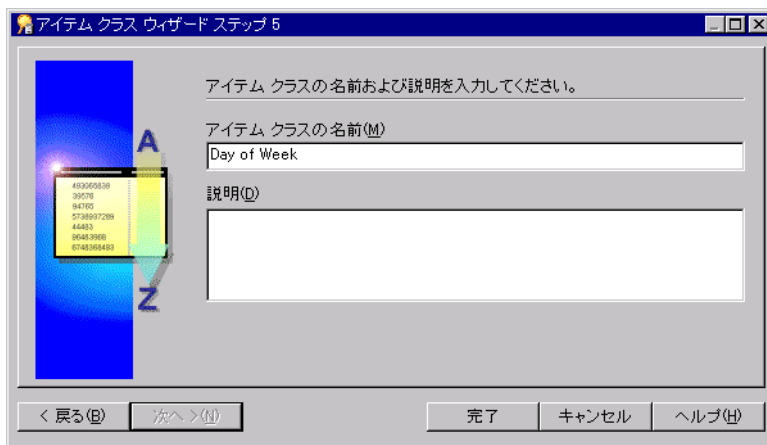
7. このアイテム・クラスを使用するアイテムを、「**選択可能なアイテム**」リストから「**選択されたアイテム**」リストに移動します。
8. 「次へ」をクリックして、「[アイテム クラス ウィザード ステップ 4](#)」ダイアログを表示し、Discoverer Desktop/Plus での値リストの選択および表示方法を制御するオプションを指定します。

図 9-5 「アイテム クラス ウィザード ステップ 4」 ダイアログ



9. グループとして取り出す値の数を指定し、必要に応じてその他のチェックボックスを選択します。
10. 「次へ」をクリックして、「アイテム クラス ウィザード ステップ 5」ダイアログを表示し、新しいアイテム・クラスの名前と説明を指定します。

図 9-6 「アイテム クラス ウィザード ステップ 5」 ダイアログ



11. 新しいアイテム・クラスの名前と説明を入力します。

12. 「完了」をクリックします。

Discoverer により、新しい値リストのアイテム・クラスが作成されます。

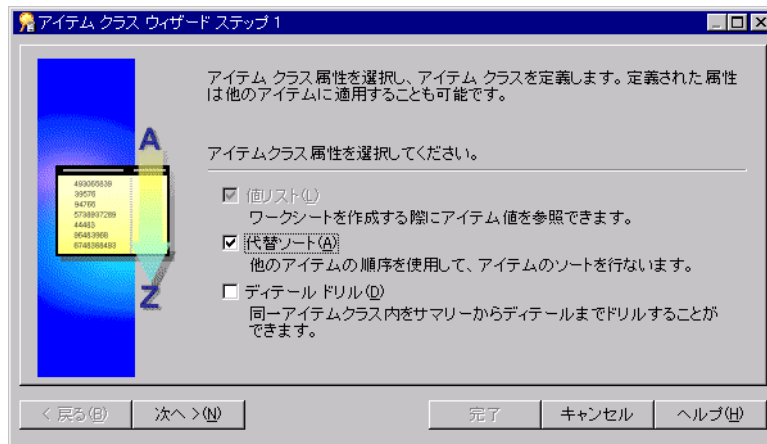
代替ソート・アイテム・クラスの作成方法

代替ソート・アイテム・クラスを使用すれば、代替ソート基準に基づいて値リストをソートできます。

代替ソート・アイテム・クラスを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「挿入」→「アイテム クラス」を選択して、「**アイテム クラス ウィザード**」ダイアログを表示します。

図 9-7 「アイテム クラス ウィザード ステップ 1」ダイアログ



2. 「代替ソート」チェックボックスを選択します。

注意：「代替ソート」チェックボックスを選択すると、「値リスト」チェックボックスが自動的に選択されます。

3. 「次へ」をクリックして、「**アイテム クラス ウィザード ステップ 2**」ダイアログを表示します。

図 9-8 「アイテム クラス ウィザード ステップ 2」 ダイアログ



4. 値リストの生成に使用するアイテムを含むビジネスエリアを選択します。
5. 値リストの生成に使用するアイテムを選択します。

注意：Discoverer では、値リストの取出しに **SELECT DISTINCT** 問合せが使用されます。固有値の数と比べて多数の行を含むフォルダ内のアイテムを選択した場合、この問合せの効率が悪くなることがあります。大きい表を使用するよりも、小さい表（多数の行を含むフォルダに添付されている）からアイテムを選択するほうが効率的です。小さい表がない場合、小さい表を作成すれば値リストの処理速度を向上させることができます。

また、値の数が少ない場合は、カスタム・フォルダを使用して End User Layer 内にローカルな値リストを作成します。詳細は、「[カスタム・フォルダを使用した値リストの作成方法](#)」を参照してください。

6. 「次へ」をクリックして、「アイテム クラス ウィザード ステップ 3」ダイアログを表示します。

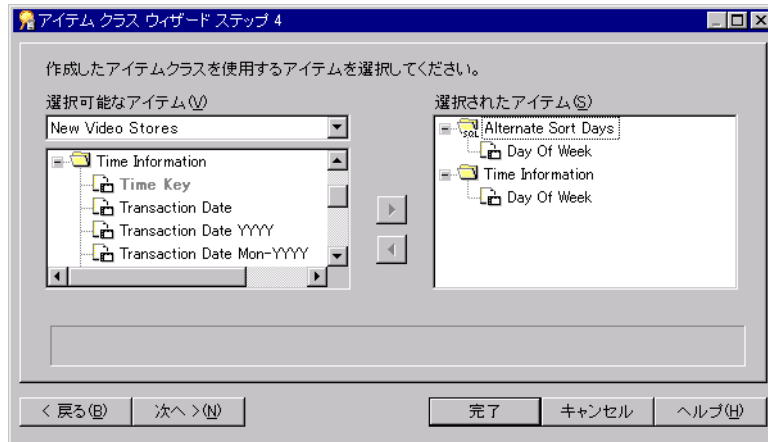
図 9-9 「アイテム クラス ウィザード ステップ 3」 ダイアログ



7. 代替ソート基準を含んでいるアイテムを選択します。
このアイテムは、次の条件を満たす必要があります。
 - すでにデータベース内に存在していること
 - 値リストを生成するアイテムと同じフォルダ内にあること
8. 「次へ」をクリックして、「アイテム クラス ウィザード ステップ 4」ダイアログを表示します。

ヒント: 値の数が少ない場合は、カスタム・フォルダを使用して End User Layer 内に代替ソート順序を含むローカルな値リストを作成することもできます（「例 1: カスタム・フォルダを使用した代替ソートの実装方法」を参照）。

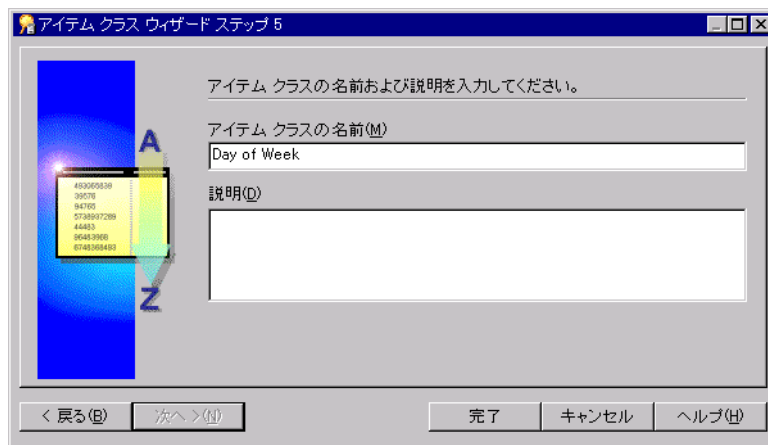
図 9-10 「アイテム クラス ウィザード ステップ 4」 ダイアログ



注意：アイテム・クラス・ウィザードの最初のページで「ディテール ドリル」チェックボックスを選択した場合、エンド・ユーザーはこのページで選択したアイテム間をドリルできるようになります。

9. このアイテム・クラスを使用するアイテムを、「選択可能なアイテム」リストから「選択されたアイテム」リストに移動します。
10. 「次へ」をクリックして、「アイテム クラス ウィザード ステップ 5」ダイアログを表示します。

図 9-11 「アイテム クラス ウィザード ステップ 5」 ダイアログ



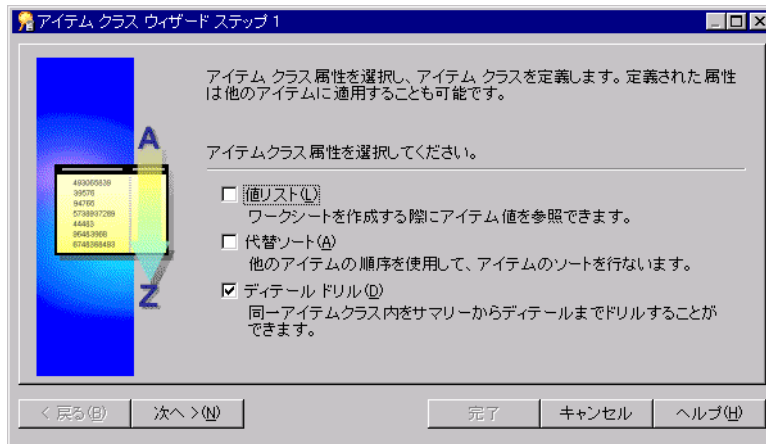
11. 新しいアイテム・クラスの名前と説明を入力します。
12. 「完了」をクリックします。

ディテール・ドリル・アイテム・クラスの作成方法

ディテール・ドリル・アイテム・クラスを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「挿入」→「アイテム クラス」を選択して、「[アイテム クラス ウィザード](#)」ダイアログを表示します。

図 9-12 「アイテム クラス ウィザード ステップ 1」ダイアログ



2. 「ディテール ドリル」チェックボックスを選択します。
3. 「次へ」をクリックして、「[アイテム クラス ウィザード ステップ 2](#)」ダイアログを表示します。

図 9-13 「アイテム クラス ウィザード ステップ 2」 ダイアログ

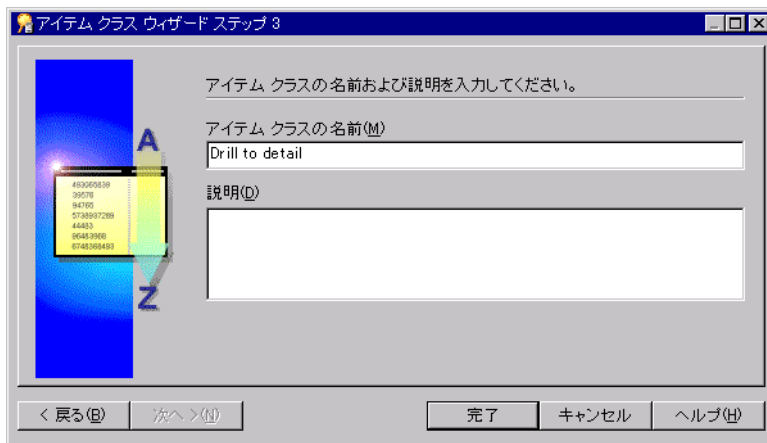


4. このアイテム・クラスを使用するアイテムを、「選択可能なアイテム」リストから「選択されたアイテム」リストに移動します。

注意：エンド・ユーザーは、このページで選択したアイテム間をドリルできるようになります。

5. 「次へ」をクリックして、「アイテム クラス ウィザード ステップ 3」ダイアログを表示します。

図 9-14 「アイテム クラス ウィザード ステップ 3」 ダイアログ



6. 新しいアイテム・クラスの名前と説明を入力します。
7. 「完了」をクリックします。

カスタム・フォルダを使用した値リストの作成方法

この代替方法は、値の数が少ない場合に役立ちます。カスタム・フォルダを使用して、End User Layer 内にローカルな値リストを作成できます。

たとえば、North、South、East および West の値リストが必要な場合は、Region_lov というカスタム・フォルダを作成し、次のような SQL 文を入力します。

1. 「ワークエリア」の「データ」ページで、「挿入」→「フォルダ」→「カスタム」を選択して、「[カスタム フォルダ](#)」ダイアログを表示します。
2. 「カスタム フォルダ」ダイアログに次の SQL 文を入力します。

```
SELECT 'NORTH' REGION FROM sys.dual
UNION
SELECT 'SOUTH' REGION FROM sys.dual
UNION
SELECT 'EAST' REGION FROM sys.dual
UNION
SELECT 'WEST' REGION FROM sys.dual
```

この問合せにより、1つのアイテム **Region** が作成されます。このアイテムを、値リストとして使用できます。これにより、パフォーマンスを最適化できます。

カスタム・フォルダの詳細は、[第5章の「カスタム・フォルダ」](#)を参照してください。

3. 「チェック」をクリックして、SQL 文をチェックします。
4. 「OK」をクリックします。

アイテム・クラスの編集方法

既存のアイテム・クラスを編集する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」: 「アイテム クラス」タブで、編集するアイテム・クラスをクリックし、「編集」→「編集 ...」を選択して、「アイテム クラスの編集」ダイアログを表示します。

注意: 「アイテム クラスの編集」ダイアログは、5つのタブから構成されます。これらのタブはアイテム・クラス・ウィザードのページと似ています。これらのタブを使用すれば、アイテム・クラスの作成時に指定した設定を編集できます。

図 9-15 「アイテム クラスの編集」ダイアログ: 「値リスト」タブ



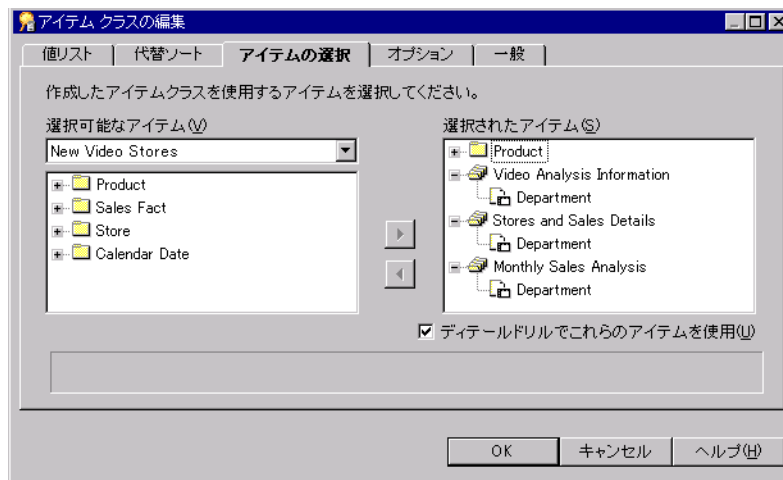
2. 「アイテム クラスの編集」ダイアログ: 「値リスト」タブを表示して、選択したアイテム・クラスで使用する値リストを変更します。

図 9-16 「アイテム クラスの編集」 ダイアログ：「代替ソート」 タブ



3. 「アイテム クラスの編集」 ダイアログ：「代替ソート」 タブを表示して、選択したアイテム・クラスの値リストに割り当てられた代替ソート基準を変更します。

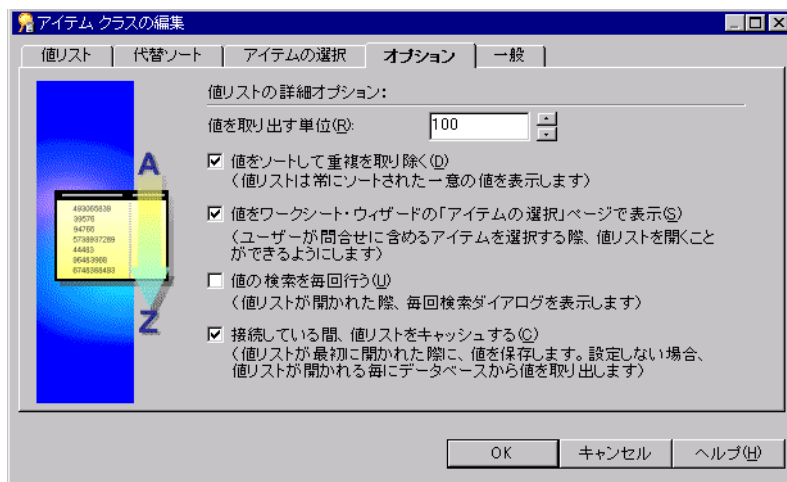
図 9-17 「アイテム クラスの編集」 ダイアログ：「アイテムの選択」 タブ



4. 「アイテム クラスの編集」 ダイアログ：「アイテムの選択」 タブを表示して、選択したアイテム・クラスを使用するアイテムを追加または削除します。

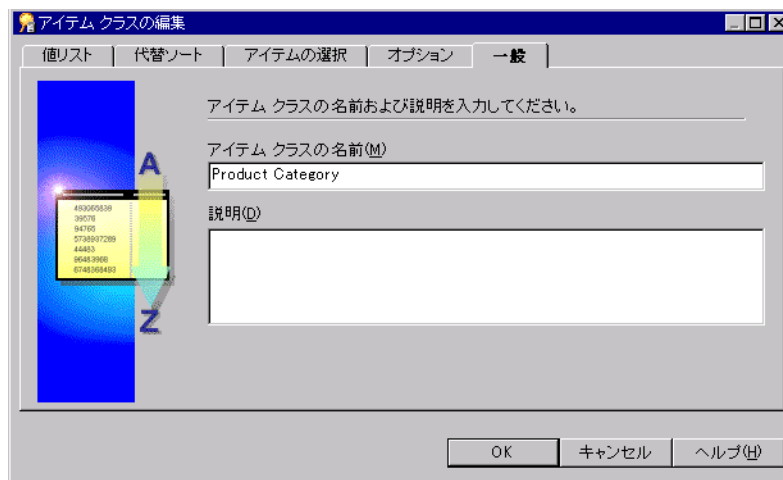
5. 「ディテールドリルでこれらのアイテムを使用」 チェックボックスを選択して、このアイテム・クラスに所属するアイテム間のディテール・ドリルを可能にします（可能にしない場合は、選択を解除します）。

図 9-18 「アイテム クラスの編集」 ダイアログ：「オプション」 タブ



6. 「アイテム クラスの編集」 ダイアログ：「オプション」 タブを表示して、必要に応じて値リストの詳細オプションを設定します。

図 9-19 「アイテム クラスの編集」 ダイアログ：「一般」 タブ



7. 「アイテム クラスの編集」 ダイアログ：「一般」 タブを表示して、選択したアイテム・クラスの名前と説明を変更します。
8. 「OK」 をクリックします。

アイテム・クラスに項目を追加する方法

次のいずれかの方法でアイテムをアイテム・クラスに追加します。

- [ドラッグ・アンド・ドロップを使用してアイテムをアイテム・クラスに追加する方法](#)
- [「アイテム クラスの編集」ダイアログを使用してアイテムをアイテム・クラスに追加する方法](#)
- [「アイテム プロパティ」ダイアログを使用してアイテムをアイテム・クラスに追加する方法](#)

ドラッグ・アンド・ドロップを使用してアイテムをアイテム・クラスに追加する方法

1. 「ウィンドウ」→「新しいウィンドウを開く」を選択して、2つ目の「ワークエリア」を表示します。
2. 一方の「ワークエリア」の「データ」タブを選択します。
3. もう一方の「ワークエリア」の「アイテム クラス」タブを表示します。
4. アイテム・クラスに追加するアイテム（1つまたは複数）を「ワークエリア」の「データ」タブで選択します。
5. 「データ」タブから「ワークエリア」の「アイテム クラス」タブのアイテム・クラスにアイテムをドラッグします。
6. 「ワークエリア」ウィンドウの1つを閉じます。

「アイテム クラスの編集」ダイアログを使用してアイテムをアイテム・クラスに追加する方法

1. [「ワークエリア」:「アイテム クラス」タブ](#)で、編集するアイテム・クラスをクリックし、「編集」→「編集...」を選択します。
2. [「アイテム クラスの編集」ダイアログ:「アイテムの選択」タブ](#)を表示します。
3. アイテムを「[選択可能なアイテム](#)」リストから「[選択されたアイテム](#)」リストに移動して、このアイテム・クラスに追加します。

同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。

注意:「[選択可能なアイテム](#)」ドロップダウン・リストを使用すれば、開いている任意のビジネスエリアからアイテムを選択できます。

4. 「OK」をクリックします。

詳細は、[「アイテム・クラスの編集方法」](#)を参照してください。

「アイテム プロパティ」ダイアログを使用してアイテムをアイテム・クラスに追加する方法

1. 「ワークエリア」:「データ」タブで、アイテム・クラスに追加するアイテム（1 つまたは複数）を選択します。
2. 「編集」→「プロパティ」を選択して、「アイテム プロパティ」ダイアログを表示します。
3. 「アイテム クラス」フィールドを使用して、選択したアイテム（1 つまたは複数）が所属するアイテム・クラスを指定します。
4. 「OK」をクリックします。

詳細は、「[アイテム・プロパティの編集方法](#)」を参照してください。

アイテム・クラスからアイテムを削除する方法

次のいずれかの方法でアイテム・クラスからアイテムを削除します。

- [ポップアップ・メニューを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する方法](#)
- 「アイテム クラスの編集」ダイアログを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する方法
- 「アイテム プロパティ」ダイアログを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する方法

ポップアップ・メニューを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する方法

1. 「ワークエリア」:「アイテム クラス」タブを表示します。
2. アイテムを削除するアイテム・クラスの隣の + 記号をクリックします。
3. + 記号をクリックして、「このアイテム クラスを使用しているアイテム（ディテール ドリルを使用）」オブジェクトを展開します。
4. アイテム・クラスから削除するアイテムを選択します。
同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。
5. 選択したアイテムの 1 つを右クリックし、ポップアップ・メニューで「アイテムの削除」を選択します。
6. 「削除の確認」ダイアログが表示されます。

詳細は、「[アイテムとアイテム・クラスの削除方法](#)」を参照してください。

「アイテム クラスの編集」ダイアログを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する方法

1. 「ワークエリア」: 「アイテム クラス」 タブをクリックします。
2. 編集するアイテム・クラスをクリックし、「編集」→「編集 ...」を選択します。
3. 「アイテム クラスの編集」ダイアログ: 「アイテムの選択」タブを表示します。
4. このアイテム・クラスから削除するアイテムを、「選択されたアイテム」リストから「選択可能なアイテム」リストに移動します。
同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。
5. 「OK」をクリックします。

詳細は、「[アイテム・クラスの編集方法](#)」を参照してください。

「アイテム プロパティ」ダイアログを使用してアイテム・クラスからアイテムを削除する方法

1. 「ワークエリア」: 「データ」タブで、アイテム・クラスから削除するアイテム（1 つまたは複数）を選択します。
2. 「編集」→「プロパティ」を選択して、「アイテム プロパティ」ダイアログが表示します。
3. 「アイテム クラス」フィールドで「なし」を指定します。
4. 「OK」をクリックします。

詳細は、「[アイテム・プロパティの編集方法](#)」を参照してください。

アイテム・クラスを使用するアイテムの表示方法

特定のアイテム・クラスを使用するアイテムを表示する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」: 「アイテム クラス」タブで、展開するアイテム・クラスの隣の + 記号をクリックします。
アイテム・クラスの下に次の 2 つのオブジェクトが表示されます。
 - 値リスト
 - このアイテム・クラスを使用しているアイテム（ディテール・ドリルを使用）
2. 「このアイテム クラスを使用しているアイテム（ディテール ドリルを使用）」の隣の + 記号をクリックして、このアイテム・クラスに所属するアイテムのリストを表示します。

アイテムの値リストの表示方法

アイテムの値リストを表示する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「データ」タブで、表示する値リストを持つアイテムを展開します。

注意

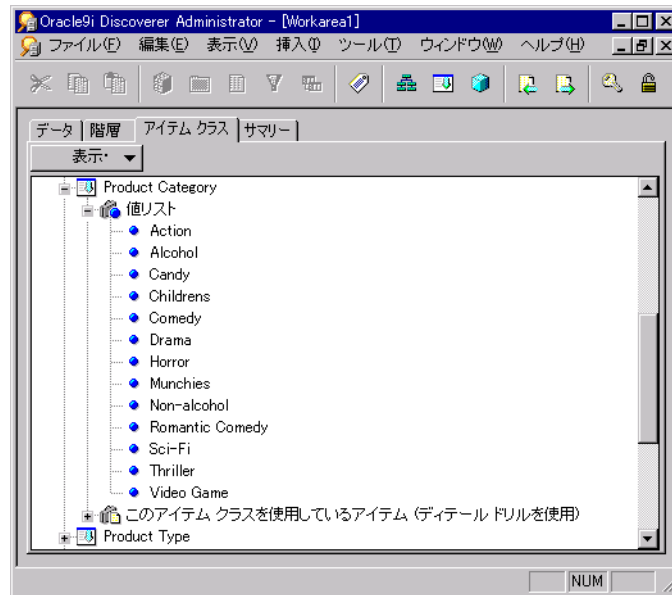
- Discoverer では、値リストの取出しに時間がかかることを警告するメッセージが表示されることがあります。値リストの取出し時に、Discoverer によりデータベースに SELECT DISTINCT 問合せが送られます（これにより、アイテムの固有値セットが選択されます）。データベースに多数の値がある場合は、リストの取出しに時間がかかることがあります。End User Layer には、値の取出しにかかる時間が記録されます。この時間が 15 秒以上である場合は、警告が表示されます。この制限時間は、Discoverer Desktop/Plus の「ツール」→「オプション」→「問合せ管理」で変更できます。
- 値リストを表示するアイテムが複数のフォルダに存在する場合は、行数が最も少ないフォルダ内のアイテムを選択します。これにより、最短時間で値リストが返されます。

アイテム・クラスの値リストの表示方法

アイテム・クラスに関連付けられた値リストを表示する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「アイテム クラス」タブを表示します。
2. + 記号をクリックして、表示する値リストを持つアイテム・クラスを展開します。
アイテム・クラスの下に次の 2 つアイテムが表示されます。
 - 値リスト
 - このアイテム クラスを使用しているアイテム
3. + 記号をクリックし、「値リスト」オブジェクトを展開して、アイテム・クラスの値リストを表示します。

図 9-20 「ワークエリア」：「アイテム クラス」タブ



注意

Discoverer では、値リストの取出しに時間がかかることを警告するメッセージが表示されることがあります。値リストの取出し時に、Discoverer によりデータベースに SELECT DISTINCT 問合せが送られます（これにより、アイテムの固有値セットが選択されます）。データベースに多数の値がある場合は、リストの取出しに時間がかかることがあります。End User Layer には、値の取出しにかかる時間が記録されます。この時間が 15 秒以上である場合は、警告が表示されます。この制限時間は、Discoverer Desktop/Plus の「ツール」→「オプション」→「問合せ管理」で変更できます。

アイテムとアイテム・クラスの削除方法

アイテムとアイテム・クラスを削除する手順は、次のとおりです。

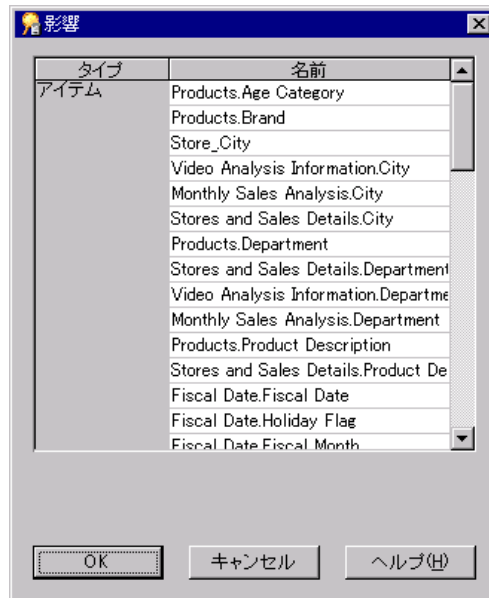
1. 次の手順で、アイテム（1 つまたは複数）またはアイテム・クラス（1 つまたは複数）を選択します。
 - 「ワークエリア」: 「データ」タブから削除するアイテムを選択します。
 - 「ワークエリア」: 「アイテム クラス」タブから削除するアイテム・クラスを選択します。

同時に複数のアイテムまたはアイテム・クラスを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムまたはアイテム・クラスをクリックします。

2. 「編集」→「削除」を選択して、「削除の確認」ダイアログを開きます。
3. （オプション）選択したアイテムまたはアイテム・クラスの削除による影響を受ける可能性のあるオブジェクトを確認できます。削除による影響の可能性を参照する手順は、次のとおりです。
 - a. 「影響 ...」をクリックして、「影響」ダイアログを表示します。

「影響」ダイアログには、削除によって影響を受ける可能性がある他のオブジェクトが表示されるため、正しい選択を行うのに役立ちます。
 - b. （オプション）「影響」ダイアログで行を選択すると、現在のアクションによる EUL オブジェクトへの影響を示すテキストが表示されます。

図 9-21 「影響」 ダイアログ



- c. 削除による影響を確認し、「OK」をクリックします。
4. 削除する場合は、「はい」をクリックして、選択したアイテム（1 つまたは複数）またはアイテム・クラス（1 つまたは複数）を削除します。

アイテムとアイテム・クラスのメンテナンスに関する注意

ユーザー定義データ型の列に基づくアイテムに関する注意

表の作成時に、表内の各列についてデータ型を指定する必要があります。Oracle は、多数の組み込みデータ型（NUMBER、DATE、VARCHAR2 など）およびいくつかのカテゴリのユーザー定義データ型（オブジェクト型、VARRAY、NESTED TABLE など）を提供しています。ユーザー定義データ型は、抽象データ型と呼ばれることがあります。ユーザー定義データ型では、アプリケーションでのデータの構造と動作をモデル化する型の構築ブロックとして、Oracle の組み込みデータ型およびその他のユーザー定義データ型が使用されます。

ロード・ウィザードを使用して表に基づく Discoverer フォルダを作成するときには、ユーザー定義データ型の列はすべて無視される（つまり、アイテムがフォルダに作成されない）ことに注意してください。

アイテムとしてユーザー定義データ型の属性を Discoverer フォルダに含める場合は、次のいずれかの処理が必要です。

- カスタム・フォルダを作成し、フォルダの SQL 文を使用して組み込みデータ型で列を定義し、アイテムに適用するユーザー定義データ型の属性にアクセスします（カスタム・フォルダ作成の詳細は、[第 5 章の「カスタム・フォルダの作成方法」](#)を参照）。
- データベース・ビューを作成し、ビュー定義を使用して組み込みデータ型で列を定義し、アイテムに適用するユーザー定義データ型の属性にアクセスします。ロード・ウィザードの使用時に、そのビューを単一フォルダに基づくオブジェクトとして指定します（ロード・ウィザードの使用方法の詳細は、[第 5 章の「データベースからの単一フォルダの作成方法」](#)を参照）。

ユーザー定義データ型の属性にアクセスするには、適切な構文を熟知する必要があります。ユーザー定義データ型とその属性へのアクセスの詳細は、使用中のデータベースのバージョンで提供されている Oracle マニュアルを参照してください。

10

結合の作成とメンテナンス

結合の作成とメンテナンス

この章では、Discoverer Administrator を使用した結合の実装方法について説明します。この章のトピックは次のとおりです。

- [結合](#)
- [単一アイテム結合とマルチアイテム結合](#)
- [1 対 1 結合、1 対多結合および多対多結合](#)
- [単一アイテム結合の作成方法](#)
- [マルチアイテム結合の作成方法](#)
- [結合プロパティの編集方法](#)
- [結合の編集方法](#)
- [結合の削除方法](#)
- [ファントラップ](#)
- [複合フォルダ内でファントラップを設定した場合の作業](#)
- [結合にデータ型の不一致がある場合の作業](#)
- [Day of Week アイテムを VARCHAR から DATE データ型に変換する新規アイテムの作成方法](#)
- [同じデータ型の 2 つのアイテム間の結合を作成する方法](#)

結合

結合では、1 つ以上の共通のアイテムを使用して 2 つのフォルダを関連付けます。データベース内で、共通の列を使用して 2 つの表が関連付けられます。

2 つのフォルダ間の結合により、次の作成時に両方のフォルダからのアイテムを含めることができます。

- Discoverer Desktop/Plus でのワークシートの作成
- Discoverer Administrator での複合フォルダの作成
- Discoverer Administrator での階層の作成

アイテムの選択時には、同じフォルダまたは第 1 のフォルダに結合された別のフォルダからのみ別のアイテムを選択することが可能です。選択した第 2 のアイテムが異なるフォルダからのアイテムである場合、次のアイテムをそのフォルダに結合されたフォルダから選択できます。

結合には、**マスター側**と**ディテール側**があります。マスター側とは、複数のディテール行が存在する 1 つの行を持つフォルダです。たとえば、**Department** フォルダのマスター行と

Employee フォルダの複数のディテール行との関係などです。すべての従業員が 1 つの部門で働いている場合、部門の従業員はゼロ、1 人または複数でありえます。

マスターとして正しいフォルダで結合を定義することが重要です。問合せで 3 つ以上のフォルダが使用されると、誤解または不正な結果が生じることがあります。また、サマリー・フォルダを使用して問合せの速さを向上できるかどうかにも影響を与えることがあります。この章では、この問題を回避する方法と、問題が発生した場合の対処方法について説明します。

単一アイテム結合とマルチアイテム結合

単一アイテム結合では、両方のフォルダに共通するアイテムを使用して 2 つのフォルダが関連付けられます。たとえば、SCOTT スキーマを使用してビジネスエリアを作成する場合、共通のアイテム Deptno を使用して次のように Emp フォルダと Dept フォルダの単一アイテム結合を作成できます。

```
Emp.Deptno=Dept.Deptno
```

複数アイテムの結合では、すべての結合条件が満たされた場合に結合が真になるように、複数の結合条件を使用して 2 つのフォルダが関連付けられます。たとえば、2 つのフォルダ (Emp と Salgrade) では、単一アイテム結合の作成に必要な共通のアイテムが共有されていません。次の例は、ある従業員の給料が特定の給与範囲内にある場合にその従業員について真になります (つまり、Emp フォルダが Salgrade フォルダに結合されます)。

```
Emp.Sal >= Salgrade.LoSal
```

```
Emp.Sal <= Salgrade.HiSal
```

Discoverer では、Emp フォルダの各給与レコード (ここでは、給与が最低額と最高額の間にあります) について、Salgrade フォルダからの従業員に関する給与等級を表示できます。

1 対 1 結合、1 対多結合および多対多結合

通常、結合は 1 対多です。この結合では、マスター・フォルダの 1 つの行がディテール・フォルダの複数の行に結合されます。

場合によっては、1 対 1 結合と多対多結合もあります。Discoverer またはリレーショナル・システムでは、多対多結合は直接にはサポートされていませんが、複数の多対 1 結合に変換するようにこれらのシステムを変更できます。

Discoverer Plus、Discoverer Desktop および Discoverer Viewer のユーザーは、独自の結合条件を設定できません。ただし、複数の結合が存在する場合は、使用する結合を選択できます。

詳細は、「[結合プロパティ ダイアログ](#)」を参照してください。

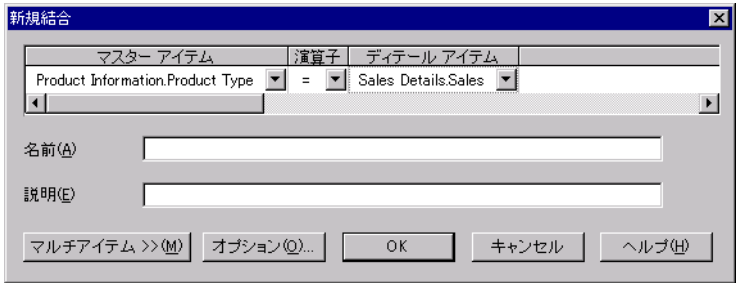
単一アイテム結合の作成方法

結合を作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」：「データ」タブを表示し、マスター・アイテムにするアイテムを選択します。
2. 「挿入」→「結合」を選択して、「新規結合」ダイアログを表示します。「マスターアイテム」フィールドにマスター・フォルダが表示されます。

注意：「マスターアイテム」フィールドまたは「ディテールアイテム」フィールドのフォルダを変更する場合は、ドロップダウン・リストの最後の「追加アイテム」をクリックします。「新規結合」ダイアログが再び開かれます。ここで、異なるフォルダまたはアイテムを選択できます。

図 10-1 「新規結合」ダイアログ



3. ドロップダウン・リストから演算子を選択して、結合のタイプを指定します。
4. 「ディテールアイテム」の下向き矢印をクリックして、「新規結合」ダイアログを表示します。
5. 結合するフォルダとディテール・アイテムを選択します。
また、開いている別のビジネスエリアのフォルダからディテール・アイテムを選択することもできます。
6. (オプション) 特定の結合オプションを設定する場合は、「オプション ...」をクリックして「結合オプション」ダイアログを表示します。
7. 「OK」をクリックして、「新規結合」ダイアログを閉じます。

結合がワークエリアのフォルダに追加されます。フォルダの隣のアイコンは、結合関係を示します。

注意：

- 結合は、アイテム間でのみ可能です。関数またはリテラル（テキスト文字列、数値、日付など）を直接含めることはできません。関数またはリテラルを含めるには、使用する

関数またはリテラルを持つユーザー定義アイテムを作成し、これらのアイテムを結合で指定します。

- 結合内のアイテムを後で非表示にできます。これにより、ユーザーは結合の詳細を表示しなくても結合されたフォルダを使用できます。

マルチアイテム結合の作成方法

複数のアイテムをフォルダ間の結合に追加できます。マルチアイテム結合では、すべてのマスター・アイテムが1つのフォルダに所属し、すべてのディテール・アイテムが1つのフォルダに所属する必要があります。

マルチアイテム結合を作成する手順は、次のとおりです。

1. 「[単一アイテム結合の作成方法](#)」の指示に従って第1の結合を作成します。
2. 「[新規結合](#)」ダイアログが表示された後、「マルチアイテム」をクリックして「[新規結合](#)」ダイアログを表示します。

図 10-2 「新規結合」ダイアログ



3. 「追加」ボタンをクリックして、新しい行を表示します。
デフォルトで表示されるフォルダは以前の行と同じフォルダであることに注意してください。
4. 「マスター フォルダ」と「ディテール フォルダ」のドロップダウン・リストを使用して、新しいアイテムのペアを選択します。

注意：異なるフォルダからのマスター・アイテムまたはディテール・アイテムを追加すると、以前のフォルダからのすべてのアイテムが結合から削除されます。

- 5. 必要なアイテムがすべてマルチアイテム結合に含まれるまで、「追加」 ボタンを使用してアイテムを結合に追加します。
- 6. 「OK」 をクリックして、「新規結合」 ダイアログを閉じます。

結合プロパティの編集方法

「結合プロパティ」 ダイアログを使用して、選択された 1 つ以上の結合のすべての EUL 結合プロパティを表示または編集します。結合アイテムの表示または編集、新規結合アイテムの追加、結合オプションの表示と修正、あるいは結合の名前と説明の編集が必要な場合は、このダイアログのかわりに「編集」 → 「編集 ...」 オプションを使用してください。

結合プロパティを編集する手順は、次のとおりです。

- 1. 「ワークエリア」：「データ」 タブで結合を選択し、「編集」 → 「プロパティ」 を選択して、「結合プロパティ」 ダイアログを表示します。

図 10-3 「結合プロパティ」 ダイアログの「一般」 タブ



ヒント : 同時に複数の結合を選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別の結合をクリックします。

選択された結合それぞれに共通するプロパティがすべて表示されます。フィールドのデータが選択された各結合に共通でない場合、フィールドには何も表示されません。

- 2. 必要な変更を行います。
- 3. 「OK」 をクリックします。

結合の編集方法

「結合の編集」ダイアログを使用して、既存の結合アイテムの表示と編集、新規結合アイテムの追加、結合オプションの表示と修正、あるいは結合の名前と説明の編集を行います。1つ以上の結合についてすべての EUL 結合プロパティにアクセスする場合は、このダイアログのかわりに結合アイテム（1つまたは複数）を選択し、「編集」→「プロパティ」を選択します。

既存の結合を編集する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「データ」タブで結合を選択し、「編集」→「編集 ...」を選択して、「結合の編集」ダイアログを表示します。

図 10-4 「結合の編集」ダイアログ



注意：「結合の編集」ダイアログの使用方法は、「新規結合」ダイアログと同じです（詳細は、「[単一アイテム結合の作成方法](#)」を参照）。

2. 必要に応じて結合を編集します。
3. 「OK」をクリックします。

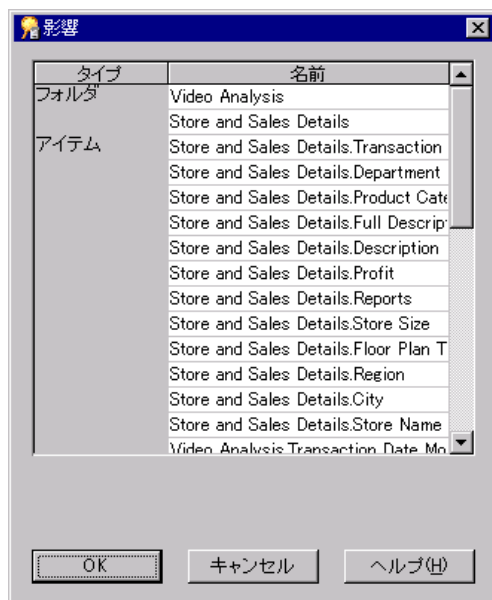
結合の削除方法

このオプションを使用して、1つ以上の結合を削除します。削除対象の結合が別の EUL オブジェクトで使用されている場合、結合を削除するとそれらのオブジェクトが影響を受けることがあるので注意してください。「影響」ダイアログを使用すれば、結合の削除による影響を受ける可能性のある別のオブジェクトを確認できます。

結合を削除する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「データ」タブで、削除する結合を選択します。
同時に複数の結合を選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別の結合をクリックします。
2. 「編集」→「削除」を選択して、「**削除の確認**」ダイアログを表示します。
3. (オプション) この結合の削除による影響を受ける可能性のあるオブジェクトを確認できます。削除による影響の可能性を参照する手順は、次のとおりです。
 - a. 「影響 ...」をクリックして、「**影響**」ダイアログを表示します。
「影響」ダイアログには、削除によって影響を受ける可能性がある他のオブジェクトが表示されるため、正しい選択を行うのに役立ちます。
 - b. (オプション) 「影響」ダイアログで行を選択すると、現在のアクションによる EUL オブジェクトへの影響を示すテキストが表示されます。

図 10-5 「影響」 ダイアログ

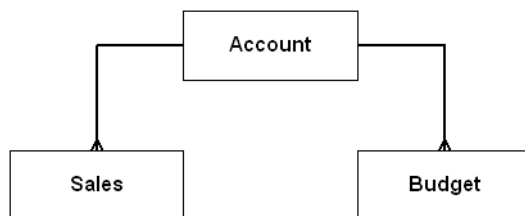


- c. 結合の削除による影響を確認した後、「OK」をクリックして「影響」ダイアログを閉じます。
4. 選択した結合（1 つまたは複数）を削除する場合は、「はい」をクリックします。

ファントラップ

ファントラップとは、予期せぬ結果を返すことがあるスキーマ（結合されたデータベース表のグループ）です。最も一般的なファントラップは、マスター表がディテール表に独立して結合されるときに起こります。関係が正しい場合でも、この種のスキーマが原因でデータ・ポイントが正しく集計されないことがあります。次の例は、そのようなデータ・ポイントを示しています。

図 10-6 ファントラップ・スキーマの例



ファントラップ・スキーマの例には、1つのマスター・フォルダ（ACCOUNT）と2つのディテール・フォルダ（SALESおよびBUDGET）が含まれています。すべての会計に、各期間の複数の販売数値と複数の予算数値を持つことができます。

次の例は、外見上は簡単な問合せによって不正な結果がもたらされるという問題と、Discoverer でこの問題を解決する方法を示しています。次の数値は、マスター表とディテール表のデータを示しています。

図 10-7 1つのマスター・フォルダと2つのディテール・フォルダを含むファントラップ・スキーマ

ACCOUNT	
ID	Name (名前)
1	Account 1
2	Account 2
3	Account 3
4	Account 4

BUDGET		
Accid (会計 ID)	Budget (予算)	Period (期間)
1	200	1
1	200	2
2	100	3
3	150	2
3	250	3
3	350	4
4	100	1
4	100	2

SALES		
Accid (会計 ID)	Sales (販売)	Period (期間)
1	100	1
1	100	2
1	200	3
2	50	1
2	80	2
3	200	3
4	150	2
4	50	3
4	100	4

Discoverer エンド・ユーザーが「会計ごとの販売総計と予算総計はいくらか」という質問に回答するための問合せを作成する場合、2つのディテール表からの集計（SUM）は、同一のマスター表（ACCOUNT）に基づいて行われます。

Discoverer では、次のような予期した（正しい）結果がもたらされます。

図 10-8 予期した結果（Discoverer）

Account (会計)	Sales (販売)	Budget (予算)
Account 1	400	400
Account 2	130	100
Account 3	200	750
Account 4	300	200

この結果では、Discoverer により会計名、販売の合計および予算の合計が選択されています。

しかし、簡単な SQL を使用すると、次のような予期せぬ（不正な）結果がもたらされます。

図 10-9 予期せぬ（不正な）結果（簡単な SQL）

Account (会計)	Sales (販売)	Budget (予算)
Account 1	800	1200
Account 2	130	200
Account 3	600	750
Account 4	600	600

この数値の結果は関係上は正しいのですが、あきらかに間違っています。たとえば、この結果では Account 1 の販売総計が 800 となっていますが、[図 10-7](#) の SALES 表によれば Account 1 の販売総計は 400（100+100+200）です。

予期せぬ（不正な）結果の原因

前述の予期せぬ（不正な）結果の原因は、各表が最初に一時的な表に結合されてから集計が行われるという単一問合せにあります。これにより、複数回集計が行われることとなります（不正）。不正な結果をもたらす簡単な SQL は、次のとおりです。

```
SELECT Account.Name, SUM(sales), SUM(budget)
FROM
Account, Sales, Budget
Where
Account.id=Sales.accid
AND
Account.id=Budget.accid
GROUP BY
Account.Name
```

正しい結果を保証する方法

Discoverer で生成される問合せはすべて検査されます。Discoverer では正しいレベルで集計が行われるように、ファントラップが検出され、問合せがリライトされます。各マスター・ディテール集計について 1 回、インライン・ビューを使用して問合せがリライトされ、次に外部問合せの結果が組み合わせられます。

次の例は、正しい結果をもたらすために Discoverer で使用されるインライン・ビュー SQL を示しています。

```
SELECT inACC as Name, SUM(inSalesSum) as SALES_SUM, SUM(inBudgetSum) as BUDGET__
SUM,
FROM
    (SELECT masterID AS OutMasterIDSales, SUM(SalesDetailsSales) AS inSalesSum
    FROM
        (SELECT ID AS masterID, NAME AS masterName FROM ACCOUNT) INLineAccount,
        (SELECT ID AS SalesDetailId, ACCID AS SalesDetailAccID, SALES AS
        SalesDetailsSales FROM SALES )INLineSales
    WHERE(masterID = SalesDetailAccID(+))
    GROUP BY masterID) inner1,
    (SELECT masterID AS OutMasterIDBudget, SUM(BudgetDetailBudget) AS inBudgetSum,
    masterName AS inACC
    FROM
        (SELECT ID AS masterID, NAME AS masterName FROM ACCOUNT) INLineAccount,
        (SELECT ID AS BudgetDetailId, ACCID AS BudgetDetailAccID, BUDGET AS
        BudgetDetailsSales FROM BUDGET )INLineBudget
    WHERE(masterID = BudgetDetailAccID(+))
    GROUP BY masterName, masterID ) inner2
    WHERE ((OutMasterIDBudget = OutMasterIDSales))
    GROUP BY inACC
```

各販売と各予算が個別に（各マスター・ディテール集計について1回）合計され、次にマスター・キー（1つまたは複数）に基づいて結合と組み合わせられるため、この結果は正しくなります。

Discoverer では、解決不可能なファントラップ・スキーマを含む問合せは防止されます。

Discoverer では通常、ファントラップ・スキーマを含む問合せは解決されます。問合せに解決不可能なファントラップ・スキーマが含まれる場合、Discoverer により問合せが禁止され、エラー・メッセージが表示されます。

Discoverer では、次の状況で、解決不可能なファントラップ・スキーマを含む問合せが防止されます。

- ディテール・フォルダで、マスターとは異なるキーが結合に使用されている場合
- ディテール・フォルダ間に直接的な結合関係がある場合（あいまいな循環関係が生じます）
- 2つ以上のディテール・フォルダから、集計されない値が選択される場合
- 2つ以上のディテール・フォルダに、異なるマスター・フォルダへの個別の結合関係がある場合

Discoverer でのファントラップ検出の使用または不使用の詳細は、『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

複合フォルダ内でファントラップを設定した場合の作業

Discoverer では、複合フォルダ内でのファントラップ結合設定に関する警告が、無効な結合設定が存在することを示すメッセージとして表示されます。Discoverer が複合フォルダについて正しい結果を確実に返すようにするために（複合フォルダ内にファントラップ結合設定が存在する場合）、アイテム・プロパティの編集と計算式の設定（たとえば、SUM(Sales Fact.Sales)）を行って、ディテールで使用する集計関数を指定できます。

次の図は、複合フォルダについて指定された集計（SUM）を示しています。

図 10-10 複合フォルダ内のアイテムについて指定された集計計算式の例

属性	値
名前	Sales
説明	Total sales for one store, one product in one
データ型	NUMBER
計算式	SUM(Sales Facts.Sales)
データベース列	
ユーザーに表示	はい
アイテム クラス	指定なし
日付階層	指定なし
デフォルト位置	データ ポイント
デフォルト総計	SUM

☐ 自動的に変更を保存(S)

OK キャンセル 適用(A) ヘルプ(H)

このアイテムからデータを導出するために使用される式。関数、このフォルダやコンポーネント フォルダ内のアイテム、SYSDATE のようなリテラルおよび類似列を含むことができます。

結合の詳細は、Oracle9i データベースのマニュアルを参照してください。

結合にデータ型の不一致がある場合の作業

Discoverer では、異なるデータ型（VARCHAR、NUMBER または DATE など）間の結合は禁止されています。ただし、以前の Discoverer バージョンからアップグレードしている場合、異なるデータ型間に既存の結合が存在することがあります。データ型が異なる 2 つのアイテム間の結合が存在する場合、問合せは実行されますが、エラー・メッセージが表示されて、問合せは完了しません。また、データ型が異なるアイテムを含む結合の編集を試みると、エラー・メッセージが表示されます。

次の方法で、データ型が異なる 2 つのアイテム間の結合を作成できます。

- データ型が異なる第 1 のアイテムを基に新しいアイテムを作成します。
- 新しいアイテムにデータ型を変換するユーザー定義アイテム（TO_CHAR()、TO_DATE()、TO_NUMBER() など）を作成して、新しいアイテムのデータ型が第 2 のアイテムのデータ型と異ならないようにします。
- 新しいアイテムと、データ型が異なる第 2 のアイテムとの結合を作成します。

データ型が異なる 2 つのアイテム間の結合を作成する作業を次に示しています。これらの作業では、Video Store Tutorial ビジネスエリアを使用します（Video Store Tutorial ビジネスエリアのロード方法の詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator チュートリアル』を参照）。

次の作業では、データ型が異なる 2 つのアイテム（Day of Week（VARCHAR）と Transaction Date（DATE））間の結合を作成します。これらのアイテムを結合するには、新しいアイテムを作成し、次の手順に従って結合を作成する必要があります。

- [Day of Week アイテムを VARCHAR から DATE データ型に変換する新規アイテムの作成方法](#)
- [同じデータ型の 2 つのアイテム間の結合を作成する方法](#)

Day of Week アイテムを VARCHAR から DATE データ型に変換する新規アイテムの作成方法

Day of Week アイテムを VARCHAR から DATE データ型に変換する新規アイテムを作成する手順は、次のとおりです。

1. Video Store Tutorial ビジネスエリアから Calendar Date フォルダを選択します。

新しいアイテムを作成する場所がこのフォルダです。

2. 「挿入」 → 「アイテム」を選択して、「**新規アイテム**」ダイアログを表示します。

3. 「関数」ラジオ・ボタンを選択して、関数フォルダを表示します。

4. 「変換」フォルダの隣の + 記号をクリックして、変換関数を表示します。

5. TO_DATE 関数を選択し、「貼り付け」をクリックします。

TO_DATE 関数が、この新規アイテムの「**計算**」フィールドに貼り付けられます。

6. 「**計算**」フィールドの TO_DATE 関数のカッコ内のテキストを次のテキストで置き換えます。

Day of Week,Day

「**計算**」フィールドに次のテキストが表示されます。

TO_DATE (Day of Week,Day)

注意：このユーザー定義アイテムにより、Day of Week (VARCHAR) アイテムを基にした新しいアイテムが作成され、TO_DATE 関数を使用して DATE データ型に変換されます。

7. 「OK」をクリックして、新規アイテムを作成します。

DATE データ型に変換された Day of Week (VARCHAR) アイテムを基にして新規アイテムが作成されました。

同じデータ型の 2 つのアイテム間の結合を作成する方法

Calendar Date フォルダの新規アイテム（前述の作業で作成）を、Store and Sales フォルダの Transaction Date アイテムと結合する作業を次に示しています。

同じデータ型の 2 つのアイテム間の結合を作成する手順は、次のとおりです。

1. 前述の作業で作成した Calendar Date フォルダの新規アイテムを選択します。
2. 「挿入」 → 「結合」を選択して、「[新規結合](#)」ダイアログを表示します。
3. 「ディテール アイテム」 ドロップダウン・リストをクリックして、「[新規結合](#)」ダイアログを表示します。

「新規結合」ダイアログを使用すれば、新規結合のディテール・フォルダまたはアイテムを選択できます。
4. Store and Sales Details フォルダの隣の + 記号をクリックして、フォルダ・アイテムを展開します。
5. Transaction Date アイテムを選択して、「OK」をクリックします。
6. 「OK」をクリックします。

Discoverer により、新たに作成された同じデータ型のアイテムを使用する結合が作成されます。別のアイテムと同じデータ型の新規アイテムが作成されたため、Discoverer で有効な結合の作成が可能になります。

ユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス

ユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス

この章では、Discoverer Administrator を使用したユーザー定義アイテムの作成と、メンテナンス方法について説明します。この章のトピックは次のとおりです。

- [ユーザー定義アイテム](#)
- [導出ユーザー定義アイテム](#)
- [集計ユーザー定義アイテム](#)
- [集計ユーザー定義アイテムに適用される制限](#)
- [分析関数と集計ユーザー定義アイテムとの違い](#)
- [集計導出ユーザー定義アイテム](#)
- [集計導出ユーザー定義アイテムの例](#)
- [ユーザー定義アイテムの作成方法](#)
- [ユーザー定義アイテムのプロパティの編集方法](#)
- [ユーザー定義アイテムの編集方法](#)
- [ユーザー定義アイテムの削除方法](#)
- [PL/SQL 関数が必要な理由](#)
- [ユーザー定義 PL/SQL 関数](#)
- [ユーザー定義 PL/SQL 関数の登録について](#)
- [ユーザー定義 PL/SQL 関数を自動的に登録する方法](#)
- [ユーザー定義 PL/SQL 関数を手動で登録する方法](#)

ユーザー定義アイテム

ユーザー定義アイテムは、アイテム用のデータを導出する計算式を使用するアイテムです。

ユーザー定義アイテムを使用すると、Discoverer エンド・ユーザーはデータにビジネス計算を適用できます。たとえば、典型的なビジネス計算には次のものがあります。

- 利益マージン
- 月当たりの平均収益
- 予測した売上
- 製品の種類ごとの利益率

ユーザー定義アイテムは、フォルダにある他のアイテムと同様に動作し、条件、サマリー・フォルダ、値リスト、結合および他のユーザー定義アイテムで使用できます。

Discoverer 管理者のように、ユーザー定義アイテムを作成し、ワークブックに含めることができます。

ユーザー定義アイテムを作成した場合、次の長所があります。

- Discoverer エンド・ユーザーは、ユーザー定義アイテムを選択するのみで、複雑な計算をワークシートに含めることができます。
- 基礎となるデータベース表で列として存在しないフォルダに新規アイテムを追加できます。

次を含む式を使用して、ユーザー定義アイテムを作成します。

- 既存のアイテム
- 演算子
- リテラル
- 関数

3つのタイプのユーザー定義アイテムがあります。

- 導出ユーザー定義アイテム（詳細は、「[導出ユーザー定義アイテム](#)」を参照してください）
- 集計ユーザー定義アイテム（詳細は、「[集計ユーザー定義アイテム](#)」を参照してください）
- 集計導出ユーザー定義アイテム（詳細は、「[集計導出ユーザー定義アイテム](#)」を参照してください）

次のソースから Discoverer のユーザー定義アイテムの詳細がわかります。

- ユーザー定義アイテムの作業例の詳細は『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
- 関数構文の詳細は『Oracle9i SQL リファレンス』を参照してください。

導出ユーザー定義アイテム

導出ユーザー定義アイテムは、フォルダにある他のアイテムと同じ動作をする式です。導出ユーザー定義アイテムは、軸アイテムまたはデータ・ポイントにすることができます。また、通常のアイテムを使用する任意の場所で使用できます。導出ユーザー定義アイテムの値は、同じ行の他のアイテムの値のみに依存し、他のアイテムがワークブックに含まれる状況にかかわらず同じです。

導出ユーザー定義アイテムの例を次に示します。

- `Sal*12+NVL(Comm,0)` — 1年間の給与 + コミッションを返します
- `Initcap(Ename)` — `Ename` の頭文字を大文字にします
- `1` — 値1を返します
- `Sysdate-7` — 今日の日付から7日前の日付を返します

集計ユーザー定義アイテム

集計ユーザー定義アイテムは、GROUP 関数が適用されるユーザー定義アイテムです (SUM、COUNT、MAX、MIN、AVG、DETAIL など)。

集計ユーザー定義アイテムの例を次に示します。

- `SUM(Sal)*12`
- `SUM(Comm)/SUM(Sal)`
- `AVG(Monthly Sales)`

集計の計算値は、ワークシートで使用する他のアイテムに応じて異なります。軸アイテムがどのようにグループ化されるかが、集合化された行の数に影響します。これは、2つの集計の比率を計算する場合に特に重要です。

たとえば、マージンを計算するには、`Profit/Sales` ではなく `SUM(Profit)/SUM(Sales)` の計算を使用します。問合せで 사용되는場合、前者は `SUM(Profit/Sales)` になり、`SUM(Profit)/SUM(Sales)` とは異なる値になります。例では SUM 集計を使用していますが、他の任意の集計にも適用可能です (SUM、COUNT、MAX、MIN、AVG、DETAIL など)。

注意：2つのデータ・ポイントの合計の比率を計算する場合、必ずデータ・ポイントを合計してから比率を計算します。

集計ユーザー定義アイテムに適用される制限

集計ユーザー定義アイテムを作成している場合、集計に複数の制限が適用されることに注意してください。集計ユーザー定義アイテムに適用される制限は次のとおりです。

- データ・ポイントに設定された「**デフォルト位置**」プロパティを持つこと。
- ディテールに設定された「**デフォルト総計**」プロパティを持つこと。
- 現在のフォルダのみにあるアイテムを参照すること。
- 結合では使用できません。
- 必須条件では使用できません。
- 階層では使用できません。
- アイテム・クラスを保有できません。
- 複合フォルダの中にドラッグできません。
- Discoverer Desktop/Plus でこれらに適用される集計関数をさらに持つことはできません。

集計は、フォルダにより参照されたデータの行数に影響を与えません。Discoverer Desktop/Plus で選択された場合に生成された SQL のみに影響を与えます。

分析関数と集計ユーザー定義アイテムとの違い

分析関数は、次の点を除き、集計と同様に動作します（詳細は用語集項目の「[分析関数](#)」を参照してください）。

- 分析関数は Discoverer で集計を必要としません。集計関数に適用される他のすべての制限は分析関数にも適用されます（詳細は、「[集計ユーザー定義アイテムに適用される制限](#)」を参照してください）。
- 分析関数集計はメモリー・キャッシュではなく、Oracle データベースから導出します。したがって、分析関数集計にはパフォーマンス・オーバーヘッドがあります。
- 分析関数は、Oracle 8.1.7 以上のデータベースのみで利用できます。

分析関数の詳細は、『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

集計導出ユーザー定義アイテム

集計導出ユーザー定義アイテムは、複合フォルダで作成されたユーザー定義アイテムです。このフォルダには（同じ複合フォルダにある）別の集計ユーザー定義アイテムが集められています。一方、集計導出ユーザー定義アイテムは、別の集計ユーザー定義アイテムの中にネストされた単なる集計ユーザー定義アイテムです。

集計導出ユーザー定義アイテムにより、集計（AVG、SUM、COUNT など）を現在レベルの集計に適用し、追加の情報を導出できます。

集計導出ユーザー定義アイテムは、あらゆる面で通常の導出ユーザー定義アイテムと同様に動作します（詳細は「[導出ユーザー定義アイテム](#)」を参照してください）。

集計導出ユーザー定義アイテムの例

この例では、ビデオ・ストア・チェーンで1年にわたって月当たりの平均売上を表示するために集計導出ユーザー定義アイテムをどのように使用するかを説明します。この例の集計導出ユーザー定義アイテムは、同じフォルダで作成された集計ユーザー定義アイテムを使用しています。集計ユーザー定義アイテムの詳細は、「[集計ユーザー定義アイテム](#)」を参照してください。

この例は、Discoverer Administrator チュートリアル演習を完了したときに作成した Video Analysis フォルダと Monthly Sales Analysis フォルダという2つの複合フォルダを使用しています（詳細は『Oracle9i Discoverer Administrator チュートリアル』を参照してください）。

集計導出ユーザー定義アイテムは、複合フォルダ Monthly Sales Analysis で作成されます。Monthly Sales Analysis 複合フォルダは、Video Analysis 複合フォルダから次のアイテムをドラッグして作成されます（詳細は『Oracle9i Discoverer Administrator チュートリアル』を参照してください）。

- 部門
- 地域
- 都市
- 店舗名
- 年
- 四半期
- 月

複合フォルダ Monthly Sales Analysis は毎月の全店舗のデータの行を参照します。

集計ユーザー定義アイテム（Monthly Sales Per Store）は、次の計算式を使用して Monthly Sales Analysis 複合フォルダで作成されます。

SUM(Video Analysis.Sales)

このアイテムは、所定の店舗の所定の月の合計売上を示します。

図 11-1 集計ユーザー定義アイテム SUM(Video Analysis.Sales) を使用した問合せの結果

Month	Monthly Sales Per Store	Store Name
Jan	¥25,640.77	Store No. 1
Feb	¥18,037.91	Store No. 1
Mar	¥16,359.08	Store No. 1
Apr	¥23,502.34	Store No. 1
May	¥22,799.12	Store No. 1
Jun	¥20,758.30	Store No. 1
Jul	¥12,839.72	Store No. 1
Aug	¥9,588.84	Store No. 1
Sep	¥12,602.28	Store No. 1
Oct	¥14,177.19	Store No. 1
Nov	¥12,477.44	Store No. 1
Dec	¥12,002.42	Store No. 1
Jan	¥2,997.32	Store No. 10

集計導出ユーザー定義アイテム（Average Monthly Sales per Store）は、次の計算式を使用して Monthly Sales Analysis 複合フォルダで作成されます。

AVG(Monthly Sales Per Store)

このアイテムは、所定の店舗の所定の月の平均合計売上を示します。

図 11-2 集計導出ユーザー定義アイテム AVG(Monthly Sales Per Store) を使用した問合せの結果

Month	Average Monthly Sales per Store	Store Name
Jan	¥8,546.92	Store No. 1
Feb	¥6,012.64	Store No. 1
Mar	¥5,453.03	Store No. 1
Apr	¥7,834.11	Store No. 1
May	¥7,599.71	Store No. 1
Jun	¥6,919.43	Store No. 1
Jul	¥6,419.86	Store No. 1
Aug	¥4,794.42	Store No. 1
Sep	¥6,301.14	Store No. 1
Oct	¥7,088.60	Store No. 1
Nov	¥6,238.72	Store No. 1
Dec	¥6,001.21	Store No. 1
Jan	¥999.11	Store No. 10

注意

Average Monthly Sales per Store アイテムは平均の毎月の売上を示し、地域、四半期、年度にわたって分析できます。これは、傾向を比較するのに便利です。この形式のネストされた集計は、新規フォルダに集計ユーザー定義アイテムを作成することによってのみ可能です。新規フォルダは、元の複合フォルダにあった個々の売上ではなく毎月の売上を表すので、集計ユーザー定義アイテムを新規フォルダに作成する必要があります。

集計導出ユーザー定義アイテムは、Discoverer によって作成された SQL が GROUP BY 句を含むようにします。この句により、Discoverer エンド・ユーザーの間合せはユーザー定義アイテムの間合せでの使用にかかわらず、非集計アイテムの各組合せの 1 行を返すようになります。これにより、行はその他のアイテムのレベルで集合化されるので、フォルダによって返される行数が少なくなります。

ユーザー定義アイテムの作成方法

この作業を使用して、ユーザー定義アイテム（導出ユーザー定義アイテム、集計ユーザー定義アイテム、集計導出ユーザー定義アイテム）を作成できます。

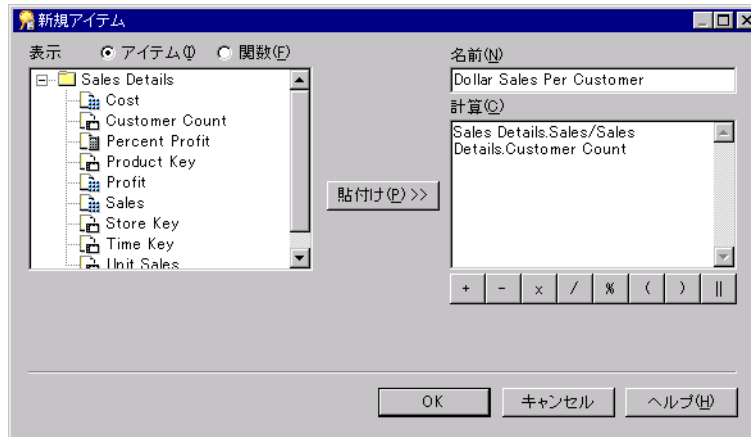
新規ユーザー定義アイテムを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」：「データ」タブで新規ユーザー定義アイテムを含めるフォルダを選択します。
2. 「挿入」→「アイテム」を選択して、「新規アイテム」ダイアログを表示します。

このダイアログにより、新規ユーザー定義アイテムを作成し、選択したフォルダに追加できます。

注意：フォルダを選択しない場合、Discoverer Administrator は「新規アイテム」ダイアログを表示します。このダイアログで、新規ユーザー定義アイテムを含めるフォルダを選択できます（現在開いているビジネスエリアから任意のフォルダを選択できます）。

図 11-3 「新規アイテム」ダイアログ



3. 新規ユーザー定義アイテムの「名前」を指定します。
4. 次のように、「計算」フィールドに計算式を入力します。
 - 計算式がわかる場合は、「計算」フィールドに計算式を直接入力します。
 - 計算式がわからない場合は、次の手順により計算式を段階的に作成できます。
 - 「アイテム」ボタンを選択し、選択したフォルダのアイテムを表示し、計算式で使用するアイテムを選択します（フォルダが複合フォルダである場合、すべてのソース・フォルダとソース・フォルダのアイテムが表示されます）。
 - 「関数」ボタンを選択し、タイプごとにグループ化された使用可能な関数を表示し、「計算」で使用する関数を選択します（登録されたユーザー定義 PL/SQL 関数はデータベース・グループに表示されます）。
 - 該当する演算子のボタンを選択します。

注意：計算式は、標準の Oracle データベースの構文に従います。この構文の詳細は『Oracle9i SQL リファレンス』を参照してください。

5. (オプション)「アイテム」または「関数」をクリックまたは演算子のボタンを使用して、計算式を作成します（関数の構文がわからない場合でも作成可能です）。
 - アイテム
選択したフォルダのアイテムのリストを表示します（複合フォルダの場合、ここにソース・フォルダとそのアイテムが表示されます）。

アイテムを計算式に挿入できます（アイテムをダブルクリックするか、「貼付け」を使用します）。
 - 関数
計算式で使用可能な（タイプごとにグループ化された）関数を表示します。

登録されているユーザー定義 PL/SQL 関数は、「データベース」グループに表示されます。詳細は、「ユーザー定義 PL/SQL 関数」を参照してください。

関数を計算式に挿入できます（関数をダブルクリックするか、「貼付け」を使用します）。
 - 演算子
演算子は、「計算」エリアの下に沿って表示されます。演算子をクリックし、計算式に挿入します。

ヒント：「新規アイテム」ダイアログのサイズを変更して、計算式を記述する空間を拡大できます。

6. 計算式の指定を終了した後、「OK」をクリックします。

計算式にエラーがない場合は、新規アイテムが作成されます。計算式にエラーがある場合、Discoverer Administrator はまずエラーを表示し、「新規アイテム」ダイアログを表示します。これにより計算式を修正できます。

この時点で、新規ユーザー定義アイテムを使用し、結合や条件、さらに新規のユーザー定義アイテムも作成できます。新規ユーザー定義アイテムを他のユーザー定義アイテムに含めることもできます。

ユーザー定義アイテムのプロパティの編集方法

ユーザー定義アイテムのプロパティ編集の詳細は、[第9章の「アイテム・プロパティの編集方法」](#)を参照してください。

ユーザー定義アイテムの編集方法

既存のユーザー定義アイテムを編集する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「データ」タブでユーザー定義アイテムを選択し、「編集」→「編集 ...」を選択して、「ユーザー定義アイテムの編集」ダイアログを表示します。
2. 必要に応じてユーザー定義アイテムを編集します。
3. 「OK」をクリックし、変更内容を保存してダイアログを閉じます。

ユーザー定義アイテムの削除方法

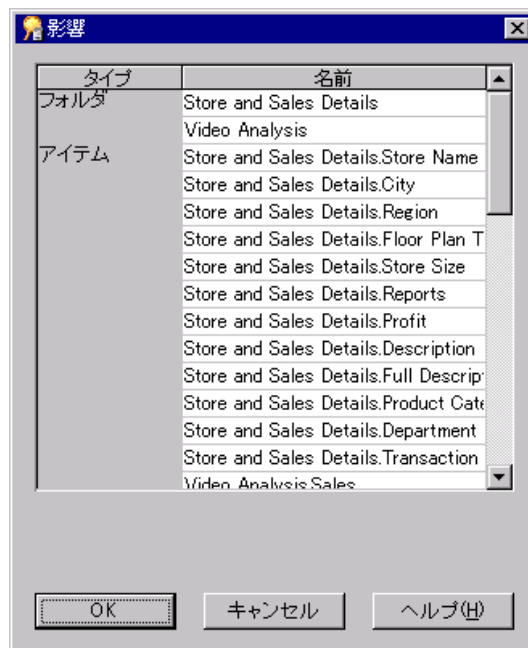
1 つ以上のユーザー定義アイテムを削除するには、このオプションを使用します。ユーザー定義アイテムを削除する場合は、削除するユーザー定義アイテムを使用している他の EUL オブジェクトが影響を受ける可能性があることに注意してください。「影響」ダイアログを使用すれば、ユーザー定義オブジェクトの削除による影響を受ける可能性がある別のオブジェクトを確認できます。

ユーザー定義アイテムを削除する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「データ」タブで、削除するユーザー定義アイテムを選択します。
同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。
2. 「編集」→「削除」を選択し、「削除の確認」ダイアログを表示します。

3. (オプション) このアイテムの削除による影響を受ける可能性のあるオブジェクトを確認できます。削除による影響の可能性を参照する手順は、次のとおりです。
 - a. 「影響 ...」をクリックして、「影響」ダイアログを表示します。
 「影響」ダイアログには、削除によって影響を受ける可能性がある他のオブジェクトが表示されるため、正しい選択を行うのに役立ちます。
 - b. (オプション) 行を選択すると、現在の処理が EUL オブジェクトに与える影響を示すテキストが表示されます。

図 11-4 「影響」ダイアログ



- c. アイテムの削除による影響を確認後、「OK」をクリックして、「影響」ダイアログを閉じます。
4. 選択したアイテムを削除する場合は、「はい」をクリックします。

PL/SQL 関数が必要な理由

PL/SQL 関数は SQL に対する Oracle のプロシージャ拡張機能の 1 つです。PL/SQL 関数を使用すると、SQL 内の PL/SQL 参照を経由して、Oracle Server で実行される PL/SQL 関数にアクセスできます。PL/SQL 関数により、データベースにある値を計算できます。PL/SQL 関数の詳細は『PL/SQL ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』を参照してください。

ユーザー定義 PL/SQL 関数

ユーザー定義 PL/SQL 関数は、Discoverer 管理者により作成される PL/SQL 関数です。Discoverer エンド・ユーザーは、追加の Discoverer エンド・ユーザー要件を満たすように設計されています（複雑なユーザー定義オブジェクトを提供するなど）。ユーザー定義 PL/SQL 関数は、Oracle が提供する PL/SQL 関数を補足し、すべてのデータベース・プロセスに利用できます。

SQL*Plus またはプロシージャ・エディタを使用して、ユーザー定義 PL/SQL 関数を作成します。ユーザー定義 PL/SQL 関数は Discoverer Administrator では直接作成しません。詳細は『SQL*Plus ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』を参照してください。

注意：Discoverer Desktop/Plus で、PL/SQL 関数を使用する導出ユーザー定義アイテム（詳細は「[導出ユーザー定義アイテム](#)」を参照）を含むフォルダを表示できるのは、これらの関数に対して EXECUTE データベース権限を持つユーザーのみです。

ユーザー定義 PL/SQL 関数の登録について

Discoverer を使用してユーザー定義 PL/SQL 関数にアクセスするには、関数を EUL に登録する必要があります。ユーザー定義 PL/SQL 関数を登録すると、登録したユーザー定義 PL/SQL 関数は「[ユーザー定義アイテムの編集](#)」ダイアログのデータベース関数のリストに表示され、標準の Oracle 関数と同じ方法で使用できます。

ユーザー定義 PL/SQL 関数は次の 2 つの方法で登録できます。

- 関数をインポートして、自動的に登録（推奨）

自動的にインポートして PL/SQL 関数を登録することをお勧めします（特に多数の関数を登録する場合）。これは、関数に関する情報を手動で入力すると間違いやすいためです。関数をインポートする場合は、各関数に関するすべての情報（名前、データベース・リンク、返される値のタイプ、引数のリストなど）がインポートされます。インポートを使用すると、各関数に手動で情報を入力する必要がないので、関数の情報が正確になります。
- 手動による方法

手動による登録では、関数に関するすべての情報を入力し、各関数を個々に登録する必要があります。

ユーザー定義 PL/SQL 関数を自動的に登録する方法

PL/SQL 関数を自動的に登録するには、次の方法でインポートする必要があります。

1. 「ツール」→「PL/SQL 関数の登録」を選択し、「PL/SQL 関数」ダイアログ:「関数」タブを表示します。
2. 「インポート」をクリックして、「PL/SQL 関数のインポート」ダイアログを表示します。

このダイアログを使用して、インポートする PL/SQL 関数を選択します。

3. インポートする関数を選択します。

同時に複数の関数を選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別の関数をクリックします。

4. 「OK」をクリックします。

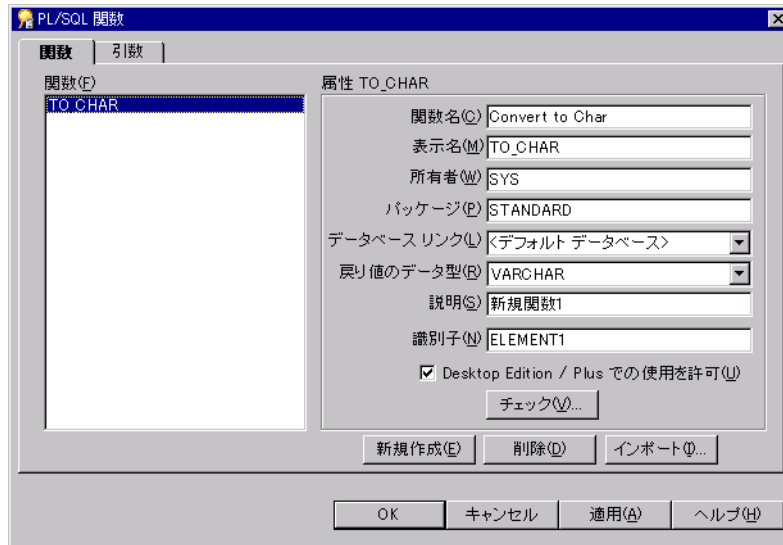
選択した関数に関する情報は、自動的にインポートされます。手動で情報を入力したり、情報を確認する必要はありません。

ユーザー定義 PL/SQL 関数を手動で登録する方法

Discoverer で PL/SQL 関数を手動で登録する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「PL/SQL 関数の登録」を選択し、「PL/SQL 関数」ダイアログ:「関数」タブを表示します。

図 11-5 「PL/SQL 関数」ダイアログ「関数」タブ



2. 「新規作成」をクリックして、関数の属性を指定します。
3. 「チェック ...」をクリックして、入力した情報の妥当性と記述の正確さを確認します。
4. 関数が無効な場合は、属性を修正し、もう一度「チェック ...」をクリックします。
5. (オプション) 引数を受け入れる関数の場合は、次の操作を実行できます。
 - a. 「PL/SQL 関数」ダイアログ:「引数」タブを表示します。
 - b. 「引数」タブで、「新規作成」をクリックして、引数の属性を指定します。

図 11-6 「PL/SQL 関数」ダイアログ「引数」タブ



6. 関数の定義を終了した後、「OK」をクリックします。

これで、ユーザー定義 PL/SQL 関数は Discoverer で使用できるように登録されました。

12

条件の作成とメンテナンス

条件の作成とメンテナンス

この章では、Discoverer Administrator を使用した条件の適用方法について説明します。この章のトピックは次のとおりです。

- [条件](#)
- [異なるタイプの条件](#)
- [単一条件の作成方法](#)
- [拡張された条件の作成方法](#)
- [条件の編集方法](#)
- [条件プロパティの編集方法](#)
- [条件の削除方法](#)
- [条件の例](#)
- [外部結合と DisableAutoOuterJoinsOnFilters レジストリの設定について](#)
- [必須条件を使用した、行レベルのセキュリティの作成方法](#)
- [ソース・フォルダが（行レベルのセキュリティを適用するなどの）必須条件を含む場合にサマリー・フォルダを有効にする方法](#)

条件

条件により、ワークシート・データにフィルタをかけ、Discoverer エンド・ユーザーに必要なデータのみを分析させるようにできます。たとえば、Discoverer エンド・ユーザーに 1999 年や 2000 年のデータは除いて 2001 年のデータのみへのアクセスを提供するなどです。

また、機密性のあるデータへのアクセスを制限するためにも条件を使用します。必須条件を適用することで、機密性のないデータのみが Discoverer ユーザーに使用可能になります（詳細は、「[異なるタイプの条件](#)」を参照してください）。Discoverer エンド・ユーザーに、必要なデータのみを表示させることができます。

Discoverer 管理者として、一般的に使用される条件を予測し、Discoverer エンド・ユーザーに使用可能にして、ワークシートに適用できるようにします。これにより、Discoverer エンド・ユーザーは効率的に作業ができます。

注意

Discoverer Desktop/Plus ユーザーは、自分自身の条件も作成できます。

条件のカテゴリについて

条件には、次のカテゴリがあります。

- 単一条件 — 単一の条件文を含んでいます。例 : 'display data where year = 2001'

- 拡張された条件 — 2 つ以上の条件文を含んでいます。

例 :

```
display data where year = 2001 AND quarter = 1 AND region = south
```

- ネストされた条件 — これらの条件は、他の条件文の中に定義された条件文を含んでいます。

例 :

```
display data where year = 2001 AND (region = north OR region = south)
```

この例では、OR 句は AND 句の中にネストされています。

- 拡張され、ネストされた条件 — 2 つ以上の条件文を含み、拡張された条件の中に定義された条件文も含んでいます。

例 :

```
display data where year = 2001 AND quarter = 1 AND region = south AND (region = north OR region = south)
```

この例では、ネストされた条件の例のように、OR 句は AND 句の中にネストされています。

拡張された条件を作成するかわりに、2 つ以上の単一条件を作成し、同時に適用する場合があります。これにより、Discoverer のユーザーは条件のどの部分を使用するかを選択できます。

注意 : 拡張された条件の適用と同等の複数の単一条件の適用には微妙な違いがあります (詳細は『Oracle9i Discoverer Desktop ユーザーズ・ガイド』または『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください)。

Discoverer での条件の使用

Discoverer で条件を使用すると、ワークシート・データに対して条件文を一致させます。

- 条件文に一致するデータはワークブックに表示されます。
- 条件文に一致しないデータはワークブックに表示されません。

たとえば、データの表示を過去 2 年間の売上に限定する場合があります。または、2 種類の販売品目のみのデータを表示する場合があります。これらの各作業では、データにフィルタをかけて条件に一致する情報を検索します。

異なるタイプの条件

条件には2つのタイプがあります。

- 必須条件
- オプション条件

必須条件とオプション条件は同じ方法で作成します。ただし、次のことに注意してください。

- 必須条件は、条件を含むフォルダからのアイテムを1つ以上含むワークシートに必ず適用されます。Discoverer Desktop/Plus ユーザーは、必須条件について通知されません。また、必須条件はオフにできません。

たとえば、必須条件を地域販売担当者の売上データに割り当てて、売上の表示内容をそれぞれの担当する地域に制限する場合などです。
- オプション条件は、Discoverer Desktop/Plus ユーザーにより必要に応じてオンまたはオフにできます。Discoverer Desktop/Plus ユーザーは条件の式を表示できますが、編集はできません。

たとえば、全販売地域を担当する副社長は、すべての売上データを確認でき、条件を適用して特定の販売地域に関連する販売データも確認できる必要があります。

次の表は、必須条件とオプションの条件の違いについて詳細を示しています。

表 12-1 必須条件とオプション条件の違い

必須条件	オプション条件
常にフォルダの結果に適用されます。	Discoverer Desktop/Plus で選択された場合のみフォルダの結果に適用されます。
Discoverer 管理者により使用され、フォルダによって返される行を永続的に制限します。	条件の作成を容易にするショートカットとして、Discoverer Administrator によりユーザーに提供されます。
Discoverer Desktop/Plus では表示されません。	Discoverer Desktop/Plus で表示されます（編集はできません）。
複合フォルダに作成された場合、ソース・フォルダのアイテムを参照できます。	複合フォルダに作成された場合、複合フォルダのアイテムのみを参照できます。
EUL のフォルダ定義の（データベースにある）結果セットに影響を与えます。	EUL のフォルダ定義の（データベースにある）結果セットに影響を与えません（Discoverer Desktop/Plus で適用された場合のみ、オプション条件が使用されるためです）。

表 12-1 必須条件とオプション条件の違い（続き）

必須条件	オプション条件
追加、変更または削除された場合、フォルダに基づくすべてのサマリーは無効になります。これは、フォルダの条件に結果セットが一致しなくなるからです。 これらのサマリーは、「要リフレッシュ」に設定され、もう一度使用できるようにリフレッシュされる必要があります。	追加、変更または削除された場合、フォルダに基づくサマリーに影響を与えません。

注意

必須条件を含むフォルダにあるアイテムから複合フォルダを作成する場合、複合フォルダの結果は元のフォルダの必須条件によって制限されます。複合フォルダの「プロパティ」ダイアログの「コンポーネント」タブを使用して、複合フォルダに影響を与えるすべての必須条件を表示できます。

単一条件の作成方法

Discoverer エンド・ユーザーに新しい方法でワークシートにフィルタをかけさせる場合には、単一条件を作成します。フォルダに条件を追加します。これにより、Discoverer エンド・ユーザーはフォルダに基づくワークブックを使用するときに新しい条件を適用できます。

たとえば、Discoverer エンド・ユーザーが今年のデータのみが必要なため、データにフィルタをかけてその年の結果を表示するオプション条件を作成する場合があります。または、データの特定のエリアに必須条件を課して、機密性のあるデータへのアクセスを制限する場合があります（詳細は、「異なるタイプの条件」を参照してください）。

単一条件を作成する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」：「データ」タブで、次のいずれかを実行します。
 - 条件を作成するフォルダを選択します。
 - 条件の一部を形成するアイテムを選択します。
2. 「挿入」→「条件」を選択して、「新規条件」ダイアログを表示します。

図 12-1 「新規条件」 ダイアログ

新規条件

名前(M) ☒ 名前の自動生成(G)

説明(S)

保存場所 タイプ(T)

計算式
アイテム名を入力または、リストからアイテムを選択してください。

アイテム	条件	値
Profit	=	

☒ 大文字小文字の区別(Q)

注意：最初にフォルダまたはアイテムを選択せずに「挿入」→「条件」を選択した場合、Discoverer はダイアログを表示する前にフォルダまたはアイテムの選択を促します。

3. (オプション) 条件の名前を「名前」フィールドに入力します。

注意：デフォルトで、Discoverer Administrator は条件に基づいて条件名を作成します。ただし、条件にユーザー独自の名前を指定できます。

4. (オプション) 条件にユーザー独自の名前を指定する手順は、次のとおりです。

- a. 「名前の自動生成」チェックボックスの選択を解除します。
- b. 条件の名前を「名前」フィールドに入力します。

5. (オプション) 条件の簡単な説明を「説明」フィールドに入力します。

ここに入力したテキストは、Discoverer Administrator で条件が編集される場合またはエンド・ユーザーが条件を強調表示する場合に表示されます。

6. 「タイプ」ドロップダウン・リストで条件のタイプを指定します。

- Discoverer エンド・ユーザーが条件をオンまたはオフできるようにするには、「オプション」を選択します。
- 条件を常時適用する場合は、「必須」を選択します。

7. 「計算式」エリアで次のように条件文を定義します。

- a. 「アイテム」ドロップダウン・リストで、データにフィルタをかけるアイテムまたはユーザー定義アイテムを選択します。たとえば、特定の年のデータを表示するには、「Year」を選択します。データにフィルタをかけるユーザー定義アイテムを作成するには、「ユーザー定義アイテムの作成」をクリックします（詳細は、[第 11 章の「ユーザー定義アイテムの作成とメンテナンス」](#)を参照してください）。

- b. 「条件」 ドロップダウン・リストを使用して、アイテムに対してデータを一致させる方法を選択します。たとえば、>（より大きい）記号を選択して、アイテムの値が特定の数字よりも大きいデータにフィルタをかけます。
 - c. 「値」 ドロップダウン・リストを使用して、どのデータまたはアイテムを一致させるか定義します。たとえば、2002 と入力して 2002 年のデータのみを対象とします。アイテムの値リストを作成してある場合、これらのアイテムはドロップダウン・リストに表示されます（値リストの詳細は、[第 9 章の「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)を参照してください）。一致させるアイテムを選択するには、「**アイテムの選択**」をクリックして、リストからアイテムを選択します。
8. 「大文字小文字の区別」 チェックボックスを使用して、次のようにテキスト・データの
大文字と小文字を一致させるかどうかを指定します。
- 「大文字小文字の区別」 チェックボックスを選択し、大文字と小文字を区別する条件を設定します。
 - 「大文字小文字の区別」 チェックボックスの選択を解除し、大文字と小文字を区別しないように設定します。
- たとえば、「大文字小文字の区別」 チェックボックスが選択されている場合、一致させる値が 'New York' の場合は 'new york' のデータを返しません。
9. 「OK」 をクリックして詳細を保存し、「新規条件」 ダイアログを閉じます。

新規条件は、「[ワークエリア](#)」:「[データ](#)」タブに表示されます。Discoverer のユーザーがこのビジネスエリアにアクセスする場合、この条件アイテムはフォルダに表示されます。フォルダに条件が表示されていても、フォルダにフィルタがかけられているわけではないので注意してください。エンド・ユーザーは、ワークブックの条件を選択して使用する必要があります。

注意

分析関数（行のグループに基づく集計値を計算する関数）に基づいて条件を作成する場合は、オプションとして条件の「タイプ」を指定する必要があります（詳細は、「[異なるタイプの条件](#)」を参照してください）。「必須」を選択すると、分析関数は必須条件で使用できないことを通知するメッセージが表示されます。

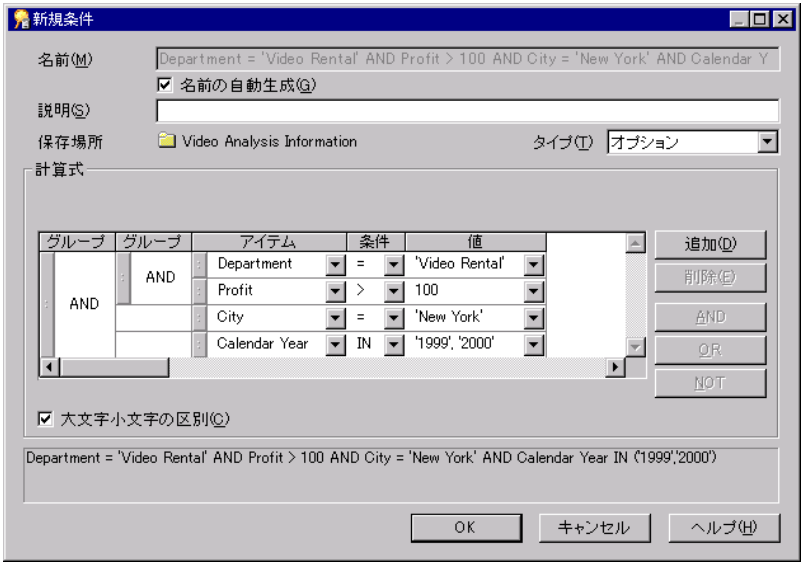
拡張された条件の作成方法

拡張された条件とは、2 つ以上の条件文を含む条件のことをいいます。たとえば、都市 New York の 1999 年または 2000 年のデータに絞り込む場合は、City = New York AND (Year = 1999 or 2000) のような条件を作成します。さらに、既存の条件を既存の拡張された条件にネストすることがあります。たとえば、「Department = Video AND Rental Profit > \$100」などのようにします。Discoverer では、必要なだけ条件文を追加して、強力な条件アイテムを容易に作成できます。

拡張された条件を作成する手順は、次のとおりです。

- 1. 「単一条件の作成方法」の手順に従って、最初の条件文を作成します。
- 2. 「詳細設定」をクリックして、条件文を追加します。

図 12-2 「新規条件」 ダイアログ（詳細設定）



「追加」、「AND」および「OR」の挿入ボタンが追加されます。これらのボタンを使用して、拡張された条件を作成します。

- 3. 次のように、拡張された条件を作成します。
 - a. 「追加」をクリックして、新規条件文を追加します。
 - b. 次のように、新規条件文のアイテムを指定します。
 - 「アイテム」列のドロップダウン・リストを選択し、表示されたアイテムのリストからアイテムを選択します。

- 「アイテム」列のドロップダウン・リストを選択し、「ユーザー定義アイテムの作成」オプションを選択して、ユーザー定義アイテムを拡張された条件に含めます。
- 「アイテム」列のドロップダウン・リストを選択し、「条件コピー」オプションを選択して、既存の条件のコピーを拡張された条件に含めます。このコピーは、元の条件のコピー同様に編集できます。
- 「アイテム」列のドロップダウン・リストを選択し、「条件の選択」オプションを選択して、既存の条件を拡張された条件に含めます。既存の条件は、ここでは編集できません。

c. 新規条件文の条件と値を指定します。

d. 条件文の組合せを指定します。

注意：各条件文の横にあるハンドルを使用して条件文を強調表示し、次のアクションを実行できます。

- グループを選択し、「AND」をクリックして、すべての条件文が一致することを条件に指定します。
- グループを選択し、「OR」をクリックして、条件文の1つが一致することを条件に指定します。
- グループを選択し、「NOT」をクリックして、条件文が条件に一致しないことを条件に指定します。
- 「削除」をクリックして、条件文の行を条件から削除します。
- (条件文の横にある)ハンドルをドラッグ・アンド・ドロップし、ネストされた階層に条件文を移動します。
- グループをダブルクリックして、「AND」を「OR」に変えるなどの変更を加えます。

注意：条件文の移動は、拡張された条件内での条件文の適用順序に影響を与えます（ネストされた条件文は最初に適用されます）。

4. 完了後に「OK」をクリックし、拡張された条件を保存してダイアログを閉じます。

新規条件は、「ワークエリア」:「データ」タブに表示されます。Discoverer のユーザーがこのビジネスエリアにアクセスする場合、この条件アイテムはビジネスエリア・フォルダに表示されます。

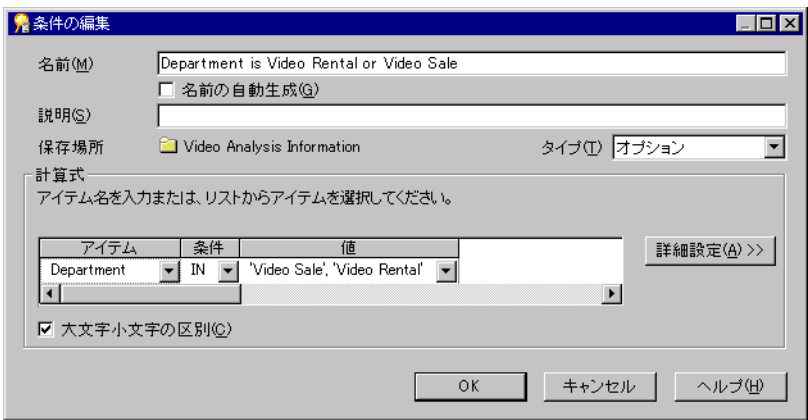
条件の編集方法

条件を編集して、その動作を変更します。たとえば、次のような場合があります。

- 条件の名前を変更する。
- 条件によって返されるデータを変更する。
- さらに拡張された条件を作成する。

条件を編集する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」：「データ」タブで、編集する条件を選択します。
2. 「編集」→「編集 ...」を選択し、「条件の編集」ダイアログを表示します。



3. 必要に応じて条件の詳細を編集します。
 4. 「OK」をクリックして詳細を保存し、ダイアログを閉じます。
- 更新された条件は、「ワークエリア」：「データ」タブに表示されます。

注意

「条件プロパティ」ダイアログを使用して、条件を変更することもできます。

条件プロパティの編集方法

条件プロパティを編集して、条件の動作や識別子を変更します（詳細は、[第3章の「識別子とは」](#)を参照してください。）識別子は、Discoverer の一意な識別ラベルです。また、条件自体を編集して、条件が動作する方法を変更することもできます（詳細は、[「条件の編集方法」](#)を参照してください）。

条件プロパティを編集する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「データ」タブで、編集する条件を選択します。
2. 「編集」→「プロパティ」を選択し、「条件プロパティ」ダイアログを表示します。
3. 条件プロパティを編集します。
4. 「OK」をクリックして詳細を保存し、ダイアログを閉じます。

「ワークエリア」:「データ」タブは更新され、条件に加えた変更が反映されます。

条件の削除方法

ビジネスエリアから条件を永続的に削除するときは、条件を削除します。たとえば、以前は2000年のデータにフィルタをかけていたが、今回は使用可能なすべての年のデータにアクセスできるようにする場合があります。

条件を削除する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「データ」タブで、削除する条件を選択します。
2. 「編集」→「削除」を選択し、「削除の確認」ダイアログを表示します。
3. 確認画面で「はい」をクリックして、条件を永続的に削除します。

条件はビジネスエリアから削除されます。

注意

削除された条件を使用しているワークブックを Discoverer のユーザーが再度開く場合、またはリフレッシュする場合は、前にフィルタをかけられたデータを利用できます。

条件の例

次の例は、Discoverer Administrator で条件がどのように使用されるかを示しています。

注意

条件の例の詳細は『Oracle9i Discoverer Desktop ユーザーズ・ガイド』または『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

例 1: 2002 年のデータを検索する条件の使用

2002 年のデータのみを返す条件を作成するには、「新規条件」ダイアログの「計算式」エリアに次のように入力します。

「アイテム」	「条件」	「値」
Year	=	2002

例 2: 過去 7 日間の売上を検索する条件の使用

過去 7 日間の売上のみを返す条件（ユーザー定義アイテム Transaction Age (in Days) を使用）を作成するには、「新規条件」ダイアログの「計算式」エリアに次のように入力します。

「アイテム」	「条件」	「値」
Transaction Age (in days)	<	7

ユーザー定義アイテム Transaction Age は、次の式を含んでいることに注意してください。

FLOOR (SYSDATE - Transaction Date)

このタイプの条件は、条件が返す行のウィンドウが日によって変わるため、ローリング・ウィンドウ条件ともいいます。

例 3: 第 3 四半期の出荷を検索する条件の使用

年にかかわらず第 3 四半期（Q3）の出荷のみを返す条件（ユーザー定義アイテムの Ship Quarter を使用）を作成するには、「新規条件」ダイアログの「計算式」エリアに次のように入力します。

「アイテム」	「条件」	「値」
Ship Quarter	=	'Q3'

ユーザー定義アイテム Ship Quarter は、次の式を含んでいることに注意してください。

EUL_DATE_TRUNC(Ship Date, "Q")

外部結合と DisableAutoOuterJoinsOnFilters レジストリの設定について

2 つの表の間で外部結合を定義する場合は、条件（フィルタ）と DisableAutoOuterJoinsOnFilters の Discoverer レジストリ設定の組合せが、エンド・ユーザーの間合せて返されるデータの行にどのように影響するかを理解している必要があります。

2 つの表間で外部結合を定義し、次のものを表示します。

- デイテール表に対応する行がないマスター表の行
- マスター表に対応する行があるデイテール表の行

たとえば、次を表示する場合があります。

- 部門名と所属する従業員、ただし従業員がいない部門名も含む
- 従業員名と所属する部門、ただし部門に属さない従業員の名前も含む

SQL では、外部結合は (+) 記号で示します。

Discoverer は、次の場合に SQL に外部結合を含みます。

- Discoverer Administrator で明示的に定義された場合。
詳細は、「[結合オプション](#)」ダイアログを参照してください。
- 一部の状況で自動的に SQL に外部結合を含みます。
たとえば、Discoverer は条件を含むエンド・ユーザーの間合せに対して、SQL に外部結合を自動的に作成します。

条件を含む間合せを実行している場合、ユーザーは結果を次のようにする場合があります。

- 外部結合によって結合される表に対応する値を持たない 1 つの表からの値を含めます。
- 外部結合によって結合される表に対応する値を持たない 1 つの表からの値を含めません。

DisableAutoOuterJoinsOnFilters レジストリ設定により、エンド・ユーザーの間合せで条件が使用されるときに、自動的に生成された外部結合の使用を無効にできます。

表 12-2 例の要約

例番号	条件の適用	DisableAutoOuterJoinsOnFilters の値	すべての値を表示
例 1	いいえ	0 または 1	はい
例 2	はい	0	いいえ
例 3	はい	1	はい

次の例は、外部結合、条件および DisableAutoOuterJoinsOnFilters レジストリ設定の値が、エンド・ユーザーの問合せから返されたデータの行にどのように影響を与えるかを示しています。

Discoverer レジストリ設定の詳細は、第 22 章の「Discoverer のレジストリ設定」を参照してください。

例 1: 条件を適用しない場合

この例は、2 つの表に対して問合せを実行したときに返された結果を示しています。マスター表とディテール表は外部結合で結合されています。

Discoverer が表示するのは、次のとおりです。

- マスター表 (dept) とディテール表 (emp) からのデータの行
- ディテール表 (emp) のデータがないマスター表 (dept) からのデータの行

問合せは、次の SQL 文を使用して定義されます。外部結合は (+) 記号で示されます。

```
select dname, ename, job from dept, emp where dept.deptno = emp.deptno(+);
```

DNAME	ENAME	JOB
SALES	GRIMES	DIRECTOR
SALES	PETERS	MANAGER
SALES	SCOTT	CLERK
SUPPORT	MAJOR	MANAGER
SUPPORT	SCOTT	CLERK
ADMIN		
MARKETING		
DISTRIBUTION		

前述の問合せから返された結果は、DisableAutoOuterJoinsOnFilters レジストリ設定をオンまたはオフに切り替えても変わりません。

例 2: 問合せに条件を適用し、DisableAutoOuterJoinsOnFilters を 1 に設定（オフに切替え）する場合

この例では、例 1 の問合せに条件を適用し、DisableAutoOuterJoinsOnFilters レジストリ設定をオフに切り替えています。

Discoverer が表示するのは、次のとおりです。

- 条件で指定されたデータ

Discoverer が表示しないのは、次のとおりです。

- ディテール・データのないマスター行

次の SQL 文が使用されます。外部結合は (+) 記号で示されます。

```
select dname, ename, job from dept, emp where dept.deptno =  
emp.deptno(+) and job = 'CLERK';
```

DNAME	ENAME	JOB
SALES	SCOTT	CLERK
SUPPORT	SCOTT	CLERK

例 3: 問合せに条件を適用し、DisableAutoOuterJoinsOnFilters を 0 に設定（オンに切替え）する場合

この例では、例 1 の問合せに条件を適用し、DisableAutoOuterJoinsOnFilters レジストリ設定をオンに切り替えています。

Discoverer が表示するのは、次のとおりです。

- 条件で指定されたデータ
- ディテール・データのない (NULL 値) マスター行

次の SQL 文が使用されます。外部結合は (+) 記号で示されます。

```
select dname, ename, job from dept, emp where dept.deptno =  
emp.deptno(+) and job = 'CLERK';
```

DNAME	ENAME	JOB
SALES	SCOTT	CLERK
SUPPORT	SCOTT	CLERK
ADMIN		

DNAME	ENAME	JOB
MARKETING		
DISTRIBUTION		

注意

データベースは、IS NULL 句と IS NOT NULL 句への外部結合の配置をサポートしますが、IN 句と OR 句への外部結合の配置はサポートしていません。

必須条件を使用した、行レベルのセキュリティの作成方法

エンド・ユーザーに対し、Discoverer ワークブックで表示できるデータを制限する場合があります。

たとえば、すべての地域の利益データを含む 1 つの表を持っているとします。利益データの各行は、1 つの地域のトランザクションに適用されています。西地域のマネージャが西地域の利益データを含む行のみにアクセスできるようにするとします。

REGION	PROFIT	DATE
East	\$100	8/7
West	\$50	8/7
South	\$65	8/10
North	\$100	8/6

行レベルのセキュリティを作成するには、次の作業を完了する必要があります。

- [SYS](#) ビューから行レベルのセキュリティを適用するフォルダを含むビジネスエリアへの、[ALL_USERS](#) 表のロード
- 行レベルのセキュリティを適用するフォルダへの、新規ユーザー定義アイテムの作成
- ([ALL_USERS](#) 表にある) [Username](#) アイテムから新規ユーザー定義アイテムへの、値リストの適用
- データベース・ユーザーを指定してフォルダで行レベルのセキュリティを定義するための、拡張された必須条件の作成

SYS ビューから行レベルのセキュリティを適用するフォルダを含むビジネスエリアへの、ALL_USERS 表のロード

この作業により、すべてのデータベース・ユーザーのリストを取得し、条件を適用して行レベルのセキュリティを達成できます。

行レベルのセキュリティを適用するビジネスエリアに ALL_USERS 表をロードするには、次の手順を行います。

1. 行レベルのセキュリティを作成するフォルダを含むビジネスエリアを選択します。
2. 「挿入」→「フォルダ」→「データベースから新規フォルダを作成」を選択し、[「ロードウィザード ステップ 1」ダイアログ](#)を表示します。
3. 「オンライン・ディクショナリ」チェックボックスを選択し、「次へ」をクリックして[「ロードウィザード ステップ 2」ダイアログ](#)を表示します。
4. 「ロードするユーザーを選択してください。」リスト・ボックスから SYS ユーザーを選択し、「次へ」をクリックして[「ロードウィザード ステップ 3」ダイアログ](#)を表示します。

SYS ユーザーは、すべてのデータベース・ユーザーの名前を保持するビューを含んでいます。

5. 「選択可能」リスト・ボックスで SYS ユーザーを拡張し、ALL_USERS ビューを「**選択済み**」リスト・ボックスの中にドラッグします。次に、「次へ」をクリックして[「ロードウィザード ステップ 4」ダイアログ](#)を表示します。

これにより、ALL_USERS ビューは現行のビジネスエリアにロードされます。

ALL_USERS ビューは、すべてのデータベース・ユーザー・アカウントの名前を含んでいます。

6. 「アイテムの値リストを作成するデータ タイプ」チェックボックスと「文字」チェックボックスを選択し、このエリアの他のすべてのチェックボックスの選択を解除します。

これにより、すべてのデータベース・ユーザーの名前の値リストが作成されます。

7. 「完了」をクリックします。

これにより、SYS 表から現行のビジネスエリアに ALL_USERS ビューがロードされます。

8. (オプション) ALL_USERS のフォルダのプロパティを編集し、「ユーザーに表示」プロパティを「いいえ」に設定します（詳細は、[「フォルダ・プロパティの編集方法」](#)を参照してください）。

これにより、ALL_USERS フォルダはエンド・ユーザーに表示されなくなります。

行レベルのセキュリティを適用するフォルダへの、新規ユーザー定義アイテムの作成

ユーザー定義アイテムを作成すると、それ以降の SYS 表からすべてのデータベース・ユーザーの値アイテム・クラスのリストを適用できます。

行レベルのセキュリティを適用するフォルダにユーザー定義アイテムを作成するには、次の手順を実行します。

1. 行レベルのセキュリティを作成するフォルダを強調表示します (Video Analysis フォルダなど)。
2. 「挿入」 → 「アイテム」を選択します。
3. 「名前」フィールドに 'Username' を入力します。
4. 「計算」フィールドに 'USER' と入力します。
5. 「OK」をクリックして、新規ユーザー定義アイテムを作成します。

(ALL_USERS 表にある) Username アイテムから新規ユーザー定義アイテムへの、値リストの適用

前述の作業で作成したユーザー定義アイテムに値アイテム・クラスのリストを適用するには、次の手順を実行します。

1. 行レベルのセキュリティを適用するフォルダを強調表示します (Video Analysis フォルダなど)。
2. 「挿入」 → 「アイテム クラス」をクリックして、[「アイテム クラス ウィザード」ダイアログ](#)を表示します。
3. 「値リスト」チェックボックスを選択し、「次へ」をクリックして [「アイテム クラス ウィザード ステップ 2」ダイアログ](#)を表示します。
4. 前述の手順でビジネスエリアにロードした ALL_USERS 表から Username アイテムを選択し、「次へ」をクリックして [「アイテム クラス ウィザード ステップ 3」ダイアログ](#)を表示します。
5. 「選択可能なアイテム」リストから (前述の手順で作成した) ユーザー定義アイテム 'Username' を選択し、「選択されたアイテム」リストの中にドラッグします。
6. 「完了」をクリックして、値リストをユーザー定義アイテム Username に適用します。

データベース・ユーザーを指定してフォルダで行レベルのセキュリティを定義するための、拡張された必須条件の作成

拡張された必須条件を作成します。これにより、データの条件を指定されたデータベース・ユーザーに適用できます。

次の両方を含む拡張された必須条件を作成する必要があります。

- データベース・ユーザーを定義する条件文
- 指定したデータベース・ユーザーに対しデータ・アクセスを制限する 1 つ以上の条件文

拡張された必須条件を作成し、指定したデータベース・ユーザーの行レベルのセキュリティを定義するには、次の手順を行います。

1. 行レベルのセキュリティを作成するフォルダを強調表示します。
2. 「挿入」→「条件」を選択して、「**新規条件**」ダイアログを表示します。
3. (オプション) 新規条件の説明を入力します。
4. 「**タイプ**」ドロップダウン・リストをクリックして、「必須」を選択します。
タイプ「必須」は、条件が常にエンド・ユーザーに適用されることを指定します。
5. 「**アイテム**」ドロップダウン・リストをクリックして、ユーザー定義アイテムの Username を指定します。
6. 「**値**」ドロップダウン・リストをクリックして、「**値の選択**」を選択して「値」ダイアログを表示します。
7. 行レベルのセキュリティを適用する各データベース・ユーザーのチェックボックスを選択して、次に「OK」をクリックします。

Discoverer は、「**値**」フィールドに選択したデータベース・ユーザーを表示します。

注意：これにより、1 人以上のデータベース・ユーザーの名前を指定する必須単一条件を指定しました。ただし、現行フォルダのデータベース・ユーザーに行レベルのセキュリティを適用する前に、指定したデータベース・ユーザーに適用するデータ条件を指定する必要があります。

残りの手順では、指定したデータベース・ユーザーに行レベルのセキュリティを適用する方法を説明します。これにより、データベース・ユーザーは西地域からのデータのみを表示できるようになります。

8. 「詳細設定」ボタンを選択して、次に「追加」ボタンをクリックします。
これにより、新規条件文を現行の条件に追加し、データ条件を指定したデータベース・ユーザーに適用できます。
9. (例) 「**アイテム**」ドロップダウン・リストをクリックして、Store.Region を選択します。

このデータ条件は、指定したデータベース・ユーザーに適用されます。

10. (例) 「値」 ドロップダウン・リストをクリックして、地域 'West' を選択します。

注意：データベース・ユーザー (Username) をデータ条件 (Region) に関連付けるには、Username 条件文と Region 条件文を、AND 句を使用してグループ化する必要があります。

各 Username 条件文とデータ条件文は、AND 句を使用してグループ化する必要があります。Username 条件文とデータ条件文のペアは、OR 句を使用して他のペアと互いにグループ化する必要があります。OR 句を使用して Username 条件文とデータ条件文のペアをグループ化し、各条件文のペアを適用できます (次の図を参照してください)。

図 12-3 データベース・ユーザーの 1 つのグループが 'West' 地域のデータを表示し、その他のグループが 'East' 地域のデータを表示する条件

新規条件

名前(M)

(Username IN ('ADMINTUTOR','ADMTEST','TUTEUL') AND Region = 'West' OR Username IN ('ADMINTUTORST','BUG4','BUGOUT4130ST') AND Region = 'East')

☒ 名前の自動生成(Q)

説明(S)

3 users can see data for the 'West' Region, 3 other users can see data for the 'East' Region

保存場所

Video Analysis Information

タイプ(T)

必須

計算式

グループ	グループ	アイテム	条件	値
OR	AND	Username	IN	'ADMINTUTOR','ADMTEST','TUTEUL'
		Region	=	'West'
	AND	Username	IN	'ADMINTUTORST','BUG4','BUGOUT4130ST'
		Region	=	'East'

☒ 大文字小文字の区別(Q)

(Username IN ('ADMINTUTOR','ADMTEST','TUTEUL') AND Region = 'West' OR Username IN ('ADMINTUTORST','BUG4','BUGOUT4130ST') AND Region = 'East')

追加(D)

削除(E)

AND

OR

NOT

OK

キャンセル

ヘルプ(H)

11. 「OK」 をクリックします。

これにより、(West または East 地域にユーザーのグループをバインドして) 指定したデータベース・ユーザーに行レベルのセキュリティを適用する、拡張された必須条件が作成されます。前述の例で、データベース・ユーザー 'ADMTEST' は West 地域のデータのみを表示できます。

12. (オプション) 新規条件のプロパティを編集し、「ユーザーに表示」プロパティを「いいえ」に設定します (詳細は、「条件プロパティの編集方法」を参照してください)。

これにより、Discoverer はエンド・ユーザーに条件を表示しませんが、この条件は常に適用されます。

ソース・フォルダが（行レベルのセキュリティを適用するなどの）必須条件を含む場合にサマリー・フォルダを有効にする方法

フォルダに必須条件を作成した場合は、データベース・ユーザーが問合せに必須条件を含むフォルダに基づくサマリー・フォルダを使用しないようにしてください。これは、サマリー表のデータが、サマリー・フォルダを作成したデータベース・ユーザーに対するデータのみになるためです。

ソース・フォルダが（行レベルのセキュリティを適用するなどの）必須条件を使用している場合、そのサマリー・フォルダをデータベース・ユーザーが使用できるようにするには、必須条件を作成する前に次の手順を実行する必要があります。

ソース・フォルダに必須条件を含むサマリー・フォルダを、データベース・ユーザーの問合せに有効にするには、次の手順を行います。

1. （行レベルのセキュリティを適用するなどの）必須条件を設定する前に、フォルダに基づくサマリー・フォルダを作成します。

サマリー・フォルダの作成方法の詳細は、[第 14 章の「サマリー・フォルダの管理」](#)および[第 15 章の「手動によるサマリー・フォルダの作成」](#)を参照してください。

2. サマリーのプロパティ「**問合せで使用可能**」を「いいえ」に設定します。

このサマリー・フォルダは、サマリー・フォルダを作成したデータベース・ユーザーのデータを参照します。エンド・ユーザーの問合せがこのサマリー・フォルダにアクセスしないように、このプロパティを「いいえ」に設定します。

3. （オプション）サマリー・フォルダのプロパティ「**次のリフレッシュ**」と「**リフレッシュ間隔**」を適切な値に設定します。

詳細は、[「サマリー プロパティ」ダイアログ](#)を参照してください。

4. サマリー・フォルダに対してデータベース・ビューを作成します。

この作業は、Discoverer の外部で実施されるので、詳細はデータベース管理者に問い合わせてください。

作成したビューに（行レベルのセキュリティなどの）必須条件を適用するには、WHERE 句を使用します。

例：

```
SQL> WHERE Userid='SMITH' AND Region='WEST'
```

5. 外部サマリーとしてビューを Discoverer に登録します。

詳細は、[第 15 章の「外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの作成方法」](#)を参照してください。

6. サマリーのプロパティ「**問合せで使用可能**」を「はい」に設定します。

データベース・ユーザーがこのサマリー・フォルダにアクセスできるようにするには、このプロパティを「はい」に設定します。

Discoverer で、「**次のリフレッシュ**」と「**リフレッシュ間隔**」のサマリー・フォルダ・プロパティを「無期限」に設定する必要があります。

詳細は、「[サマリー プロパティ](#)」ダイアログを参照してください。

7. Discoverer Administrator のフォルダで必要な（行レベルのセキュリティなどの）条件を作成します（詳細は、「[必須条件を使用した、行レベルのセキュリティの作成方法](#)」を参照してください）。

注意

外部サマリー・フォルダの分析関数は利用できません（詳細は、「[分析関数](#)」を参照してください）。

13

階層の作成とメンテナンス

階層の作成とメンテナンス

この章では、Discoverer Administrator による階層の実装とメンテナンスの方法について説明します。この章のトピックは次のとおりです。

- [階層](#)
- [アイテム階層](#)
- [日付階層](#)
- [アイテム階層の作成方法](#)
- [日付階層とテンプレートの作成方法](#)
- [アイテム階層の編集方法](#)
- [日付階層テンプレートの編集方法](#)
- [日付階層テンプレートを日付アイテムに適用する方法](#)
- [デフォルト日付階層テンプレートの設定方法](#)
- [アイテム階層または日付階層テンプレートの削除方法](#)
- [日付書式「RR」を使用するデフォルト日付階層を、Oracle9i Discoverer Administrator へのアップグレード後に変更する方法](#)

階層

階層とは、Discoverer Administrator で定義するアイテム間のデフォルトのドリル・パスです。ビジネスエリア内のアイテム間の階層を作成して、Discoverer エンド・ユーザーにデフォルトのドリル階層を提供します。

次の 2 種類の階層があります。

- [アイテム階層](#)
- [日付階層](#)

Discoverer エンド・ユーザーは、階層を使用して次のことができます。

- より集合的なレベルへのドリル・アップ（たとえば、小売店から都市、都市から地域、地域から国）
- より詳細なレベルへのドリル・ダウン（たとえば、国から地域、地域から都市、都市から小売店）

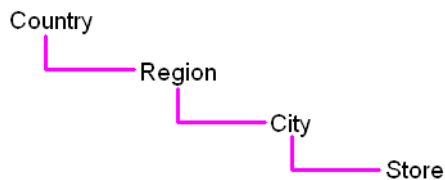
階層により、データベースで関係が定義されていないビジネスエリア内のアイテムをリンクできます。ビジネスエリアの詳細は、[第 4 章の「ビジネスエリア」](#)を参照してください。

アイテム階層

アイテム階層とは、日付以外のアイテム間の関係です。

アイテム階層の例は次のとおりです。

図 13-1 販売アイテム階層

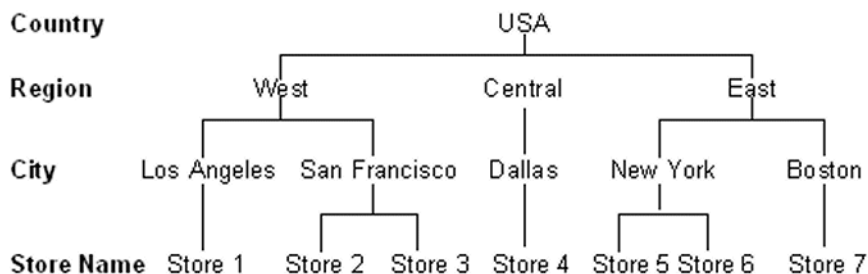


販売アイテム階層では、国がその地域、都市および小売店とリンクされます。

この階層を使用すると、Discoverer エンド・ユーザーは国のレベルでの販売を示すレポートを使用できます。さらに、国からドリル・ダウンして、地域ごと、都市ごとまたは小売店ごとの販売を見、再び国レベルにドリル・アップできます。

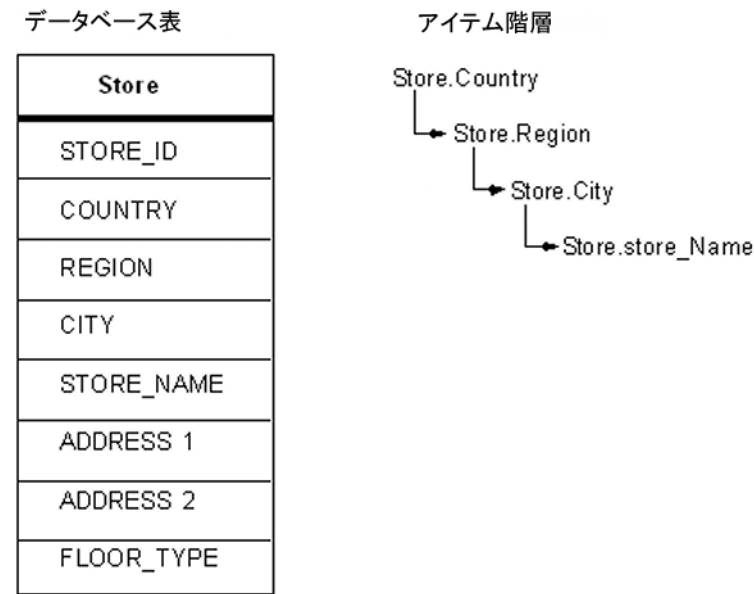
Discoverer エンド・ユーザーから見た販売アイテム階層は、次のとおりです。

図 13-2 販売アイテム階層 – Discoverer エンド・ユーザーの視点



次の図は、データベースから見た販売アイテム階層です。

図 13-3 販売アイテム階層 – データベースの視点



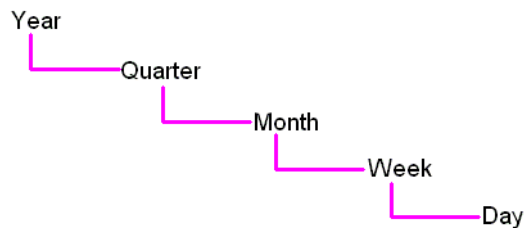
ロサンゼルスが西部にあると指定する必要はないことに注意してください。指定する必要があるのは、都市がアイテム階層の地域の下にあることのみです。

日付階層

日付階層とは、日付アイテム間の関係です。

日付階層の例は次のとおりです。

図 13-4 販売日付階層

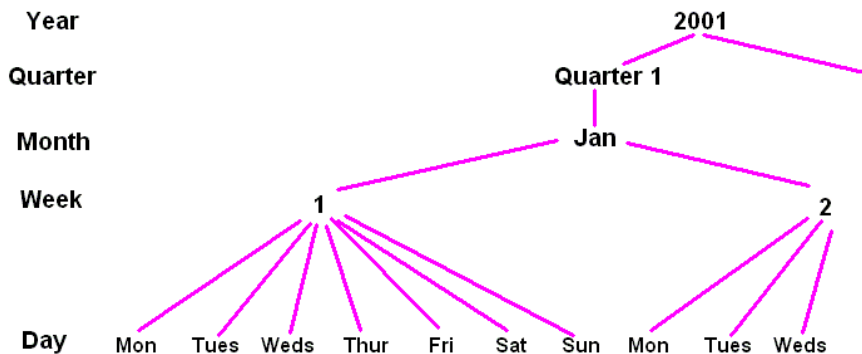


販売日付階層により、年が四半期、月、週および日とリンクされます。

この階層を使用すると、Discoverer エンド・ユーザーは毎年の販売総計を示すレポートを使用できます。さらに、年からドリル・ダウンして、四半期ごと、月ごと、週ごとまたは日ごとの販売を見、再び年ごとの販売にドリル・アップできます。

Discoverer エンド・ユーザーから見た販売日付アイテム階層のセクションは、次のとおりです。

図 13-5 販売日付階層 — Discoverer エンド・ユーザーの視点



次の図は、データベースから見た販売日付階層です。

図 13-6 販売日付階層 – データベースの視点



注意：日付階層の各レベルは、Sales_Orders.SALES_DATE 行に基づくユーザー定義アイテムです。ユーザー定義アイテムは、日付階層テンプレートにより作成されます（詳細は、「[日付階層テンプレート](#)」を参照）。

日付階層テンプレート

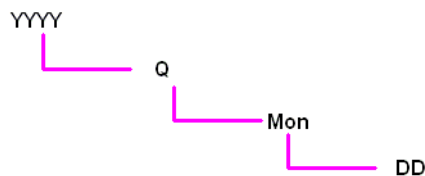
日付階層テンプレートを使用すれば、日付アイテムに適用する日付階層を定義できます。日付アイテムでは、日付、月、年および時刻を指定する情報が使用されます。**Discoverer** では、この情報を使用して四半期、週および曜日などが計算されます。日付階層テンプレートにより、年または月などを表すアイテムが日付アイテムに基づいて自動的に作成されます。

各日付アイテムについて同じ日付階層を繰り返し再定義するよりも、日付階層テンプレートを日付アイテムに適用すれば、日付階層テンプレートを再使用することの効率性がわかります。

日付階層テンプレート（**Discoverer Administrator** で提供されています）を使用して多くの共通日付階層を定義することも、カスタマイズされた日付階層を作成することもできます。

Discoverer Administrator で提供されているデフォルトの日付階層テンプレート（次の日付階層テンプレートの図を参照）を使用すれば、年から四半期、四半期から月、月から日にドリル・ダウンできます。

図 13-7 日付階層テンプレート



日付階層とパフォーマンスについて

索引付き表からの日付アイテムに日付階層を適用した場合、これらの日付アイテムを含む問合せでは索引が使用されません（このため、パフォーマンスが低下することがあります）。索引に依存しない表からの日付アイテムに日付階層を適用すれば、Discoverer Desktop/Plus のパフォーマンスを最適化できます。

日付階層が Discoverer Desktop/Plus のパフォーマンスに与える影響の例

日付列（`transaction_date` など）を含む大きなファクト表（行が多い表）をロードするとき、Discoverer によりデフォルトの日付階層が日付アイテムに適用されます（詳細は、「[ロードウィザード ステップ 4](#)」ダイアログを参照）。

Discoverer では、`EUL_DATE_TRUNC` 関数を使用して年、四半期および月などの日付アイテムを含むフォルダが作成されます（詳細は、[第 9 章の「日付アイテムの切捨てと EUL_DATE_TRUNC 関数」](#)を参照）。Discoverer エンド・ユーザーがこれらのアイテムを含む問合せを実行するとき、ファクト表に日付アイテムを含む索引は使用されません。索引が使用されない場合、パフォーマンスが影響を受けることがあります。

ファクト表は索引を持つことがあるため、ファクト表に基づいているフォルダ内の日付アイテムに日付階層を適用しないことをお勧めします。

パフォーマンスを維持する方法の例

パフォーマンスを維持するために、日付階層を個別のディメンション表に適用してください。

たとえば、ファクト表内の `transaction_date` アイテムを、時間間隔を指定する別のディメンション表（Time Period など）に結合することがあります。ロード・ウィザードを使用してこのディメンション表をロードし、日付階層をこの表に適用できます。次に、ディメンション表とファクト表の両方からのアイテム（年または四半期などの、日付階層別に作成されたアイテムなど）を含む複合フォルダを作成できます。Discoverer エンド・ユーザーが日付階層アイテムを含める問合せを使用するとき、Discoverer ではファクト表の日付列索引を使用できます。これにより、パフォーマンスを大幅に改善できます。

アイテム階層の作成方法

アイテム階層を作成する手順は、次のとおりです。

1. 「挿入」→「階層」を選択して、「階層ウィザード」ダイアログを表示します。
2. 「アイテム階層」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ」をクリックして、「階層ウィザード ステップ 2」ダイアログを表示します。

図 13-8 「階層ウィザード ステップ 2」ダイアログ



ここで、このアイテム階層で使用するアイテムを選択します。

3. このアイテム階層に含めるアイテムを左側のリストから右側のリストに移動します。
同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。

注意：階層リスト内のアイテムの順序により、Discoverer エンド・ユーザーがデータ分析に使用するドリル・ダウン順序が決まります。アイテム階層は、アイテムを含める際の順序で配列されます。たとえば、地域 — 都市 — 小売店の順序で配列されます。

注意：複数のフォルダからアイテムを選択できますが、それらのフォルダは結合している必要があります。フォルダが複数の結合により結合されている場合、「結合の選択」ダイアログで正しい結合を選択するように求められます。

4. (オプション) 階層内のアイテムを別の位置に移動するには、右側のリスト内のアイテムを選択し、次の操作を行います。

- 階層内の上方にアイテムを移動する場合は、「昇格」をクリックします。
- 階層内の下方にアイテムを移動する場合は、「降格」をクリックします。

5. (オプション) 階層内の同じレベルに表示されるように複数のアイテムをグループ化するには、それらのアイテムを選択し、「グループ化」をクリックします（詳細は、「[階層ウィザード ステップ 2](#)」ダイアログを参照）。

同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。

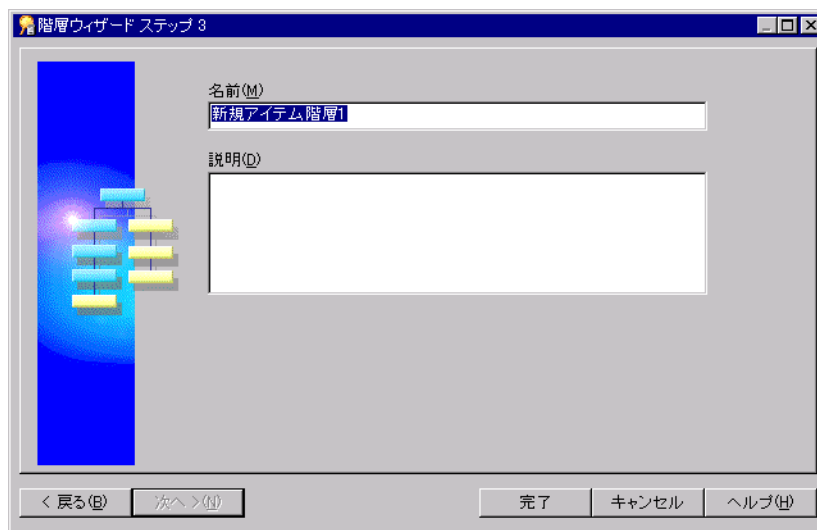
注意：階層内の項目のグループを解除するには、そのグループを選択し、「グループ解除」をクリックします。

6. (オプション) アイテムの名前を変更するには、右側のリスト内のアイテムをクリックし、「説明：」フィールドで名前を指定します。

指定した説明は、Discoverer Desktop/Plus でラベルとして表示されます。名前を指定しないと、デフォルトでアイテム名がアイテム階層の各レベルで使用されます。

7. 「次へ」をクリックして、「[階層ウィザード ステップ 3](#)」ダイアログを開きます。

図 13-9 「階層ウィザード ステップ 3」ダイアログ



8. 新規アイテム階層の名前と説明を指定します。
 9. 「完了」をクリックして、アイテム階層を作成します。
- 「ワークエリア」の「階層」タブにアイテム階層が表示されます。

日付階層とテンプレートの作成方法

注意：Oracle データベースを使用する場合のみ、日付階層を作成できます。

日付階層を作成する手順は、次のとおりです。

1. 「挿入」→「階層」を選択して、「[階層ウィザード](#)」ダイアログを表示します。
2. 「日付階層」オプションを選択し、「次へ」をクリックして、「[階層ウィザード ステップ 2](#)」ダイアログを開きます。

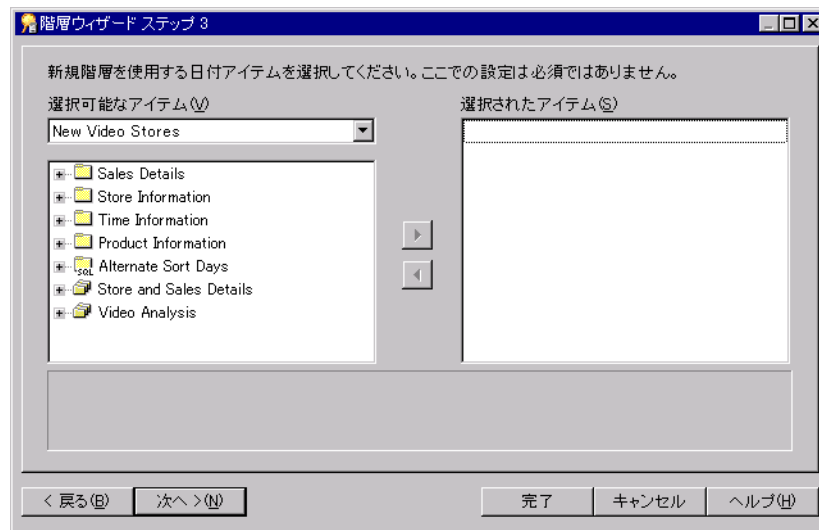
図 13-10 「階層ウィザード ステップ 2」ダイアログ



3. (オプション) 新規日付書式を作成するには、「新規書式の作成 ...」をクリックして、「[新規日付書式](#)」ダイアログを表示します。
 4. この日付階層に含める日付書式を左側のリストから右側のリストに移動します。
- 同時に複数の日付書式を選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別の日付書式をクリックします。

5. (オプション) 階層内の日付書式を別の位置に移動するには、右側のリスト内の日付書式を選択し、次の操作を行います。
 - 階層内の上方に日付書式を移動する場合は、「昇格」をクリックします。
 - 階層内の下方に日付書式を移動する場合は、「降格」をクリックします。
6. (オプション) 日付書式の名前を変更するには、右側のリスト内の日付書式をクリックし、「説明」フィールドで新しい名前を指定します。
 指定した説明は、Discoverer Desktop/Plus でラベルとして表示されます。
7. 「次へ」をクリックして、「**階層ウィザード ステップ 3** ダイアログ

図 13-11 「階層ウィザード ステップ 3」 ダイアログ



ここで、この日付階層で使用する日付アイテムを選択します。

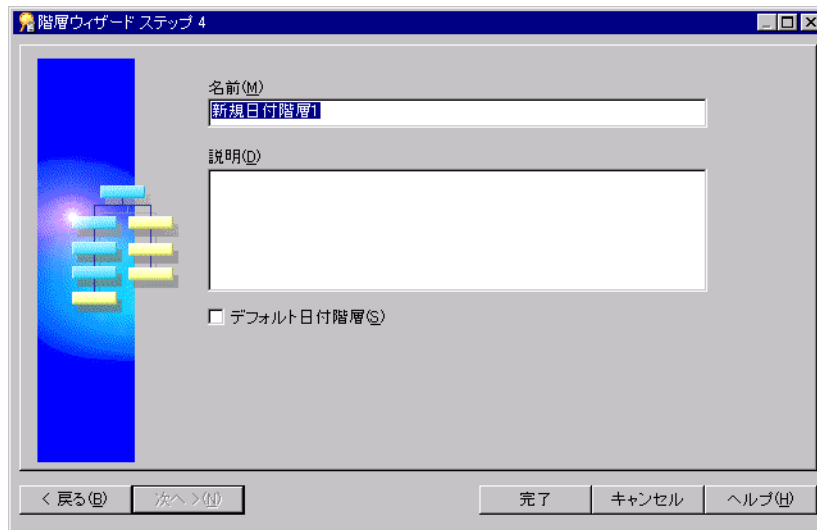
8. この日付階層で使用する日付アイテムを「**選択可能なアイテム**」リストから「**選択されたアイテム**」リストに移動します。

同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。

ヒント : 日付階層テンプレートのみを作成する場合は、このページで日付アイテムを選択しないでください。後で、日付アイテム・プロパティを変更すれば、このテンプレートを日付アイテムに適用できます (詳細は、「[日付階層テンプレートを日付アイテムに適用する方法](#)」を参照)。

9. 「次へ」をクリックして、「階層ウィザード ステップ 4」ダイアログを開きます。

図 13-12 「階層ウィザード ステップ 4」ダイアログ



10. 新規日付階層の名前と説明を指定します。
11. (オプション) この日付階層テンプレートをデフォルトにするには、「デフォルト日付階層」チェックボックスを選択します。

「デフォルト日付階層」チェックボックスを選択すると、この日付階層テンプレートが「ロードウィザード ステップ 4」ダイアログのデフォルトとして「自動生成」オプションの下に表示されます。詳細は、「ロードウィザード ステップ 4」ダイアログを参照してください。
12. 「完了」をクリックして、日付階層を作成し、「階層ウィザード ステップ 4」ダイアログで選択した日付アイテムにこの日付階層を適用します。

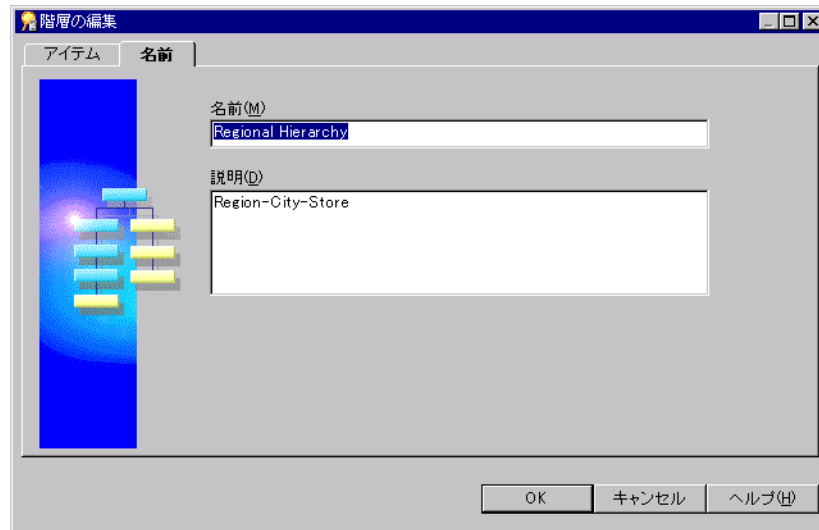
日付階層と日付階層テンプレートが「ワークエリア」:「階層」タブに表示されます。

アイテム階層の編集方法

既存のアイテム階層を作成する手順は、次のとおりです。

1. 「階層」タブで階層を選択し、「編集」→「編集 ...」を選択して、「階層の編集」ダイアログ:「名前」タブを表示します。

図 13-13 「階層の編集」ダイアログ:「名前」タブ



2. 必要に応じて階層を編集します。

「階層の編集」ダイアログには、次の2つのタブがあります。

- アイテム

このタブは、この階層を使用するアイテムの追加または削除に使用します。

- 名前

このタブは、階層の名前と説明の編集に使用します。

これらのタブの詳細は、「階層の編集」ダイアログ:「アイテム」タブまたは「階層の編集」ダイアログ:「名前」タブを参照してください。

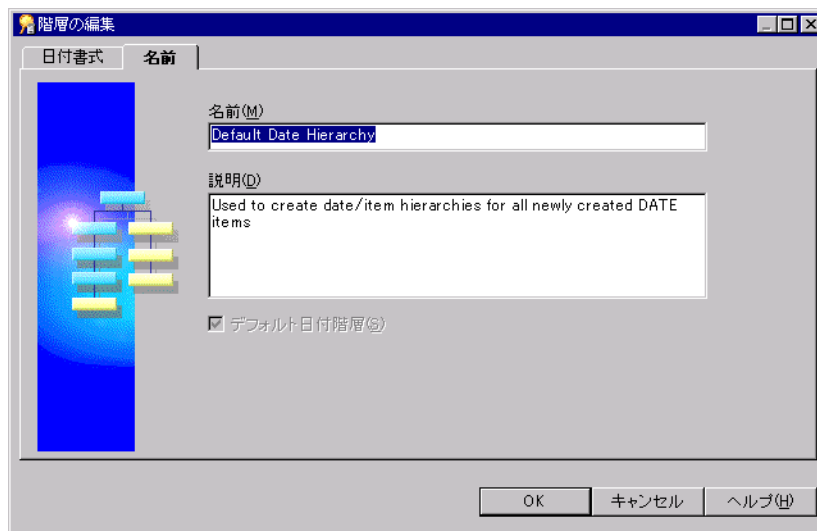
3. 「OK」をクリックします。

日付階層テンプレートの編集方法

この項では、既存の日付階層テンプレートを編集する方法について説明します。日付階層テンプレートを編集すると、その日付階層テンプレートを使用するすべての日付アイテムが、この変更を反映するように変更されます。

1. 「階層」ページで日付階層テンプレートをクリックし、「編集」→「編集 ...」を選択して、「階層の編集」ダイアログ:「名前」タブを表示します。

図 13-14 「階層の編集」ダイアログ:「名前」タブ



2. 必要に応じて階層を編集します。

「階層の編集」ダイアログには、次の2つのタブがあります。

- 日付書式

このタブは、日付書式とこの日付階層テンプレートでの日付書式の位置を変更するために使用します。

- 名前

このタブは、日付階層テンプレートの名前と説明の編集に使用します。

これらのタブの詳細は、「階層の編集」ダイアログ:「日付書式」タブまたは「階層の編集」ダイアログ:「名前」タブを参照してください。

3. 「OK」をクリックします。

日付階層テンプレートを日付アイテムに適用する方法

この項では、日付階層テンプレートを既存の日付アイテムに適用する方法について説明します。

日付階層テンプレートを既存の日付アイテムに適用するとき、日付階層の完了に必要な日付アイテムがすべて自動的に作成されます。これらの新規日付アイテムは、元の日付アイテムと同じフォルダに入ります（元の日付アイテムの名前が前に付けられます）。日付アイテムに適用される日付階層テンプレートを変更すると、この新規日付階層テンプレートを反映するように新しい日付アイテムが作成されます。ただし、**Discoverer** では以前の日付階層から日付アイテムが削除されません。以前の日付階層から日付アイテムを削除するには、手動で削除する必要があります。

たとえば、日付階層 YY/QQ/MM を作成して、日付アイテム **Transaction Date** に割り当てると、次のアイテムがフォルダに作成されます。

- Transaction Date YY
- Transaction Date QQ
- Transaction Date MM

次に新規日付階層 WW/DD を作成して、**Transaction Date** に割り当てると、次の追加アイテムがフォルダに作成されます。

- Transaction Date WW
- Transaction Date DD

Discoverer では、以前に作成されたその他の3つの日付アイテムは削除されません。

日付階層テンプレートを日付アイテムに適用する手順は、次のとおりです。

1. 「データ」タブで日付アイテムをクリックし、「編集」→「プロパティ」を選択して、「**アイテム プロパティ**」ダイアログを表示します。

ヒント: 単一の日付階層テンプレートを同時に複数の日付アイテムに適用する場合は、「プロパティ」ダイアログを開く前にこれらの日付アイテムをすべて選択 ([Ctrl] を押しながら) します。詳細は、[第9章の「アイテム・プロパティの編集方法」](#)を参照してください。

2. 「日付階層」フィールドのドロップダウン・リストから、使用するこの日付アイテムの日付階層テンプレートを選択します。

「なし」を選択して、この日付アイテムで日付階層テンプレートを使用しないようにします。

3. 「OK」をクリックします。

デフォルト日付階層テンプレートの設定方法

デフォルトの日付階層テンプレートは、「ロードウィザードステップ 4」ダイアログのデフォルト選択として「日付階層」ドロップダウン・リストに表示されます。詳細は、「[ロードウィザードステップ 4](#) ダイアログ」を参照してください。

デフォルトの日付階層テンプレートを設定する手順は、次のとおりです。

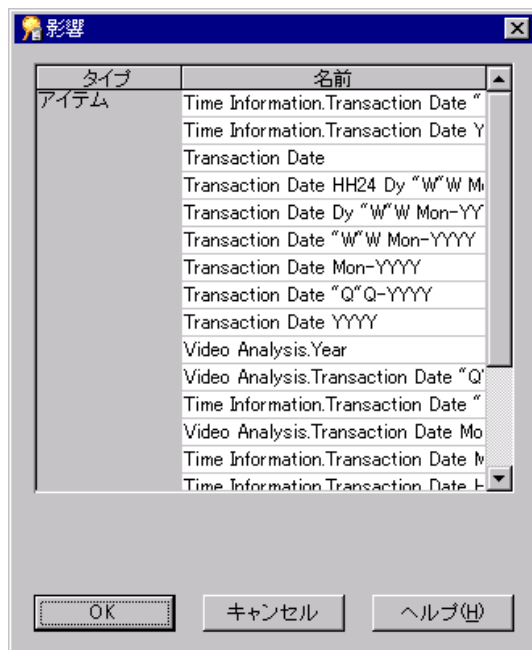
1. 「ワークエリア」:「階層」タブで日付階層テンプレートを展開して、日付階層テンプレートをすべて表示します。
2. デフォルトとして設定する日付階層テンプレートを選択します。
3. 「編集」→「編集 ...」を選択して、「階層の編集」ダイアログ:「名前」タブを表示します。
4. 「名前」タブの「デフォルト日付階層」チェックボックスを選択します。
5. 「OK」をクリックします。

アイテム階層または日付階層テンプレートの削除方法

アイテム階層または日付階層テンプレートを削除する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「階層」タブで、アイテム階層または日付階層テンプレートを選択します。
同時に複数の階層を選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別の階層をクリックします。
2. 「編集」→「削除」を選択して、「削除の確認」ダイアログを開きます。
3. (オプション) この階層または階層テンプレートの削除による影響を受ける可能性のあるオブジェクトを確認できます。削除による影響の可能性を参照する手順は、次のとおりです。
 - a. 「影響 ...」をクリックして、「影響」ダイアログを表示します。
「影響」ダイアログには、削除によって影響を受ける可能性がある他のオブジェクトが表示されるため、正しい選択を行うのに役立ちます。
 - b. (オプション) 行を選択すると、現在の処理が EUL オブジェクトに与える影響を示すテキストが表示されます。

図 13-15 「影響」 ダイアログ



- c. 階層または階層テンプレートの削除による影響を確認した後、「OK」をクリックして「影響」ダイアログを閉じます。
4. 選択した階層または階層テンプレートを削除する場合は、「はい」をクリックします。

日付書式「RR」を使用するデフォルト日付階層を、Oracle9i Discoverer Administrator へのアップグレード後に変更する方法

Oracle9i Discoverer Administrator へのアップグレード後、デフォルト日付階層の日付書式で「RR」が使用されている場合は、日付書式を「YYYY」に変更し、影響を受ける日付アイテム（つまり、日付書式「RR」を使用する日付アイテム）をビジネスエリアから削除する必要があります。このアクションは、マテリアライズド・ビューの作成を確実に実行するために必要です（マテリアライズド・ビューの詳細は第 14 章の「マテリアライズド・ビュー」を参照）。

日付書式「RR」を使用するデフォルト日付階層を、「YYYY」を使用するように変更するには、次の作業を完了する必要があります。

- デフォルト日付階層の日付書式「RR」の「YYYY」への変更
- 日付書式「RR」を使用する残りの日付アイテムの削除

デフォルト日付階層の日付書式「RR」の「YYYY」への変更

日付書式「YYYY」を使用するようにデフォルト日付階層を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「階層」タブをクリックします。
2. 日付階層テンプレートを展開し、日付書式「RR」を使用するデフォルト日付階層を強調表示します。
3. 「編集」→「編集 ...」を選択して、「階層の編集」ダイアログ:「日付書式」タブを表示します。
4. 各日付書式「RR」を「YYYY」で置き換えます。

注意: 影響を受けるデフォルト日付階層それぞれについて、前述の手順を繰り返します。

5. 「OK」をクリックして、変更を保存します。

影響を受けるデフォルト日付階層に日付書式「YYYY」を一度適用すれば、日付書式「RR」を使用する残りの日付アイテムを削除できます。

日付書式「RR」を使用する残りの日付アイテムの削除

日付書式「RR」を使用する日付アイテムを削除する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「データ」タブをクリックします。
2. 日付書式「RR」を使用する日付アイテムを強調表示します。
3. 「編集」→「削除」を選択して、影響を受ける日付アイテムを削除します。
4. 日付書式「RR」を使用する残りの日付アイテムそれぞれについて、前述の手順を繰り返します。

サマリー・フォルダの管理

サマリー・フォルダの管理

この章では、サマリー・フォルダと、Discoverer Administrator を使用したサマリー・フォルダの管理方法について説明します。この章のトピックは次のとおりです。

- [Discoverer のフォルダとサマリー・フォルダ](#)
- [サマリー・フォルダ](#)
- [Discoverer サマリー表](#)
- [マテリアライズド・ビュー](#)
- [自動サマリー管理 \(ASM\)](#)
- [ASM の機能](#)
- [ASM でサマリー・フォルダを作成するための前提条件](#)
- [様々な ASM 実行方法とその使用状況](#)
- [ASM ポリシー](#)
- [サマリー・データをリフレッシュする理由](#)
- [サマリー・フォルダのリフレッシュ時に行われる処理](#)
- [サマリー・ウィザードを使用した ASM の実行方法](#)
- [ロード・ウィザードを使用したバルク・ロード後の ASM の実行方法](#)
- [コマンドライン・インタフェースを使用した ASM の実行方法](#)
- [バッチ・ファイルとオペレーティング・システムのスケジューラを使用した ASM の実行方法](#)
- [サマリー・フォルダのデータベースの構成方法](#)

Discoverer のフォルダとサマリー・フォルダ

Discoverer では、次の 2 種類のフォルダが使用されます。

- フォルダ – データを表します。

Discoverer のフォルダは、単一フォルダ、複合フォルダまたはカスタム・フォルダに分類されます。詳細は、[第 5 章の「フォルダ」](#)を参照してください。

- サマリー・フォルダ – 問合せが行われたデータと、再利用するために保存された結果を表します。

Discoverer では、エンド・ユーザーの問合せ応答時間を短縮するためにサマリー・フォルダが使用されます。

サマリー・フォルダ

サマリー・フォルダとは、再利用のために保存された問合せ済みデータ（Discoverer Administrator で作成）です。データは、次のいずれかのデータベースに格納されます（Oracle のリリースに応じて異なります）。

- マテリアライズド・ビュー

Discoverer では、マテリアライズド・ビューを使用して、サマリーされたデータが Oracle 8.1.7 以上のデータベースに格納されます。

- 表

Discoverer では、表を使用して、サマリーされたデータが Oracle 8.1.5 以下のデータベースに格納されます。

Discoverer で作成されるサマリー表は、Discoverer サマリー表と呼ばれます。

注意：マテリアライズド・ビューの作成が不可能で、Oracle 8.1.7 以上のデータベースに対する実行時に Discoverer サマリー表が作成される場合もあります。詳細は、[第 16 章の「Oracle 8.1.7 以上のデータベースで外部サマリー表とビューを EUL アイテムにマッピングする場合の違い」](#)を参照してください。

サマリー・フォルダの利用により、詳細なデータベース表ではなく、事前に集計および結合されたデータにアクセスして問合せが行われるため、問合せの応答時間が短縮されます。

また、別のアプリケーションで作成されたサマリー・データを含む表に基づいて、Discoverer をサマリー・フォルダにダイレクトすることもできます。これらの表は、外部サマリー表と呼ばれています。

サマリー・フォルダを作成するには2つの方法があります。

- 自動サマリー管理（ASM）機能を使用する方法（詳細は、「[自動サマリー管理（ASM）](#)」を参照）
- 手動による方法（詳細は、「[手動によるサマリー・フォルダの作成について](#)」を参照）

Discoverer でサマリー・フォルダを作成する場合は、自動サマリー管理（ASM）を使用する方法をお勧めします。

Discoverer サマリー表

Discoverer サマリー表とは、Oracle 8.1.5 以下のデータベースに対して実行されるときに Discoverer Administrator により作成されるデータベース表であり、サマリーされたデータが含まれます。Discoverer サマリー表には、事前に集計および結合されたデータが含まれるため、Discoverer Desktop/Plus と Discoverer Viewer での問合せパフォーマンスが向上します。

Discoverer では、問合せに対しサマリー表を使用できる状況が自動的に認識されます。Discoverer により、サマリー表を使用するように問合せがリライトされます。詳細は、[第 16 章の「クエリー・リライト」](#)を参照してください。

たとえば、Discoverer Desktop/Plus で最初に問合せが実行される時、ディテール表に問合せがダイレクトされます。これには、複数表の結合および数千、数百万の行の集計が必要になることがあります。この処理にはかなりの時間がかかることがあります。Discoverer で適切なサマリー表が作成されていれば、Discoverer Desktop/Plus で実行されるのと同じ問合せがこのサマリー表に対してリライトされ、数秒で結果が返されます。どちらの問合せでも同じ結果が得られます。

Discoverer と、Oracle 8.1.5 以下のデータベースでのサマリー表へのクエリー・リライトの詳細は、[第 16 章の「クエリー・リライトしてサマリー表を使用するメリットを示す例」](#)を参照してください。

マテリアライズド・ビュー

マテリアライズド・ビューは、Oracle 8.1.7 以上のデータベースにより作成されるスナップショット表示であり、サマリーされたデータが含まれます。マテリアライズド・ビューには、事前に集計および結合されたデータが含まれるため、Discoverer Desktop/Plus と Discoverer Viewer での問合せパフォーマンスが向上します。

Oracle 8.1.7 以上のデータベースでは、問合せに対しマテリアライズド・ビューを使用できる状況が自動的に認識されます。Oracle 8.1.7 以上のデータベースでは、マテリアライズド・ビューを使用するように問合せがリライトされます。次に、問合せがマテリアライズド・ビューにダイレクトされますが、基礎となるディテール表またはビューにはダイレクトされません。

マテリアライズド・ビューには、次の特性があります。

- マテリアライズド・ビューにより記憶領域が消費されます。

通常のビューと異なり、マテリアライズド・ビューには 1 つ以上のディテール表に対する問合せの結果データが含まれます。

- データ変更時にマテリアライズド・ビューをリフレッシュする必要があります。

Oracle データベースでは、ディテール表の変更後にマテリアライズド・ビューをリフレッシュすることでマテリアライズド・ビューがメンテナンスされます。リフレッシュには、増分リフレッシュ（高速リフレッシュ）と完全リフレッシュの 2 つの方法があります。マテリアライズド・ビューのリフレッシュは、オンデマンドまたは定期的な間隔で行うことができます。別の方法として、トランザクションがディテール表への変更をコミットしていればいつでも、ディテール表と同じデータベースのマテリアライズド・ビューをリフレッシュできます。

- マテリアライズド・ビューはユーザーに対して透過的です。

クエリー・リライトにより、ディテール表に対して表現された SQL 文が、ディテール表で定義されている 1 つ以上のマテリアライズド・ビューにアクセスする文に変換されます。この変換は、ユーザーに対して透過的です。詳細は、[第 16 章の「クエリー・リライト」](#)を参照してください。

エンド・ユーザーの問合せで使用するために、Discoverer で外部マテリアライズド・ビューを登録する必要はありません。Oracle 8.1.7 以上のデータベースでは、ユーザーの問い合わせに対してマテリアライズド・ビューでリライト可能であるかどうか認識されるためです。Discoverer で外部マテリアライズド・ビューを登録する必要があるのは、ユーザーにかわってリフレッシュをメンテナンスする場合のみです（外部サマリー表およびビューの登録の詳細は、[第 15 章の「外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの作成方法」](#)を参照）。

Discoverer Plus の SQL インспекターおよび実行計画により、問合せのために生成された SQL でサマリー表またはマテリアライズド・ビューが使用されたかどうかユーザーに示されます（詳細は、[「Discoverer での SQL とクエリー・リライトの実行計画の表示について」](#)を参照）。

Discoverer でのサマリー表およびマテリアライズド・ビューの使用履歴状況は、[第 16 章の「Discoverer でのサマリー表およびマテリアライズド・ビューの使用の現状と将来」](#)を参照してください。

Discoverer サマリー表とマテリアライズド・ビューの違いは次を参照してください。

- [第 16 章「Oracle 8.1.5 以下のデータベースと Oracle 8.1.7 以上のデータベースのサマリー・フォルダの特性の違い」](#)
- [第 16 章「外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの違い」](#)
- [第 16 章「Oracle 8.1.7 以上のデータベースで外部サマリー表とビューを EUL アイテムにマッピングする場合の違い」](#)

自動サマリー管理（ASM）

自動サマリー管理（ASM）とは、ユーザーにかかわってサマリー・フォルダの作成と管理を行う Discoverer の機能です。

ASM により、サマリー・フォルダ管理のための完全に自動化されたソリューションが提供されるため、サマリー・フォルダの作成とメンテナンスを簡単に行うことができます。ASM を定期的に行うとすれば、ユーザーの問合せから Discoverer で収集される問合せ統計を使用して作成されるサマリー・フォルダが自動的に詳細化されます。また、ASM により、サマリー・フォルダの作成またはメンテナンスを行う際にデフォルト値の指定を制御する場合の指針も提供されます。

ASM の機能

ASM による次の処理で、サマリー・フォルダの作成方法が決定されます。

- データベース表の分析
- 問合せ統計の使用（使用可能な場合）
- ASM ポリシーと呼ばれるデフォルト値の使用（詳細は、[「ASM ポリシー」](#)を参照）

ASM では、前述の処理の組合せに基づいてサマリー・フォルダの最適なセットの作成とメンテナンスが自動的に行われます。

ASM により、サマリー・ポリシーが、推奨されるサマリー・フォルダ定義のリストに変換されます。他に操作を行わずにこれらの推奨定義を実装するか（サマリー表の実際のセットがシステム使用状況に応じて動的に調整されます）、あるいは実行を一時中断して、1 つ以上の推奨定義を特別に含めることができます。

ASM ではサマリー・フォルダを作成するための表領域が必要ですが、サマリー・ウィザードで表領域を調整できます（詳細は、[「サマリー・ウィザードを使用した ASM の実行方法」](#)を参照）。

注意：ASM は、現在選択されているビジネスエリアのみでなく EUL 全体で機能します。これは、現行の EUL 内のすべてのビジネスエリアからのフォルダを ASM で使用できることを意味しています。

ASM でサマリー・フォルダを作成するための前提条件

ASM でサマリー・フォルダを作成するには、次の前提条件を満たす必要があります。

- データベースが PL/SQL をサポートしていること。
- サマリー・フォルダの作成とリフレッシュのスケジュールを設定するために DBMS_JOB パッケージがインストールされていること（詳細は「[サマリー管理のために DBMS_JOB がインストールされていることを確認する方法](#)」を参照）。
- サマリー・フォルダの作成に使用するユーザー ID が次のデータベース権限を持っていること（これらの権限付与の詳細は「[サマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する方法](#)」を参照）。
 - CREATE TABLE
 - CREATE VIEW
 - CREATE PROCEDURE
 - SELECT ON V_\$PARAMETER
 - CREATE/DROP/ALTER ANY MATERIALIZED VIEW（Oracle 8.1.7 以上のデータベース）
 - GLOBAL QUERY REWRITE（Oracle 8.1.7 以上のデータベース）
 - ANALYZE ANY
- サマリー・フォルダの作成に使用するユーザー ID が、サマリー表を作成するために十分な表領域割当て制限を持っていること（詳細は「[表領域割当て制限を決定しリセットする方法](#)」を参照）。
- EUL 所有者として Discoverer Administrator に接続していること。
- Oracle 8.1.7 以上のデータベースを使用している場合、フォルダに集合演算子（UNION、UNION ALL、MINUS、INTERSECT など）を含めないこと。集合演算子を含むフォルダが ASM で検出されると、そのフォルダのサマリー・データは作成されません。

注意：Oracle の集合演算子の詳細は『Oracle9i SQL リファレンス』を参照してください。

注意：Discoverer でユーザーが作成したデータベースには、サマリー・フォルダを作成するための追加権限が必要になる場合があります。次の表は、追加権限が必要になる状況を示しています。

表 14-1 Discoverer で作成されるデータベース・ユーザーに、サマリー・フォルダを作成するための追加権限が必要になる状況

データベース・ユーザーの作成に使用される Discoverer またはデータベース（あるいはその両方）のリリース	データベース・ユーザーに、サマリー・フォルダを作成するための追加権限が必要かどうか	必要なアクション
Discoverer 3.1	データベース・ユーザーには、サマリー・フォルダを作成するための追加権限が必要です。	必要な権限をデータベース・ユーザーに明示的に付与する必要があります（これらの権限を付与する方法の詳細は、「 サマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する方法 」を参照）。
Discoverer 4i と Oracle 8.0 以下のデータベース	データベース・ユーザーには、サマリー・フォルダを作成するための追加権限が必要です。	Discoverer 3.1 の場合と同じ。
Discoverer 4i と Oracle 8.1.7 以上のデータベース	データベース・ユーザーには、サマリー・フォルダを作成するための追加権限は必要ありません。	不要

様々な ASM 実行方法とその使用状況

多くの方法で ASM を実行できます。次の表は、様々な ASM 実行方法とその使用状況を示しています。

表 14-2 様々な ASM 実行方法とその使用状況

ASM の実行方法	この方法で ASM を実行する利点	参照
サマリー・ウィザードを使用する方法	すべての処理を Discoverer がガイドします。	「サマリー・ウィザードを使用した ASM の実行方法」
バルク・ロード後にロード・ウィザードを使用する方法	ASM にアクセスせずに、ビジネスエリアのロード時にサマリー・フォルダを作成できます。	「ロード・ウィザードを使用したバルク・ロード後の ASM の実行方法」
コマンドライン・インタフェースを使用する方法	Discoverer を起動せずに、サマリー・フォルダを作成できます。	「コマンドライン・インタフェースを使用した ASM の実行方法」

表 14-2 様々な ASM 実行方法とその使用状況（続き）

ASM の実行方法	この方法で ASM を実行する利点	参照
バッチ・ファイルとオペレーティング・システムのスケジューラを使用する方法	コマンドラインにより ASM サマリー・フォルダ作成のスケジューリングが自動化されます。	「バッチ・ファイルとオペレーティング・システムのスケジューラを使用した ASM の実行方法」

ASM ポリシー

ASM ポリシーは、ユーザー定義の制約とオプションのセットです。このポリシーにより、ASM の動作と、ASM で生成されるサマリー・フォルダを制御できます。

ASM ポリシーは、領域オプションと詳細設定に分けられます。多くの場合、領域オプションの設定のみ必要になります。

領域オプションと詳細設定の詳細は、次を参照してください。

- 「サマリー ウィザード (ASM)」: ステップ 3 「領域の割当て」 ダイアログ
- 「サマリー ウィザード (ASM)」: 「デフォルト設定の変更」 ダイアログ: 「ダイアログのリスト」 タブ

Discoverer には、ユーザーが操作を行わなくても適切なサマリー・フォルダの作成とメンテナンスが確実に実行されるデフォルト設定があります。

ASM ポリシーに必要な最低限の情報は、表領域名と割り当てられたディスク領域です。デフォルトの表領域はユーザー表領域であり、デフォルトのディスク領域が使用されます。これらの値は、必要に応じて変更できます（詳細は、「サマリー ウィザード (ASM)」: ステップ 3 「領域の割当て」 ダイアログを参照）。

サマリー・データをリフレッシュする理由

すべてのサマリー表とマテリアライズド・ビューの一貫性を保つために、定期的にサマリー・データをリフレッシュする必要があります。データベースが頻繁に変更される場合は、基礎となるデータベースとデータの同期を保つために、サマリー表とマテリアライズド・ビューをリフレッシュする必要があります。サマリー表とマテリアライズド・ビューのセットを適切にメンテナンスすれば、サマリー表またはマテリアライズド・ビューのどちらを使用する場合でも、問合せ結果が正確になります。

サマリー・フォルダ・リフレッシュの詳細は、次を参照してください。

- 「サマリー・フォルダのリフレッシュ時に行われる処理」
- 第 15 章「サマリー・フォルダの手動によるリフレッシュ方法」
- 第 16 章「Oracle 8.1.7 以上のデータベースのリフレッシュ・オプションについて」
- 第 16 章「Oracle データベース間のインポートに続くサマリー・フォルダのリフレッシュについて」

注意：一部の外部イベント（ウェアハウスへのデータ・ロードなど）が完了してからサマリー・フォルダをリフレッシュすることが有益な場合があります。Discoverer コマンドライン・インタフェース機能を利用すると、バッチ・コマンド・ファイルからサマリー・フォルダをリフレッシュできます（詳細は「[Discoverer コマンドライン・インタフェース](#)」を参照）。

サマリー・フォルダのリフレッシュ時に行われる処理

サマリー・フォルダのリフレッシュ時（Oracle 8.1.7 以上のデータベースに対する実行時）には、リフレッシュ設定に応じてデータベース・サーバー自体のリフレッシュ機能が使用されます（これは増分リフレッシュである場合もあります）。

サマリー・フォルダのリフレッシュ時には、Discoverer により次の処理が実行されます。

- サマリー・フォルダが使用不可とマークされます。
- サマリー・フォルダに関連付けられたマテリアライズド・ビューまたはサマリー表が EUL メタデータにあわせて調整され、必要に応じて定義が更新されます。
- リフレッシュされる既存のサマリー・データがすべて削除されます。
- サマリー・データが再生成され、対応するマテリアライズド・ビューまたはサマリー表に挿入されます。
- サマリー・フォルダが使用可能とマークされます。

サマリー・ウィザードを使用した ASM の実行方法

ASM を実行するには、特定のデータベース権限が必要です（ASM を実行するために必要な権限の詳細は、「[ASM でサマリー・フォルダを作成するための前提条件](#)」を参照）。

「サマリー ウィザード」ダイアログの詳細を指すヘディングのリストを表示するには、「[サマリー ウィザード \(ASM\)](#)」[ダイアログのリスト](#)を参照してください。

サマリー・ウィザードを起動する手順は、次のとおりです。

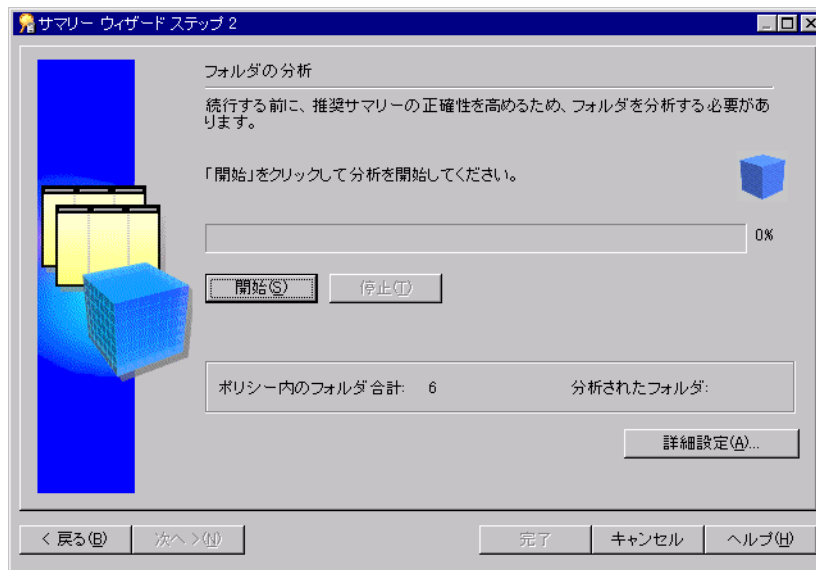
1. 「挿入」→「サマリー」を選択して、「[サマリー ウィザード ステップ 1](#)」ダイアログを表示します。

図 14-1 サマリー・ウィザード



2. 「Discovererの推奨するサマリーを作成」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ」をクリックして、「[サマリー・ウィザード ステップ 2](#)」ダイアログを表示します。

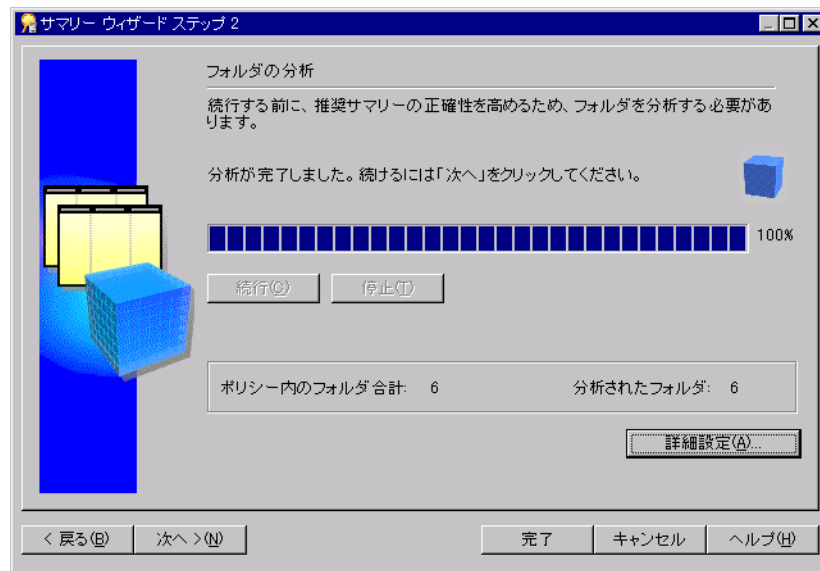
図 14-2 「サマリー ウィザード ステップ 2」 ダイアログ



注意：Discoverer では、作成するサマリー・フォルダを決定するために、サマリー・フォルダ処理にかかわるすべてのフォルダが分析されます。分析されるフォルダの数とサイズによっては、この処理に時間がかかることがあります。Discoverer では、この処理の開始と停止をユーザー自身が決定できます。

3. 「開始」ボタンをクリックして分析を開始します。
分析処理中に進行状況が表示されます。
4. (オプション)「停止」ボタンをクリックすれば、分析を中断できます。
 - 表分析を再開する前に、デフォルト設定を変更する（「詳細設定 ...」ボタンを使用）ために分析を中断することがあります。
5. (オプション)「続行」ボタンをクリックすれば、分析を再開できます。
分析は、「停止」ボタンをクリックした時点から再開されます。

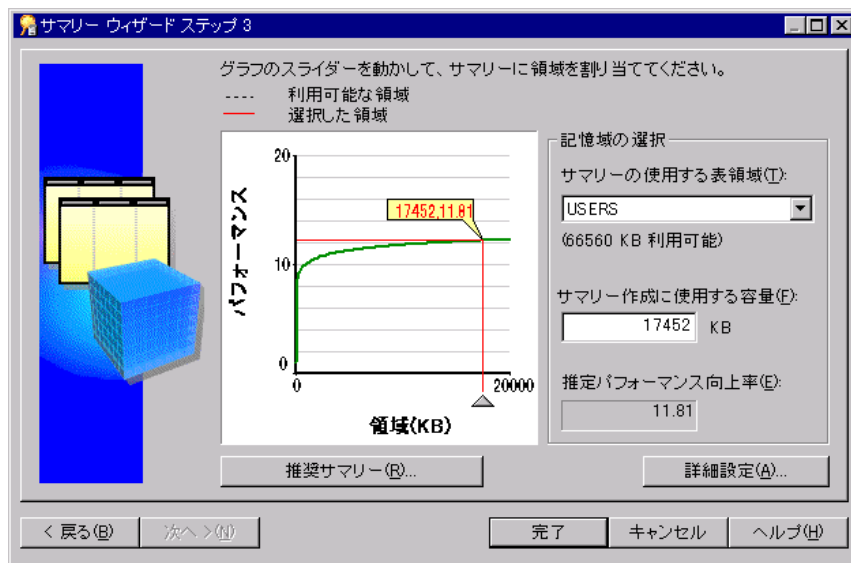
図 14-3 「サマリー ウィザード ステップ 2」 ダイアログ



注意：分析できないフォルダがある場合は、「分析不能」ダイアログが表示されます。

6. 分析が完了した後、「次へ」をクリックしてサマリーに領域を割り当てます。

図 14-4 「サマリー ウィザード ステップ 3」 ダイアログ



サマリー・フォルダに割り当てられた領域から予測されるパフォーマンスが、グラフに描画されます。

ここで表示される情報がフォルダ分析時に計算されます（前のステップを参照）。「デフォルト設定の変更」ダイアログのいずれかのタブを使用して変更を行うと、Discoverer によりグラフが再計算されることがあります。

設定の詳細は、「サマリー ウィザード (ASM)」: 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「ダイアログのリスト」タブを参照してください。

7. 「サマリーの使用する表領域:」 リスト・ボックスで、サマリー・データを格納する表領域を選択します。

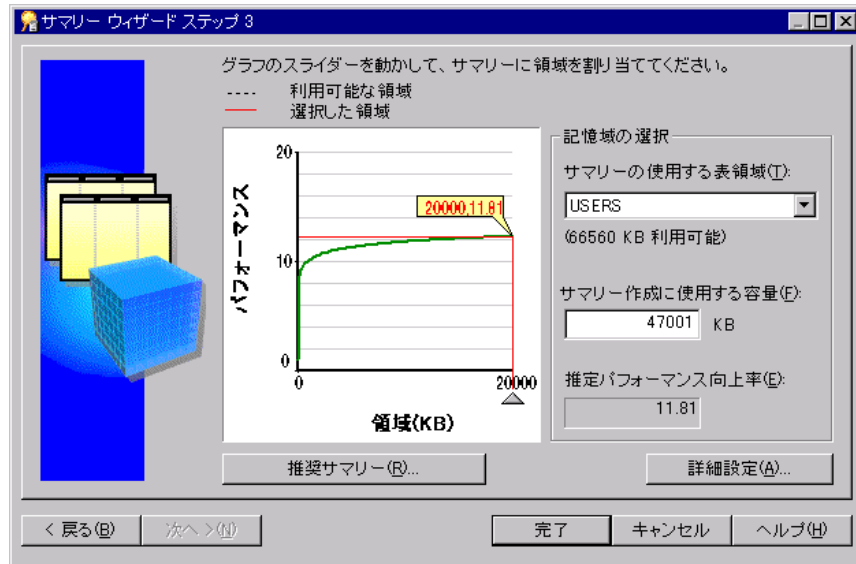
注意: サマリー・データ用の表領域とは別の表領域を使用することをお勧めします。そのような表領域がない場合、SYSTEM または TEMP 表領域は使用しないことをお勧めします。詳細はデータベース管理者に問い合せてください。

8. 次のいずれかの方法で、サマリー・データに割り当てる領域を指定します。
 - グラフをクリックし、ポインタまたは赤い線をドラッグして、サマリーに割り当てる領域を選択します。
 - 「サマリー作成に使用する容量:」 フィールドで数字を指定します。

注意: 「サマリーの使用する表領域:」 フィールドの下値は、「サマリー作成に使用する容量:」 フィールドで指定した値を下回ることがあります。この場合でも、表領域が

自動拡張に設定されていなければ問題ありません。表領域が自動拡張に設定されている場合、必要な領域がデータベースに自動的に追加されます。表領域が自動拡張に設定されていない場合、値「Space (KB)」は使用可能領域未満である必要があります。

図 14-5 「サマリー ウィザード ステップ 3」 ダイアログ



9. (オプション) ユーザーにかわって ASM により作成または削除されるサマリー・フォルダを表示するには、「推奨サマリー ...」ボタンをクリックします。

推奨サマリーの詳細は、「[推奨サマリー](#)」ダイアログを参照してください。

10. (オプション) 「デフォルト設定の変更」ダイアログを表示するには、「詳細設定 ...」ボタンをクリックします。

詳細設定の詳細は、「[サマリー ウィザード \(ASM\) : 「デフォルト設定の変更」ダイアログ : 「ダイアログのリスト」タブ](#)を参照してください。

11. 「完了」をクリックすると、現在の設定に基づいてサマリー・フォルダが生成されます。

これらの設定には、「推奨サマリー」ダイアログまたは「デフォルト設定の変更」ダイアログで行われた設定が含まれます。

注意

現行の EUL 内のサマリー・フォルダをすべて表示するには、「[ワークエリア](#)」:「[サマリー](#)」タブを表示します。

ロード・ウィザードを使用したバルク・ロード後の ASM の実行方法

ロード・ウィザードを使用してビジネスエリアを現行の EUL にロードするとき、この新規ビジネスエリア用のサマリー・フォルダ・セットを作成するかどうかを選択できます。このオプションを選択すると、適切なサマリーがバルク・ロード後に作成されます。

ロード・ウィザードを使用してバルク・ロード後に ASM を実行する手順は、次のとおりです。

1. 「挿入」→「ビジネスエリア」→「データベースから新規ビジネスエリアを作成」を選択して、ロード・ウィザードを起動します（ロード・ウィザードの使用方法的詳細は第 4 章の「ロード・ウィザード」を参照）。
2. 「ロードウィザードステップ 4」ダイアログで、オプション「作成されたフォルダをベースとしたサマリー」をクリックします。

詳細は、「ロードウィザードステップ 4」ダイアログを参照してください。

注意

- ビジネスエリアのバルク・ロード時に作成されるサマリー・フォルダは、表の分析とデフォルトのサマリー・ポリシーにより導出されます。

ASM ポリシーの詳細は、「ASM ポリシー」を参照してください。

- バルク・ロード処理でデータベース表がロードされた直後には、問合せ統計を利用できません。Discoverer をしばらく使用すると、問合せ統計が収集されます。問合せ統計が使用可能になると、ASM で問合せ統計が利用されてより適切なサマリー・フォルダが作成されます。
- バルク・ロードの ASM 処理に対するサマリー・ポリシーを変更する必要はありません。使用されるデフォルト設定は適切である必要があります。ただし、変更した場合は、それらの設定がデフォルトになります。

コマンドライン・インタフェースを使用した ASM の実行方法

コマンドライン・インタフェースを使用して ASM を実行する手順は、次のとおりです。

1. 「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択します。
2. 適切なコマンドを入力します。

コマンドライン・インタフェースの詳細は、第 21 章の「[Discoverer コマンドライン・インタフェース](#)」を参照してください。ASM コマンドとコマンド修飾子の詳細は第 21 章の「[/asm](#)」を参照してください。

バッチ・ファイルとオペレーティング・システムのスケジューラを使用した ASM の実行方法

オペレーティング・システムのバッチ・ファイル機能またはスケジューラ機能を利用して ASM を実行できます。この方法では、処理を繰り返す場合のスケジュール済み時間間隔など、ASM を実行する時期を指定します。

バッチ・ファイル内でコマンドライン構文を使用すれば、夜間または週末に自動的に処理できます。これにより、システムの自己メンテナンスが可能になります。

バッチ・ファイルから ASM を実行する前に、次の 2 つの処理が必要です。

1. テキスト・エディタ（メモ帳など）でテキスト・ファイルを作成します。
2. 適切なコマンドライン構文で、バッチ・ファイルにテキストとしてコマンドラインの詳細を入力します。

ASM コマンドライン構文の詳細は、第 21 章の「[/asm](#)」を参照してください。

3. .bat という拡張子を付けて（たとえば、asmsched.bat という名前で）ファイルを保存します。
4. 適切なオペレーティング・システムのコマンドを使用して、バッチ・ファイルのスケジュールを設定します。

バッチ・ファイルのスケジュールを設定する方法は、オペレーティング・システムのドキュメントまたはヘルプを参照してください。

サマリー・フォルダのデータベースの構成方法

Discoverer のサマリー管理機能では、Oracle データベースの機能が使用されます。このため、Discoverer が Oracle データベースに対して実行されている場合のみサマリー管理機能を使用できます。この機能では、ワークブック・スケジュール機能と同じスケラブルで信頼性の高い処理手順が使用されており、両方の機能の設定は似ています。これらの手順では、DBMS_JOB と呼ばれる DBMS の標準パッケージが使用されます。

次の作業を確認すれば、Discoverer でサマリー管理の処理手順を有効にできます。

- サマリー管理のために DBMS_JOB がインストールされていることを確認する方法
- サマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する方法
- 表領域割当て制限を決定しリセットする方法
- スキーマ・オブジェクト名を確認する方法
- サマリー処理の開始時間を設定する方法

サマリー管理のために DBMS_JOB がインストールされていることを確認する方法

サマリー管理のために DBMS_JOB がインストールされていることを確認する手順は、次のとおりです。

1. データベース管理者として SQL*Plus にログインし、次の SQL 文を実行します。

```
SQL> select * from all_objects where object_name='DBMS_JOB' and object_type =  
'PACKAGE';
```

文により行が返されない場合は、データベース管理者の SVRMGRL (Oracle 8.0) を使用して必要なパッケージを作成します。

DBMS_JOB をインストールし、サマリー管理に必要なパッケージを作成する手順は、次のとおりです (Oracle9i データベースの場合)。

1. データベース管理者として SQL*Plus にログインします。
2. コマンド・プロンプトで次の SQL 文を実行します。

```
SQL> CONNECT username/password@database AS SYSDBA;
```

3. 次の SQL 文を実行します。

```
SQL> start <ORACLE_HOME>/rdbms/admin/dbmsjob.sql;  
SQL> start <ORACLE_HOME>/rdbms/admin/prvtjob.plb;
```

DBMS_JOB をインストールし、サマリー管理に必要なパッケージを作成する手順は、次のとおりです（Oracle9i より前のデータベースの場合）。

1. Windows で「スタート」→「ファイル名を指定して実行」を選択します。
2. 次のいずれかを入力します。
 - SVRMGRL（Oracle 8.0 の場合）
 - SVRMGR（Oracle8i Personal Edition の場合）
3. DBA ファシリティの場合は、「connect internal」と入力します。
4. 次の SQL 文を実行します。

```
SQL> start <ORACLE_HOME>/rdbms/admin/dbmsjob.sql;  
SQL> start <ORACLE_HOME>/rdbms/admin/prvtjob.plb;
```

サマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する方法

次の方法で、サマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与できます。

- サマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する作業
- サマリー・フォルダを作成するために必要な権限を付与するスクリプト（Oracle 8.1.7 以上のデータベースの場合）

注意

後述の <user> は、Discoverer Administrator を使用する人のユーザー ID を示しています。

サマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する作業

サマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する手順は、次のとおりです（Oracle9i データベースの場合）。

1. データベース管理者として SQL*Plus にログインします。
2. コマンド・プロンプトで次の SQL 文を実行します。

```
SQL> CONNECT username/password@database AS SYSDBA;
```

3. 次の SQL 文を実行します。

```
SQL> grant CREATE TABLE to <user>;
SQL> grant CREATE VIEW to <user>;
SQL> grant CREATE PROCEDURE to <user>;
SQL> grant CREATE ANY MATERIALIZED VIEW to <user>;
SQL> grant DROP ANY MATERIALIZED VIEW to <user>;
SQL> grant ALTER ANY MATERIALIZED VIEW to <user>;
SQL> grant GLOBAL QUERY REWRITE to <user> with admin option;
SQL> grant ANALYZE ANY to <user>;
SQL> grant SELECT ON V_$PARAMETER to <user>;
```

注意: SELECT ON V_\$PARAMETER を付与するには、SYS ユーザーとしてログインする必要があります。SYS のユーザー名とパスワードが不明な場合は、データベース管理者に問い合せてください。

サマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する手順は、次のとおりです（Oracle9i より前のデータベースの場合）。

1. Windows で「スタート」→「ファイル名を指定して実行」を選択します（データベース・サーバー・マシン上で）。
2. 次のいずれかを入力します。
 - SVRMGRL（Oracle 8.0 の場合）
 - SVRMGR（Oracle8i Personal Edition の場合）
3. DBA ファシリティの場合は、「connect internal」と入力します。
4. 次の SQL 文を実行します。

```
SQL> grant CREATE TABLE to <user>;
SQL> grant CREATE VIEW to <user>;
SQL> grant CREATE PROCEDURE to <user>;
SQL> grant CREATE ANY MATERIALIZED VIEW to <user>;
SQL> grant DROP ANY MATERIALIZED VIEW to <user>;
SQL> grant ALTER ANY MATERIALIZED VIEW to <user>;
SQL> grant GLOBAL QUERY REWRITE to <user> with admin option;
SQL> grant ANALYZE ANY to <user>;
SQL> grant SELECT ON V_$PARAMETER to <user>;
```

注意: SELECT ON V_\$PARAMETER を付与するには、SYS ユーザーとしてログインする必要があります。SYS のユーザー名とパスワードが不明な場合は、データベース管理者に問い合せてください。

サマリー・フォルダを作成するために必要な権限を付与するスクリプト (Oracle 8.1.7 以上のデータベースの場合)

サマリー・フォルダを作成するために必要な権限を付与するスクリプト (Oracle 8.1.7 以上のデータベースの場合) は、次のファイルにあります。

<ORACLE_HOME>\discoverer902\SQL\%eulasm.sql.

表領域割当て制限を決定しリセットする方法

データベース・ユーザーは、サマリー表を作成するために十分なデフォルト表領域割当て制限を持っている必要があります。必要な場合は、次の作業により表領域割当て制限を決定できます。

表領域割当て制限を決定する手順は、次のとおりです (Oracle9i データベースの場合)。

1. データベース管理者として SQL*Plus にログインします。
2. コマンド・プロンプトで次の SQL 文を実行します。

```
SQL> CONNECT username/password@database AS SYSDBA;
```

3. 次の SQL 文を実行します。

```
SQL> select * from dba_ts_quotas where username = <user>;
```

<user> は Discoverer Administrator を使用する人のユーザー ID を示しています。

表領域割当て制限を決定する手順は、次のとおりです (Oracle9i より前のデータベースの場合)。

1. Windows で「スタート」→「ファイル名を指定して実行」を選択します。
2. 次のいずれかを入力します。
 - SVRMGRL (Oracle 8.0 の場合)
 - SVRMGR (Oracle8i Personal Edition の場合)
3. DBA ファシリティの場合は、「connect internal」と入力します。

4. 次の SQL 文を実行します。

```
SQL> select * from dba_ts_quotas where username = <user>;
```

<user> は Discoverer Administrator を使用する人のユーザー ID を示しています。

表領域割当て制限をリセットする手順は、次のとおりです。

1. 次の SQL 文を実行して表領域割当て制限をリセットします。

```
SQL> alter user <user> quota <n> on <tablespace>;
```

<user> は Discoverer Administrator を使用する人のユーザー ID を示しています。

<n> は、割当ての単位 K (KB)、M (MB) または U (無制限) を示しています。

<tablespace> は、デフォルトの表領域名 (USERS など) を示しています。

スキーマ・オブジェクト名を確認する方法

ユーザーは、ユーザー名と同じ名前のオブジェクトをスキーマ内に持つことはできません。この作業は、データベース・ユーザー名と同じ名前のオブジェクトをスキーマ内で検索する方法を示しています。

ユーザー名と同じ名前のオブジェクトがスキーマ内にあるかどうかを確認する手順は、次のとおりです。

1. ユーザーとして SQL*Plus にログインします。
2. 次の SQL 文を実行します。

```
SQL> select object_name from user_objects where object_name = <user>;
```

<user> は SQL*Plus で使用されるログインと同じです。

サマリー処理の開始時間を設定する方法

サマリー管理処理はサーバー上のデータベース内で実行され、Oracle DBMS の初期化ファイル (INIT<SID>.ORA) 内のパラメータにより制御されます。

同時に実行できる処理要求数の制限

DBMS_JOB の処理に使用する同時処理の数は、パラメータ `job_queue_processes` で指定します。つまり、同時に扱うことができる処理要求の数をこのパラメータで制御します。デフォルト値はゼロであり、処理要求が作成されないことを意味しています。別のアプリケーションで DBMS_JOB を使用する場合は、この値を 2 以上に設定してください。

なんらかの理由で 1 つのジョブが失敗すると、そのジョブは再実行を依頼され続けてキュー内のその他のジョブを完了できなくなることがあるため、複数のジョブ・キュー処理が必要です。同時に 10 の処理要求を扱う場合は、値を 10 に設定する必要があります。

INIT<SID>.ORA 内のパラメータ `job_queue_interval` は、ジョブ・プロセスが保留中のジョブを処理する頻度を、時間 (秒) で示します。デフォルトでは 60 秒ですが、10 分 (600 秒) 以上に更新することをお勧めします。このパラメータはワークブック・スケジュールに影響を与える場合があることに注意してください。

前述のパラメータを有効にする手順は、次のとおりです。

1. INIT<SID>.ORA ファイルを検索します。

INIT<SID>.ORA ファイルは、<ORACLE_HOME>\%dbms にあります。このファイルのデフォルト名は INITORCL.ORA です。ORCL は <SID> 名を表します。

2. このファイルに 2 行入力します。たとえば、次のようになります。

```
job_queue_processes = 2
job_queue_interval = 600 (注：この値は 600 秒 = 10 分を表します)
```

注意

サマリー管理機能とワークブック・スケジュール機能の両方で、Oracle DBMS 内のこのスケジュール機能を使用されます。両方の機能が、指定した間隔と同時要求数の影響を受けます。

手動によるサマリー・フォルダの作成

手動によるサマリー・フォルダの作成

この章では、（自動サマリー管理を使用するかわりに）Discoverer Administrator を使用してサマリー・フォルダを手動で作成する方法について説明します。この章のトピックは次のとおりです。

- [手動によるサマリー・フォルダの作成について](#)
- [Discoverer でサマリー・フォルダを手動で作成する前提条件](#)
- [サマリー組合せ](#)
- [サマリー組合せを定義するときに考慮する事項](#)
- [サマリー組合せをセットアップするためのガイドライン](#)
- [式がサマリー・フォルダを使用する時期](#)
- [EUL のアイテムに基づくサマリー・フォルダの作成方法](#)
- [ユーザーの問合せに基づくサマリー・フォルダの作成方法](#)
- [外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの作成方法](#)
- [サマリー・フォルダの手動によるリフレッシュ方法](#)
- [サマリー・フォルダのプロパティの編集方法](#)
- [サマリー・フォルダの編集方法](#)
- [サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶領域プロパティを編集する方法](#)
- [サマリー・フォルダの削除方法](#)
- [サマリー・フォルダのサマリー表またはマテリアライズド・ビューのステータスを表示する方法](#)

手動によるサマリー・フォルダの作成について

手動によるサマリー・フォルダの作成は、Discoverer の自動サマリー管理（ASM）機能を使用するかわりにユーザー自身でサマリー・フォルダを作成する処理です（詳細は第 14 章の「サマリー・フォルダの管理」を参照してください）。サマリー・フォルダをユーザー自身で作成するのは、次の場合です。

- EUL アイテムの組合せを手動で選択する場合（サマリー・フォルダで使用するアイテムがわかっている場合など）
- 問合せパフォーマンス統計を使用して、（実行された問合せに基づく）サマリー・フォルダの推奨から選択する場合
- 外部アプリケーションにより作成またはメンテナンスされたサマリー表を使用する場合（外部サマリー表など）

サマリー・ウィザードの最初のステップで、ASM を使用してサマリー・フォルダを作成するかまたは手動で作成するかを指定します。サマリー・フォルダを手動で作成するには、「サマリーを個別に指定」オプションを選択して、次のいずれかの作業を完了する必要があります。

- [EUL のアイテムに基づくサマリー・フォルダの作成方法](#)
- [ユーザーの問合せに基づくサマリー・フォルダの作成方法](#)
- [外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの作成方法](#)

サマリー・フォルダと Discoverer がサマリー・フォルダを自動的に作成およびメンテナンスする方法の詳細は、第 14 章の「サマリー・フォルダの管理」を参照してください。

Discoverer でサマリー・フォルダを手動で作成する前提条件

サマリー・フォルダを作成するには、次の前提条件を満たす必要があります。

- データベースが PL/SQL をサポートしていること。
- サマリー・フォルダの作成とリフレッシュのスケジュールのための DBMS_JOB パッケージがインストールされていること。詳細は、[第 14 章の「サマリー管理のために DBMS_JOB がインストールされていることを確認する方法」](#)を参照してください。
- サマリー・フォルダの作成に使用するユーザー ID には、次のデータベース権限があること。
 - CREATE TABLE
 - CREATE VIEW
 - CREATE PROCEDURE
 - SELECT ON V_\$PARAMETER
 - CREATE/DROP/ALTER ANY MATERIALIZED VIEW (Oracle 8.1.7 以上のデータベース)
 - GLOBAL QUERY REWRITE (Oracle 8.1.7 以上のデータベース)詳細は、[第 14 章の「サマリー・フォルダの作成に必要な権限を付与する方法」](#)を参照してください。
- サマリー・フォルダの作成に使用するユーザー ID には、デフォルト表領域に十分な割当てを保有していること。詳細は、[第 14 章の「表領域割当て制限を決定しリセットする方法」](#)を参照してください。

注意

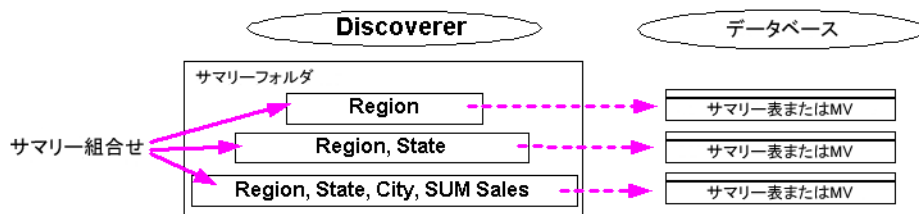
- Oracle 8.1.7 以上のデータベースでデータベース・ユーザーを Discoverer3.1 に作成した場合、データベース・ユーザーはサマリー・フォルダを作成するために付与された追加の権限を保有している必要があります（詳細は、[第 14 章の第 1 項、表 14-1「Discoverer で作成されるデータベース・ユーザーに、サマリー・フォルダを作成するための追加権限が必要になる状況」](#)を参照してください）。
- Discoverer で外部サマリー表を使用する場合、EUL の所有者は次の要件を満たしている必要があります。
 - 外部サマリー表への SELECT アクセス権を保有していること
 - 明示的に（データベース・ロールを経由することなく）SELECT アクセス権を付与されていること

サマリー組合せ

サマリー組合せは、サマリー・フォルダを構成するアイテムのグループです。サマリー組合せは、データベースのサマリー表またはマテリアライズド・ビューに直接マップします。Discoverer は、ユーザーが作成するサマリー組合せに基づいてサマリー表またはマテリアライズド・ビューを作成します。各サマリー組合せは、サマリー・フォルダで複数のアイテムを組み合わせる異なる方法を定義します。Discoverer Desktop/Plus ユーザーが、特定の組合せで指定されたアイテムにかなり一致するアイテムの組合せを含む問合せを実行する場合、ディテール・データのかわりにサマリー表またはマテリアライズド・ビューに対して問合せが実行されます。

サマリー・ウィザードを使用して、各サマリー・フォルダに必要なだけ組合せを定義できます。

図 15-1 サマリー組合せ、サマリー・フォルダ、サマリー表またはマテリアライズド・ビューの関係



複数のサマリー組合せを作成する場合、Discoverer は（可能であれば）低レベルの組合せ（少数のアイテムを含む組合せ）を使用して、高レベルの組合せ（多数のアイテムを含む組合せ）を作成します。これは、次の理由によりパフォーマンスを向上します。

- ディテール表に頻繁に問い合わせる必要がありません。
- サマリー・フォルダは迅速にリフレッシュされます。

たとえば、第 1 の組合せが月、地域、収益、第 2 の組合せが年、地域、収益である 2 つのサマリー組合せをサマリー・フォルダに保有している場合を考えてみます。Discoverer は、ディテール・データに直接アクセスして、月と地域により収益のデータを集計します。次に、Discoverer は第 1 の組合せで集計されたデータを使用して第 2 の組合せのデータを集計し、処理と CPU のオーバーヘッドの両方を省きます。

注意：サマリー組合せは、Discoverer がサマリー・フォルダのリフレッシュを管理する場合のみ使用できます。Discoverer が外部サマリー表を使用する場合、サマリー組合せは使用できません。

サマリー組合せを定義するときに考慮する事項

サマリー組合せを定義するときに考慮するのは次の3点です。

- サマリー・データの格納に必要なデータベース領域の大きさ
- 問合せを実行する速度
- 問合せを実行する頻度

良好なサマリー・フォルダ設計の鍵は、システムの使用パターンに応じて最適なサマリー組合せを作成することにあります。

一般に、問合せは、頻度の高いものであれば、データベース領域がより必要になるとしても、できるだけ高速で実行されることが求められます。一方、頻度の低い問合せであれば、実行速度が遅くなるとしても、使用するデータベース領域ができるだけ少ないことが求められます。

サマリー組合せを作成するときは、次の点を確認します。

- 汎用性があり、頻度の高い問合せに対応するサマリー組合せ

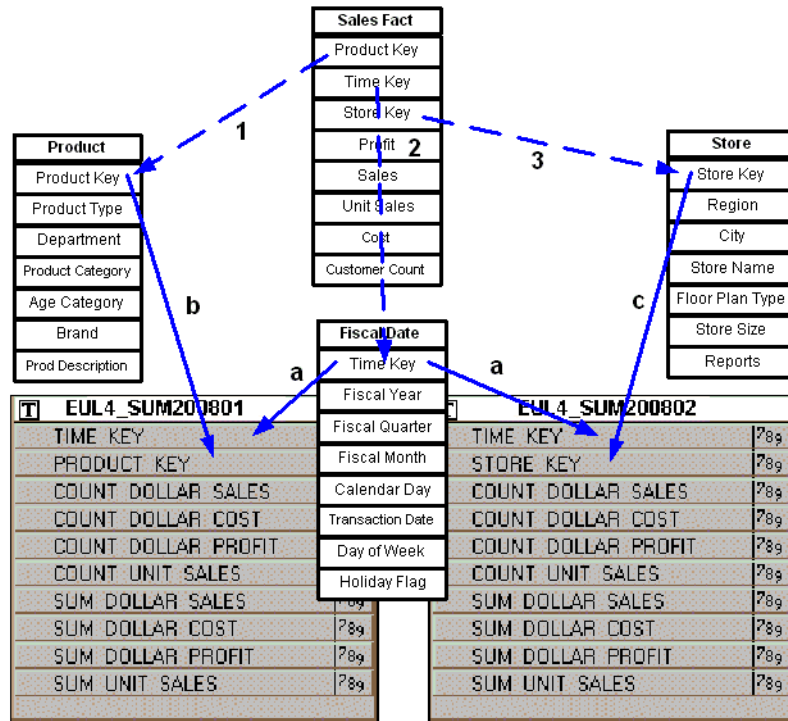
汎用の問合せに対応するサマリー組合せを作成している場合は、使用されるすべてのアイテムと結合を問合せに含めます。このようなサマリー組合せは、かなりのデータベース領域を必要とする場合がありますが、問合せはより高速で実行されます。

- 非定型で頻度の低い問合せに対応するサマリー組合せ

より非定型環境（問合せの予測がきわめて難しい環境）に対応するサマリー組合せは、一般的に主ファクト表のキーの異なる組合せに基づいています。

たとえば、次の2つのサマリー表 EUL4_SUM200801 と EUL4_SUM200802 の列は、Sales Fact フォルダの該当するアイテムにマップされています。

図 15-2 ファクト表とディメンション表に対するサマリー表と結合の例



前述の図では、次のことに注目してください。

表 EUL4_SUM200801 と EUL4_SUM200802 は、Discoverer がデータベースで作成するサマリー表を表しています。

数字 1、2 および 3 は、Sales Fact 表とディメンション表の既存の結合を表しています。

文字 a、b および c は、次のディメンション表に対する結合を表しています。

- a. FISCAL DATE
- b. PRODUCT
- c. STORE

Discoverer は、これらサマリー表の 1 つを 1 つ以上のディメンション表 (STORE、PRODUCT または FISCAL DATE) に結合して、迅速に回答を取得します。要件は、ターゲット・ディメンション表が EUL で定義されたアイテムによりファクト表に結合される必要があることと、サマリー表がファクト・フォルダに外部キー・アイテムを含んでいることです。

ユーザーが Product Category、Month および SUM(Dollar Profit) を要求する場合、Discoverer は EUL4_SUM200801 を PRODUCT と FISCAL DATE に結合して結果を取得します。Discoverer は、SALES_FACT と 2 つの表の間の外部キーと主キーを認識していて、これらを EUL4_SUM200801 に適用できます。

サマリー組合せをセットアップするためのガイドライン

サマリー組合せは、段階的に作成することをお薦めします。最初は頻繁に使用される問合せに、次は頻繁に使用されない問合せに注目し、最後に「キャッチオール」（すべてを集めた）サマリー組合せを作成します。

表 15-1 サマリー組合せをセットアップするためのガイドライン

	アイテムの数	注意
頻繁に使用される問合せ	3-4	3 つまたは 4 つの軸アイテム（ディメンション値）のみを組み合わせる多数のサマリー組合せを作成します。これにより、領域が最小化され、パフォーマンス向上が最大化されます。
頻繁に使用されない問合せ	5-7	たとえば、5 ～ 7 個の軸アイテムを組み合わせた頻繁に使用されないサマリー組合せを作成します。領域がさらに必要になりますが、大幅なパフォーマンス向上が実現します。サマリー組合せでアイテムを多く作成するほど、機能する問合せの種類が増加します。
キャッチオール	すべて	ユーザーが自分でサマリーを指定する場合は、サマリー・フォルダにすべてのアイテム（合計数はソース・フォルダにあるアイテムの数よりも少なくする必要があります）を含む 1 つのサマリー組合せを作成します。問合せ結果の速度は遅くなりますが、それでも、ディテール表への問合せに比べると、パフォーマンスははるかに良好です。Discoverer Administrator は、このサマリー組合せを次のように自動的に作成します。

- すべてのデータ・ポイント・アイテムをすべてのサマリー組合せに含みます。追加のデータ・ポイント・アイテムはサマリー表の領域をほとんど使用しません。
- 集計（使用されることがまれな STDEV と VARIANCE は除く場合もあります）を含みます。複数の集計は多くの領域を必要とせず、パフォーマンスを大幅に向上できます。AVG は、Discoverer が平均を計算するのに使用する SUM と COUNT を含める必要があることに注意してください。

注意

サマリー組合せの階層のすべてのレベルにアイテムを含める必要はありません。最下位レベルにアイテムを含めると、階層の上位にあるアイテムを使用する問合せであってもサマリー

表を使用できます。ただし、これが機能するには、サマリー・フォルダが階層を含むフォルダへの外部キーを含む必要があります。階層のすべてのレベルに対するサマリー組合せを作成しても、達成できるパフォーマンス向上はごくわずかです。たとえば、Year から Quarter までの階層では、集計が節約される割合は 4:1 程度です。これは、四半期を合計して年が計算されるためです。

式がサマリー・フォルダを使用する時期

特定の条件を除き、式はサマリー・フォルダを使用します。このため、式がいつサマリー・フォルダを使用するかを判別できるのは便利です。次の例は、サマリー・フォルダがアイテム SUM(Salary) と SUM(Comm) を含む場合に、式がサマリー・フォルダをいつ使用するかを示しています。

表 15-2 式がサマリー・フォルダをいつ使用するかを示す例

式	サマリー表の使用	注意
SUM(Salary + Comm)	いいえ	この式は、SUM(Salary) と SUM(Comm) がサマリーされたアイテムとして使用可能であってもサマリー・フォルダを使用しません。これは、SUM(Salary + Comm) が SUM(Salary) + SUM(Comm) と関係上同等ではないことから生じます。つまり、結果が間違いになるので、式は使用されません。
SUM(Salary) * 12	はい	このように式を問い合わせることができます。また、SUM(Salary) はサマリーされるので、式はサマリー・フォルダを使用します。
NVL(SUM(Comm),0)	はい	NVL(SUM(Comm),0) などのような SQL 関数を使用する式はサマリーを使用します。これは、SUM(Comm) をサマリーで使用できるからです。
SUM(NVL(Comm,0))	いいえ	SUM(NVL(Comm,0)) などのような式はサマリーを使用しません。これは、式の一部と使用可能なサマリーされたアイテム SUM(Comm) の間で直接一致しないからです。

本質的に、式は、式または式の一部とサマリーされた式が関係上等しい場合のみサマリー・フォルダを使用します。

EUL のアイテムに基づくサマリー・フォルダの作成方法

このオプションを使用して、サマリー・フォルダに含める EUL アイテムの組合せを手動で選択します。

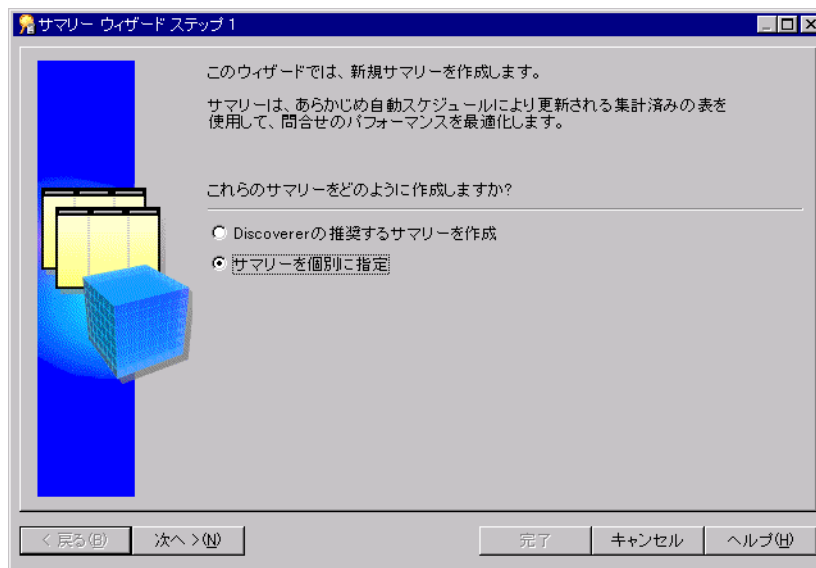
たとえば、次の場合にこのオプションを選択します。

- 「統計の収集」権限をオフに切り替えた場合（詳細は、[第7章の「ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法」](#)を参照してください）。
- サマリー・フォルダを形成する EUL アイテムの組合せを手動で選択する場合。

EUL のアイテムに基づいてサマリー・フォルダを作成する手順は、次のとおりです。

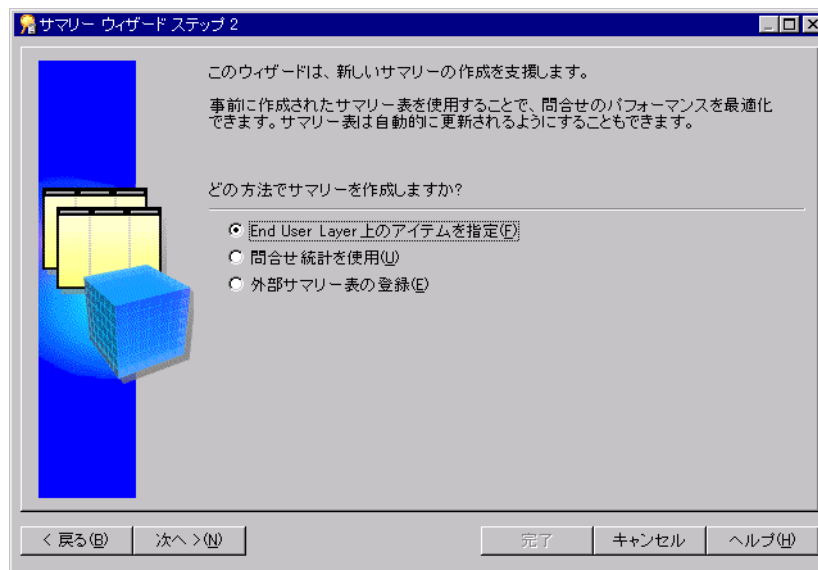
1. 「挿入」→「サマリー」を選択して、「[サマリー ウィザード ステップ 1](#)」ダイアログを表示します。

図 15-3 「サマリー ウィザード ステップ 1」ダイアログ



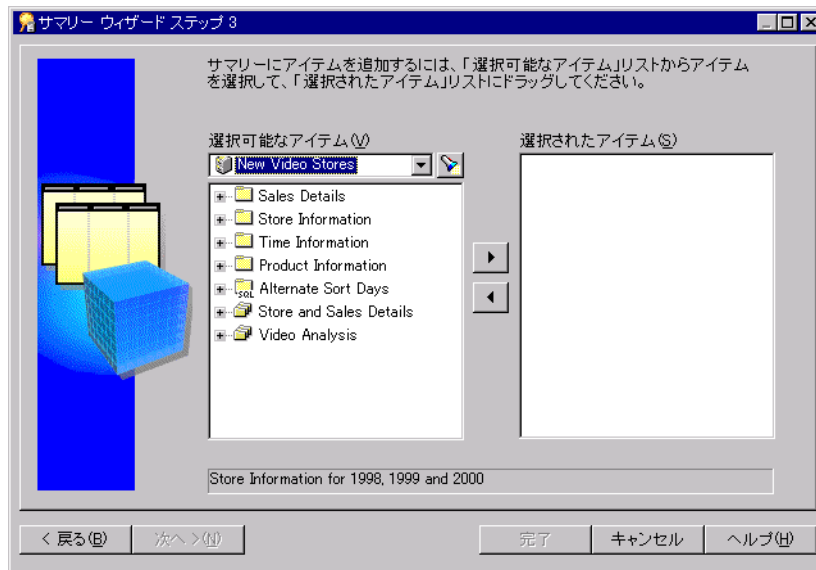
2. 「サマリーを個別に指定」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ」をクリックして「[サマリー ウィザード ステップ 2](#)」ダイアログを表示します。

図 15-4 「サマリー ウィザード ステップ 2」 ダイアログ



3. 「End User Layer 上のアイテムを指定」を選択し、サマリー・フォルダを作成します。
サマリー・フォルダ機能が有効である場合のみ、このオプションを使用できます。詳細は、第 14 章の「サマリー・フォルダのデータベースの構成方法」を参照してください。
4. 「次へ」をクリックし、「サマリー ウィザード ステップ 3」ダイアログを表示します。

図 15-5 「サマリー ウィザード ステップ 3」 ダイアログ



5. 新規サマリー・フォルダに含めるアイテムを「**選択可能なアイテム**」リストから「**選択されたアイテム**」リストに移動します。

同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。

次のものを含めることを覚えておいてください。

- 各データ・ポイント・アイテムのすべての集計関数 — 詳細は、「[サマリー組合せをセットアップするためのガイドライン](#)」を参照してください。
- 複合フォルダからのアイテム（必要な場合） — 詳細は、第 16 章の「[Discoverer によるクエリー・リライトの条件](#)」を参照してください。
- 導出ユーザー定義アイテム（必要な場合） — 詳細は、第 16 章の「[Discoverer によるクエリー・リライトの条件](#)」を参照してください。

注意： 任意のアイテムと関数を選択できます。ただし、異なるフォルダからのアイテムを選択する場合は、フォルダ間にすでに結合が存在する必要があります。

6. 「次へ」をクリックし、「**サマリー ウィザード ステップ 4**」ダイアログを表示して、新規サマリー・フォルダでサマリー組合せを定義します。

図 15-6 「サマリー ウィザード ステップ 4」 ダイアログ



「サマリー ウィザード ステップ 4」ダイアログにより、新規サマリー・フォルダでサマリー組合せを定義できます。

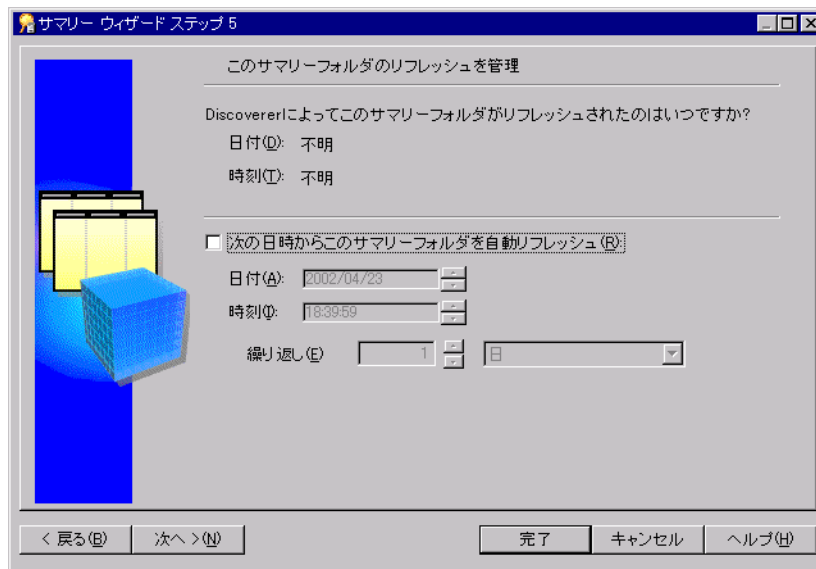
デフォルトでは、「サマリー ウィザード ステップ 3」で選択されたすべてのアイテムは最初のサマリー組合せ（列 0）に含まれます。

7. 「組合せの追加」をクリックし、新規サマリー組合せを追加します。
サマリー組合せは、新しい番号を付けられた列に表示されます。
8. 関連するチェックボックスを選択し、サマリー組合せにアイテムを含めます。
9. 必要なだけサマリー組合せを追加します。
詳細は、「[サマリー組合せ](#)」を参照してください。

ヒント:

- 指定したサマリー組合せを使用して提供されるパフォーマンス向上に対して、サマリー組合せが占める表領域サイズによる重要度が大きいかどうか明確でない場合は「見積り」をクリックします。
 - 「プロパティ」をクリックして、選択したサマリー組合せのデータベース記憶領域プロパティを表示および編集できます。詳細は、「[サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶領域プロパティを編集する方法](#)」を参照してください。
 - 不要なサマリー組合せを削除するには、関連する列番号を選択し、「組合せの削除」をクリックします。
10. 「次へ」をクリックし、「サマリー ウィザード ステップ 5」ダイアログを表示して、サマリー・フォルダのリフレッシュ・スケジュールを指定します。

図 15-7 「サマリー ウィザードステップ 5」ダイアログ



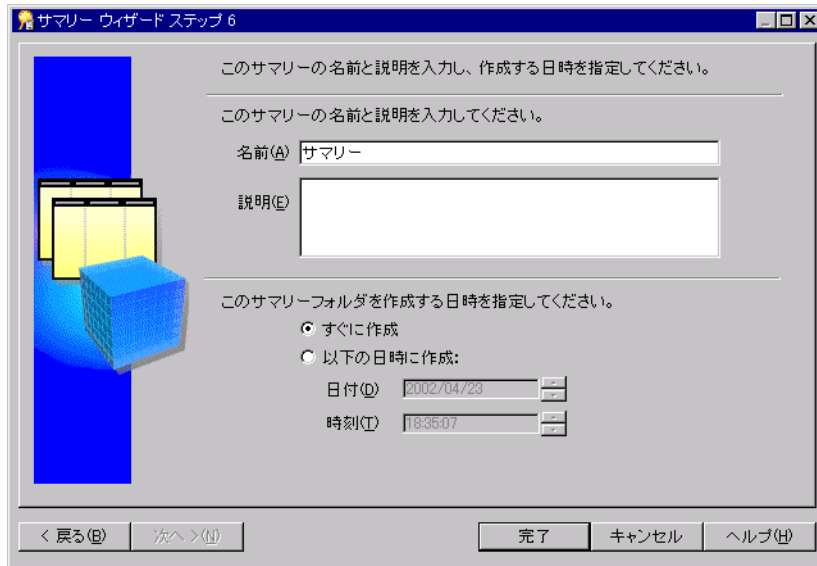
11. 「次の日時からこのサマリー・フォルダを自動リフレッシュ」チェックボックスを選択し、Discoverer がこのサマリー・フォルダを自動的にリフレッシュする日付、時刻および頻度を指定します。

ヒント: データが静的で変化しない場合またはサマリー・フォルダを手動でリフレッシュする場合は、このチェックボックスを選択しないでください。手動でサマリー・フォルダをリフレッシュする方法の詳細は、「[サマリー・フォルダの手動によるリフレッシュ方法](#)」を参照してください。

12. Discoverer が最初にリフレッシュする日付と時刻を設定します。
13. 必要なリフレッシュ間隔に「繰り返し」フィールドを設定します。

ここで指定するリフレッシュ間隔は、Discoverer がデータをリフレッシュおよび更新する間隔です。このパターンは、設定を変更するまで変わりません。
14. 「次へ」をクリックし、「サマリー ウィザード ステップ 6」ダイアログを表示します。

図 15-8 「サマリー ウィザード ステップ 6」ダイアログ



15. サマリー・フォルダの名前と説明を指定します。
16. このサマリー・フォルダをいつ作成するか次のように指定します。
 - 小規模なサマリー表を保有している場合またはサマリー表をすぐに作成する場合は、「すぐに作成」ラジオ・ボタンを選択します。
 - オフピーク時間に作成するのが最適な大規模なサマリー表を保有している場合は、「以下の日時に作成:」ラジオ・ボタンを選択します。サマリー表を作成する時刻と日付を作成します。
17. 「完了」をクリックします。

Discoverer は、サマリー・フォルダを作成するときに次のものを作成します。

- サマリー・フォルダとサマリー表 (Oracle 8.1.5 データベース以下)
- サマリー・フォルダとマテリアライズド・ビュー (Oracle 8.1.6 データベース以上)

作成プロセスはサマリー・データを生成し、使用準備完了としてサマリー表またはマテリアライズド・ビューにマークを付けます。

プロセスが完了すると、Discoverer は「ワークエリア」:「サマリー」タブに新規サマリー・フォルダを表示します。

ユーザーの問合せに基づくサマリー・フォルダの作成方法

問合せパフォーマンス統計は、ユーザーに対して「統計の収集」権限がオンに切り替えられたときに自動的に生成されます（詳細は、第7章の「ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法」を参照してください）。

アイテムをユーザー自身で選択するのではなく、問合せパフォーマンス統計に基づいて新規サマリー・フォルダを作成できます。Discoverer は、Discoverer エンド・ユーザーの問合せから生成された問合せパフォーマンス統計に基づいてサマリー・フォルダ・アイテムを薦めます。

特定の問合せに基づいて1つ以上のサマリー・フォルダを作成し、必ずしも Discoverer に他のサマリー・フォルダを作成させない場合はこのオプションを選択します。

問合せパフォーマンス統計に基づくサマリー・フォルダを作成する手順は、次のとおりです。

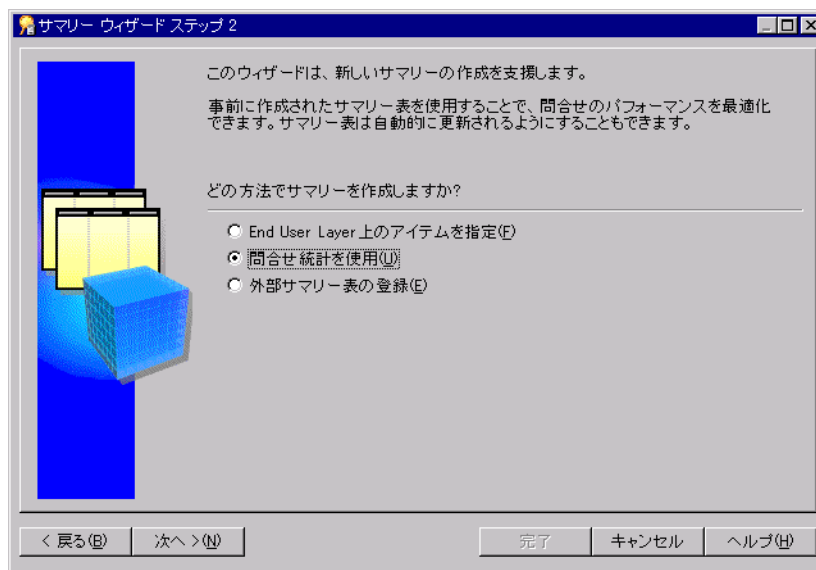
1. 「挿入」→「サマリー」を選択し、「サマリー ウィザード ステップ1」ダイアログを表示します。

図 15-9 「サマリー ウィザード ステップ 1」 ダイアログ



2. 「サマリーを個別に指定」 ラジオ・ボタンを選択し、「次へ」をクリックして「サマリー ウィザード ステップ 2」ダイアログを表示します。

図 15-10 「サマリー ウィザード ステップ 2」 ダイアログ

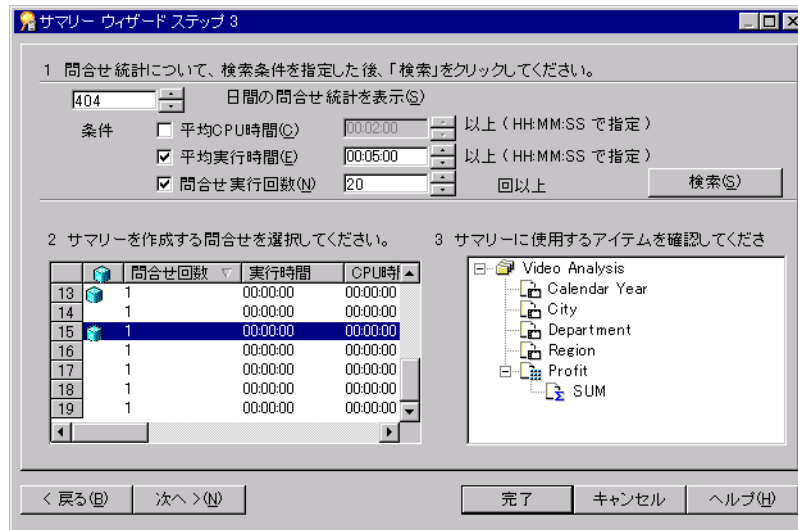


3. 「問合せ統計を使用」オプションを選択します。

このオプションにより、サマリー表またはマテリアライズド・ビューが作成されます。このオプションは、サマリー管理機能が有効な場合のみ使用できます。詳細は、[第 14 章の「サマリー・フォルダのデータベースの構成方法」](#)を参照してください。

4. 「次へ」をクリックし、「サマリー ウィザード ステップ 3」ダイアログを表示します。

図 15-11 「サマリー ウィザード ステップ 3」 ダイアログ



「サマリー ウィザード ステップ 3」 ダイアログは、3つのセクションに分かれています。

セクション1ー **問合せ統計について、検索条件を指定した後、「検索」をクリックしてください。**

このセクションにより、検索条件を指定し、問合せパフォーマンスの統計を取得できます。

セクション2ー **サマリーを作成する問合せを選択してください。**

このセクションは、検索条件に一致する問合せを表示します。

セクション3ー **サマリーに使用するアイテムを確認してください。**

このセクションは、選択された問合せのフォルダ、結合およびアイテムを表示します。

5. 問合せの検索に使用する前に実行した値をセクション1に指定します。

6. 「検索」をクリックします。

検索時間が長くなる場合、Discoverer は進行状況を示すバーを表示します。

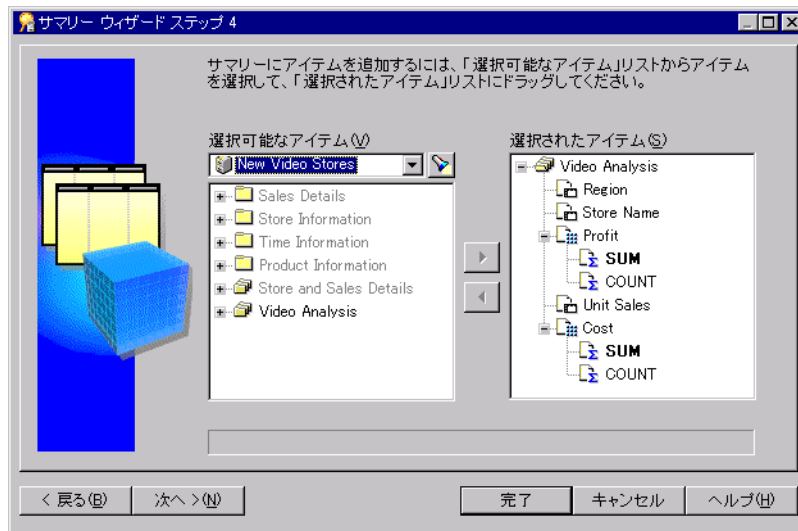
セクション1のしきい値に一致するすべての問合せは、セクション2に表示されます。このリストをさらに絞り込んだり拡張するには、しきい値を再度指定します。

リストの問合せが、すでにサマリーを作成されたアイテムを使用する場合は、問合せの横に立方形のアイコンが表示されます。

セクション 2 の列にあるアイテムの表示順序をソートするには、関連する列ヘッダーをクリックします。

7. サマリーを作成する問合せを表す行をセクション 2 のリストから選択します。
問合せのフォルダ、結合およびアイテムがセクション 3 に表示されます。
8. 「次へ」をクリックし、「サマリー ウィザード ステップ 4」ダイアログを表示します。

図 15-12 「サマリー ウィザード ステップ 4」ダイアログ



「サマリー ウィザード ステップ 4」ダイアログにより、サマリー・フォルダに含めるアイテムを選択できます。デフォルトでは、「選択されたアイテム」リストに、サマリー・ウィザードの前のページで選択した問合せからのアイテムが含まれています。

9. 新規サマリー・フォルダに含めるアイテムを「選択可能なアイテム」リストから「選択されたアイテム」リストに移動します。

同時に複数のアイテムを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のアイテムをクリックします。

次のものを含めることを覚えておいてください。

- 各データ・ポイント・アイテムのすべての集計関数（詳細は、「サマリー組合せをセットアップするためのガイドライン」を参照）
- 必要な場合、複合フォルダからのアイテム（詳細は、第 16 章の「Discoverer によるクエリー・リライトの条件」を参照）

- 必要な場合、導出ユーザー定義アイテム（詳細は、[第 16 章の「Discoverer によるクエリー・ライトの条件」](#)を参照）

注意：任意のアイテムと関数を選択できます。ただし、異なるフォルダからのアイテムを選択する場合は、フォルダ間にすでに結合が存在する必要があります。

10. 「次へ」をクリックし、「サマリー ウィザード ステップ 5」ダイアログを表示します。

図 15-13 「サマリー ウィザード ステップ 5」ダイアログ



「サマリー ウィザード ステップ 5」ダイアログにより、新規サマリー・フォルダでサマリー組合せを定義できます。

デフォルトでは、「サマリー ウィザード ステップ 4」で選択されたすべてのアイテムは最初のサマリー組合せ（列 0）に含まれます。

11. 「組合せの追加」をクリックし、新規サマリー組合せを追加します。
サマリー組合せは、新しい番号を付けられた列に表示されます。
12. 関連するチェックボックスを選択し、新規サマリー組合せにアイテムを含めます。
13. 必要なだけサマリー組合せを追加します。
詳細は、「[サマリー組合せ](#)」を参照してください。
14. 「見積り ...」をクリックし、指定したサマリー組合せを使用して提供されるパフォーマンス向上に対して、サマリー組合せが占める表領域サイズの重要度が大きいかどうかを判断できます。

15. 「OK」をクリックします。

注意：「プロパティ ...」をクリックして、選択したサマリー組合せのデータベース記憶領域プロパティを表示および編集できます。詳細は、「[サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶領域プロパティを編集する方法](#)」を参照してください。

ヒント：不要なサマリー組合せを削除するには、関連する列番号を選択し、「組合せの削除」をクリックします。

16. 「次へ」をクリックし、「[サマリー ウィザード ステップ 6](#)」ダイアログを表示して、サマリー・フォルダのリフレッシュ・スケジュールを指定します。

図 15-14 「サマリー ウィザード ステップ 6」ダイアログ



17. 「次の日時からこのサマリーフォルダを自動リフレッシュ：」チェックボックスを選択し、このサマリーの自動リフレッシュの日付、時刻および頻度を指定します。

ヒント：データが静的で変化しない場合またはサマリー・フォルダを手動でリフレッシュする場合は、このチェックボックスを選択しないでください。手動でサマリー・フォルダをリフレッシュする方法の詳細は、「[サマリー・フォルダの手動によるリフレッシュ方法](#)」を参照してください。

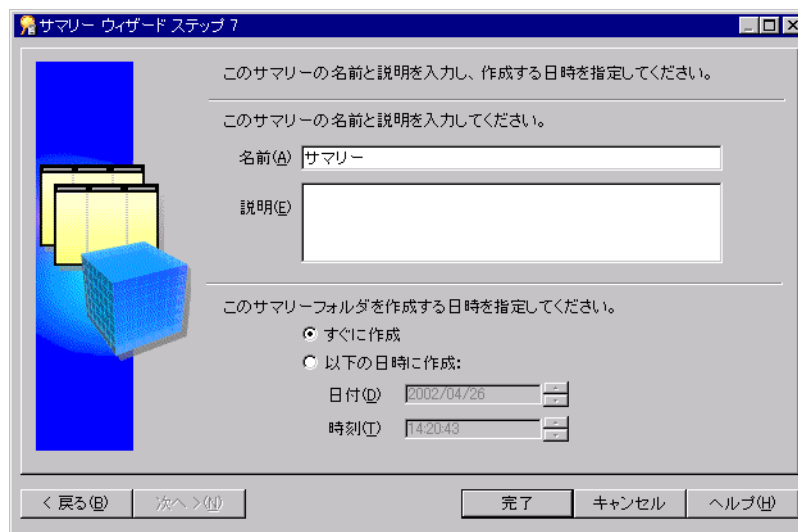
18. Discoverer が最初にリフレッシュする「日付：」と「時刻：」を設定します。

19. 必要なリフレッシュ間隔に「繰り返し」フィールドを設定します。

ここで指定するリフレッシュ間隔は、Discoverer がデータをリフレッシュおよび更新する間隔です。このパターンは、設定を変更するまで変わりません。

20. 「次へ」をクリックし、「サマリー ウィザード ステップ 7」ダイアログを表示します。

図 15-15 「サマリー ウィザード ステップ 7」ダイアログ



21. サマリー・フォルダの名前と説明を指定します。

22. このサマリー・フォルダをいつ作成するかを指定します。

23. 「完了」をクリックします。

Discoverer は、サマリー・フォルダを作成するときに次のものを作成します。

サマリー・フォルダとサマリー表 (Oracle 8.1.5 データベース以下)

サマリー・フォルダとマテリアライズド・ビュー (Oracle 8.1.6 データベース以上)

作成プロセスは、サマリー・データを生成し、使用準備完了としてサマリー表またはマテリアライズド・ビューにマークを付けます。

プロセスが完了すると、Discoverer は「ワークエリア」:「サマリー」タブに新規サマリー・フォルダを表示します。

注意

Discoverer が提供する問合せ統計の収集用ビジネスエリアには、次のものを分析するワークブックが付属しています。

- 問合せの使用方法
- 問合せで最も頻繁に使用されるアイテム

- アイテムを含んでいるフォルダ
- 問合せの実行回数

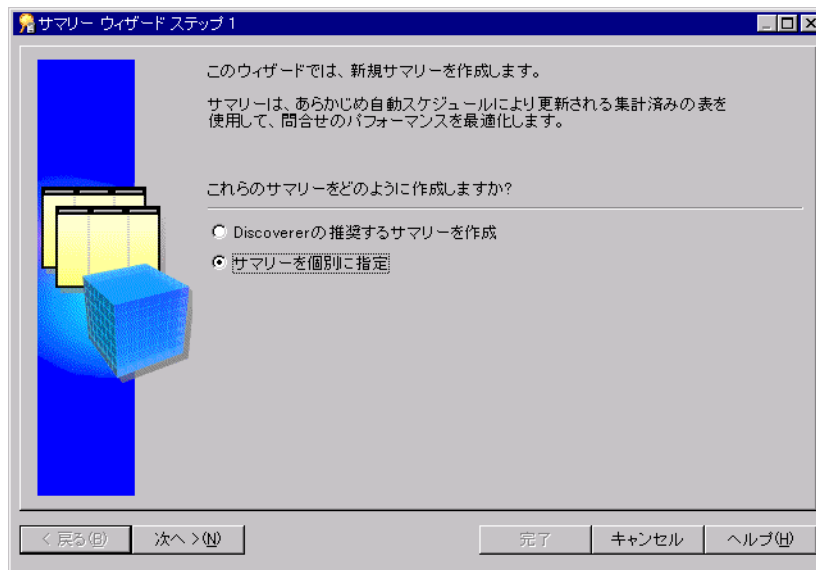
外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの作成方法

Discoverer 以外のアプリケーションにより作成されたサマリー表に基づいて新規サマリー・フォルダを作成する方法について説明します。Discoverer 以外のアプリケーションによって作成されたサマリー表を外部サマリー表といいます。この作業は、外部ビューに基づくサマリー・フォルダの作成にも適用されることに注意してください。

外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「挿入」→「サマリー」を選択し、「サマリー ウィザード ステップ 1」ダイアログを表示します。

図 15-16 「サマリー ウィザード ステップ 1」ダイアログ



2. 「サマリーを個別に指定」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ」をクリックして「サマリー ウィザード ステップ 2」ダイアログを表示します。

図 15-17 「サマリー ウィザード ステップ 2」 ダイアログ



3. 「外部サマリー表の登録」ラジオ・ボタンを選択します。

この作業の完了により、データベースは外部アプリケーションによって作成されたサマリー表からマテリアライズド・ビューを作成します。

Discoverer は、次の条件下でサマリー表の作成を続行することに注意してください。

- Oracle 8.1.5 以下のデータベースに対して Discoverer を実行する場合。
詳細は、第 16 章の「外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの違い」を参照してください。
- Oracle 8.1.7 以上のデータベースで、外部ビューを EUL アイテムにマップする場合。
詳細は、第 16 章の「Oracle 8.1.7 以上のデータベースで外部サマリー表とビューを EUL アイテムにマッピングする場合の違い」を参照してください。

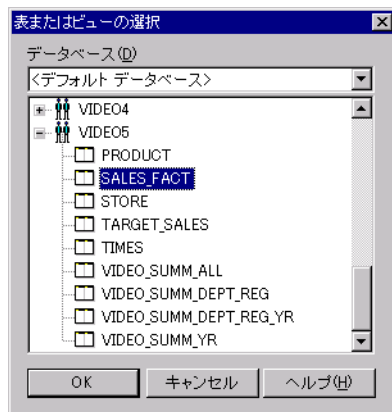
4. 「次へ」をクリックし、「サマリー ウィザード ステップ 3」ダイアログを表示します。

図 15-18 「サマリー ウィザード ステップ 3」 ダイアログ



5. 「選択 ...」 をクリックし、「表またはビューの選択」ダイアログを表示します。

図 15-19 「表またはビューの選択」 ダイアログ

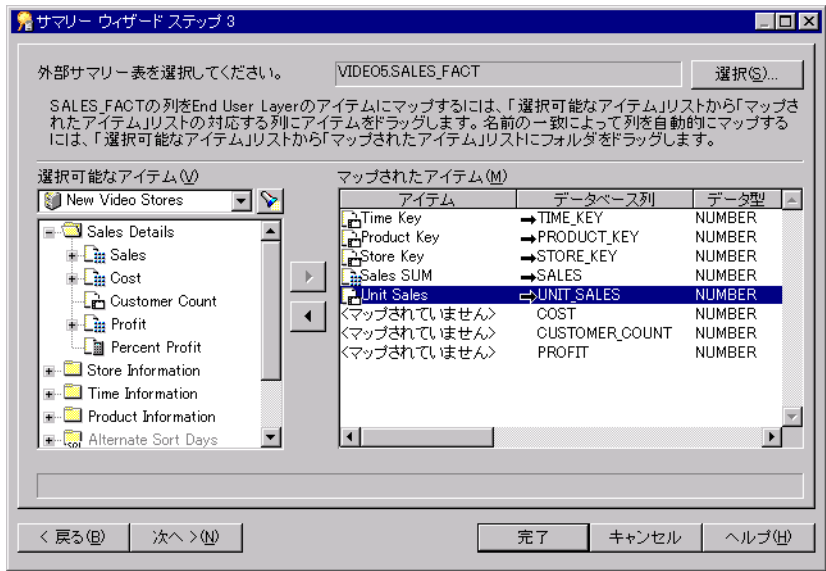


6. 登録する外部サマリー表を含むデータベースを（ドロップダウン・リストから）選択します。

注意：Oracle 8.1.7 以上のデータベースに接続した場合、ユーザーはデータベース・リンクを経由して外部サマリーを登録できません。これは、データベース・リンクを経由してマテリアライズド・ビューが作成されるのをデータベースが許可しないからです。ただし、EUL が存在し、ビューの外部サマリーを参照しているデータベースにビューを作成する場合はマテリアライズド・ビューが作成される場合があります。このビューは、Discoverer 内に外部サマリーとして登録できます。

- 7. Discoverer Administrator で登録する外部サマリー表を選択します。
- 8. 「OK」をクリックし、マップされたアイテム・リストの外部サマリー表で検索されたすべてのデータベース列を表示します。

図 15-20 「サマリー ウィザード ステップ 3」 ダイアログ



外部サマリー表の各データベース列を EUL の該当するアイテムにマップします。

- 9. 各データベース列について、該当するアイテムを「選択可能なアイテム」リストから「マップされたアイテム」リストのデータベース列にドラッグします。
- ヒント：**同じフォルダからの複数のアイテムが外部サマリー表の列に対応する場合、フォルダを「マップされたアイテム」リストのアイテムにドラッグ・アンド・ドロップできます。Discoverer Administrator は、アイテム名を使用して、正しいアイテムをデータベース列にマップします。Discoverer Administrator が対応するアイテムを識別できない列については、アイテムをマップする必要があります。

ヒント: 外部サマリー表のデータベース列と EUL のアイテムとの間のマッピングを削除するには、「マップされたアイテム」リストの該当する列を選択し、左矢印ボタンをクリックします。

10. 「次へ」をクリックし、「サマリー ウィザード ステップ 4」ダイアログを表示して、サマリー・フォルダのリフレッシュ・スケジュールを指定します。

図 15-21 「サマリー ウィザード ステップ 4」ダイアログ



11. Discoverer にこの外部サマリー表のリフレッシュを管理させる場合は、「このサマリーフォルダのリフレッシュを管理」チェックボックスを選択します。

12. 「次の日時からこのサマリーフォルダを自動リフレッシュ:」チェックボックスを選択し、このサマリーの自動リフレッシュの日付、時刻および頻度を指定します。

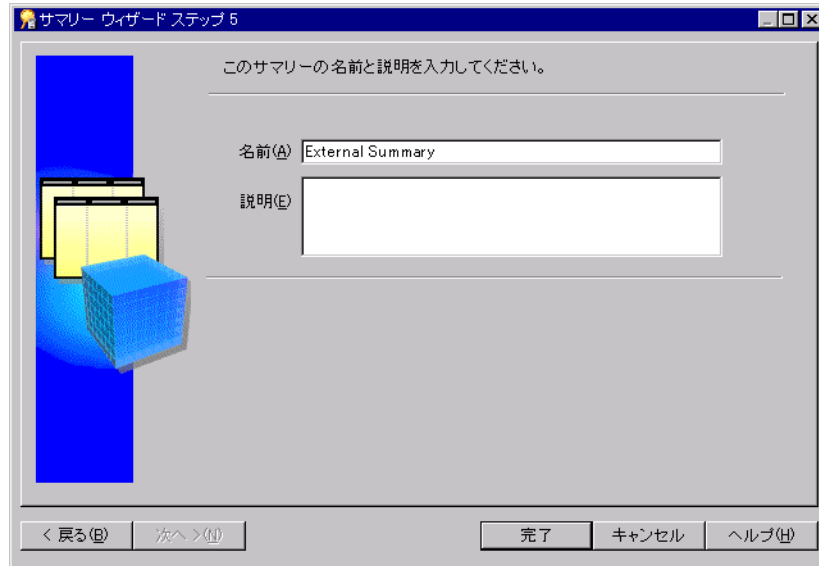
ヒント: データが静的で変化しない場合またはサマリー・フォルダを手動でリフレッシュする場合は、このチェックボックスを選択しないでください。手動でサマリー・フォルダをリフレッシュする方法の詳細は、「サマリー・フォルダの手動によるリフレッシュ方法」を参照してください。

13. Discoverer が最初にリフレッシュする「日付:」と「時刻:」を設定します。
14. 必要なリフレッシュ間隔に「繰り返し」フィールドを設定します。

ここで指定するリフレッシュ間隔は、Discoverer がデータをリフレッシュおよび更新する間隔です。このパターンは、設定を変更するまで変わりません。

15. 「次へ」をクリックし、「サマリー ウィザード ステップ 5」ダイアログを表示します。

図 15-22 「サマリー ウィザード ステップ 5」ダイアログ



16. サマリー・フォルダの名前と説明を指定します。
17. 「完了」をクリックし、ビジネスエリアにサマリー・フォルダを作成して外部サマリー表を Discoverer で登録します。
- プロセスが完了すると、Discoverer は「ワークエリア」:「サマリー」タブに新規サマリー・フォルダを表示します。

注意

サマリー組合せは、Discoverer がサマリー・フォルダのリフレッシュを管理する場合のみ使用できます。Discoverer が外部サマリー表を使用する場合、サマリー組合せは使用できません。

サマリー・フォルダの手動によるリフレッシュ方法

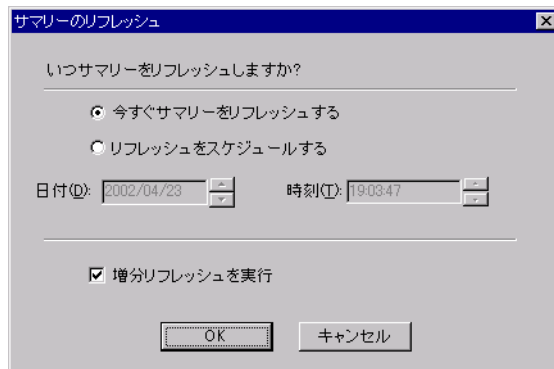
サマリー・フォルダをリフレッシュする方法について説明します。データベースが変更された場合は、サマリー・フォルダをリフレッシュする場合があります。

サマリー・フォルダを手動でリフレッシュする手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「サマリー」タブで、リフレッシュするサマリー・フォルダを選択します。
2. 「ツール」→「サマリーのリフレッシュ」を選択し、「サマリーのリフレッシュ」ダイアログを表示します。

注意: Discoverer は、外部管理サマリー・フォルダについては「サマリーのリフレッシュ」ダイアログを表示しません。

図 15-23 「サマリーのリフレッシュ」ダイアログ



3. 選択したサマリー・フォルダをいつリフレッシュするかを次のように指定します。
 - すぐにサマリー・フォルダをリフレッシュする場合は、「今すぐサマリーをリフレッシュする」ラジオ・ボタンを選択します。
 - 指定した時刻にサマリー・フォルダをリフレッシュする場合は、「リフレッシュをスケジュールする」ラジオ・ボタンを選択します。
4. 「リフレッシュをスケジュールする」を選択した場合は、リフレッシュを開始する日付と時刻を指定します。

5. 増分リフレッシュを実行するには、「増分リフレッシュを実行」チェックボックスを選択します。

データベース表のディテール・データが前回のリフレッシュから少し変更された場合に、増分リフレッシュを実行する場合があります。増分リフレッシュは、前回のリフレッシュからデータベースにコミットされた変更のみを更新するので、このリフレッシュを実行すると時間が節約されます。

増分リフレッシュに必要な条件の詳細は『Oracle9i データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。

注意

- Discoverer 外の処理が完了したときに（データ・ウェアハウスにデータをロードするなど）サマリー・フォルダをリフレッシュする場合があります。Discoverer のコマンドライン・インタフェース・オプションを使用して、バッチ・コマンド・ファイルからサマリー・フォルダをリフレッシュできます（詳細は第 21 章の「[/refresh_summary](#)」を参照してください）。

サマリー・フォルダ・リフレッシュの詳細は、次を参照してください。

- 第 16 章「[Oracle 8.1.7 以上のデータベースのリフレッシュ・オプションについて](#)」
- 第 16 章「[Oracle データベース間のインポートに続くサマリー・フォルダのリフレッシュについて](#)」

サマリー・フォルダのプロパティの編集方法

サマリー・フォルダのプロパティの編集方法について説明します。

サマリー・フォルダのプロパティを編集する手順は、次のとおりです。

- 1. 「ワークエリア」:「サマリー」タブで、1つ以上のサマリー・フォルダを選択します。
- 2. 「編集」→「プロパティ」を選択し、「サマリー プロパティ」ダイアログを表示します。

図 15-24 「サマリー プロパティ」ダイアログ



ヒント：同時に複数のサマリー・フォルダを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のサマリー・フォルダをクリックします。選択したすべてのフォルダが特定のプロパティに同じ値を持つ場合は、その値が表示されます。選択したフォルダが特定のプロパティに異なる値を持つ場合、そのプロパティの値は表示されません。ここで加えた変更は、選択したすべてのサマリー・フォルダに適用されます。

- 3. 必要な変更を行います。
- 4. 「OK」をクリックして変更内容を保存します。

サマリー・フォルダの編集方法

サマリー・フォルダを変更して、次の操作を行う場合があります。

- サマリー・フォルダの名前または説明の変更
- サマリー・フォルダのプロパティの表示または変更
- サマリー・フォルダのリフレッシュ
- サマリー・フォルダの構成内容の変更（アイテムまたは組合せなど）
- データベース記憶領域プロパティの表示または変更
- 破損したサマリー・フォルダの構成内容の調査と破損したフォルダの削除

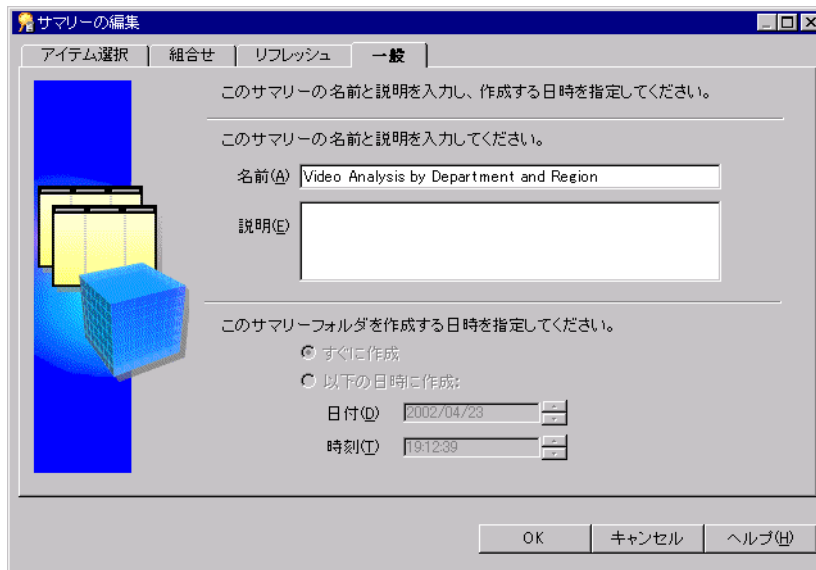
注意

サマリー・フォルダは、有効であるかまたは破損しているかにかかわらず変更できます。

サマリー・フォルダを編集する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「サマリー」タブを表示します。
2. ビジネスエリアの横の「+」記号を選択し、使用可能なサマリー・フォルダを表示します。
3. (オプション)「表示」→「フォルダの妥当性チェック」を選択し、必要により診断フォルダ情報を表示します。
4. サマリー・フォルダをクリックし、「編集」→「編集 ...」を選択します。

図 15-25 「サマリーの編集」ダイアログ:「一般」タブ



5. 必要に応じてサマリー・フォルダを編集します。

「サマリーの編集」ダイアログは、4つのタブに分かれています。各タブは、サマリー・ウィザードのステップに次のように対応しています。

- 「サマリーの編集」ダイアログ:「アイテム選択」タブ — このタブを使用して、サマリー・フォルダのアイテムを指定します。
- 「サマリーの編集」ダイアログ:「組合せ」タブ — このタブを使用して、サマリー組合せを編集、追加または削除します。このタブを使用して、マテリアライズド・ビューまたはサマリー表（データベースのバージョンに応じて異なります）のデータベース記憶領域を表示および構成することも可能です。

注意:「組合せ」タブは、外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダには表示されません。

- 「サマリーの編集」ダイアログ:「リフレッシュ」タブ — このタブを使用して、サマリー・フォルダのリフレッシュとリフレッシュ間隔を設定します。
- 「サマリーの編集」ダイアログ:「一般」タブ — このタブを使用して名前と説明を編集し、サマリー・フォルダの作成時刻を表示します。

6. 「OK」をクリックします。

注意

- サマリー・フォルダが破損している場合は、「表示」→「フォルダの妥当性チェック」を選択し、サマリー・フォルダ内のフォルダのステータスを表示できます。Discoverer がサマリー・フォルダ内のフォルダで問題を検出した場合は、フォルダの横にエラー・メッセージが表示されます。
- 編集に続いてサマリー・フォルダが破損したままである場合は、Discoverer での変更はマテリアライズド・ビューまたはサマリー表に書き込まれません。編集に続いてサマリー・フォルダが有効である場合は、Discoverer での変更もマテリアライズド・ビューまたはサマリー表に書き込まれます。

サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶領域プロパティを編集する方法

Discoverer Administrator を使用してデータベース記憶領域を編集し、(サマリー・フォルダの) サマリー組合せがデータベースに格納される方法を制御できます。

注意: データベース記憶領域プロパティは、外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダには使用できません。

詳細は、[第 16 章の「外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの違い」](#)を参照してください。

サマリー・フォルダのサマリー組合せのデータベース記憶領域プロパティを編集する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」: 「サマリー」タブからサマリー・フォルダを選択します。
2. 「編集」→「編集 ...」を選択し、「サマリーの編集」ダイアログを表示します。
3. 「サマリーの編集」ダイアログ: 「組合せ」タブを表示します。
4. 編集するデータベース記憶領域プロパティを含むサマリー組合せを選択します。
5. 「プロパティ」をクリックし、「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログを表示します (詳細は、「[「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: タブのリスト](#)」を参照してください)。
6. 該当するタブを表示して、必要により値を編集します。

「データベースの記憶領域のプロパティ」ダイアログのタブの詳細は、次を参照してください。

- 「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: 「プロパティ」タブ
- 「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: 「マッピング」タブ
- 「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: 「表領域」タブ
- 「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: 「8i プロパティ」タブ

サマリー・フォルダの削除方法

サマリー・フォルダを削除する編集方法について説明します。サマリー・フォルダを削除する場合は、基礎となるサマリー表またはマテリアライズド・ビューも削除されます。

サマリー・フォルダを削除する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「サマリー」タブから、削除するサマリー・フォルダを選択します。

ヒント:同時に複数のサマリー・フォルダを選択するには、[Ctrl] キーを押しながら別のサマリー・フォルダをクリックします。

2. 「編集」→「削除」を選択し、「削除の確認」ダイアログを表示します。

このサマリー・フォルダの削除による影響を受ける可能性のあるオブジェクトを確認できます。

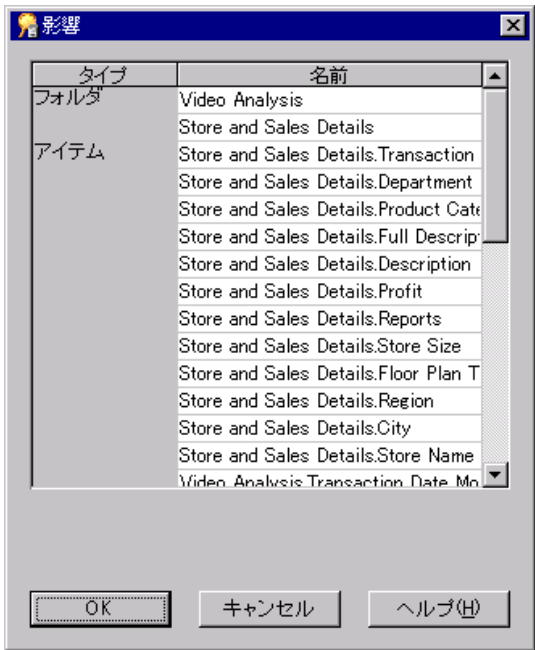
3. (オプション) 削除の潜在的な影響を表示する手順は、次のとおりです。

- a. 「影響 ...」をクリックして、「影響」ダイアログを表示します。

「影響」ダイアログは、削除により影響を受ける可能性がある他のオブジェクトを表示します。

- b. (オプション) 行を選択すると、現在の処理が EUL オブジェクトに与える影響を示すテキストが表示されます。

図 15-26 「影響」 ダイアログ



- c. サマリー・フォルダの削除による影響を確認した後、「OK」をクリックして、「影響」ダイアログを閉じます。
4. 選択したサマリー・フォルダを削除する場合は、「はい」をクリックします。

Discoverer Administrator は、選択したサマリー・フォルダを EUL から削除し、サマリー表またはマテリアライズド・ビューをデータベースから削除します。

サマリー・フォルダのサマリー表またはマテリアライズド・ビューのステータスを表示する方法

サマリー・フォルダのサマリー表またはマテリアライズド・ビューのステータスを表示する方法について説明します。

サマリー・フォルダのサマリー表またはマテリアライズド・ビューのステータスを表示する手順は、次のとおりです。

1. 「ワークエリア」:「サマリー」タブから、必要なサマリー表またはマテリアライズド・ビューを含むサマリー・フォルダを選択します。
2. 「編集」→「編集...」を選択し、「サマリーの編集」ダイアログを表示します。
3. 「サマリーの編集」ダイアログ:「組合せ」タブを表示します。
4. 必要なサマリー表またはマテリアライズド・ビューに該当する、サマリー組合せの番号付き列ヘッダーを選択します。

ダイアログ下部のステータス・バーに、サマリー表またはマテリアライズド・ビューのステータスが表示されます。

5. サマリー表またはマテリアライズド・ビューのステータスの表示（サマリー組合せにより表示）を完了した時点で、「OK」をクリックし、「サマリーの編集」ダイアログを閉じます。

注意

このステータスは、外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダには使用できません。

「ワークエリア」:「サマリー」タブで他の診断情報を確認するには、「表示」→「フォルダの妥当性チェック」オプションを選択します。このオプションにより、サマリー・フォルダ内に存在するエラーが表示されます。

フォルダとサマリー・ステータス・メッセージの確認の詳細は次を参照してください。

- 「サマリー プロパティ」ダイアログ
- 第5章「ビジネスエリアにおけるフォルダの検証方法」

サマリー・フォルダに関する追加情報

サマリー・フォルダに関する追加情報

この章では、Discoverer のサマリー・フォルダに関する追加情報を提供します。この章のトピックは次のとおりです。

- Discoverer でのサマリー表およびマテリアライズド・ビューの使用の現状と将来
- クエリー・リライト
- Discoverer によるクエリー・リライトの条件
- Discoverer での SQL とクエリー・リライトの実行計画の表示について
- Discoverer で「SQL インспекター」ダイアログに SQL を表示する方法の構成について
- (Discoverer で) マテリアライズド・ビューを使用 / 使用しない実行計画の例
- Discoverer がクエリー・リライトする場合の SQL の例
- クエリー・リライトしてサマリー表を使用するメリットを示す例
- Oracle 8.1.5 以下のデータベースと Oracle 8.1.7 以上のデータベースのサマリー・フォルダの特性の違い
- 外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの違い
- Oracle 8.1.7 以上のデータベースで外部サマリー表とビューを EUL アイテムにマッピングする場合の違い
- Oracle 8.1.7 以上のデータベースのリフレッシュ・オプションについて
- Oracle データベース間のインポートに続くサマリー・フォルダのリフレッシュについて

Discoverer でのサマリー表およびマテリアライズド・ビューの使用の現状と将来

Discoverer では、クエリー・リライトし、サマリー表を使用する概念が考案されました。オラクル社は、サマリー表を作成し、SQL に自動的にリライトさせるアイデアの特許を獲得しました。

この機能がすべてのデータベース・ユーザーに便利であることが明確になったため、Oracle ではこの機能をデータベースに取り入れました。Discoverer では、可能な場合は必ずマテリアライズド・ビューとクエリー・リライトを使用します。そうでない場合でも、Discoverer のサマリー表に対する従来のクエリー・リライトもサポートしています。

長期的な方向としては、サーバーのクエリー・リライト機能を使用して作業し、徐々に Discoverer 固有の機能をなくしていきます。

クエリー・リライト

Discoverer は次のデータベース条件下でクエリー・リライトを使用します。

- Oracle 8.1.7 以上のデータベースでは、Discoverer はデータベースに問合せを送信し、データベースはディテール・データ表にアクセスすることなく、その問合せに適したマテリアライズド・ビューの存在の有無を判定します。存在する場合、データベースはクエリー・リライトし、マテリアライズド・ビューを使用します。
- Oracle 8.1.5 以下のデータベースでは、Discoverer はディテール・データ表にアクセスすることなく、クエリー・リライトして適切なサマリー表を使用します。

Oracle 8.1.7 以上のデータベースでビューを EUL のアイテムにマッピングする場合、Discoverer はクエリー・リライトして適切なサマリー表を使用します。

クエリー・リライトは、Discoverer エンド・ユーザーにとって透過的であり、ディテール表に対して実行する問合せと同じ結果を提供しますが、それよりも大幅に短い時間で結果を返します。

注意：クエリー・リライトを使用する前に、Discoverer Desktop/Plus でサマリー・フォルダを使用するオプションを設定する必要があります（詳細は『Oracle9i Discoverer Desktop ユーザーズ・ガイド』または『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください）。

Oracle 8.1.7 以上のデータベースのリライト・シナリオに関する規則の詳細は『Oracle9i データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。

Discoverer によるクエリー・リライトの条件

Discoverer は、次のすべての条件を満たす場合、クエリー・リライトして、ディテール・データではなくサマリー表を使用します。

- 問合せで指定されたすべてのアイテムが次のいずれかである場合。
 - 単一のサマリーの組合せの中に存在する場合
詳細は、[第 15 章の「サマリー組合せ」](#)を参照してください。
 - サマリーの組合せに存在する外部キーを介してサマリー表に結合できる場合
- 導出ユーザー定義アイテムが使用される場合は、サマリーの組合せに含める必要があります。
 - 導出ユーザー定義アイテム
 - 導出ユーザー定義アイテムの作成に使用されるコンポーネント
導出ユーザー定義アイテムの詳細は、[第 11 章の「導出ユーザー定義アイテム」](#)を参照してください。
- 複合フォルダからのアイテムの場合、アイテムの同じ組合せを使用して、ソース（単一）フォルダから別のサマリー・フォルダを作成します。
複合フォルダの詳細は、[第 5 章の「複合フォルダ」](#)を参照してください。
- 問合せで指定された結合パスは、問合せを満足するサマリーの組合せで指定された結合パスと一致する必要があります。これにより、サマリー結果セットのデータはディテール・データ表のデータと一致します。
ただし、「[結合オプション](#)」ダイアログの「[ディテール外部キーに NULL 値を許可する](#)」チェックボックスの選択を解除することを条件として、サマリー表で指定されているよりも少ない結合を使用して問合せを定義できます。
注意：「結合オプション」ダイアログを表示するには、「[新規結合 / 結合の編集](#)」ダイアログの「オプション」をクリックします。
- サマリー・フォルダは、「[問合せに使用可能](#)」プロパティを「はい」に設定する必要があります。
サマリー・フォルダのプロパティの詳細は、[第 15 章の「サマリー・フォルダのプロパティの編集方法」](#)を参照してください。
- Discoverer Desktop/Plus の「オプション」ダイアログの「問合せ管理」タブで指定された条件が満たされる必要があります。
詳細は、『Oracle9i Discoverer Desktop ユーザーズ・ガイド』または『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
- 問合せを実行している Discoverer エンド・ユーザーは、サマリー表へのデータベース SELECT アクセス権が必要です。

サマリー・フォルダの作成に必要な権限の詳細は、[第 15 章の「Discoverer でサマリー・フォルダを手動で作成する前提条件」](#)を参照してください。

Discoverer での SQL とクエリー・リライトの実行計画の表示について

Discoverer Desktop/Plus で「SQL インспекター」ダイアログを使用して、データベース・サーバーに送信される SQL と、データベース・サーバー・ユーザーが問合せから結果データを返すための実行計画を表示します。「SQL インспекター」ダイアログには、SQL を表示し、マテリアライズド・ビューの名前または使用されたサマリー表が含まれています。「SQL インспекター」ダイアログの詳細は『Oracle9i Discoverer Desktop ユーザーズ・ガイド』または『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Discoverer で「SQL インспекター」ダイアログに SQL を表示する方法の構成について

Oracle9iAS Discoverer Plus と Oracle9i Discoverer Desktop では、エンド・ユーザーは、Discoverer によって生成される、ワークシートを作成する SQL を見ることができます。「SQL インспекター」に表示される SQL は、RDBMS に送信されるものと同一とは限りません。

Discoverer は、常にインライン・ビューを含む SQL を RDBMS に送信します。エンド・ユーザーがインライン・ビューを読むのは困難なため、Discoverer を構成して容易に読めるように SQL を再フォーマットできます。再フォーマットされた SQL は、「フラット化」された SQL とも呼ばれます。

Discoverer が SQL を表示する方法を構成するには、¥Discoverer5¥Database¥SQLType レジストリを設定を編集します（詳細は、[「Discoverer のレジストリ設定」](#)および[「Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の編集方法」](#)を参照してください）。

(Discoverer で) マテリアライズド・ビューを使用 / 使用しない 実行計画の例

Discoverer Desktop/Plus で「SQL インスペクター」ダイアログを呼び出して、問合せがクエリー・リライトの対象かどうかを指定できます。次の表は、適切なマテリアライズド・ビューが存在しない問合せで使用されるときに、サーバーの実行計画がどのように表示されるかを示しています。この例で、サーバーは3つの VIDEO5 データ表の全表検索を完了して、結果セットを返しています。

表 16-1 VIDEO5 表にアクセスし、マテリアライズド・ビューを使用しない場合の Discoverer Desktop/Plus の問合せの実行計画の例

Discoverer の「SQL インスペクター」ダイアログ： 「プラン」タブに表示される SQL 文
SELECT STATEMENT SORT GROUP BY TABLE ACCESS FULL VIDEO5.Sales TABLE ACCESS FULL VIDEO5.Product TABLE ACCESS FULL VIDEO5.Time

次の表は、適切なマテリアライズド・ビューが存在する問合せで使用されるときに、サーバーの実行計画がどのように表示されるかを示しています。この例で、サーバーはマテリアライズド・ビューを使用して結果セットを返しています。

表 16-2 サーバーがクエリー・リライトし、マテリアライズド・ビューを使用する場合の Discoverer Desktop/Plus の問合せの実行計画の例

Discoverer の「SQL インスペクター」ダイアログ： 「プラン」タブに表示される実行計画
SELECT STATEMENT SORT GROUP BY TABLE ACCESS FULL NICK.EUL5_MV101510

前述の表の SQL 文は、サーバーがどのようにクエリー・リライトし、適切なマテリアライズド・ビューを使用するかを示しています。

マテリアライズド・ビューは、表名 EUL5_MV{ 識別子 } により実行計画の中で識別されま

す。

Discoverer がクエリー・リライトする場合の SQL の例

Oracle 8.1.5 以下のデータベースに対して Discoverer を実行する場合、Discoverer はクエリー・リライトを制御して適切なサマリー表を使用します。Discoverer は、データベースに送信された SQL 文を「SQL インスペクター」ダイアログの「SQL」タブに表示します。

次の表に、Video Analysis フォルダのアイテムを使用している Discoverer ワークシートに使用された SQL 文を示します（詳細は『Oracle9i Discoverer Administrator チュートリアル』を参照してください）。SQL 文は、サマリー表 EUL5_SUM100750 が参照されていることを示しています。

表 16-3 問合せがどのようにリライトされ、サマリー表 EUL5_SUM100750 を使用しているかを示す Discoverer Desktop/Plus SQL 文の例

Discoverer Desktop/Plus の「SQL インスペクター」ダイアログ：「SQL」タブに表示される SQL 文
<pre>SELECT EUL5_SUM100750,"Department", EUL5_SUM100750, "Region", EUL5_SUM100750,"Calendar Date Year", SUM(EUL5_SUM100750, "Profit SUM") FROM ADMINUTORNF806.EUL5_SUM100750 EUL5_SUM100750 GROUP BY EUL5_SUM10075."Department", EUL5_SUM10075."REgion", EUL5_SUM10075."Calendar Date Year";</pre>

Discoverer は、最も適切なサマリー表を自動選択して問合せを効率的に処理します。このアクションは、Discoverer エンド・ユーザーにとって完全に透過的です。

次の表は、エンド・ユーザーが年から月までをドリル・ダウンしたことを除き、前述と同じ Discoverer ワークシートの SQL 文を示しています。

SQL 文は、Discoverer がサマリー表 EUL5_SUM100750（前述と同じ）に対する問合せの最初の部分をリライトしたことを示しています。ただし、サマリー表 EUL5_SUM100774 に対する問合せの 2 番目の部分（ドリル・ダウン）をリライトしました。

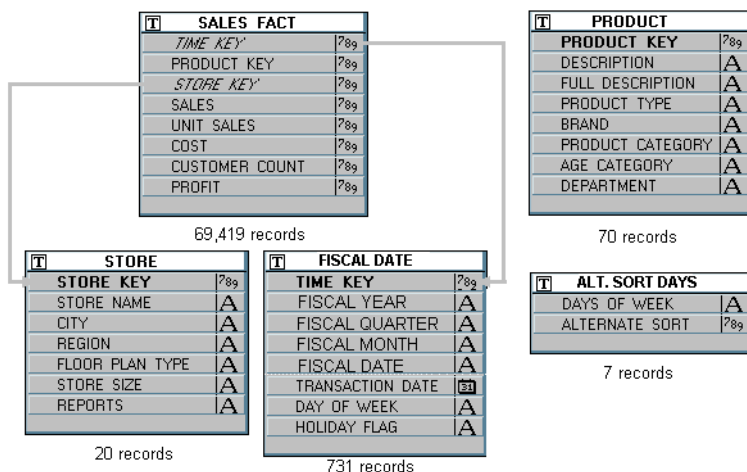
表 16-4 サマリー表 EUL5_SUM10074 に対して問合せのドリル・ダウン・セクションがどのようにリライトされるかを示す Discoverer Desktop/Plus SQL 文の例

Discoverer Desktop/Plus の「SQL インспекター」ダイアログ: 「SQL」タブにドリル・ダウンに続いて表示される SQL 文
<pre>SELECT EUL5_SUM100750,"Department", EUL5_SUM100750, "Region", EUL5_SUM100750,"Calendar Date Year", SUM(EUL5_SUM100750, "Profit SUM") FROM ADMINUTORN806.EUL5_SUM100750 EUL5_SUM100750 GROUP BY EUL5_SUM100750."Department", EUL5_SUM100750."Region", EUL5_SUM100750."Calendar Date Year"; SELECT EUL5_SUM100774,"Department", EUL5_SUM100774, "Region", EUL5_SUM100774,"Calendar Date Month", EUL5_SUM100774, "Calendar Date Year", SUM(EUL5_SUM100774,"Profit SUM") FROM ADMINUTORN806.EUL5_SUM100774 EUL5_SUM100774 WHERE (EUL5_SUM100774."Calendar Date Year" = TO_DATE('200001011000000','YYYYMMDDHH24MISS')) GROUP BY EUL5_SUM100774."Department", EUL5_SUM100774."Region", EUL5_SUM100774,"Calendar Date Month", EUL5_SUM100774. "Calendar Date Year";</pre>

クエリー・リライトしてサマリー表を使用するメリットを示す例

この例は5つの表から成り立っていて、その1つには約70,000のレコードがあります（詳細は次の図を参照）。スキーマとデータはチュートリアル・データから取得されます。

図 16-1 スキーマとデータの例



次のアイテムを必要とする問合せを考えてみます。

- 地域 — (STORE 表から)
- 部門 — (PRODUCT 表から)
- 年度 — (FISCAL DATE 表から)
- 合計値 (Dollar_Profit) — (SALES FACT 表から)

これには、5つの表の結合と、SALES_FACT (約70,000の行を持つ表) にある一致するすべての行の集合体が必要です。サーバーの能力に応じて、問合せの結果の生成に数分かかることもあります。

一方、問合せが、地域、部門、年度、合計値 (利益) のデータをすでに含んでいる1つの表を使用するようにリライトされると (サンプル・サマリー表の図を参照)、問合せは瞬時に応答を生成します。

図 16-2 サンプル・サマリー表

EUL5_SUM100801	
DEPARTMENT	A
REGION	A
YEAR	31
QUARTER	31
MONTH	31
COUNT SALES	789
COUNT COST	789
COUNT PROFIT	789
COUNT UNIT SALES	789
SUM SALES	789
SUM COST	789
SUM PROFIT	789
SUM UNIT SALES	789

前述のサンプル・サマリー表には、月レベルの間合せで必要とされる情報が格納され、年レベルに集合化する必要があります。したがって、Discoverer は 5 つの表の結合から集合化するのではなく、また全表検索を実行することなく、1 つの表を使用します。

Oracle 8.1.5 以下のデータベースと Oracle 8.1.7 以上のデータベースのサマリー・フォルダの特性の違い

次の表に、異なるバージョンのデータベースを使用している場合のサマリー・フォルダの特長の違いと比較を示します。

サマリー・フォルダの詳細は、第 14 章の「Discoverer のフォルダとサマリー・フォルダ」および第 15 章の「手動によるサマリー・フォルダの作成について」を参照してください。

表 16-5 Oracle 8.1.5 以下のデータベースと Oracle 8.1.7 以上のデータベースのサマリー・フォルダの比較

質問	Oracle 8.1.5 以下のデータベース	Oracle 8.1.7 以上のデータベース
サマリー・フォルダはどのようにデータベースに格納されますか。	サマリー表として格納。	マテリアライズド・ビューまたはサマリー表として格納。
サマリー・フォルダはどのようにリフレッシュされますか。	完全リフレッシュのみ。	完全リフレッシュまたは増分リフレッシュ。
どのような種類のリフレッシュが利用できますか。	リフレッシュはオンデマンドのみ。	リフレッシュはオンデマンドまたはコミット時に可能。
リフレッシュはどのように実行されますか。	Discoverer がリフレッシュを実行。	サーバーがリフレッシュを実行。

表 16-5 Oracle 8.1.5 以下のデータベースと Oracle 8.1.7 以上のデータベースのサマリー・フォルダの比較（続き）

質問	Oracle 8.1.5 以下のデータベース	Oracle 8.1.7 以上のデータベース
サマリーのリライトを実行するのは何ですか。	Discoverer がサマリーのリライトを実行。	サーバーがクエリー・リライトを実行。
サマリー・フォルダを定義する用語は何ですか。	サマリー・フォルダはアイテムとフォルダで定義されます。	サマリー・フォルダは表と列で定義されます。
他のアプリケーションはこれらを利用できますか。	いいえ、Discoverer のみです。	はい、他のアプリケーションもマテリアライズド・ビューを利用できます。

注意

マテリアライズド・ビューはサーバーに格納されるので、他のクライアント・アプリケーションはマテリアライズド・ビューをリフレッシュに利用できます。たとえば、Discoverer を使用しているときに作成されたマテリアライズド・ビューは、提供された DBMS_MVIEW パッケージを使用し、SQL*Plus を通じてリフレッシュできます。

外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの違い

Discoverer は、次に基づいてサマリー・フォルダを作成します。

- Discoverer のサマリー表またはマテリアライズド・ビュー
- 外部サマリー表

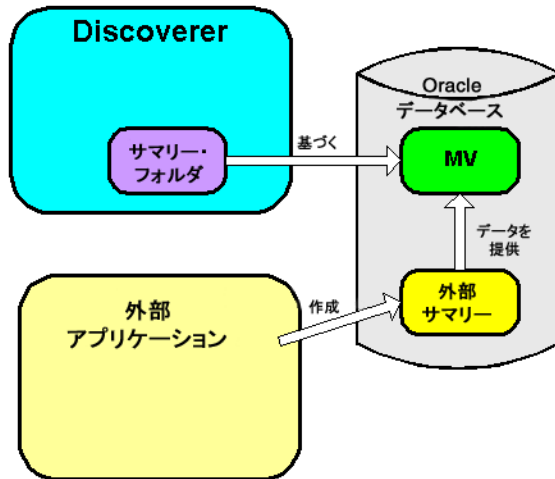
外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの主な違いを次に示します。

表 16-6 Discoverer のサマリー表またはマテリアライズド・ビューに基づくサマリー・フォルダと外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダとの主な違い

質問	Discoverer のサマリー表またはマテリアライズド・ビューに基づくサマリー・フォルダ	外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダ
どのように作成され、メンテナンスされますか。	Discoverer Administrator または Oracle 8.1.7 以上のデータベースにより自動的に作成されます。	別のアプリケーション（SQL*Plus など）を使用。
どのように作成されますか。	Discoverer Administrator を使用。	別のアプリケーションを使用。
どのようにリフレッシュされますか。	自動的に一定間隔でリフレッシュされます（Discoverer Administrator のサマリー画面で定義）。	別のアプリケーションを使用。

次の図は、Discoverer がマテリアライズド・ビューに基づいたサマリー・フォルダをどのように作成するかを示しています。マテリアライズド・ビューは外部サマリーからのデータを使用して提供されます。外部サマリーは外部アプリケーションによって作成されます。

図 16-3 外部サマリーを使用する Discoverer



Discoverer Administrator を使用してサマリーを作成する場合、次のいずれかの方法でサマリーをリフレッシュします。

- Discoverer により — 「サマリー・フォルダのリフレッシュ」ダイアログの「サマリーのリフレッシュを管理する」チェックボックスが選択されています。
- 外部アプリケーションにより — 「サマリー・フォルダのリフレッシュ」ダイアログの「サマリーのリフレッシュを管理する」チェックボックスの選択が解除されています。

外部サマリー表は次の場合に役立ちます。

- 他のいくつかの方法で作成されたサマリー表を持つウェアハウス・アプリケーションで作業をしていて、これらを外部からメンテナンスする場合。
- Oracle 以外のデータベースを使用している場合。

Oracle 8.1.7 以上のデータベースで外部サマリー表とビューを EUL アイテムにマッピングする場合の違い

Oracle 8.1.7 以上のデータベースで、外部サマリー表またはビューを EUL アイテムにマッピングして Discoverer Administrator でサマリー・フォルダを作成できます。ただし、ビューを EUL アイテムにマッピングする場合、マテリアライズド・ビューは作成されません。この制限は Oracle 8.1.7 以上のデータベースに適用されます。マテリアライズド・ビューが作成されない場合は、かわりに Discoverer サマリー表が使用されます。クエリー・リライトの詳細は、「[クエリー・リライト](#)」を参照してください。

次の表に違いを示します。

表 16-7 Oracle 8.1.7 以上のデータベースでの外部サマリー表またはビューの EUL アイテムへのマッピング

表のマッピング	ビューのマッピング
外部サマリー表を EUL アイテムにマッピングする場合、マテリアライズド・ビューの定義が作成されます。 この場合、マテリアライズド・ビューの定義は Oracle 8.1.7 以上のデータベースのクエリー・リライトに使用されます。	外部ビューを EUL アイテムにマッピングする場合、マテリアライズド・ビューは作成されません。 この場合、サマリー・フォルダは Oracle 8.1.5 以下のデータベースと同じ方法で動作します。ここで、Discoverer はクエリー・リライトし、Discoverer サマリー表を使用します。

Oracle 8.1.7 以上のデータベースのリフレッシュ・オプションについて

Oracle 8.1.7 以上のデータベースは、大規模なデータ・ウェアハウスまたはデータベースでの作業を可能にする増分リフレッシュをサポートします（使用可能な場合）。リフレッシュ操作では並列性（詳細は次を参照してください）もサポートされています。

増分リフレッシュに必要な条件の詳細は『Oracle9i データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。

Oracle データベース間のインポートに続くサマリー・フォルダのリフレッシュについて

Oracle 8.1.5 以下のデータベースから Oracle 8.1.7 以上のデータベースへのエクスポート

Oracle 8.1.5 以下のデータベースからサマリー・フォルダを使用してビジネスエリアをエクスポートし、Oracle 8.1.7 以上のデータベースにインポートする場合、これらのサマリー・フォルダに対してマテリアライズド・ビューを作成する必要があります。マテリアライズド・ビューを作成するデータベース・サーバーでは、Discoverer でサマリー・フォルダをリフレッシュする必要があります。

Oracle 8.1.7 以上のデータベースから Oracle 8.1.5 以下のデータベースへのエクスポート

Oracle 8.1.7 以上のデータベースからサマリー・フォルダを使用してビジネスエリアをエクスポートし、Oracle 8.1.5 以下のデータベースにインポートする場合、Discoverer ではサマリー・フォルダに基づいてサマリー表を作成する必要があります。Discoverer でサマリー表を作成するには、サマリー・フォルダをリフレッシュする必要があります。

Discoverer を Oracle Applications とともに 使用方法

Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方法

この章では、Oracle Applications セキュリティを使用して Oracle Applications データベースへのアクセスを Discoverer がサポートする方法について説明します。この章のトピックは次のとおりです。

- [Oracle Applications](#)
- [Oracle Applications の職責](#)
- [Oracle Applications ユーザーに対する Discoverer のサポート機能](#)
- [Oracle Applications とともに Discoverer を使用するための前提条件](#)
- [Discoverer を Oracle Applications モードで実行する場合の相違点](#)
- [Oracle Applications ユーザー用に「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログを設定する方法](#)
- [Oracle Applications EUL の作成方法](#)
- [パブリック・ユーザーを介してすべての Oracle Applications ユーザーに作業権限を付与する方法](#)
- [ビジネスエリアにアクセスできる Oracle Applications のユーザーまたは職責を指定する方法](#)
- [Oracle Applications のユーザーまたは職責がアクセスできるビジネスエリアを指定する方法](#)
- [Oracle Applications のユーザーまたは職責が実行できる作業を指定する方法](#)
- [特定の作業を実行できる Oracle Applications のユーザーまたは職責を指定する方法](#)

Oracle Applications

Oracle Applications は、Oracle の統合 ERP およびカスタマー・リレーションシップ・マネジメント (CRM) のソリューションです。Oracle Applications を使用すれば、企業は中央から世界的な運用の実行と管理を行うことができます。詳細は、<http://www.oracle.com/> を参照してください。

Oracle Applications の職責

Oracle Applications の職責は、データベースのロールに似ています。職責とは、権限を割り当てて多くのユーザーに適用することを抽象化したものです。Oracle Applications の職責は、Oracle Applications ユーザーの機能アクセスおよびデータ・アクセスの制御に使用されます。

Oracle Applications ユーザーは Oracle Applications データベースに接続し、Oracle Applications の単一の職責を選択します。Oracle Applications の各職責は、関連付けられた権限セットを持つことができます。

すなわち、Oracle Applications ユーザーは、デフォルトで、選択した職責には作業権限が付与されていると認識していることになります（詳細は、「[特定の作業を実行できる Oracle Applications のユーザーまたは職責を指定する方法](#)」を参照）。同じユーザーのままで職責を変更するには、再接続する必要があります。

Oracle Applications ユーザーに対する Discoverer のサポート機能

Discoverer では、Oracle Applications に対する次の機能がサポートされています。

- Oracle Applications のユーザー名、パスワードおよび職責を使用した、Oracle Applications データベースへの非定型な問合せ
- Oracle Applications モード EUL

Oracle Applications モード EUL は、Oracle Applications のスキーマ（Oracle Applications の FND（Foundation）表およびビューを含む）に基づく Discoverer End User Layer です。標準的な EUL ではデータベースのユーザーおよびロールが使用されていますが、Oracle Applications EUL では Oracle Applications のユーザー名および職責が使用されています。

Oracle Applications モード EUL に接続できるデータベース・ユーザー（つまり、Oracle Applications 以外のユーザー）のみが、EUL 所有者です。EUL 所有者とは、EUL の作成に使用されるデータベース・ユーザーです。EUL 所有者は、Oracle Applications ユーザーに管理権限を付与できます。許可された Oracle Applications ユーザーは、Discoverer Administrator を使用して Oracle Applications モード EUL に接続できます。

- Oracle Applications の行レベル・セキュリティ

Oracle Applications の表とビューの多くは、アクセスするユーザーまたは職責に応じて返される結果が異なるため、ユーザー依存です。Discoverer では、これらのユーザー依存の表とビューを考慮して、問合せが適切に実行されます。

- Oracle Applications の複数通貨レポート

Oracle Applications のユーザーまたは職責で Discoverer に接続すると、複数通貨レポート機能を実装した Oracle Applications のインスタンスをサポートする適切なスキーマ（APPS または APPS_MRC）に、自動的に接続されます。

- Oracle Applications の複数組織

Discoverer で Oracle Applications の複数組織サポートを使用すれば、複数の組織からのデータを処理できます。Discoverer エンド・ユーザーは、アクセス権を付与された一連の組織からのデータに対し問合せと分析ができます。接続している EUL 内のフォルダは、Oracle Business Views (Oracle Applications 11i で使用可能) に基づいている必要があります。

これらの機能は、Discoverer が Oracle Applications モードで実行されている場合のみ使用できます。つまり、Oracle Applications データベースに対して Discoverer が Oracle Applications モード EUL とともに実行されている場合のみ使用可能です。

Oracle Applications とともに Discoverer を使用するための前提条件

Oracle Applications ユーザーとして Discoverer を起動するには、次の条件を満たす必要があります。

- Discoverer を Oracle Applications モードで使用する前に Oracle Applications をインストールしていること
- 次の Oracle Applications リリースのいずれかに対して Discoverer を実行すること
 - リリース 10.7
 - リリース 11
 - リリース 11i

Discoverer を Oracle Applications モードで実行する場合の相違点

Oracle Applications モードで実行されているときの Discoverer には、次の相違点があります。

- Oracle Applications モードでの Discoverer の「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログの相違点
- Oracle Applications モードでの Discoverer セキュリティの相違点
- Oracle Applications モードでの Discoverer サマリー・フォルダの相違点
- Oracle Applications モードでの Discoverer および Secure Views/ 言語設定の相違点

Oracle Applications モードでの Discoverer の「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログの相違点

Discoverer を Oracle Applications モードで実行するとき、「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログ（Oracle Applications ユーザー向け）に「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスが表示される場合と表示されない場合があります。

図 17-1 「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログ（Oracle Applications ユーザー向け）



詳細は、「Oracle Applications ユーザー用に「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログを設定する方法」を参照してください。

「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログが Oracle Applications ユーザー用に設定されている場合は、次の条件が適用されます。

- 「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスが表示されない場合は、Oracle Applications データベースのユーザーとして Discoverer に接続しています。

- 「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスが表示される場合は、このチェックボックスを選択して Oracle Applications ユーザーとして Discoverer に接続します。このチェックボックスを選択しないで、Oracle データベースのユーザーとして接続することもできます。

「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログに詳細を入力して「接続」をクリックすると、「職責の選択」ダイアログが表示され、接続する職責を選択できます（接続する Oracle Applications ユーザーが複数の職責を持っている場合）。

Oracle Applications ユーザーと職責の両方を「user:responsibility」の形式で「ユーザー名」フィールドに入力すれば、「職責の選択」ダイアログを使用する必要はありません。

図 17-2 「職責の選択」ダイアログ



Oracle Applications モードでの Discoverer セキュリティの相違点

Oracle Applications ユーザーとして Discoverer Administrator を実行すると、Discoverer の「権限」ダイアログと「セキュリティ」ダイアログに Oracle Applications のユーザー名および職責が表示されます。Oracle Applications のユーザー名および職責に権限とセキュリティを割り当てることができます。データベース・ユーザーとして Discoverer Administrator を実行すると、Discoverer の「権限」ダイアログと「セキュリティ」ダイアログにデータベースのユーザーおよびロールが表示されます。

権限を使用して情報へのアクセスを制御する方法の詳細は、[第 7 章の「Discoverer およびセキュリティ」](#)を参照してください。

Oracle Applications モードでの Discoverer サマリー・フォルダの相違点

Oracle Applications モード EUL の Discoverer 管理者として、次のことに注意する必要があります。

- Oracle Applications の一部のデータベース・ビューには行レベル・セキュリティが含まれ、現在アクティブな職責に応じて異なる結果が返されます。これは、マテリアライズド・ビュー（Oracle 8.1.5 以下のデータベースのサマリー表）に、外部サマリー・フォルダをリフレッシュするユーザーの職責に応じて異なるデータが含まれるということを意味します。
- Oracle Applications の Secure Views または Business Views に基づくサマリー・フォルダを、外部サマリー・フォルダとして Discoverer で登録する必要があります（詳細は、[第 15 章の「外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの作成方法」](#)を参照）。
- Discoverer 管理者は、表またはビューに対し、Oracle Applications の行レベル・セキュリティを使用して外部サマリー・フォルダがマッピングされている場合、外部表またはビューによるアクセスが安全なものであるようにする必要があります。不明点があれば、データベース管理者に問い合わせてください。
- Discoverer では、問合せ（Oracle Applications の行レベル・セキュリティを持たないデータに基づく）を満足する、管理対象のサマリー・フォルダが検出された場合、エンド・ユーザーに対しては、問合せ基準を満足する行がないことが通知されます。この通知の目的は、エンド・ユーザーがアクセスする必要のないデータを表示しないようにすることです。
- Discoverer では、問合せ（Oracle Applications の行レベル・セキュリティを持たないデータに基づく）を満足する、管理対象のサマリー・フォルダが検出された場合、影響を受けない行が返されます。この目的は、すべてのエンド・ユーザーがデータに安全にアクセスできるようにすることです。
- 行レベル・セキュリティを持つ一部の Oracle Applications ビューは、「パブリック」行（特に Human Resources）をサポートしています。

Oracle Applications モードでの Discoverer および Secure Views/ 言語設定の相違点

Oracle Applications の Secure Views にアクセスするワークブックを Discoverer エンド・ユーザーが使用するとき、マシン間でローカル言語設定（NLS）が異なると、結果が異なることがあります（同じ接続情報を使用している場合でも）。

Oracle Applications の Secure Views の使用時、Discoverer により取り出されるデータは、マシンのローカル言語設定の影響を受けます。Discoverer では、言語設定が同じマシン間の場合に、一貫性のあるデータが表示されます。

マシンのローカル言語設定を変更するには、(Windows NT 上で)「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「地域」を選択し、言語値を変更します。

Secure Views の詳細は、[第 20 章の「Secure Views で問合せ予測を使用する方法」](#)を参照してください。

また、Oracle Applications のプロファイル設定を使用して、ユーザー、職責、アプリケーションまたはサイトに対し言語設定（NLS）を定義することもできます。詳細は、Oracle Applications のマニュアルを参照してください。

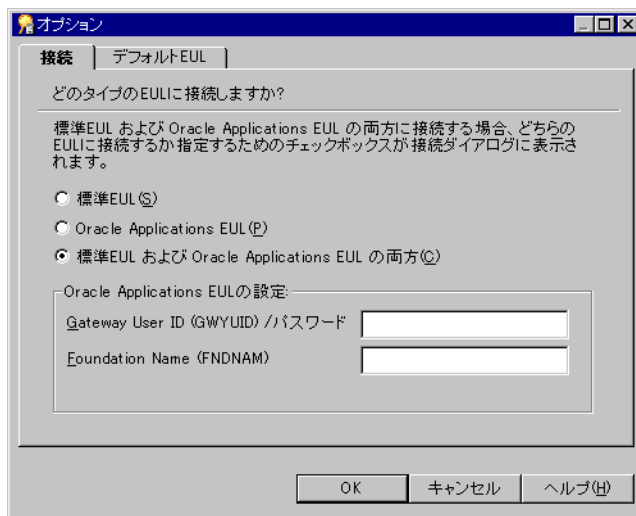
Oracle Applications ユーザー用に「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログを設定する方法

Oracle Applications ユーザーとして Discoverer に接続する前に、デフォルトで Oracle Applications ユーザーになるように「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログを設定する必要があります。

Discoverer Administrator および Discoverer Desktop 用に「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログを設定する手順は、次のとおりです。

1. 「ツール」→「オプション」を選択して、「[オプション](#)」ダイアログ:「[接続](#)」タブを表示します。

図 17-3 「オプション」ダイアログ:「接続」タブ



2. 次のいずれかのオプションを選択して、EUL のタイプを指定します。

オプション	影響
標準 EUL	「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスは「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログに表示されず、標準的なデータベース・ユーザーとみなされます。
Oracle Applications EUL	「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスは「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログに表示されませんが、ユーザーが Oracle Applications のユーザー ID とパスワード、および Oracle Applications データベース接続文字列を使用して接続するとみなされます。
標準 EUL および Oracle Applications EUL の両方	「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスが「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログに表示され、(このチェックボックスの選択または非選択に応じて) 標準 EUL または Oracle Applications データベース EUL のいずれかに接続できます。

注意

- Discoverer Desktop 用に「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログを設定するには、Discoverer Administrator 用の前述の手順を Discoverer Desktop で繰り返します。

- Oracle Applications ユーザー名とパスワードを確認するように Discoverer Plus および Viewer 用の「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログを設定する方法の詳細は、『Oracle9iAS Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

フィールド「Gateway User ID (GWYUID) / パスワード」と「Foundation Name (FNDNAM)」に詳細を入力する方法

「オプション」ダイアログの「接続」タブで「Oracle Applications EUL」ラジオ・ボタンまたは「標準 EUL および Oracle Applications EUL の両方」ラジオ・ボタンを選択すると、これらのフィールドに値を入力できますが、入力しない場合は Discoverer でデフォルト値が使用されます。これらのフィールドとデフォルト値は次のとおりです。

- Gateway User ID (GWYUID) / パスワード
ここで Gateway User ID およびパスワードを入力できます（入力しない場合はデフォルト値「applsypub/pub」が使用されます）。
- Foundation Name (FNDNAM)
Foundation Name を入力できます（入力しない場合はデフォルト値「apps」が使用されます）。

これらのフィールドに入力する値が不明な場合は、Oracle Applications データベース管理者に問い合せてください。

Oracle Applications EUL の作成方法

Oracle Applications EUL を作成する方法は次の 2 つです。

- 「EUL 作成ウィザード」ダイアログを使用する方法
- コマンドライン・インタフェースを使用する方法

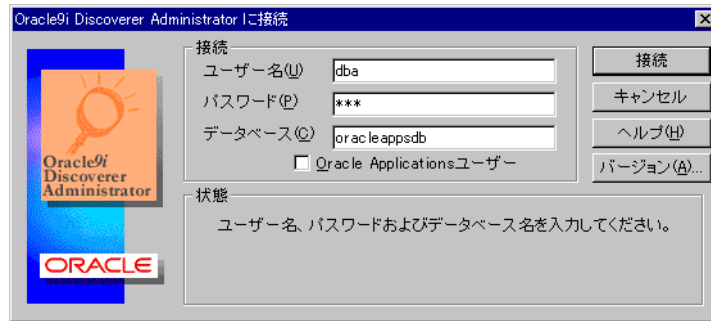
「EUL 作成ウィザード」ダイアログを使用して Oracle Applications EUL を作成する手順は、次のとおりです。

1. Discoverer Administrator を起動します。「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログが表示されます。
2. DBA ユーザーのユーザー名、パスワードおよび接続文字列を入力します。

たとえば、dba/dbapassword@oracleappsdb と入力します。

注意： Oracle Applications ユーザーのユーザー名を指定しないでください。EUL 所有者は常にデータベース・ユーザーです。

図 17-4 「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」 ダイアログ



注意： Oracle Applications ユーザーの「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログに「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスが表示されることがあります。詳細は、「[Oracle Applications ユーザー用に「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログを設定する方法](#)」を参照してください。

3. 「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスの選択を解除します。
4. 「接続」をクリックします。
5. EUL が存在しないことを示すメッセージがダイアログに表示された場合は、EUL をすぐに作成するかどうかを選択します。「はい」をクリックします。
6. 「EUL マネージャ」ダイアログが表示されます。

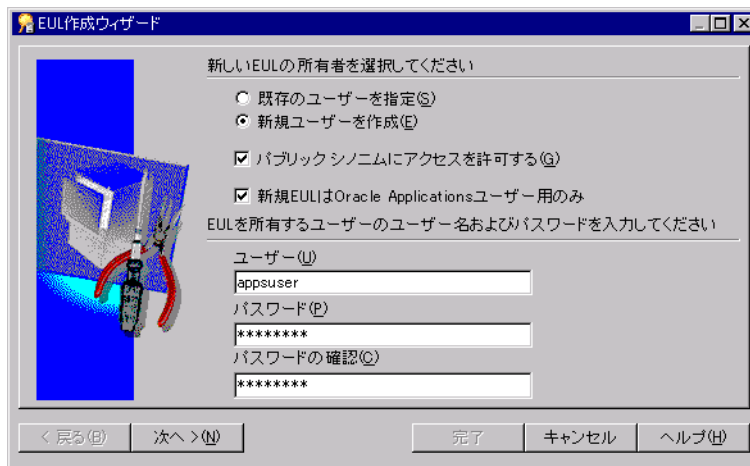
図 17-5 「EUL マネージャ」ダイアログ



7. 「新しいEUL を作成 ...」をクリックします。「[EUL 作成ウィザード](#)」ダイアログが表示されます。

ここで、新しいデータベース・ユーザーと Oracle Applications EUL を作成します。

図 17-6 「EUL 作成ウィザード」 ダイアログ



8. 次のラジオ・ボタンのいずれかを選択して、既存ユーザーまたは新規ユーザーのどちらが Oracle Applications EUL を所有するかを指定します。

■ 既存のユーザーを指定

次に、「ユーザー」フィールドのドロップダウン・リストからユーザーを選択します。

■ 新規ユーザーを作成

次に、新規ユーザーのユーザー名とパスワードを入力し、パスワードを確認します。

注意：EUL 所有者は常にデータベース・ユーザーです。データベース・ユーザーを指定してください。

9. (オプション)「パブリック シノニムにアクセスを許可する」チェックボックスを選択します。

ヒント：「パブリック シノニムにアクセスを許可する」チェックボックスを選択して、EUL 表へのパブリック・アクセスを許可することをお勧めします。

EUL 表へのアクセス権を明示的に付与する場合は、「パブリック シノニムにアクセスを許可する」チェックボックスを選択しないでください。この場合は、手動で EUL 表にアクセス権を付与する必要があります。

10. 「新規 EUL は Oracle Applications ユーザー用のみ」チェックボックスを選択して、Oracle Applications モード EUL を作成します。

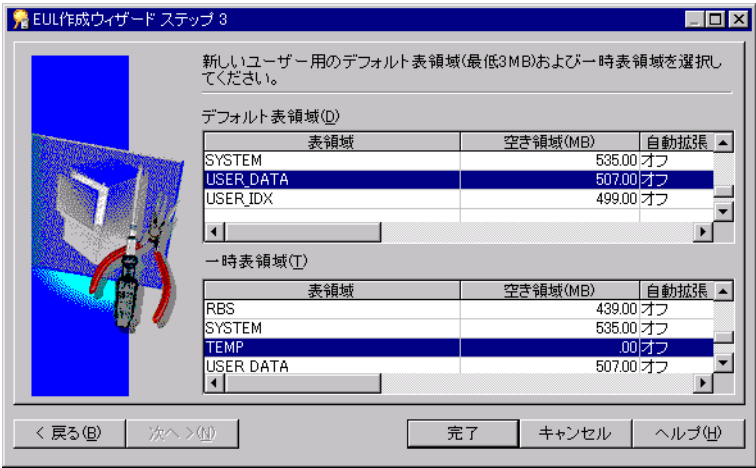
11. 「次へ」をクリックして、「EUL 作成ウィザード ステップ 2」ダイアログを表示します。
ここで、Oracle Applications スキーマを選択し、スキーマ・パスワードを入力します。

図 17-7 「EUL 作成ウィザード ステップ 2」ダイアログ



12. 「スキーマ:」ドロップダウン・リストを使用して、Oracle Applications FND 表を含む Oracle Applications スキーマを選択します。
13. Oracle Applications スキーマのパスワードを入力し、「次へ」をクリックします。
14. 新規ユーザーを作成する場合、「EUL 作成ウィザード ステップ 3」ダイアログが表示されます。ここで、新しいデータベース・ユーザーまたはデータベース・スキーマ用のデフォルト表領域および一時表領域を選択します。

図 17-8 「EUL 作成ウィザード ステップ 3」 ダイアログ



15. (新規ユーザーを作成する場合) Oracle Applications EUL 所有者用に使用するデフォルト表領域および一時表領域を強調表示します。

ヒント : 不明な点があれば、Oracle Applications データベース管理者に問い合わせてください。

16. 「完了」をクリックすると、新しい Oracle Applications モード EUL 用の表とビューが作成され、これらにデフォルト・データが移入されます。

新規 EUL の作成を確認するダイアログが表示されます。

図 17-9 EUL 作成ウィザード - 成功



17. 「OK」をクリックして、確認ダイアログを閉じます。

新規 EUL にチュートリアル・データをインストールするかどうかを選択するダイアログが表示されます。

18. 「はい」または「いいえ」をクリックして、チュートリアル・データをインストールするかどうかを指定します。

作成した新規 Oracle Applications EUL の所有者でデータベースに再接続するか、あるいは DBA で接続したままにするかを選択するダイアログが表示されます。

注意

- Oracle Applications EUL の作成が完了すると、次のことができます。
 - この Oracle Applications EUL を使用して、Oracle Applications ユーザーが Discoverer Administrator または Discoverer Desktop/Plus で作業を実行できるように、作業権限を付与できます（詳細は、「[Oracle Applications のユーザーまたは職責が実行できる作業を指定する方法](#)」を参照）。
 - Oracle Applications 表を使用して、新規ビジネスエリアを作成できます（詳細は、[第 4 章の「ビジネスエリア」](#)を参照）。
- 新規 Oracle Applications ビジネスエリアを作成するには、ビジネスエリアにロードするスキーマ・オブジェクトが Secure Views に基づいている必要があります。これにより、Oracle Applications の特定の職責に関連付けられた行レベル・セキュリティが保持されます。詳細は、Oracle Applications データベース管理者に問い合せてください。
- また、コマンドラインを使用して Applications モード EUL を作成することもできます（詳細は、[第 21 章の「/create_eul /apps_mode」](#)を参照）。

パブリック・ユーザーを介してすべての Oracle Applications ユーザーに作業権限を付与する方法

パブリック・ユーザーを使用すれば、1 回のアクションですべての Oracle Applications ユーザーに作業権限を付与できます。

すべての Oracle Applications ユーザーに作業権限を付与する手順は、次のとおりです。

1. Discoverer Administrator を起動し、Oracle Applications ユーザーで接続します。
2. 「ツール」→「権限」を選択して、「[権限](#)」ダイアログ:「[ユーザー→権限](#)」タブを表示します。

「権限」タブにはパブリック・ユーザーが含まれています。パブリック・ユーザーは単一の Oracle Applications ユーザーではなく、すべての Oracle Applications ユーザーを表します。パブリック・ユーザーに権限を付与すれば、すべての Oracle Applications ユーザーに権限を付与できます。後から、必要に応じて、個々のユーザーの権限を変更できます。

3. 必要に応じて、パブリック・ユーザーに権限を付与します。

詳細は、[第 7 章の「ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法」](#)を参照してください。

ビジネスエリアにアクセスできる Oracle Applications のユーザーまたは職責を指定する方法

この作業で、特定のユーザーまたは職責に対してビジネスエリアへのアクセス権を付与（または拒否）します。

Oracle Applications の職責の詳細は、「[Oracle Applications の職責](#)」を参照してください。

注意：この作業を完了すると、Oracle データベース・ユーザーと Oracle Applications ユーザーとで、ダイアログの表示内容が異なるようになります。

- Oracle データベース・ユーザーに対しては、「ユーザー」と「ロール」という言葉が表示されます。
- Oracle Applications データベース・ユーザーに対しては、「ユーザー」と「職責」という言葉が表示されます。

この作業の詳細は、[第 7 章の「ビジネスエリアにアクセスできるユーザーまたはロール（職責）の指定方法」](#)を参照してください。

Oracle Applications のユーザーまたは職責がアクセスできるビジネスエリアを指定する方法

この作業で、Oracle Applications の特定のユーザーまたは職責がアクセスできるビジネスエリアを指定します。

Oracle Applications の職責の詳細は、「[Oracle Applications の職責](#)」を参照してください。

注意：この作業を完了すると、Oracle データベース・ユーザーと Oracle Applications ユーザーとで、ダイアログの表示内容が異なるようになります。

- Oracle データベース・ユーザーに対しては、「ユーザー」と「ロール」という言葉が表示されます。
- Oracle Applications データベース・ユーザーに対しては、「ユーザー」と「職責」という言葉が表示されます。

この作業の詳細は、[第 7 章の「ユーザーまたはロール（職責）がアクセスできるビジネスエリアの指定方法」](#)を参照してください。

Oracle Applications のユーザーまたは職責が実行できる作業を指定する方法

この作業で、特定のユーザーまたは職責が実行できる作業を指定します。

Oracle Applications の職責の詳細は、[「Oracle Applications の職責」](#)を参照してください。

注意：この作業を完了すると、Oracle データベース・ユーザーと Oracle Applications ユーザーとで、ダイアログの表示内容が異なるようになります。

- Oracle データベース・ユーザーに対しては、「ユーザー」と「ロール」という言葉が表示されます。
- Oracle Applications データベース・ユーザーに対しては、「ユーザー」と「職責」という言葉が表示されます。

この作業の詳細は、[第 7 章の「ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法」](#)を参照してください。

特定の作業を実行できる Oracle Applications のユーザーまたは職責を指定する方法

この作業で、特定の作業を実行できるユーザーまたは職責を指定します。

Oracle Applications の職責の詳細は、[「Oracle Applications の職責」](#)を参照してください。

注意：この作業を完了すると、Oracle データベース・ユーザーと Oracle Applications ユーザーとで、ダイアログの表示内容が異なるようになります。

- Oracle データベース・ユーザーに対しては、「ユーザー」と「ロール」という言葉が表示されます。
- Oracle Applications データベース・ユーザーに対しては、「ユーザー」と「職責」という言葉が表示されます。

この作業の詳細は、[第 7 章の「特定の作業を実行するユーザーまたはロール（職責）の指定方法」](#)を参照してください。

Oracle9i Application Server の コンポーネントとともに Discoverer を使用方法

Oracle9i Application Server のコンポーネントとともに Discoverer を使用する方法

この章では、Oracle9i Application Server (Oracle9iAS) のコンポーネント (Oracle9iAS Web Cache および Oracle9iAS Portal など) とともに Discoverer を使用する方法について説明します。この章のトピックは次のとおりです。

- [Oracle Enterprise Manager とともに Discoverer を使用する方法](#)
- [Oracle9iAS Reports とともに Discoverer を使用する方法](#)
- [Oracle9iAS Web Cache とともに Discoverer を使用する方法](#)
- [Oracle9i Warehouse Builder とともに Discoverer を使用する方法](#)
- [Oracle9iAS Portal とともに Discoverer を使用する方法](#)

Oracle Enterprise Manager とともに Discoverer を使用する方法

Oracle Enterprise Manager は、Oracle9iAS の中間層 Web コンポーネントを単一のツールで構成するための共通のルック・アンド・フィール、動作およびセキュリティのインフラストラクチャを提供します。すべての Oracle9iAS コンポーネントに対して単一のツールを使用すれば、管理と構成にかかる時間を短縮できます。Oracle Enterprise Manager を使用して、Discoverer の中間層 Web コンポーネントを構成できます。

Oracle Enterprise Manager を使用すると、Discoverer の中間層 Web コンポーネントに対して次の設定が可能です。

- 新しいパブリック接続の追加
- パブリック接続の削除
- パブリック接続の名前、説明、デフォルト・ロケール、ユーザー名、パスワード、データベース、EUL およびログイン・タイプの編集、データベース詳細、Oracle Applications 職責および Oracle Applications のセキュリティ・グループの表示
- ユーザー定義接続を作成する機能の有効化または無効化
- 進行状況ページを表示するまでの Discoverer Viewer での問合せ待ち時間の設定
- Discoverer Viewer 実行時に Servlet 上で使用する XML スキーマのターゲット・バージョンの設定
- Discoverer Viewer 実行時に XSL スタイルシートを検索するパスの設定
- Discoverer Viewer 実行時にプールするスタイルシートの最小数および最大数の設定
- Discoverer Plus 実行時に使用する転送の設定
- ポートレット・プロバイダーがプールする必要があるセッション数の設定
- プールする XSL スタイルシートの最小数および最大数の設定

- 予備のデフォルト・ロケールの設定
- グラフの切替え

詳細は Oracle Enterprise Manager のヘルプ・トピック — Oracle9iAS Discoverer の管理を参照してください。

Oracle9iAS Reports とともに Discoverer を使用する方法

Discoverer ユーザーはワークブックを共有し、Oracle9iAS Reports (バージョン 7.0 以上) へワークブックをエクスポートできるため、Reports ユーザーは Discoverer ワークブックを開くことができます。ワークブック SQL、追加の書式設定およびユーザー定義アイテムが、XML ベースのワークブックを使用して Oracle9iAS Reports に渡されます。ワークブックは、Oracle9iAS Reports を使用して変更できる Oracle9iAS Reports 互換の書式に変換されます。

Oracle9iAS Reports では元の Discoverer ワークブックのロック・アンド・フィールが保持されるため、Oracle9iAS Reports ユーザーはスタンドアロンで Oracle9iAS Report の作業を継続できます。つまり、Oracle9iAS Reports ユーザーがファイルを拡張するために、Discoverer サーバーに引き続き接続する必要はありません。

詳細は『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Oracle9iAS Web Cache とともに Discoverer を使用する方法

Oracle9iAS Web Cache を使用すれば、Web サイトのパフォーマンスが改善され、E-Business を支援できます。Oracle Web Cache は、Web サイトのパフォーマンス、拡張性および可用性を向上する、コンテンツを意識したサーバー・アクセラレータで、Oracle9i Application Server および Oracle8i 以上のデータベース上で実行されます。Oracle9iAS により提供される最新のキャッシング技術を採用することで、高いアクセス可能性が達成されています。

Oracle9iAS Web Cache を使用すれば、頻繁にアクセスされる URL がメモリに格納されるため、アプリケーション Web サーバー上でこれらの URL に対する要求を繰り返し処理する必要がなくなります。静的な文書のみを扱うレガシー・プロキシ・サーバーとは異なり、Oracle9iAS Web Cache では、1 台以上のアプリケーション Web サーバーで静的および動的に生成されたコンテンツがキャッシュされます。Oracle9iAS Web Cache ではレガシー・プロキシ・サーバーよりも多くのコンテンツをキャッシュできるため、アプリケーション Web サーバーに対する負荷が大幅に軽減され、最適なパフォーマンスが実現されます。

詳細は『Oracle9iAS Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

Oracle9i Warehouse Builder とともに Discoverer を使用方法

Oracle9i Warehouse Builder (OWB) を使用すれば、Discoverer のメタデータを生成できます。OWB および Discoverer Bridge を使用すれば、OWB のメタレイヤーにアクセスして Discoverer のエクスポートファイル (.EEX ファイル) を作成できます。.EEX ファイルは、Discoverer Administrator を使用して Discoverer EUL にインポートできます (詳細は、[第3章の「インポート・ウィザードによるファイルからの EUL オブジェクトのインポート方法」](#)を参照)。Discoverer の EUL に、OWB からのフォルダとアイテムの属性が保持されます。

Oracle9iAS Single Sign-On Server とともに Discoverer を使用方法

Oracle9iAS Single Sign-On Server は、Oracle9iAS Portal の内部または外部の Web ベース・クライアントが Oracle の Single Sign-On (SSO) サービスを利用できるようにするフレームワークを提供します。Oracle9iAS Single Sign-On Server は、すべてのユーザー資格証明の格納と管理のための手段を提供する LDAP サーバーで使します。

Oracle9iAS Portal とともに Discoverer を使用方法

Discoverer のワークブックとワークシートを Oracle9iAS Portal にすばやく簡単に公開できます。Oracle9iAS Portal の直観的なユーザー・インタフェースによって公開プロセスがステップごとに示されるため、強力なビジネス・インテリジェンス・ポータルを簡単に作成できます。

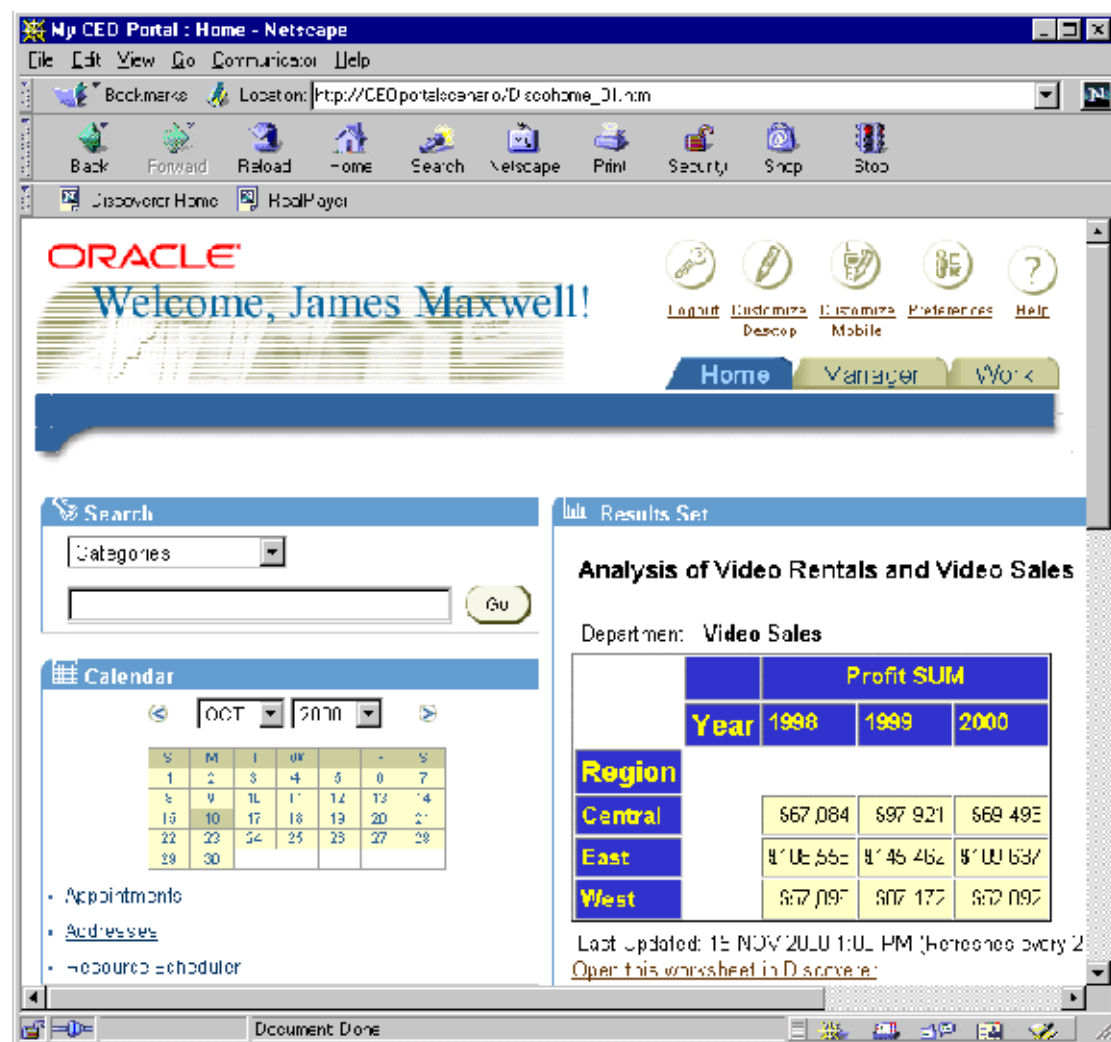
この項では、Oracle9iAS Portal を使用した Discoverer コンテンツの公開方法について説明します。この項のトピックは次のとおりです。

- [Oracle9iAS Portal](#)
- [Oracle9iAS Portal の詳細](#)
- [Oracle9iAS Portal で Discoverer コンテンツを公開するための要件](#)
- [Discoverer で使用可能なポートレットの種類](#)
- [ポートレットの追加方法](#)
- [データベースに保存されているワークブックのリスト・ポートレットの追加方法](#)
- [ワークシート・ポートレットの追加方法](#)
- [ポートレットの編集方法](#)

Oracle9iAS Portal

Oracle9iAS Portal を使用すれば、技術的知識のないビジネス・ユーザーが企業情報ポータル (EIP) を作成できます。EIP とは、企業のアプリケーション・スイートとの個人別の単一の対話を提供するインターネット・サイトまたはイントラネット・サイトです。また、EIP を利用すれば、一貫性のあるルック・アンド・フィールをユーザーに提供できます。EIP は特に、様々な情報プロバイダに簡単にアクセスできるように設計されており、個々のユーザーの必要に応じてプロバイダの表示を調整できます。

図 18-1 Oracle9iAS Portal 3.0 を使用して開発された企業情報ポータル

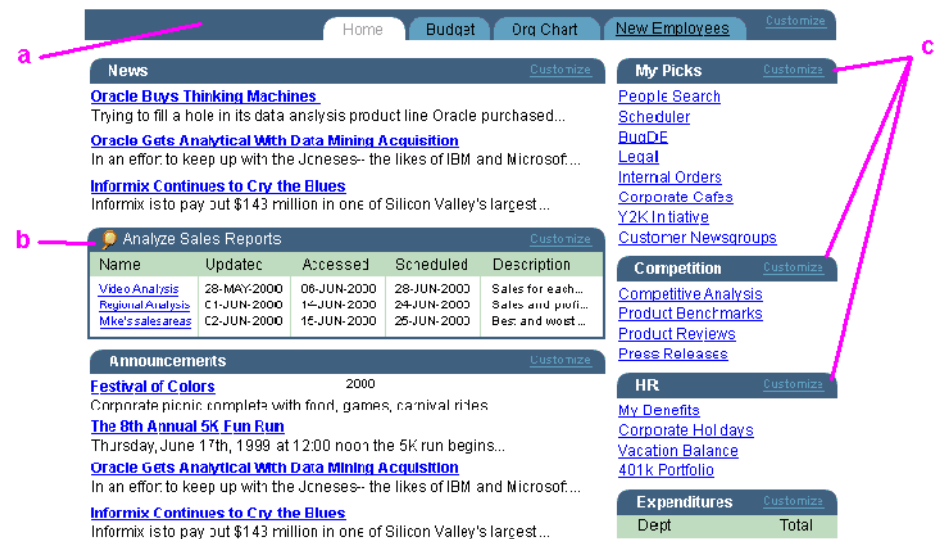


Oracle9iAS Portal の詳細

Oracle9iAS Portal は、EIP の作成およびメンテナンスのための使用しやすいフレームワークを提供します。Oracle9iAS Portal を使用すれば、様々な領域（ポートレットと呼ばれます）から構成されるビジネス・ポータルを定義できます。ユーザーおよびグループごとにポートレットの表示をカスタマイズできます。

たとえば、次の例は EIP のビジネス・インテリジェンス（BI）・ポートレットを示しています。この BI ポートレット（Analyze Sales Reports）には、3 つの Discoverer ワークブック（Video Analysis、Regional Analysis、Mike's sales areas）へのリンクが含まれています。ユーザーには、各自の必要に応じて異なる BI アプリケーションが表示されます。

図 18-2 ビジネス・インテリジェンス・ポートレットを含む EIP の例



図の要点：

- a. EIP ページ。
- b. Discoverer ワークブックへのリンクを含むビジネス・インテリジェンス・ポートレット。
- c. 様々な情報プロバイダのその他のポートレットの例。たとえば、一般的に使用されるアプリケーション（My Picks）、競合他社分析（Competition）および人的資源（HR）。

Oracle9iAS Portal で Discoverer コンテンツを公開するための要件

Oracle9iAS Portal で Discoverer コンテンツを公開するための要件は、次のとおりです。

- Discoverer を Oracle9iAS Portal として登録すること — 詳細は『Oracle9iAS Portal 構成ガイド』を参照。
- Discoverer データベース・アカウント。
- Oracle9iAS Portal ユーザーとしての認証 — つまり、Oracle9iAS Portal へのログイン。
- Oracle9iAS Portal でページの作成またはカスタマイズを行う権限（これにより、ポータル・ページへのポートレットの追加、あるいはポータル・ページのポートレットのカスタマイズが可能になります）。

注意

ページの作成または編集を行う権限が必要な場合は、Oracle9iAS Portal 管理者に問い合わせてください。

Discoverer で使用可能なポートレットの種類

Discoverer ユーザーは、Discoverer コンテンツ用に次の 2 種類のポートレットを作成できます。

- データベースに保存されているワークブックのリスト・ポートレット — 「[データベースに保存されているワークブックのリスト・ポートレット](#)」を参照。
- ワークシート・ポートレット — 「[ワークシート・ポートレット](#)」を参照。

Discoverer コンテンツは最初の公開時に生成されますが、オプションで定期的にリフレッシュすることもできます。

データベースに保存されているワークブックのリスト・ポートレット

データベースに保存されているワークブックのリスト・ポートレットには、Discoverer ワークブックへの URL リンクが含まれます。ワークブック・ポートレットの URL リンクをクリックすると、選択されたワークブックが Discoverer Viewer で開かれます。Discoverer Viewer 内で、ピボットまたはドリルなど Discoverer の強力な分析機能を使用できます。

次の図では、Analyze Sales Reports ポートレットに 3 つの URL リンク（Video Analysis、Regional Analysis、Mike's sales areas へのリンク）が含まれています。

図 18-3 Oracle9iAS Portal ページのワークブック・ポートレット

Analyze Sales Reports					Customize
Name	Updated	Accessed	Scheduled	Description	
Video Analysis	28-MAY-2000	06-JUN-2000	28-JUN-2000	Sales for each...	
Regional Analysis	01-JUN-2000	14-JUN-2000	24-JUN-2000	Sales and profi...	
Mike's sales areas	02-JUN-2000	15-JUN-2000	25-JUN-2000	Best and worst...	

ワークシート・ポートレット

ワークシート・ポートレットには、Discoverer のワークシートとグラフが含まれます。

注意：リンクが提供されることにより、ユーザーは詳細な分析（ドリルまたはピボットなど）のために Discoverer Viewer でワークシートを開くことができます。

次の図では、各地域の 2 年間の利益値を分析するための Discoverer ワークシートがワークシート・ポートレットに含まれています。

図 18-4 Oracle9iAS Portal ページのワークシート・ポートレット

US Profit Regions					Customize
		Profit SUM			
		Year	2001	2002	
Region	City				
Central			\$74,735	\$95,486	
East			\$115,690	\$147,786	
West			\$65,113	\$80,115	

ポートレットの追加方法

Discoverer ポートレットは、次の 2 つのステップで作成します。

- デフォルト設定でポートレットを追加します（詳細は、「データベースに保存されているワークブックのリスト・ポートレットの追加方法」および「ワークシート・ポートレットの追加方法」を参照）。
- 必要に合せてポートレットを編集し、結果をポータル・ユーザーに公開します（詳細は「ポートレットの編集方法」を参照）。

注意

- Oracle9iAS Portal のツールバーとウィザードの使用方法的詳細は、Oracle9iAS Portal のオンライン・ヘルプを参照してください。
- ポートレット・ページを編集するときに使用する「デフォルトの編集」オプションと「カスタマイズ」オプションは次のように異なります。

- 「デフォルトの編集」ー このモードでは、変更がページのユーザーすべてに対して表示されます。
- 「カスタマイズ」ー このモードでは、変更が変更者に対してのみ表示されます。

データベースに保存されているワークブックのリスト・ポートレットの追加方法

Discoverer ワークブック・リンクを Oracle9iAS Portal のページに提供する場合は、データベースに保存されているワークブックのリスト・ポートレットを追加します。たとえば、販売ワークブックへのリンクを販売部門の従業員に公表する場合などです。

詳細は、次の項目を参照してください。

「データベースに保存されているワークブックのリスト・ポートレット」

データベースに保存されているワークブックのリスト・ポートレットを追加する手順は、次のとおりです。

1. インターネット・ブラウザを起動します。
2. Discoverer ポートレットを追加するポータル・ページを表示します。
3. ログインしていない場合は「ログイン」をクリックし、ログインの詳細を入力します。
4. 「ページの編集」をクリックして、「ページのコンテンツの変更」ページを表示します。



5. 「ポートレットの追加」アイコンをクリックして、「ポートレットを領域に追加」ページを表示します。

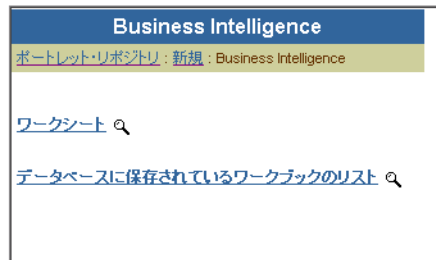
ポートレットを追加するには、ポートレットを「使用可能なポートレット」リストから「選択したポートレット」リストに移動します。

6. 「使用可能なポートレット」フィールドで「Discoverer」を選択するか、あるいはポートレットを配置する場所にナビゲートします。

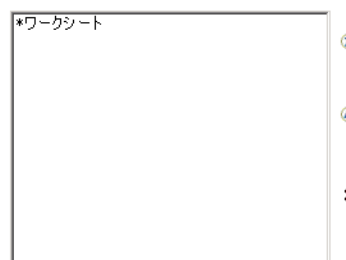
ポートレットを領域に追加

適切なプロパティまでドリル・ダウンしてから、ポートレット名をクリックして、この領域にポートレットを追加します。

使用可能なポートレット

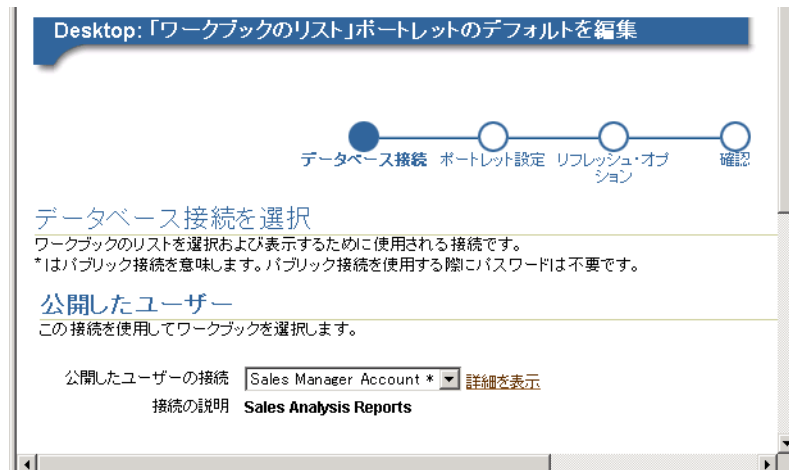


選択したポートレット



2 種類の Discoverer ポートレット（「ワークシート」および「データベースに保存されているワークブックのリスト」）が表示されます。

7. 「データベースに保存されているワークブックのリスト」をクリックして、ポートレットを「選択したポートレット」リストに追加します。
8. 「OK」をクリックして、「ポートレットを領域に追加」ページを閉じます。
ポートレットを追加したら、必要に応じてポートレットを編集できます。
9. 作成したポートレットの隣の「デフォルトの編集」をクリックして、ポートレット・ウィザードを起動します。



- 10. 「データベース接続」 ページを使用して、ポートレット・ユーザーがポートレットにアクセスする方法を指定します。
- 11. 「ポートレット設定」 ページを使用して、ポートレット名、ワークブックの表示順序、表示するワークブックの最大数を指定します。たとえば、10 個のワークブックをアルファベット順に表示できます。
- 12. 「リフレッシュ・オプション」 ページを使用して、ワークブック・リストをリフレッシュする時期を指定します。
- 13. 「確認」 ページを使用して、正しいポートレット・オプションが選択されていることを確認します。
- 14. 「完了」 をクリックして、デフォルト設定を保存します。

ポートレットに Discoverer ワークシートが表示されます。ポートレットが Discoverer ワークシートの内容を初めて取得する場合は、多少時間がかかります。

ワークシート・ポートレットの追加方法

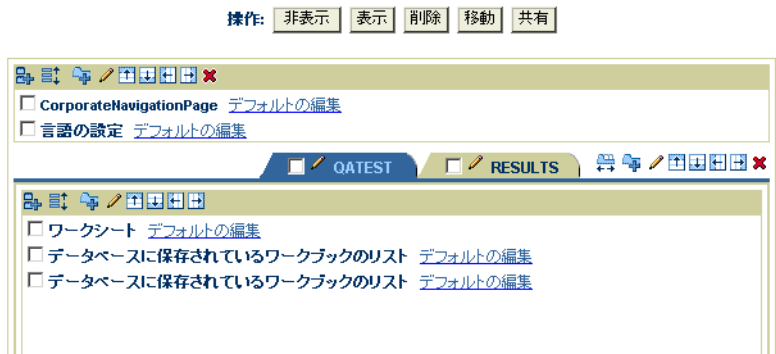
Discoverer ワークシートのデータを Oracle9iAS Portal のページに追加するときに、ワークシート・ポートレットを追加します。たとえば、販売レポートを販売部門の従業員に公表する場合などです。

詳細は、次の項目を参照してください。

「ワークシート・ポートレット」

ワークシート・ポートレットを追加する手順は、次のとおりです。

- 1. Discoverer ポートレットを追加するポータル・ページを表示します。
- 2. 「ページの編集」 をクリックして、「ページのコンテンツの変更」 ページを表示します。



3. 「ポートレットの追加」アイコンをクリックして、「ポートレットを領域に追加」ページを表示します。

ポートレットを追加するには、ポートレットを「**使用可能なポートレット**」リストから「**選択したポートレット**」リストに移動します。

4. 「**使用可能なポートレット**」フィールドで「**Discoverer**」を選択するか、あるいはポートレットを配置する場所にナビゲートします。

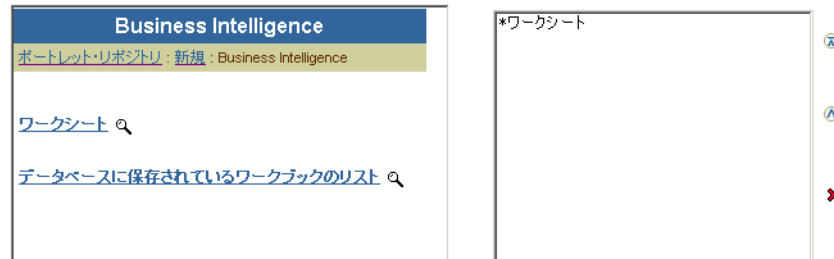
2 種類の Discoverer ポートレット（「ワークシート」および「データベースに保存されているワークブックのリスト」）が表示されます。

ポートレットを領域に追加

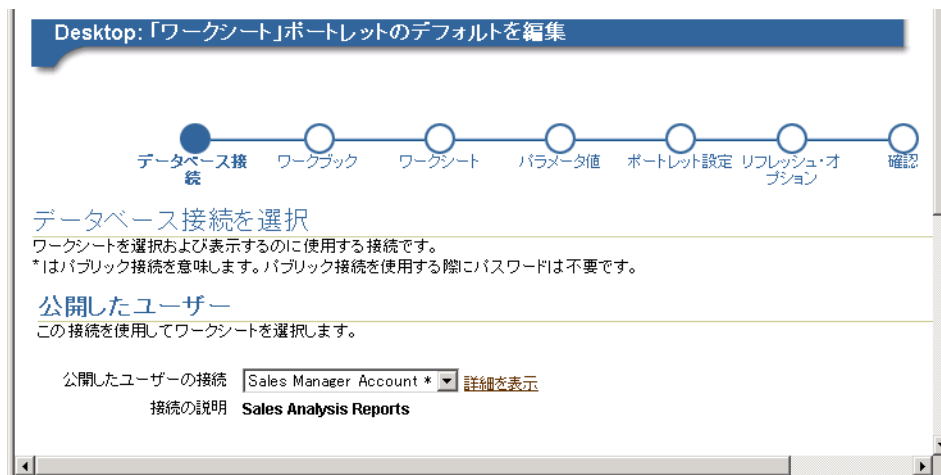
適切なプロパティまでドリル・ダウンしてから、ポートレット名をクリックして、この領域にポートレットを追加します。

使用可能なポートレット

選択したポートレット



5. 「ワークシート」をクリックして、ポートレットを「**選択したポートレット**」リストに追加します。
6. 「OK」をクリックして、「ポートレットを領域に追加」ページを閉じます。
ポートレットを追加したら、必要に応じてポートレットを編集できます。
7. 作成したポートレットの隣の「**デフォルトの編集**」をクリックして、ポートレット・ウィザードを起動します。



8. 「データベース接続」 ページを使用して、ポートレット・ユーザーがポートレットにアクセスする方法を指定します。
9. 「ワークブック」 ページを使用して、ワークシートを格納するワークブックを指定します。
10. 「ワークシート」 ページを使用して、ポータルに公開するワークシートを指定します。
11. (オプション) ワークシートにパラメータが定義されている場合は、「パラメータ値」 ページを使用してパラメータ値を指定します。パラメータ値は、ワークシートへの動的な入力を可能にするために使用されます。たとえば、特定の情報に焦点を絞ったり、ユーザー定義アイテムへの入力を可能にするために使用されます。
12. 「ポートレット設定」 ページを使用して、公開するワークシートの部分を指定します。たとえば、ワークシート・データのみ、ワークシートのグラフのみ、あるいはワークシート・データとワークシートのグラフの両方を公開できます。
13. 「リフレッシュ・オプション」 ページを使用して、ワークシート・データをリフレッシュする時期を指定します。
14. 「確認」 ページを使用して、正しいポートレット・オプションが選択されていることを確認します。
15. 「完了」 をクリックして、デフォルト設定を保存します。

ポートレットに **Discoverer** ワークシートが表示されます。ポートレットが **Discoverer** ワークシートの内容を初めて取得する場合は、多少時間がかかります。

ポートレットの編集方法

ポータル・ユーザーに対するポートレットの表示方法を変更する場合は、ポートレットを編集します。

ポートレットを編集する手順は、次のとおりです。

1. 編集するポートレットを含む「ポートレット・プロバイダー」ページを表示します。
2. 「ページの編集」をクリックして、「ページのコンテンツの変更」ページを表示します。



3. 編集するポートレットの隣の「デフォルトの編集」をクリックして、各ポートレット（「データベースに保存されているワークブックのリスト」または「ワークシート」）のポートレット・ウィザードを起動します。
4. ポートレット・ウィザードのステップに従います。
5. 「完了」をクリックして、ポートレットへの変更を保存します。

ポートレットに、更新された Discoverer ワークシートが表示されます。

EUL ステータス・ワークブック

EUL ステータス・ワークブック

この章では、Discoverer Administrator の EUL ステータス・ワークブックの使用方法について説明します。この章のトピックは次のとおりです。

- [EUL ステータス・ワークブック](#)
- [Discoverer EUL V5 のビジネスエリアについて](#)
- [標準的な EUL ステータス・ワークブックのインストール方法](#)
- [Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックのインストール方法](#)
- [Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックの実行方法](#)
- [Discoverer EUL V5 のビジネスエリアのアンインストール方法](#)
- [EUL データ定義ワークブックについて](#)
- [問合せ統計ワークブックについて](#)
- [EUL ステータス・ワークブックと表 DBA_JOBS_RUNNING に関する注意](#)

EUL ステータス・ワークブック

EUL ステータス・ワークブックとは、Discoverer End User Layer (EUL) の管理と文書化に役立つレポートを提供する Discoverer ワークブックです。EUL ステータス・ワークブックにより、Discoverer EUL V5 ビジネスエリアのフォルダからの情報が問い合わせられます。Discoverer Desktop/Plus または Discoverer Viewer で EUL ステータス・ワークブックを分析できます。

任意の Discoverer ユーザーに EUL ステータス・ワークブックへのアクセス権を付与できます。ただし、EUL ステータス・ワークブックの主要な用途は管理です。

Discoverer では、次の EUL ステータス・ワークブックが提供されています。

- [EUL データ定義](#) — このワークブックには EUL 内のデータに関する情報が含まれます。
- [問合せ統計](#) — このワークブックには Discoverer により収集される問合せ統計が含まれます。

各ワークブックの使用方法は、個別のワークシートに記載されています。

Discoverer ではこれらの EUL ステータス・ワークブックが提供されていますが、デフォルトではインストールされません。ワークブックのインストール方法は、次のように EUL の種類によって異なります。

- [標準的な EUL](#) に対して Discoverer を実行する場合は、「[標準的な EUL ステータス・ワークブックのインストール方法](#)」の指示に従ってください。
- [Oracle Applications EUL](#) に対して Discoverer を実行する場合は、「[Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックのインストール方法](#)」の指示に従ってください。

EUL ステータス・ワークブックは、<ORACLE_HOME>\discoverer902 ディレクトリにインストールされます。

EUL ステータス・ワークブックをインストールすると、次の処理が可能になります。

- Discoverer EUL V5 のビジネスエリアの編集
- 提供されている EUL ステータス・ワークブックの編集
- ユーザー自身の EUL ステータス・ワークブックの作成

EUL ステータス・ワークブックを実行できるのは、Oracle データベースに対してのみであることに注意してください。

Discoverer EUL V5 のビジネスエリアについて

要件に応じてワークブックまたは Discoverer EUL V5 のビジネスエリアを編集できます。また、ユーザー自身の EUL ステータス・ワークブックを作成することもできます。

Discoverer EUL V5 のビジネスエリアは、EUL 内のその他のビジネスエリアに似ています。Discoverer EUL V5 のビジネスエリア内のフォルダは次のとおりです。

フォルダ	説明
BA & Folders	EUL 内の定義済みビジネスエリアおよびフォルダ
Folders & Items	EUL 内の定義済みフォルダおよびアイテム
Joins	EUL 内の定義済み結合の構造
Hierarchies	階層の構造
Item Classes	アイテム・クラスまたは値リストの構造
Summary Mappings	フォルダへのサマリー表のマッピング
Security	ビジネスエリアへのユーザー・アクセス
Privileges	ユーザーの Discoverer 権限
Workbook Management	データベースに保存されたワークブックとそれらのワークブックにアクセスできるユーザーのリスト

Discoverer EUL V5 のビジネスエリアを使用すれば、Discoverer ビジネスエリアの構造の分析と文書化のために独自のワークブックを作成できます。

Discoverer EUL V5 の一部のフォルダでは、EUL 所有者に DBA_JOBS_RUNNING データベース表への SELECT アクセス権限が必要であることに注意してください。詳細は、「[EUL ステータス・ワークブック](#)と表 [DBA_JOBS_RUNNING](#)に関する注意」を参照してください。

提供されている EUL ステータス・ワークブックを変更する場合は、異なる名前でコピーを保存し、そのコピーを変更することをお勧めします。そうしないと、提供されている EUL ステータス・ワークブックが Discoverer の各新規バージョンで置き換えられるため、変更が失われることがあります。

標準的な EUL ステータス・ワークブックのインストール方法

標準的な EUL に対して Discoverer を実行する場合は、次の手順に従います。

注意：EUL をインストールしている必要があります（詳細は、[第 3 章の「End User Layer の作成とメンテナンス」](#)を参照）。

標準的な EUL ステータス・ワークブックをインストールする手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、EUL 所有者として接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect jchan/tiger
```

jchan は EUL 所有者、tiger は EUL 所有者のパスワードです。

2. SQL ファイル EUL5.sql を実行します。

たとえば、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> start <ORACLE_HOME>%discoverer902%sql%EUL5.sql
```

<ORACLE_HOME> は Discoverer Administrator がインストールされている場所です。

EUL5.sql ファイルにより、Discoverer EUL V5 のビジネスエリアで必要とされる一部のユーザー定義 PL/SQL 関数が作成されます。

3. SQL*Plus セッションを終了します。
4. Discoverer Administrator を起動します。
5. 次の手順で、ファイル EUL5.eex をインポートします。
 - a. 「ファイル」→「インポート」を選択して、[「インポート・ウィザード ステップ 1」ダイアログ](#)を表示します。
 - b. 「追加 ...」ボタンをクリックして、「開く」ダイアログを表示します。
 - c. ファイル <ORACLE_HOME>%discoverer902%EUL5.eex を選択します。
<ORACLE_HOME> は Discoverer Administrator がインストールされている場所です。

- d. 「開く」をクリックして、「[インポート・ウィザード ステップ 1](#)」ダイアログに戻ります。
選択した SQL ファイル EUL5.eex がインポート・ファイル・リストに表示されます。
- e. 「次へ」をクリックして、「[インポート・ウィザード ステップ 2](#)」ダイアログを表示します。
デフォルト設定を受け入れます。
- f. 「次へ」をクリックして、「[インポート・ウィザード ステップ 3](#)」ダイアログを表示します。
このダイアログでは、インポートを開始して、各 EUL オブジェクトが処理される
ときの状態を監視できます。
- g. 「開始」をクリックして、EUL ステータス・ワークブックのインポートを開始しま
す。
インポートが完了すると、「インポートに成功しました。」というメッセージが表示
されます。
- h. 「完了」をクリックして、「[インポート・ウィザード ステップ 3](#)」ダイアログを閉じ
ます。

EUL ステータス・ワークブックのインポートが完了すれば、Discoverer Desktop/Plus また
は Discoverer Viewer を使用して EUL ステータス・ワークブックを開くことができます。

注意

Discoverer バージョン 4 からアップグレードした場合は、EUL に EUL for Discoverer V4 と
呼ばれるビジネスエリアが含まれることがあります。このビジネスエリアは必要ないので、
削除してください。EUL for Discoverer V4 ビジネスエリアを削除する際、関連する次の
PL/SQL 関数も削除します。

EUL4_GET_ANALYZED
EUL4_GET_COMPLEX_FOLDER
EUL4_GET_HEIRLVL
EUL4_GET_HIERORD
EUL4_GET_ITEM
EUL4_GET_ITEM_NAME
EUL4_GET_OBJECT
EUL4_GET_OBJECT_NAME
EUL4_GET_SIMPLE_FOLDER

ヒント: PL/SQL 関数の削除方法の詳細は、「[Discoverer EUL V5 のビジネスエリアのアンイ
ンストール方法](#)」を参照してください。

Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックのインストール方法

Oracle Applications の EUL に対して Discoverer を実行する場合は、次の手順に従います。

注意： Oracle Applications の EUL をインストールしている必要があります（詳細は、[第 17 章の「Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方法」](#)を参照）。

Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックをインストールする手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、EUL 所有者として接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect jchan/tiger
```

jchan は EUL 所有者、tiger は EUL 所有者のパスワードです。

2. SQL ファイル EUL5_APPS.sql を実行します。

たとえば、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> start <ORACLE_HOME>%discoverer902%sql%EUL5_APPS.sql
```

<ORACLE_HOME> は Discoverer Administrator がインストールされている場所です。

EUL5_APPS.sql ファイルにより、Discoverer EUL V5 のビジネスエリアで必要とされる一部のユーザー定義 PL/SQL 関数が作成されます。

Oracle Applications の FNDNAM スキーマのユーザー名を入力するように求められます。

3. FNDNAM スキーマのユーザー名を入力します。

注意： FNDNAM スキーマのユーザー名のみ入力してください。パスワードは入力しないでください。

入力したユーザー名の確認を求められます。

4. 入力したユーザー名が正しいことを確認します。
ユーザー名が正しくない場合は、スクリプトを再実行します。
5. Discoverer Administrator を起動します。
6. 次の手順で、ファイル EUL5_APPS.eex をインポートします。
 - a. 「ファイル」→「インポート」を選択して、[「インポート・ウィザード ステップ 1」ダイアログ](#)を表示します。
 - b. 「追加 ...」ボタンをクリックして、「開く」ダイアログを表示します。

- c. ファイル <ORACLE_HOME>\discoverer902\EUL5_APPS.eex を選択します。
<ORACLE_HOME> は Discoverer Administrator がインストールされている場所です。
- d. 「開く」をクリックして、「[インポート・ウィザード ステップ 1](#)」ダイアログに戻ります。

選択した SQL ファイル EUL5_APPS.eex がインポート・ファイル・リストに表示されます。
- e. 「次へ」をクリックして、「[インポート・ウィザード ステップ 2](#)」ダイアログを表示します。

デフォルト設定を受け入れます。
- f. 「次へ」をクリックして、「[インポート・ウィザード ステップ 3](#)」ダイアログを表示します。

このダイアログでは、インポートを開始して、各 EUL オブジェクトが処理される
ときの状態を監視できます。
- g. 「開始」をクリックして、EUL ステータス・ワークブックのインポートを開始しま
す。

インポートが完了すると、「インポートに成功しました。」というメッセージが表示
されます。
- h. 「完了」をクリックして、「[インポート・ウィザード ステップ 3](#)」ダイアログを閉じ
ます。

EUL ステータス・ワークブックのインポートが完了すれば、Discoverer Desktop/Plus また
は Discoverer Viewer を使用して EUL ステータス・ワークブックを開くことができます。

Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックの実行方法

Discoverer Plus で Oracle Applications の EUL とともに EUL ステータス・ワークブックを実行するには、Oracle Applications のユーザーまたは職責で接続する必要があります。EUL 所有者としてステータス・ワークブックを実行することはできません。

Oracle Applications の EUL ステータス・ワークブックを実行する手順は、次のとおりです。

1. EUL 所有者として Discoverer Administrator を起動します。
2. Oracle Applications のユーザーまたは職責のいずれかに、EUL5 ビジネスエリアへのアクセス権限を付与します。

ビジネスエリアへのアクセス権付与の詳細は、[第7章の「情報に対するアクセス制御」](#)を参照してください。
3. アクセス権限を付与したユーザーまたは職責で Discoverer Desktop/Plus または Discoverer Viewer を起動します。

注意

EUL ステータス・ワークブックは PUBLIC ユーザーと共有され、EUL 所有者により所有されます。つまり、Discoverer EUL V5 のビジネスエリアにアクセスできるすべてのユーザーが、EUL データ定義ワークブックおよび問合せ統計ワークブックの両方を実行できます。

Discoverer EUL V5 のビジネスエリアのアンインストール方法

Discoverer EUL V5 のビジネスエリアをアンインストールする手順は、次のとおりです。

1. EUL 所有者として Discoverer Desktop/Plus に接続し、次のワークブックを削除します。
 - EUL データ定義
 - 問合せ統計
2. Discoverer EUL V5 のビジネスエリアを含む EUL の所有者として Discoverer Administrator を起動します。
3. Discoverer EUL V5 のビジネスエリアを開きます。
4. ワークエリア内の Discoverer EUL V5 のビジネスエリアを強調表示します。
5. 「編集」→「削除」を選択して、「ビジネス エリア削除の確認」ダイアログを表示します。
6. 「ビジネス エリアおよび含まれているフォルダを削除」を選択します。
7. 「はい」をクリックして、Discoverer EUL V5 のビジネスエリアとその中に含まれているフォルダを削除します。

Discoverer EUL V5 のビジネスエリアに関連する PL/SQL 関数を削除できます。

8. 「ツール」 → 「PL/SQL 関数の登録」 を選択して、「PL/SQL 関数」 ダイアログを表示します。
9. 次の関数を強調表示します。

EUL5_GET_ANALYZED
EUL5_GET_APPS_USERRESP
EUL5_GET_COMPLEX_FOLDER
EUL5_GET_HEIRLVL
EUL5_GET_HIERORD
EUL5_GET_ISITAPPS_EUL
EUL5_GET_ITEM
EUL5_GET_ITEM_NAME
EUL5_GET_OBJECT
EUL5_GET_OBJECT_NAME
EUL5_GET_SIMPLE_FOLDER
10. 各関数について「削除」をクリックして、Discoverer EUL V5 のビジネスエリアに関連するユーザー定義 PL/SQL 関数を削除します。

EUL ステータス・ワークブックが削除されます。

EUL データ定義ワークブックについて

EUL データ定義ワークブックにより、EUL に含まれるオブジェクトに関するレポートが提供されます。EUL データ定義ワークブックを使用すれば、EUL オブジェクトの構成方法について詳しく知ることができます。このワークブックは、次のワークシートから構成されます。

ワークシート	説明
EUL バージョン	現在使用中の Discoverer EUL のバージョン
ビジネスエリアとフォルダ	各ビジネスエリア内のフォルダ
フォルダとアイテム	各ビジネスエリア内の各フォルダ内のアイテム
結合	各ビジネスエリア内の定義済み結合
条件	各ビジネスエリア内の定義済み条件
階層	各ビジネスエリア内の定義済み階層
アイテム・クラス - 値リスト	各ビジネスエリア内の定義済み値リスト
セキュリティ	ユーザー、ロールまたは職責別の、ビジネスエリアへのアクセス
権限	ユーザー、ロールまたは職責別の、アクセス権限
サマリー・マッピング	ビジネスエリア別の、サマリーへのフォルダのマッピング

ワークシート	説明
ワークブック管理	データベースに保存されたワークブックとそれらのワークブックにアクセスできるユーザーのリスト

問合せ統計ワークブックについて

問合せ統計ワークブックには、エンド・ユーザーが実行した問合せに関する統計情報が表示されます。問合せ統計ワークブックを使用すれば、エンド・ユーザー問合せの性質について詳しく知ることができます。このワークブックは、次のワークシートから構成されます。

ワークシート	説明
問合せ統計	現在接続している Discoverer EUL のバージョン
ユーザーが問い合わせたワークブック	ユーザーが問い合わせたワークブック
ワークブック問合せ統計	各ワークブックに関する問合せ統計
サマリーを使用したワークブック	サマリーを使用したワークブック
ユーザーによる非定型な問合せ	問い合わせされたがデータベースに保存されていないユーザー、フォルダおよびアイテム
ワークブックによる非定型な問合せ	問い合わせされたがデータベースに保存されていないワークブック
サマリーを使用した非定型な問合せ	サマリーを使用した、データベースに保存されていない問合せ

EUL ステータス・ワークブックと表 DBA_JOBS_RUNNING に関する注意

Discoverer EUL V5 のビジネスエリア内の一部のフォルダ（特に、EUL5_DBA_JOBS_RUNNING フォルダ）では、EUL 所有者が DBA_JOBS_RUNNING データベース表への SELECT アクセス権限を持つ必要があります。この表への SELECT アクセス権限がない場合は、権限が不十分であることを示す ORA-01031 メッセージが表示されます。

DBA_JOBS_RUNNING への SELECT アクセス権限を付与する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、DBA 権限を持つユーザーとして接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect dba_user/dba_password
```

2. コマンド・プロンプトで次のように入力して、DBA_JOBS_RUNNING への SELECT アクセス権限を EUL 所有者に付与します。

```
SQL> grant select on dba_jobs_running to <EUL owner>;  
SQL> commit;
```

EUL 所有者が DBA_JOBS_RUNNING データベース表へのアクセス権限を持っていることを確認する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、EUL 所有者として接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect jchan/tiger
```

jchan は EUL 所有者、tiger は EUL 所有者のパスワードです。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力して、DBA_JOBS_RUNNING データベース表を記述します。

```
SQL> desc DBA_JOBS_RUNNING
```

EUL 所有者が DBA_JOBS_RUNNING へのアクセス権限を持っている場合、表に列リストが表示されます。持っていない場合、オブジェクトが存在しないことを示すメッセージが表示されます。

問合せのパフォーマンスの予測

問合せのパフォーマンスの予測

この章では、Discoverer Administrator での問合せ予測の使用方法について説明します。この章のトピックは次のとおりです。

- [問合せのパフォーマンスの予測](#)
- [Discoverer Desktop/Plus での問合せ予測の機能](#)
- [問合せ予測が使用できなくなる理由](#)
- [問合せ予測の速度と精度を向上する方法](#)
- [問合せ予測に必要なデータベース・ビューを使用できるようにする方法](#)
- [問合せ予測のための `timed_statistics` パラメータの確認および変更方法](#)
- [データ表の分析方法](#)
- [問合せ予測のための `optimizer_mode` パラメータの確認および変更方法](#)
- [問合せ予測にかかる時間を短縮する方法](#)
- [Secure Views で問合せ予測を使用する方法](#)
- [古い問合せ予測統計の削除方法](#)

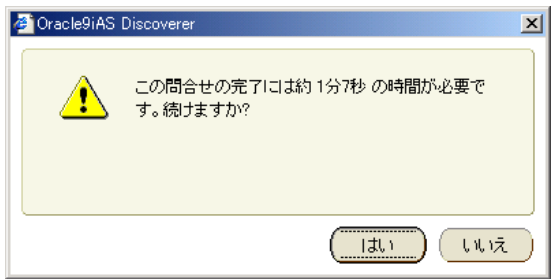
問合せのパフォーマンスの予測

Discoverer には、Discoverer 問合せによる情報の取得に必要な時間を予測する機能が備わっています。問合せの開始前に問合せ予測が表示されるため、Discoverer ユーザーは問合せを実行するかどうかを判断できます。この強力な機能により、Discoverer ユーザーは大きなレポートの待機に必要な時間を制御できます。

問合せ予測では、Oracle データベースでコストベースのオプティマイザ（CBO）が使用されます。このため、別のデータベースに対して実行されているときは問合せ予測を使用できません。

Discoverer Desktop/Plus での問合せ予測の機能

Discoverer エンド・ユーザーは、問合せが設定した時間を超えると予測される場合にそのことを通知するように指定できます。ダイアログに、問合せ予測の詳細と問合せをキャンセルするオプションが表示されます。



問合せのキャンセルを選択すると、ユーザーはその問合せが後で（深夜などに）実行されるようにワークブックをスケジュールできます。深夜に実行すれば、翌朝にワークシートを開くことができます（Discoverer Desktop/Plus でのワークブックのスケジュール方法の詳細は『Oracle9i Discoverer Desktop ユーザーズ・ガイド』または『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照）。Discoverer Administrator を使用したエンド・ユーザーによるワークブックのスケジュールを可能にする方法の詳細は第 8 章の「ワークブックのスケジュール」を参照してください。

問合せ予測が使用できなくなる理由

Discoverer エンド・ユーザーが、ワークシートの実行時に問合せ予測を使用できない場合があります。この理由を参照するには、Discoverer Administrator で「ヘルプ」→「データベース情報」を選択して、「データベース情報」ダイアログを表示します。問合せ予測が使用できなくなる理由は、次のとおりです。

表 20-1 問合せ予測が使用できなくなる理由と解決策

理由	解決策
問合せ予測をサポートしていないデータベース（Oracle 7.1.x など）に接続している。	データベースをアップグレードしてください。
問合せ予測に必要なビューが使用できない。	「問合せ予測に必要なデータベース・ビューを使用できるようにする方法」を参照してください。
init<sid>.ora の timed_statistics パラメータが FALSE（デフォルト値）に設定されている。	「問合せ予測のための timed_statistics パラメータの確認および変更方法」を参照してください。

表 20-1 問合せ予測が使用できなくなる理由と解決策（続き）

理由	解決策
データ表が分析されていない。	「 データ表の分析方法 」を参照してください。
init<sid>.ora の optimizer_mode パラメータが CHOOSE ではなく RULE に設定されている。	「 問合せ予測のための optimizer_mode パラメータの確認および変更方法 」を参照してください。

問合せ予測の速度と精度を向上する方法

問合せ予測の速度と精度に信頼性がある場合、ユーザーは実行に時間がかかる問合せを後で実行するようにスケジュールする傾向があります。問合せ予測が正確であれば、一般にサーバーへの負荷が軽減されるため、すべてのユーザーにとって問合せのパフォーマンスが向上します。

問合せ予測を効果的に実装する手順は、次のとおりです。

- ANALYZE TABLE コマンドを使用して、ユーザーが問い合わせる表を分析します。EUL データ定義ワークブックの「ビジネスエリアおよびフォルダ」ワークシートを使用して、EUL のフォルダがいつ分析されたかを表示します。データ表の分析方法の詳細は、「[データ表の分析方法](#)」を参照してください。
- システム・ビュー V\$SQL へのアクセス権をユーザーに付与します（詳細は、「[Secure Views で問合せ予測を使用する方法](#)」を参照）。

問合せ予測に必要なデータベース・ビューを使用できるようにする方法

Discoverer で問合せ予測を有効にする前に、様々なデータベース・ビューでパブリック・ユーザーに SELECT 権限を付与する必要があります。詳細は Oracle9i データベースのマニュアルを参照してください。

問合せ予測に必要なビューを使用できるようにする手順は、次のとおりです（Oracle9i データベースの場合）。

1. データベース管理者として SQL*Plus にログインします。
2. コマンド・プロンプトで次の SQL 文を実行します。

```
SQL> CONNECT username/password@database AS SYSDBA;
```

username には、次の権限付与を完了するための十分な権限が必要です。

3. コマンド・プロンプトで次のように入力して、問合せ予測に必要なビューでの SELECT アクセス権を付与します。

```
SQL> grant select on v_$session to public;  
SQL> grant select on v_$sesstat to public;  
SQL> grant select on v_$parameter to public;
```

注意：SELECT ON V_\$PARAMETER を付与するには、SYS ユーザーとしてログインする必要があります。SYS のユーザー名とパスワードが不明な場合は、データベース管理者に問い合わせてください。

問合せ予測に必要なビューを使用可能にする手順は、次のとおりです（Oracle9i より前のデータベースの場合）。

1. Windows NT で「スタート」→「ファイル名を指定して実行」を選択します。
2. 次のいずれかを入力します。
 - SVRMGRL（Oracle 8.0 の場合）
 - SVRMGR（Oracle8i Personal Edition の場合）
3. DBA ファシリティの場合は、「connect internal」と入力します。
4. コマンド・プロンプトで次のように入力して、問合せ予測に必要なビューでの SELECT アクセス権を付与します。

```
SQLDBA> grant select on v_$session to public;  
SQLDBA> grant select on v_$sesstat to public;  
SQLDBA> grant select on v_$parameter to public;
```

注意：SELECT ON V_\$PARAMETER を付与するには、SYS ユーザーとしてログインする必要があります。SYS のユーザー名とパスワードが不明な場合は、データベース管理者に問い合わせてください。

問合せ予測のための timed_statistics パラメータの確認および変更方法

Discoverer で問合せ予測を有効にするには、データベース・ビュー v_\$parameter にある timed_statistics パラメータを TRUE に設定する必要があります。

timed_statistics が TRUE に設定されていることを確認する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、DBA ユーザーとして接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect dba_user/dba_password@database
```

ここで、dba_user、dba_password はそれぞれ DBA ユーザーのユーザー名とパスワードであり、database は問合せ対象のデータが格納されているデータベースの名前です。

2. 次の問合せを入力します。

```
SQL> select value from v_$parameter where name = 'timed_statistics';
```

問合せにより値 TRUE が返された場合、timed_statistics パラメータは問合せ予測が使用できるように正しく設定されています。値 FALSE が返された場合、init<sid>.ora ファイルの timed_statistics パラメータの値を変更するまで問合せ予測を使用できません。

init<sid>.ora ファイルを編集する手順は、次のとおりです。

1. INIT<SID>.ORA ファイルを検索します。

INIT<SID>.ORA ファイルは、<ORACLE_HOME>%dbms にあります。このファイルのデフォルト名は INITORCL.ORA です。ORCL は <SID> 名を表します。

2. 次の行を含むようにファイルを編集します。

```
timed_statistics = TRUE
```

3. 変更を有効にするには、データベースをシャットダウンしてから再起動します。

データ表の分析方法

Discoverer では、問合せ予測にデータ表の分析結果が使用されます。データ表分析により、データベース表に関する情報（表のサイズなど）が生成されます。詳細は Oracle9i データベースのマニュアルを参照してください。

データ表を分析する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、分析するデータ表の所有者として接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect tabowner/tabpass@database
```

ここで、tabowner と tabpass はそれぞれデータ表所有者のユーザー名とパスワードであり、database は問合せ対象のデータが格納されているデータベースの名前です。

2. 次の問合せを入力します。

- Oracle 8.0 以上のデータベースの場合

```
SQL> analyze table <tabowner.tablename> compute statistics for all columns;
```

注意

時間の経過に伴って表の内容が大幅に変更されると予想される場合は、データ表を定期的に分析してください。

問合せ予測に時間がかかる（10 秒を超える）場合は、表が分析されていません。たとえば、Discoverer での問合せ予測の表示に 25 秒程度かかっても、問合せが 2 秒未満で実行される場合などがあります。

問合せ予測のための optimizer_mode パラメータの確認および変更方法

optimizer_mode パラメータが CHOOSE に設定されていることを確認する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し（まだ実行されていない場合）、DBA ユーザーとして接続します。

SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect dba_user/dba_password@database
```

ここで、dba_user、dba_password はそれぞれ DBA ユーザーのユーザー名とパスワードであり、database は問合せ対象のデータが格納されているデータベースの名前です。

2. コマンド・プロンプトで次の問合せを入力します。

```
SQL> select value from v$parameter where name = 'optimizer_mode';
```

問合せにより値 CHOOSE が返された場合、optimizer_mode パラメータは問合せ予測が使用できるように正しく設定されています。表が分析されている場合はシステムでコストベースのオプティマイザが使用され、表が分析されていない場合はルールベースのオプティマイザが使用されます。

問合せにより値 FIRSTROWS または ALLROWS が返された場合も、optimizer_mode パラメータは問合せ予測が使用できるように正しく設定されています。

表が分析されていない場合でも、FIRSTROWS および ALLROWS の両方が返されると、コストベースのオプティマイザが使用されます。

値 RULE が返された場合、init<sid>.ora ファイルの optimizer_mode パラメータの値を変更するまで問合せ予測を使用できません。

init<sid>.ora ファイルを編集する手順は、次のとおりです。

1. INIT<SID>.ORA を検索します。

INIT<SID>.ORA ファイルは、<ORACLE_HOME>%dbms にあります。このファイルのデフォルト名は INITORCL.ORA です。ORCL は <SID> 名を表します。

2. 次の行を含むようにファイルを編集します。

```
optimizer_mode = CHOOSE
```

3. 変更を有効にするには、データベースをシャットダウンしてから再起動します。

問合せ予測にかかる時間を短縮する方法

Discoverer では、問合せ予測の処理中にコストベースのオプティマイザが使用されます。コストベースのオプティマイザでは問合せ文のみが解析され、問合せの実行は通常、サーバーのデフォルト・オプティマイザ・モードで管理されることに注意してください。

スキーマが大きい環境（Oracle Applications など）では、コストベースのオプティマイザを使用したデータベースによる文の解析に時間がかかることがあります。この場合、問合せ予測処理が完了するまで数分かかることがあります。

問合せ予測の処理が完了するまでユーザーが長い時間待機する必要がある場合は、次の3つの解決策を検討してください。

- Discoverer の適切なレジストリ設定を使用して、問合せ予測を無効にできます。次に例を示します。

- Discoverer Desktop の場合

Windows レジストリで、

HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Oracle¥Discoverer 902¥Database¥QPPEnable レジストリ・キーの DWORD 値を 0（ゼロ）に設定します。

問合せ予測を再度有効にする場合は、このレジストリ・キーを削除するか、値を 1 に設定します。

Windows レジストリに格納されている Discoverer のレジストリ設定の詳細は、[第 22 章の「Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定」](#)を参照してください。

- Discoverer Plus および Discoverer Viewer の場合

Discoverer のレジストリ・ファイル reg_key.dc の QPPEnable レジストリ設定の値を変更します。QPPEnable を 01 00 00 00 に設定すると、問合せ予測が有効になります。問合せ予測を無効にするには、QPPEnable を 00 00 00 00 に設定します。

reg_key.dc ファイルに格納されている Discoverer のレジストリ設定の詳細は、[第 22 章の「Discoverer Plus および Discoverer Viewer のレジストリ設定」](#)を参照してください。

- Discoverer の適切なレジストリ設定を使用して、問合せ予測でコストベースのオプティマイザが強制的に使用されないようにできます。次に例を示します。

- Discoverer Desktop の場合

Windows レジストリで、

HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Oracle¥Discoverer 902¥Database¥QPPCBOEnforced レジストリ・キーの DWORD 値を 0（ゼロ）に設定します。

このレジストリ・キーを 0 に設定すると、コストベースのオプティマイザ（CBO）が強制的に使用されず、データベース・サーバーの通常のルールが適用されます。

問合せ予測で再度コストベースのオプティマイザが強制的に使用されるようにする場合は、このレジストリ・キーを削除するか、値を 1 に設定します。

Windows レジストリに格納されている Discoverer のレジストリ設定の詳細は、[第 22 章の「Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定」](#)を参照してください。

- Discoverer Plus および Discoverer Viewer の場合

Discoverer のレジストリ・ファイル reg_key.dc の QPPCBOEnforced レジストリ設定の値を変更します。QPPCBOEnforced を 01 00 00 00 に設定すると、問合せ予測でコストベースのオプティマイザが強制的に使用されます。問合せ予測でデフォルトのオプティマイザを使用するように指定するには、QPPCBOEnforced を 00 00 00 00 に設定します。

reg_key.dc ファイルに格納されている Discoverer のレジストリ設定の詳細は、[第 22 章の「Discoverer Plus および Discoverer Viewer のレジストリ設定」](#)を参照してください。

- コストベースのオプティマイザにおける索引の使用方法を調整できます。たとえば、次のデータベース・パラメータを調整できます。

- optimizer_index_cost_adj

- optimizer_index_caching

データベース・パラメータの詳細は Oracle9i のマニュアルを参照してください。

Secure Views で問合せ予測を使用する方法

Discoverer の問合せ予測機能では、EXPLAIN PLAN 文を使用して問合せが分析されます。ただし、EXPLAIN PLAN 文では Secure Views に対する問合せの分析ができません。このため、Secure Views に対する問合せを行う場合は問合せ予測が正常に機能できなくなります。この制限を回避するには、システム・ビュー V\$SQL へのアクセス権をユーザーに付与してください。

システム・ビュー V\$SQL へのアクセス権をユーザーに付与する手順は、次のとおりです (Oracle9i データベースの場合)。

1. データベース管理者として SQL*Plus にログインします。
2. コマンド・プロンプトで次の SQL 文を実行します。

```
SQL> CONNECT username/password@database AS SYSDBA;
```

3. コマンド・プロンプトで次のように入力して、問合せ予測に必要なビューでの SELECT アクセス権を付与します。

```
SQL> grant select on v$sql to public;
```

システム・ビュー V\$SQL へのアクセス権をユーザーに付与する手順は、次のとおりです (Oracle9i より前のデータベースの場合)。

1. Windows NT で「スタート」→「ファイル名を指定して実行」を選択します。
2. 次のいずれかを入力します。
 - SVRMGRL (Oracle 8.0 の場合)
 - SVRMGR (Oracle8i Personal Edition の場合)
3. DBA ファシリティの場合は、「connect internal」と入力します。
4. コマンド・プロンプトで次のように入力して、問合せ予測に必要なビューでの SELECT アクセス権を付与します。

```
SQLDBA> grant select on v$sql to public;
```

注意

SQL*Plus で次のスクリプトを実行しても、システム・ビュー V\$SQL へのアクセス権をユーザーに付与できません。

```
<ORACLE_HOME>%discoverer902%sql%eulsuqpp.sql
```

このスクリプトを使用するには、SYSTEM パスワードを知っておく必要があります。

古い問合せ予測統計の削除方法

様々な理由により、問合せ予測統計が不要になる場合があります。指定した日付より前に作成された問合せ予測統計をすべて削除できます。

データベースから古い問合せ予測を削除する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus を起動し (まだ実行されていない場合)、EUL 所有者として接続します。
SQL*Plus がすでに実行されている場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect jchan/tiger
```

ここで、jchan と tiger はそれぞれ EUL 所有者のユーザー名とパスワードです。

2. SQL ファイル EULstdel.sql を実行します。

たとえば、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> start <ORACLE_HOME>%discoverer902%sql%EULstdel.sql
```

<ORACLE_HOME> は Discoverer Administrator がインストールされている場所です。

データベースに格納されている問合せ統計のサマリーが表示されます。指定した日数を超える期間が経過した問合せ統計を削除するオプションがあります。

3. (オプション) 何日後に問合せ統計を削除するかを入力します (統計を削除しない場合は空白のままにしておきます)。

日数を指定しない場合、問合せ統計は削除されません。

Discoverer コマンドライン・インタフェース

Discoverer コマンドライン・インタフェース

この章では、Discoverer コマンドライン・インタフェースの使用方法について説明します。
この章のトピックは次のとおりです。

- [Discoverer コマンドライン・インタフェース](#)
- [コマンド](#)
- [コマンド修飾子](#)
- [Discoverer コマンドライン・インタフェースの使用について](#)
- [コマンドライン・インタフェースの実行に必要な権限](#)
- [コマンドの使用に関する注意](#)
- [このガイドで使用されるコマンド構文規則](#)
- [コマンドの構文](#)
- [コマンドの例](#)
- [コマンド・ファイル](#)
- [コマンド・ファイルの作成方法](#)
- [コマンド・ファイルの実行方法](#)
- [コマンド・ファイルの例](#)
- [Discoverer Administrator コマンドのクイック・ガイド](#)
- [Discoverer Administrator コマンド・リファレンス](#)
- [Discoverer Administrator コマンド修飾子リファレンス](#)
- [Discoverer Desktop コマンド・リファレンス](#)

Discoverer コマンドライン・インタフェース

Discoverer コマンドライン・インタフェースは、Discoverer グラフィカル・ユーザー・インタフェース (GUI) を実行せずに作業を実行できるテキスト・ベースのコマンドのセットです。たとえば、コマンドライン・インタフェースを使用して次のことができます。

- EUL オブジェクトのインポート
- EUL オブジェクトのエクスポート
- EUL オブジェクトのリフレッシュ

さらに、(MS-DOS バッチ・ファイルまたは Unix スクリプト・ファイルと同様に) 複数のコマンドを含むコマンド・ファイルを作成し、グループ化された管理作業を自動的に実行できます。

コマンド

Discoverer コマンドライン・インタフェースでは、コマンドで Discoverer Administrator または Discoverer Desktop に特定の作業の実行を指示します。次に例を示します。

- コマンド /CONNECT により、「[Oracle9i Discoverer Administrator に接続](#)」ダイアログをバイパスし、指定されたユーザー ID、パスワード、データベース名を使用して接続します。

```
dis51adm.exe /connect myname/mypassword@database
```

- コマンド /IMPORT により、現行の EUL に EUL オブジェクトをインポートします。

```
dis51adm.exe /connect myname/mypassword@database /import c:\data\sales.eex
```

注意：コマンドは大文字と小文字を区別しません（詳細は、「[コマンドの使用に関する注意](#)」を参照してください）。

コマンド修飾子

コマンド修飾子は、コマンドを修飾または詳細化する命令です。次に例を示します。

- コマンド修飾子 /LOG により、コマンドの実行中に、処理している情報を格納するログ・ファイルが作成されます。

```
dis51adm.exe /connect myname/mypassword@database /import c:\data\sales.eex  
/log sales_import_logfile
```

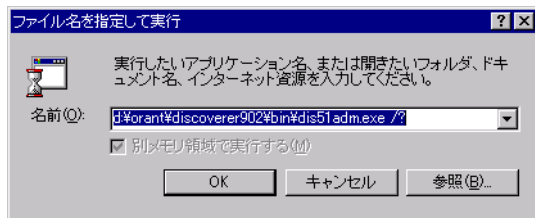
- コマンド修飾子 /ITEM をコマンド /DELETE と使用して、EUL から削除する EUL アイテムを指定します。

```
dis51adm.exe /connect myname/mypassword@database /delete /item sales.profit
```

Discoverer コマンドライン・インタフェースの使用について

Discoverer コマンドは次の方法で実行できます。

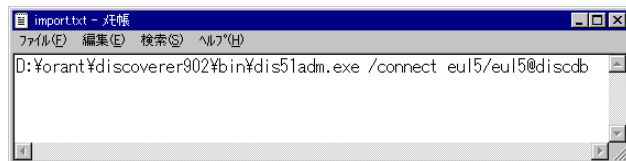
- Windows の「ファイル名を指定して実行」ダイアログ（Windows の「スタート」メニューの「ファイル名を指定して実行」を選択して表示）でコマンドを直接入力できます。



- コマンド・プロンプト・ウィンドウを開き、コマンドを直接入力できます。たとえば、Discoverer Administrator で使用可能なすべてのコマンドを表示するには、次のように入力します。



- 一連のコマンドをテキスト・ファイル（コマンド・ファイルといいます）に格納し、Discoverer 実行ファイルの引数としてテキスト・ファイルを実行できます。たとえば、テキスト・ファイル **Import.txt** に格納されたコマンドを実行するには、次のように入力します（次のメモ帳のコマンド・ファイルの例を参照してください）。



前述のコマンド・ファイルを実行するには、コマンドラインに次のように入力します。

`dis51adm.exe /cmdfile import.txt`

コマンドライン・インタフェースの実行に必要な権限

コマンドライン・インタフェースを使用するには、Discoverer グラフィカル・ユーザー・インタフェースを使用するときと同じ Discoverer 権限を必要とします。

コマンドライン・インタフェースを使用して EUL で操作を実行するには、正しい権限を持っている必要があります。正しい権限を持たない場合、操作は失敗します。

コマンドライン・インタフェースを使用する場合は、修飾子 `/eul`（詳細は「[/eul](#)」を参照してください）を使用して、明示的に EUL を指定できます。EUL を指定しないと、Discoverer は EUL をデータベース・ユーザーのデフォルト EUL として識別します。

コマンドの使用に関する注意

コマンドライン・インタフェースを使用する場合は、次の規則が適用されます。

- コマンド `dis51adm.exe /?` を Windows の「ファイル名を指定して実行」ダイアログに入力して、Discoverer Administrator で使用可能なすべてのコマンドを表示できます。
- コマンドは大文字と小文字を区別しません。大文字と小文字を入れ換えても使用できます。
- コマンドは、後に引数をどのような順序にも定義して続けることができます。
- コマンド修飾子は、後に引数をどのような順序にも定義して続けることができます。
- オブジェクト名が必要なエリア（EUL またはビジネスエリアなど）でオブジェクト名を指定しない場合、Discoverer はデフォルトで Discoverer 管理者が所有するオブジェクトに設定します。
- Discoverer EUL オブジェクトを指定する場合は、表示名または識別子を使用できます。たとえば、Discoverer フォルダが表示名 `Sales` と識別子 `SALES_132388` を持つ場合、`/refresh_folder` コマンドの引数としてこのフォルダを 2 通りの方法で指定できます。
 - `/refresh_folder Sales`
 - `/refresh_folder SALES_132388 /identifier`

識別子の詳細は、第 3 章の「[識別子とは](#)」を参照してください。

特殊な文字（スペースなど）を含むオブジェクトの表示名または識別子を指定する場合は、二重引用符（`"`）で文字列全体を囲みます。たとえば、フォルダ・オブジェクト `Sales Figures` の場合は `/folder "Sales Figures"` と入力します。

- `/REFRESH_SUMMARY` コマンドライン・オプションは Oracle データベースのみと関連して動作します。
- コマンドを使用する場合は、一度に 1 つのコマンドを実行します。一度に複数のコマンドを実行しようとすると、エラーが発生することがあります。

- /connect コマンドを使用して、「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログをバイパスする場合は、スラッシュで始まる引数を二重引用符で囲む必要があります。次に例を示します。

/connect "/" [@<dbname>] "
- Discoverer Desktop コマンドライン・インタフェースを使用してデータベースからワークブックを開く場合 (/opendb コマンドを使用)、ワークブック名にピリオドを入れません。

このガイドで使用するコマンド構文規則

このガイドでは、次のコマンド構文規則を使用します。

- Discoverer コマンドと修飾子はプレーン・テキストで表示されます。
- 必須のコマンド引数は山カッコ <> で囲みます。
- オプションのコマンド引数は角カッコ [] で囲みます。
- パイプ文字 (|) でコマンド引数が区切られている場合は、どちらか 1 つを選んで入力します。たとえば、コマンド '/refresh | /rename' では、'/refresh' または '/rename' を入力します。

図 21-1 このマニュアルで使用するコマンド規則



コマンドの構文

コマンドライン・インタフェースでは、次の構文を使用します（改行またはキャリッジ・リターンなしで 1 行に入力します）。

```
dis51adm.exe
[/connect <user>/<password>[@[ODBC:]<dbname>]]
<command> [/<argument(s)>]
[/<modifier(s)> [/<argument(s)>]]
```

- dis51adm.exe — Discoverer 実行ファイルの名前。名前は、次のように Discoverer のバージョンによって異なります。
 - Discoverer 3.1 — dis31adm.exe
 - Discoverer 4.1 — dis4adm.exe
 - Discoverer 9.0.2 — dis51adm.exe
- [/connect <userid>/<passwd>[@<dbname>]] — このオプションのコマンド引数により、「[Oracle9i Discoverer Administrator に接続](#)」ダイアログをバイパスできます。
- /<command> [/<argument(s)>] — 有効な Discoverer コマンドとそれに続く必要な引数。
- [/<modifier(s)> [/<argument(s)>]] — 1 つ以上の有効な修飾子とその後に続く必要な引数。

コマンドの例

例 1

eul31 EUL から Sales フォルダと Sum1 サマリーを削除するには、次のコマンドを使用します。

```
dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase /delete /folder "Sales"
/summary "Sum1" /eul eul31 /log del.log
```

例 2

Sales1 フォルダと Sales2 フォルダをリフレッシュするには、次のコマンドを使用します。

```
dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase /refresh_folder "Sales1, Sales2"
/log refsum.log
```

例 3

データベースに Applications モード EUL を作成し、これにアクセス権を付与するには、次のコマンドを使用します。

```
dis51adm.exe /connect eul_owner:appsresp/appspwd@appsdb /create_eul /apps_
mode /apps_grant_details apps/apps
```

コマンド・ファイル

コマンド・ファイルは、コマンドラインから自動的に実行できる 1 つ以上の Discoverer コマンドを含むテキスト・ファイルです。コマンド・ファイルは、MS-DOS バッチ・ファイルや UNIX スクリプト・ファイルと同じように機能します。

コマンド・ファイルのコマンドは、コマンドラインに直接入力された順序で処理されます。テキスト・ファイルに埋め込まれたキャリッジ・リターンは無視されます。

コマンド・ファイルは、その中で他のコマンド・ファイルを呼び出すことができます。これは、コマンドラインを半角 255 文字までとしている Microsoft Windows の制限を回避する便利な方法です。

コマンド・ファイルの作成方法

コマンド・ファイルはテキスト・エディタを使用して作成できます。テキスト・エディタにコマンドを入力し、拡張子 .txt を使用して保存します。

コマンド・ファイルの実行方法

コマンド・ファイルを実行するには、/cmdfile コマンドの引数としてコマンド・ファイル名を持つ Discoverer Administrator 実行ファイル (dis51adm.exe など) を起動します。たとえば、テキスト・ファイル Import.txt に格納されたコマンドを実行するには、次のように入力します。

```
dis51adm.exe /cmdfile Import.txt
```

/cmdfile コマンドを繰り返して、2 つ以上のコマンド・ファイルを実行することもできます。たとえば、テキスト・ファイル Login.txt に格納されたコマンドを実行し、次にテキスト・ファイル Import.txt に格納されたコマンドを実行するには、次のように入力します。

```
dis51adm.exe /cmdfile Login.txt /cmdfile Import.txt
```


コマンド・ファイルの例

コマンド・ファイルは、モジュール化コマンドを格納するのに便利です。これにより、モジュール化コマンドを異なる組合せで使用できます。たとえば、次の3つのコマンド・ファイルは次のコマンドを含んでいます。

- `connect.txt`

行 `/connect me/mypassword@mydatabase` を含んでいます。

- `create.txt`

行 `/create eul /log create.log` を含んでいます。

- `delete.txt`

行 `/delete eul /log delete.log` を含んでいます。

これら3つのファイルは、次の3つの組合せのいずれかのコマンドラインから実行できます。

- `dis51adm.exe /cmdfile connect.txt`

これにより、コマンドラインからの接続が単純化されます。

- `dis51adm.exe /cmdfile connect.cmd /cmdfile create.txt`

これにより、接続したユーザーの EUL への接続と作成が行われ、`create.log` という名前のログ・ファイルにすべての出力が格納されます。

- `dis51adm.exe /cmdfile connect.cmd /cmdfile delete.txt`

これにより、接続したユーザーが所有する EUL に接続して削除し、`delete.log` という名前のログ・ファイルにすべての出力が格納されます。

Discoverer Administrator コマンドのクイック・ガイド

コマンドの簡単な説明を次の表に示します。

表 21-1 Discoverer コマンドのアルファベット順の要約

コマンド	説明
「/?」	オンライン・ヘルプを表示します。
「/apps_fndnam」 <foundation name>	接続の詳細を上書きします。
「/apps_user」	Oracle Applications ユーザーとして接続します。
「/asm」 <modifier(s)>	サマリー管理を自動化します (ASM)。
「/cmdfile」	コマンド・ファイルを実行します。
「/connect」 <user-name>/<password> [@<database>]	EUL に接続します。
「/create_eul」	EUL を作成します。
「/create_eul /apps_mode」	APPS EUL を作成します。
「/delete」 <modifier(s)>	EUL オブジェクトを削除します。
「/delete_bus_area」 <business area>	ビジネスエリアを削除します。
「/delete_eul」	EUL を削除します。
「/export (EUL オブジェクト)」 <export file> <modifier(s)>	EUL オブジェクトをエクスポートします。
「/import (ビジネスエリア)」 <business area>	ビジネスエリアをインポートします。
「/import (EUL オブジェクト)」 <import file(s)> <modifier(s)>	EUL オブジェクトをインポートします。

表 21-1 Discoverer コマンドのアルファベット順の要約（続き）

コマンド	説明
<code>「/load」 <business_area></code>	ビジネスエリアをロードします。
<code>「/refresh_bus_area」 <bus area name(s)></code>	ビジネスエリアをリフレッシュします。
<code>「/refresh_folder」 <folder name(s)></code>	フォルダをリフレッシュします。
<code>「/refresh_summary」 <summary name(s)> <bus area name></code>	サマリー・フォルダをリフレッシュします。

次の表を使用して、特定の作業に使用するコマンドを確認してください。

表 21-2 一般的な作業と関連するコマンド

作業	使用するコマンド
サマリー管理を自動化（ASM） します。	<code>「/asm」 <modifier(s)></code>
Oracle Applications ユーザーとして 接続します。	<code>「/apps_user」</code>
EUL に接続します。	<code>「/connect」 <user-name>/<password> [@<database>]</code>
EUL を作成します。	<code>「/create_eul」</code>
APPS EUL を作成します。	<code>「/create_eul /apps_mode」</code>
ビジネスエリアを削除します。	<code>「/delete_bus_area」 <business area></code>
EUL を削除します。	<code>「/delete_eul」</code>
EUL オブジェクトを削除します。	<code>「/delete」 <modifier(s)></code>
オンライン・ヘルプを表示します。	<code>「/?」</code>
EUL オブジェクトをエクスポート します。	<code>「/export (EUL オブジェクト)」 <export file> <modifier(s)></code>
ビジネスエリアをインポート します。	<code>「/import (ビジネスエリア)」 <business area></code>
EUL オブジェクトをインポート します。	<code>「/import (EUL オブジェクト)」 <import file(s)> <modifier(s)></code>
ビジネスエリアをロードします。	<code>「/load」 <business_area></code>

表 21-2 一般的な作業と関連するコマンド（続き）

作業	使用するコマンド
接続の詳細を上書きします。	<code>「/apps_fndnam」</code> <foundation name>
ビジネスエリアをリフレッシュします。	<code>「/refresh_bus_area」</code> <bus area name(s)>
フォルダをリフレッシュします。	<code>「/refresh_folder」</code> <folder name(s)>
サマリーをリフレッシュします。	<code>「/refresh_summary」</code> <summary name(s)> <bus area name>
コマンド・ファイルを実行します。	<code>「/cmdfile」</code> <command file name(s)>

Discoverer Administrator コマンド・リファレンス

この項には、Discoverer Administrator コマンドライン・インタフェースの各コマンドに関する詳細な参照情報が含まれています。次の点に注意してください。

- コマンドはアルファベット順に記載されています。
- コマンドは、コマンド修飾子により詳細化できます（詳細は、[「Discoverer Administrator コマンド修飾子リファレンス」](#)を参照してください）。

/?

このコマンドは、Discoverer コマンドのリストとその構文および引数を表示します。

情報	詳細
■ 構文：	<code>「/?」</code>
■ 修飾子：	なし
■ 注意：	なし
■ 制限：	なし
■ 例：	<code>dis51adm.exe /?</code>

/apps_fndnam

このコマンドは、「オプション」ダイアログの「接続」タブにあるフィールド GWYUID (ゲートウェイ・ユーザー ID のパスワードを含む) とフィールド FNDNAM の値を上書きします。

情報	詳細
■ 構文:	/apps_fndnam <foundation name>
■ 構文:	/apps_gwyuid <gateway user id>/<password>
■ 例:	dis51adm.exe /connect appsuser:appsresp/appspwd@appsdb /apps_fndnam apps /apps_gwyuid applsyspub/pub

/apps_user

Oracle Applications ユーザーとして Discoverer に接続します。

情報	詳細
■ 構文:	/apps_user
■ 修飾子:	[/apps_responsibility] [/apps_security_group]
■ 例:	dis51adm.exe /connect appsuser/appspwd@appsdb /apps_user /apps_responsibility "UK_Purchasing" /apps_security_group "UK_Managers" または dis51adm.exe /connect appsuser:UK_Purchasing/appspwd /apps_user /apps_security_group "UK_Managers"

/asm

Discoverer の自動サマリー管理機能 (ASM) を実行します。

情報	詳細
■ 構文:	/asm [/asm_space <bytes> /asm_space <bytes> /asm_tablespace <tablespace name>]
■ 修飾子:	[/asm_space, /asm_tablespace]
■ 制限:	/asm_tablespace 引数を指定する場合は、asm_space 引数を指定する必要があります。
■ 例:	dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase / asm /asm_space 2182 /asm_tablespace user_data

/cmdfile

テキスト・ファイルに格納されているコマンドを自動的に実行します。

情報	詳細
■ 構文:	/cmdfile <file name>
■ 注意:	コマンド・ファイルを作成するには、一般的なテキスト・エディタを使用して 1 つ以上の Discoverer コマンドを含むテキスト・ファイルを作成する必要があります。テキスト・ファイルのコマンドを実行するには、コマンドラインに次のように入力します。 dis51adm.exe /cmdfile <file name> 詳細は、「 コマンド・ファイル 」を参照してください。
■ 例:	テキスト・ファイルの myFile に格納されているコマンドを実行するには、コマンドラインに次のコマンドを入力します。 dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase /cmdfile myFile

/connect

このコマンドにより、「[Oracle9i Discoverer Administrator に接続](#)」ダイアログにユーザー名とパスワードを入力せずに EUL に接続できます。

情報	詳細
■ 構文:	/connect <userid>/<passwd>[@<dbname>]]
■ 修飾子:	[/eul] <eul> [/apps_user] [/apps_responsibility] <responsibility> [/apps_gwuid] <gwuid> [/apps_fndnam] <fndnam> [/apps_security_group] <security_group>
■ 注意:	第 17 章の「Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方 法 」も参照してください。
■ 例:	dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase

/create_eul

Discoverer EUL を作成します。

情報	詳細
■ 構文:	/create_eul
■ 修飾子:	<div>/apps_mode</div> <div>「/apps_grant_details」</div> <div>/default_tablespace</div> <div>「/eul_language」 <language></div> <div>「/log」</div> <div>「/overwrite」</div> <div>「/password」</div> <div>「/private」</div> <div>「/show_progress」</div> <div>/temporary_tablespace</div> <div>「/user」</div>
■ 注意:	<div>/create_eul コマンドを使用する場合は、次のことに注意してください。</div> <div><div>■ 新規 EUL の所有者のユーザー名とパスワードを指定します。ユーザー名とパスワードを指定しないと、ユーザー ID に対して所有権を取得できません。</div><div>■ 新規 EUL の所有者が持つ既存の EUL を上書きするかどうかを指定します。</div><div>■ 新規 EUL がパブリック（デフォルト）であるかまたはプライベートであるかを指定します。</div></div> <div>End User Layer の作成と削除の詳細は、第 3 章「End User Layer の作成とメンテナンス」を参照してください。</div>
■ 例:	<div>既存の EUL を上書きし、すべてのログ・エントリを create.log という名前のファイルに記録して、ユーザー名が "Bob"、パスワードが welcome であるプライベート EUL を作成するには、次のように入力します。</div> <div>dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase /create_eul /overwrite /user bob /password welcome /private /log create.log</div>

/create_eul /apps_mode

Discoverer コマンドライン・インタフェースを使用して Oracle Applications モード EUL を作成します。このコマンドは（Oracle Applications モードで）Discoverer Administrator を起動し、データベースに Applications モード EUL を作成して、この Applications モード EUL にユーザーを接続します。例には、スキーマおよびパスワードの記述も含まれています。

情報	詳細
■ 構文:	/create_eul /apps_mode
■ 修飾子:	[/apps_grant_details]
■ 例:	dis51adm.exe /connect system/manager /create_eul / apps_mode /apps_grant_details apps/apps

/delete

データベースから EUL オブジェクトを削除します。また、[\[/delete_eul\]](#) コマンドを使用して EUL 全体を削除することもできます。

情報	詳細
■ 構文:	/delete <modifier(s)> [/identifier]
■ 修飾子:	削除を設定する修飾子: [/log] <log file name> [[/log_only]] [/show_progress] 削除する EUL オブジェクトを定義する修飾子: /asm_policy <asm policy> [/business_area] <business area> [/ba_link] <business area> <folder> [/condition] <folder>.<condition> [/folder] <folder> [/function] <PL/SQL function> [/hierarchy] <hierarchy> [/hier_node] <hierarchy>.<hierarchy_node> [/identifier] [/item] <folder>.<item> [/item_class] <item class> [/join] <join name> [/parameter] <folder>.<parameter> [/summary] <summary> [/workbook] <workbook>

情報	詳細
■ 注意:	一度に1つ以上の EUL オブジェクトを削除できます (次の例を参照)。パラメータ (ビジネスエリア、フォルダなど) には明示的に名前を付ける必要があります。また、ワイルドカードは使用できません。
■ 例:	<p>eul31 という名前の EUL にある Test BA と Final BA という名前の2つのビジネスエリアを削除し、delba.log という名前のログ・ファイルに書き込むには、次のように入力します。</p> <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase /delete /business_area "Test BA, Final BA" /eul eul31 /log delba.log</pre> <p>eul31 という名前の EUL にある Sales という名前のフォルダと Sum1 という名前のサマリーを削除し、del.log という名前のログ・ファイルに書き込むには、次のように入力します。</p> <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase / delete /folder Sales /summary Sum1 /eul eul31 /log del.log</pre>

/delete_bus_area

データベースから Discoverer ビジネスエリアを削除します。「[/delete_eul](#)」および「[/delete](#)」も参照してください。

情報	詳細
■ 構文:	/delete_bus_area <business area>
■ 修飾子:	<p>削除を設定する修飾子:</p> <p>[/keep_folder] [/log] <log file name> [[/log_only]] [/show_progress]</p>
■ 注意:	このコマンドは「 /delete 」コマンドに置き換わっており、下位互換性のために含まれています。/delete コマンドの詳細は「 /delete 」を参照してください。
■ 例:	<p>Test BA と Final BA という名前のビジネスエリアを削除し、delba.log という名前のログ・ファイルに書き込むには、次のように入力します。</p> <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase / delete_bus_area "Test BA, Final BA" /log delba.log</pre>

/delete_eul

現行の Discoverer EUL を削除します。また、「/delete」コマンドを使用して、個々の EUL オブジェクトを選択して削除することもできます。

情報	詳細
■ 構文:	/delete_eul
■ 修飾子:	/log /show_progress
■ 制限:	削除する EUL の登録された所有者である場合のみ、EUL を削除できます。
■ 例:	dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase /delete_eul /log "c:¥my log dir¥delete_eul.log"

/export (EUL オブジェクト)

EUL オブジェクトを Discoverer エクスポート・ファイル (EEX ファイル) にエクスポートします。個々の EUL オブジェクト (フォルダ、ビジネスエリア、関数など) または EUL 全体 (/all 修飾子を使用) を選択して削除できます。複数のファイルをインポートする場合、Discoverer は自動的にファイル間の参照を解決します。たとえば、fileA.eex にある Emp フォルダと fileB.eex にある Dept フォルダをエクスポートできます。Emp と Dept が結合されている場合、結合情報は実際に両方のファイルにあります。両方のフォルダの情報は、いずれのファイルにも含まれません。両方のファイルをインポートする場合、結合は 2 番目のファイルが処理されるときに再び作成されます。

情報	詳細
■ 構文:	/export <filename> [<bus_area_name>] または /export <filename> <modifier(s)> [/identifier]

情報	詳細
■ 修飾子:	<pre> [/all] /asm_policy <asm policy> [/audit_info] <audit details> [/business_area] <business area> [/external_element] <filename> (このファイル名は、エクスポート・ ファイル名ではなく xml ファイル) [/folder] <folder> [/function] <function> [/hierarchy] <hierarchy> [/identifier] [/item_class] <item_class> [/log] <log file name> [log_only] [/summary] <summary> /set_created_by <creator name> /set_updated_by <updated name> [/show_progress] [/workbook] <workbook> [XML_workbook] [/xmlworkbook] (パラメータなし) </pre>
■ 注意:	<p><filename> – ターゲット*.EEX ファイルの名前。ディレクトリ・パスを指定しない場合、ターゲット・ファイルはデフォルトの Discoverer フォルダに作成されます。デフォルトのターゲット・ディレクトリ設定を上書きするには、ファイルのディレクトリ・パスを指定します。たとえば、c:\data\sales.eex など。ディレクトリ・パスは相対パスではなく、絶対パスである必要があります。</p> <p>ワイルドカードは、パラメータ（ビジネスエリア、フォルダなど）に使用できません。これらは、明示的に名前を付ける必要があります。</p> <p>[<bus_area_name>] – このオプションを使用して、ビジネスエリアとコンテンツ全体をエクスポートします。ビジネスエリアの定義とコンテンツのメタデータのみをエクスポートする場合は、/business_area 修飾子を使用します。</p> <p>/business_area 修飾子を使用してビジネスエリアをエクスポートする場合、Discoverer はビジネスエリアの定義とビジネスエリアにあるフォルダへのリンクのみをエクスポートします。Discoverer は、名前で指定された場合のみフォルダとワークブックをエクスポートします。</p> <p><modifiers> – パラメータを指定する場合は、パラメータの表示名または識別子を使用できます。</p> <p>データの関係を維持するには、リンクされたオブジェクト（または結合されたオブジェクト）もエクスポートする必要があります。</p>

情報	詳細
■ 例:	eul31 という名前の EUL にある Test BA と Final BA という名前の 2 つのビジネスエリアを export.eex という名前のファイルにエクスポートし、delba.log という名前のログ・ファイルに書き込むには、次のように入力します。 dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase /export export.eex "Test BA, Final BA" /eul eul31 /log export.log

/import (ビジネスエリア)

EEX ファイルの Discoverer ビジネスエリアをデータベースにインポートします。Discoverer EUL オブジェクトを選択してインポートする方法の詳細は、「[/import \(EUL オブジェクト\)](#)」を参照してください。

情報	詳細
■ 構文:	/import <file name>
■ 修飾子:	[/log] <log file name> [log_only] [/rename] <rename-policy> [/show_progress]
■ 注意:	このコマンドは /import (EUL オブジェクト) コマンドに置き換わっており、下位互換性のために含まれています。/import コマンドの詳細は「 /import (EUL オブジェクト) 」を参照してください。
■ 例:	ファイル myBA.eex にあるビジネスエリアをインポートし、impba.log という名前のログ・ファイルに書き込むには、次のように入力します。 dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase /import myBA.eex /log impba.log

/import (EUL オブジェクト)

1 つ以上の Discoverer エクスポート・ファイル (EEX ファイル) から EUL オブジェクトをインポートします。Discoverer エクスポート・ファイルは、/export コマンドを使用して作成され、EUL オブジェクト (フォルダ、ビジネスエリアまたは EUL 全体など) を含みます。

情報	詳細
■ 構文:	<code>/import <"sourcefilename1.eex sourcefilename2.eex etc."> <modifier(s)> [/identifier]</code>
■ 修飾子:	<code>[/eul] <EUL> [/identifier] [/keep_format_properties] [/log] <log file name> [log_only] /preserve_workbook_owner [/refresh] [/rename] [/show_progress]</code>
■ 注意:	<p><source filename(s)> - ソース *.EEX ファイルの名前。ファイルのフル・パス名を指定する必要があります ('c:\data\sales.eex' など)。ディレクトリ・パスは相対パスではなく、絶対パスである必要があります。</p> <p>ワイルドカードは、パラメータ (ビジネスエリア、フォルダなど) に使用できません。これらは、明示的に名前を付ける必要があります。</p> <p>複数のファイルをインポートする場合、すべてのファイルを一對の二重引用符内に囲み、各ファイルをスペースで区切る必要があります (前述の構文を参照してください)。</p>
■ 例:	<code>dis51adm.exe /connect <userid>/<password>@<dbalias> /import "file1.eex file2.eex"</code>

/load

データベースから Discoverer ビジネスエリアにデータをバルク・ロードします。

情報	詳細
■ 構文:	/load <bus_area>
■ 修飾子:	<code>/aggregate</code> <aggregate> <code>/capitalize</code> <code>/date_hierarchy</code> <date_hier> <code>/db_link</code> <db_link> <code>/description</code> <descrip> <code>/eul</code> <eul_name> <code>/insert_blanks</code> <code>/join</code> <join_policy> <code>/log</code> <log_file> <code>/lov</code> <lov> <code>/object</code> <obj_name> <code>/remove_prefix</code> <code>/show_progress</code> <code>/sort_folders</code> <code>/sort_items</code> <code>/source</code> <source> <code>/user</code> <user_id>

情報	詳細
■ 注意:	<p>/load コマンドを使用する場合は、次のことに注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none">■ データのソースを指定します（デフォルトは現行のデータベース・サーバーです）。EUL ゲートウェイからデータをロードしている場合、ソース名は EUL ゲートウェイ名に完全に一致する必要があります。■ オブジェクトをロードする EUL を指定します（デフォルトは Discoverer 管理者自身の EUL です）。EUL を指定する場合、操作が正常に実行されるためには、名前付きの EUL へのアクセス権限を持っている必要があります。■ データをフェッチする代替データベース・リンクを指定します（デフォルトは現行の接続です）。■ スキーマ名（/user）でロードにフィルタをかけます。（デフォルトではフィルタは使用されません）。■ オブジェクト名（/user）でロードにフィルタをかけます（デフォルトではフィルタは使用されません）。■ 大文字と小文字の使い分け、接頭辞および空白について、データの書式設定を指定します（デフォルトでは書式設定は適用されません）。■ 日付階層を指定します（デフォルトは Discoverer のデフォルト日付階層です）。■ 関連付けられた値リストを持っているのはどのデータ型かを指定します（デフォルトではデータ型は関連付けられた値リストを持ちません）。■ データ・ポイントで使用するデフォルトの集計を指定します（デフォルトは SUM です）。■ 新規ビジネスエリアの説明を入力します（デフォルトは NULL です）。■ 結合のポリシー（デフォルトは主キー）とログ・ファイルを指定します。■ 注意: Oracle9i データベースからバルク・ロードを実行している場合、Discoverer が結合を作成するときにビュー上の制約も考慮されます。

情報	詳細
■ 例：	<p>次の条件を持つ Test BA という名前の新規ビジネスエリアを作成し、現行接続の Oracle9i Designer ソースから eul31 という名前の EUL にバルク・ロードします。</p> <ul style="list-style-type: none">■ ユーザー Bob によって所有されたパターン test% に一致する表を含む。■ 列を事前フォーマットして、接頭辞と空白を削除し、頭文字を大文字にする。■ 日付階層を含まない。■ 集合体として AVG を使用し、CHAR、INTEGER および DECIMAL の値リストを含む。■ load.log という名前のログ・ファイルに書き込む。 <p>前述のバルク・ロードを実行するには、次のように入力します。</p> <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase /load "Test BA" /source "Designer 6i - bobsworkarea" /eul eul31 /user bob /object test% /capitalize /remove_prefix / insert_blanks /date_hierarchy "" /lov "CHAR, INTEGER, DECIMAL" /aggregate AVG /log load.log /description "Test BA"</pre>

/refresh_bus_area

データベースから最新の EUL 構造を取り出して、1 つ以上の Discoverer ビジネスエリアをリフレッシュします。

情報	詳細
■ 構文：	/refresh_bus_area <bus_area>
■ 修飾子：	<div>[/db_link]</div> <div>[/eul]</div> <div>[/log]</div> <div>[/schema]</div> <div>[/source]</div> <div>[/show_progress]</div>

情報	詳細
■ 注意:	<p>/refresh_bus_area コマンドを使用する場合は、次のことに注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none">■ 名前付きのビジネスエリアをリフレッシュするデータ・ソースを指定します。■ リフレッシュするビジネスエリアを検索する EUL を指定します。デフォルトは、Discoverer 管理者が所有する EUL です。EUL を指定する場合、操作が正常に実行されるためには、名前付きの EUL へのアクセス権限を持っている必要があります。■ スキーマ名でリフレッシュにフィルタをかけます。デフォルトでは、フィルタは使用されません。■ ログ・ファイルを指定します。
■ 例:	<p>eul31 という名前の EUL にある Test BA と Final BA という名前の 2 つのビジネスエリアを、ユーザー Bob が所有するパターン test% に一致する表を含む現行接続の Oracle9i Designer ソースからリフレッシュし、refba.log という名前のログ・ファイルに情報を集計するには、次のように入力します。</p> <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase / refresh_bus_area "Test BA, Final BA" /source "Designer 6i - bobsworkarea" /eul eul31 /user bob /log refba.log</pre>

/refresh_folder

このコマンドにより、1 つ以上の Discoverer フォルダをリフレッシュします。フォルダの基
づく問合せが、最新のデータを取得するために再実行されます。

情報	詳細
■ 構文:	/refresh_folder <folder>
■ 修飾子:	<code>/log</code> <code>/show_progress</code> <code>/source</code> <code>/user</code> <username>
■ 注意:	<p>/refresh_folder コマンドを使用する場合は、次のことに注意し てください。</p> <ul style="list-style-type: none">■ デフォルトの検索対象は、Discoverer 管理者が所有する EUL で す。■ ログ・ファイル・パスを指定します（オプション）。パスを指 定すると、操作の成功または失敗を示すステータス・メッセー ジは指定されたログ・ファイルに出力され、指定しない場合は デフォルトのログ・ファイルに出力されます。
■ 例:	<p>eul31 という名前の EUL にある Test BA という名前のビジネスエリ アの Sales1 と Sales2 という名前の 2 つのフォルダをリフレッシュ するには、次のように入力します。</p> <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase / refresh_folder "Sales1, Sales2" /log reffol.log</pre>

/refresh_summary

1 つ以上の Discoverer サマリー・フォルダをリフレッシュします。サマリーの基づく問合せが、最新のデータを取得するために再実行されます。

情報	詳細
■ 構文:	<code>/refresh_summary <summary> <bus_area></code>
■ 修飾子:	<code>/log</code> <code>/show_progress</code>
■ 注意:	<p><code>/refresh_summary</code> コマンドを使用する場合は、次のことに注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none">■ ビジネスエリアが存在する EUL を指定します。デフォルトの検索対象は、Discoverer 管理者が所有する EUL です。EUL を指定する場合、操作が正常に実行されるためには、名前付きの EUL へのアクセス権限を持っている必要があります。■ 少なくとも 1 つのサマリー・フォルダに名前を付け、サマリーが存在するビジネスエリアに明示的に名前を付ける必要があります。■ ログ・ファイル・パスを指定します（オプション）。■ パスを指定すると、操作の成功または失敗を示すステータス・メッセージは指定されたログ・ファイルに出力され、指定しない場合はデフォルトのログ・ファイルに出力されます。
■ 例:	<p>eul31 という名前の EUL にある Test BA という名前のビジネスエリアの Summary1 と Summary2 という名前の 2 つのサマリーをリフレッシュし、refsum.log という名前のログ・ファイルに書き込むには、次のように入力します。</p> <pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase / refresh_summary "Summary1, Summary2" "Test BA" /log refsum.log /eul eul31</pre>

Discoverer Administrator コマンド修飾子リファレンス

この項には、Discoverer コマンドライン・インタフェースで使えるオプションのコマンド修飾子に関する詳細な参照情報が含まれています。コマンド修飾子は、コマンドを詳細化するなわち修飾するために使用されます。次の点に注意してください。

- コマンド修飾子はアルファベット順に記載されています。
- コマンドの詳細は、「Discoverer Administrator コマンド・リファレンス」を参照してください。

/aggregate

コマンドで使用されるデフォルトの集計を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/aggregate <SUM MAX MIN COUNT AVG DETAIL>

/all

EUL にあるインポート、エクスポートまたは削除するすべてのオブジェクトを選択します。

情報	詳細
■ 構文:	/all

/apps_grant_details

Oracle Applications モード EUL を作成するときの Oracle Applications スキーマとパスワードを指定します。たとえば、Oracle Applications Foundation Name とパスワードを指定するには、<fndnam>/<password> と入力します。

情報	詳細
■ 構文:	/apps_grant_details <schema>/<password>

/apps_responsibility

Oracle Applications データベース・ユーザーとして接続しているときの Oracle Applications の職責を指定します。この修飾子は、Oracle Applications ユーザー名の後、パスワードの前に配置されたコロン (:) に続いて含めることもできます。

情報	詳細
■ 構文:	<code>/apps_responsibility <"Oracle Applications responsibility name"></code>

/apps_security_group

Oracle Applications データベース・ユーザーとして接続しているときの Oracle Applications のセキュリティ・グループを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	<code>/apps_security_group <"Oracle Applications security group name"></code>

/asm_space, /asm_tablespace

/asm_tablespace 修飾子は、ASM ポリシーで設定された表領域の値を無視し、かわりにこの表領域の制約を使用します。/asm_space 修飾子は、ASM ポリシーで設定された領域の値を無視し、かわりにこの領域の制約を使用します。表領域の値と領域の値の有効な組合せを次に示します。

- コマンドライン修飾子がない場合 — ASM ポリシー表領域と領域が使用されます。
- /asm_space — ASM ポリシー表領域が指定された領域の値とともに使用されます。
- /asm_tablespace /asm_space — 指定された表領域と領域の値が使用されます。無効な表領域を指定すると、エラーが発生します。

情報	詳細
■ 構文:	<code>/asm [/asm_space <bytes> /asm_space <bytes> /asm_tablespace <tablespace name>]</code>

/audit_info

すべてのオブジェクトとともに監査フィールド（Created By、Created Date、Updated By、Updated Date など）をエクスポートします。追加の修飾子 /set_created_by と /set_updated_by を使用して、Created By と Updated By フィールドを上書きできます。

情報	詳細
■ 構文:	/audit_info [:/set_created_by<name of creator>] [:/set_updated_by<name of updater>]

/ba_link

削除するビジネスエリアとフォルダを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/ba_link <business area>.<folder>

/business_area

インポート、エクスポートまたは削除するビジネスエリアを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/business_area <business area>

/capitalize

バルク・ロード中に個々の列からフォルダ名が生成されるときにフォルダ名の最初の文字を大文字にするよう要求します。

情報	詳細
■ 構文:	/capitalize

/condition

削除の条件を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/condition <condition>

/date_hierarchy

バルク・ロード中に使用されるデータ階層を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/date_hierarchy <date_hier>
■ 注意:	任意の有効なデータ階層名または "" を指定します。<date_hier> を "" に設定すると、Discoverer Administrator はバルク・ロード中に日付階層を作成しません。

/db_link

コマンドで使用されるデータベース・リンクを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/db_link <db_link>
■ 注意:	<db_link> は任意の有効なデータベース・リンクです。
■ 制限:	この修飾子は、ODBC データベースには使用できません。

/description

オブジェクトの説明を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/description <description>
■ 注意:	<description> は任意の文字列です。

/eul

コマンドを実行する EUL を指定します。指定した EUL へのアクセス権限を持っている必要があります。指定しない場合は、データベース・ユーザーのデフォルトの EUL が使用されます。

情報	詳細
■ 構文:	/eul <EUL>
■ 注意:	<EUL> は、有効な EUL の名前である必要があります。

これにより、ユーザーのデフォルトの EUL は変更されないことに注意してください。

/eul_language

/create_eul コマンドとともに（現在 Oracle Applications で）使用して、EUL の言語を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/eul_language <language>

/external_element

/export command とのみ使用します。external_element 修飾子により、指定したファイルの XML コードをエクスポート・ファイルの一番上に置くことができます。

情報	詳細
■ 構文:	/external_element <filename>
■ 注意:	<p>この修飾子を使用するには、（エクスポート・ファイルの一番上に置く）XML を別のファイルに入力し、次に <filename> 引数としてこのファイル名を含めます。</p> <p>/external_element 修飾子は、同じエクスポート操作で複数回使用できます（次の例を参照してください）。</p> <p><filename> は、.eex ファイルに含める xml があるファイルの名前です。</p>
■ 例:	<pre>dis51adm.exe /connect me/mypassword@mydatabase /export myBA.eex bus_area1 /external_element custom1.xml /external_element custom2.xml</pre> <p>これにより、custom1.xml と custom2.xml ファイルの xml はエクスポート・ファイル myBA.eex の一番上に置かれます。</p>

/folder

インポート、エクスポートまたは削除するフォルダを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/folder <folder>

/function

インポート、エクスポートまたは削除する関数を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/function <PL/SQL function>

/hier_node

削除する階層のノードを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/hier_node <hierarchy>.<hierarchy node>

/hierarchy

階層を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/hierarchy <hierarchy>

/identifier

表示名ではなく識別子により EUL オブジェクトを指定します。指定しない場合は、オブジェクトはデフォルトで表示名で識別されます。

情報	詳細
■ 構文:	/identifier <identifier>

/insert_blanks

バルク・ロード中に個々の列名からフォルダ名が生成されるときに、フォルダ名がアンダースコア文字のかわりにスペースを持つよう要求します。

情報	詳細
■ 構文:	/insert_blanks

/item

削除するアイテムを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/item <item>

/item_class

インポート、エクスポートまたは削除するアイテム・クラスを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/item_class <item class>

/join

/join 修飾子には、使用するコマンドに応じて 2 つの用途があります。

- 「/load」コマンドと使用した場合、バルク・ロード中に Discoverer Administrator の結合方法を指定できます。
- 「/delete」コマンドと使用した場合、特定の結合を削除できます。

情報	詳細
■ 構文:	/load コマンドと使用した場合の構文 /join <NONE COLUMN NAME PRIMARY KEY> /delete コマンドと使用した場合の構文 /join <join name>

/keep_folder

ビジネスエリアを削除するときにフォルダをその位置に残します。指定しない場合、フォルダはビジネスエリアとともに削除されます。

情報	詳細
■ 構文:	/keep_folder

/keep_format_properties

インポート時に既存の書式プロパティ（表示名、説明など）を維持します。デフォルトでは、書式プロパティは変更されます。

情報	詳細
■ 構文:	/keep_format_properties

/log

コマンド・ステータス・メッセージを格納するログ・ファイルの名前を指定します。各コマンドが実行された後、Discoverer Administrator はコマンドが成功したかを示すステータス・メッセージを書き込みます。/log 修飾子を使用して、ログ・ファイルの名前と場所を上書きできます。

情報	詳細
■ 構文:	/log <filename>
■ 注意:	任意の有効なファイル名を指定できます（オペレーティング・システムに応じて異なります）。

/log_only

/log_only 修飾子により、データを変更せずにコマンドをシミュレーションし、ログを生成します。これにより、データを変更する前にエラーと例外をチェックできます。

情報	詳細
■ 構文:	/log <filename> [/log_only]
■ 注意:	任意の有効なファイル名を指定できます（オペレーティング・システムに応じて異なります）。 オプションの log_only 引数により、データをインポートせずにインポートをシミュレーションし、ログを生成できます。これにより、データを変更する前にインポート・エラーをチェックできます。

/lov

バルク・ロード中に生成される値リストのデータ型を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/lov [CHAR DATE DECIMAL INTEGER KEY]

/object

バルク・ロード、インポート、エクスポートまたは削除するオブジェクトを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/object <mask>
■ 注意:	任意の有効なオブジェクト名を指定できます。ワイルドカード文字を使用できます。

/overwrite

所有者が持つ既存の EUL を上書きします。使用しない場合は、デフォルトで、既存の EUL は上書きされません。

情報	詳細
■ 構文:	/overwrite

/parameter

削除するパラメータを指定します。パラメータを指定する場合は、パラメータの表示名または識別子を使用できます。

情報	詳細
■ 構文:	/parameter <folder>.<parameter>

/password

操作で使用するパスワードを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/password <password>
■ 注意:	ユーザーが指定した操作に対応する有効なパスワードを指定します。

/private

EUL を作成する場合に、Discoverer 管理者に対してプライベートとして EUL のステータスを定義できます。使用しない場合、ステータスはデフォルトでパブリックに設定されます。

情報	詳細
■ 構文:	/private

/refresh

インポートされたオブジェクトを既存のオブジェクトとマージします。デフォルトでは、マージされたオブジェクトは表示名に一致します。「/identifier」修飾子を使用して、識別子に一致させます。

情報	詳細
■ 構文:	/refresh

/remove_prefix

バルク・ロード中に個々の列名からアイテム名が生成されるときにアイテム名に列名接頭辞を含めないように要求します。

情報	詳細	詳細
■ 構文:	/remove_prefix	
■ 例:	列	アイテム
	EMP_EMPNO	EMPNO
	EMP_ENAME	ENAME

/rename

オブジェクトのインポートで、既存のオブジェクトと一致する場合、どちらのオブジェクトの名前を変更するかを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/rename <NEW OLD NONE>
■ 注意:	NEW — インポート・オブジェクトの名前が変更されます。 OLD — 既存のオブジェクトの名前が変更されます。 NONE — オブジェクトをインポートせずに操作を中止します。

/schema

操作のスキーマ（ユーザー）を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/schema <schema>

/show_progress

実行中のコマンドを監視します。

情報	詳細
■ 構文:	/show_progress

/sort_folders

バルク・ロード中に Discoverer がアルファベット順にフォルダをソートするように指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/sort_folders <ON OFF>
■ 注意:	ON がデフォルトです。

/sort_items

バルク・ロード中に Discoverer がアルファベット順にアイテムをソートするように指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/sort_items <ON OFF>
■ 注意:	OFF がデフォルトです。

/source

操作のソースを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/source <server gateway>
■ 注意:	<server> は、Oracle データベースの固有の名前です。 <gateway> は、Oracle9i Designer オブジェクトまたは他のゲートウェイの名前です。 ゲートウェイ名は、ロード・ウィザードに表示されたゲートウェイ名に正確に一致する必要があります。Oracle9i Designer の場合、"Designer 6i - <workarea name>" を指定します (Oracle Designer 6i より前のバージョンの Oracle Designer を使用している場合、単に "Oracle Designer repository" と指定します)。

/summary

インポート、エクスポートまたは削除するサマリーを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/summary <summary>

/user

操作で使用するユーザー ID を指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/user <user_id>
■ 注意:	任意の有効なユーザー ID を指定できます。

/workbook

インポート、エクスポートまたは削除するワークブックを指定します。

情報	詳細
■ 構文:	/workbook <workbook>

/xmlworkbook

/export コマンドとともに使用して、すべてのワークブックを XML 書式とバイナリ・ラージ・オブジェクト (BLOB) 書式の両方でエクスポートします。/description 修飾子により、エクスポートされたワークブックを XML ブラウザで表示できます。

情報	詳細
■ 構文:	/xmlworkbook (パラメータなし)

Discoverer Desktop コマンド・リファレンス

この項には、Discoverer Desktop コマンドライン・インタフェースの各コマンドに関する詳細な参照情報が含まれています。コマンドは、アルファベット順に記載されていることに注意してください。

/?

このコマンドは、Discoverer Desktop コマンドのリストを表示します。

情報	詳細
■ 構文:	/?
■ 修飾子:	なし
■ 注意:	なし
■ 制限:	なし
■ 例:	dis51usr.exe /?

/batch

後続のワークブックの処理を遅延することなく、ワークブックを実行します。

情報	詳細
■ 構文:	/batch
■ 修飾子:	なし
■ 注意:	このコマンドでは、UI はエンド・ユーザーの入力を待たずに続行します。これにより、前のワークブックまたはワークシートの処理が失敗しても、後続の処理が行われます。
■ 制限:	なし

/connect

「接続」ダイアログを使用せずに Discoverer Desktop に直接接続します。

情報	詳細
■ 構文:	/connect <username>/<password>[@<database>]
■ 修飾子:	なし
■ 注意:	指定したユーザー名とパスワードを持つデータベースに接続します。このコマンドは、 username/password@database 情報が正しいことを条件に「接続」ダイアログをスキップします。
■ 制限:	<p>ログインの詳細がデータベースへの接続に不十分である場合、デスクトップにコマンドライン・インタフェースで指定した情報を含む「接続」ダイアログが表示されます。</p> <p>たとえば、コマンドライン・インタフェースで次のように指定した場合、</p> <p>username@dbname</p> <p>Discoverer は、ユーザー・フィールドが 'username'、データベース・フィールドが 'dbname'、パスワード・フィールドが空欄である「接続」ダイアログを表示します。</p>
■ 例:	dis51usr.exe /connect jchan/jchan@dbname

/export

指定したファイルにワークブックの結果をエクスポートします。

情報	詳細
■ 構文:	/export <format> <export-file>
■ 修飾子:	なし
■ 注意:	指定したファイル（wks、sylk など）にワークブックの結果をエクスポートします。

情報	詳細
■ 制限:	エンド・ユーザーがコマンドライン・インタフェースでシートを指定しない場合、有効なシートのみがファイルにエクスポートされます。 エンド・ユーザーがコマンドライン・インタフェースでシートを指定した場合、そのシートのみがエクスポートされます。 エンド・ユーザーがコマンドライン・インタフェースですべてのシートを指定した場合、各シートは次の名前のファイルにそれぞれエクスポートされます。 <file> <sheet-name>.<ext> ■ 例: dis51usr.exe /export wks worksheet2.wks

/open

.dis ファイルからワークブックを開きます。

情報	詳細
■ 構文:	/open <file-workbook>
■ 修飾子:	なし
■ 注意:	
■ 制限:	
■ 例:	dis51usr.exe /open workbook1.dis

/opendb

データベースからワークブックを開きます。

情報	詳細
■ 構文:	/opendb <db-workbook>
■ 修飾子:	なし
■ 注意:	
■ 制限:	
■ 例:	dis51usr.exe /opendb workbook1.dis

/parameter

指定したパラメータを指定した値に設定します。

情報	詳細
■ 構文:	/parameter <parameter name> <parameter value>
■ 修飾子:	なし
■ 注意:	
■ 制限:	エンド・ユーザーがワークブックのパラメータの値を指定しない場合、Discoverer はデフォルトの値を使用します。
■ 例:	dis51usr.exe /parameter year 2001

/p

ワークブックをファイルからデフォルトのプリンタに印刷します。

情報	詳細
■ 構文:	/p <file>
■ 修飾子:	なし
■ 注意:	印刷オプションは、ワークブックの一部として保存されます。
■ 制限:	

/pt

ワークブックをファイルから、指定したプリンタに、指定したプリンタ・ドライバとポートで印刷します。

情報	詳細
■ 構文:	/pt <file> <printer> <driver> <port>
■ 修飾子:	なし
■ 注意:	
■ 制限:	

/sheet

指定したシートの間合せを実行します。

情報	詳細
■ 構文:	/sheet {<sheet-name> <sheet-number> ALL}
■ 修飾子:	なし
■ 注意:	Discoverer は次の間合せを実行します。 <ul style="list-style-type: none">■ 指定したシート番号 <sheet-number>■ シート名 <sheet-name>■ すべてのシート (ALL)
■ 制限:	

Discoverer のレジストリ設定

Discoverer のレジストリ設定

この章では、Discoverer のレジストリ設定について説明します。この章のトピックは次のとおりです。

- [Discoverer のレジストリ設定](#)
- [Discoverer Plus および Discoverer Viewer のレジストリ設定](#)
- [Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定](#)
- [Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の詳細](#)
- [Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の編集方法](#)

Discoverer のレジストリ設定

Discoverer のレジストリ設定により、特定の条件下での Discoverer の動作を制御します。Discoverer のレジストリ設定には、次のものが含まれます。

- レジストリ設定の名前。通常、これは文字列（QPPEnable など）です。
- レジストリ設定の値（1、0、文字列など）。

デフォルトでは、各レジストリ設定は最も一般的に必要なとされる値に設定されます。ただし、レジストリ設定の値を変更する場合があります。

Discoverer のレジストリ設定を行う場所は、使用中の Discoverer 製品によって異なります。

- Discoverer Plus および Discoverer Viewer のレジストリ設定は、reg_key.dc というファイルに格納されています。
- Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定は、Windows のレジストリに格納されています。

Discoverer Plus および Discoverer Viewer のレジストリ設定

Discoverer Plus および Discoverer Viewer では、reg_key.dc というレジストリ・ファイルに格納されたレジストリ設定が使用されます。reg_key.dc ファイルは、次の場所のいずれかにある中間層サーバー・マシンに配置されています。

- %bin ディレクトリ（デフォルト）
- 環境変数 DC902_REG によって指定されるディレクトリ

エンド・ユーザーが Discoverer Plus または Discoverer Viewer のユーザー設定項目を変更すると、Discoverer により、現行ユーザーに対するその変更が次のレジストリ・キーの下で reg_key.dc ファイルに書き込まれます。

%HKEY_LOCAL_MACHINE%Software%Oracle%Oracle9iASDiscoverer%...

このレジストリ・キーには、現行ユーザーのユーザー名が含まれます。

Discoverer Plus および Discoverer Viewer のレジストリ設定の詳細は『Oracle9iAS Discoverer 構成ガイド』を参照してください。

Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定

Discoverer Administrator および Discoverer Desktop では、Windows のレジストリに格納されたレジストリ設定が使用されます。

エンド・ユーザーが Discoverer Administrator または Discoverer Desktop のユーザー設定項目を変更すると、Discoverer により、現行ユーザーに対するその変更が次のレジストリ・キーの下に Windows レジストリに書き込まれます。

¥¥HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Oracle¥Discoverer 902¥...

Windows のレジストリ設定を変更する場合は、次の点に注意してください。

- 変更前に Windows レジストリのコピーをとる
- 誤った変更を行わないように注意する
- 作業について不明な点がある場合は、システム管理者に問い合わせる

Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の詳細

次の表は、変更が必要な場合の Windows レジストリにおける Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定を示しています。

ヒント: レジストリ設定の値を変更するか、Windows のレジストリ・エディタで表示できないレジストリ設定を追加するには、「[Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の編集方法](#)」を参照してください。

表 22-1 Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定

レジストリ・キー名	説明	デフォルト値およびその他の値
Database¥ArchiveCacheFlushInterval	この設定により、.eex ファイルのエクスポートおよびインポート時の EUL キャッシュ・フラッシュ間隔を制御できます。大規模なアーカイブのエクスポートまたはインポート時の過度なメモリ使用を防ぐために使用します。	デフォルト: 1000 ≥0 .eex ファイルのインポートおよびエクスポート時の EUL キャッシュ・フラッシュ間に処理されるオブジェクトの数

表 22-1 Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定（続き）

レジストリ・キー名	説明	デフォルト値およびその他の値
Database¥BusinessAreaFastFetchLevel	この設定により、ビジネスエリアがフェッチされるたびにフォルダおよびアイテムに対して行われる事前キャッシュの量を制御できます。 一般に、この値が低いほど、各種ダイアログ・ボックスにすぐに表示されるフォルダおよびアイテムが少なくなります。	デフォルト : 1 0 – 高速フェッチなし 1 – 各ビジネスエリア内のフォルダを高速フェッチ 2 – ユーザー・モードのみで各ビジネスエリア内のフォルダとアイテムを高速フェッチ 3 – 管理者モードのみで各ビジネスエリア内のフォルダとアイテムを高速フェッチ 4 – 各ビジネスエリア内のフォルダおよびアイテムを高速フェッチ
Administrator¥CreateJoinInOtherBAs	この設定により、フォルダのロードまたはリフレッシュ時に Discoverer Administrator が生成する結合の範囲を制御できます。デフォルトでは、同じビジネスエリア内のフォルダ間でのみ結合が自動生成されます。ただし、異なるビジネスエリア間で結合を自動生成するように指定することもできます。 この設定により、このオプションを制御できます。	デフォルト : 0 0 – 現行ビジネスエリア外のフォルダへ結合を生成および確認をしない >0 – 現行ビジネスエリア外のフォルダへ結合を生成および確認をする
Database¥DisableAutoOuterJoinsOnFilters	この設定により、1 つまたは複数の条件が適用された外部結合を含む問合せの実行時における Discoverer の動作を切り替えることができます。この設定の影響は、 第 10 章「結合の作成とメンテナンス」 で例をあげて説明されています。	デフォルト : 0 0 – フィルタへの外部結合を無効にしない 1 – フィルタへの外部結合を無効にする

表 22-1 Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定（続き）

レジストリ・キー名	説明	デフォルト値およびその他の値
Database¥DisableMultiJoinDetection	<p>この設定により、Discoverer Desktop でのワークシートの作成時における複数の結合パスの検出を切り替えることができます。</p> <p>1 に設定すると、ワークシート作成時に Discoverer Desktop ですべての結合オプションが選択されます。</p> <p>設定値が 0 で、複数の結合が存在する場合、Discoverer Desktop により「フォルダの結合」ダイアログが表示されます。ここで、ワークシートで使用する結合（1 つまたは複数）を選択します。</p> <p>注意 :Discoverer で正確な結果データを表示できるように、使用可能なすべての結合を Discoverer Desktop ユーザーが選択することをお勧めします。</p>	<p>デフォルト : 0</p> <p>1 - 複数の結合の検出を無効にする</p> <p>0 - 複数の結合の検出を無効にしない</p>
Database¥EULUpgradeForceCommitForAllSteps	<p>この設定によりコミット処理が影響を受けるため、以前の EUL をアップグレードするときのロールバック領域使用量も影響を受けます。ロールバック領域が制限されているために EUL のアップグレードに問題がある場合、この設定を使用すればより頻繁なコミットが可能になります。</p>	0
Database¥EULUpgradeRollbackSegment	<p>この設定を定義すると、その値が、アップグレード中に使用するロールバック・セグメントの名前になります。つまり、「Large_RB1」と設定すると、「SET TRANSACTION USE ROLLBACK SEGMENT Large_RB1」という文が発行されます。</p>	<p>デフォルトの設定タイプ : 文字列</p> <p>デフォルト値 : ""</p>
Database¥FormatXML	<p>XML エクスポート・ファイルにスペースを入れて読みやすくする場合は 1 に設定してください。ただし、ファイルのサイズが大きくなります。</p> <p>0 に設定したり、エントリが存在しない場合は、エクスポート・ファイルでインデントが使用されなくなるため、ファイルのサイズが小さくなります。</p>	<p>デフォルト : 0</p> <p>0 = インデントを使用</p> <p>1 = スペースを含む</p>

表 22-1 Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定（続き）

レジストリ・キー名	説明	デフォルト値およびその他の値
Database¥MaxNumberJoinPredicates	バルク・ロード時に、主キーまたは外部キーではなく列名に基づいて自動結合を作成することもできます。同じ表をすでにロードしている場合、その表内のすべての列に一致する結合が作成されます。バルク・ロード時に一致する列名を使用して 1 つの結合内の述語の最大数を指定すれば、これらの結合の作成を中止できます。	デフォルト : 20
Database¥ObjectsAlwaysAccessible	デフォルトでは、Discoverer Desktop によりアイテム・ナビゲータにフォルダおよびアイテムが表示されるとき、これらのフォルダおよびアイテムが参照する表またはビューが存在し、ユーザーがこれらの表またはビューにアクセスできることが検証されます。この設定により、この検証を無効にできます。 この検証を無効にすると、アイテム・ナビゲータでのフォルダおよびアイテムの表示速度が向上します。ユーザーによる問合せの実行時、データベース・オブジェクトが存在しないか、ユーザーがデータベース・オブジェクトへのアクセス権を持たない場合にこの値を 1 に設定すると、Discoverer Desktop によりエラー・メッセージ（「ORA-00942 表またはビューが存在しません。」など）が表示されます。	デフォルト : 0 0 – オブジェクトへのアクセス可能性の検証が有効 1 – オブジェクトへのアクセス可能性の検証が無効

表 22-1 Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定（続き）

レジストリ・キー名	説明	デフォルト値およびその他の値
Database¥QPPCBOEnforced	<p>1 に設定すると、コストベースのオブティマイザが使用されます。0 に設定すると、デフォルトのオブティマイザが使用されます。</p> <p>コストを取得する文を問合せ予測で解析する必要があります。コストベースのオブティマイザで解析している場合にのみコストを取得できます（ルールベースのオブティマイザによる解析時にはコストは生成されません）。</p> <p>Discoverer では、これらの文の解析時にデフォルトでコストベースのオブティマイザが強制的に使用されます。</p> <p>このレジストリ設定を 0 に設定すると、データベースおよび問合せに含まれる表に対してデフォルトのオブティマイザが使用されます。つまり、ルールベースのオブティマイザがデフォルトで、表が分析されていない場合、問合せ予測が使用できなくなります。</p>	<p>デフォルト : 1</p> <p>0 – デフォルトの問合せオブティマイザを使用</p> <p>1 – コストベースのオブティマイザを使用</p>
Database¥QPPCreateNewStats	<p>1 に設定すると、新規統計が記録されます。これらの統計は、問合せ予測で使用されます。</p> <p>0 に設定すると、問合せ予測用の新規統計は作成されません。</p>	<p>デフォルト : 1</p> <p>0 – FALSE</p> <p>1 – TRUE</p>
Database¥QPPEnable	<p>この設定により、問合せ予測を有効化または無効化できます。</p> <p>1 に設定すると、問合せ予測（QPP）が使用されます。</p>	<p>デフォルト : 1</p> <p>0 – FALSE</p> <p>1 – TRUE</p>

表 22-1 Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定（続き）

レジストリ・キー名	説明	デフォルト値およびその他の値
Database¥RdbFastSQLOff	この設定は、RDB に対して実行される Discoverer にのみ適用されます。1 に設定すると、RDB サーバー上で「fast sql」が無効になります。 Oracle RDB に対してエラーが検出された場合のみこのレジストリ設定を使用してください。これにより、一部の問題を回避できることがあります。	デフォルト : 1 0 - FALSE 1 - TRUE
Application¥ShowReadOnlyPrompt	ファイル・ベースのワークブックを読み取り専用にするようにオペレーティング・システム権限を設定できます。この例では、ユーザーがワークブックを開くとき、「読み取りまたは書き込み用にこのワークブックを開くことができないため、変更は別のワークブックに保存してください」という警告メッセージが表示されます。このレジストリ設定により、警告メッセージを表示しないようにできます。	デフォルト : 0 0 - FALSE 1 - TRUE
Database¥SQLType	この設定により、「SQL インспекター」ダイアログでの SQL の表示方法を決定できます。	デフォルト : 0 0 - フラット化された SQL (つまり、Oracle の標準書式) 1 - odbc SQL 2 - ネイティブな SQL (つまり、インライン・ビューとともにカーネルに送られる Discoverer SQL)

表 22-1 Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定（続き）

レジストリ・キー名	説明	デフォルト値および その他の値
Database¥SummariesAlwaysAccessible	<p>この設定により、「サマリー」タブからのサマリー・フォルダを迅速に表示でき、実際にアクセス可能かどうかにかかわらずこれらのサマリー・フォルダがすべてアクセス可能と表示されます。この設定により、時間がかかる可能性のある検証および確認を回避して、サマリー・フォルダの表示または変更を迅速に行うことができます。この設定を使用する必要があるのは、サマリー・フォルダの数が多い場合の設定のみです。</p> <p>注意：この設定を有効にすると、実際にはアクセスできないサマリー・フォルダが UI ではアクセス可能と表示され、この設定を無効にするまで、UI には実際のアクセス可能性が反映されません。このため、Discoverer 管理者が必要な処置を見落とす可能性があります。</p> <p>「サマリー」タブからのサマリー・フォルダを迅速に表示するには、1 に設定してください。</p> <p>「サマリー」タブで表示する前にサマリー・フォルダを検証するには、0 に設定してください。</p>	<p>デフォルト：0</p> <p>0 – FALSE</p> <p>1 – TRUE</p>
Administrator¥TablespaceForMVS	DB2 上でユーザーが指定する表領域を制御します。このレジストリ設定は通常、End User Layer のインストール時に使用します。	デフォルトなし

Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の編集方法

Windows レジストリ・エディタを使用して、Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定を編集します。

レジストリ・エディタの起動方法とレジストリ設定の編集方法は、使用中の環境によって異なります。

Windows NT4 環境でレジストリ・エディタを起動し、Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定を編集する手順は、次のとおりです。

1. Windows の「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択します。
2. 「ファイル名を指定して実行」ダイアログで、regedt32 と入力し、「OK」をクリックします。
3. %HKEY_CURRENT_USER%Software%Oracle%Discoverer 902% レジストリ・キーを開いて、Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定を参照します。
4. レジストリ・エディタに表示されている Discoverer Administrator または Discoverer Desktop のレジストリ設定の値を編集する場合は、次の操作を行います。
 - a. レジストリ・エディタの右側のペインに表示されているレジストリ設定をダブルクリックして、「DWORD エディタ」ダイアログを表示します。
 - b. レジストリ設定の既存の値を新しい値で置き換え、「OK」をクリックします。
5. レジストリ・エディタに現在表示されていない Discoverer Administrator または Discoverer Desktop のレジストリ設定の値を編集する場合は、次の操作を行います。
 - a. レジストリ設定の上に表示されているキー名をクリックします。

たとえば、QPPEnable を 0 に設定する場合にレジストリ・エディタに QPPEnable が表示されていなければ、%HKEY_CURRENT_USER%Software%Oracle%Discoverer 902%Database% レジストリ・キーをクリックして選択します。特定のレジストリ設定のレジストリ・キーの詳細は、「[Discoverer Administrator および Discoverer Desktop のレジストリ設定の詳細](#)」を参照してください。
 - b. 「編集」→「値の追加」を選択して、「値の追加」ダイアログを表示します。
 - c. 追加する Discoverer のレジストリ設定の名前（QPPEnable など）を入力し、「OK」をクリックします。

「文字列エディタ」ダイアログが表示されます。
 - d. Discoverer のレジストリ設定の値（1 など）を入力し、「OK」をクリックします。

レジストリ・エディタに、指定した値のレジストリ設定が表示されます。

6. 「レジストリ」→「レジストリ エディタの終了」を選択して、レジストリ・エディタを閉じます。

Discoverer リリース 9.0.2 への アップグレード

Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレード

この章では、Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレード方法について説明します。この章は次のトピックから構成されています。

- [Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレード](#)
- [Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレードについて](#)
- [Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレードの前提条件](#)
- [アップグレード・ステップ 1: リリース 4.1 EUL のバックアップ](#)
- [アップグレード・ステップ 2: リリース 4.1 EUL のアップグレード](#)
- [アップグレード・ステップ 3: サマリー・フォルダのリフレッシュ](#)
- [アップグレード・ステップ 4: Discoverer リリース 9.0.2 へのユーザーの移行](#)
- [アップグレード・ステップ 5: リリース 4.1 EUL の削除](#)
- [アップグレード・ステップ 6: クライアント・マシンからの Discoverer リリース 4.1 製品の削除](#)
- [分析関数を含む EUL のアップグレードに関する注意](#)

Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレードについて

Discoverer リリース 9.0.2 を使用するには、Discoverer ユーザーは Discoverer リリース 5.1 の End User Layer (EUL) へのアクセス権を持っている必要があります。Discoverer リリース 4.1 EUL へのアクセス権がある場合は、EUL をアップグレードすれば、Discoverer リリース 9.0.2 を使用してアクセスできるようになります。

EUL アップグレード・プロセスにより新しいリリース 5.1 の EUL 表が作成され、リリース 4.1 の EUL 表から新しい表にデータがコピーされます。アップグレード・プロセスは中断を必要とするものではないため（リリース 4.1 の EUL 表は削除されない）、既存ユーザーはアップグレード・プロセス中も Discoverer リリース 4.1 を引き続き使用できます。

アップグレードする各 EUL について、次のアップグレード・ステップを実行します。

- [アップグレード・ステップ 1: リリース 4.1 EUL のバックアップ](#)
- [アップグレード・ステップ 2: リリース 4.1 EUL のアップグレード](#)
- [アップグレード・ステップ 3: サマリー・フォルダのリフレッシュ](#)

リリース 4.1 の EUL がすべて正常にアップグレードされたことを確認した後、次のアップグレード・ステップを実行します。

- [アップグレード・ステップ 4: Discoverer リリース 9.0.2 へのユーザーの移行](#)
- [アップグレード・ステップ 5: リリース 4.1 EUL の削除](#)

すべてのユーザーをアップグレードし、すべてのリリース 4.1 EUL を削除した後、次のアップグレード・ステップを実行します。

- [アップグレード・ステップ 6: クライアント・マシンからの Discoverer リリース 4.1 製品の削除](#)

Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレードの前提条件

Discoverer リリース 9.0.2 にアップグレードするには、事前に Oracle9i Developer Suite バージョン 2 (Discoverer リリース 9.0.2 を含む) をインストールしておく必要があります。

また、End User Layer をアップグレードするには、EUL 所有者が次の権限を所有している必要があります。

- CREATE PROCEDURE
- CREATE SESSION
- CREATE TABLE
- CREATE VIEW
- CREATE SEQUENCE

Oracle 8.1.6 以上のデータベースにアップグレードする場合は、サマリーがマテリアライズド・ビューとして実現されるため、EUL 所有者には次の権限が必要になります。

- CREATE ANY MATERIALIZED VIEW
- DROP ANY MATERIALIZED VIEW
- ALTER ANY MATERIALIZED VIEW
- GLOBAL QUERY REWRITE

重要: リリース 5.1 EUL へ転送されるデータの整合性を保つために、アップグレードの実行中は、リリース 4.1 EUL で Discoverer Administrator セッションを開始しないでください。

アップグレード・ステップ 1: リリース 4.1 EUL のバックアップ

Discoverer リリース 9.0.2 へ EUL をアップグレードする前に、標準のデータベース・エクスポート・ユーティリティを使用して EUL 所有者をエクスポートし、EUL 表をバックアップしておく必要があります。

EUL 所有者のエクスポート方法は次の条件により異なります。

- ユーザーのマシンにインストールされている Oracle クライアント・ソフトウェアのバージョン
- リリース 4.1 EUL が存在する Oracle データベースのバージョン

Oracle データベースのバージョンとユーザーのマシンにインストールされた Oracle データベース・クライアント・ソフトウェアのバージョンを同じにすることをお勧めします。バージョンが異なる場合 (EUL が Oracle8i データベースにあり、Oracle9i クライアント・ソフトウェアがマシンにインストールされている場合など)、以降の指示に従うことができない可能性があります。EUL をエクスポートできない場合は、データベース管理者に連絡し、EUL をエクスポートするように依頼してください。

リリース 4.1 EUL をバックアップするには (EUL が Oracle9i データベース上に存在し、ユーザーが Oracle9iDS のインストールされたマシンを使用していると想定)、第 3 章の「標準データベース・エクスポート・ユーティリティによる EUL のエクスポート方法」および第 3 章の「標準データベース・インポート・ユーティリティによる EUL のインポート方法」を参照してください。

リリース 4.1 EUL をバックアップした後、リリース 5.1 へのアップグレードを開始できます。

アップグレード・ステップ 2: リリース 4.1 EUL のアップグレード

リリース 4.1 EUL をバックアップした後、リリース 5.1 に EUL をアップグレードできます。リリース 4.1 EUL を所有していたユーザーと同じデータベース・ユーザーがリリース 5.1 EUL を所有します。

リリース 4.1 のユーザーはアップグレードの影響を受けずに、リリース 4.1 EUL を引き続き使用できます。

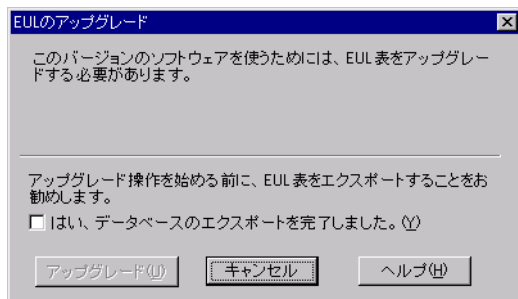
重要: リリース 5.1 EUL へ転送されるデータの整合性を保つために、アップグレードの実行中は、リリース 4.1 EUL で Discoverer Administrator セッションを開始しないでください。

リリース 4.1 EUL をリリース 5.1 にアップグレードする手順は次のとおりです。

1. Windows の「スタート」メニューから「プログラム」、「Oracle9i Developer Suite - <インスタンス名>」、「Discoverer Administrator」の順に選択し、「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログを表示します。
2. アップグレードする Discoverer リリース 4.1 EUL の所有者のデータベース・ユーザー名およびパスワードを入力します。
3. 「OK」をクリックします。

「EUL のアップグレード」ダイアログが表示されます。

図 23-1 「EUL のアップグレード」ダイアログ



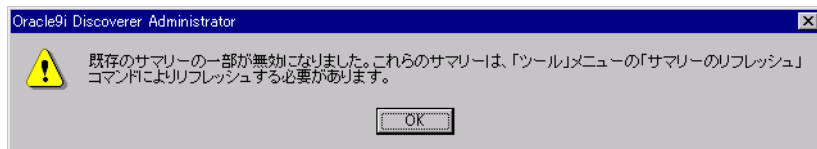
注意：リリース 4.1 EUL をまだエクスポートしていない場合は、「キャンセル」をクリックして EUL をエクスポートしてください（詳細は、「[アップグレード・ステップ 1: リリース 4.1 EUL のバックアップ](#)」を参照してください）。

4. 「はい、データベースのエクスポートを完了しました。」チェックボックスを選択し、Discoverer リリース 4.1 EUL をエクスポートしたことを確認します。
5. 「アップグレード」をクリックし、リリース 4.1 EUL からコピーしたデータを使用して新しいリリース 5.1 EUL を作成します。

EUL アップグレードの進行状況バーに、アップグレードのステータスが表示されます。

アップグレードされた EUL の中にサマリー・フォルダがある場合は、サマリー・フォルダが無効であり、リフレッシュが必要であることを示す次のメッセージ・ダイアログが表示されます。

図 23-2 無効なサマリーの警告メッセージ・ダイアログ



6. 前述のメッセージ・ダイアログが表示された場合は、「OK」をクリックします。
ロード・ウィザードが表示されます。
7. 「キャンセル」をクリックしてロード・ウィザードを終了します。

EUL アップグレードは完了しました。この EUL を使用して、Discoverer Administrator リリース 9.0.2 を使用してデータベースに接続できます。

アップグレード・ステップ3: サマリー・フォルダのリフレッシュ

アップグレードした EUL の中にサマリー・フォルダがある場合には、サマリー・フォルダをリフレッシュする必要があります。

リリース 4.1 のサマリー・フォルダの定義が新しいリリース 5.1 EUL にコピーされ、アップグレードされたサマリー・フォルダのステータスは「要リフレッシュ」に変更されます。アップグレードされたサマリー・フォルダの基礎となっているデータベース表またはマテリアライズド・ビューは、サマリー・フォルダがリフレッシュされるまでは実際に作成されません。

アップグレードされたサマリー・フォルダをリフレッシュすると、次の処理が行われます。

- Oracle 8.1.5 以下のデータベースでは、Discoverer によりサマリー表が作成されます。
- Oracle 8.1.6 以上データベースでは、Discoverer によりマテリアライズド・ビューが作成されます。

サマリー表またはマテリアライズド・ビューが作成された時点で、Discoverer によりサマリー・フォルダを使用して最適化問合せを作成できます。

サマリー・フォルダ、サマリー表およびマテリアライズド・ビューの詳細は、[第 14 章の「サマリー・フォルダの管理」](#)を参照してください。

アップグレードされたサマリー・フォルダをリフレッシュする手順は次のとおりです。

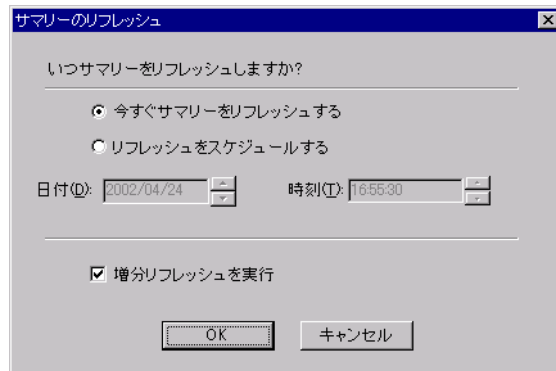
1. アップグレードされた EUL の所有者として Discoverer Administrator に接続します。
2. リフレッシュするサマリー・フォルダを含むビジネスエリアをオープンします。
3. 「ワークエリア」の「サマリー」タブを表示します。
4. リフレッシュするサマリー・フォルダを選択します。

サマリー・フォルダを Discoverer で使用できるようにするためには、まず、すべてのサマリー・フォルダをリフレッシュする必要があります。しかし、データの量によっては、すべてのサマリー・フォルダを同時にリフレッシュしたくない場合もあります。

5. 「ツール」→「サマリーのリフレッシュ」を選択します。

外部サマリー表に基づいていないサマリー・フォルダについて、「サマリーのリフレッシュ」ダイアログが表示されます。

図 23-3 「サマリーのリフレッシュ」 ダイアログ



- 必要に応じてリフレッシュ・オプションを指定します。

即時にリフレッシュすることも、時間を指定してリフレッシュすることもできます。
データの量に応じて、ピークを避けた時間帯にスケジュールすることも可能です。

- 「OK」をクリックしてサマリー・フォルダをリフレッシュします。

注意

アップグレードされた EUL に、外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダが含まれる場合は、これらのサマリー・フォルダもリフレッシュする必要があります。Discoverer はリフレッシュ中に、外部サマリー表に基づいてサマリー・フォルダの EUL メタデータを更新します。Oracle 8.1.6 以上を使用している場合は、Discoverer により外部サマリー表を参照するマテリアライズド・ビューが作成されます。

アップグレード・ステップ 4: Discoverer リリース 9.0.2 へのユーザーの移行

リリース 4.1 EUL をすべてアップグレードし、アップグレードした EUL が使用可能な状態にあることを確認した後、Discoverer ユーザーを Discoverer リリース 9.0.2 に移行します。

組織で順次移行作業を行う間、ユーザーはリリース 4.1 またはリリース 9.0.2 で作業を続けることができます。しかし、Discoverer Administrator の 1 つのリリースを使用して行った変更は、Discoverer の別のリリースのユーザーには使用不可ですので注意してください。

Discoverer ユーザーを Discoverer リリース 9.0.2 に移行する方法は、使用されている Discoverer ツールによって異なります。

Discoverer Plus および Discoverer Viewer ユーザーを移行する手順は次のとおりです。

1. Oracle9iAS Discoverer バージョン 2 (リリース 9.0.2) をインストールします。
2. 『Oracle9iAS 移行ガイド』の説明に従って中間層の Discoverer コンポーネントをアップグレードします。

Discoverer Desktop ユーザーを移行する手順は次のとおりです。

1. Oracle9i Developer Suite から提供される Discoverer Desktop CD を使用して、クライアント・マシンに Discoverer Desktop をインストールします。

Oracle Installer は Discoverer リリース 4.1 のディレクトリとは異なるディレクトリに Discoverer Desktop リリース 9.0.2 を自動的にインストールします。

注意

ユーザーが初めて Discoverer にログインしたときに、そのユーザーがアクセス可能なリリース 5.1 EUL が次のように検索されます。

- 有効な EUL が検出された場合、ユーザーは、Discoverer リリース 9.0.2 に接続して作業を開始できます。
- 有効な EUL が検出されない場合は、ユーザーがデータベースに接続できないことが Discoverer により警告されます。EUL がアップグレードされていない可能性があるため、ユーザーはこの時点で Discoverer 管理者に連絡する必要があります。なお、既存のリリース 4.1 EUL に対して Discoverer リリース 4.1 を使用することは可能です。

Discoverer リリース 9.0.2 がインストールされ、リリース 5.1 EUL を通じてデータベースへの接続が正常に確立されると、次の削除が可能です。

- Discoverer リリース 4.1 EUL をデータベースから削除できます。
- Discoverer リリース 4.1 製品 (Discoverer Desktop Edition、Discoverer Administration Edition) をクライアント・マシンから削除できます。

アップグレード・ステップ 5: リリース 4.1 EUL の削除

すべてのユーザーを Discoverer リリース 9.0.2 にアップグレードし、ユーザーがリリース 5.1 EUL を通じてデータベースに正常に接続できれば、リリース 4.1 EUL を削除できます。

Discoverer は eul4del.sql という名前の SQL スクリプトを提供しています。このスクリプトを使用すると、リリース 4.1 の EUL および関連する表（サマリー表およびマテリアライズド・ビューを含む）を削除できます。

次の点に注意してください。

- eul4del.sql スクリプトを実行すると、SYSTEM ユーザーのパスワードを要求するプロンプトが表示されます。SYSTEM ユーザーのパスワードがわからない場合は、データベース管理者に連絡してください。SYSTEM ユーザーのパスワードを教えるかわりに、データベース管理者がスクリプトを実行する場合もあります。
- EUL 所有者以外のユーザーが所有するサマリー・フォルダがある場合、eul4del.sql スクリプトは正常に終了しません。このスクリプトはこのようなサマリー・フォルダおよびその所有者をリスト表示します。リリース 4.1 EUL を削除するには、これらのサマリー・フォルダ所有者が自分のサマリー・フォルダを削除する必要があります。

リリース 4.1 EUL を削除する手順は次のとおりです。

1. Windows の「スタート」メニューから「プログラム」、「ORACLE9iDS」、「Application Development」、「SQL*Plus」の順に選択し、「SQL*Plus」ダイアログを表示します。
2. 削除する Discoverer リリース 4.1 EUL の所有者のデータベース・ユーザー名、パスワードおよびデータベースを入力します。
3. コマンド・プロンプトに次のように入力し、リリース 4.1 EUL の削除スクリプトを開始します。

```
SQL>@<ORACLE_HOME>%discoverer902%sql%eul4del.sql
```

削除スクリプトは指定されたリリース 4.1 EUL と、サマリー表およびマテリアライズド・ビューを含めて関連するデータベース・オブジェクトをすべて削除します。

削除スクリプトの概要が表示されます。

```
Removing summary refresh jobs ...
Discoverer End User Layer Database Tables (4.x Production) deinstallation
This script will remove a version 4.x EUL and any associated database
objects.
It will:
1. Ask you to enter the ORACLE SYSTEM password and connect string.
2. Ask you to enter the name and password of the 4.x EUL owner.
3. Confirm that you wish to drop the 4.x EUL.
4. Check for database jobs for users other than the 4.x EUL owner.
5. Confirm whether to drop 4.x tutorial tables (if any).
6. Log in as the 4.x EUL owner and remove any database jobs for it.
7. Remove all summary database objects for the 4.x EUL.
```

8. Remove all scheduled workbook database objects for the 4.x EUL.
9. Remove the 4.x EUL tables.
10. Remove user and public synonyms (if any) for the 4.x EUL tables.

4. プロンプトが表示された時点で、**SYSTEM** ユーザーのパスワードおよびデータベース接続文字列を入力します。

SYSTEM ユーザーのパスワードがわからない場合は、データベース管理者に連絡してください。

5. リリース 4.1 EUL の所有者の名前とパスワードを入力します。

次のテキストが表示されます。

```
Preparing to remove EUL 4.x owned by <username> at <today's date>
If you continue, the specified 4.x End User Layer will be PERMANENTLY
dropped. All End User Layer information and workbooks stored in the database
will be deleted.
Any 5.1 End User Layer tables will NOT be affected by this process.
THIS PROCESS IS NON-REVERSIBLE.
Do you wish to continue [N]:
```

EUL 削除プロセスは元に戻すことはできませんので注意してください。

6. Y と入力して、リリース 4.1 EUL を削除することを確認します。

スクリプトによりリリース 4.1 のチュートリアル表が検出された場合は、表を削除するかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

このスクリプトはリリース 4.1 EUL の削除プロセス中に、EUL 所有者以外のユーザーが所有するサマリー・フォルダがあるかどうかを確認します。

- 他のユーザーが所有するサマリー・フォルダがない場合は、リリース 4.1 EUL は削除されます。削除プロセスの様々な段階を示す次のような多数のメッセージが表示されます。

```
Removing summary refresh jobs ...
Dropping internally managed summary data ...
Removing scheduled workbook jobs ...
Dropping scheduled workbook data ...
Dropping 4.x End User Layer Tables ...
Removing public synonyms (if any) ...
Connected.
```

```
Finished removing 4.x End User Layer.
```

- EUL 所有者以外のユーザーが所有するサマリー・フォルダがある場合、スクリプトは停止し、次のテキストが表示されます。

```
The following users have managed summaries which must be dropped before
this EUL can be deinstalled:
User: SCOTT, Summary: Scott's Summary
User: FRED, Summary: Fred's Summary
etc.
Quitting - no changes made.
```

このメッセージが表示された場合、指定されたユーザーは Discoverer Administration Edition リリース 4.1 にログインし、指定されたサマリー・フォルダを削除する必要があります（詳細は、[第 15 章の「サマリー・フォルダの削除方法」](#)を参照してください）。これらのサマリー・フォルダを削除した後、eul4del.sql スクリプトを再実行し、リリース 4.1 EUL を削除します。

アップグレード・ステップ 6: クライアント・マシンからの Discoverer リリース 4.1 製品の削除

ユーザーが Discoverer リリース 9.0.2 に正常に接続し、サマリー・フォルダが正しく機能していることを確認した後、Discoverer リリース 4.1 製品（Discoverer Administration Edition、Discoverer Desktop Edition）をクライアント・マシンから削除できます。

クライアント・マシンから Discoverer リリース 4.1 製品を削除する手順は次のとおりです。

1. Discoverer リリース 4.1 製品のインストールに使用した CD をコンピュータに挿入します。

Oracle Installer が自動的に起動します。Installer が自動的に起動しない場合は、Windows Explorer から CD-ROM にアクセスし、CD ルート・ディレクトリから setup.exe を実行します。
2. Oracle Installer のダイアログを使用して Discoverer リリース 4.1 製品を削除します。

Discoverer リリース 4.1 で作成され、<ORACLE_HOME>%discvr4 ディレクトリに保存されているワークブックは削除されません。
3. （オプション）後で使用するために <ORACLE_HOME>%discvr4 ディレクトリのワークブックを保持するには次のようにします。
 - a. <ORACLE_HOME>%discvr4 ディレクトリから Discoverer リリース 9.0.2 で使用する新しいディレクトリに Discoverer リリース 4.1 のワークブックを移動します。
 - b. %discvr4 フォルダを削除します。

Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレードに関する注意

Oracle Applications EUL のアップグレードに関する注意

Oracle Applications EUL をアップグレードするときには、EUL 表の MAXEXTENTS 記憶領域プロパティが、EUL が作成された表領域の MAXEXTENTS 記憶領域プロパティよりも大きな値になっている可能性がありますので注意してください。このような場合には、EUL のアップグレードは次の理由により失敗します (ORA-01631 エラー)。

- アップグレード・プロセスは、新しい EUL 表を作成するときに、元の EUL 表領域の MAXEXTENTS 値を使用します。
- このため、新しい EUL 表は、元の EUL 表からのデータを含めるだけの十分な大きさを持たないものになります。

EUL 表の MAXEXTENTS 値が EUL の表領域の MAXEXTENTS 値よりも大きいときには、EUL をアップグレードする前に、元の EUL の表領域の MAXEXTENTS 値を増加するようにデータベース管理者に依頼してください。新しい EUL 表領域および新しい EUL 表は、より大きな MAXEXTENTS 値を持つように作成されます。

分析関数を含む EUL のアップグレードに関する注意

このリリースの Discoverer に EUL をアップグレードすると、新しい Oracle9i 分析関数が EUL 表に追加されます。

新しい関数と同じ名前（または同じ意識別子）の既存のユーザー定義関数がある場合、Discoverer は次の処理を実行します。

- 既存のユーザー定義関数の名前を変更
- アップグレード・プロセスの最後にログ・メッセージを表示
- ログ・ファイルにメッセージを保存するオプションの提供

注意： Discoverer の内部参照システムにより、Discoverer エンド・ユーザーは名前を変更されたユーザー定義関数を含むワークブックを引き続き使用できます。

第 II 部

リファレンス

『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』のこのセクションでは、Discoverer Administrator のすべてのダイアログの説明を含めて、一般的なリファレンスを提供します。

ダイアログのリファレンス

ダイアログのリファレンス

この章では、Discoverer Administrator の各ダイアログに関する包括的なリファレンス情報を提供します。

ダイアログのリファレンス一覧

この項では、Discoverer Administrator で使用されるダイアログのリファレンスへのリンクをリストしています。

- [「アイテムの組合せの追加」ダイアログ](#)
- [「サマリー・フォルダへのアイテムの追加」ダイアログ](#)
- [サマリー・フォルダに関する追加情報](#)
- [「アルファベット順」ダイアログ](#)
- [「ビジネスエリア プロパティ:」ダイアログ](#)
- [「識別子の変更の警告」ダイアログ](#)
- [「フォルダの選択」ダイアログ（アイテム、条件、結合）](#)
- [「表またはビューの選択」ダイアログ](#)
- [「条件プロパティ」ダイアログ](#)
- [「ビジネス エリア削除の確認」ダイアログ](#)
- [「削除の確認」ダイアログ](#)
- [「フォルダ削除の確認」ダイアログ](#)
- [「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログ](#)
- [「EUL 作成ウィザード」ダイアログ](#)
- [「EUL 作成ウィザード ステップ 2」ダイアログ](#)
- [「EUL の作成ウィザード ステップ 2」ダイアログ（Oracle Applications ユーザー）](#)
- [「カスタム フォルダ」ダイアログ](#)
- [「カスタム・フォルダのプロパティ」ダイアログ](#)
- [「データベース情報」ダイアログ](#)
- [「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: タブのリスト](#)
- [「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: 「8i プロパティ」タブ](#)
- [「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: 「マッピング」タブ](#)
- [「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: 「プロパティ」タブ](#)

- 「データベース記憶領域のプロパティ」 ダイアログ:「表領域」タブ
- 「日付書式」 ダイアログ
- 「EUL の削除」 ダイアログ
- 「ユーザー定義アイテムの編集」 ダイアログ
- 「EUL マネージャ」 ダイアログ
- 「EUL アップグレードエラー」 ダイアログ
- 「EUL のアップグレード」 ダイアログ
- 「エクスポート・ウィザード ステップ 1」 ダイアログ
- 「エクスポート・ウィザード ステップ 2」 ダイアログ (選択したビジネスエリア)
- 「エクスポート・ウィザード ステップ 2」 ダイアログ (オブジェクトの選択)
- 「エクスポート・ウィザード」 ダイアログ – 最終ステップ – ファイルの保存
- 「フォルダ プロパティ」 ダイアログ
- 「階層ウィザード」 ダイアログ
- 「影響」 ダイアログ
- 「PL/SQL 関数のインポート」 ダイアログ
- 「インポート・ウィザード ステップ 1」 ダイアログ
- 「インポート・ウィザード ステップ 2」 ダイアログ
- 「インポート・ウィザード ステップ 3」 ダイアログ
- 「チュートリアル of インストール / 削除ウィザード ステップ 1」 ダイアログ
- 「チュートリアル of インストール / 削除ウィザード ステップ 2」 ダイアログ
- 「チュートリアル of インストール ウィザード ステップ 3」 ダイアログ
- 「アイテム クラス ウィザード」 ダイアログ
- アイテム クラス ウィザード:「属性の選択」 ダイアログ
- アイテム クラス ウィザード:値リストの詳細オプションのダイアログ
- 「日付階層を使用するアイテム」 ダイアログ
- アイテム クラス ウィザード:「アイテムの選択」 ダイアログ (代替ソートを行う場合)
- アイテム クラス ウィザード:「アイテムの選択」 ダイアログ (値リストを生成する)
- 「アイテム プロパティ」 ダイアログ
- 「結合オプション」 ダイアログ

- 「結合プロパティ」 ダイアログ
- 「ロードウィザードステップ1」 ダイアログ
- 「ロードウィザード ステップ2」 ダイアログ
- 「ロードウィザード ステップ3」 ダイアログ
- 「ロードウィザードステップ4」 ダイアログ
- 「ロードウィザードステップ5」 ダイアログ
- 「フォルダの管理」 ダイアログ: 「ビジネスエリア → フォルダ」 タブ
- 「フォルダの管理」 ダイアログ: 「フォルダ → ビジネスエリア」 タブ
- 「スケジュールの管理」 ダイアログ
- 「階層の名前付け」 ダイアログ
- 「サマリー フォルダの名前付け」 ダイアログ
- 「新規条件」 ダイアログ (詳細設定)
- 「新規条件」 ダイアログ (オブジェクトの選択)
- 「条件の新規作成 / 編集」 ダイアログ
- 「新規日付書式」 ダイアログ
- 「新規アイテム」 ダイアログ (アイテム用フォルダの選択)
- 「新規アイテム」 ダイアログ
- 「新規結合」 ダイアログ (フォルダの選択)
- 「新規結合 / 結合の編集」 ダイアログ
- 「新規結合」 ダイアログ
- 「オンライン・ディクショナリ・オプション」 ダイアログ
- 「ビジネスエリアを開く」 ダイアログ
- 「オプション」 ダイアログ: 「接続」 タブ
- 「オプション」 ダイアログ: 「デフォルト EUL」 タブ
- 「PL/SQL 関数」 ダイアログ: 「引数」 タブ
- 「PL/SQL 関数」 ダイアログ: 「関数」 タブ
- 「権限」 ダイアログ: 「ユーザー → 権限」 タブ
- 「権限」 ダイアログ: 「問合せ管理」 タブ
- 「権限」 ダイアログ: 「スケジュールされたワークブック」 タブ

- 「権限」ダイアログ:「権限→ユーザー」タブ
- 「プロパティ」ダイアログ
- 「ビジネスエリアのリフレッシュ」ダイアログ
- 「サマリーのリフレッシュ」ダイアログ
- 「サマリー・フォルダのリフレッシュ」ダイアログ
- 「リフレッシュ ウィザード」ダイアログ
- 「リポジトリ ユーザー」ダイアログ
- 「職責の選択」ダイアログ
- 「スケジュールされたワークブック」ダイアログ:「一般」タブ
- 「スケジュールされたワークブック」ダイアログ:「スケジュール」タブ
- 「セキュリティ」ダイアログ:「ビジネスエリア→ユーザー」タブ
- 「セキュリティ」ダイアログ:「ユーザー→ビジネスエリア」タブ
- 「デフォルト EUL の選択」ダイアログ
- 「階層を構成するアイテムを選択」ダイアログ
- 「サマリー プロパティ」ダイアログ
- 「サマリー ウィザード (ASM)」:「デフォルト設定の変更」ダイアログ:「ダイアログのリスト」タブ
- 「サマリー ウィザード (ASM)」:「デフォルト設定の変更」ダイアログ:「分析」タブ
- 「サマリー ウィザード (ASM)」:「デフォルト設定の変更」ダイアログ:「削除」タブ
- 「サマリー ウィザード (ASM)」:「デフォルト設定の変更」ダイアログ:「フォルダ」タブ
- 「サマリー ウィザード (ASM)」:「デフォルト設定の変更」ダイアログ:「問合せの使用方法」タブ
- 「サマリー ウィザード (ASM)」:「デフォルト設定の変更」ダイアログ:「ユーザーの問合せ」タブ
- 「サマリー ウィザード (ASM)」:「分析不能」ダイアログ
- 「サマリー ウィザード (ASM)」:「推奨サマリー」ダイアログ
- 「サマリー ウィザード (ASM)」:ステップ3「領域の割当て」ダイアログ
- 「サマリー ウィザード ステップ1」ダイアログ
- 「サマリー ウィザード ステップ2」ダイアログ
- 「問合せ統計の使用」ダイアログ

- 「サマリー ウィザード (ASM)」 ダイアログのリスト
- 「外部サマリー表の使用」 ダイアログ
- 「ヘルプの使用方法」
- 「値」 ダイアログ
- 「ワークエリア」: 「データ」 タブ
- 「ワークエリア」: 「階層」 タブ
- 「ワークエリア」: 「アイテム クラス」 タブ
- 「ワークエリア」: 「サマリー」 タブ

「アイテムの組合せの追加」ダイアログ

このダイアログを使用して、サマリーの使用を指定します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「サマリー ウィザード ステップ 4」ダイアログ

「サマリー ウィザード ステップ 5」ダイアログ

「サマリーの編集」ダイアログ: 「組合せ」タブ

詳細は次の項を参照してください。

[「サマリー組合せ」](#)

[「サマリー組合せを定義するときに考慮する事項」](#)

[「サマリー組合せをセットアップするためのガイドライン」](#)

たとえば、製品キーおよび製品タイプという 2 つのアイテムの手動サマリーを作成するとします。次のように、両方のアイテムを一緒に使用するか、またはそれぞれのアイテムを個別に使用して、問合せてサマリーを使用します。

- 製品キーと製品タイプ
- 製品キー
- 製品タイプ

この場合は 3 つの組合せを作成して、次のように使用するアイテムの横にあるチェックボックスを選択します。

表 24-1 サマリーの組合せ

組合せ	組合せ 1	組合せ 2	組合せ 3
製品キー	選択	選択	なし
製品タイプ	選択	なし	選択

「製品キー」アイテムと「製品タイプ」アイテムが同時に使用された場合にのみサマリーを使用する場合は、デフォルトの組合せのみを使用します。

表 24-2 サマリーの組合せ

組合せ	組合せ 1
製品キー	選択
製品タイプ	選択

「アイテムの組合せの追加」をクリックして目的のアイテムをクリックし、このサマリー・フォルダにアイテムの組合せを追加します。

End User Layer で事前に作成され、管理されるサマリーの組合せを選択します。各組合せ（基本的にユーザーが使用できる問合せとレポート）にはユーザーが希望する分析のタイプが反映されるようにします。サマリー・ウィザードには、軸アイテムとサマリーの各組合せが 1 行で表示されます。

各行で、軸アイテムのチェックボックスをクリックして組合せを指定します。各組合せに対して表が作成され、データが集計されます。End User Layer は、常に指定された表に対してデータを用意し、ユーザーがその問合せを実行する場合に備えます。

「組合せの追加」

新しいサマリー組合せ行を追加します。

「組合せの削除」

選択したサマリー組合せ行を削除します。

「見積り ...」

作成したサマリーの組合せの保存に必要なデータベース領域が表示されます。

「プロパティ ...」

選択した組合せに対するデータベース記憶領域のプロパティを表示し、編集できます。

「状態」

「状態」フィールドには、選択した組合せの状態（詳細は「[「サマリー プロパティ」ダイアログ](#)」、「[注意](#)」を参照）およびデータベース・エラー・メッセージが表示されます。この組合せでサマリー表が作成されなかった場合は、サーバーから戻されたエラー・メッセージがここに表示されます。

「サマリー・フォルダへのアイテムの追加」ダイアログ

このダイアログを使用して、サマリー・フォルダへ追加するアイテムを選択します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「サマリー ウィザード ステップ 3」ダイアログ

「サマリー ウィザード ステップ 4」ダイアログ

「サマリーの編集」ダイアログ: 「アイテム選択」タブ

詳細は次の項を参照してください。

[「サマリー・フォルダ」](#)

「選択可能なアイテム」

サマリーへ追加するアイテムを選択するには、このフィールドを使用します。1 つ以上のアイテムを選択した後、「>」をクリックして「選択されたアイテム」フィールドにアイテムを移動します

「選択されたアイテム」

このフィールドは、サマリー用に選択されたアイテムを含みます。

注意

どのような軸アイテムや関数でも選択できますが、異なる表に属するアイテムを選択する場合は、表間に結合を設定しておく必要があります。

「アルファベット順」ダイアログ

ソートを試みると、この警告ダイアログが表示されます。

- ビジネスエリア内のフォルダ
- フォルダ内のアイテム

フォルダおよびアイテムの詳細は、次のトピックを参照してください。

[「フォルダ」](#)

[「アイテム」](#)

「フォルダ/アイテムはアルファベット順にソートされます。既存の順序は失われます。」

このメッセージは、アルファベット順にソートされるフォルダまたはアイテムの数（n）を表示します。また、「はい」 ボタンをクリックすると既存の表示順が失われることを示しています。

「続行しますか？」

「今後、このダイアログを表示しない」

前述の警告が現行セッション中に再び表示されないように無効にするには、このチェックボックスを選択します。

「はい」

続けるには「はい」をクリックします。Discoverer によりフォルダ / アイテムがソートされます。

「いいえ」

アルファベット順のソートを中止するには、「いいえ」をクリックします。ワークエリアに戻ります。

「ビジネスエリア プロパティ:」 ダイアログ

ビジネスエリアのプロパティを表示または変更するダイアログです。たとえば、ビジネスエリアの名前、説明または識別子を変更します。

詳細は次の項を参照してください。

「ビジネスエリア」

このダイアログには「一般」と「依存性」という 2 つのタブがあります。それぞれのタブをクリックすると、該当するプロパティの設定を確認、編集できます。

「一般」タブ

「一般」タブには次の 3 つのフィールドがあります。

- 「名前」

ビジネスエリア名を識別します。

- 「説明」

ビジネスエリアを説明するテキストです。

このフィールドの内容は、Discoverer Desktop/Plus の問合せウィザードの「説明」行に表示されます。

- 「識別子」

Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意な名前です。

異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、異なる EUL 内にある、同じビジネス・オブジェクトを参照するオブジェクト（概念的に同一のオブジェクトとも呼ばれます）を検索します。

「依存性」タブ

注意: 依存性は、ビジネスエリアのレベルでは適用されません。

「識別子の変更の警告」ダイアログ

このダイアログは、ユーザーがアイテムの識別子の変更を保存するときに、識別子の変更の影響を警告するために表示されます。

識別子は、EUL およびワークブック・オブジェクト（ビジネスエリア、フォルダ、アイテム、ワークシート、パラメータ、結合、条件、ユーザー定義アイテム）を識別するために Discoverer で使用される一意の名前です。たとえば、「A」という EUL 中の「売上」という名前のフォルダと、「B」という EUL 中の「売上額」フォルダが、どちらも同じビジネス・オブジェクトを参照しているとします。この 2 つのフォルダは同じ識別子を持っています。したがって同じオブジェクトとみなすことができます。

多くの場合、識別子を変更しないことをお勧めします。

識別子を変更する必要があるのは、次のような場合です。

- 命名規則に厳密に従う場合
- オブジェクトが削除されてしまったため、オブジェクトを作成しなおして同じ識別子を付ける場合

識別子を変更したときは、他の EUL の一致する識別子も同様に変更する必要があります。

「続けますか？」

「はい」

続けるには「はい」をクリックします。識別子の変更が可能になります。

「いいえ」

中止するには「いいえ」をクリックします。クリックすると「プロパティ」ダイアログに戻ります。

「この警告を再度表示しない」

セッション中にこの警告が再び表示されないように無効にするには、このチェックボックスを選択します。

「フォルダの選択」ダイアログ（アイテム、条件、結合）

このダイアログを使用して、新規のアイテム、条件または結合を格納するためのフォルダを選択します。Discoverer では次のような場合に「フォルダの選択」ダイアログが表示されます。

- 現在選択されているフォルダが、作成しようとする条件を使用しない場合
- 「結合」ダイアログでフォルダが選択されていないときに、ドロップダウン・リストから異なるフォルダが選択された場合

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「新規結合」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「フォルダ」](#)

[「アイテム」](#)

[「結合」](#)

[「条件」](#)

「ビジネスエリア」

このドロップダウン・リストを使用してビジネスエリアを選択します。次に、その下の拡張可能なアイテム・リストからフォルダを選択します。

「表またはビューの選択」ダイアログ

このダイアログを使用して、現行オブジェクトに対して使用するデータベース・ユーザー、表またはビューを選択します。たとえば：

- フォルダの所有者としてデータベース・ユーザーを選択する場合（詳細は「[「フォルダプロパティ」ダイアログ](#)」を参照）。
- 外部サマリー・フォルダの作成時に表またはビューを選択する場合（詳細は、[第 15 章「外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの作成方法」](#)を参照）。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「ユーザーを選択」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「フォルダ」](#)

[「手動によるサマリー・フォルダの作成について」](#)

「データベース」

このドロップダウン・リストを使用して、必要なユーザーまたは表およびビューを含むデータベースを選択します。

リストを使用して、必要なユーザーまたは表およびビューを選択します。

「条件プロパティ」ダイアログ

このダイアログを使用して、条件のプロパティを表示または変更します。

詳細は、次の項目を参照してください。

「条件」

「名前」

このフィールドを使用して、条件の説明的な名前を入力します。この名前が条件リストおよび Discoverer のワークシートに表示されます。

「説明」

このフィールドを使用して、条件の簡単な説明を入力します。Discoverer ユーザーが使用する条件を選択できるように、条件リストにこの説明が表示されます。

「タイプ」

このドロップダウン・リストを使用して、必須条件またはオプション条件を指定します。

- 必須条件は、常にフォルダに適用されます。エンド・ユーザーが、Discoverer Desktop/Plus で条件を表示したり、非表示にすることはできません。
- オプション条件は、適用することもできますし、適用しないこともできます。Discoverer エンド・ユーザーは、Discoverer Desktop/Plus で条件をオンにしたりオフにすることができます。

「順序」

このアイテムが、Discoverer Desktop/Plus の「オブジェクトの選択」ウィザードで表示される順序です。たとえば、すべての条件アイテムを他のアイテムの前に表示するには、順序をアイテムより前に設定します。

「式」

条件を定義する計算式です。これにより「条件の編集」ダイアログが表示されます。構文の詳細は、『Oracle9i SQL リファレンス』を参照してください。

「識別子」

Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意な名前です。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、異なる EUL 内にある、同じビジネス・オブジェクトを参照するオブジェクト（概念的に同一のオブジェクトとも呼ばれます）を検索します。詳細は、第 3 章「識別子とは」を参照してください。

「依存性」タブには、他のオブジェクト（フォルダ、結合、アイテム、アイテム・クラス、サマリー・フォルダ、条件、ユーザー定義アイテムなど）が選択された条件に依存する程度を示す2つの列（タイプと名前）が表示されています。

「タイプ」

選択された条件への依存性を持つ、1つ以上のオブジェクト・タイプ（たとえばフォルダ、アイテムなど）が表示されます。

「名前」

「タイプ」列にリストされたそれぞれのオブジェクトの名前が表示されます。

注意

複数の条件を選択した場合、「プロパティ」オプションを選択すると、プロパティに対するすべての変更は、選択されたすべての条件に影響を与えます。

「ビジネス エリア削除の確認」 ダイアログ

ビジネスエリアの削除方法を管理するダイアログです。たとえば、ビジネスエリアを削除する前に、その影響を確認します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ビジネスエリア」](#)

「ビジネスエリアを削除」

ビジネスエリア自体を削除し、ビジネスエリアの内容は削除しません。

「ビジネスエリアおよび含まれているフォルダを削除」

ビジネスエリアおよびビジネスエリアに含まれているすべてのフォルダを削除します。別のビジネスエリアの一部であるフォルダは、削除されません。

「はい」

選択されたビジネスエリアを削除する場合にクリックします。

「いいえ」

操作を取り消して、このダイアログを閉じる場合にクリックします。ビジネスエリアも End User Layer も変更されません。

「影響 ...」

[「影響」ダイアログ](#)を表示するには、このボタンを使用します。「影響」ダイアログには、選択したビジネスエリアを削除した場合に、影響を受ける、または削除されるすべてのオブジェクトのリストが表示されます。

ヒント

ビジネスエリアが削除されて残ったフォルダは、孤立したフォルダとなります。これらのフォルダは EUL には存在していますが、ワークエリアには表示されません。「ツール」メニューの「フォルダの管理」コマンドを使用して、孤立したフォルダを管理できます。

「削除の確認」ダイアログ

このダイアログを使用して、アイテムの削除方法を管理します。たとえば、アイテムを削除する前に、その影響の確認に使用します。

「はい」

選択したアイテムをビジネスエリアから削除します。

「いいえ」

アクションを取り消してダイアログを閉じます。ビジネスエリアは変更されません。

「影響 ...」

「影響」ダイアログを表示するには、このボタンを使用します。「影響」ダイアログには、選択したアイテムを削除したときに影響を受けるまたは削除されるすべてのオブジェクトのリストが表示されます。

「フォルダ削除の確認」ダイアログ

このダイアログを使用して、フォルダの削除方法を管理します。たとえば、フォルダを削除する前の影響を確認するために使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「フォルダ」](#)

「ビジネスエリアから削除」

このラジオ・ボタンを使用すると、選択されたフォルダが現行のビジネスエリアから削除されますが、End User Layer からフォルダが削除されることはありません。つまり、他のビジネスエリア内でこれらのフォルダを引き続き使用できます。

「End User Layer から削除」

このラジオ・ボタンを使用すると、選択されたフォルダが現行のビジネスエリアおよび End User Layer から削除されます。フォルダは、このビジネスエリアでも、EUL 中の他のビジネスエリアでも使用できなくなります。

「影響 ...」

[「影響」ダイアログ](#)を表示するには、このボタンを使用します。「影響」ダイアログには、選択したフォルダを削除した場合に、影響されるまたは削除されるすべてのオブジェクトのリストが表示されます。

注意

ビジネスエリアから削除されても EUL からは削除されず、他のビジネスエリアから参照されないフォルダは孤立したフォルダと呼ばれます。

「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログ

「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログを使用して、別の End User Layer に接続します。Discoverer Administrator を初めて実行する場合にも、このダイアログが表示されます。EUL に接続しなければ、Discoverer Administrator では作業できません。

注意：

Oracle Applications の EUL に接続すると、「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログが表示され、Oracle Applications の接続の詳細を入力するように求められます（「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログの「状態」エリアを参照）。Oracle Applications の EUL を使用するように Discoverer が設定されていない場合は、「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログを再設定する必要があります。「ファイル」→「オプション」を選択して、Oracle Applications の EUL に接続するように Discoverer を構成します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Oracle Applications モードでの Discoverer の「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログの相違点」](#)

「ユーザー名」

このフィールドを使用して、許可を受けたデータベース・ユーザー名を入力します。

「パスワード」

このフィールドを使用して、ユーザー名に対応する、許可を受けたデータベース・パスワードを入力します。

「データベース」

このフィールドを使用して、接続先のデータベースの名前を入力します。

注意：ローカル・データベース（同一マシン上の）に接続するには、（Oracle8i 以上のデータベースに接続しないかぎり）このフィールドを空白のままにします。

「Oracle Applications ユーザー」

このオプションのチェックボックスが表示されるのは、Discoverer の標準の EUL および Oracle Applications の EUL の両方を使用するように Discoverer を構成している場合です。

Oracle Applications の EUL に接続しない場合は、このオプションを選択しないでください。

Oracle Applications の EUL に接続する場合は、このオプションを必ず選択してください。

「接続」ボタン

入力した接続詳細を使用してデータベースに接続するには、このボタンを使用します。

ヒント

一度に複数の End User Layer に接続することはできません。新しい接続を確立させるときには、開いているビジネスエリアはすべて閉じられ、現行データベースへの接続が終了します。そのため、新規の接続を確立する前に、変更を保存するかどうかを尋ねるプロンプトが表示されます。新しい接続が失敗した場合は、もとのユーザー ID での接続が継続されます。

「EUL 作成ウィザード」ダイアログ

End User Layer (EUL) を作成するウィザードです。このウィザードで、新規 EUL の所有者を定義します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

「新しい EUL の所有者を選択してください」

「既存のユーザーを指定」

現行データベースにすでに存在しているユーザーの EUL を作成するには、このラジオ・ボタンを使用します。この新規 EUL は、そのユーザーに設定された既存の EUL を置き換えます。ドロップダウン・リストからユーザーを選択します。

「新規ユーザーを作成」

データベース内に新規ユーザーと、そのユーザーの EUL を作成するには、このラジオ・ボタンを使用します。新規ユーザーを作成するために十分なデータベース権限が必要です。

「パブリック シノニムにアクセスを許可する」

現行データベースの全ユーザーがこの EUL にアクセスできるようにするには、このチェックボックスを使用します。このオプションを選択しないと、EUL を所有するユーザーのみがこの EUL を通じてデータをアクセスできます。

「新規 EUL は Oracle Applications ユーザー用のみ」

EUL を使用できるユーザーを Oracle Applications のユーザーのみに制限する場合は、このチェックボックスを使用します。標準の EUL を作成する場合は、このチェックボックスを選択解除してください。

「EUL を所有するユーザーのユーザー名およびパスワードを入力してください」

「ユーザー」

- 「既存のユーザーを指定」ラジオ・ボタンを選択した場合は、このドロップダウン・リストを使用して、既存のユーザー名（ユーザー ID）を選択するか、新しいユーザー名を入力します。この EUL が現ユーザーに対する EUL である場合は、パスワードの入力は不要です。
- 「新規ユーザーを作成」ラジオ・ボタンを選択した場合は、このフィールドを使用して、新しいユーザー名（ユーザー ID）を入力します。

「パスワード」

このフィールドを使用してユーザーのパスワードを入力するか、新規ユーザーの新規パスワードを入力します。この新規 EUL を現ユーザーが所有する場合は、このフィールドは使用できません。

「パスワードの確認」

このフィールドを使用して、ユーザーのパスワードを再入力します。既存のユーザーに対してこの EUL を作成している場合は、パスワードの確認は不要です。この新規 EUL を現ユーザーが所有する場合は、このフィールドは使用できません。

「EUL 作成ウィザード ステップ 2」 ダイアログ

このダイアログを使用して、新規ユーザーのデフォルト表領域および一時表領域を選択します。

注意：これらの設定はデータベースの設定です。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「EUL 作成ウィザード ステップ 3」 ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

「デフォルト表領域」

このユーザーの EUL 表、情報、データおよび文書を格納するデータベース表領域を選択します。

EUL 領域の要件および記憶領域パラメータの詳細は、[第 3 章「一般的な EUL の領域要件および記憶領域パラメータ」](#)を参照してください。

デフォルト構成の場合、ここで **USR** 表領域を選択するのが一般的です。

- 「表領域」
「表領域」データベースで使用できる表領域がリストされます。
- 「空き領域 (MB)」
各表領域で使用可能な容量が表示されます。
- 「自動拡張」
データベースの各表領域について、自動拡張機能の状態（オンまたはオフ）が表示されます。この機能がオンに設定されていると、必要に応じて表領域が自動的に拡張されます。

「一時表領域」

このユーザーに関する一時データが格納されるデータベース表領域を選択します。デフォルト構成の場合、ここで **TEMP** 表領域を選択するのが一般的です。

「完了」

定義どおりに EUL を作成するには、このボタンをクリックします。

「EUL の作成ウィザード ステップ 2」 ダイアログ (Oracle Applications ユーザー)

このダイアログを使用して、スキーマを選択し、新規アプリケーションの Oracle Applications FND 表を含むスキーマのパスワードを作成します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

[「Oracle Applications」](#)

Oracle Applications FND 表を含むスキーマの選択

「スキーマ」

目的のスキーマをドロップダウン・リストから選択します。

「パスワード」

スキーマのパスワードを入力します。

「カスタム フォルダ」ダイアログ

このダイアログを使用して、カスタム・フォルダを作成します。これを行うには、SQL の SELECT 文を入力します。他のフォルダと同様、ビジネスエリアでデータを別のフォルダのデータに関連付ける結合が必要です。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「カスタム・フォルダ」](#)

「カスタム フォルダを定義する SQL 文を入力してください」

このフィールドを使用して、フォルダを定義する SQL 文を入力します。次に例を示します。

```
SELECT ENAME, JOB, SAL FROM EMP@ORCL
```

選択されたリスト・アイテムごとにアイテムが作成されます。Discoverer Desktop/Plus では、エンド・ユーザーはカスタム・フォルダを使用して、他のフォルダとまったく同じ方法で問合せを作成できます。

「名前」

このフィールドを使用して、フォルダの名前を入力します。

「SQL 文のチェック」

保存する前に SQL 文をチェックするにはこのボタンを使用します。SQL 文が無効な場合は、エラー・メッセージが表示されます。

「OK」

SQL 文をチェックしてカスタム・フォルダを保存するには、このボタンを使用します。

注意

- SQL 文が無効でもカスタム・フォルダは保存できます。これは、実際のデータベース・オブジェクトが作成または利用可能になる前に SQL 文を EUL に挿入する必要がある状況が考慮されているためです。ただし、ユーザーは SQL 文が修正されるまで問合せを行うことができません。
- SQL 文が無効でこれを修正する場合には、「データ」タブでカスタム・フォルダを選択し、マウスの右ボタンをクリックして「プロパティ」ダイアログを開きます。「カスタム SQL」フィールドをダブルクリックして「カスタム フォルダ」ダイアログを表示します。

「カスタム・フォルダのプロパティ」ダイアログ

現在選択されているカスタム・フォルダのプロパティを表示または変更するには、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「カスタム・フォルダ」](#)

「名前」

このフィールドを使用して、フォルダの名前を入力します。

「説明」

このフィールドを使用して、フォルダの簡単な説明を入力します。

「ユーザーに表示」

Discoverer エンド・ユーザーが Discoverer Desktop/Plus の中でこのフォルダを表示できるようにするかどうか、このフィールドを使用して選択します。

「有効」

この読取り専用フィールドは、カスタム・フォルダの作成に使用された SQL 文が有効な場合は「はい」と表示されます。

「カスタム SQL」

このフィールドを使用して、フォルダの作成に使用する SQL 文を変更する [「カスタムフォルダ」ダイアログ](#)を表示します。

「識別子」

このフィールドを使用して、フォルダに割り当てられた一意の Discoverer ラベルを変更します。

注意

- 「カスタム SQL」フィールドには、フォルダを定義する SQL 文が含まれています。SQL 文が適切でない場合、Discoverer Desktop/Plus でカスタム・フォルダは機能しません。
- SQL 文全体を表示するには「プロパティ」ウィンドウのサイズを調整します。

「ワークエリア」：「データ」タブ

「データ」タブは、Discoverer Desktop/Plus および Discoverer Viewer でユーザーが参照する、ビジネスエリアおよびフォルダおよびアイテムを表示します。アイテムには、軸アイテム、データ・ポイント・アイテム、結合、条件およびユーザー定義アイテムが含まれます。Discoverer Administrator は、非表示フォルダおよび非表示アイテムを表示します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ワークエリア」](#)

[「「ワークエリア」ウィンドウのタブについて」](#)

「データ」タブでは、フォルダ間でアイテムを移動できます。また、フォルダ、複合フォルダ、アイテム、条件、結合の作成、編集および削除、そしてビジネスエリアを削除できます。

「プロパティ」ダイアログを使用して、多くの属性値を検討および変更できるだけでなく、ビジネスエリア、フォルダおよびアイテムの依存性のタイプおよび名前を表示できます。

「データベース情報」ダイアログ

現在の接続先のデータベースの名前および使用可能な機能を表示するには、このダイアログを使用します。たとえば、データベースが正しく構成されているかを確認するために使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Oracle9i Discoverer を使用する前提条件」](#)

「接続先:」

このフィールドを使用して、接続先のデータベースの名前を確認します。このフィールドは、ユーザー名、@ 記号およびデータベース名の連結です。

リスト・ボックスは、データベースの構成情報や、このデータベース・ユーザーが使用できない機能および機能を使用できない理由を表示します。

注意

サマリー管理が使用できない場合

新しく作成された EUL 所有者はサマリー管理を使用できません。

サマリー管理を使用するには、EUL 所有者に次の権限が付与されている必要があります。

- analyze any
- create any materialized view
- drop any materialized view
- alter any materialized view
- global query rewrite

前述の権限は eulasm.sql スクリプトでも設定できます。

「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: タブのリスト

このダイアログを使用して、サマリー・フォルダのデータベース記録領域のプロパティを編集します。たとえば、表領域の割当て、キャッシュの設定およびリフレッシュ・タイプを変更する場合に使用します。

注意: データベース記憶領域のプロパティは、外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダには適用されません。

サマリー・フォルダの詳細は、次の章を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

[「手動によるサマリー・フォルダの作成」](#)

「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログは、4つのタブから構成されています。

「プロパティ」

このタブを使用して、「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: 「プロパティ」タブを表示します。ここでは、データベース記憶領域のプロパティおよびサマリー表名を表示および設定します。

「マッピング」

このタブを使用して、「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: 「マッピング」タブを表示します。ここでは、サマリー組合せの中のアイテムおよびサマリー表の中の列の間のマッピングを表示します。

「表領域」

このタブを使用して、「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: 「表領域」タブを表示します。ここでは、各表領域内の使用可能領域を含めて、使用可能な表領域の記憶域属性を表示します。この情報を使用して、「プロパティ」ページで表領域を選択できます。

「8i プロパティ」(Oracle 8.1.7 以上のデータベース)

このタブを使用して、「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ: 「8i プロパティ」タブを表示します。ここでは、Oracle 8.1.7 以上のデータベースに特有のデータベース記憶領域プロパティを表示および設定します。

「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ：「8i プロパティ」タブ

このダイアログを使用して、Oracle 8.1.7 以上のデータベースに特有のデータベース記録領域プロパティを表示および設定します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Discoverer のフォルダとサマリー・フォルダ」](#)

[「手動によるサマリー・フォルダの作成について」](#)

下記の表に項目とそのデフォルト値を示します。項目を選択すると、ダイアログの下部にあるパネルに項目の用途と使用可能なデータ型に関するメッセージが表示されます。

プロパティ	データ型	デフォルト値	範囲	作成 / 編集
パラレル挿入	ブール	いいえ	はい / いいえ / デフォルト	可能
プロセス数	整数	1		パラレルが「はい」のとき可能
ロギング	ブール	ユーザーの表領域と同一	はい / いいえ	可能
キャッシュ	ブール	いいえ	はい / いいえ	ロギングが「はい」のとき可能
「リフレッシュ・タイプ」		完全	完全 / 高速	可能
「リフレッシュ」		要求時	要求時 / コミット時	
前回のリフレッシュ				読取り専用
増分ロード				読取り専用
失効	ブール	いいえ		読取り専用

「リフレッシュ・タイプ」

■ 「増分」

増分リフレッシュ。マスター表に変更があった行のみがサマリー表に集計されます。これは「強制」オプションで高速リフレッシュを実行することと同じです。

増分リフレッシュに必要な条件の詳細は、『Oracle9i データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。

- 「完全」

ディテール表全体を再計算します。

「リフレッシュ・モード」

- 「要求時」

リフレッシュは手動で実行されるか、スケジュールされた時間に実行されます。

- 「コミット時」

ディテール表が変更されるたびにリフレッシュを行います。リフレッシュをスケジュールする必要はありません。サマリー ウィザードのスケジュール・オプションは使用できません。

コミット時のリフレッシュの実行には制限事項があります。詳細は、『Oracle9i データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。

「増分ロード」

この読取り専用プロパティでは、増分リフレッシュが可能なディテール表およびファクト表への挿入のタイプが指定されます。

- 「いいえ」

マテリアライズド・ビューは高速リフレッシュできません。このため、複合です。

- 「ダイレクト・ロード」

ダイレクト・ロードのみを処理します。

- 「DML」

DML のみを処理します。

- 「ダイレクト・ロードおよび DML」

ダイレクト・ロードと DML の両方を処理します。

- 「ダイレクト・ロードおよび限定的 DML」

ダイレクト・ロードと DML の一部を処理します。

「並列性」

リフレッシュ・オプションで並列度を選択できます。

注意

- このタブは、Oracle 8.1.7 以上のデータベースを実行した場合にのみ表示されます。

「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ:「マッピング」タブ

このタブを使用して、データベース内でサマリー組合せがどのように格納されているかを確認します。組合せアイテムがこのサマリー表の列にどのようにマップされているかを表示できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Discoverer のフォルダとサマリー・フォルダ」](#)

[「手動によるサマリー・フォルダの作成について」](#)

「アイテム」

このフィールドには、ビジネスエリア内のアイテムの名前が表示されます。

「データベース列」

このフィールドには、アイテムがマッピングされる列が表示されます。

「データ型」

このフィールドには、アイテムのデータ型が表示されます。

注意

- このタブの情報は読取り専用です。
- このダイアログは、外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダには適用されません。

「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ:「プロパティ」タブ

このダイアログを使用して、データベース記憶領域のプロパティおよびマテリアライズド・ビューの名前（Oracle 8.1.7 よりも前のデータベースの場合はサマリー表の名前）を表示および設定します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

[「手動によるサマリー・フォルダの作成」](#)

下記の表に項目とそのデフォルト値を示します。最後の 4 つの項目以外はすべて編集できます。値を選択すると、ダイアログの下部にあるパネルにこの値の用途と使用可能なデータ型に関するメッセージが表示されます。

属性	データ型	デフォルト値 *	範囲	作成 / 編集
所有者 注 2	英数字	現在のユーザー		可能
名前	アルファベット	EUL により生成		可能
表領域 注 2	英数字	SYSTEM		可能
初期エクステント 注 2	数字	10K		可能
次エクステント	数字	10K	最小データ・ブロック	可能
PCTINCREASE (%)	数字	50	>=0%	可能
最小エクステント 注 2	数字	1	1- 最大エクステント	可能
最大エクステント	数字	121	> 最小エクステント	可能
PCTFREE (%)	数字 / 静的	10	0-100%	可能
PCTUSED (%)	数字 / 静的	40	0-99%	可能
ステータス	アルファベット / 静的			読取り専用
行数	数字 / 静的			読取り専用
エラー	アルファベット / 静的			読取り専用

属性	データ型	デフォルト値 *	範囲	作成 / 編集
前回のリフレッシュ				読取り専用
注 1 デフォルト値は『Oracle9i SQL リファレンス』の値を使用。注 2 非動的なプロパティ。非動的な記憶領域のプロパティはサマリー・データの配置に影響を与えるため、このプロパティの変更にはかなりの時間がかかります。				

ステータス、行数およびエラーのプロパティは、現存するサマリー・フォルダ、すなわち作成されて名前が付けられているサマリー・フォルダにのみ有効です。「サマリー ウィザード」ダイアログの内部組合せでは、これらの項目はグレー表示（使用不可能）になります。これらの項目は「サマリーの組合せの編集」ダイアログで使用可能になります。

注意

この機能は、外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダには適用されません。

「データベース記憶領域のプロパティ」ダイアログ:「表領域」タブ

このタブを使用して、各表領域で使用可能な表領域も含め、使用可能な表領域の記憶領域に関する属性値を表示します。「Extend」フィールドの表記は、必要に応じて表領域を自動的に拡張するかどうかを示します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Discoverer のフォルダとサマリー・フォルダ」](#)

[「手動によるサマリー・フォルダの作成について」](#)

「表領域」

このフィールドは、表の名前を表示します。

「空き領域」

このフィールドには、表領域内の空き領域の量が表示されます。

「使用済み領域」

このフィールドには、現在使用中の領域の量が表示されます。

「Extend」

このフィールドは、追加の領域が必要なときに自動的に表領域を拡張するかどうかを示します。

注意

- このタブは読取り専用です。
- この機能は、外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダには適用されません。

「日付書式」ダイアログ

Discoverer のワークブックで使用する日付階層を管理するには、このダイアログを使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「階層ウィザード ステップ 2」ダイアログ

「階層の編集」ダイアログ: 「日付書式」タブ

日付階層を作成するには 2 つの方法があります。

- ユーザー独自のカスタム書式マスクを作成します（「新規書式の作成」ボタンを参照）。
- 事前定義された日付書式マスクのセットから選択します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「階層」](#)

[「日付アイテム」](#)

[「日付書式マスク」](#)

「階層の日付書式を選択してください。」

「新規書式の作成 ...」

カスタマイズされた日付書式マスクを定義する [「新規日付書式」ダイアログ](#)を開くには、このボタンを使用します。

「説明 :」

このフィールドは、右側のペインで現在選択されているデータ書式の簡単な説明を表示します。

「書式ペイン」

事前定義された書式を使用するには、左側のペインにリストされたアイテムから選択し、右矢印ボタンをクリックして、右側のペインにアイテムをコピーします。

「昇格」

このボタンを使用して、選択したアイテムを 1 レベル上の階層に移動します。

「降格」

このボタンを使用して、選択したアイテムを 1 レベル下の階層に移動します。

注意

- [Ctrl] キーを押しながらアイテムをクリックすると、複数のアイテムを選択できます。

「EUL の削除」ダイアログ

このダイアログを使用して、削除する EUL の名前を確認します。Discoverer では、現在接続中の EUL のみ削除できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

「EUL」

このフィールドでは、削除するために選択された EUL の名前が表示されます。

「OK」

前述のフィールドで選択された EUL を削除するには、このボタンを使用します。

「キャンセル」

「EUL」テキスト・ボックスに表示されている名前が削除する EUL 名でないときは、このボタンをクリックします。EUL マネージャをクローズして、削除する EUL に接続し直してください。

「ユーザー定義アイテムの編集」ダイアログ

このダイアログを使用して、アイテムおよびユーザー定義アイテムを編集します。

次に例を示します。

- アイテムの名前または説明を変更します。
- ユーザー定義アイテムの名前を変更します。
- ユーザー定義アイテム内の計算式を変更します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ユーザー定義アイテム」](#)

「表示」

このドロップダウン・リストを使用して、使用可能なアイテムおよび関数を表示します。ユーザー定義アイテムにアイテムまたは関数を含めるには、右側の「計算」ボックスに追加します。

「貼り付け」

このボタンを使用して、「表示」リストで現在選択しているアイテムを、右側の「計算」ボックスに追加します。

「名前」

このフィールドを使用して、アイテムまたはユーザー定義アイテムの名前を入力します。Discoverer Administrator によりデフォルト名が作成されます。

「計算」

このテキスト・ボックスを使用して、アイテムまたはユーザー定義アイテムの詳細を入力します。

- ビジネスエリア内のアイテムに基づいてアイテムを作成する場合は、「表示」リストからアイテムを選択します。次に「貼り付け」をクリックして、アイテムを「計算」ボックスに追加します。
- ユーザー定義アイテムを作成するには、次のいずれかを行います。
 - 「計算」ボックスに直接計算式を入力する。
 - 左側の「表示」ボックスからユーザー定義アイテムにアイテムを貼り付ける。
 - 「計算」ボックスの下にある演算子ボタンをクリックして計算に使用する。
 - 前述のオプションを組み合わせる。

「演算子ボタン」([+] [-] [x] [/] [%] ([)]))

これらのボタンを使用して、計算に演算子を追加します。演算子は前述の「計算」ボックスにコピーされます。

「OK」

このボタンを使用して、ユーザー定義アイテムを検証してアイテムを保存します。

- ユーザー定義アイテムの構文が有効な場合、ユーザー定義アイテムが保存され、「ユーザー定義アイテム」ダイアログに表示されます。
- ユーザー定義アイテムの構文が無効な場合は、エラー・メッセージが表示されます。ユーザー定義アイテムを保存する前に、構文エラーを訂正する必要があります。

注意

- ユーザー定義アイテムの中で算術表現を使用した場合、乗算と除算は、その位置に関係なく最初に計算されます。優先順位の同じ演算子が複数ある場合は、左から右へ計算されます。たとえば、値段 - 値引き × 個数という計算式では、値段から値引き × 個数が減算されてしまいます。減算をカッコで囲み（値段 - 値引き）とすれば、乗算より先に減算が計算されます。
- 使用可能な関数

カテゴリ	説明
すべての関数	すべての関数のアルファベット順のリスト
変換	データ型を別のデータ型に変換する関数 : RAWTOHEX、TO_CHAR、TO_DATE
「データベース」	ユーザー定義関数が使用可能な場合に表示されるオプションのカテゴリ（「ツール」メニューの「PL/SQL 関数の登録」機能を使用して作成する）
「日付」	ADD_MONTHS、NEW_TIME、SYSDATE、NEXTDATE など、日付アイテムの操作用の関数
「グループ」	SUM、COUNT、MAX、MIN、VARIANCE などを含む集合関数および統計関数
数値	数値アイテム用の関数。COS、LOG、MOD、POWER など、超越関数および浮動小数点関数

カテゴリ	説明
その他	LEAST、USER、DECODE、ROWNUM など、その他の関数
文字列	文字列アイテム用の関数。INITCAP、LPAD、NLS_UPPER などのテキスト操作
分析	RANK、NTILE、CORR など、統計分析用の関数

「EUL マネージャ」ダイアログ

このダイアログを使用して、異なるデータベースのユーザーに EUL の作成および保守を行います。また、Discoverer のチュートリアルをインストールすることもできます。Discoverer チュートリアルは、現行 EUL にビジネスエリアのサンプルを追加します。Discoverer エンド・ユーザーはこのサンプルを使用できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

『Oracle9i Discoverer Administrator チュートリアル』

「接続先 EUL」

このボタンを使用して、現在接続している EUL の名前を表示します。

「新しい EUL を作成 ...」

このボタンを使用して、現行ユーザーまたはデータベース内の別のユーザーの新規 EUL を作成する [「EUL 作成ウィザード」ダイアログ](#)を表示します。十分なデータベース権限がある場合は、このボタンを使用して新規ユーザーとそのユーザーに対する EUL を同時に作成することもできます。

「既存の EUL を削除 ...」

このボタンを使用して、現行 EUL を削除する [「EUL の削除」ダイアログ](#)を表示します。現行の EUL のみを削除できます。

「チュートリアルのインストール ...」

このボタンを使用して、現行 EUL にチュートリアル・データをインポートする [「チュートリアルのインストール / 削除ウィザード ステップ 1」ダイアログ](#)を表示します。チュートリアルが 1 度もインストールされていない場合は、チュートリアル・ユーザーを作成するための十分なデータベース権限が必要です。

「チュートリアルを削除 ...」

このボタンを使用して、現行 EUL からチュートリアル・データを削除する [「チュートリアルのインストール / 削除ウィザード ステップ 1」ダイアログ](#)を表示します。チュートリアル・ユーザーは削除されません。

「EUL アップグレードエラー」ダイアログ

EUL アップグレード手順の間に発生したエラーを調べるには、このダイアログを使用します。表示されたメッセージを使用して診断し、アップグレードの問題を解決します。

通常、エラー・メッセージには、エラーまたは問題の診断に使用できる、Oracle データベース・エラー番号が含まれています。たとえば、表に親のない子レコードがある場合は、エラー番号 ORA-02298 が表示されます。Oracle データベース・エラー・メッセージの詳細は、Oracle ドキュメント・ライブラリの中の『Oracle9i データベース・エラー・メッセージ』を参照してください。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレード」](#)

[「End User Layer」](#)

「OK」

ダイアログを閉じるにはこのボタンを使用します。ダイアログを閉じる前に、エラー・メッセージを必ず記録してください。

注意

エラーを解決し、EUL に再接続すると、アップグレードが自動的に再開されます。

「EUL のアップグレード」 ダイアログ

このダイアログは、現在のソフトウェア・リリースを使用するためには EUL 表をアップグレードする必要があることを知らせるものです。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Discoverer リリース 9.0.2 へのアップグレード」](#)

[「End User Layer」](#)

EUL 表のアップグレードにあたり、問合せやレポーティングを実行し続けるために、既存のユーザーが同じバージョンの Discoverer Desktop/Plus をインストールする必要があります。

アップグレードのプロセスを開始する前に、EUL 表をエクスポートすることをお勧めします。

「はい、データベースのエクスポートを完了しました。」

データベースのエクスポートが完了後、このチェックボックスを選択します。これにより「アップグレード」ボタンが使用可能になります。

「アップグレード」

EUL アップグレードを開始するにはこのボタンを使用します。

「エクスポート・ウィザード ステップ 1」 ダイアログ

このダイアログを使用して、何をファイルにエクスポートするかを選択します。EUL 全体、ビジネスエリア、フォルダ、アイテム・クラス、アイテム階層、日付階層、PL/SQL 関数登録情報、サマリー・フォルダ、ワークブックおよび自動サマリー管理（ASM）ポリシーをエクスポートできます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピーについて」](#)

[「ビジネスエリアの作成とメンテナンス」](#)

EUL のオブジェクトを新しい EUL にコピーするか、バックアップを作成するには、End User Layer（EUL）全体をエクスポートします。既存の EUL を更新するには、選択したビジネスエリアまたは選択した EUL オブジェクトをエクスポートします。

「どれをエクスポートしますか？」

「End User Layer 全体」

EUL 全体をファイルにエクスポートするには、このオプションを選択します。

「選択したビジネスエリア」

1 つ以上のビジネスエリアをファイルにエクスポートするには、このオプションを選択します。

「End User Layer 上の選択したオブジェクト」

1 つ以上の EUL オブジェクトをファイルにエクスポートするには、このオプションを選択します。

「完了」

指定したように EUL、ビジネスエリア、フォルダまたはアイテムをエクスポートするには、このボタンを使用します。

注意

- エクスポート・オプションでは、エクスポートする EUL、ビジネスエリアまたはオブジェクトの定義のみがエクスポートされます。EUL、ビジネスエリアまたはオブジェクト定義が参照しているデータベース、End User Layer 表またはデータベース・オブジェクトはエクスポートされません。ビジネスエリアまたはオブジェクトをインポートするときには、参照先のデータベース、EUL 表およびデータベース・オブジェクトへのアクセス権を必ず付与してください。

「エクスポート・ウィザード ステップ 2」 ダイアログ（選択したビジネスエリア）

このダイアログを使用して、ファイルにエクスポートするビジネスエリアを選択します。

このダイアログは、次のように表示されます。

「エクスポート・ウィザード ステップ 2」 ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

[「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピーについて」](#)

「どのビジネスエリアをエクスポートしますか？」

ビジネスエリアをエクスポートすると、ビジネスエリア内のすべてのオブジェクトもエクスポートされます。

「選択可能 :」

このフィールドは、EUL 内の選択可能なすべてのビジネスエリアを表示します。

このフィールドを使用して 1 つ以上のビジネスエリアを選択し、「選択済み :」フィールドに移動します。

「選択済み :」

このフィールドは、エクスポートするビジネスエリアを含みます。

ビジネスエリアを選択するには、「選択可能 :」リストから「選択済み :」リストにビジネスエリアを移動します。

「エクスポート・ウィザード ステップ 2」 ダイアログ（オブジェクトの選択）

このダイアログを使用して、エクスポートする個々の EUL オブジェクトを選択します。

このダイアログは、次のように表示されます。

「エクスポート・ウィザード ステップ 2」 ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

[「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピーについて」](#)

「どのオブジェクトをエクスポートしますか？」

「選択可能:」 フィールドに表示する EUL オブジェクトの種類（ビジネスエリア定義、フォルダ、アイテム・クラス、アイテム階層、日付階層など）を選択するには、このドロップダウン・リストを使用します。

「選択可能:」

このフィールドは、EUL 内の使用可能なオブジェクトのうち、現在選択されているオブジェクト・タイプのオブジェクトをすべて表示します（アイテム・クラスを選択した場合は、EUL 内のすべてのアイテム・クラスがこのフィールドに表示されます）。

このフィールドを使用して 1 つ以上のオブジェクトを選択し、「選択済み:」 フィールドに移動します。

「選択済み:」

このフィールドは、エクスポートする EUL オブジェクトを含みます。

すべてのビジネスエリア / フォルダ関連は、可能なかぎり「選択済み:」 リストに表示されます。

「エクスポート・ウィザード」ダイアログ – 最終ステップ – ファイルの保存

このダイアログを使用して、エクスポート・ファイルの保存場所を指定し、次の事項を指定します（オプション）。

- XMLにワークブックを保存するかどうか
- テキスト・ファイル (*.txt) としてエクスポート・コマンドを保存するかどうか

後で、このエクスポート・ファイルは、他の End User Layer にインポートできます。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「エクスポート・ウィザード ステップ 2」ダイアログ

「エクスポート・ウィザード ステップ 3」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer」](#)

[「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピーについて」](#)

「ファイルをどこに保存しますか？」

「参照」ボタンを使用して、「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。このダイアログでは、エクスポート・ファイルの保存場所を指定し、エクスポート・ファイルの名前を入力します（.eex 拡張子付きで保存）。

「次のオブジェクトがエクスポートされます :」

エクスポート・ファイルにエクスポートされるすべてのオブジェクトをリストします。

「エクスポートするワークブックの XML を生成する」

.eex ファイルに XML としてワークブックを保存するには、このチェックボックスを選択します。

ワークブックを除くすべてが、XML 形式でエクスポート・ファイルに保存されます。XML 形式でワークブックを保存するには、このオプションを選択します。XML 形式のワークブックを追加で保存することにより、組込みのワークブック定義（結果ではなく）を XML ブラウザで表示できます。

「エクスポートコマンドをテキストファイル (*.txt) に保存する」

エクスポートの作成に使用されたコマンドを含む追加のテキスト・ファイルを作成するには、このチェックボックスを選択します（詳細は、[第 21 章「Discoverer コマンドライン・インタフェースの使用について」](#)を参照してください）。

「名前を付けて保存」ダイアログ

このダイアログは、前述の「[ファイルをどこに保存しますか?](#)」フィールドの隣の「参照」ボタンを使用すると、表示されます。

「参照」

選択した EUL オブジェクトをファイルに保存する場所を指定する「名前を付けて保存」ダイアログを表示するには、このボタンを使用します。

「保存する場所」

現行の EUL オブジェクトを保存する場所までナビゲートするには、このドロップダウン・リストおよびナビゲーション・ボタンを使用します。

「ファイル名」

このフィールドを使用して、エクスポート・ファイルの名前を入力します。

エクスポートする EUL オブジェクトの種類を示唆する名前を付けることをお勧めします。後で他の EUL にインポートする場合に、ファイルを簡単に探すことができます。

「ファイルの種類」

このドロップダウン・リストを使用して、ファイルをエクスポートする形式を選択します。

デフォルトでは、Discoverer のビジネスエリアは、.EEX ファイル拡張子付きで保存されます。

「保存」

このボタンを使用して、「エクスポート・ウィザード」ダイアログの最終ステップ – ファイルの保存に戻ります。

注意

エクスポート・オプションでは、EUL オブジェクトの定義のみがエクスポートされます。EUL オブジェクト定義が参照しているデータベース、End User Layer 表またはデータベース・オブジェクトはエクスポートされません。.EEX ファイルをインポートするときには、EUL オブジェクトが参照先のデータベース、EUL 表およびデータベース・オブジェクトにアクセスできることを確認してください。

「フォルダ プロパティ」 ダイアログ

このダイアログを使用して、現在選択しているフォルダのプロパティを構成します。たとえば、フォルダの名前または表の所有者を変更します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「フォルダ」](#)

「フォルダ プロパティ」 ダイアログには3つのタブがあります。

- [「一般」 タブ](#)
- [「依存性」 タブ](#)
- [「複合フォルダ」 タブ](#)

「一般」 タブ

このタブを使用して、現行フォルダのプロパティを構成します。

「名前」

このフィールドを使用して、フォルダの一意の名前を入力します。このフィールドの内容は、Discoverer Desktop/Plus のフォルダ選択ダイアログで表示されます。フォルダ名は、End User Layer 内で一意でなければいけません。ビジネスエリアが異なっている場合でも、同じフォルダ名を使用することはできません。

「説明」

このフィールドを使用して、フォルダの簡単な説明を入力します。このフィールドの内容は、問合せウィザードの「説明」行に表示されます。

「ユーザーに表示」

このフィールドは、Discoverer Desktop/Plus の問合せウィザードで、フォルダをエンド・ユーザーに表示するかどうかを指定するために使用されます。フォルダをユーザーに表示する場合は、「はい」を選択します。ユーザー定義アイテムに使用するためにフォルダを残す必要があるが、エンド・ユーザーに直接必要ない場合や表示するには不適切な場合には非表示にします。エンド・ユーザーに対して非表示に設定されているフォルダは、Discoverer Administrator では非表示の状態を示すグレーで表示されます。

「データベース」

このフィールドは、フォルダに対応する表が格納されているソース・データベースの場所を指定します。データベースを変更するには、このフィールドをクリックして「データベースの選択」ダイアログを表示し、ドロップダウン・リストから選択します。

「所有者」

このフィールドは、フォルダに対応する表またはビューの所有者のデータベース・ユーザー ID を指定します。

所有者を変更する場合は、所有者を直接入力するかまたはこのフィールドをクリックし、ボタンをクリックして「ユーザーを選択」ダイアログを表示し、リストから所有者を選択します。

「所有者」項目は空白のままでもかまいません。その場合、このフォルダに対する (Discoverer Desktop/Plus からの) SQL 参照では、所有者のプロパティが指定されません。たとえば、SQL の select 文は次のようになります。

```
select <column> from <table>
```

次のようにはなりません。

```
select <column> from <owner>.<table>
```

このようにすると、表または表の所有者が利用できない EUL や、EUL の管理者がアクセスできない EUL を作成およびメンテナンスする場合に便利です。さらに、1 つの EUL 内に固有のスキーマを持つ複数のユーザー (Oracle Applications のユーザーなど) は、Discoverer Desktop/Plus で問合せを行ったときに自分のスキーマ表にアクセスできるようになります。

「オブジェクト」

このフィールドは、このフォルダに対応するデータベース・オブジェクトの名前を表示します。クリックすると、「表またはビューの選択」ウィンドウが表示されます。オブジェクトを変更する場合は、このフィールドをクリックして「[表またはビューの選択](#)」ダイアログを表示し、リストからオブジェクトを選択します。異なるビジネスエリアまたは異なる所有者からオブジェクトを選択できます。

オブジェクト名を選択すると、「データベース」項目および「所有者」項目の値も (「所有者」項目が空白かどうかにかかわらず)、選択したオブジェクトのデータベースおよび所有者の値に変更されます。

「オプティマイザ ヒント」

このフィールドを使用して、フォルダに対する特定のオプティマイザ・ヒントを指定します。Discoverer Desktop/Plus ではこのヒントを見ることはできません。オプティマイザ・ヒントの使用の詳細は、『Oracle8i パフォーマンスのための設計およびチューニング』マニュアルを参照してください。

「識別子」

このフィールドは、Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意な名前を示します。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、異なる EUL 内にある、同じビジネス・オブジェクトを参照するオブジェクト (概念的に同一のオブジェクトとも呼ばれます) を検索します。

注意

- 「所有者」フィールドを空白にした場合、サマリー表（8.1.7 よりも前のデータベース）は使用できません。サマリー・フォルダがすでに存在する場合は、警告メッセージが表示されます。
- 「所有者」フィールドを変更した場合は、このフォルダに基づくサマリー表（8.1.7 よりも前のデータベース）をリフレッシュする必要があります。サマリー・フォルダがすでに存在する場合はメッセージが表示され、そのフォルダに基づくサマリー・フォルダをリフレッシュするように指示があります。

「依存性」 タブ

「依存性」タブには、他のオブジェクト（フォルダ、結合、アイテム、アイテム・クラス、サマリー、条件、ユーザー定義アイテム、ワークブック、スケジュール済みワークブックなど）が選択されたフォルダに依存する程度を示す 2 つの列（タイプと名前）が表示されています。

「タイプ」

このフィールドには、現行フォルダに依存するアイテムのタイプが表示されます。たとえば、フォルダ、条件、サマリー、ワークブック、スケジュール済みワークブックなどです。

「名前」

このフィールドには、現行フォルダに対して依存性を持つ各アイテムの名前が表示されます。

「複合フォルダ」 タブ

このタブには、複合フォルダで使用するすべてのコンポーネント・フォルダ（およびそのアイテム）が表示されます。

「ワークエリア」:「階層」タブ

このタブを使用して、ビジネスエリア別にグループ分けした EUL 内の階層を確認します。Discoverer エンド・ユーザーはワークシート内で階層を使用して、階層的に編成されたアイテムをドリル・ダウンします。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「階層」](#)

「表示」

表示する階層のタイプを変更するには、このドロップダウン・リストを使用します。ユーザー定義の階層またはシステム定義の階層の表示を選択したり、各種の階層（たとえば、アイテム階層、日付階層または全階層）の表示に選択できます。

注意

- 各階層の内容および編成を確認したり、Discoverer Administrator で用意されている階層テンプレートを表示できます。

「階層ウィザード」ダイアログ

このダイアログを使用して、作成する階層のタイプを選択します。たとえば、Discoverer エンド・ユーザーが時間単位データにドリルできるようにする場合は、日付階層を選択します。

詳細は、次の項目を参照してください。

「階層」

「アイテム階層」

「アイテム階層」

アイテム階層タイプを選択するには、このラジオ・ボタンを使用します。

「日付階層」

日付階層タイプを選択するには、このラジオ・ボタンを使用します。

注意

- 作成する階層の関係は、データベースではなく、ビジネスエリアで定義されます。
- アイテム階層は、ユーザーが異なるレベルの詳細情報にドリル・アップおよびドリル・ダウンできるように、指定した順序で複数のアイテムを結合するために使用されます。たとえば、「国」、「地域」、「地区」、「小売店」という列を結合して、所在地に基づく販売階層を作成できます。高位のアイテム（たとえば、国は地域より高位）は、下位アイテムのスーパーセットになります。この販売階層が作成されると、ユーザーは国別の販売状況を表示するワークシートを作成でき、また個々の国についての地域的な詳細や小売店レベルまでドリル・ダウンできます。
- 日付階層を使用すると、ユーザーはどの時間単位からでもデータ・アイテムにドリル・アップまたはドリル・ダウンできます。たとえば、ユーザーは年単位で販売データを表示でき、四半期単位に、さらに月単位にドリル・ダウンできます。日付階層は、アイテム階層と異なり、年、四半期、月、週、日、時間、分、秒の継承構造をもちます。したがって、Discoverer Administrator はあらかじめ作成されている日付テンプレートを使用して、日付階層の一般的な形式を数多く定義します。さらに、カスタマイズされた日付階層も作成できます。

「影響」ダイアログ

このダイアログを使用して、オブジェクト（ビジネスエリア、フォルダ、アイテム、アイテム・クラス、結合、条件、階層）のリフレッシュまたは削除を行った場合の他オブジェクトに与える影響の度合いを計ります。

表示される情報に基づいて、オブジェクトに対して現行操作を実行することが安全かどうかを判断できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ビジネス エリア削除の確認」ダイアログ](#)

[「削除の確認」ダイアログ](#)

[「フォルダ削除の確認」ダイアログ](#)

「タイプ」

現行操作の影響を受ける可能性のある依存 EUL オブジェクトを表示するには、この列を使用します。ここにリストされる EUL オブジェクトには、ワークブック、スケジュール済みワークブック、サマリー・フォルダ、ビジネスエリア、フォルダ、アイテム、結合、条件およびアイテム・クラスが含まれます。

行を選択すると、現行操作が EUL オブジェクトに与える影響を示すテキストが表示されます。

次の表は、ワークブック、サマリー・フォルダまたはその他の EUL オブジェクトが、現行操作の影響を受ける場合に表示されるメッセージを示しています。

オブジェクト	「影響」ダイアログに表示されるメッセージ
確実に影響を受けるワークブック	削除するオブジェクトはこのワークブックで参照されています。
影響を受ける可能性があるワークブック	ワークブックが影響を受ける可能性があります。ワークブックを一度開いて、現行の EUL と同期させてください。
サマリー	削除する前に、サマリーからこのオブジェクトを削除してください。
アイテム クラス	このオブジェクトは更新されます。
その他すべての EUL オブジェクト	削除されます。

「名前」

現行アクションの影響を受ける可能性のある EUL オブジェクトの名前を表示するには、この列を使用します。

注意

- EUL オブジェクトをリフレッシュまたは削除しても、このオブジェクトに依存するワークブックはリフレッシュまたは削除されません。しかし、依存ワークブックを持つ EUL オブジェクトを削除した場合は、その後のワークブックの使用に影響があります。
- 「影響」ダイアログは、データベースに保存されている依存ワークブックを表示します。ローカルに保存されているワークブックに依存性があることもあります。このようなワークブックは「影響」ダイアログに表示されません。
- 依存サマリー・フォルダを持つ EUL オブジェクトは削除されません。このようなサマリー・フォルダは最初に手動で削除する必要があります。サマリー・フォルダの削除は、「ワークエリア」の「サマリー」タブで行います（詳細は、[第 15 章の「サマリー・フォルダの削除方法」](#)を参照してください）。

「PL/SQL 関数のインポート」ダイアログ

このダイアログを使用して、End User Layer にインポートする PL/SQL 関数を選択します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「PL/SQL 関数が必要な理由」](#)

このダイアログに表示される関数は、SQL コマンドを使用してデータベースに定義されています。データベース内に PL/SQL 関数を定義するための詳細は、『PL/SQL ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』を参照してください。

「インポートする関数」

このリストを使用して、データベースからインポートする関数を 1 つ以上選択します。

「OK」

このボタンを使用して、選択した関数をインポートし、「PL/SQL 関数」ダイアログに戻ります。

注意

[Ctrl] キーを押しながら別の関数をクリックすると、複数の関数を選択できます。

「インポート・ウィザード ステップ 1」 ダイアログ

このダイアログを使用して、インポートする EUL ファイルを選択します。たとえば、Sales.EEX ファイルに格納されているビジネスエリアをインポートします。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピーについて」](#)

「追加 ...」

インポートするエクスポート・ファイル (.EEX) を探す「ファイルを開く」ダイアログを表示するには、このボタンを使用します。

インポートする 1 つ以上のファイルを選択すると、選択したファイルが前述のリストに表示されます。

「インポートするファイルを追加してください。」

このウィンドウには、インポートするために選択されたファイルのリストが表示されます。

「削除 ...」

このボタンを使用して、ファイルのリストで強調表示したエクスポート・ファイルを削除します。

「インポート・ウィザードステップ2」ダイアログ

このダイアログを使用して、複数の異なる EUL に共通するオブジェクトの処理方法を選択します。次に例を示します。

- 既存のビジネスエリアには Sales という名前のフォルダがあります。
- インポートしようとするビジネスエリアには Sales という名前のフォルダがあります。
- インポートするビジネスエリアの中の重複するフォルダの名前を Sales_2 に変更する必要があります。
- インポート後、EUL には Sales と Sales_2 という 2 つのフォルダが含まれます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピーについて」](#)

「2 つのオブジェクトが一致した場合 :」

「インポートされたオブジェクトを改名」

既存のオブジェクトと区別するためにインポートしたオブジェクトを改名するには、このラジオ・ボタンを使用します。たとえば、'Sales' という同じ名前を持つフォルダをインポートする場合、このオプションを選択すると、インポートされたフォルダは 'Sales1' と改名されるため、'Sales' という名前の既存のフォルダと、'Sales1' という名前のインポートしたフォルダの 2 つのフォルダが残ることになります。

「既存のオブジェクトを改名」

インポートしたオブジェクトと区別するために既存のオブジェクトを改名するには、このラジオ・ボタンを使用します。たとえば、'Sales' という同じ名前を持つフォルダをインポートする場合、このオプションを選択すると、既存のフォルダは 'Sales1' と改名されるため、'Sales1' という名前に改名された既存のフォルダと、'Sales' という名前のままのインポートしたフォルダの 2 つのフォルダが残ることになります。

「一致したオブジェクトをインポートしない」

既存のオブジェクトと一致するオブジェクトをインポートしない場合は、このラジオ・ボタンを使用します。たとえば、'Sales' という同じ名前を持つフォルダをインポートする場合、このオプションを選択すると、一致するフォルダである 'Sales' はインポートされないため、'Sales' という名前のままの既存のフォルダが残ることになります。

「オブジェクトをリフレッシュ」

一致するオブジェクトをリフレッシュするには、このラジオ・ボタンを使用します。たとえば、'Sales' という同じ名前を持つフォルダをインポートする場合、このオプションを選択すると、既存のフォルダの 'Sales' が更新されるため、'Sales' という名前の 1 つのフォルダが残ることになります。

「表示プロパティを保持」

次のプロパティをリフレッシュしない場合は、このチェックボックスを使用します（基本となる計算式はリフレッシュ済みです）。

デフォルト位置、ヘディング、書式マスク、文字位置、ワードラップ、表示方法、NULL の表示方法、デフォルト位置。

「2 つのオブジェクトの比較方法 :」

「識別子」

オブジェクト識別子を使用してオブジェクトを比較するには、このラジオ・ボタンを使用します。概念的に同一のオブジェクトを正しく一致させるには、「表示名」オプションを使用せずに「識別子」オプションを使用してください。

「表示名」

オブジェクトの表示名を使用してオブジェクトを比較するには、このラジオ・ボタンを使用します。このオプションは、下位互換性のために提供されています。「識別子」による比較をお勧めします。

「現行ユーザーが、インポートされたワークブックの所有権を取得するか？」

「常にインポートされたワークブックの所有権を取得」

インポートしたワークブックの所有権を現行ユーザー ID に設定する場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

「元の所有者が検索できない場合のみ所有権を取得」

現行データベース内で元の所有者を発見できない場合にのみ、インポートしたワークブックの所有権を現行ユーザー ID に設定する場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

注意

オブジェクトの名前を変更している場合は、正確に比較するために「識別子」オプションを使用してください。

「インポート・ウィザードステップ3」ダイアログ

このダイアログを使用して、インポートを開始し、各 EUL オブジェクトの処理状況をモニターします。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「エクスポートとインポートによる EUL および EUL オブジェクトのコピーについて」](#)


「開始」ボタンを押すと、ページ上部のステータス・バーに、インポートが完了した割合がパーセントで表示されます。


「開始」

インポートを開始するにはこのボタンを使用します。

「ログ:」

このウィンドウを使用して、表示されるメッセージをモニターします。

 このアイコンと共に表示されるメッセージは、インポートされたオブジェクトについての情報を提供します。

 このアイコンと共に表示されるメッセージは、問題の可能性についての警告です。

「ログの保存 ...」

インポート・ログのコピーをテキスト・ファイルに保存するには、このボタンを使用します。「ファイル名をつけて保存」ダイアログで、テキスト・ファイルのファイル名および場所を選択します。

「ログの消去」

「ログ」ウィンドウのメッセージを消去するには、このボタンを使用します。

「キャンセル」

インポートを中止するには、このボタンを使用します。「ログ」ウィンドウに警告メッセージが表示されて処理を中止する場合に、このオプションを使用します。

「完了」

インポートが正常に終了した後、このボタンを使用してダイアログを閉じ、Discoverer のワークエリアに戻ります。

注意

EUL をソース・ディクショナリの情報と同期化して、データベースの変更内容を取り込むには、Discoverer のメイン・メニューの「ファイル」メニューから「リフレッシュ」を選択します。

「チュートリアルインストールウィザードステップ3」ダイアログ

このダイアログでリストから選択肢をクリックして、VIDEO5 ユーザー用のデフォルト表領域と一時表領域を選択します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「EUL マネージャ」ダイアログ](#)

『Oracle9i Discoverer Administrator チュートリアル』

「デフォルトの表領域」

VIDEO5 のデータが格納されるデータベース表領域を選択します。表領域として選択するためには、少なくとも 10MB の空き領域が必要です。

- 「表領域」

データベースで使用可能な表領域のリストです。

- 「空き領域 (MB)」

各表領域で使用可能な容量が表示されます。

- 「自動拡張」

データベースの各表領域について、自動拡張機能の状態（オンまたはオフ）が表示されます。この機能がオンに設定されていると、必要に応じて表領域が自動的に拡張されます。

「一時表領域」

VIDEO5 の一時データが格納されるデータベース表領域を選択します。

「チュートリアルインストール / 削除ウィザード ステップ 1」ダイアログ

このダイアログを使用して、チュートリアル・ビジネスエリアをインポートする EUL の名前を確認します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「EUL マネージャ」ダイアログ](#)

『Oracle9i Discoverer Administrator チュートリアル』

チュートリアルインストール・ウィザード: ステップ 1

このウィザードを使用して、チュートリアル表、データおよびその他の必要なファイルをインストールします。

チュートリアルをインストールできる EUL は、現行の EUL (End User Layer) のみです。

「EUL」

チュートリアルについての情報がインストールされる EUL の名前が表示されます。

チュートリアル削除ウィザード: ステップ 1

このウィザードを使用して、現行の EUL からチュートリアル用のデータと表を削除します。

注意: VIDEO5 データベース・ユーザーはデータベースから削除されません。

「EUL」

このフィールドを使用して、この EUL が、チュートリアルを削除する EUL であることを確認します。

注意

削除する EUL でないときは「キャンセル」をクリックします。EUL マネージャを閉じて、正しい EUL に接続しなおしてください。

「チュートリアルインストール/削除ウィザードステップ2」ダイアログ

このダイアログでは、チュートリアル・ユーザーのパスワードを入力して自分のユーザーIDを検証します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「EUL マネージャ」ダイアログ](#)

『Oracle9i Discoverer Administrator チュートリアル』

チュートリアルインストール・ウィザード:ステップ2

チュートリアルをインストールするためには、VIDEO5 データベース・ユーザーにアクセスする必要があります。

「ユーザー」

このフィールドには、チュートリアル・データベース・ユーザー（VIDEO5）の名前が表示されます。このフィールドは変更できません。

「パスワード」

このフィールドを使用して、VIDEO5 データベース・ユーザーのパスワードを入力します。現行のデータベースに初めてチュートリアルをインストールすると、このボックスに入力した内容がパスワードとなります。

「パスワードの確認」

このフィールドを使用して、「パスワード」テキスト・ボックスに入力したパスワードを再入力し、新規チュートリアル・ユーザーのパスワードを確認します。現行のデータベース内でいずれかの EUL にチュートリアルがすでにインストールされている場合、パスワードの確認は不要です。

「完了」

このボタンを使用して、現行 EUL にチュートリアルをインストールします。

チュートリアルの削除ウィザード : ステップ 2

チュートリアルを削除するためには、VIDEO5 データベース・ユーザーにアクセスする必要があります。

「ユーザー」

このフィールドには、チュートリアル・データベース・ユーザー（VIDEO5）の名前が表示されます。このフィールドは変更できません。

「パスワード」

このフィールドを使用して、VIDEO5 データベース・ユーザーのパスワードを入力します。

「完了」

このボタンを使用して、現行 EUL からチュートリアルを削除します。

注意

パスワードがわからない場合は DBA に連絡して、ユーザーのパスワードを再設定するように依頼します。

「アイテム クラス ウィザード」 ダイアログ

このダイアログを使用して、新しいアイテム・クラスの名前および説明を入力します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「アイテム クラス ウィザード ステップ 3」 ダイアログ

「アイテム クラス ウィザード ステップ 5」 ダイアログ

「アイテム クラス ウィザード ステップ 6」 ダイアログ

「アイテム クラスの編集」 ダイアログ: 「一般」 タブ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)

「アイテム クラスの名前」

このフィールドを使用して、新規アイテム・クラスの名前を入力します。Discoverer Administrator はユーザーが使用できるようにデフォルト名を表示します。この名前は、その他のダイアログでアイテム・クラスを識別するために使用されます。

「説明」

(オプション) このフィールドを使用して、新規アイテム・クラスの説明を入力します。

アイテム クラス ウィザード: 値リストの詳細オプションのダイアログ

このダイアログは、アイテム・クラスの値リストの詳細オプションを変更するために使用します。ここで指定した設定値は、Discoverer Desktop/Plus ユーザーが値リスト・オプションを選択および表示する方法に影響します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「アイテム クラス ウィザード ステップ 4」ダイアログ

「アイテム クラス ウィザード ステップ 5」ダイアログ

「アイテム クラスの編集」ダイアログ: 「オプション」タブ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)

「値を取り出す単位:」

このスピン・ボックスを使用して、Discoverer Desktop/Plus で値リストを拡張したときに、エンド・ユーザーに対して表示される（データベースからデータが配列フェッチされるたび）最大行数を指定します。

Discoverer エンド・ユーザーは、各データベースの配列フェッチの結果を、上下にスクロールできるデータのブロックとして目にします。エンド・ユーザーは、次のデータ・ブロックも簡単に表示できます（詳細は、『Oracle9i Discoverer Desktop ユーザーズ・ガイド』または『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください）。

この設定は、データベースからすべての値を同時に取り出すための待ち時間のリスクを避けることができるため、値リストに多くの行が含まれるような場合に便利です。値リストの値は、指定された行数のブロック単位で表示されます。

注意: ここで設定した値は、「値の検索を毎回行う」チェックボックスが選択解除された場合にデフォルトとして使用されます（詳細は、後述の「値の検索を毎回行う」フィールドを参照してください）。

注意: Discoverer Desktop/Plus では、サーバーは必ずデータベースからフェッチするため、「値を取り出す単位:」フィールドで指定した値がどのように大きなものであっても関係ありません。しかし、クライアントがサーバーからフェッチできる最大値は 100 です。

つまり、Discoverer 管理者がフェッチ・サイズを 1000（前述の 100 という最大値より大きい）に設定した場合、Discoverer Desktop/Plus では、クライアントは必ず 100 というグループで行をフェッチします。Discoverer 管理者がフェッチ・サイズを 50（100 という最大値よりも小さい）に設定した場合、Discoverer Desktop/Plus では、行は常に 50 というグループでフェッチされます。

「値をソートして重複を取り除く」

重複値を排除し、Discoverer での値リストの表示順（アイテム・クラスの）をアルファベット順にソートするには、このチェックボックスを選択します。

重複値を表示し、データベース内に格納されている値と同じ順序で値を表示するには、このチェックボックスを選択解除します。

このオプションを使用して、値リスト文に **DISTINCT** 句および **ORDER BY** 句を自動的に追加するかどうかを決定できます。データの重複がなく、正しい順序になっていることがわかっている場合（または、データがこのように戻されても問題でない場合）は、この設定をオフにすることができます。

注意: 大量の値リストを表示するために必要な時間は、データベース表の検索を完了するために必要な時間で決定されます。このチェックボックスを選択解除すると、値リストの表示に必要な時間を短縮できます。

「値をワークシート・ウィザードの「アイテムの選択」ページで表示」

ワークシート・ウィザードの「アイテムの選択」ページで値リスト・アイテムを表示する場合は、このチェックボックスを選択します（アイテム・ナビゲータ）。

このチェックボックスを選択解除すると、ワークシート・ウィザードの「アイテムの選択」ダイアログに値リスト・アイテムは表示されません。

注意: アイテム・ナビゲータでは、値リストは（「**値を取り出す単位:**」スピン・ボックスで指定された）配列フェッチ・サイズを使用しません。Discoverer ではこの場合にのみ、表示される前に最初にすべての値がフェッチされます。何百万もの行がある場合には、これに長い時間がかかることがあるため、このオプションを選択することをお勧めします。

「値の検索を毎回行う」

パフォーマンス上の理由から、値リストのサブセットを使用した問合せの実行をエンド・ユーザーに強制する必要があることもあります。この場合は、このチェックボックスを使用します。

値リストをリスト全体のサブセットに縮小するための検索基準の入力をエンド・ユーザーに強制する「**検索基準**」フィールドを表示するには、このチェックボックスを選択します。

「**値を取り出す単位**」スピン・ボックスで指定した行数を表示する場合は、このチェックボックスを選択解除します（詳細は、「**値を取り出す単位:**」を参照してください）。

「接続している間、値リストをキャッシュする」

最初に表示された後に値リストをキャッシュするには（現行セッションの間）、このチェックボックスを選択します。セッション中はデータが静的な場合は、キャッシュを使用してください。この設定をお薦めします。

データベースから毎回値リストを取り出したい場合は、このチェックボックスを選択しないでください。データが非常に動的であり、エンド・ユーザーに対して常に最新の（秒単位の）値リストを表示する場合はこのオプションを選択しないようにします。

アイテム クラス ウィザード：「属性の選択」ダイアログ

このダイアログを使用して、作成するアイテム・クラスのタイプを選択します。たとえば、Discoverer エンド・ユーザーがワークブックを限定するためのパラメータ値の選択に使用できるように、値リストを作成することを選択します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「アイテム クラス ウィザード」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)

「アイテムクラス属性を選択してください。」

「値リスト」

1 つのアイテムに対して存在する固有な値のリストを作成するには、このチェックボックスを使用します。値は、データベースの列で検索した値に対応しています。

「代替ソート」

ユーザーが定義した基準でアイテムをソートするには、このチェックボックスを使用します。アイテムは通常、ASCII コード値で昇順または降順にソートされます。代替ソートは、それ以外の順序でデータ・オブジェクトをソートするときに使用します。たとえば営業地区「北」、「南」、「東」、「西」をこの順序にソートする場合、代替ソート順序を「北 = 1」、「南 = 2」、「東 = 3」、「西 = 4」と指定します。

「ディテール ドリル」

ユーザーがサマリー情報から、より特定の情報にドリルできるようにするには、このチェックボックスを使用します。これらのアイテムは、同じフォルダにある必要はありません。

注意

- 代替ソート順序を作成するには、最初に、ソートされる列を含むデータベース表に列を 1 つ追加する必要があります。
- 代替ソート順序でソートするアイテムは、そのアイテム・クラス用の値リストを提供するアイテムと同じフォルダ内に含める必要があります。代替ソート基準に含まれるアイテム・クラスには、値リストも同時に含まれる必要があります。

アイテム クラス ウィザード:「アイテムの選択」ダイアログ (代替ソートを行う場合)

このダイアログを使用して、代替ソートの基準とするアイテムを選択します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「アイテム クラス ウィザード ステップ 3」ダイアログ

「アイテム クラスの編集」ダイアログ:「代替ソート」タブ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)

「代替ソート基準を含んでいるアイテムを選択します。」

「フォルダ」

このフィールドを使用して、代替ソートの基準となるアイテムを選択します。

注意: 代替ソート・アイテムは、値リストと同じフォルダに入れる必要があります。

アイテム クラス ウィザード: 「アイテムの選択」 ダイアログ (値リストを生成する)

このダイアログを使用して、値リストを生成するアイテムを選択します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「アイテム クラス ウィザード ステップ 2」 ダイアログ

「アイテム クラスの編集」 ダイアログ: 「値リスト」 タブ

「値リストを生成するアイテムを選択してください。」

「フォルダ」

このフィールドを使用して、値リストを生成するアイテムを選択します。End User Layer 内の任意のビジネスエリアから選択できます。

注意

- ビジネスエリアを選択すると、その中に含まれるフォルダが表示されます。
- フォルダを開いて中に含まれるアイテムを表示するには、プラス (+) 記号をクリックします。

「アイテム クラス ウィザード」 ダイアログ（このアイテム・クラスを使用するアイテムの選択）

このダイアログを使用して、新しいアイテム・クラスを使用する、ビジネスエリア内のアイテムを指定します。たとえば、月の値リスト（1月、2月、3月など）を作成した場合、ここですべての月アイテムを指定します。Discoverer エンド・ユーザーは月を問い合わせるときに、1月、2月、3月、などから選択できます。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「アイテム クラス ウィザード ステップ 2」 ダイアログ

「アイテム クラス ウィザード ステップ 3」 ダイアログ

「アイテム クラス ウィザード ステップ 4」 ダイアログ

「アイテム クラスの編集」 ダイアログ: 「アイテムの選択」 タブ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)

「作成したアイテム クラスを使用するアイテムを選択してください。」

「選択可能なアイテム」

このドロップダウン・リストを使用してビジネスエリアを選択します。アイテム・クラスを使用するアイテムを、下の拡張可能なリストから選択します。アイテムを選択するには、「**選択可能なアイテム**」リストから「**選択されたアイテム**」リストへアイテムを移動します。

「選択されたアイテム」

このリストは、このアイテム・クラスを使用するアイテムを含みます。

注意

- アイテム・クラスを使用するアイテムを選択しない場合は、後でそのアイテム・クラスを特定のアイテムに適用する必要があります。
- [Ctrl] キーを押しながらアイテムをクリックすると、複数のアイテムを選択できます。

「ワークエリア」：「アイテム クラス」タブ

このタブを使用して、ビジネスエリア別にグループ分けした EUL 内のアイテム・クラスを確認します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」](#)

「表示」

表示するアイテム・クラスのタイプを変更するには、このドロップダウン・リストを使用します。ユーザー定義のクラスまたはシステム定義のクラスを表示するように選択したり、異なるタイプのクラス（たとえば、値リストまたは代替ソート）を表示するように選択できます。

注意

各アイテム・クラス・フォルダ内で、アイテム・クラスに割り当てられた値リストを参照できます。値リスト・フォルダを開くと、データの一意の値が一覧となって表示されます。どのアイテムがアイテム・クラスを使用しているかが表示されます。

「アイテム プロパティ」 ダイアログ

このダイアログを使用して、アイテム・プロパティを構成します。たとえば、アイテムの名前または計算式を変更します。

詳細は、次の項目を参照してください。

「アイテムとアイテム・クラスのメンテナンス」

「アイテム プロパティ」 ダイアログには2つのタブがあります。

- **「一般」** — このタブを使用してアイテムを構成します。たとえば、アイテムの変更に使用します。
- **「依存性」** — このアイテムに依存する他のアイテムを確認するには、このタブを使用します。たとえば、このアイテムを使用するサマリーを確認するために使用します。

「一般」

「名前」

このフィールドを使用して、アイテムの名前を変更します。

「説明」

このフィールドを使用して、アイテムの説明を変更します。このフィールドの内容は、Discoverer Desktop/Plus の問合せウィザードで説明されています。

「データ型」

(読み取り専用) このフィールドは、データ・ディクショナリの中の列定義から情報を得て、アイテムのデータ型を表示します。ディクショナリのデータ型を直接反映しているため、このフィールドは編集できません。

「計算式」

このフィールドを使用して、アイテムの計算式を変更する「[ユーザー定義アイテムの編集](#)」ダイアログを表示します。このフィールドに計算式が表示されている場合は、アイテムがユーザー定義アイテムであることを意味します。ユーザー定義アイテムは、既存のアイテムから計算式によって定義されたものです。たとえば、利益率の計算などがユーザー定義アイテムで可能です。ビジネスエリアでのユーザー定義アイテムの利点は、ユーザーが分析結果の計算のために複雑な計算式を覚える必要がないことです。フィールドが列名の場合、このアイテムはユーザー定義アイテムではなく、データベースの列からの直接データであることを示します（この場合、この項目は編集できません）。

「データベース列」

このフィールドは、アイテムの導出を示します。このフィールドは所有者のユーザー名、表名および列名から構成されます。このフィールドが空白のときは、アイテムは計算式から作成されています。

「ユーザーに表示」

このフィールドを使用して、Discoverer エンド・ユーザーがアイテムを表示できるかどうかを指定します。

- アイテムを Discoverer Desktop/Plus で表示するには、「はい」を選択します。
- アイテムを Discoverer Desktop/Plus で非表示するには、「いいえ」を選択します。

注意：一般的に「いいえ」オプションは、ユーザー定義アイテムの計算で使用するためにフォルダ内に置く必要があるアイテムを隠すため、使用します。エンド・ユーザーに表示する意味がない、または表示することが不適切な場合に、アイテムを非表示にするために使用します。この他に非表示にするアイテムとしては、主キーや外部キーなどのデータ、給与情報などの重要なデータがあります。

「アイテム クラス」

このフィールドは、アイテムが属するアイテム・クラスを変更するために使用します。このリストを使用して代替のアイテム・クラスを選択します。このフィールドは、アイテムが軸アイテムである場合にのみアクティブになります。

「日付階層」

このフィールドを使用して、アイテムに適用する日付階層を変更します。アイテムに適用できる有効な日付階層のリストが提供されます。アイテムが日付アイテムではない場合、このフィールドはアクティブになりません。

「デフォルト位置」

このフィールドを使用して、ワークシート上のアイテムのデフォルト位置を変更します。

「デフォルト総計」

このフィールドを使用して、アイテムの総計タイプを変更します（数値の場合）。

「ヘディング」

このフィールドを使用して、ワークシートに表示する列のヘディングを変更します。デフォルトでは、アイテム名から導出される、アイテムの列名になります。

「書式マスク」

このフィールドを使用して、Discoverer エンド・ユーザーのワークブックにアイテムを表示するために使用されるデフォルト書式マスクを変更します。構文は、Oracle データベース製品に付属している『Oracle Server SQL リファレンス』にある Oracle の標準書式を使用します。デフォルトでは、アイテムのデータ型に適した書式マスクがリストに表示されます。リストに使用する書式がない場合、書式マスクを直接入力することもできます。

注意：現在、Discoverer 管理者では、書式マスクにユーロ記号は使用できません。Discoverer Desktop/Plus を使用すれば書式マスクにユーロ記号を指定できます。詳細は、『Oracle9i Discoverer Desktop ユーザーズ・ガイド』または『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

「文字位置」

このフィールドを使用して、Discoverer Desktop/Plus に表示するデータの文字位置を変更します。プルダウン・メニューから文字位置を選択できます。デフォルトの「一般」、数値データ用の「右揃え」、日付とテキスト用の「左揃え」があります。

「ワードラップ」

このフィールドを使用して、Discoverer Desktop/Plus でテキスト・データを折り返して表示するかどうかを指定します。

注意：これを「はい」に設定すると、Discoverer Desktop/Plus で大量のテキスト・データにアクセスする場合、パフォーマンスが影響を受ける可能性があります。

「保存形式」

このフィールドを使用して、データの表示方法とは別に、データベース内にテキスト・アイテムを格納する方法を指定します。Discoverer エンド・ユーザーが、この情報を見ることはありません。これは、エンド・ユーザーのワークブックで情報を使用または表示するときの最適化を可能にします。たとえば、データがすでに正しく格納されている場合、「表示形式」オプションを使用してテキストを変更する必要はありません。この値を調整して、条件付きの間合せを実行する際のパフォーマンスを改善できます。データベース内でデータが常に大文字で格納される場合は、この値を大文字に設定します。データが小文字で格納される場合は、この値を小文字に設定します。

「表示形式」

このフィールドを使用して、ワークブックにアイテムを表示する方法を変更します。

「デフォルト幅」

このフィールドを使用して、エンド・ユーザー・レポートに表示するときの、アイテムのデフォルト幅（文字数）を変更します。この値は、Discoverer Desktop/Plus で（「ツール」→「オプション」→「テーブル」メニューで）「デフォルト幅を使用」が設定されている場合のみ、使用されます。

「NULL の表示方法」

このフィールドを使用して、NULL 文字の表示方法を変更します。たとえば NULL データを「在庫切れです ... 注文してください」、「0」、「なし」または空白にすることができます。

「内容タイプ」

このフィールドを使用して、このアイテムが外部アプリケーションを起動できるか指定します。Microsoft Excel のような外部アプリケーションを必要とするアイテムの場合には、「FILE」を指定します。外部アプリケーションが不要なデータ型には、「指定なし」を指定します。

アイテムが BLOB（バイナリ・ラージ・オブジェクト）の場合は、ファイル拡張子により、アイテムの表示に使用されるアプリケーション（.exe 実行ファイル）が決定します。たとえば、DOC は MS Word を使用し、WAV は、WAV ファイル用に現在登録されているサウンド・プレーヤを使用してサウンドを再生します。これらの関連付けは、コンピュータのオペレーティング・システムで設定されます。

注意：内容がデータベース内に格納されているイメージの場合またはドリル・アウト・イメージの場合（Web レポートへのドリル・アウトを示す HTML アイコン）には、「なし」を選択してください（詳細は、第 9 章「別のアプリケーションへのドリル・アウト」を参照してください）。

「取得文字数」

このフィールドを使用して、データベースへの SQL コールで取り出される文字数の最大値を指定します。このオプションは特に、LONG 型のデータに有効です。文字数を制限する理由は、データに数百、数千の文字を含むものがあり、すべてのデータを取り出すのは非効率または不必要という場合があるからです。

「識別子」

このフィールドを使用して、Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意な名前を変更します。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、異なる EUL 内にある、同じビジネス・オブジェクトを参照するオブジェクト（概念的に同一のオブジェクトとも呼ばれます）を検索します。

警告：EUL オブジェクト間の関係に影響する可能性があるため、識別子は変更しないでください。

注意：計算式とデータベース列の主な用途は、アイテム・データの元を追跡することです。たとえば、元となるデータベースまたはデータが直接変更された場合、このフィールドはデータの元となるソースを識別する監査証拠を提供します。また、Discoverer 管理者にデータ・ソースの正確な位置情報を提供します。

「依存性」

このタブには、他のオブジェクト（フォルダ、結合、アイテム、アイテム・クラス、サマリー、条件、ユーザー定義アイテムなど）が選択されたアイテムに依存する範囲を示す2つの列（タイプと名前）が表示されています。

「タイプ」

このフィールドには、選択されたアイテムへの依存性を持つ、1つ以上のオブジェクト・タイプ（たとえばフォルダ、アイテムなど）が表示されます。

「名前」

このフィールドには、「タイプ」列にリストされたそれぞれのオブジェクトの名前が表示されます。

「アイテム」ダイアログ

このダイアログは、条件を作成または編集するときに使用するアイテムを選択するために使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「条件」](#)

「条件の新規作成 / 編集」ダイアログの「**値**」フィールドの中のドロップダウン・リストから「**アイテムの選択**」オプションを選択すると、このダイアログが表示されます。

「アイテムの選択」

「条件の新規作成 / 編集」ダイアログの「**値**」フィールドに表示するアイテムを選択します。

「OK」ボタンを使用して、選択したアイテムを「**値**」フィールドに表示します。

ここで選択したアイテムは、この条件の現在の条件文で使用されます。

「日付階層を使用するアイテム」ダイアログ

このダイアログを使用して、ビジネスエリア内のどのアイテムが定義された階層を使用するかを指定します。たとえば、年、月、週、日という階層を作成した場合、ここで年、月、週および日のアイテムを指定します。Discoverer ユーザーはこれらのアイテムでドリルを行うときに、ドリル・パスの中でこの階層を使用できます。

それには、ビジネスエリアで使用可能なアイテムのリストから 1 つ以上の日付アイテムを選択し、右矢印ボタンをクリックして「選択されたアイテム」ペインに移動させます。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「階層ウィザード ステップ 3」ダイアログ

「階層の編集」ダイアログ: 「アイテム」タブ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「階層」](#)

[「アイテム」](#)

「新規階層を使用する日付アイテムを選択してください。ここでの設定は必須ではありません。」

「選択可能なアイテム」

このプルダウン・リストを使用してビジネスエリアを選択します。階層を使用するアイテムを、後述の拡張可能なリストから選択します。アイテムを選択するには、「選択可能なアイテム」リストから「選択されたアイテム」リストへアイテムを移動します。

「選択されたアイテム」

このリストは、この階層を使用するアイテムを含みます。

注意

[Ctrl] キーを押しながらアイテムをクリックすると、複数のアイテムを選択できます。

「結合オプション」ダイアログ

結合を構成するには、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

「結合」

「ディテールのないマスター行を許可する」

ディテール表の外部結合の作成には、このチェックボックスを使用します。対応するディテール・アイテムのないマスター行、一致するマスター行およびディテール行のすべてが戻されます。

「マスターのないディテール行を許可する」

マスター表の外部結合の作成には、このチェックボックスを使用します。対応するマスターのないディテール行、一致するディテール行およびマスター行のすべてが戻されます。実際のスキーマではこのような構造体は、非常にまれです。「ディテール外部キーに NULL 値を許可する」オプションが必要です。

「ディテール外部キーに NULL 値を許可する」

値が NULL の可能性のあるディテール・アイテムの行を表示するには、このチェックボックスを使用します。

この設定は、非常にまれな状況でのみ使用され、問合せに答えるためにサマリー表が使用される特定の状況にのみ影響します。外部キーは、一般的には値を持ち、ほとんどの場合、データベースの必須列になっています。

この設定値は、マスターを持たないディテール行を設定する場合に必要なになります。この状況は、外部キー列に NULL 値が含まれていることを示唆するためです。それ自体は SQL の生成に影響するものではありませんが、Discoverer がサマリー表を使用できる特定の状況で、確認が必要になることがあります。

次に例を示します。

マスター・フォルダおよびディテール・フォルダの両方からのアイテムを含むサマリー・フォルダを作成した場合：

- さらにそのフォルダが、このオプションを有効にして結合され
- ユーザーがディテール・フォルダからのアイテムのみを使用する問合せを発行した場合、
- Discoverer は両方の場合の行セットが同じであることを保証できないため、問合せに答えるためにサマリー表は使用されません。

「ディテール外部キーに NULL 値を許可する」チェックボックスが選択された場合は、この問合せでサマリー表が使用されます。これが、この設定値の唯一の効果です。

「マスターとディテール間の 1 対 1 結合」

マスター表とディテール表の間で、1 対多の関係でなく、1 対 1 の関係を作成する場合は、このチェックボックスを使用します。それぞれの表には行が 1 つしかないため、この場合には実際のマスターおよびディテールはありません。このような結合は異例ですが、スキーマ内で発生することもあります。

SQL は結合のカーディナリティを認識しないため、この設定が Discoverer で生成される SQL に影響することはありません。この設定値は、[第 10 章「ファントラップ」](#)で説明するファントラップの検出にのみ影響します。

真の 1 対 1 結合の結果がデカルト演算になることはないため、1 つを除くすべてのディテール・フォルダが 1 対 1 結合で結合されるとすれば、複数のディテール・フォルダを持つマスターに対する問合せが可能になります。これが 1 対多結合の場合には、1 つのディテール表の中の行を、別のディテール表の中の多数の行に（またその逆にも）結合できるため、その結果はデカルト演算になります。デカルト演算が意図されたものであることはほとんど考えられないので、Discoverer ではデカルト演算は明示的に禁止されています。

「結合プロパティ」ダイアログ

このダイアログを使用して、結合プロパティを構成します。たとえば、結合の名前を変更または結合関係を変更します。

詳細は、次の項目を参照してください。

「結合」

「結合プロパティ」ダイアログには2つのタブがあります。

- **「一般」タブ** — このタブを使用してアイテムを構成します。たとえば、アイテムの変更に使用します。
- **「依存性」タブ** — このアイテムに依存する他のアイテムを確認するには、このタブを使用します。たとえば、このアイテムを使用するサマリーを確認するために使用します。

「一般」タブ

「名前」

このフィールドを使用して、結合の名前を変更します。Discoverer 管理者は、デフォルトでマスターおよびディテールのフォルダ名を組み合わせ、結合アイテムの名前を付けます。

「説明」

このフィールドを使用して、結合の説明を変更します。デフォルトの説明は、「(マスターフォルダ名) . (アイテム名) と (ディテールフォルダ名) . (アイテム名) 間の結合」となります。

「マスター」

このフィールドを使用して、結合のマスター・キー列のフォルダ名を変更します。この値はデータ・ディクショナリからのもので編集できません。

「ディテール」

このフィールドを使用して、結合のディテール・キー列のフォルダ名を変更します。この値はデータ・ディクショナリからのもので編集できません。

「計算式」

このフィールドを使用して、アイテムの結合方法を指定する **「結合の編集」ダイアログ** を表示します。

「外部結合」

このフィールドを使用して、ディテール・フォルダの外部結合を指定します。このフィールドには「指定なし」または「ディテール・フォルダ」という値が表示されます。

一致するディテール・レコードのないマスター・レコードまたは一致するマスター・レコードのないディテール・レコードの行を戻す場合は、外部結合を使用します。

「ディテール アイテムの値」

このフィールドを使用して、マスター・フォルダ内に必ずディテール・アイテムが存在する必要があるかどうかを指定します。このフィールドには、「マスター アイテムは必須」または「マスター アイテムは必須ではない」という値が表示されます。

「結合関係」

このフィールドを使用して、結合関係を指定します。たとえば、1 対 1 から 1 対多まで指定します。

1 対 1 の関係を持つ 2 つの表を結合するには、**1 対 1** の結合を使用します。たとえば、「マネージャ」表と「部門」表を結合します。この場合、1 つの部門のマネージャは 1 人のみです。

1 対多の関係を持つ 2 つの表を結合するには、**1 対多** の結合を使用します。たとえば、「部門」表と「従業員」表を結合します。この場合、各部門には多数の従業員が存在します。

「識別子」

Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意な名前です。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、異なる EUL 内にある、同じビジネス・オブジェクトを参照するオブジェクト（概念的に同一のオブジェクトとも呼ばれる）を検索します。

「依存性」タブ

「依存性」タブには、他のオブジェクト（フォルダ、結合、アイテム、アイテム・クラス、サマリー、条件、ユーザー定義アイテムなど）が選択された結合に依存する程度を示す 2 つの列（タイプと名前）が表示されています。

「タイプ」

選択された結合への依存性を持つ、1 つ以上のオブジェクト・タイプ（たとえばフォルダ、アイテムなど）が表示されます。

「名前」

「タイプ」列にリストされたそれぞれのオブジェクトの名前が表示されます。

注意

「結合プロパティ」ダイアログを使用すると、一度に複数の結合アイテムを検査および編集できます。結合を選択すると、そのプロパティが表示されます。複数の結合を選択し、選択した結合に共通するプロパティを変更すると、その変更は選択されたすべての結合に適用されます。

「ロードウィザードステップ1」ダイアログ

ロードウィザードを使用して、ビジネスエリアをどのように開くかを選択できます。たとえば、次のような処理を行うことができます。

- 新しいビジネスエリアを作成
- 既存のビジネスエリアを開く

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ロード・ウィザード」](#)

[「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」](#)

「操作を選択してください。」

「新規ビジネスエリアを作成」

新しいビジネスエリアを作成するには、このボタンを使用します。

「既存のビジネスエリアを開く」

既存のビジネスエリアを開くには、このボタンを使用します。リストからビジネスエリアを選択した後、「完了」をクリックしてビジネスエリアを開きます。

「新規ビジネスエリアを作成」を選択すると、次のオプションが表示されます。

「ビジネスエリアにロードする表またはビューのロード元を選択してください」

「オンライン デictionary」

Oracle デictionary から表およびビューをロードするには、このラジオ・ボタンを使用します。

「ゲートウェイ」

このテキスト・ボックスで指定されたデータ・ソースから表およびビューをロードするには、このラジオ・ボタンを使用します。使用可能なデータ・ソースから選択するには、ドロップダウン・リストを使用します。

ゲートウェイからビジネスエリアをロードするための情報は、[第4章「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」](#)を参照してください。

「既存のビジネスエリアを開く」を選択すると、次のオプションが表示されます。

「開きたいビジネスエリアを1つ以上選択してください」

このリストを使用して、1つ以上のビジネスエリアを選択し、「OK」をクリックします。開くビジネスエリアの選択では、「すべて選択」および「選択解除」ボタンも使用できます。

注意

- Discoverer Administrator に接続するか、EUL に接続し、「ファイル」、「新規作成」の順に選択すると、ロードウィザードは自動的に表示されます。
- 「ゲートウェイ」オプションは、Oracle9i Designer を使用しているか、EUL ゲートウェイが登録済みで、すべての表が表示可能である場合にのみ使用可能です（EUL ゲートウェイの設定の詳細は、第3章「EUL ゲートウェイ」を参照してください）。Oracle9i Designer を使用している場合には、ドロップダウン・リストにはユーザーがアクセス可能な Oracle9i Designer の「ワークエリア」が表示されます（Oracle Designer 6i よりも前の Oracle Designer バージョンを使用している場合は、ドロップダウン・リストには単純に 'Oracle Designer リポジトリ' と表示されます）。
- Oracle Designer 6i（バージョンニングがオン）からデータをロードする場合は、ロードするオブジェクト・バージョンのセットを含む「ワークエリア」を作成してください。一貫性のあるオブジェクトのリリース・セットを定義する構成に基づく「ワークエリア」ルールの使用をお勧めします。「ワークエリア」内の外部キー定義が、「ワークエリア」外の表およびビューを参照しないことが重要です。「ワークエリア」が完全であることを確認するために、Oracle9i Designer の外部参照リスト・ユーティリティを使用します。
- バージョニング（Oracle Designer 6i）がオンになっていない場合には、すべてのオブジェクトを含む、デフォルトの「ワークエリア」であるグローバル共有「ワークエリア」のみが存在するため、これを使用する必要があります。

「ロードウィザード ステップ2」ダイアログ

このダイアログを使用して、新しいビジネスエリアにロードするオブジェクトを定義します。メタデータを取得する場所により選択肢が異なります。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ロード・ウィザード」](#)

[「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」](#)

「データベース リンクを選択してください」

このドロップダウン・リストを使用して、データ・ソースとして使用するデータベースを指定します。

注意：データベース・リンクでは、データベース間の接続を設定します。1つのデータベースで複数のリンクを設定できます。これらのリンクはデータベース内に作成されます。詳細は、データベース管理者に確認してください。

「ロードするユーザーを選択してください。」[オンライン・ディクショナリからメタデータをロードする場合]

このリスト・ボックスを使用して、選択したデータ・ソースから1人以上のユーザーを選択します。ユーザーの選択では、「すべて選択」および「選択解除」ボタンも使用できます。

「ロードするユーザーを選択してください。」[ゲートウェイからメタデータをロードする場合]

このリストを使用して、テキスト・ボックスで指定されたデータベース・リンクからオブジェクトをロードできるスキーマ（オブジェクトの所有者）を選択します。適切なチェックボックスをクリックします。

「パターン マッチングによる絞り込み」

このフィールドを使用して、ロードするオブジェクトを検索するための Oracle ワイルド・カード文字を入力します。これは、ロードする表の名前を覚えていない場合に役立ちます。デフォルトでは、選択したユーザー ID によって所有されるオブジェクトはすべてロードされます（テキスト・ボックスに % が入っています）。

ワイルド・カードの詳細は、「[オンライン・ディクショナリからのロード](#)」を参照してください。

「ロードウィザード ステップ3」ダイアログ

このダイアログを使用して、ビジネスエリアにロードするスキーマ・オブジェクトを選択します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ロード・ウィザード」](#)

[「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」](#)

「選択可能」

これは、ビジネスエリアに含めることができるすべてのスキーマ・オブジェクト（表およびビュー）のリストです。1つ以上のスキーマ・オブジェクトを選択して、「選択済み」リストへ移動します。

「選択済み」

これは、ビジネスエリアに含めるように選択された、すべての表およびビューのリストです。選択した表およびビューは、それぞれビジネスエリアのフォルダになります。

注意

- [Ctrl] キーを押しながら別のスキーマ・オブジェクトをクリックすると、複数のスキーマ・オブジェクトを選択できます。
- 「ロードウィザードステップ2」ダイアログで選択した内容によって、ステップ3で利用できるオブジェクトが決定します。これらの選択内容（データベース・リンク、ユーザー ID または「オンライン辞書ナリ」オプションを使用した場合に指定した表など）を変更するには、「戻る」をクリックして「ロードウィザードステップ2」に戻ります。

「ロードウィザードステップ4」ダイアログ

このダイアログを使用して、ビジネスエリアにデータをロードしたときに生成される結合および追加オブジェクトを構成します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ロード・ウィザード」](#)

[「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」](#)

「結合を作成しますか？」

「一致している列名」に基づいて結合を作成するオプションを選択する場合、Discoverer は、ロードされるすべてのオブジェクトのすべての列名をその他の列名と照合する必要があります。ロードされる列の数が多くなれば、必要な処理量が増加します。この方法の副作用として、ロード後に作成されたすべての結合の有効性を確認する必要があります。マスターとディテールの関係が正しいものであるかどうか、および結合条件自体の有効性（同じ名前を持つ完全に異なる 2 つの列により誤って作成されたものではないこと）を確認する必要があります。

「はい、次の基準に基づいて結合を作成します」

ビジネスエリア内のアイテムの結合を作成するには、このチェックボックスを使用します。

■ 「主キー / 外部キー制約」

このラジオ・ボタンを使用して、主キーおよび外部キーの結合を作成します。データベースに主キーおよび外部キー制約が定義されている場合は、このオプションをお勧めします。

Discoverer では、可能なかぎりこのオプションの選択をお勧めします。このオプションを使用すると、DBMS 内の制約からのみ結合がロードされ、処理が迅速に行われます。また、作成される結合は常に正しいものになります（マスターとディテールの関係が正しいものになります）。

たとえば、Regions に多数の Stores が含まれる場合、主キー Region.Region Name は、外部キー Stores.Region Name と結合されます。

■ 「一致している列名」

データベース表内の一致する列名から結合を作成するには、このラジオ・ボタンを使用します。たとえば Oracle 以外のデータベースを使用する場合など、主キーおよび外部キー制約が定義されていない場合に、このオプションを使用します。

このオプションが選択された場合、Discoverer はロードされるすべてのオブジェクトのすべての列名を、その他のすべての列名と照合する必要があります。ロードされる列の数が多くなれば、必要な処理量が増加します。この方法の副作用として、ロード後に作成されたすべての結合の有効性を確認する必要があります。マスターとディテールの関係が正しいものであるかどうか、および結合条件自体の有効性（同じ名前を持つ完全に異なる 2 つの列により誤って作成されたものではないこと）も確認する必要があります。

「その他に作成するオブジェクトを選択してください。」

「作成されたフォルダをベースとしたサマリー」

ロード処理後に、作成されたフォルダに基づいて、自動サマリー管理（ASM）を使用してサマリーを作成するには、このチェックボックスを使用します。

表構造の分析後に、適切なサマリーのセットが ASM によって作成されます。このオプションを選択するとバルク・ロードの継続時間は若干増加しますが、問合せのパフォーマンスは改善されます。

注意：自動サマリー管理を実行する予定がある場合、またはデータベースの領域が少ない場合にはこのオプションを選択しないでください。

「日付階層：」

日付アイテムの日付階層を自動的に作成するには、このチェックボックスを使用します。ドロップダウン・メニューで提供されるデフォルトの日付階層書式のリストから階層を選択します。日付階層は、ビジネスエリア内のすべての日付列に適用されます。ユーザーは日付階層を作成することにより、日付アイテムをドリル・アップおよびドリル・ダウンできるようになります。たとえば、年から四半期または月から日にドリルできます。

日付階層を自動生成すると、追加の（計算された）アイテムがフォルダに挿入されます。つまり、日付階層の各ノードのそれぞれの日付アイテムに対して、新しいアイテムが作成されます。たとえば、年 | 四半期 | 月 | 日を含む日付階層を、3 つの日付列を持つ表に適用した場合、フォルダの中には新たに 12 個のアイテムが生成されます。詳細は、[第 13 章「階層の作成とメンテナンス」](#)を参照してください。

「データポイントのデフォルト総計：」

数値アイテムのデフォルト総計を指定するには、このチェックボックスを使用します。次に、下のドロップダウン・リストから総計を選択します。デフォルト値は SUM です。

「アイテムの値リストを作成するデータ タイプ」

選択したタイプに基づいて値リストを生成するには、このチェックボックスを使用します。このオプションによって、指定したタイプのそれぞれの軸アイテムに対して、値リストが作成されます。ただし、40 文字より長い文字アイテムは除きます。値は、データベースの列の値から導出されます。

注意

- DECIMAL (NUMBER データ型) で、精度がゼロではないアイテムはデータポイントとしてロードされます。整数、すべてのキーおよびその他すべてのデータ型は軸アイテムとしてロードされ、デフォルトの位置は「上」です。
- Discoverer Desktop/Plus の場合、アイテムが軸アイテムまたはデータポイントかは、次のように、クロス集計ワークシート上のアイテムのデフォルト位置に影響します。
 - データポイントは、一般的には数値であり、ユーザーが分析に使用するので、使用しやすい集計関数として表示され、デフォルトとしてクロス集計レポートの中央に表示されます。データポイントはメジャーとも呼ばれます。
 - 軸アイテムは値リストを表示できますが、データポイントには表示可能な値リストはありません。軸アイテムはデフォルトで、ページ上、クロス集計レポートの上または横に表示されます。軸アイテムはディメンションとも呼ばれます。
 - アイテムが軸アイテムとしてまたはデータポイントとして設計されたかの違いは、Discoverer Desktop/Plus の新規シート上のデフォルト位置に影響を与えるだけです。ユーザーはいつでも位置を変更でき、Discoverer 管理者はいつでもデフォルト位置を変更できます。
- 値リストは、Discoverer ユーザーがアイテムの隣にある + 記号をクリックして、データベースへの問合せを行った時点で導出されます。リストの値は動的であり、データベース中の値が変化すれば、リストの値も変化します。+ 記号をクリックされると、次のダイアログでアイテム・クラスを作成または編集したときに「**接続している間、値リストをキャッシュする**」チェックボックスが選択解除されていないかぎり、パフォーマンス上の理由から、値はクライアント上のローカル・ハードディスク上にキャッシュされます。
 - 「アイテム クラス ウィザード ステップ 4」ダイアログ
 - 「アイテム クラスの編集」ダイアログ: 「オプション」タブ
- 多くの値（小数点）を含む列に値リストを作成しないでください。

詳細は、「[アイテム クラス ウィザード: 値リストの詳細オプションのダイアログ](#)」を参照してください。

「**接続している間、値リストをキャッシュする**」チェックボックスが選択されている場合、リストに新しい値を表示するには、再接続する必要があります。

「ロードウィザードステップ5」ダイアログ

このダイアログを使用して、ビジネスエリアの名前と説明を入力し、ビジネスエリアへのデータのロード方法を構成します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ロード・ウィザード」](#)

[「ロード・ウィザードによるビジネスエリアの作成方法」](#)

「このビジネスエリアの名前を入力してください」

このフィールドを使用して、ビジネスエリアの名前を入力します。ビジネスエリアのビジネス機能を反映した短い名前を使用してください。たとえば、Web Usage Analysis とします。

「このビジネスエリアの説明を入力してください」

このフィールドを使用して、ビジネスエリアの説明を入力します。このフィールドを使用して、作成者、使用対象者またはその適用範囲の詳細など、ビジネスエリアについての追加情報を入力します。

「オブジェクト命名基準を選択してください。」

「単語の先頭文字を大文字にする」

フォルダおよびアイテム名の先頭文字を大文字にするには、このチェックボックスを使用します。たとえば、REGION_NAME は Region_Name に変換されます。データベース内の表名は、通常は大文字なので、このオプションが利用できます。

「すべてのアンダースコアを空白に置換する」

アンダースコアを空白に置換するには、このチェックボックスを使用します。たとえば、Region_Name は Region Name に変換されます。

「すべての列接頭辞を削除する」

すべての列に共通の接頭辞を削除するには、このチェックボックスを使用します。たとえば表名が EMP で、その列名が EMP_Number、EMP_Name および EMP_Address の場合、ビジネスエリアでの名前は、Number、Name および Address になります。

「ソートするオブジェクトを選択してください。」

「フォルダをソートする」

ビジネスエリア内のフォルダをアルファベット順にソートするには、このチェックボックスを使用します。

「アイテムをソートする」

フォルダ内のアイテムをアルファベット順にソートするには、このチェックボックスを使用します。

バルク・ロード時にフォルダおよびアイテムをソートするコマンドライン・インタフェースの使用方法は第 21 章「[/load](#)」を参照してください。

ビジネスエリア内のフォルダおよびアイテムのソートについての情報は、次のトピックを参照してください。

- [第 5 章「ビジネスエリアにおけるフォルダのソート方法」](#)
- [第 5 章「フォルダにおけるアイテムのソート方法」](#)

「フォルダの管理」ダイアログ：「ビジネスエリア → フォルダ」タブ

このタブを使用して、1つのビジネスエリアに複数のフォルダを割り当てます。たとえば、現行ビジネスエリアに新規フォルダを追加します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「フォルダ」](#)

「ビジネスエリア」

このドロップダウン・リストを使用してビジネスエリアを選択します。「選択されたフォルダ」リストには、このビジネスリストに現在割り当てられているフォルダが表示されます。

「選択可能なフォルダ」

このリストには、選択されたビジネスエリアに現在割り当てられていない使用可能なフォルダが表示されます。孤立したフォルダもリスト表示されます。

- 現行ビジネスエリアにフォルダを割り当てるには、1つ以上のフォルダを選択してから「>」をクリックし、「選択されたフォルダ」リストへフォルダを移動します。

「選択されたフォルダ」

このリストには、ビジネスエリアに現在割り当てられているフォルダが表示されます。

- 現行ビジネスエリアからフォルダを削除するには、1つ以上のフォルダを選択してから「<」をクリックし、「選択されたフォルダ」リストからフォルダを削除します。

注意

[Ctrl] キーを押しながら他のフォルダをクリックすると、複数のフォルダを選択できます。

「フォルダの管理」ダイアログ：「フォルダ → ビジネスエリア」タブ

このタブを使用すると、1つのビジネスエリアに1つのフォルダが割り当てられます。たとえば、ビジネスエリアに新規フォルダを割り当てます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「フォルダ」](#)

「フォルダ」

このドロップダウン・リストを使用して、割り当てるフォルダを選択します。「選択されたビジネスエリア」リストには、現行フォルダが割り当てられているビジネスエリアが表示されます。

選択したフォルダにビジネスエリアが割り当てられていない場合は、そのフォルダは孤立したフォルダです。

「選択可能なビジネスエリア」

フォルダ定義を共有できるすべての使用可能なビジネスエリアです。

このリストには、現行フォルダを割り当てることができる使用可能なビジネスエリアが表示されます。

- 現行フォルダをビジネスエリアに割り当てるには、1つ以上のビジネスエリアを選択してから「>」をクリックし、「選択されたビジネスエリア」リストへビジネスエリアを移動します。

「選択されたビジネスエリア」

このリストには、現行フォルダが割り当てられているビジネスエリアが表示されます。

- 現行フォルダをビジネスエリアから削除するには、1つ以上のビジネスエリアを選択してから「<」をクリックし、「選択可能なビジネスエリア」リストへビジネスエリアを移動します。

注意

[Ctrl] キーを押しながら別のビジネスエリアをクリックすると、複数のビジネスエリアを選択できます。

「スケジュールの管理」ダイアログ

このダイアログを使用して、Discoverer エンド・ユーザーによってスケジュールされたワークブックのモニターおよび保守を行います。たとえば、処理中のワークブックの進捗を確認したり、Discoverer エンド・ユーザーにより作成された後で必要がなくなったスケジュール済みワークブックを削除します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ワークブックおよびスケジュール済みワークブック」](#)

「ワークブックの表示」

このドロップダウン・リストを使用して、表示または編集するスケジュール済みワークブックを所有するユーザーまたはロールを選択します。

「スケジュールされているワークブック」

このリストには、選択されたユーザーまたはロールが所有しているスケジュール済みワークブックが含まれます。表示されたワークブックは、実行がスケジュールされているか、すでに実行され、使用準備ができています。このリストには次のフィールドがあります。

- 「ユーザー」

このワークブックをスケジュールした Discoverer ユーザーの名前。

- 「名前」

スケジュールされたワークブックの名前。

- 「状態」

このワークブックの状態。ワークブックの状態の詳細は、下の表を参照してください。

状態	説明：
「スケジュールされています。」	このワークブックはスケジュール済みで、指定された日時に実行されます。
「問合せを実行しています。」	このワークブックは現在実行中です。結果はありません。
「スケジュールできませんでした。」	このワークブックは正常にジョブ・キューに実行依頼されませんでした。Discoverer エンド・ユーザーに連絡して、このワークブックを再スケジュールしてください。

状態	説明：
「問合せの実行中にエラーが発生しました。」	このワークブックの実行中にエラーが発生しました。データベースから結果が戻されませんでした。これは PL/SQL の生成または実行中の問題に起因します。Oracle データベース・エラーが生成されています。エラーは、データベース管理者によってアクセス可能です。スケジュールされたワークブックの一部（たとえばワークブックの 1 つのシート）でエラーが発生すると、そのワークブック全体の実行が失敗します。
「レポートは管理者によって削除されました。」	Discoverer 管理者がスケジュールされたワークブックを削除するように設定しています。このステータスを伴って実行されたレポートは、ユーザーが次回 EUL から切断されたときに削除されます。
「EUL が変更されました。レポートをスケジュールし直してください。」	スケジュールされたワークブックに影響を与えるような変更が EUL で発生しました。たとえば、フォルダが削除されています。ユーザーはスケジュールされたワークブックをもう一度実行依頼できます。
「件数の制限に達しました。」	このスケジュールされたワークブックの結果が、ユーザーが取り出せる行数を超過しました。結果は削除されました。 「権限」ダイアログ：「問合せ管理」タブ を使用して、この制限を変更します。
「レポートが失効しました。」	失効日を過ぎました。このワークブックはすでに使用できません。この状態のレポートは、ユーザーが EUL から切断されたときに削除されます。
「レポートが用意できています。」	このワークブックによるデータベースの問合せは成功し、ユーザーは結果を表示できます。

■ 「日付」

状態が「スケジュールされています。」の場合は、このワークブックが次に実行される予定日を表しています。状態が「レポートが用意できています。」の場合は、前回実行された日付を表しています。

■ 「時間」

状態が「スケジュールされています。」の場合は、このワークブックが次に実行される予定時刻を表しています。状態が「レポートが用意できています。」の場合は、前回実行された時刻を表しています。

■ 「実行時間」

このワークブックの実行にかかった時間を表しています。

「説明」

この読取り専用フィールドには、選択されたワークブックについての追加情報が表示されません。

「編集」

このボタンを使用して、選択したワークブックの設定値を変更する、「[スケジュールされたワークブック](#)」ダイアログ:「一般」タブを表示します。このオプションは、まだ処理されていないワークブックでのみ使用可能です。

「エラーを表示」

このボタンを使用して、選択したワークブックが正常に実行されなかった原因の説明を表示します。このオプションは、エラーによりスケジュールできなかったワークブックの場合にのみ使用できます。

「スケジュール取消」

このボタンを使用して、ワークブックのスケジュールを取り消し、「スケジュールされているワークブック」リストからワークブックを削除します。以前に、このワークブックを実行した結果のワークブックがすべて削除されます。

「リフレッシュ」

このボタンを使用して、このダイアログを開いてから、スケジュールが変更されたかどうか、データベースを確認します。

注意

列をクリックすると、「スケジュールされているワークブック」リストを再ソートできます。たとえば、リストを日付順にソートする場合は、「日付」列のヘッダーをクリックします。

「階層の名前付け」ダイアログ

このダイアログは、階層の名前および説明を入力するために使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「階層ウィザード ステップ 3」ダイアログ

「階層ウィザード ステップ 4」ダイアログ

「階層の編集」ダイアログ: 「名前」タブ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「階層」](#)

「名前」

このフィールドを使用して、階層の名前を入力します。

「説明」

このフィールドを使用して、階層の追加情報を入力します。

「サマリー フォルダの名前付け」ダイアログ

このダイアログは、サマリー・フォルダの名前および説明を入力するために使用します。サマリー表またはマテリアライズド・ビューに基づくサマリー・フォルダの場合は、サマリー・フォルダをいつ作成するかも構成できます。たとえば、即時にサマリー・フォルダを作成することができます。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「サマリー ウィザード ステップ 5」ダイアログ

「サマリー ウィザード ステップ 6」ダイアログ

「サマリー ウィザード ステップ 7」ダイアログ

「サマリーの編集」ダイアログ: 「一般」タブ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Discoverer のフォルダとサマリー・フォルダ」](#)

[「手動によるサマリー・フォルダの作成について」](#)

サマリー表またはマテリアライズド・ビューに基づくサマリー・フォルダの場合

サマリー・フォルダに名前を付け、作成時間をスケジュールできます。

「このサマリーの名前と説明を入力してください。」

「名前」

このフィールドを使用して、サマリー・フォルダの名前を入力します。Discoverer Administrator はユーザーが使用できるようにデフォルト名を作成します。

「説明」

(オプション) このフィールドを使用して、サマリー・フォルダについての追加情報を入力します。

「このサマリー・フォルダを作成する日時を指定してください。」

「すぐに作成」

サマリー表が小さい場合または即時にサマリー・フォルダを作成する場合は、「すぐに作成」ラジオ・ボタンをクリックします。

「以下の日時に作成 :」

サマリー表が大きいため、ピークを避けた時間に作成する場合は、「以下の日時に作成」 ラジオ・ボタンを使用します。サマリー・フォルダを作成する日付と時刻を入力します。

外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの場合

ここで、サマリー・フォルダに名前を付け、説明を付加することができます。

「このサマリーの名前と説明を入力してください。」

「名前」

このフィールドを使用して、サマリー・フォルダの名前を入力します。Discoverer Administrator はユーザーが使用できるようにデフォルト名を作成します。

「説明」

(オプション) このフィールドを使用して、サマリー・フォルダについての追加情報を入力します。

「新規条件」ダイアログ（詳細設定）

このダイアログを使用して、ビジネスエリア内で使用する新規条件を作成します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「条件」](#)

[「異なるタイプの条件」](#)

[「単一条件の作成方法」](#)

[「拡張された条件の作成方法」](#)

詳細条件には複数の基準が含まれます。次に例を示します。

- Discoverer エンド・ユーザーが 2001 年の第 1 四半期のデータにのみアクセスできるように制限する場合は、**Year = 2001 AND Quarter = Q1** という必須条件を作成します。
Discoverer エンド・ユーザーがワークブックにアクセスした場合、2001 年の第 1 四半期のデータが常に表示されます。
- Discoverer エンド・ユーザーが 2001 年の別の四半期のデータも簡単に表示できるようにするには、次のようにオプション条件を作成します。
 - Year = 2001 AND Quarter = Q1
 - Year = 2001 AND Quarter = Q2
 - Year = 2001 AND Quarter = Q3
 - Year = 2001 AND Quarter = Q4

Discoverer エンド・ユーザーはワークブックにアクセスしたときに、これらの条件を適用して、特定の四半期のデータを入手できます。

「名前」

このフィールドを使用して、新規条件の名前を入力します。

「名前の自動生成」

Discoverer に名前を生成するには、このチェックボックスをクリックします。

「説明」

このフィールドを使用して、条件の追加情報を入力します。この説明は、「ワークエリア」および Discoverer Desktop/Plus でこの条件を選択するたびに表示されます。条件の作成者とユーザーの両方に対して役立つ説明を入力します。

「保存場所」

このフィールドは、条件を格納するフォルダの名前を表示します。これは「挿入 | 条件」をクリックしたときに選択していた場所です。

「タイプ」

このドロップダウン・リストを使用して、条件タイプを選択します。

- 「必須」－ 必須条件は、条件を含むフォルダからのアイテムを 1 つ以上含むワークシートに常に適用されます。Discoverer Desktop/Plus ユーザーは、必須条件について通知されることはなく、必須条件をオフにすることはできません。
- 「オプション」－ オプション条件は、Discoverer Desktop/Plus ユーザーが必要に応じてオンまたはオフに切り替えることができます。

「計算式」

このボックスを使用して、使用するフィルタ基準を指定します。

- 「アイテム」

このドロップダウン・リストを使用して、データのフィルタリングに使用するアイテムを選択します。たとえば、特定の年のデータを表示するには、「年」を選択します。

- 「条件」

このドロップダウン・リストを使用して、アイテムとデータの照合方法を選択します。たとえば、特定の数値よりも大きいアイテム値という条件でデータをフィルタするには、「>」記号（より大きい）を選択します。

- 「値」

このボックスを使用して、照合対象のデータを定義します。たとえば、2001 年のデータのみを対象とするには、ここで 2001 と入力します。アイテムの値リストが作成されていれば、これらのアイテムがドロップダウン・リストに表示されます。

「大文字小文字の区別」

大文字と小文字のテキスト・データを厳密に照合するには、このチェックボックスを使用します。このチェックボックスを選択した場合、'New York' という照合値からは 'new york' というデータは戻されません。

「追加」

このボタンを使用して、条件に新規基準行を挿入します。デフォルトでは、新しいアイテムは論理 AND でグループ化されます。つまり、このデータは、AND グループ内に含まれるすべての基準を満たす必要があります。

「削除」

このボタンを使用して、現在選択しているフィルタ基準を条件から削除します。

「AND」

このボタンを使用して、条件に新規基準行を挿入します。新しいアイテムは論理 AND でグループ化されます。つまり、このデータは、AND グループ内に含まれるすべての基準を満たす必要があります。

「OR」

このボタンを使用して、条件に新規基準行を挿入します。新しいアイテムは論理 OR でグループ化されます。つまり、このデータは、OR グループ内に含まれる基準の少なくとも 1 つを満たす必要があります。

「NOT」

このボタンを使用して、現在選択しているグループの条件を逆転します。アイテムは論理 NOT AND または NOT OR でグループ化されます。つまり、このデータは、NOT グループ内の基準に一致しない必要があります。

注意

「削除」、「AND」および「OR」ボタンは、「計算式」に表示されている条件を選択したときにのみ使用できます。

「新規条件」ダイアログ（オブジェクトの選択）

このダイアログを使用して、新規条件を格納する場所を選択します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「条件」](#)

[「異なるタイプの条件」](#)

[「単一条件の作成方法」](#)

[「拡張された条件の作成方法」](#)

たとえば、「挿入」→「条件」を選択する前にフォルダを選択していない場合は、ここでフォルダを選択します。

フォルダの選択ウィンドウは、次の場合に表示されます。

- 現在選択されているフォルダが、作成しようとする条件を使用しない場合。
- 「結合」ウィンドウでフォルダが選択されていないときに、ドロップダウン・リストで「フォルダの変更」がクリックされた場合。

「ビジネスエリア」

このドロップダウン・リストを使用してビジネスエリアを選択します。次に、下にある拡張可能なアイテム・リストから、条件を格納するフォルダを選択します。

「条件の新規作成 / 編集」ダイアログ

このダイアログを使用して、ビジネスエリア内で新規条件を作成、または条件を編集します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「新規条件」ダイアログ

「条件の編集」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「条件」](#)

[「異なるタイプの条件」](#)

[「単一条件の作成方法」](#)

[「拡張された条件の作成方法」](#)

単純な条件には、通常 1 つのフィルタ基準が含まれています。次に例を示します。

- Discoverer エンド・ユーザーが 2001 年のデータにのみアクセスできるように制限する場合は、**Year = 2001** という必須条件を作成します。Discoverer エンド・ユーザーがワークブックにアクセスした場合、2001 年のデータが常に表示されます。
- Discoverer エンド・ユーザーが異なる四半期のデータも容易に表示できるようにするには、次のようにオプション条件を作成します。**Quarter = Q1**、**Quarter = Q2**、**Quarter = Q3** および **Quarter = Q4**。Discoverer エンド・ユーザーはワークブックにアクセスしたときに、これらの条件を適用して、特定の四半期のデータを入手できます。

「名前」

このフィールドを使用して、新規条件の名前を入力します。

「名前の自動生成」

Discoverer に名前を生成するには、このチェックボックスをクリックします。

「説明」

このフィールドを使用して、条件の追加情報を入力します。この説明は、「ワークエリア」および Discoverer Desktop/Plus でこの条件を選択するたびに表示されます。条件の作成者とユーザーの両方に対して役立つ説明を入力します。

「保存場所」

このフィールドは、条件を格納するフォルダの名前を表示します。これは「挿入 | 条件」をクリックしたときに選択していた場所です。

「タイプ」

このドロップダウン・リストを使用して、条件タイプを選択します。

- 「必須」－ 必須条件は、条件を含むフォルダからのアイテムを 1 つ以上含むワークシートに常に適用されます。Discoverer Desktop/Plus ユーザーは、必須条件について通知されることはなく、必須条件をオフにすることはできません。
- 「オプション」－ オプション条件は、Discoverer Desktop/Plus ユーザーが必要に応じてオンまたはオフに切り替えることができます。

「計算式」

このボックスを使用して、使用するフィルタ基準を指定します。

■ 「アイテム」

このドロップダウン・リストを使用して、データのフィルタリングに使用するアイテムを選択します。たとえば、特定の年のデータを表示するには、「年」を選択します。

■ 「条件」

このドロップダウン・リストを使用して、アイテムとデータの照合方法を選択します。たとえば、特定の数値よりも大きいアイテム値という条件でデータをフィルタするには、「>」記号（より大きい）を選択します。

■ 「値」

このボックスを使用して、照合対象のデータを定義します。たとえば、2001 年のデータのみを対象とするには、ここで 2001 と入力します。アイテムの値リストが作成されていれば、これらのアイテムがドロップダウン・リストに表示されます。

また、ドロップダウン・リストをクリックして、次のようにも照合できます。

- － 「**値の選択**」をクリックして「値」ダイアログを表示します。

条件で使用する、1 つ以上の値を選択します。

- － 「**ユーザー定義アイテムの作成**」をクリックして「ユーザー定義アイテムの編集」ダイアログを表示します。

条件で使用する、ユーザー定義アイテムを作成します。

- － 「**アイテムの選択**」をクリックして「アイテム」ダイアログを表示します。

条件で使用する、アイテムを選択します。

「大文字小文字の区別」

大文字と小文字のテキスト・データを厳密に照合するには、このチェックボックスを使用します。このチェックボックスを選択した場合、'New York' という照合値からは 'new york' というデータは戻されません。

「詳細設定 >>」

複数のフィルタ基準を作成する場合に、このボタンを使用します。これにより、詳細条件を作成する追加のフィールドおよびボタンが表示されます（「[新規条件](#)」ダイアログ（[詳細設定](#)）を参照）。

「新規日付書式」ダイアログ

このダイアログを使用して、新しい日付書式を作成します。たとえば、2001 の場合は 01 を表示し、2002 の場合は 02 を表示するなど、一般的な 4 桁の年の最後の 2 桁のみを含む年の新規書式を作成できます。

新しい書式を日付階層で使用できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「日付階層」](#)

[「日付アイテム」](#)

[「日付書式マスク」](#)

「日付書式グループ」

このドロップダウン・リストを使用して、新しい日付書式を含めるグループを選択します。

「新規書式」

このフィールドを使用して、使用する日付書式マスクを入力します。たとえば、4 桁の年と月を表示するには、YYYY-MM と入力します。

注意

- 新しい日付書式は、SQL 日付書式モデル（たとえば YYYY、YYY、YY、RR など）に適合している必要があります。
- 新しい日付書式の前に二重引用符で囲った説明のテキスト（たとえば "Fiscal Year"YYYY）を付加することができます。

「新規アイテム」ダイアログ（アイテム用フォルダの選択）

このダイアログを使用して、新規アイテムを格納する場所を選択します。たとえば、「挿入」→「アイテム」を選択する前にフォルダを選択していない場合は、ここでフォルダを選択します。

Discoverer の「フォルダの選択」ダイアログは次の場合に表示されます。

- 現在選択されているフォルダが、作成しようとするアイテムを使用しない場合。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「新規アイテム」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテム」](#)

[「フォルダ」](#)

「ビジネスエリア」

このドロップダウン・リストを使用してビジネスエリアを選択します。次に、下にある拡張可能なアイテム・リストから、アイテムを格納するフォルダを選択します。

「新規アイテム」ダイアログ

このウィンドウを使用して、EUL オブジェクトまたは関数、あるいはその両方に基づくアイテムを作成します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「アイテム」](#)

[「ユーザー定義アイテム」](#)

次に例を示します。

- EUL アイテム「暦年」に基づいて「年」という名前のアイテムを作成する場合。
- $\text{Sales SUM} * 1.25$ という計算式に基づいて **Sales Target** という名前のユーザー定義アイテムを作成する場合。
- $\text{Sales SUM} - \text{Profit SUM}$ という計算式に基づいて **Profit** という名前のユーザー定義アイテムを作成する場合。
- $\text{RANK} () \text{ OVER} (\text{ORDER BY Sales SUM})$ という計算式に基づいて **Rank Sales** という名前のユーザー定義アイテムを作成する場合。

「表示」

このドロップダウン・リストを使用して、使用可能なアイテムおよび関数を表示します。ユーザー定義アイテムにアイテムまたは関数を含めるには、右側の「計算」ボックスに追加します。

「貼り付け >>」

このボタンを使用して、「表示」リストで現在選択しているアイテムまたは関数を、右側の「計算」ボックスに追加します。

「名前」

このフィールドを使用して、アイテムまたはユーザー定義アイテムの名前を入力します。Discoverer Administrator によりデフォルト名が作成されます。

「計算」

このテキスト・ボックスを使用して、アイテムまたはユーザー定義アイテムの詳細を入力します。

- ビジネスエリア内のアイテムに基づいてアイテムを作成する場合は、「表示」リストからアイテムを選択します。次に「貼り付け」をクリックして、アイテムを「計算」ボックスに追加します。
- ユーザー定義アイテムを作成するには、次のいずれかを行います。
 - 「計算」ボックスに直接計算式を入力する。
 - 左側の「表示」ボックスからユーザー定義アイテムにアイテムを貼り付ける。
 - 「計算」ボックスの下にある演算子ボタンをクリックして計算に使用する。
 - 前述のオプションを組み合わせる。

「演算子ボタン」([+] [-] [x] [/] [%] [()])

これらのボタンを使用して、計算に演算子を追加します。演算子は前述の「計算」ボックスにコピーされます。

「OK」

このボタンを使用して、ユーザー定義アイテムを検証してアイテムを保存します。

- ユーザー定義アイテムの構文が有効な場合、ユーザー定義アイテムが保存され、「ユーザー定義アイテム」ダイアログに表示されます。
- ユーザー定義アイテムの構文が無効な場合は、エラー・メッセージが表示されます。ユーザー定義アイテムを保存する前に、構文エラーを訂正する必要があります。

注意

- ユーザー定義アイテムの中で算術表現を使用した場合、乗算と除算は、その位置に関係なく最初に計算されます。優先順位の同じ演算子が複数ある場合は、左から右へ計算されます。たとえば、値段 - 値引き × 個数という計算式では、値段から値引き × 個数が減算されてしまいます。減算をカッコで囲み（値段 - 値引き）とすれば、乗算より先に減算が計算されます。
- 使用可能な関数

カテゴリ	説明
すべての関数	すべての関数のアルファベット順のリスト
変換	データ型を別のデータ型に変換する関数 : RAWTOHEX、TO_CHAR、TO_DATE
「データベース」	ユーザー定義関数を使用可能な場合に表示されるオプションのカテゴリ（「ツール」メニューの「PL/SQL 関数の登録」機能を使用して作成する）
「日付」	ADD_MONTHS、NEW_TIME、SYSDATE、NEXTDATE など、日付アイテムの操作用の関数
「グループ」	SUM、COUNT、MAX、MIN、VARIANCE などを含む集合関数および統計関数
数値	数値アイテム用の関数。COS、LOG、MOD、POWER など、超越関数および浮動小数点関数
その他	LEAST、USER、DECODE、ROWNUM など、その他の関数
文字列	文字列アイテム用の関数。INITCAP、LPAD、NLS_UPPER などのテキスト操作
分析	RANK、NTILE、CORR など、統計分析用の関数

「新規結合」ダイアログ（フォルダの選択）

このダイアログを使用して、新規結合を格納する場所を選択します。たとえば、「挿入」→「結合」を選択する前にフォルダを選択していない場合は、ここでフォルダを選択します。

フォルダの選択ウィンドウは、次の場合に表示されます。

- 現在選択されているフォルダが、作成しようとする結合を使用しない場合。
- 「結合」ウィンドウでフォルダが選択されていないときに、ドロップダウン・リストで「フォルダの変更」がクリックされた場合。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「新規結合」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「結合」](#)

[「ビジネスエリア」](#)

「ビジネスエリア」

このドロップダウン・リストを使用してビジネスエリアを選択します。次に、下にある拡張可能なアイテム・リストから、結合を格納するフォルダを選択します。

「新規結合 / 結合の編集」 ダイアログ

新規結合を作成するか、既存の結合を編集するには、このダイアログを使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「新規結合」 ダイアログ

「結合の編集」 ダイアログ

たとえば、Product フォルダと Sales Fact フォルダの両方から情報を表示するため、共通するフィールドである Product Key を使用して次のように結合を作成できます。

Products.Product Key = Sales Facts.Product Key

これにより、Sales Fact フォルダ内の各レコードについて、Sales Fact フォルダではなく、Product フォルダに格納されている販売された製品についての情報を表示できます。たとえば、説明、価格および保管場所などを表示できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「結合」](#)

「マスター アイテム」

このドロップダウン・フィールドを使用して、結合するマスター・フォルダ内のアイテムを選択します。フィールドの先頭にはフォルダ名が付けられ、たとえば、Products.Product Key となります。

- EUL 内のどこからでもアイテムを選択できる「[新規結合](#)」ダイアログ（フォルダの選択）を表示するには、「追加アイテム」を選択します。

「演算子」

このドロップダウン・リストを使用して、2つのアイテムの照合方法を選択します。たとえば、完全一致する2つのアイテムを検出するには、「=」を選択します。詳細は、次の結合演算子のリストを参照してください。

表 24-3 結合演算子

演算子	説明
=	等価結合、指定されたアイテムの値が同じである行を組み合わせます。
<>	等しくない
<	より小さい
<=	より小さいか等しい
>=	より大きい等しい
>	より大きい

「ディテール アイテム」

このドロップダウン・フィールドを使用して、結合するディテール・フォルダ内のアイテムを選択します。ディテール・アイテムは、マスター・アイテムと同じまたは異なるビジネスエリア内のフォルダのどちらにあっててもかまいません。フィールドの先頭には、フォルダ名が付けられ、たとえば、Sales Facts.Product Key となります。

- EUL 内のどこからでもアイテムを選択できる「[新規結合](#)」ダイアログ（フォルダの選択）を表示するには、「追加アイテム」を選択します。

「名前」

このフィールドを使用して、結合の名前を入力します。この名前は、Discoverer Administrator の「ワークエリア」に表示され、Discoverer エンド・ユーザーによるワークブックの使用に使用されます。

「説明」

このフィールドを使用して、結合についての追加情報を入力します。この説明は、Discoverer Administrator の「ワークエリア」に表示され、Discoverer エンド・ユーザーによるワークブックの使用に使用されます。

「マルチアイテム >>」

複数の結合基準を作成する場合は、このボタンを使用します。これにより、マルチアイテム結合を作成する追加のフィールドおよびボタンが表示されます（「[新規結合](#)」ダイアログを参照）。

「オプション ...」

このボタンを使用して、外部結合を構成する「[結合オプション](#)」ダイアログダイアログを表示します。

マスターからディテール



このアイコンは、マスターからディテールへの結合関係における、異なるフォルダ内の 2 つのアイテム間の 1 対多の関係を表しています。マスター・アイテムは左側にあり、ディテール・アイテムは右側にあります。

ディテールからマスター



このアイコンは、ディテールからマスターへの結合関係における、異なるフォルダ内の2つのアイテム間の多対1の関係を表しています。ディテール・アイテムは左側にあり、マスター・アイテムは右側にあります。

詳細は、[第10章「結合の編集方法」](#)を参照してください。

「新規結合」ダイアログ

新規のマルチアイテム結合の作成、または既存のマルチアイテム結合の編集には、このダイアログを使用します。マルチアイテム結合を使用すると、複数の結合条件を使用して、共通のアイテムを持たない2つのフォルダを結合できます。結合におけるすべての条件が満たされたときに、結合が真になります。たとえば、2つのフォルダ（Emp および Salgrade）には、単一アイテム結合を作成するために必要な共通のアイテムがありません。次のマルチアイテム結合の例では、給与が指定された給与等級に入る従業員の場合に、結合が真になります（Emp フォルダと Salgrade フォルダが結合される）。

Emp.Sal >= Salgrade.LoSal

Emp.Sal <= Salgrade.HiSal

Discoverer では、Emp フォルダ内の給与レコードごとに（給与が最低給与と最高給与の間の場合）、従業員の給与等級に関する情報を Salgrade フォルダから表示できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「結合」](#)

[「単一アイテム結合の作成方法」](#)

[「マルチアイテム結合の作成方法」](#)

「マスター アイテム」

このドロップダウン・フィールドを使用して、結合するマスター・フォルダ内のアイテムを選択します。フィールドの先頭にはフォルダ名が付けられ、たとえば、Products.Product Key となります。

- EUL 内のどこからでもアイテムを選択できる「[新規結合](#)」ダイアログ（フォルダの選択）を表示するには、「追加アイテム」を選択します。

「演算子」

このドロップダウン・リストを使用して、2つのアイテムの照合方法を選択します。たとえば、完全一致する2つのアイテムを検出するには、「=」を選択します（後述の「注意」の中の「結合演算子」を参照してください）。

「ディテール・アイテム」

このドロップダウン・リストを使用して、結合するディテール・フォルダ内のアイテムを選択します。ディテール・アイテムは、マスター・アイテムと同じまたは異なるビジネスエリア内のフォルダのどちらにあってもかまいません。フィールドの先頭には、フォルダ名が付けられます。たとえば、Sales Facts.Product Key となります。

- EUL 内のどこからでもアイテムを選択できる「[新規結合](#)」ダイアログ（フォルダの選択）を表示するには、「追加アイテム」を選択します。

「名前」

このフィールドを使用して、結合の名前を入力します。この名前は、Discoverer Administrator の「ワークエリア」に表示され、Discoverer エンド・ユーザーがワークブックを使用するときに使用されます。

「説明」

このフィールドを使用して、結合についての追加情報を入力します。この説明は、Discoverer Administrator の「ワークエリア」に表示され、Discoverer エンド・ユーザーがワークブックを使用するときに使用されます。

「追加」

このボタンを使用して、結合に新規基準行を挿入します。これにより、別のマスター・フォルダ、演算子およびディテール・フォルダを選択して、より複雑な結合を作成できます。

「削除」

このボタンを使用して、現在選択している結合基準を結合から削除します。

「オプション ...」

このボタンを使用して、外部結合を構成する「結合オプション」ダイアログを表示します。

注意

表 24-4 結合演算子

演算子	説明
=	等価結合、指定されたアイテムの値が同じである行を組み合せます。
<>	等しくない
<	より小さい
<=	より小さいか等しい
>=	より大きい等しい
>	より大きい

「オンライン・ディクショナリ・オプション」ダイアログ

このダイアログを使用して、「ロードウィザード ステップ2」ダイアログに表示する表およびビューのタイプを指定します。たとえば、ユーザーが所有している表およびビューのみでなく、ユーザーがアクセス可能なすべての表およびビューを表示できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ロード・ウィザード」](#)

「どちらの表（およびビュー）を表示しますか？」

「ユーザーが所有している表およびビュー」

「ロードウィザード ステップ2」ダイアログで指定されたユーザー ID に属する表およびビューを使用可能にするには、このラジオ・ボタンを使用します。

次の場合、このオプションを選択してください。

- スキーマを所有している場合に、スキーマの許可に基づいて表またはオブジェクトをロードする場合。
- スキーマ所有者がいる場合に、スキーマの権限付与に基づいて表またはオブジェクトをロードする場合。たとえば、FINAPPS などの所有者は、Oracle の財務アプリケーション・システムで使用されているすべての表を所有しており、他のユーザーがこれらの表を参照できるようにアクセス権を付与しています。

「ユーザーが参照可能な表およびビュー」

データベース内で SELECT アクセス権が付与されたユーザー ID から表およびビューを使用できるようにするには、このラジオ・ボタンを使用します。

「どのタイプの表（およびビュー）を表示しますか？」

「パブリックに select 権限が与えられている表およびビュー」

このオプションは、選択されたユーザー ID のスキーマにパブリック・アクセス権が付与されている表およびビューをインポートします。たとえば、JOE はパブリック・アクセス可能な表を表示しています。

「他のユーザーに select 権限が与えられている表およびビュー」

このオプションは、選択されたユーザー ID のスキーマに、他のユーザーにアクセス権限が与えられている表およびビューをインポートします。たとえば、ユーザー ID Bob は、データベース内の表 D の SELECT 権限をユーザー ID Betty に付与できます。表 D は、アクセス制限されたオブジェクトとして指定されます。このオプションは、あるユーザー ID が所有するアクセス制限されたまたはユーザー ID に明示的な SELECT アクセスが許可されたオブジェクトのリストを表示するために使用されます。たとえば、JOE はこれらの表に対する特定のアクセス権を付与されています。

「ユーザーのプライベート表」

このオプションは、選択されたユーザー ID のスキーマに、他のユーザー ID からアクセス不可能なプライベートの表およびビューをインポートします。

注意

ユーザー ID は表を所有し、他のユーザー ID にアクセス権を付与できます。たとえば、FINAPPS などのアプリケーション所有者は、Oracle の財務アプリケーション・システムで使用されているすべての表を所有し、他のユーザーがこれらの表を参照できるようにアクセス権を付与しています。

「ビジネスエリアを開く」ダイアログ

このダイアログを使用すると、Discoverer Administrator の「ワークエリア」で、どのビジネスエリアを開くかを指定します。たとえば、ユーザー自身のビジネスエリアおよび Video Stores Tutorial ビジネスエリアを選択します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ビジネスエリア」](#)

[「オンライン・ディクショナリからのロード」](#)

[「ゲートウェイからのロード」](#)

「選択可能」

このリストには、使用可能なビジネスエリアが含まれます。ビジネスエリアを開くには、ビジネスエリアを「選択可能」リストから「選択済み」リストへ移動します。

「選択済み」

このリストには、「ワークエリア」で開くビジネスエリアが含まれます。このリスト内のビジネスエリアを開かない場合は、ビジネスエリアを「選択済み」リストから「選択可能」リストへ移動します。

注意

- [Ctrl] キーを押しながら別のビジネスエリアをクリックすると、複数のビジネスエリアを選択できます。
- 同一のビジネスエリアを重複して開くことはできません。ワークエリア・ウィンドウにすでに開いているビジネスエリアを選択しても、「開く」コマンドは何も行いません。同じビジネスエリアを複数表示するには、「ウィンドウ」メニューから「新しいウィンドウを開く」を選択し、別のワークエリア・ウィンドウを作成します。

「オプション」ダイアログ:「接続」タブ

このダイアログを使用して、「[Oracle9i Discoverer Administrator に接続](#)」ダイアログに表示する接続の詳細を指定できます。たとえば、常に Oracle Applications EUL に接続する場合は、Oracle Applications へ接続するための詳細情報を入力するプロンプトを表示するように「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログを構成できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Discoverer Administrator の開始方法」](#)

[「オプション」ダイアログ:「デフォルト EUL」タブ](#)

「接続」タブ

「どのタイプの EUL に接続しますか？」

「標準 EUL」

標準 EUL にのみ接続する場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスは「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログに表示されません。

「Oracle Applications EUL」

Oracle Applications EUL にのみ接続する場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスは「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログに表示されませんが、Applications のユーザー ID と職責を使用してログインする必要があります。また、Oracle Applications の EUL にのみログインできます。

「標準 EUL および Oracle Applications EUL の両方」

標準の EUL と Oracle Applications EUL の両方に接続できるようにする場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

どのような接続詳細を使用して接続するかを指定するために、「Oracle Applications ユーザー」チェックボックスが「Oracle9i Discoverer Administrator に接続」ダイアログに表示されます。

「Oracle Applications EUL 設定 :」

Oracle Applications EUL の場合はこれらのフィールドを使用します。ユーザーが値を入力しないと、これら両方のフィールドでデフォルト値が使用されます。

「Gateway User ID (GWYUID) / パスワード」

このフィールドを使用して、Applications ログインで使用されるパブリック・ゲートウェイのユーザー名とパスワードを定義します。ユーザー名とパスワードはスラッシュ (/) 文字で区切ってください。

Discoverer で使用されるデフォルト値 (APPLSYSPUB/PUB) を上書きする場合は、ゲートウェイ・ユーザー ID を入力します。

「Foundation Name (FNDNAM)」

このフィールドを使用して、コア Applications の表およびビューを所有するスキーマを定義します。

Discoverer で使用されるデフォルト値 (APPS) を上書きする場合は、Foundation Name を入力します。

「オプション」ダイアログ:「デフォルト EUL」タブ

このダイアログを使用して、どのデフォルト EUL に接続するかを指定できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Discoverer Administrator の開始方法」](#)

[「「オプション」ダイアログ:「接続」タブ」](#)

デフォルト EUL の設定

「デフォルト EUL を選択してください」

このリストを使用して、デフォルトとして使用する EUL を指定します。次に Discoverer Administrator に接続したときには、ここで指定した EUL 内のビジネスエリアがロードウィザードから表示されます。

注意

- EUL を作成する場合は、デフォルト EUL への書込みアクセス権を所有していることを確認してください。アクセス権がない場合、ロードウィザードにビジネスエリアの作成オプションは表示されません。

「PL/SQL 関数」ダイアログ:「引数」タブ

このダイアログを使用して、登録された PL/SQL 関数の引数を定義します。

SQL コマンドを使用して、データベース中に定義された PL/SQL 関数を登録できます。

詳細は次の項を参照してください。

[「PL/SQL 関数が必要な理由」](#)

「関数」タブ

このタブを使用して、「PL/SQL 関数」ダイアログ:「関数」タブを表示します。

「関数」

このリストは、Discoverer Administrator で使用できるようにすでに登録されている、Oracle が提供する PL/SQL 関数とユーザー定義の PL/SQL 関数を表示します。

「引数」

ここには、「関数」リストで現在選択されている関数に定義されている引数のリストが表示されます。

「新規作成」

新しい引数を作成するには、このボタンを使用します。デフォルトの引数名が生成され、フィールドはデフォルト値で初期化されます。ユーザーは必要に応じてデフォルト値を編集して、新しい引数を構成できます。

「削除」

現在選択されている引数を削除するにはこのボタンを使用します。その引数は「引数」リストから削除されます。

「上へ移動」/「下へ移動」

これらのボタンを使用して、「引数」リストの中の引数を再配置します。これは引数が正しくなかった場合や、関数自体を変更したり関数定義を更新するときに便利です。

「名前」

このフィールドを使用して、引数名を入力します。ユーザーが引数を追加すると、Discoverer Administrator によってデフォルト名が作成されます。

「説明」

このフィールドを使用して、引数についての追加情報を入力します。ユーザーが引数を追加すると、Discoverer Administrator によってデフォルトの説明が作成されます。

「データ型」

このフィールドを使用して、引数のデータ型を指定します（デフォルトは NUMBER）。

「識別子」

このフィールドを使用して、Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意な名前を変更します。これは概念的に同一のオブジェクトとも呼ばれます。

「引数の使用」

「オプション」

この引数が関数のオプション引数の場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

「必須」

この引数が関数の必須引数の場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

「PL/SQL 関数」ダイアログ:「関数」タブ

このダイアログを使用して、Discoverer Administrator で使用可能な PL/SQL 関数を管理します。関数を登録するには、次のような方法があります。

- 自分自身の PL/SQL 関数を手動で作成する（「新規作成」オプションを使用）
- データベース内に定義されている PL/SQL 関数をインポートする（「インポート」オプションを使用）

詳細は次の項を参照してください。

[「PL/SQL 関数が必要な理由」](#)

「引数」タブ

このタブを使用して、登録している関数の引数を定義します（詳細は、[「PL/SQL 関数」ダイアログ:「引数」タブ](#)を参照してください）。

「関数」

このリストには、Discoverer Administrator で使用できるようにすでに登録されていて、Oracle が提供する PL/SQL 関数とユーザー定義の PL/SQL 関数が表示されます。「Desktop Edition / Plus での使用を許可」チェックボックスが選択されている場合は、Discoverer エンド・ユーザーがユーザー定義アイテムでこれらの登録済み関数を使用できます。

「属性」

このボックスは、選択された PL/SQL 関数についての情報を表示します。

「関数名」

このフィールドを使用して、関数の名前を入力します。「関数名」と「表示名」は違うものでもかまいません。

「表示名」

このフィールドを使用して、関数の名前を入力します。この名前は Discoverer Administrator の「ユーザー定義アイテムの編集」ウィンドウで表示されます。「Desktop Edition / Plus での使用を許可」チェックボックスが選択されている場合は、Discoverer Desktop/Plus でも表示されます。

「所有者」

このフィールドを使用して、関数の所有者のユーザー ID を入力します。この値の変更により、開発環境から現実の環境に参照を移動できます。

「パッケージ」

このフィールドを使用して、この関数を含むパッケージを入力します。パッケージは、Oracle のデータベース内で関数を分類して管理しやすくするために用いられます。

「データベース リンク」

このドロップダウン・リストを使用して、関数を格納するデータベースを選択します。これは分散データベースを利用している場合に便利な機能です。

「戻り値のデータ型」

このフィールドを使用して、関数から戻されるデータのデータ型を入力します。たとえば、ある関数は文字列 (CHAR) または数値 (NUMBER) を戻します。

「説明」

このフィールドを使用して、関数についての追加情報を入力します。

「識別子」

このフィールドを使用して、Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意な名前を変更します。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、異なる EUL 内にある、同じビジネス・オブジェクトを参照するオブジェクト (概念的に同一のオブジェクトとも呼ばれます) を検索します。

「Desktop Edition / Plus での使用を許可」

Discoverer Desktop/Plus エンド・ユーザーがユーザー定義アイテムでこの関数を使用できるようにするには、このチェックボックスを使用します。

「チェック ...」

このボタンを使用して、入力した情報の妥当性と記述の正確さをテストします。Discoverer Administrator は、PL/SQL 関数を含むテスト用の SQL スクリプトを生成し、問合せをテストします。このテストで関数の存在、所有者、戻り値のデータ型などが確認できます。

「新規作成」

このボタンを使用して、新しい PL/SQL 関数を登録します。デフォルトの関数名が生成され、フィールドはデフォルト値で初期化されます。ユーザーは必要に応じてデフォルト値を編集して、新しい関数を構成できます。

「削除」

「関数」 リストで現在選択している PL/SQL 関数を削除するには、このボタンを使用します。

「インポート ...」

データベース内に定義された PL/SQL 関数をインポートする「[PL/SQL 関数のインポート](#)」
[ダイアログ](#)を表示するには、このボタンを使用します。PL/SQL 関数をインポート後、
Discoverer Administrator で使用できるように関数を登録します。

「権限」ダイアログ：「ユーザー→権限」タブ

ユーザーまたはロールに権限を付与するには、このタブを使用します（Oracle Applications ユーザーではロールは職責で置き換えられています）。たとえば、Discoverer Desktop/Plus ユーザーに対して問合せの作成および編集、ドリル・ダウンおよびドリル・アウトは許可し、データベースへのワークブックの保存は禁止します。

詳細は次の項を参照してください。

[「Discoverer およびセキュリティ」](#)

「表示対象」

「ユーザー」

このチェックボックスを使用して、右側のドロップダウン・リストにユーザーを表示します。

「ロール」

このチェックボックスを使用して、右側のドロップダウン・リストにロールを表示します。

（「ユーザー」/「ロール」ドロップダウン・リスト）

このドロップダウン・リストを使用して、権限を構成するユーザーまたはロールを選択します。たとえば、jchan を選択して、「権限」ボックスに jchan の権限を表示します。

「権限」

このパネルのチェックボックスを使用して、現在選択しているユーザーまたはロールの権限を付与または取消します。

- 管理権限を付与する場合は、「管理」チェックボックスを選択してから、「管理」グループ内の個々の権限を選択します。
- Discoverer Desktop 権限を付与する場合は、「Desktop Edition」チェックボックスを選択してから、「Desktop Edition」グループ内の個々の権限を選択します。これらの権限は Discoverer Desktop および Discoverer Plus に適用されます。

「説明」

このフィールドは、現在選択されている権限についての簡単な説明を表示します。

「システム プロファイルを選択してください。」

このドロップダウン・リストを使用して、ユーザーに適用するシステム・プロファイルを指定します。これにより、事前定義された権限のセットをユーザーおよびロールに適用できます。

- システム・プロファイルは Oracle 固有のものです。
- Oracle 以外のデータベースを使用している場合、このフィールドはグレー表示になります。

注意

- Oracle 以外のデータベースを使用している場合、ロールのラベルおよびシステム・プロファイルのフィールドは使用できません。
- 現在のユーザー ID が DBA_ROLES 表 (Oracle データベース) にアクセスできない場合、ドロップダウン・リストにはロールと職責の一部しか表示されません。
- 権限タイプ

権限名	説明
「Administration Edition の使用」	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、Discoverer Administrator にログインできます。Discoverer Administrator の各機能にユーザーがアクセスできるようにするには、このリストで個々の機能 (権限) を選択する必要があります。Administration の下にリストされている権限のいずれかを付与するには、このオプションが選択されている必要があります。
「ビジネスエリアの書式設定」	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、アクセスした既存のビジネスエリアの書式情報を編集できます。この書式情報には、フォルダ、結合およびアイテムが含まれます。この権限を付与されたユーザーまたはロールは、名前、説明、デフォルトの書式のマスクおよび配置を指定できます。
「ビジネスエリアの作成 / 編集」	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、ビジネスエリア、フォルダ、結合、ユーザー定義関数、条件、階層およびアイテム クラスを作成および修正できます。
「サマリーの作成」	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、Discoverer Administrator を使用してサマリー表を作成できます。データベースの resource 権限が必要です。
「権限の設定」	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、このダイアログを使用して、ユーザーおよびロール権限のメンテナンスおよび修正ができます。
「スケジュールの管理」	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、スケジュールされたワークブックのスケジュールの監視およびメンテナンスができます。
「Desktop Edition の使用」	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、Discoverer Desktop/Plus にログインできます。ユーザーが Discoverer Desktop/Plus の機能にアクセスできるようにするには、このリストから個々の機能を選択する必要があります。Discoverer Desktop/Plus にリストされた権限を付与するためには、このオプションを選択する必要があります。

権限名	説明
「問合せの作成 / 編集」	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、新規ワークシート（問合せ）の作成および既存のワークシートの修正ができます。この権限がない場合、ユーザーは既存の（事前に定義された）ワークブックとワークシートを開いて問合せを実行することのみが可能です。
「統計の収集」	この権限を付与すると、ユーザーがワークシート / ワークブック（問合せ）を実行したときにパフォーマンス統計が保存されます。この情報は、問合せ統計機能が設定されている場合にのみ収集されます。
「アイテム ドリルの使用」	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、ワークシートで詳細情報および関連情報にドリルできます。この権限を付与する以外にも、ユーザーがこの機能を使用できるようになるまでに「アイテム クラス ウィザード」を使用してドリルを作成する必要があります。
「ドリル アウト」	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、ワークシートでアイテムをドリルして別のアプリケーションを起動し、関連情報を参照できます。この権限を付与する以外にも、ユーザーがこの機能を使用できるようになるまでに「アイテム クラス ウィザード」を使用してドリルを作成する必要があります。
「ワークブックのアクセス管理」	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、自分のワークブックを実行したり閲覧したりできる権限を、他のユーザーに付与できます。
「ワークブックのスケジュール設定」	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、予定した時刻または定期的な間隔（毎日、毎週、毎月など）でワークブックを実行するようにスケジュールできます。
「ワークブックをデータベースに保存」	この権限を付与されたユーザーまたはロールは、作成したワークブックをデータベースに保存できます。ワークブックは、デフォルトでユーザーのディスクドライブに保存されます。

「権限」ダイアログ:「問合せ管理」タブ

指定されたユーザーまたはロールの問合せ構成を表示または編集するには、このタブを使用します（Oracle Applications ユーザーでは、ロールは職責に置き換えられています）。たとえば、ユーザー jchan が取り出すことができる行数を制限します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「情報に対するアクセス制御」](#)

「表示対象」

「ユーザー」

このチェックボックスを使用して、右側のドロップダウン・リストにユーザーを表示します。

「ロール」

このチェックボックスを使用して、右側のドロップダウン・リストにロールを表示します。

「ロール」チェックボックスは、Oracle データベースを使用する場合にのみ使用可能です。

（「ユーザー」/「ロール」ドロップダウン・リスト）

このドロップダウン・リストを使用して、権限の制限を構成するユーザーまたはロールを選択します。たとえば、jchan を選択して、「問合せ管理」エリアに jchan の問合せ制限の設定を表示します。

「設定時間を超えると予測される問合せを警告」

問合せに指定された時間よりも長い時間がかかる場合、このフィールドを使用して、Discover エンド・ユーザーに警告を表示します。

この権限は Oracle データベースを使用した場合にのみ使用可能です。

「設定時間で問合せを中断」

このフィールドを使用して、選択したユーザーの問合せ時間を制限します。

「取り出し可能件数の上限を設定」

このフィールドを使用して、ユーザーの問合せから戻される行数を制限します。ここで設定される限界は、最大値です。エンド・ユーザーはこれより小さい限界を設定できます。問合せが、管理者またはエンド・ユーザーによって設定された最大レコード数に達した場合、問合せは終了し、それまでに取り出されたデータはエンド・ユーザーに戻されます。たとえば、このチェックボックスを選択し、1000 という値を入力した場合、Discoverer エンド・ユーザーのワークシートには、問合せからの最初の 1000 行のみが表示されます。

「権限」 ダイアログ：「スケジュールされたワークブック」 タブ

このタブを使用して、指定されたユーザーまたはロールのスケジュールされたワークブックの設定を指定します（Oracle Applications ユーザーではロールは職責で置き換えられています）。たとえば、ユーザーがスケジュールできるワークブックの数を制限したり、スケジュールされたワークブックの有効期限を定義します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ワークブックのスケジュール」](#)

[「Discoverer およびセキュリティ」](#)

「スケジュール権限を表示する対象」

このドロップダウン・リストを使用して、スケジュールされたワークブック設定の指定対象のユーザーまたはロールを選択します。たとえば、**jchan** を選択し、**jchan** のスケジュールされたワークブックの設定を表示します。

注意： スケジュールされたワークブック権限を持たないユーザーまたはロールを選択した場合、構成の詳細は使用できません。ユーザーまたはロール（職責）にこの能力を与えたい場合は、[第7章「特定の作業を実行するユーザーまたはロール（職責）の指定方法」](#)を参照してください。

「結果を格納する表がデータベース上に作成されます。表の所有者を選択してください。」

このドロップダウン・リストを使用して、スケジュールされたワークブックの表を所有する、データベース・ユーザーのユーザー名を選択します。

「次の場合、問合せをスケジュールして実行するようにユーザーに求める」

「すべての問合せ」

Discoverer エンド・ユーザーが問合せを実行する場合に、必ずスケジュールされたワークブック機能を使用するようにする場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

「求めない」

エンド・ユーザーが問合せを実行する場合に、スケジュールされたワークブック機能の使用を自由に選択できるようにするには、このラジオ・ボタンを使用します。

「設定時間を超えると予測される場合」

問合せの実行時間が、「分」フィールドで指定された値を超えると予測される場合に、ユーザーがスケジュールされたワークブックを使用する場合は、このラジオ・ボタンを使用します。

「スケジュールできるワークブックの最大数」

このチェックボックスを使用して、ユーザーがスケジュールできるワークブックの最大数を指定します。このオプションを使用して、DBMS_JOB キューの使用を管理し、システムのオーバーロードを防止します。

「結果の失効」

このチェックボックスを使用して、スケジュールされたワークブックの結果の存続時間を制限します。削除対象の結果は、ユーザーが EUL から切断されたときに削除されます。

「コミット単位サイズ」

このチェックボックスを使用して、Discoverer によるスケジュールされたワークブックの処理時に、結果表に一度にコミットされる行数を指定します。結果セットが大きい場合、コミット単位サイズをデフォルトよりも高く設定することにより、パフォーマンスが向上します。

「スケジュール可能な時間帯」

このチェックボックスを使用して、ユーザーがワークブックをスケジュールできる時間帯を指定します。これにより、利用者の多い時間帯にワークブックがスケジュールされることを防止できます。

「権限」ダイアログ:「権限→ユーザー」タブ

このタブを使用して、ユーザーおよびロールに対して特定の権限を構成します。次に例を示します。

- 管理権限を持つユーザーおよびロールを調べます
- ロールのグループが「ワークブックをデータベースに保存」権限を持っていることを確認します
- 指定されたユーザーのドリル・アウト権限を取り消します

Oracle Applications ユーザーの場合はロールではなく職責を使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Discoverer およびセキュリティ」](#)

「権限」

このドロップダウン・リストを使用して、確認する権限を選択します。たとえば、「ワークブックをデータベースに保存」を選択して、「表示」リストにこの権限を持つユーザーおよびロールを表示します。

「表示」

「ユーザー」

ユーザーの権限を確認するには、このチェックボックスを使用します。

「ロール」

ロールの権限を確認するには、このチェックボックスを使用します。このオプションは Oracle データベースを使用した場合にのみ使用可能です。

(「ユーザー」/「ロール」ドロップダウン・リスト)

このリストには、現在選択されている権限を持つユーザーおよびロールが表示されます。このリストは、「権限」リストで新しい権限が選択されると更新されます。

- 権限を付与するには、現在選択されている権限を必要とするユーザーまたはロールの隣のチェックボックスを選択します。
- 権限を取り消すには、現在選択されている権限を必要としないユーザーまたはロールの隣のチェックボックスの選択を解除します。

「権限の説明」

このボックスには、現在選択されている権限についての追加情報が表示されます。

「プロパティ」ダイアログ

[「ビジネスエリア プロパティ:」ダイアログ](#)

[「条件プロパティ」ダイアログ](#)

[「フォルダ プロパティ」ダイアログ](#)

[「アイテム プロパティ」ダイアログ](#)

[「結合プロパティ」ダイアログ](#)

[「サマリー プロパティ」ダイアログ](#)

「ビジネスエリアのリフレッシュ」ダイアログ

このダイアログを使用して、現行ビジネスエリアの中のフォルダおよびアイテムと、リンク先のデータベースの中のソース表の間で検出された相違を確認します。たとえば、ソース・データベースで新しい主キーが検出された場合、このダイアログを使用して、ビジネスエリアの中で修正し、リフレッシュを続行できます。また、ビジネスエリア内のその他のオブジェクトに対する変更の影響も評価できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ビジネスエリアの作成とメンテナンス」](#)

[「ビジネスエリアとデータベースの同期化方法」](#)

「名前」

このフィールドは、相違しているアイテムの名前を表示します。

「タイプ」

このフィールドは、発生した変更のタイプを表示します。たとえば、ソース表に新しい外部キーが見つかった場合などです。

「アクション」

このフィールドは、リフレッシュを実行することによるオブジェクトへの影響を表示します。チェックボックスを使用して、アクションをオンまたはオフに切り替えることができます。

「OK」

選択したオプションを使用してリフレッシュを開始するには、このボタンを使用します。

「影響 ...」

「影響」ダイアログを表示するには、このボタンを使用します。「影響」ダイアログには、このビジネスエリアをリフレッシュしたときに、影響を受けるまたは削除されるすべてのオブジェクトのリストが表示されます。

「サマリーのリフレッシュ」ダイアログ

このダイアログを使用して、現在選択されているサマリーをリフレッシュします。リリース 8.1.7 以上のデータベースでは、利用できれば、増分リフレッシュが指定できます（条件については、Oracle9i データベースのマニュアルを参照してください）。

サマリー・フォルダ・リフレッシュの詳細は、次を参照してください。

[「ASM の機能」](#)

[「サマリー・データをリフレッシュする理由」](#)

[「サマリー・フォルダのリフレッシュ時に行われる処理」](#)

「いつサマリーをリフレッシュしますか？」

「今すぐサマリーをリフレッシュする」

選択したサマリーを即時にリフレッシュするには、このラジオ・ボタンを使用します。「OK」をクリックするとリフレッシュが開始されます。

このオプションは、サマリー表が小さい場合またはデータベース・サーバーのスケジューリング機能に依存せずにサマリー・フォルダを即時にリフレッシュする必要がある場合に便利です。Discoverer Administrator には、リフレッシュをモニターするための進行状況バーが表示されます。

「リフレッシュをスケジュールする」

このラジオ・ボタンを選択すると「日付」および「時刻」フィールドが強調表示されます。矢印ボタンを使用するか、フィールドに入力してリフレッシュする日時を選択します。

このオプションでは DBMS_JOB を使用してジョブをキューに送った後、ただちに Discoverer Administrator に戻るため（リフレッシュが完了するのを待たない）、ユーザーは作業を続行できます。このオプションは、サマリー表が大きいために利用者が多い時間帯を避けて実行する場合に便利です。

「増分リフレッシュを実行」

Oracle 8.1.7 以上のデータベースでのみ使用可能な増分リフレッシュを実行するには、このチェックボックスを選択します。

増分リフレッシュは、表に挿入された新規データを段階的に追加するため、完全リフレッシュよりも高速です。

Oracle 8.1.5 以前のデータベースでは、サマリー・リフレッシュ時に全表検索が実行されません。

全表検索を使用してサマリーをリフレッシュするには、このチェックボックスを選択解除します。

注意

- リフレッシュが完了するまでにかかる時間は、データ量と現在のデータベース・エンジンの負荷によって異なります。
- 増分リフレッシュに必要な条件の詳細は、『Oracle9i データ・ウェアハウス・ガイド』を参照してください。

「サマリー・フォルダのリフレッシュ」ダイアログ

このダイアログを使用して、サマリー・フォルダのリフレッシュの日付と時刻を設定します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「サマリー ウィザード ステップ 4」ダイアログ

「サマリー ウィザード ステップ 5」ダイアログ

「サマリー ウィザード ステップ 6」ダイアログ

「サマリーの編集」ダイアログ: 「リフレッシュ」タブ

サマリー・フォルダのリフレッシュの詳細は、次のトピックを参照してください。

[「ASM の機能」](#)

[「サマリー・データをリフレッシュする理由」](#)

[「サマリー・フォルダのリフレッシュ時に行われる処理」](#)

Discoverer によりリフレッシュされるサマリー・フォルダ（Discoverer のサマリー表またはマテリアライズド・ビューに基づく）の場合

Discoverer によりリフレッシュされるサマリー・フォルダの場合、サマリーを自動的にリフレッシュするかどうかを指定できます。その場合、リフレッシュを繰り返す日付と時刻および間隔を指定できます。

「Discoverer によってこのサマリーフォルダがリフレッシュされたのはいつですか？」

(読取り専用) このフィールドは、最後のリフレッシュの日付と時刻を表示します。

「次の日時からこのサマリーフォルダを自動リフレッシュ」

このチェックボックスを使用して、このサマリー・フォルダのリフレッシュを行う日付、時刻および繰り返しの間隔を指定します。

別のアプリケーションによりリフレッシュされるサマリー・フォルダ (外部サマリー表に基づく) の場合

別のアプリケーションでリフレッシュされるサマリー・フォルダ (外部サマリー表に基づく) の場合は、Discoverer でサマリー・フォルダを自動的にリフレッシュするかどうかを指定できます。その場合は、リフレッシュを繰り返す日付、時刻および間隔を指定します。

「このサマリー・フォルダのリフレッシュを管理」

このサマリー・フォルダのリフレッシュを Discoverer で管理するには、このチェックボックスを使用します。

注意：このオプションを使用した場合、外部サマリーに関する全制御を Discoverer に託すことになりますので注意してください。たとえば、管理される外部サマリーに基づくサマリー・フォルダを削除した場合は、外部サマリーも削除されます。

「このサマリー・フォルダが最後にリフレッシュされたのはいつですか？」

「日付 / 時刻」

このフィールドを使用して、サマリー・データが最後にリフレッシュされた時刻と日付を入力します。Discoverer はこの情報を使用して、サマリー・データを使用するかどうかを判断します。

「次の日時からこのサマリー・フォルダを自動リフレッシュ」

このチェックボックスを使用して、このサマリー・フォルダのリフレッシュを行う日付、時刻および繰り返しの間隔を指定します。

「リフレッシュ ウィザード」 ダイアログ

このウィザードを使用して、現行 End User Layer 内のビジネスエリアをリフレッシュします。

「リフレッシュ ウィザード ステップ 1」

このダイアログを使用して、ビジネスエリアのリフレッシュ方法を指定します。たとえば、Oracle データベースを使用している場合に、オンライン・ディクショナリからリフレッシュします。

「オンライン・ディクショナリ」

ビジネスエリアの基礎となっている Oracle データベース表からビジネスエリアをリフレッシュするには、このラジオ・ボタンを使用します。

「ゲートウェイ」

ドロップダウン・リストで選択したソースからビジネスエリアをリフレッシュするには、このラジオ・ボタンを使用します。

「完了」

オンライン・ディクショナリからリフレッシュ処理を開始するには、このボタンを使用します。

注意

- 「ゲートウェイ」チェックボックスを選択した場合は、「次へ」をクリックして「リフレッシュ ウィザード ステップ 2」を表示します。

「リフレッシュ ウィザード ステップ 2」

このダイアログを使用して、リフレッシュに使用するゲートウェイ・アプリケーションを選択します。

「リフレッシュを行ないます。比較の元となるアプリケーションを選択してください。」

このリストを使用して、現行 EUL のソースとして使用しているゲートウェイ・アプリケーションを選択します。

「完了」

このボタンを使用して、選択したゲートウェイ・アプリケーションからリフレッシュ処理を開始します。

「リポジトリ ユーザー」ダイアログ

全ての Discoverer ユーザーが利用できる 1 つのデータベース・ユーザーを作成するか、データベース・ユーザーごとに異なるリポジトリを作成することができます。1 つのデータベース・ユーザーを使用することの利点は、各エンド・ユーザーがスケジュールされたワークブックの処理に他の権限を必要としないことです。ただし、割当て領域が共有のため、1 人のユーザーが領域をすべて使い果たしてしまう可能性があるという短所があります。複数のリポジトリ・ユーザーを使用すると、管理する事項が多くなります。

「職責の選択」ダイアログ

「職責」ダイアログを使用して、Oracle Applications の EUL に接続するときの Oracle Applications の職責を選択します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「Discoverer を Oracle Applications とともに使用する方法」](#)

「職責」リスト

このリストを使用して、データベースへの接続に使用する職責を選択します。

「OK」

このボタンを使用して、選択した職責に従ってデータベースに接続します。

「スケジュールされたワークブック」ダイアログ:「一般」タブ

このダイアログは次の目的で使用します。

- スケジュールされたワークブックの説明の編集
- Discoverer でスケジュールされたワークブックが処理される間隔および結果が自動的に削除される間隔の指定

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ワークブックのスケジュール」](#)

「スケジュール済みワークブックの名前:」

この読取り専用フィールドは、スケジュールされたワークブックの名前を表示します。

「説明」

(オプション) このフィールドを使用して、スケジュールされたワークブックの追加情報を入力します。Discoverer エンド・ユーザーは、この情報を使用して、開くワークブックを判断します。

「スケジュールされたワークブックは、実行されるごとに結果を保存します。すべての結果を保存しておきますか？」

「はい、すべての結果を保存します。」

新しい結果セットが作成されたときに結果セットを削除しない場合は、このラジオ・ボタンを使用します。たとえば、月次レポートの場合、3 月の結果セットが作成されたときに、1 月および 2 月の結果セットを削除しないようにします。

「いいえ、最新の結果のみ保存します。」

新しい結果セットが作成されたときに古い結果セットを削除する場合は、このラジオ・ボタンを使用します。たとえば、月次レポートの場合、2 月の結果セットが作成されたときに、1 月の結果セットを削除します。

「結果を自動削除:」

このスピン・ボックスを使用して、このワークブックの実行日と、ワークブックの結果を自動的に削除する間隔を日数で指定します。たとえば、週次レポートの結果セットを 7 日ごとに削除します。

「スケジュールされたワークブック」ダイアログ:「スケジュール」タブ

スケジュールされたワークブックを Discoverer で処理する場合は、このダイアログを使用します。たとえば、毎週日曜日の午前 1:00 に Discoverer でワークブックを処理することができます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ワークブックのスケジュール」](#)

「含まれているワークシート」

現在選択されているスケジュールされたワークブックに含まれているすべてのシートをリストします。

「ワークブックを実行する日時」

次のフィールドを使用して、スケジュールされたワークブックを Discoverer で処理する日時を指定します。

「時刻」

このスピン・ボックスを使用して、スケジュールされたワークブックを Discoverer で処理する時間を指定します。デフォルトでは現在の時刻が表示されます。

「日付」

このスピン・ボックスを使用して、スケジュールされたワークブックを Discoverer で処理する日付を指定します。デフォルトでは現在の日付が表示されます。

「どのくらいの間隔で問い合わせを実行しますか。」

このフィールドを使用して、スケジュールされたワークブックを Discoverer で処理する頻度を指定します。

「無期限」

スケジュールされたワークブックを一度のみ Discoverer で処理するには、このラジオ・ボタンを使用します。たとえば、マネージャから要求された不定期のレポートの場合です。

「間隔」

スケジュールされたワークブックを定期的な間隔で Discoverer で処理するには、このラジオ・ボタンを使用します。たとえば、1 日に 1 度または 1 月に 1 度です。

「セキュリティ」ダイアログ:「ビジネスエリア → ユーザー」タブ

このタブを使用して、1つのビジネスエリアに対する複数のユーザー・アクセス権の付与または取消しを行います。たとえば、Discoverer エンド・ユーザーのグループに、Video Store Tutorial ビジネスエリアへのアクセス権を付与して、このビジネスエリアを Discoverer Plus チュートリアルでできるようにします。

複数のビジネスエリアに対する単一ユーザー・アクセス権を同時に付与するには、「[セキュリティ](#)」ダイアログ:「[ユーザー → ビジネスエリア](#)」タブを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「情報に対するアクセス制御」](#)

「ビジネスエリア」

このドロップダウン・リストを使用して、アクセス権の付与対象のビジネスエリアを選択します。このリストは、現在開いているビジネスエリアを含みます。アクセス権の付与対象のビジネスエリアが表示されていない場合には、Discoverer に再接続して、そのビジネスエリアを開いてください。

「選択可能なユーザー / ロール」

このリストを使用して、選択したビジネスエリアに対するアクセス権を付与するユーザーおよびロールを指定します。アクセス権を付与するには、ユーザー名およびロールを「選択可能なユーザー / ロール」リストから「選択されたユーザー / ロール」リストへ移動します。

「選択されたユーザー / ロール」

このリストを使用して、選択したビジネスエリアへのアクセス権をどのユーザーが所有しているか、確認します。アクセス権を取り消すには、ユーザー名およびロールを「選択されたユーザー / ロール」リストから「選択可能なユーザー / ロール」リストへ移動します。

「表示」

「ユーザー」

「選択可能なユーザー / ロール」リストの中に Discoverer ユーザーを表示するには、このチェックボックスを使用します。

「ロール」

「選択可能なユーザー / ロール」リストの中に Discoverer ロールを表示するには、このチェックボックスを使用します。

「管理を許可する」

右側のボックスにリストされたユーザーに対してアクセス権限と管理権限の両方を付与するには、このチェックボックスを使用します。ユーザーの管理権限に従って、ユーザーは付与されたビジネスエリアで操作を実行できます。

注意

- ビジネスエリア内のフォルダを表示する前に、Discoverer では、参照されるフォルダ内の表に対するデータベースのアクセス権をユーザーが所持しているかどうかを確認します。必要なアクセス権がない場合、Discoverer はフォルダを表示しません。このチェックは、レジストリの設定、「ObjectsAlwaysAccessible」の値を変更して上書きできます（詳細は、[第 22 章「Discoverer のレジストリ設定」](#)の中の「ObjectsAlwaysAccessible」を参照してください）。
- Oracle Applications ユーザーとしてログインした場合、ロールという用語は職責という用語で置き換えられます。
- [Ctrl] キーを押しながら別のユーザーまたはロールをクリックすると、複数のユーザーまたはロールを選択できます。

「セキュリティ」ダイアログ: 「ユーザー → ビジネスエリア」タブ

このタブを使用して、複数のビジネスエリアに対するユーザーのアクセス権の付与または取消しを行います。たとえば、新規の Discoverer エンド・ユーザーに、End User Layer 内の多数のビジネスエリアへのアクセス権を付与します。

単一ビジネスエリアに対して複数のユーザーにアクセス権を付与するには、「[セキュリティ](#)」ダイアログ: 「[ビジネスエリア → ユーザー](#)」タブを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「情報に対するアクセス制御」](#)

「ユーザー / ロール」

このドロップダウン・リストを使用して、アクセスを必要とするユーザーまたはロールを選択します。

「表示」

「ユーザー」

「ユーザー / ロール」リストの中に Discoverer ユーザーを表示するには、このチェックボックスを使用します。

「ロール」

「ユーザー / ロール」リストの中に Discoverer ロールを表示するには、このチェックボックスを使用します。

「選択可能なビジネスエリア」

このリストを使用して、選択されたユーザーまたはロールにアクセス権を付与するビジネスエリアを指定します。アクセス権を付与するには、「選択可能なビジネスエリア」リストから「選択されたビジネスエリア」リストへビジネスエリアを移動します。

「選択されたビジネスエリア」

このリストを使用して、選択されたユーザーまたはロールがアクセス権を所持しているビジネスエリアを確認します。アクセス権を取り消すには、「選択されたビジネスエリア」リストから「選択可能なビジネスエリア」リストへビジネスエリアを移動します。

「管理を許可する」

選択されたユーザーに、選択されたビジネスエリアに対するアクセス権限と管理権限の両方を付与するには、このチェックボックスを使用します。

注意

- ビジネスエリア内のフォルダを表示する前に、Discoverer では、参照されるフォルダ内の表に対するデータベースのアクセス権をユーザーが所持しているかどうかを確認します。必要なアクセス権がない場合、Discoverer はフォルダを表示しません。このチェックは、レジストリの設定、「ObjectsAlwaysAccessible」の値を変更して上書きできます (詳細は、第 22 章「Discoverer のレジストリ設定」の中の「ObjectsAlwaysAccessible」を参照してください)。
- Oracle Applications ユーザーとしてログインした場合、ロールという用語は職責という用語で置き換えられます。
- [Ctrl] キーを押しながら別のビジネスエリアをクリックすると、複数のビジネスエリアを選択できます。

「デフォルト EUL の選択」ダイアログ

Discoverer Administrator に接続したときに、デフォルトでアクセスする EUL を選択するには、このダイアログを使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「End User Layer の作成とメンテナンス」](#)

「デフォルト EUL を選択してください」

このリストを使用して、デフォルトの End User Layer を選択します。Discoverer にログイン（現行のユーザー ID で）するたびに、この EUL に自動的に接続されます。

「階層を構成するアイテムを選択」ダイアログ

Discoverer のワークブックで使用するために階層に含めるアイテムを作成または編集するには、このダイアログを使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「階層ウィザードステップ 2」ダイアログ

「階層の編集」ダイアログ: 「アイテム」タブ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「階層」](#)

[「アイテム階層」](#)

「この階層を構成するアイテムを選択してください。」

このドロップダウン・リストを使用して、階層で使用するアイテムを含むビジネスエリアを選択します。

次に、下の拡張可能なリストを使用して、1 つ以上のアイテムを選択します。階層にアイテムを追加するには、左側のリストから右側のリストへアイテムを移動します。

「説明 :」

このフィールドは、右側のリストで現在選択されているアイテム書式の簡単な説明を表示します。

「昇格」

このボタンを使用して、選択したアイテムを 1 レベル上の階層に移動します。

「降格」

このボタンを使用して、選択したアイテムを 1 レベル下の階層に移動します。

「グループ化」

このボタンを使用して、選択したアイテムを同一レベルの階層に配置します。グループ化されたアイテムを使用すると、1 つのアイテムから 2 レベルのディテールにドリルできます。たとえば、「製品」から「説明」と「詳細説明」の両方にドリルできます。

「グループ解除」

このボタンを使用して、選択したアイテムのグループ化を解除します。これは、同一レベルの階層ではなくなることを意味します。

注意

[Ctrl] キーを押しながらアイテムをクリックすると、複数のアイテムを選択できます。

「ワークエリア」：「サマリー」 タブ

このタブを使用して、(ビジネスエリア別に並べた) EUL 内のサマリー・フォルダを管理します。ここでは次の処理を行うことができます。

- 新規サマリー・フォルダの作成
- サマリー・フォルダの編集
- サマリー・フォルダのリフレッシュ
- サマリー・フォルダの削除
- サマリー・フォルダのプロパティの確認

詳細は、次の項目を参照してください。

[「ワークエリア」](#)

[「Discoverer のフォルダとサマリー・フォルダ」](#)

「サマリー」 タブ

このリストを使用してサマリー・フォルダを選択します。

サマリー・フォルダで使用可能なオプションのリストを表示するには、サマリー・フォルダを表すキューブ・アイコンを右クリックします。

表 24-5 Discoverer でサマリー・フォルダを表す方法

サマリー・フォルダ	Discoverer でサマリー・フォルダを表す方法
有効なサマリー・フォルダ	時計文字盤が付いたキューブ・アイコン
有効な外部サマリー・フォルダ	キューブ・アイコン
破損したサマリー・フォルダ	警告の黄色い三角形が付いたキューブ・アイコン

注意

- サマリーをリフレッシュするときに「このユーザーは、CREATE ANY MATERIALIZED VIEW システム権限を必要とします。」というメッセージが表示された場合は、サマリーをリフレッシュするために必要な権限がありません。必要な権限を付与するには、次のステップを使用します。
 - Discoverer Administrator からログアウトします。
 - データベース管理者のユーザー名とパスワードを使用してログインし、Oracle SQL*Plus を実行します。

- 次の SQL スクリプトを実行します。
`<ORACLE HOME>%discoverer902%Sql%eulasm.sql`
- Discoverer Administrator を再起動します。
- Discoverer がサマリー表、マテリアライズド・ビューまたはディテール表を使用できない場合、サマリー・フォルダは破損しているものと判断されます。サマリー・フォルダが破損した原因の詳細を確認するには、「表示」、「フォルダの妥当性チェック」オプションの順に選択します。破損したサマリー・フォルダを編集してその構成を調査し、破損したフォルダを削除できます。

「サマリー プロパティ」 ダイアログ

このダイアログを使用して、サマリー・フォルダを表示および構成します。たとえば、サマリーの状態を確認する、またはサマリーの次回リフレッシュ日付を変更します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

[「サマリー・フォルダ」](#)

[「Discoverer サマリー表」](#)

[「マテリアライズド・ビュー」](#)

[「サマリー・データをリフレッシュする理由」](#)

「名前」

このフィールドを使用して、新しいサマリー・フォルダの名前を入力します。

「説明」

このフィールドを使用して、サマリー・フォルダの新しい説明を入力します。ここで追加情報を指定できます。

「タイプ」

(読取り専用) このフィールドにはサマリーのタイプが表示されます。

■ 管理サマリー・フォルダ

管理サマリー・フォルダでは、指定した間隔でデータをリフレッシュできます。管理サマリー・フォルダには、多数の組合せを含めることができます。Discoverer により必要な表が作成され、ユーザーは表、列名、および作成しようとする表の記憶領域のプロパティに関するすべてを指定できます。また、表を事前に作成し、Discoverer に表の所有者と表名を通知することもできます。

■ 外部サマリー・フォルダ

外部サマリー・フォルダには、Discoverer 以外のアプリケーションで作成した表が含まれています。列名とアイテム名は、Discoverer で作成した表とは異なる場合があります。このオプションを使用して、外部表を登録し、表の列を End User Layer の中のアイテムにマップします。Discoverer がサマリーの管理を引き継ぐように指定すると、表を移入でき、そのデータをリフレッシュしてサマリー表の管理を継続できます。

「問合せで使用可能」

このフィールドを使用して、Discoverer Desktop/Plus の問合せ実行でサマリーを使用できるかどうかを指定します。たとえば、Discoverer エンド・ユーザーが、サマリー内に 1 つ以上のアイテムを表示するワークシートを開く場合に使用します。

「状態」

(読取り専用) このフィールドでは、サマリーのライフ・サイクル内の現在地点を表します。問合せで使用できるのは、完了しているサマリーのみです (詳細は、次の「[注意](#)」を参照してください)。

「最後のリフレッシュ」

(読取り専用) このフィールドには、サマリー表がデータベースから最新のデータを受け取った最後の日付が表示されます。このフィールドは管理サマリー・フォルダの場合にのみ使用されます。

「次のリフレッシュ」

サマリー表がデータベースから最新の表を受け取る、次回の日付を変更するには、このフィールドを使用します。このフィールドは管理サマリー・フォルダの場合にのみ使用されます。

「リフレッシュ間隔」

このサマリーがデータベースから最新データを受け取る頻度を変更するには、このフィールドを使用します。このフィールドは管理サマリー・フォルダの場合にのみ使用されます。

「識別子」

このフィールドを使用して、Discoverer で EUL およびワークブック・オブジェクトの識別に使用される一意な名前を変更します。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、異なる EUL 内にある、同じビジネス・オブジェクトを参照するオブジェクト (概念的に同一のオブジェクトとも呼ばれる) を検索します。

「自動的に変更を保存」

プロパティ・フィールドが更新されるたびに変更を保存するには、このチェックボックスを使用します。

注意

- 次のリストは、「状態」フィールドに表示される値の意味を説明しています。
 - 「保留」

サマリーのリフレッシュは、DBMS_JOB キューにスケジュール済みですが、実行は開始されていません。
 - 「作成中」

サマリーをリフレッシュするジョブが開始され、サマリー表に行が挿入されています。
 - 「使用不可」

最初のサマリー作成後、最初のリフレッシュ前（Oracle 8.1.7 以降のデータベース）。
 - 「古い」

マテリアライズド・ビューに関して、サマリー・データはディテール・データと一貫性がありません（8.1.7 以上のデータベース）。
 - 「完了」

サマリー・フォルダは完成し、使用する準備が整いました。
 - 「失敗」

サマリーをリフレッシュするジョブに失敗し、データベース・エラーが表示されます。
 - 「要リフレッシュ」

サマリー・フォルダを使用する前に、エンド・ユーザーによるリフレッシュが必要です。これは通常、Discoverer 管理者がフォルダ、アイテムまたは結合の定義を、サマリーの再計算を必要とする方法で変更した場合にのみ発生します。リフレッシュが必要なサマリーでは次の理由が表示されることがあります。

 - 「データベースのバージョンと互換性がありません」－マテリアライズド・ビューの EUL 定義は、データベースのバージョンとの互換性はありません。この問題は、異なるバージョンのデータベース間で EUL のエクスポート / インポートが発生した場合に起こる可能性があります。たとえば、Oracle 8.1.5 データベースから Oracle 8.1.7 データベースへの場合です。
 - 「EUL が変更されました」－依存 EUL アイテムの定義が変更されています。たとえば、サマリー内のアイテムの計算式です。
 - 「サーバーが変更されました」－データベースでのマテリアライズド・ビューの定義は EUL の定義と一貫性がありません（8.1.7 以上のデータベース）。

- 「外部」

すべての外部サマリーに適用されます。

「サマリー ウィザード (ASM)」 ダイアログのリスト

サマリー ウィザードでは自動サマリー管理機能を使用して、最小限の手動作業で、適切なサマリーを作成および保守できます。

ASM サマリー ウィザードの各ダイアログの詳細は、次のトピックを参照してください。

[「サマリー ウィザード ステップ 1」 ダイアログ](#)

[「サマリー ウィザード \(ASM\)」 : ステップ 2 「フォルダの分析」 ダイアログ](#)

[「サマリー ウィザード \(ASM\)」 : 「デフォルト設定の変更」 ダイアログ : 「ダイアログのリスト」 タブ](#)

[「サマリー ウィザード \(ASM\)」 : ステップ 3 「領域の割当て」 ダイアログ](#)

[「サマリー ウィザード \(ASM\)」 : 「分析不能」 ダイアログ](#)

[「サマリー ウィザード \(ASM\)」 : 「推奨サマリー」 ダイアログ](#)

「サマリー ウィザード (ASM)」：「デフォルト設定の変更」ダイアログ：「ダイアログのリスト」タブ

ASM では「詳細設定」内の事前設定されたデフォルト値により、ユーザーの必要性にあわせた最適なサマリーのセットを作成および維持できます。必要であれば、デフォルト値をさらに調整して、ASM でサマリーが作成および維持される方法を変更できます。

「詳細設定」は、データベース内のどのオブジェクトを ASM 処理に含めるかを定義し、ASM から作成される結果に影響します。

「詳細設定」（「デフォルト設定の変更」ダイアログ）には、次のタブが表示されます。

「サマリー ウィザード (ASM)」：「デフォルト設定の変更」ダイアログ：「分析」タブ

「サマリー ウィザード (ASM)」：「デフォルト設定の変更」ダイアログ：「フォルダ」タブ

「サマリー ウィザード (ASM)」：「デフォルト設定の変更」ダイアログ：「ユーザーの問合せ」タブ

「サマリー ウィザード (ASM)」：「デフォルト設定の変更」ダイアログ：「問合せの使用方法」タブ

「サマリー ウィザード (ASM)」：「デフォルト設定の変更」ダイアログ：「削除」タブ

「サマリー ウィザード (ASM)」：「デフォルト設定の変更」ダイアログ：「フォルダ」タブ

このタブを使用して、ASM によって分析するフォルダを指定します。デフォルトではすべてのフォルダが含まれています。たとえば、大規模なデータ・ウェアハウスを使用する場合に、分析時間の短縮に最も重要なフォルダ（たとえばファクト表）のみの分析に使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「選択可能」

このリストは、ASM 分析に含めないフォルダを表示します。「選択可能」リストから「選択済み」リストにフォルダを移動して、分析するフォルダを選択します。

「選択済み」

このリストは、ASM 分析に含めるフォルダを表示します。「選択済み」リストから「選択可能」リストにフォルダを移動して、ASM 分析の対象からフォルダを除外します。

注意

[Ctrl] キーを押しながら他のフォルダをクリックすると、複数のフォルダを選択できます。

「サマリー ウィザード (ASM)」：「デフォルト設定の変更」ダイアログ：「分析」タブ

このタブを使用して、分析するフォルダおよび最適化レベルを指定します。たとえば、まだ分析されていないフォルダのみでなく、全フォルダに対して完全分析を実行する場合に使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「選択されたフォルダをどのように分析しますか？」

「分析されていないフォルダのみ分析」

以前にいくつかのフォルダを部分的に分析してある場合に、残りのフォルダを分析するには、このラジオ・ボタンを使用します。「xx 日後」フィールドで指定された周期よりも長くサマリー・データが保持されている場合は、このデータも再分析されます（「xx 日後」を参照）。

「すべてのフォルダを分析」

EUL 内のすべてのフォルダを分析するには、このラジオ・ボタンを使用します。

「フォルダの分析結果をいつ無効にしますか？」

「xx 日後」

分析済みのサマリー・データの使用期間を指定するには、このフィールドを使用します。この周期の経過後、ASM を実行するとフォルダは再分析されます。デフォルト値は 30 日です。

「分析結果をどのように最適化しますか？」

分析の速度を速めるまたは分析するフォルダの範囲を広げるには、このスライド・バーを使用します。

「最大速度」

このレベルでは、フォルダの約 10% が分析されます。このレベルでは、あまり長い時間をかけずにサマリーの基本セットが作成されます。たとえば、大規模なデータ・ウェアハウスの分析時間の短縮に使用します。

「通常」

このレベルでは、速度と範囲のバランスを同程度に保ちます。

「高精度」

このレベルでは、100% のフォルダが分析されます (デフォルト設定)。この設定値を使用すると、ASM により幅広い範囲のサマリーを作成できます。たとえば、比較的小規模なデータ・ウェアハウスの場合または分析時間が問題にならない場合に使用します。

「サマリー ウィザード (ASM)」: 「デフォルト設定の変更」 ダイアログ: 「削除」 タブ

古くなったサマリー・データをページ（または削除）する方法を構成するには、このタブを使用します。たとえば、データベース中の使用可能領域の増加に使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「次の場合、特定のサマリー・フォルダを削除」

「前回の問合せからの期間 _ 日以上」

Discoverer エンド・ユーザーによって最後に使用された日付が、指定された日数よりも前の場合に、サマリー・フォルダを削除するには、このフィールドを使用します。たとえば、7 日間以上使用されていないサマリー・フォルダを削除する場合に使用します。

「作成されてからの期間 _ 日以上」

指定された時間よりも前に作成されていた場合にサマリー・フォルダを削除するには、このフィールドを使用します。たとえば、2 週間以上前に作成されたサマリー・フォルダを削除する場合に使用します。

「平均使用回数が _ 回以下」

サマリー・フォルダのページを厳密に制御する場合は、このフィールドを使用します。たとえば、最後の 2 週間で、使用された回数が 1 週間に 10 回未満であったサマリー・フォルダを削除する場合に使用します。

「常に次のサマリーを保持」

特定のサマリー・フォルダをページ対象から除外するには、このチェックボックスを使用します。たとえば、常に使用する必要のある重要なサマリー・フォルダを維持する場合に使用します。

「選択可能」

このリストには、ページから除外されないすべてのフォルダが表示されます。「選択可能」リストから「選択済み」リストにフォルダを移動して、ページ対象から除外するフォルダを選択します。

「選択済み」

このリストは、ページから除外されるフォルダを表示します。「選択済み」リストから「選択可能」リストにフォルダを移動して、除外対象から外すフォルダを選択します。

注意

- 外部サマリー・フォルダを「選択済み」列から移動することはできません。
- 外部サマリー・フォルダを「選択済み」から「選択可能」列に移動しようとする、警告メッセージが表示されます。サマリー・フォルダは「選択済み」列に残ったままになります。**Discoverer** には、外部サマリー・データがないため、削除しません。また、外部サマリー表に関連付けられたメタデータを削除しても得られる領域が少ないことも、これが行われない理由になります。

「サマリー ウィザード (ASM)」: 「デフォルト設定の変更」 ダイアログ: 「問合せの使用方法」 タブ

このタブを使用して、推奨サマリーに使用する問合せを選択します。たとえば、Discoverer Plus ユーザーの作業中に、特定の時間に実行された問合せのみを含める場合に使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「選択」

このドロップダウン・リストを使用して、ASM の考慮対象に含める問合せを定義します。

「すべての問合せ」

以前に実行したすべての問合せに基づいて推奨サマリーを設定するには、このオプションを使用します。

「前回の実行以降に行った問合せ」

前回 ASM を実行した後に行った問合せに基づいて推奨サマリーを設定するには、このオプションを使用します。

「特定の問合せ」

次に指定するような特定のタイミングで実行された問合せを考慮するには、このオプションを使用します。

- 過去 xx 日間に実行されたもの
- 分 / 日 / 週 / 月 / 年当り x 回以上実行されたもの
- 問合せの実行に x 秒以上かかったもの

ユーザーの問合せの性質を最も的確に反映する位置にスライドを移動します。

このスライド・バーを使用して、分析時に事前定義された問合せ（パフォーマンス）が優先されるか、またはアドホック（非定型）な問合せ（対象範囲）が優先されるかを決定します。

「事前定義済み」

ASM が保持しているサマリーを、過去の問合せを反映して最適化する場合は、この設定を使用します。つまり、以前の問合せとほとんど変わらない問合せの場合には、サマリーのパフォーマンスが大幅に向上します。

たとえば、以前に実行された問合せと 1 対 1 で対応する、5 つの完全一致のサマリーが ASM から推奨されます（利点があるものと ASM が判断）。

「混合」

事前定義の問合せとアドホックの問合せの中間（デフォルト）です。

「アドホック」

以前に実行されたことがなく、以前のシステム使用例と緊密に関連している問合せによる潜在的なパフォーマンスの向上を期待して、サマリーの対象範囲を拡大するには、この設定を使用します。しかし、この方法には、以前に実行された個々の問合せのパフォーマンス向上はさほど見込めないという短所があります。

たとえば、ASM は 5 つの完全一致のサマリーを組み合わせ、より少ない数だが汎用性の高いサマリーを作成します。これにより、以前に実行された 5 つの問合せのみでなく、その他の多数の潜在的な問合せが利益を享受できます（全体的な適用範囲に関して利点があります）。

「サマリー ウィザード (ASM)」: 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「ユーザーの問合せ」タブ

ASM の処理で、選択されたユーザーからパフォーマンス統計の問合せ (QPP) を使用するには、このダイアログを使用します。たとえば、ASM を、Discoverer Plus の使用時に最大限のパフォーマンスを必要とするユーザーのサブセットに基づくものにします。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「選択可能」

このリストは、ASM の処理に含めないユーザーを表示します。「**選択可能**」リストから「**選択済み**」リストにユーザーを移動して、分析するユーザーを選択します。

「選択済み」

このリストは、ASM の処理に含めるユーザーを表示します。「**選択済み**」リストから「**選択可能**」リストにユーザーを移動して、ASM の処理からユーザーを除外します。

注意

[Ctrl] キーを押しながら別のユーザーをクリックすると、複数のユーザーを選択できます。

「サマリー ウィザード (ASM)」：「分析不能」ダイアログ

このダイアログを使用して、分析できないフォルダの処理方法を指定します。たとえば、特定のデータベースに対する分析権限を持っていない場合に使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「分析不能」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「_ フォルダ (全 _ フォルダ中) が分析できませんでした。それらのフォルダーをサマリーの自動生成から除外してよろしいですか？」

「はい」

分析できないフォルダを除外するには、このボタンを使用します。

「いいえ」

分析できないフォルダを含めるには、このボタンを使用します。

「ヘルプ」

分析できないフォルダについて詳しい情報を入手するには、このボタンを使用します。

注意

- 使用されているオブジェクトまたは表を分析する権限を持っていない場合
表を分析するには、次のいずれかの条件が必要です。
 - その表の所有者であること。
 - データベース全体に対して分析する権限を持っていること（たとえば、すべてを分析する権限を付与された場合）。

フォルダを構成する表のうち、1 つでも前述の条件を満たしていない表がある場合は、そのフォルダは分析されません。つまり、フォルダの中にいくつか分析できない表がある場合、そのフォルダ全体が分析不能とみなされます。

- フォルダが無効な場合

フォルダが無効である原因によって、対処法は変わってきます。

無効なフォルダに関するエラー・メッセージを表示するには、「表示」メニューから「フォルダの妥当性チェック」を選択します。

- DB-LINK を使用して分析する場合

フォルダが参照している表が、DB-LINK を使用してアクセスするデータベースに格納されている場合は、そのフォルダは分析できません。この操作は Oracle データベースではサポートされていません。

- フォルダを構成しているすべての表を把握できない、またはアクセスできない場合

Discoverer のフォルダには、元となるデータベースの表またはビュー（あるいはその両方）を複数含むことができます。元となる表のすべてを把握またはアクセスすることが不可能な場合があります。次に例を示します。

- ビューが別のビューに基づくものであり、ASM ユーザーはトップ・レベルのビューにアクセスできますが、その下の参照対象ビューにアクセスできない場合

この場合 ASM ユーザーは、そのビューを構成するために実際に使用されているデータベース表を確認することはできません。

- フォルダを完全に表に分解できない場合

これが原因となるのは、サーバーの動的な表（たとえば V\$ 表や、多くの DBA_ 表）を使用している場合のみです。これらのビューおよび表のなかには、物理的な表に分解できないものがあります。メモリーに格納されるものがあるため、その場合は分析できません。

次に例を示します。

- v\$_lock

この種のテーブルまたは表に問合せを実行することはできますが、データはすぐに更新されてしまうので、サマリーを作成しても実際には意味がありません。

「サマリー ウィザード (ASM)」: 「推奨サマリー」 ダイアログ

このダイアログを使用して、Discoverer で使用される予定のサマリーを確認し、必要な場合は選択済みのリストを変更します。現行の ASM ポリシーから外れたサマリーには、削除用のマークが付けられる場合があります。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「推奨サマリー」 ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「選択」

ASM のサマリー作成および削除の処理に、推奨されるフォルダを含める場合は、このチェックボックスを使用します。

「アクション」

このフィールドには、「選択」チェックボックスが選択されている場合に、ASM の処理の一部として実行されるアクションが指定されます。

「名前」

このフィールドには Discoverer のフォルダ名が表示されます。

「サイズ」

このフィールドには、推奨されたサマリー・フォルダを含めるのに必要な領域の量が表示されます。

「必要な領域の合計」

このフィールドには、すべての推奨されたサマリーに必要な領域の合計量が表示されます。

注意

- 「推奨サマリー」ダイアログを初めて表示した場合は、割り当てられた領域に対して Discoverer から推奨されるサマリー・フォルダが選択されます。つまり、メイン・ウィザードで「完了」をクリックすると、選択されたサマリー・フォルダは、「操作」列に「作成」が表示されているか、「削除」が表示されているかにより、作成または削除されることになります。推奨サマリーのリストからチェックボックスを選択または選択解除して、どのサマリー・フォルダを作成 / 削除するかを変更できます。
- 右側のペインには、現在選択されているサマリー・フォルダ・コンポーネントが表示されます。
- 選択されたサマリーに必要な領域の合計がその下に表示されます。

- 次の方法で、推奨サマリーのリストから「**必要な領域の合計**」の数値が導出されます。
必要な領域の量が合計され、「**必要な領域の合計**」フィールドに表示されます。サマリー・フォルダが削除される場合、削除されるサマリー・フォルダが使用していた領域は、リスト上の他のサマリー・フォルダのうちの1つが使用できます。このため、「**必要な領域の合計**」の数値では、削除されるサマリー・フォルダの合計 KB 数が減少します。

「サマリー ウィザード (ASM)」: ステップ 2 「フォルダの分析」ダイアログ

このダイアログを使用して、データベース構造を自動的に分析し、推奨サマリーを使用します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「サマリー・ウィザード ステップ 2」 ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「進行状況バー」

このバーを使用して、データベース分析の進行状況をモニターします。分析の進行中は、バーの上部のキューブが回転します。

「開始」

フォルダ分析を開始するにはこのボタンを使用します。

このプロセスを初めて実行した場合は、デフォルト値に基づいて分析が行われます。その後のフォルダ分析では、これらの値に対して行われた変更（「詳細設定」により）のすべてが適用されます。

「続行」

「停止」 ボタンを使用してプロセスを停止した後でフォルダ分析を再開するには、このボタンを使用します。

「停止」

フォルダ分析を一時停止するには、このボタンを使用します。

- フォルダ分析を再開するには、「続行」 ボタンを使用します。
- フォルダ分析を停止するには、「キャンセル」 ボタンを使用します。

「ポリシー内のフォルダ合計 :」

このフィールドには、ASM ポリシーに含まれるフォルダの数が表示されます。

「分析されたフォルダ :」

このフィールドには、ASM ポリシー内の分析済みフォルダの数が表示されます。

「詳細設定 ...」

フォルダ分析の基礎として使用する一定範囲のデフォルト設定の編集に「サマリー ウィザード (ASM)」：「デフォルト設定の変更」ダイアログ：「分析」タブを表示するには、このボタンを使用します。

注意

フォルダ分析を一時停止してから ASM ポリシーを変更した場合は、プロセスを再開すると新しい ASM ポリシーが使用されます。

「サマリー ウィザード (ASM)」: ステップ 3 「領域の割当て」ダイアログ

このダイアログを使用して、ASM で使用可能な表領域の量を考慮して、必要な ASM パフォーマンスを指定します。たとえば、最小限の表領域を使用して ASM パフォーマンスを最大化します。また、表領域の量の増加により達成されるパフォーマンスの向上率を分析できます。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

領域 (KB) に対するパフォーマンスのグラフ

指定した量の表領域を割り当てることにより達成されるパフォーマンスの向上率を評価するには、このグラフを使用します。表領域の量を変更して、パフォーマンスへの影響を因数値で表示できます。

- 点線は、利用可能な表領域の量を示しています。
- 赤線は、選択された表領域の量を示しています。
- 描画線は、選択した表領域の量により達成されるパフォーマンスの向上率を示しています。
- 選択された領域の設定を変更するには、次のいずれかの方法を使用します。
 - グラフ部分をクリックし、赤線を左または右にドラッグします。
 - 領域 (KB) 軸の上部の三角形を左または右にドラッグします。
 - 赤線の左または右のグラフ部分をクリックします。
 - 「サマリー作成に使用する容量」フィールドに、使用する表領域の量 (KB 単位) を入力します。

「サマリーの使用する表領域:」

このドロップダウン・リストを使用して、サマリー表の格納に使用する表領域を指定します。

「サマリー作成に使用する容量:」

利用可能な表領域の量がわかり、その値のパフォーマンスを評価する場合は、このフィールドを使用します。

「推定パフォーマンス向上率:」

この数字は、ASM で推奨されたサマリーを作成した場合に、問合せが何倍速くなるかを表す因数値です。

「推奨サマリー ...」

現在割り当てられている領域を使用して最適のパフォーマンス向上を達成するために、作成 / 削除するサマリーを指定するための「サマリー ウィザード (ASM)」: 「推奨サマリー」ダイアログを表示するには、このボタンを使用します。

「詳細設定 ...」

ASM ポリシーを定義する「サマリー ウィザード (ASM)」: 「デフォルト設定の変更」ダイアログ: 「ダイアログのリスト」タブを表示するには、このボタンを使用します。

注意

表領域の選択には、サマリー・データ専用の個別の表領域にサマリーを配置することをお勧めします。そのような表領域がない場合、SYSTEM または TEMP 表領域は使用しないことをお勧めします。

「サマリー ウィザード ステップ 1」 ダイアログ

このダイアログを使用して、Discoverer サマリー・フォルダの作成方法を指定します。たとえば、サマリーを自動的に作成するように指定します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

[「手動によるサマリー・フォルダの作成」](#)

「Discoverer の推奨するサマリーを作成」

Discoverer でサマリーを自動的に作成するには、このラジオ・ボタンを使用します。これにより、[「サマリー ウィザード \(ASM\)」: ステップ 2「フォルダの分析」ダイアログ](#)が表示されます。ここで、表を自動的に分析し、作成するサマリーを推奨できます。

「サマリーを個別に指定」

サマリーを手動で作成する場合は、このラジオ・ボタンを使用します。これにより、[「サマリー ウィザード ステップ 2」ダイアログ](#)が表示されます。

「サマリー ウィザード ステップ 2」 ダイアログ

このダイアログを使用して、サマリー・フォルダの作成方法を選択します。たとえば、Discoverer Desktop/Plus ユーザーが収集した問合せ統計を使用して、作成するサマリーを決定します。

詳細は、次の項目を参照してください。

[「手動によるサマリー・フォルダの作成」](#)

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「End User Layer 上のアイテムを指定」

End User Layer 上の既存の表のセットからサマリー・フォルダを作成するには、このラジオ・ボタンを使用します。

「問合せ統計を使用」

以前に実行された Discoverer の問合せに基づいてサマリー・フォルダを作成するには、このラジオ・ボタンを使用します。この強力な機能では、ユーザー自身でアイテムを選択する必要がありません。以前の問合せを基にしてサマリーを作成した後で、アイテムおよび組合せを追加することで、ユーザーのニーズにあわせて変更できます。

「外部サマリー表の登録」

Discoverer の外部のアプリケーションで作成された表を含む外部サマリー・フォルダを使用する場合は、このラジオ・ボタンを使用します。列名とアイテム名は、Discoverer で作成した表とは異なる場合があります。このオプションを使用して、外部表を登録し、表の列を End User Layer 中のアイテムにマップします。Discoverer がサマリーの管理を引き継ぐように指定すると、表を移入でき、そのデータをリフレッシュしてサマリー表の管理を継続できます。

- 「End User Layer 上のアイテムを指定」（詳細は、[「EUL のアイテムに基づくサマリー・フォルダの作成方法」](#)を参照してください）。

このオプションを使用して、サマリー・フォルダに含める EUL アイテムの組合せを手動で選択します。

たとえば、次の場合にこのオプションを選択します。

- 「統計の収集」権限をオフにした場合（詳細は、[「ユーザーまたはロール（職責）が実行できる作業の指定方法」](#)を参照してください）。
- サマリー・フォルダを形成する EUL アイテムの組合せを手動で選択する場合。

- 「問合せ統計を使用」(詳細は、「[ユーザーの問合せに基づくサマリー・フォルダの作成方法](#)」を参照してください)。

問合せ統計の実行により収集された、サマリー・フォルダ(実行された問合せに基づく)から選択するには、このオプションを使用します。ユーザーの「統計の収集」権限がオンになっている場合に Discoverer Desktop/Plus で問合せを実行すると、問合せ統計が自動的に収集されます(詳細は、「[ユーザーまたはロール\(職責\)が実行できる作業の指定方法](#)」を参照してください)。

特定の問合せに基づいて 1 つ以上のサマリー・フォルダを作成する場合に、Discoverer によりその他のサマリー・フォルダが作成される必要が必ずしもなければ、このオプションを選択します。

- 「外部サマリー表の登録」(詳細は、「[外部サマリー表に基づくサマリー・フォルダの作成方法](#)」を参照してください)。

外部サマリー表に基づいてサマリー・フォルダを作成する場合は、このオプションを使用します。自分自身のサマリー表がある場合は、このオプションを使用します。

「問合せ統計の使用」ダイアログ

このダイアログを使用して、最適なサマリーの見積りのために問合せ統計を収集する方法を指定します。たとえば、指定された CPU タイムを問合せが超過した場合に問合せ統計を使用するように指定します。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「サマリー ウィザード ステップ 3」ダイアログ

詳細は、次の項目を参照してください。

[「手動によるサマリー・フォルダの作成」](#)

[「サマリー・フォルダの管理」](#)

「問合せ統計について、検索条件を指定した後、「検索」をクリックしてください。」

これらの設定値を使用して、次のリストからサマリーする問合せを選択します。

「日間の問合せ統計を表示」

このフィールドを使用して、問合せリストに含める問合せ統計の期間を定義します。

「平均 CPU 時間」

このフィールドを使用して、データベース・サーバーで問合せを実行するために必要な最小時間を指定します。

「平均実行時間」

このフィールドを使用して、クライアント・ワークステーションで問合せを実行するために必要な最小時間を指定します。

「問合せ実行回数」

このフィールドを使用して、選択された問合せが実行される最小回数を指定します。実行したユーザーや時間は同一とは限りませんが、フォルダとアイテムの組合せは同一です。

「検索」

このボタンを使用して、前述の検索基準に一致する問合せ統計を検索し、これを「サマリーを作成する問合せを選択してください。」リストに表示します。

「サマリーを作成する問合せを選択してください。」

このリストは、指定された検索基準に一致する問合せ統計を表示します。

リストから問合せを選択すると、ダイアログの右下部にあるパネルに、問合せに含まれたフォルダ、結合およびアイテムが表示され、「次へ」ボタンが有効になります。

「問合せ回数」列は、エンド・ユーザーにより問合せが実行された回数を記録します。

注意

- 問合せ統計を使用して作成されたサマリーは、Discoverer によりリフレッシュされます。これは管理されたサマリー・フォルダと呼ばれます。
- チェック・マークまたはキューブ・アイコンは、その問合せを実行した際に、問合せと一致するサマリー・フォルダが検出されたことを示しています。記号は、全オブジェクトを含めた完全一致を示します。

「外部サマリー表の使用」ダイアログ

外部のデータベースの表を End User Layer (EUL) にマップするには、このダイアログを使用します。登録する各外部表に対してサマリー ウィザードを 1 度実行します。

外部サマリー・フォルダは、Discoverer 以外のアプリケーションで作成された表を参照します。列名とアイテム名は、Discoverer で作成した表とは異なる可能性があります。

このダイアログは、次のように表示されることもあります。

「サマリー ウィザード ステップ 3」ダイアログ

詳細は、「[手動によるサマリー・フォルダの作成](#)」を参照してください。

「外部サマリー表を選択してください。」

「選択」ボタンを使用して、現行データベース内の表を選択する「[表またはビューの選択](#)」ダイアログを表示します。

「選択可能なアイテム」

このドロップダウン・メニューを使用して、外部サマリー表にマップするビジネスエリアを選択します。

このリスト・ボックスを使用して、EUL アイテム（現行ビジネスエリアの）を、外部サマリー表（「マップされたアイテム」リスト・ボックスに表示された）の中の対応するデータベース列にマップします。

アイテムのマッピングは次のいずれかの方法で行います。

- ドラッグ・アンド・ドロップ

「選択可能なアイテム」リストから「マップされたアイテム」リストの中の対応するデータベース列にアイテムをドラッグします。

1 度の操作で外部サマリー表の中のすべての列を EUL アイテムにマップするには、「選択可能なアイテム」リスト・ボックスから「マップされたアイテム」リスト・ボックスへフォルダをドラッグします。外部サマリー表にある類似した名前のデータベース列のアイテムが自動的に照合されます。外部サマリー表を EUL 内の複数のフォルダのアイテムにマップする場合は、複数のフォルダについてこの手順を繰り返します。

- 「選択」ボタン

「マップされたアイテム」リストからデータベース列を選択し、「選択可能なアイテム」リストで対応するアイテムを選択して「挿入」ボタン（右矢印）をクリックすると、「マップされたアイテム」リストで両方が照合されます。

- ダブルクリック

「マップされたアイテム」リストでデータベース列を選択し、「選択可能なアイテム」リストで対応するアイテムをダブルクリックします。

「マップされたアイテム」

EUL 内の対応するアイテムにマップされた外部サマリー表の中のデータベース列。

- 「アイテム」
外部サマリー表の中の対応するデータベース列にマップされた EUL 内のアイテム。
- 「データベース列」
EUL 内の対応するアイテムにマップされた外部サマリー表の中のデータベース列。
- 「データ型」
データベース列のデータ型とサイズ。

「ヘルプの使用方法」

Oracle9i Discoverer Administrator は、広範囲にわたる状況依存ヘルプおよびリファレンス情報をオンラインで提供します。

詳細は、「[Discoverer Administrator のドキュメントとオンライン・ヘルプについて](#)」を参照してください。

「値」ダイアログ

このダイアログは、条件を作成または編集するときに使用する 1 つ以上の値の選択に使用します。

詳細は、次の項目を参照してください。

「条件」

「条件の新規作成 / 編集」ダイアログの「値」フィールドの中のドロップダウン・リストから「値の選択」オプションを選択すると、このダイアログが表示されます。

「値の選択」

対応する値の横のチェックボックスを 1 つ以上選択して、「条件」ダイアログの中の「値」フィールドに選択した値を含めます。

「値の選択」フィールドに表示されたすべての値を選択するには、「すべてを選択」ボタンを使用します。

「値の選択」フィールドに表示されたすべての値を消去するには、「選択解除」ボタンを使用します。

ここで選択した値は、この条件の現在の条件文で使用されます。

用語集

1 対 1 関係 (one-to-one relationship)

2 つの表で、一意の行に対する一致が 1 つあり、しかもこれが唯一である関係。

たとえば、ビデオ製品表の（一意キーで識別される）各ビデオ・タイトルには、その説明を含んでいる行がビデオ明細表に 1 つあり、しかもこれが唯一の行である場合。個々の製品には説明は 1 つしかないので、ビデオ製品表で直接検索できる。ただし、他の処理上の理由から別の表に配置することもできる。後者の場合、2 つの行は、これらを一緒に結合する共通キーによって一意に識別される。

1 対 N の関係 (one-to-many relationship)

1 つの表に、別の表の 1 つ以上の行と関連する一意に識別される行がある関係。この関係は、最初の表にある一意キーに基づく。たとえば、ビデオ製品表の（一意キーのある行で識別される）各ビデオ・タイトルには、顧客にビデオを貸出すたびに記録する売上明細表に多くのエントリ（行）がある。

DATE

Oracle データベース上で使用されるデータ型。日付列には、紀元前 4712 年 1 月 1 日から西暦 4712 年 12 月 31 までの間の日付と時間を含めることができる。

End User Layer (EUL)

データベース・ディクショナリまたは表の定義と、Discoverer Desktop/Plus などのクライアント・アプリケーションの間に（概念的に）存在する多数のデータベース表およびビュー。End User Layer は、データベース・オブジェクトに対してビジネス的な意味のあるわかりやすい名称を提供することにより、データベースの複雑さからユーザーを解放する。

EUL は階層テンプレート、書式情報、サマリー表管理および集計情報などの要素を制御する。EUL は、データベースから情報を抽出するために生成された SQL も制御する。

GUI

グラフィカル・ユーザー・インタフェース (graphical user interface) の略語。文章だけでなく図を使用して、プログラムの入力と出力を表すこと。GUI を使用したプログラムは、ウィンドウ・システム (X Windows、Microsoft Windows、Apple Macintosh など) で実行される。GUI プログラムは、画面上のウィンドウにアイコン、ボタンなどを表示する。ユーザーは、主に (通常マウスによって制御される) 画面上のポインタを移動することで、GUI プログラムを制御する。ビットマップ・インタフェースとしても知られる。

HTML

ハイパーテキスト・マークアップ言語 (Hypertext Markup Language) の略語。インターネットの WWW サーバー上のコンテンツおよび他の文書へのハイパーテキスト・リンクを指定するために使用される、タグベースの ASCII 言語。Web ブラウザを持つエンド・ユーザーは、HTML 文書を表示し、リンクに従って他の文書を表示する。

HTTP

ハイパーテキスト・トランスポート・プロトコル (Hypertext Transfer Protocol) の略語。WWW ブラウザ・コンピュータとアクセスされる側の WWW サーバーの間の WWW トラフィックを実行するためのプロトコル。

IP (インターネット・プロトコル : Internet Protocol) アドレス (Address)

4 つの部分から構成される数値。各部分は、0 ~ 255 の数字で構成され、インターネット上のコンピュータを一意に識別する。

JInitiator (JInitiator)

異なるリリースのブラウザ間で一貫性のある Java Virtual Machine (Discoverer で使用されるソフトウェア環境) を保つためのソフトウェア・プラグイン。

NOCACHE

データが含まれるページが書式化されるときにデータがフェッチされる (書式化前にフェッチおよびキャッシュされるのでない) ことを意味するデータ型。

NULL 値 (NULL value)

値がないこと。

Oracle9i Designer

システムの分析、アプリケーションの設計と生成、メンテナンスのためのオラクル社のツール。

Oracle9i Designer は、アプリケーション・システム設計とモデル情報のために拡張された Oracle ディクショナリを使用する。

ORACLE_HOME

Oracle 製品のルート・ディレクトリを示す環境変数。

PDF

Portable Document Format の略語。文書を作成するために使用する元のアプリケーション・ソフトウェア、ハードウェア、およびオペレーティング・システムとは独立した方法で文書を表すための (Adobe Acrobat にネイティブな) ファイル形式。PDF ファイルは、テキスト、グラフィックおよびイメージの任意の組合せを含む文書をデバイスおよび解像度から独立した形式で記述できる。

PL/SQL

Oracle が所有権を持つ、SQL 言語に対する拡張機能。SQL をアプリケーション作成に適したものにするプロシージャ上の構成体およびその他の構成体を、SQL に追加する。

RDBMS

リレーショナル・データベース管理システム (Relational Database Management System) の略語。データ構造の定義、格納と検索操作、整合性制約ができるデータベース。このようなデータベースでは、データやデータ間の関係は、表として編成される。

SELECT 文 (SELECT statement)

1 つ以上の表またはビューからどの行および列をフェッチするかを指定する SQL 文。

SQL

構造化照会言語 (Structured Query Language) の略語。この言語は、データベース中のデータを定義および操作するために使用される。「表示」メニューから「SQL インспекター」を選択すると、ワークシートで使用されている現行 SQL 文を表示できる。

SQL スクリプト (SQL script)

データベース管理を迅速かつ簡単に行うために実行できる SQL 文が含まれているファイル。SQL スクリプトのいくつかは、Oracle 製品とともに出荷されている。

SQL 文 (SQL statement)

Oracle に対する SQL 命令。SELECT 文は、SQL 文の一種。

TCP

伝送制御プロトコル (Transmission Control Protocol) の略語。クライアントと Web サーバー間で HTTP 要求を交換するための基礎を形成する通信プロトコル。

アイコン (icon)

ウィンドウまたはツールの図形表示。

アイテム (items)

EUL にあるデータベース表の列の表現形態。列をアイテムとして表すことにより、Discoverer 管理者はユーザーがデータを明確に読み取れるように書式変更、名前変更および

その他の同様の変更を行える。アイテムはフォルダに格納され、作成、削除、異なるフォルダ間での移動ができる。

アイテム階層 (item hierarchy)

アイテム間の階層的な関係を定義し、エンド・ユーザーが異なるレベルのディテールにドリル・ダウンできるように使用する。たとえば、国レベルから地域レベル、州レベルへという具合。

アイテム・クラス (item classes)

データベースにとって意味のあるアイテムのグループ。アイテム・クラスは、1つ以上のアイテムが使用できる値リスト（これらのアイテムのための代替ソート順序）を定義するため、またはアイテム間のサマリーからディテールへの拡張を定義するため（あるいはその両方）に使用される。たとえば、Product というアイテムは、製品の説明を含み、Product フォルダの一部になることが可能。この同じアイテム Product は、Sales Revenue フォルダでも要求される可能性がある。両方のアイテムに同じ値リストを使用させるには、値を定義するアイテム・クラスを1つ定義し、両方のアイテムに適用する。したがって、値リストは一度定義すればよい。アイテム・クラスを作成しなかった場合は、Product フォルダの Product と Sales Revenue フォルダの Product に値リストを定義する必要がある。

アイテム・クラス・ウィザード (item class wizard)

アイテム・クラスの作成に必要な情報の入力と選択をユーザーに促す、Discoverer Administrator に事前定義済みの一連の手順。

アクセス権および権限 (access rights and privileges)

更新および削除権限などの特定機能。この機能は、データベース管理者または権限付与対象の表を「所有」するユーザー ID によって、特定のユーザー ID に与えられる。

値リスト (list of values)

アイテムに存在する一連の固有な値。値は、データベースの列で検索されたアイテムのもの。

たとえば、データベースに部品が 4 個、ボルトが 28 個、ファン・ベルトが 34 個、ガasket が 90 個、ブラケットが 49 個含まれていた場合は、「部品、ボルト、ファン・ベルト、ガasket、ブラケット」という 5 つの重複しない値が含まれる値リストが生成される。値リストは、条件の作成や選択時に使用される。値リストは、実行時に自動的に生成される。

イメージ (image)

アプリケーションに格納したり、ロードしたりできるビットマップ・オブジェクト。クライアントは、インポートされたイメージを変更できない。

インターネット (internet)

世界的な規模の TCP/IP ベースのコンピュータ・ネットワーク。

インポート (import)

ファイル・システムまたはデータベースからモジュールを読み取り、アプリケーションに取込むこと。

ウィンドウ (window)

アプリケーションが含まれる、デスクトップの長方形領域。ウィンドウにはそれぞれ、アプリケーションと対話できる領域がある。ウィンドウは、開いたり、サイズ変更したり、移動したり、アイコン状態にしたり、デスクトップ全体を埋めるように拡張したりできる。

孤立したフォルダ (orphan folder)

どのビジネスエリアにも存在しないフォルダ。孤立したフォルダは、ビジネスエリアの内部にないため、「ワークエリア」には表示されない。したがって、使用不可である。フォルダは、ビジネスエリア内のみ作成でき（そして、End User Layer に格納され）、複数のビジネスエリアで潜在的に繰返し使用される。ただし、End User Layer から削除されないまま、最後のビジネスエリアから削除される場合は、「孤立したフォルダ」となる。

「ツール」メニューから「フォルダの管理」コマンドを選択することによって、孤立したフォルダを表示および管理できる。

カーソル (cursor)

マウスの位置を示す小さいアイコン。カーソルの形状は、ツールによって変わる。

階層 (hierarchy)

Discoverer Administrator で定義され、End User Layer に格納されるアイテム間の関係。階層によって、ユーザーはデータをドリル・アップおよびドリル・ダウンして異なるレベルの詳細を参照できる。階層にはアイテム階層と日付階層の2種類がある。新規の階層を作成したり既存の階層を編集するには、階層ウィザードを使用する。

階層ウィザード (hierarchy wizard)

Discoverer Desktop/Plus で使用する階層の作成に必要な情報の入力と選択をユーザーに促す、Discoverer Administrator に事前定義済みの一連の手順。

概念的に同一のオブジェクト (conceptually identical object)

同じビジネス・オブジェクト（たとえばフォルダ、アイテム・クラス、階層）を参照している、複数の異なる EUL にあるオブジェクト。概念的に同一のオブジェクトであることは、オブジェクトの表示名または識別子を比較して識別される。

外部キー (foreign key)

表内のデータの行または列を別のビジネスエリアの表にリンクするキー。「主キー (Primary key)」を参照。

外部問合せ (external query)

他の Oracle 製品で参照できる、ANSI 標準の SQL SELECT 文。

カラー・パレット (color palette)

ウィンドウ・システム、描画、またはウィンドウとそのビューで利用できる色をすべて含む。

環境 (environment)

一般的に使用するツールおよびその構成を含めた、コンピュータ・ベースの作業場のこと。

キーワード (keyword)

1. 対応する引数を提供する必要のあるコマンドライン構文の一部。2. PL/SQL 構造体の必須部分。

キャッシュ (cache)、メモリー (memory)

Oracle データベースが、ユーザーが現在アクセスまたは変更しているデータベース・データ等をサポートするために必要とするデータの一時記憶領域。2つの用語は、どちらも同じような意味で使用される。

行 (row)

表中の1組のフィールド値。たとえば、表 EMP の例では、フィールドは1人の従業員を表す。

切り取り (cut)

1つ以上のオブジェクトを削除してクリップボードに格納すること。これにより、必要に応じてエディタ内のどこにでもオブジェクトを貼り付けることができる。

切離しメニュー (tear-off menu)

ユーザーがマウスまたはその他の指示装置を使用してドラッグすることで、ソースから切り離して表示画面の別の場所へ移動できるサブメニュー。

クリップボード (clipboard)

オブジェクトを格納できるメモリー・バッファ。一度格納されたオブジェクトは、別のオブジェクトを切り取りまたはコピーするまで、またはアプリケーションを終了するまでクリップボードに残る。

クロス集計 (crosstab)

アイテムを行と列のマトリックスに配置するワークシートのレイアウト。アイテムは上軸と横軸の両方に表示される。クロス集計を使用して、サマリー情報を表示したり、1つのアイテムと他のアイテムの関連（月ごと、地域ごとの売上など）を表示できる。クロス集計はマトリックスとも呼ばれる。「表 (table)」を参照。

結合 (join)

特定の列にあるデータの一致に基づく、データベース内の表の論理的な組合せ。Discoverer Administrator での結合の作成は、Discoverer Desktop/Plus でユーザーに使用可能なフォル

ダを識別するために重要。ユーザーがワークシートを作成するためにアイテムまたはフォルダを選択するときは、選択されたフォルダと結合しているフォルダのみ使用できる。したがって、2つのフォルダ間に結合が存在しない場合は、選択されていないフォルダもそのアイテムもワークシートで使用できない。

結合は、データベース内の列、主キーまたは外部キーの一致から導出される。

権限付与 (grant)

ユーザーにモジュールへのアクセス権を与えること。モジュールの作成者のみが、他のユーザーにモジュールのアクセス権を付与できる。

構文 (syntax)

コマンド、修飾子およびパラメータを結合して有効なコマンド文字列を形成するための規則性をもったシステム。

コピー (copy)

クリップボードに、選択したオブジェクトの複製を格納すること。これにより、必要に応じてエディタ内のどこにでもオブジェクトを貼り付けることができる。

コマンドライン (command line)

オペレーティング・システムのコマンドライン。大部分の Oracle 製品は、いくつかの引数を使用してコマンドラインから起動できる。

作業環境 (preference)

アプリケーションのインタフェースの動作に影響する設定値。

作業リスト (task list)

ビジネスエリアを作成するための個々の作業を順番に表示する、Discoverer Administrator 中のウィンドウ。作業をチェックしながら進めるときに便利。作業をクリックすると、それぞれのウィザードを起動する。

索引 (index)

表に関連付けられたオプションの体系。Oracle データベースが表の行を迅速に検索し、(オプションで) 個々の行が一意であることを保証するために使用される。

サマリー・ウィザード (summary wizard)

サマリー・フォルダを使用するようにエンド・ユーザーのクエリー・リライトする場合の、使用するサマリー・フォルダの作成に必要な情報の入力と選択をユーザーに促す、Discoverer Administrator の事前定義済みの一連の手順。

サマリー表 (summary table)

問合せからの結果。表形式で情報を表示する。

サマリー・フォルダ (summary folder)

サマリー表についての情報と、それを使用できる EUL アイテムの組合せ情報を格納するフォルダ。問合せ要求が、サマリー表に事前に集合および結合されているデータで足りている場合、サマリー表を問い合わせることによってパフォーマンスを向上させる。この処理は自動的に実行される。つまり、ユーザーには問合せが基本データ表ではなくサマリー表に対して行われたという事実は分からない。この機能により、迅速で正確なデータ検索が実現できる。

サマリー・リライト (summary rewrite)

ディテール・データではなく、サマリー表またはマテリアライズド・ビューを使用して問合せの SQL をリライトするために Discoverer Plus が使用するプロセス。

識別子 (identifier)

Discoverer がワークブックを識別するために使用する一意の名前。異なる EUL に共通するオブジェクトを照合する場合、Discoverer では識別子を使用して、異なる EUL 内にある、同じビジネス・オブジェクトを参照するオブジェクト（概念的に同一のオブジェクトとも呼ばれます）を検索します。

たとえば、「A」という EUL 中の「売上」という名前のフォルダが、「B」という EUL 中の「売上額」という名前の同じフォルダを参照しているとする。この 2 つのフォルダは同じ識別子を持ち、このため同じオブジェクトを参照していると識別される。

軸 (axis)

ワークシートの 3 方向の 1 つ。問合せに選択されたアイテムは、軸に表示される。「上軸 (top axis)」、「横軸 (side axis)」、「ページ軸 (page axis)」および「軸アイテム (axis item)」を参照。

軸アイテム (axis item)

ワークシートの上軸、横軸、またはページ軸のいずれかに表示されるアイテム。アイテムは、テーブル・レイアウトでは上軸またはページ軸のみに表示され、クロス集計レイアウトではどの軸にでも表示される。「軸 (axis)」および「データ・アイテム (data item)」を参照。

実行 (execute)

「実行 (run)」を参照。

実行 (run)

アプリケーションまたはプログラム・ユニットのランタイム・バージョンを実行すること。

自動サマリー管理 (automated summary management: ASM)

サマリーの作成およびメンテナンス処理を単純化する Discoverer の機能。ASM を使用すると、Discoverer の稼働に使用されるサマリー・ポリシーと呼ばれる入力パラメータの範囲を設定できる。Discoverer では、サマリー・ポリシーに従って、最適なサマリーのセットの作成およびメンテナンスが自動で行われる。

集合体 (aggregate)

サマリーされたデータ。たとえば、特定の製品の販売台数は、日、月、四半期、年度ごとに集合化できる。

終了 (quit)

現行セッションを終了して、ユーザーをオペレーティング・システムに戻すオプション。システムによっては、終了 (Quit) は Exit ともいう。

主キー (primary key)

表中の行を識別するために使用できる一意の値で構成されるメンバーを持つ、データベース表の列。

使用可能 (enabled)

メニュー・アイテム、ボタンなどが現行コンテキストで使用できること。つまり、キーボードおよびマウス入力に応答することを意味するインタフェース要素の状態。

使用禁止 (disabled)

メニュー・アイテム、ボタンなどが現行コンテキストで使用できないこと、つまりキーボードおよびマウス入力に応答しないことを意味するインタフェース要素の状態。

条件 (condition)

戻り値を制限するためにアイテムに関して作成されるフィルタ。フィルタには、1 つの列とデータの量を指定するための修飾データがいくつか含まれる。Discoverer Administrator で作成される条件は、指定するビジネス条件に応じてオプション条件にも必須条件にもなる。

条件は、Discoverer Plus で問合せの定義中にも作成できる。たとえば、東部地域にある全都市を要求する場合は、条件 (show East Region only) を作成して、結果に取り入れる都市を絞り込む。

所有 (own)

Discoverer 内の特定のオブジェクトの所有関係を定義する用語。たとえば、ユーザーのデータベース・アカウント内に表がある場合、ユーザーはその EUL を所有する。ユーザーは他のユーザーのアカウント内の表へのアクセス権を与えられることがあるが、この許可を受けたユーザーが EUL を所有することにはならない。

スキーマ (schema)

関連するデータベース・オブジェクトの集合。通常はデータベース・ユーザー ID 別にグループ分けされる。スキーマ・オブジェクトには、表、ビュー、シーケンス、ストアド・プログラム・ユニット、シノニム、索引およびデータベース・リンクが含まれる。

スケジュール済みワークブック (scheduled workbook)

予定の日時にあらかじめ指定した間隔で自動的に実行されるようにプログラムされたワークブック。「ファイル」メニューから「スケジュール」を選択するとワークブックをスケジュールできる。

セッション (session)

実行ファイルの起動から終了までの期間。

接続 (connect)

データベースにログインすること。問合せを作成または変更する場合、またはデータベースに格納されたアプリケーションにアクセスする場合は、接続する必要がある。

接続文字列 (connect string)

ネットワーク上の特定の Oracle データベースに接続するために Net8 が使用する、プロトコルを含む一連のパラメータ。

ソート (sort)

アイテムの並び替えの方向を指定する。たとえば、アイテムを昇順または降順で並べ替えて表示する。

総計 (total)

ワークシートのデータを集計した結果。総計には、最小値、最大値、平均値、合計値などがある。

送信 (send)

Discoverer ではワークブック（またはワークブックの一部）を電子メールで送信できる。送信するデータは、メール・メッセージのテキストまたは添付ファイルにできる。Discoverer Plus でワークブックを送信するには、「ファイル」メニューから「送信」を選択する。

ダイアログ (dialog box)

操作を完了するために必要な情報の入力を促すプロンプトを表示する、画面の一部またはウィンドウ。

タイトル・バー (title bar)

ウィンドウの一番上の水平領域。そのウィンドウ中のアプリケーションまたはインタフェース要素の名前を表示。

タイプ (type)

タイプ名および説明などの情報を含む、フォーム、ドキュメントなどのファイル・タイプの説明。各説明は1つのファイル・タイプに適用される。なお、メタタイプには、すべてのテキスト・ファイルに適用される「**updtext**」、すべてのプロジェクト・ファイルに適用される「**updproj**」、すべてのプロジェクト・リンクに適用される「**updlink**」およびすべてのファイル・タイプに適用される「**all**」の4つがある。タイプは、アクションおよびマクロを定義する基礎となる。

ツール (tool)

アプリケーション内のオブジェクトの作成および操作に使用されるアイコン・ボタン。

ツールバー (toolbar)

製品のコマンドを実行するアイコン・ボタンの集合。通常、ウィンドウの一番上に水平に並べられるか、ウィンドウの側面にそって垂直に並べられる。

ツール・パレット (tool palette)

ツールの集合。

データ・アイテム (data item)

上軸アイテムと横軸アイテムの関係を表しているアイテム。データ・アイテムを共通に持つアイテムのみが、上軸と横軸で表示される。これは、クロス集計レイアウトのワークシートのみに適用される。データ・アイテムはメジャーとも呼ばれる。「軸 (axis)」および「データ・ポイント (data point)」を参照。

データ型 (data type)

データの標準形式。一般的な Oracle データ型には CHAR、VARCHAR2、DATE、NUMBER、LONG、RAW および LONG RAW がある。

データベース (database)

1つの単位として処理されるディクショナリ表およびユーザー表のセット。

データ・ポイント (data point)

ワークシートのセルに表示されているデータ・アイテムの値。データ・ポイントは、クロス集計で交差している軸アイテム間の関係を反映する。「データ・アイテム (data item)」を参照。

テーブルレイアウト (tabular)

アイテムを列に配置するワークシート・レイアウト。アイテムは上軸に表示される。テーブルレイアウトは、たとえば、先月の売上データの一覧などの問合せ基準に適合したすべての情報をリスト表示するために使用する。「クロス集計 (crosstab)」を参照。

ディテールからマスターへの結合 (detail to master join)

ディテールからマスターへの結合のアイコンは、異なるフォルダ内にある 2 つのアイテム間の多対 1 の関係を表す。外部キーは左側 (ディテール)、主キーは右側 (マスター)。「マスターからディテールへの結合 (master to detail join)」および「結合 (join)」を参照。

デフォルト (default)

必要なコマンド・パラメータや属性をユーザーが指定しない場合に、システムが提供する値。

問合せ (query)

1. 指定した基準に従ってデータベースから情報を取り出す検索。基準には、アイテム、レイアウト、書式設定、条件およびユーザー定義アイテムが含まれる。問合せの結果はワークシートに表示される。
2. データベースの 1 つ以上の表またはビューから取り出すデータを指定する SQL SELECT 文。

問合せ時間予測 (query prediction)

問合せで情報を取り出すために必要な時間を予測する Oracle9i Discoverer の機能。問合せの開始前に予測時間が表示されるので、問合せを取り消すかどうかの判断ができる。

等価結合 (equijoin)

等価演算子を使用した、2 つの列の結合。演算子の両側で定義された列で等しいデータを持つ行のみが結合されることを示す。

独立データ (independent data)

その値が別のデータに依存していないデータ。たとえば、ある従業員の名前の値 *Jones* は、他の従業員の名前または関連データに依存しない。カテゴリ・データとも呼ばれる。

トグル (toggle)

設定をオンまたはオフに交互に切り替えること。たとえば、ツールバーを非表示にしたり、表示したりできる。

閉じる (collapse)

選択されたアイテムより下位のレベルの関連アイテムをすべて削除すること。ドリル・ダウンを元に戻すこと。「ドリル・ダウン (drill down)」を参照。

ドラッグ (drag)

マウス・ポインタをウィンドウの特定の場所に移動する間、マウス・ボタンを押した状態に保つこと。

トランザクション (transaction)

単一の単位として扱われる一連の SQL 文。

トリガー (trigger)

特定のイベントについて実行または「起動」される PL/SQL プロシージャ。

ドリル (drill)

あるアイテムを、それに関連したアイテムを含むように拡張すること。Oracle9i Discoverer は、データベースに再び問合せを行う場合もある。「ドリル・ダウン (drill down)」および「ドリル・アップ (drill up)」を参照。

ドリル・アップ (drill up)

階層中の次に高位の関連アイテムを含むようにアイテムを拡張すること。Oracle9i Discoverer は、データベースに再び問合せを行う場合もある。「ドリル (drill)」、「ドリル・ダウン (drill down)」および「閉じる (collapse)」を参照。

ドリル・ダウン (drill down)

階層中のより低位の関連アイテムを含むようにアイテムを拡張すること。Oracle9i Discoverer は、データベースに再び問合せを行う場合もある。「ドリル (drill)」、「ドリル・アップ (drill up)」および「閉じる (collapse)」を参照。

ハイパーテキスト (hypertext)

読者が Web ブラウザや Acrobat Reader などのブラウザを利用して 1 つの文書から別の文書に簡単に移動できるようにする相互参照を含む文書の集合。

ハイパードリル (hyperdrill)

別のワークシートの詳細データヘドリルできるようにシステム間のリンクを確立する方法。各ワークシート内のアイテムまたはカテゴリ間に結合が存在している必要がある。

ハイパーリンク (hyperlink)

あるハイパーテキスト文書内のいくつかの点から他の文書中の場所または同一文書内の別の場所への参照 (リンク)。Web ブラウザは、通常いくつかの表示方法の違い (異なる色、フォントまたはスタイル) でハイパーリンクを表示する。ユーザーが (マウスでクリックして) ハイパーリンクをアクティブにすると、ブラウザはリンクのターゲットを表示する。

パターン (pattern)

グラフの塗りつぶしに適用できるグラフィック・プロパティ。

パブリック表 (public tables)

すべてのユーザー ID がアクセスできる、データベース内の表。

パラメータ (parameter)

サブプログラムに情報を渡すために使用される PL/SQL 構造体。たとえば、サブプログラム・コール MYPROC (x) では、x がパラメータ。

貼り付け (paste)

現在のカーソル位置にクリップボードの内容（カットまたはコピーされたオブジェクト）を配置すること。

ビジネスエリア (business area)

ユーザーのデータ要求に適応するように、表またはビュー（あるいはその両方）を概念的にグループ化したもの。たとえば、会計部門は予算と財務についてのデータを表す会計ビジネスエリアを、エンジニア部門のプロジェクト・リーダーはプロジェクトの予算情報を調査するためのビジネスエリアを持つことができる。

アイテムの一部は同じであっても、各部門に関する表やビューの組合せは異なる場合がある。Discoverer 上でひとつのファイルとして示される。このファイルを開いて、中にあるフォルダとアイテムをすべて表示できる。

日付階層 (date hierarchy)

日付階層は、年、四半期、月、週、日、時間、分、秒の継承構造を持つ。Discoverer 管理者は、日付階層テンプレートを使用して、共通形式の日付階層の多くを定義する。デフォルトの日付階層を使用することも、カスタマイズされた日付階層を新たに作成することも可能。

日付階層テンプレート (date hierarchy template)

事前に定義された日付階層（表示書式を含む）。日付階層テンプレートは、日付アイテムに適用され、その日付アイテムに固有の日付階層を作成する。

たとえば、年 (YYYY)、月 (Mon-YY) および日 (DD-Mon-YY) の汎用日付階層テンプレートを 'sales_date' に適用して、ユーザーが年から月および日のレベルに（2002 年から 02 年 6 月、2002 年から 02 年 6 月 2 日に）ドリル・ダウンできるようにする。

どの時間 / 日付レベルを使用し、どの表示形式を使用するかを定義するために、日付階層テンプレートを使用する。

ピボット (pivot)

アイテムをある軸から別の軸にドラッグしたり（クロス集計のみ）、軸から「ページアイテム」ボックスにドラッグすること。横軸のアイテムが上軸のアイテムやページ・アイテムになったり、逆に変換されたりする。ピボットを使用すると、データがより簡潔に表示され、アイテム間の関係がわかりやすくなる。

表 (table)

関連する情報について名前が付けられている集まり。リレーショナル・データベースに格納される。行と列から構成される二次元格子。

フィールド (field)

インタフェース要素。データの入力、編集または削除を行う画面上の場所。

フォーカス (focus)

ユーザーまたはクライアントからの入力に応答できるエンティティ状態。エンティティにキーボード・フォーカスがある場合は、ユーザーがキーを押すとイベントを受け取ることができる。

フォルダ (folders)

EUL にあるデータベース表の表現形態。表をフォルダとして表すことは、エンド・ユーザーをデータベースの複雑さから保護する 1 つの方法である。

複合フォルダ (complex folder)

Discoverer Administrator で作成され、複数のフォルダ（またはデータベース表）からのアイテムを含むフォルダ。

複製 (duplicate)

クリップボードの内容に影響を与えずに、オブジェクトをレイアウト上に直接コピーできるようにするオプション。

物理ページ (physical page)

プリンタが出力するページのサイズ。

部分的に制限された表 (partially restricted tables)

自身が所有していて、他のユーザー ID にそのアクセス権を付与している表。または、所有はしていないが、その表の所有者からアクセス権を付与されている表。

プライベート End User Layer (Private End User Layer)

特定のユーザー ID のみが使用できる End User Layer。アクセス権は、その End User Layer の所有者によって明示的に付与される。

プライベート End User Layer は、同一データベース上に複数存在できる。

プライベート表 (private tables)

表を「所有」するユーザー ID によってアクセス権を付与されたユーザー ID からのみアクセス可能なデータベース内の表。あるユーザー ID が表を作成した場合、このユーザー ID は表を「所有」する。

プロパティ (properties)

オブジェクトの動作または外観を決定する、オブジェクトの特性。

文 (statement)

条件制御、反復制御および順次制御およびエラー処理に使用される PL/SQL 構造体。PL/SQL 文はセミコロン (;) で終了する。

分析関数 (analytic functions)

行のグループに基づき集計値を計算する。各グループについて複数の行が戻される点が集計関数と異なる。Oracle9i 関数の詳細は、『Oracle9i SQL リファレンス』または『Oracle9i データ・ウェアハウス・ガイド』を参照のこと。

ページ・アイテム (page item)

特定の視点からデータを表示できるようにするアイテム。ページ・アイテムはワークシート全体に適用される。ページ・アイテムを軸アイテムまたはデータ・アイテムから作成すると、たとえば、「年」が「2000」であるときのデータのみが表示される。「ページアイテム」ボックス中の使用可能な値のリストから値を選択することによって、2000、2001、2002 などのページ・アイテムの値を変更する。アイテムは、上軸または横軸から「ページアイテム」ボックスにドラッグできる。

ページ軸 (page axis)

ページ・アイテムを表示する軸。ページ軸は上軸の上に表示される。

変数 (variable)

値を割り当てることができ、割り当てられた値が時間とともに変化する可能性のある、名前付きのオブジェクト。

ポート (port)

TCP が特定のプログラムとの間で転送データを経路指定するために使用する番号。

ポップアップ・リスト (pop-up list)

ユーザーが特定の操作を実行するときにポップアップするリスト。

マスターからディテールへの結合 (master to detail join)

マスターからディテールへの結合のアイコンは、異なるフォルダ内にある 2 つのアイテム間の 1 対多の関係を表す。主キーは左側 (マスター)、外部キーは右側 (ディテール)。

ロード・ウィザードを使用してビジネスエリアを作成しているときに結合を作成するか、「挿入」メニューから「結合」を選択して結合を作成する。「ディテールからマスターへの結合 (detail to master join, join)」および「結合 (join)」を参照。

マスター・フォルダ (master folder)

マスター・フォルダは、結合で使用され、ディテール・フォルダと単対多の関係を持つ表を識別する。たとえば、ビデオ製品フォルダの (一意キーのある行で識別される) 各ビデオ・タイトルには、顧客にビデオを貸出すたびに記録する売上明細フォルダに多くのエントリ (行) がある。

マテリアライズド・ビュー (materialized view)

Oracle 8.1.7 以上のデータベースで使用されるサマリー・メカニズム。マテリアライズド・ビューは、SQL の問合せに使用される集計データを事前に計算して格納する。

メガバイト (megabyte) (MB)

1,048,576 (1024 x 1024) バイトに等しいメモリー単位。しばしば 100 万バイトに丸められる。

メタデータ (metadata)

データについてのデータ。EUL に含まれるデータは、実際のデータベース表のデータに関するデータであるため、メタデータである。メタデータを作成することにより、Discoverer 管理者はデータベース用語をビジネス用語に変換できる。

メッセージ・ボックス (message box)

最後の操作で発生した状態をユーザーに通知するモーダル・ウィンドウ。メッセージ・ボックスに応答する必要がある。

モーダル・ウィンドウ (modal window)

アプリケーションを続行する前に、ユーザーの応答を求めるウィンドウ。

文字位置 (alignment)

フィールドに文字を配置する方法。左揃え、右揃え、中央揃えのいずれかで文字を配置して表示できる。

文字間隔調整 (justification)

「文字位置 (alignment)」を参照。

ユーザー ID (user ID)

データベースにアクセスするために使用される一意の文字列。ユーザー ID には常に関連付けられたパスワードがある。Oracle データベースにログインする場合は、許可されたユーザー ID とパスワードが必要。

ユーザー定義アイテム (calculation)

1 つ以上のアイテムから導出されるアイテム。Oracle9i Discoverer では、複雑な計算式を利用してユーザー定義アイテムを作成することができる。

横軸 (side axis)

ワークシートの左側の縦の軸。これは、クロス集計でのみ使用する。「軸 (axis)」および「軸アイテム (axis item)」を参照。

ラジオ・グループ (radio group)

2 つ以上のラジオ・ボタンの組。常にそのうちの 1 つしかオンまたはオフになれない。

ラジオ・ボタン (radio button)

2 つ以上の組で表示され、常にそのうちの 1 つしかオンまたはオフになれない (チェックボックスと同様の) コントロール。

ラベル (label)

値を識別するテキストまたはアプリケーションの可視オブジェクトを意味するテキスト。

リモート・データベース (remote database)

ローカル・データベース以外のコンピュータ上のデータベース。通常は、同じネットワーク上にあるが、別のノードにあるコンピュータ（つまり、データベース・リンクを通して使用するデータベース）。

例外 (exception)

ユーザーが設定した基準から外れる、結果セット内のデータ。

レコード (record)

SQL SELECT 文でフェッチされる 1 つの行。

列 (column)

データの特定の領域を表す、データベース表の垂直領域。列には列名（ENAME など）および特定のデータ型（CHAR など）がある。たとえば、従業員情報の表では、全従業員の名前で 1 つの列が構成される。1 つのレコード・グループ列がデータベースの列を表す。

Discoverer では、特定の型のデータは、ワークシートに垂直に表示される。

ローカル・データベース (local database)

1. アプリケーションを実行しているコンピュータ上のデータベース。2. アプリケーションが接続している先のデータベース。このデータベースは、アプリケーションによって生成された SQL 文をすべて解析して実行する。

ロード・ウィザード (load wizard)

表を End User Layer にロードして新しいビジネスエリアを作成するために必要な情報の入力と選択をユーザーに促す、Discoverer Administrator に事前定義済みの一連の手順。

ロール (role)

権限の集合体。ロールをユーザー ID に割り当てると、そのロール内に定義されたすべての権限が付与される。ロールは、多くの人々に同じ権限を割り当てる場合に便利。

たとえば、航空会社の予約係スタッフのためのデータベース管理者は、予約係に必要な権限をすべて含んだロール reservationist を定義する。次に、予約係一人一人にすべての権限を定義するのではなく、そのロール (reservationist) を割り当てる。

ワークエリア (workarea)

End User Layer へのビューである、Discoverer Administrator 中のウィンドウ。「ワークエリア」ウィンドウを使用して、End User Layer 内の個々のビジネスエリアでの作業を行う。ここで、新規ビジネスエリアの作成、フォルダから別のフォルダへのアイテムの移動、アイテ

ムの作成と編集などができる。基本的には、End User Layer に影響する操作はすべて「ワークエリア」内で行われる。

ワークシート (sheet)

ワークブック・ウィンドウ内のタブ。1 つ以上の問合せの結果が表示される。

ワークシート (worksheet)

Discoverer が問合せの結果を表示する方法。ワークシートには、End User Layer に対して実行される問合せも含まれる。ワークブックには、複数のワークシートが格納される。

ワークブック (workbook)

Discoverer Desktop/Plus 内のワークシートの集合。ワークブックは、本質的には問合せ定義を含む文書で、データベースの表およびネットワーク・ファイル・サーバーに格納でき、ネットワークを介して他の Discoverer Desktop/Plus ユーザーと共有できる。自身のローカル PC にも格納できる。

ワイルドカード (wildcard)

単語または語句内で「任意の文字」または「連続する一連の文字」を意味するために使用される文字。

記号

% ワイルドカード, 4-6
<> 演算子, 24-120, 24-124
< 演算子, 24-120, 24-124
<= 演算子, 24-120, 24-124
= 演算子, 24-120, 24-124
> 演算子, 24-120, 24-124
>= 演算子, 24-120, 24-124

数字

1 対 1 結合
 作成, 24-86
1 対多結合
 表示, 24-121

A

ASM, 14-11
 オペレーティング・システムのスケジューラ,
 14-17
 コマンドライン・インタフェース, 14-17
 実行方法, 14-8
 説明, 14-6
 動作, 14-6
 バッチ・ファイルを使用, 14-17
 ポリシー, 14-9
 ロード・ウィザードを使用したバルク・ロード後,
 14-16

C

CONNECT BY 句 (SQL), 5-8

D

DBMS_JOB, 14-18
DBMS_JOB パッケージ, 8-7
DECIMAL データ型, 24-96
Discoverer
 アクセス権限, 7-3
 概要, 1-2
 コンポーネント, 1-2
 作業権限, 7-3
 システムの前提条件, 2-2
 実装, 1-9
 セキュリティ, 7-2
 データ・アクセスの前提条件, 2-2
 動作, 1-8
 メンテナンス, 1-12
Discoverer 9.0.2
 アップグレード, 23-2
Discoverer Administrator
 オンライン・ヘルプ, 2-11
 開始, 2-4
 概要, 1-2, 1-3
 基本概念, 1-5
 状況依存メニュー, 2-9
 新機能, 1-13
 スタート・ガイド, 2-2
 タスクリスト, 2-10
 ワークエリア, 2-5
 「ワークエリア」ウィンドウ, 2-6
Discoverer 管理者
 基本概念, 1-4
 役割の概要, 1-4
Discoverer のメンテナンス, 1-12

Discoverer のレジストリ設定, 22-2, 22-3
 概要, 22-2
Discoverer へのログイン, 6-2

E

End User Layer

- EUL オブジェクトのインポート, 3-11
- EUL オブジェクトのエクスポート, 3-19
- Oracle データベース, 3-5
- アップグレード, 23-12
- 移行, 3-31
- エクスポート方法, 3-14
- オブジェクトのインポート, 3-26
- 概要, 3-3
- 削除, 3-10
- 作成, 3-6
- 作成とメンテナンス, 3-2
- 所有者, 3-4
- 新規データベース・ユーザー用に作成, 3-8
- データベース間でのオブジェクトのコピー, 3-11
 - コマンドライン・インタフェースを使用したインポート, 3-23
 - コマンドライン・インタフェースを使用したエクスポート, 3-22
- 必要な権限, 3-5
- 表示, 3-11
- ファイルへのエクスポート, 3-11
- 分析関数, 3-31, 23-12
- 変更, 3-11
- 便利な理由, 3-3
- メンテナンスに必要な権限, 3-6

End User Layer (EUL), 1-6

End User Layer オブジェクトのインポート, 3-11

EUL_DATE_TRUNC, 9-10

EUL オブジェクトのインポート, 3-26

EUL ゲートウェイ

- 概要, 3-6

EUL ステータス・ワークブック, 19-2

- APP のインストール, 19-6
- Discoverer EUL V5 のビジネスエリア, 19-3
- アンインストール, 19-8
- インストール, 19-4
- 概要, 19-2
- 実行, 19-8

EUL データ定義ワークブック, 19-9

EUL のアップグレード

- スケジュール済みワークブック, 8-15

EUL のエクスポート, 3-11

N

NUMBER データ型, 24-96

O

OEM, 18-2

- パブリック接続の作成に使用, 6-5
- ユーザー定義接続の作成を許可するために使用, 6-10

OLTP システム, 1-5

Oracle Applications, 17-2

- Discoverer の相違点, 17-5
- EUL の作成, 17-10
- 作業権限の付与, 17-15
- 作業の指定, 17-17
- サポートされる機能, 17-3
- 職責, 17-3, 17-16
- 「接続」ダイアログの構成, 17-8
- 前提条件, 17-4
- ビジネスエリアの指定, 17-16
- ユーザーまたは職責の指定, 17-17

Oracle Enterprise Manager (OEM)

- パブリック接続の作成, 6-5
- ユーザー定義接続の作成を許可, 6-10

Oracle Portal, 18-4

- 概要, 18-5, 18-7
- 使用可能なポートレットの種類, 18-8
- データベースに保存されているワークブックのリスト・ポートレットのリストの追加方法, 18-10
- ポートレットの追加, 18-9
- ポートレットの編集, 18-15
- 要件, 18-8
- ワークシート・ポートレット, 18-9, 18-12

Oracle Reports, 18-3

Oracle Warehouse Builder, 18-4

Oracle WebCache, 18-3

Oracle9i Designer

- メタデータのロード, 4-11

P

PL/SQL 関数

- カスタム, 11-12
- 自動的に登録, 11-13
- 手動で登録, 11-14
- 使用する理由, 11-12
- 登録, 11-12

PUBLIC ユーザー, 17-15

S

SELECT 文, 5-7

SQL

- SQL インспекター, 16-5
- インライン・ビューの削除, 16-5
- 再フォーマット (フラット化), 16-5
- フラット化された SQL, 16-5

SQL インспекター

- SQL のフォーマット, 16-5

SQL および実行計画

- 表示, 16-5
- 例, 16-6

SQL コマンド

- CONNECT BY, 5-8
- SELECT, 5-7

SQL 文

- 結合, 24-86
- 最適化, 20-2

X

XML

- インポート書式, 3-11
- エクスポート・ファイルへの追加, 21-32
- ワークブックのエクスポート用の書式, 21-40

あ

アイテム, 1-6

- アイテム・クラス, 9-3
- 値リスト, 9-4
- 値リスト・アイテム・クラスの作成, 9-14
- 値リストの表示, 9-32
- 概要, 9-3
- クロス集計への配置, 24-96
- 削除, 9-34

代替ソート, 9-5

代替ソート・アイテム・クラスの作成, 9-18

ディテール・ドリル・アイテム・クラス, 9-8, 9-22

内容タイプ, 9-12

日付, 9-9

日付書式マスク, 9-9

プロパティの編集, 9-13

アイテム階層, 13-3

アイテム・クラス, 9-3

アイテムの削除, 9-30, 9-31

アイテムの追加, 9-29, 9-30

アイテムの表示, 9-31

値リストの表示, 9-32

削除, 9-34

編集, 9-25

アイテムの内容タイプ, 9-12

値リスト

カスタム・フォルダを使用, 9-24

問合せ, 5-8

値リスト・アイテム・クラス

作成, 9-14

アップグレード

Discoverer リリース 9.0.2 へ, 23-2

EUL 内の分析関数, 23-12

概要, 23-2

ステップ 1

リリース 4.1 EUL のバックアップ, 23-4

ステップ 2

リリース 4.1 EUL のアップグレード, 23-4

ステップ 3

サマリー・フォルダのリフレッシュ, 23-6

ステップ 4

Discoverer リリース 9.0.2 へのユーザーの移行, 23-8

ステップ 5

リリース 4.1 EUL の削除, 23-9

ステップ 6

クライアント・マシンからの Discoverer リリース 4.1 製品の削除, 23-11

前提条件, 23-3

い

インポート・ウィザード, 3-26
エラー・メッセージ, 24-63
インライン・ビュー
SQL から削除, 16-5

え

「エクスポート」
コマンドライン・インタフェースを使用して EUL
オブジェクトを, 3-22
エクスポート・ウィザード, 3-17, 3-19
エクスポート・ファイル
XML コードを追加, 21-32
演算子
集合, 5-7

お

オブジェクト
ビジネスエリアへの追加, 4-6, 4-8
オブジェクト名, 4-11
オプション条件
必須条件との対比, 12-4
オプティマイザ, 20-2
オプティマイザ・ヒント, 5-8
オンライン・ディクショナリ
ロード, 4-6

か

開始時間
サマリー処理の設定, 14-22
階層, 1-7, 13-2
アイテム, 13-3
アイテムの作成, 13-8
アイテムの編集, 13-13
概要, 13-2
デフォルトの日付階層テンプレート, 13-16
テンプレートの削除, 13-16
テンプレートの適用, 13-15
テンプレートの編集, 13-14
パフォーマンス, 13-7
日付, 13-5
日付階層テンプレート, 13-6
日付階層の作成, 13-10

日付テンプレート, 13-10, 13-14
変更, 13-18
カスタム・フォルダ
問合せ, 5-8

き

行レベルのセキュリティ
条件を使用した作成, 12-16

く

クエリ・リライト
概要, 16-3
例, 16-9
クロス集計ワークシート
アイテムの配置, 24-96

け

ゲートウェイ
ロード, 4-8
結果セット
複合フォルダ, 5-6
結合
1 対 1, 10-3
1 対多, 10-3
概要, 10-2
結合プロパティの編集, 10-6
削除, 10-8
条件
複数の条件の追加, 24-121
説明, 24-121
多対多, 10-3
単一アイテム結合とマルチアイテム結合, 10-3
単一アイテム結合の作成, 10-4
ディテール・アイテムの追加, 24-121, 24-123
データ型の不一致, 10-16
デカルト演算, 24-85
名前付け, 24-121, 24-124
ファントラップ, 10-10
編集, 10-7
マルチアイテム結合の作成, 10-5
結合のアイコン, 24-122

こ

コマンドライン・インタフェース, 21-2

- apps_fndnam, 21-13
- apps_user, 21-13
- asm, 21-13
- cmdfile, 21-14
- connect, 21-14
- create_eul, 21-15
- create_eul /apps_mode, 21-16
- delete, 21-16
- delete_bus_area, 21-17
- delete_eul, 21-18
- export, 21-18
- import, 21-20, 21-21
- load, 21-22
- refresh_bus_area, 21-24
- refresh_folder, 21-26
- refresh_summary, 21-27
- 概要, 21-3
- クイック・ガイド, 21-10
- 構文規則, 21-6
- コマンド, 21-3
- コマンド構文, 21-7
- コマンド修飾子, 21-3
- コマンドの例, 21-7
- コマンド・ファイル, 21-8
- コマンド・ファイルの作成, 21-8
- コマンド・ファイルの実行, 21-8
- コマンド・ファイルの例, 21-9
- コマンド・リファレンス, 21-12
- 使用, 21-4
- 使用に関する注意, 21-5
- 必要な権限, 21-5
- '?' コマンド, 21-12

コマンドライン・インタフェースの修飾子

- aggregate, 21-28
- all, 21-28
- apps_grant_details, 21-28
- apps_responsibility, 21-29
- apps_security_group, 21-29
- asm_space, 21-29
- asm_tablespace, 21-29
- audit_info, 21-30
- ba_link, 21-30
- business_area, 21-30
- capitalize, 21-30

- condition, 21-30
- date_hierarchy, 21-31
- db_link, 21-31
- description, 21-31
- eul, 21-31
- external_element, 21-32
- folder, 21-32
- function, 21-33
- hier_node, 21-33
- hierarchy, 21-33
- identifier, 21-33
- insert_blanks, 21-33
- item_class, 21-34
- items, 21-34
- join, 21-34
- keep_folder, 21-34
- keep_format_properties, 21-35
- log, 21-35
- log_only, 21-35
- lov, 21-35
- object, 21-36
- overwrite, 21-36
- parameter, 21-36
- password, 21-36
- private, 21-37
- refresh, 21-37
- remove_prefix, 21-37
- rename, 21-37
- schema, 21-38
- show_progress, 21-38
- sort_folders, 21-38
- sort_items, 21-38
- source, 21-39
- summary, 21-39
- user, 21-39
- workbook, 21-39
- xmlworkbook, 21-40

さ

サマリー・ウィザード

- 使用, 14-11

サマリー管理, 14-18

サマリー処理

- 開始時間の設定, 14-22

サマリー・データ

- リフレッシュする理由, 14-10

- サマリーの組合せ
 - セットアップ, 15-8
- サマリー表
 - 概要, 14-4
 - 問合せの実行, 24-85
 - 列のマッピング
 - 例, 15-6
- サマリー・フォルダ, 1-8
 - ASM を使用した作成, 14-7
 - Oracle 8.1.5 と Oracle 8.1.6 の相違点, 16-10
 - Oracle データベース間のインポートに続くリフレッシュ, 16-14
 - インポート後のリフレッシュ, 16-14
 - 外部サマリー表, 16-11
 - 外部サマリー表およびビューのマッピング, 16-13
 - 外部サマリー表に基づく作成, 15-24
 - 概要, 14-3
 - 削除, 15-36
 - 作成, 15-10
 - 式
 - 使用, 15-9
 - 手動作成, 15-2
 - 手動リフレッシュ, 15-30
 - 迅速に表示させる方法, 22-9
 - ステータス, 15-38
 - 前提条件, 14-7
 - データベース記憶領域プロパティの編集, 15-35
 - データベースの構成, 14-18
 - 必要な権限の付与, 14-19
 - フォルダ, 14-3
 - プロパティの編集, 15-32
 - 編集, 15-33
 - ユーザーの問合せに基づく作成, 15-16
 - リフレッシュ時に行われる処理, 14-10
- サマリー・リダイレクション
 - 概要, 16-3
 - 実行される状況, 16-4

し

- 識別子
 - Discoverer Desktop/Plus のワークブック / ワークシート識別子の位置の特定, 3-29
 - オブジェクトの比較に使用, 24-62
 - 概要, 3-29
- 軸アイテム, 24-96
- 自動サマリー管理, 14-6

- シノニム, 5-7
- 集計導出ユーザー定義アイテム
 - 概要, 11-6
 - 例, 11-6
- 集計ユーザー定義アイテム
 - 概要, 11-4
 - 制限, 11-5
 - 分析関数, 11-5
- 集合演算子
 - 例, 5-7
- 条件
 - 外部結合, 12-13
 - 概要, 12-2
 - カテゴリ, 12-3
 - 行レベルのセキュリティの作成, 12-16
 - 削除, 12-11
 - タイプの説明, 12-4
 - 単一の作成, 12-5
 - 動作, 12-3
 - 複合の作成, 12-8
 - 複数の結合の追加, 24-121
 - プロパティの編集, 12-11
 - 編集, 12-10
 - 例, 12-12

す

- スキーマ・オブジェクト名
 - 確認, 14-22
- スケジュール済みワークブック
 - DBMS_JOB パッケージ, 8-7
 - Oracle データベースの機能, 8-5
 - 下位互換性, 8-15
 - 概要, 8-2, 8-3
 - 結果の格納場所, 8-6
 - サーバーがチェックする間隔, 8-11
 - 使用する理由, 8-3
 - 所有者の指定, 8-9
 - 前提条件, 8-7
 - 表示および管理, 8-12
- スケジュール済みワークブックの制限
 - 設定, 7-13

せ

制限された表, 24-126

整数, 24-96

セキュリティ

作業を実行するユーザーまたはロール, 7-10

ビジネスエリアへのアクセス, 7-4

ユーザーまたはロールの権限, 7-8

ユーザーまたはロールのビジネスエリアへのアクセス権, 7-6

接続

概要, 6-2

作成方法, 6-5

「接続」ページ, 6-4

パブリック, 6-3, 6-5

ユーザー定義, 6-3

ユーザー定義接続の作成を許可, 6-10

「説明」フィールド

結合, 24-124

選択

データ・ソース, 4-11

そ

ソート・オプション, 4-11

た

ダイアログのリファレンス

リスト, 24-2

代替ソート, 9-5

例, 9-6

代替ソート・アイテム・クラス

作成, 9-18

多対1 結合, 24-122

「他のユーザーに select 権限が与えられている表およびビュー」オプション, 24-126

つ

追加

ビジネスエリアにオブジェクトを, 4-6, 4-8

て

ディテール・アイテム

結合に追加, 24-121, 24-123

マスターがない場合, 24-85

「ディテールからマスター」アイコン, 24-122

ディテール・ドリル・アイテム・クラス, 9-8

作成, 9-22

データ

取出し, 5-8

データ・ウェアハウス, 1-5

データ型

DECIMAL, 24-96

軸アイテム, 24-96

データ型の不一致

結合, 10-16

データ・ソース

Oracle9i Designer, 4-11

データのフェッチ, 5-8

データベースへのユーザー ID の割当て, 4-6

データベース・リンク, 24-92

データ・ポイント・アイテム, 24-96

デカルト演算, 24-85

デフォルト日付階層

Oracle9i へのアップグレード後の日付書式「RR」の変更, 13-18

テンプレート

日付階層, 13-6

と

問合せ

最適化, 5-8, 20-2

サマリー表, 24-85

パフォーマンスの予測, 20-2

ファントラップ検出, 24-86

フォルダ定義と副問合せ, 5-7

問合せ時間予測, 20-2

Discoverer Plus, 20-3

optimizer_mode パラメータの確認, 20-8

Secure Views, 20-10

timed_statistics パラメータの確認, 20-6

概要, 20-2

時間の短縮, 20-9

使用できない場合, 20-3

速度と精度の向上, 20-4

データ表の分析, 20-7

- ビューを使用可能にする, 20-4
- 古い統計の削除, 20-11
- 問合せ統計ワークブック, 19-10
- 問合せ取出し制限
 - 設定, 7-11
- 等価結合, 24-120, 24-124
- 等号, 24-120, 24-124
- 導出ユーザー定義アイテム
 - 概要, 11-4
- ドリル, 1-7
 - 別のアプリケーションへ, 9-12

な

- 内容タイプ
 - アイテムの内容タイプ, 9-12
- 名前付け
 - 結合, 24-121, 24-124

は

- パブリック接続, 6-5
- 「パブリックに select 権限が与えられている表およびビュー」オプション, 24-125

ひ

- ビジネス・インテリジェンス
 - 概要, 1-4
- ビジネスエリア, 1-6
 - EUL 間のコピー, 4-14
 - エクスポート, 3-17
 - オブジェクトのリフレッシュ, 4-18
 - オブジェクトのロード, 4-6, 4-8
 - 概要, 4-3
 - コンポーネント, 4-10
 - 削除, 4-16
 - 作成, 4-4
 - 前提条件, 4-4
 - 作成とメンテナンス, 4-2
 - 設計, 4-4
 - データベースとの同期化, 4-18
 - 開く, 4-13
 - プロパティ, 4-15
 - ロード・ウィザードによる作成, 4-5

- 日付アイテム
 - EUL_DATE_TRUNC を使用した切捨て, 9-10
 - 条件の適用, 9-11
 - 日付階層テンプレートの適用, 13-15
- 日付階層, 13-5
- 日付書式「RR」, 13-18
- 日付書式マスク, 9-9
- 必須条件
 - オプション条件との対比, 12-4
- ビュー
 - BA 用の選択, 4-9
- 表
 - BA 用の選択, 4-9
- 表およびビューの選択, 4-9
- 表領域割当て制限
 - 決定, 14-21
 - リセット, 14-21
- ヒント
 - オブティマイザ, 5-8

ふ

- ファントラップ, 10-10
 - 複合フォルダ内, 10-15
- ファントラップ検出, 24-86
- フォルダ, 1-6, 14-3
 - SQL, 5-15
 - アイテムのソート, 5-19
- 依存性, 5-9
- 概要, 5-3
- カスタム, 5-6
 - カスタムと単一の対比, 5-6
 - カスタムの作成, 5-12
 - カスタム・フォルダの SQL 文の編集, 5-15
 - カスタム・フォルダの例, 5-7
- 検証, 5-20
- 削除, 5-16
- 順序変更, 5-20
- 単一, 5-4
 - 単一の作成, 5-10
- データベース・ビューのかわりに複合フォルダを使用, 5-6
- ビジネスエリア間での共有, 5-10
- ビジネスエリアにおけるソート, 5-19
- ビジネスエリアへの割当て, 5-18
- 複合, 5-5
 - 複合の作成, 5-11

複数ビジネスエリアへの割当て, 5-18
プロパティの編集, 5-13
副問合せ, 5-7
不等号, 24-120, 24-124

へ

ヘルプ・システム
概要, 2-11

ま

「マスターからディテール」アイコン, 24-121
マテリアライズド・ビュー
概要, 14-5

め

メタデータ
Oracle9i Designer, 4-11

ゆ

ユーザー
権限の付与
複数ユーザーへ, 7-2
ユーザー ID, 24-126
データベースへの添付, 4-6
ユーザー定義アイテム
概要, 11-3
削除, 11-10
作成, 11-8
プロパティの編集, 11-10
編集, 11-10
「ユーザーのプライベート表」オプション, 24-126

り

リフレッシュ・オプション
概要, 16-13
リレーショナル・データベース, 1-5
リンク
データベースからユーザーへ, 24-92

れ

レジストリ設定, 22-2, 22-3
概要, 22-2
列
サマリー表へのマッピング
例, 15-6
列のマッピング
例, 15-6

ろ

ロード・ウィザード, 4-4
ロール
権限の付与, 7-2

わ

ワークエリア
状況依存メニュー, 2-9
ワークシート, 1-7
ワークブック, 1-7
概要, 8-2
ワークブックのエクスポート
XML 書式, 21-40
ワイルドカード, 4-6

